

東九州自動車道建設（末吉財部IC～大隅IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書N

建山遺跡  
西原段Ⅰ遺跡  
野鹿倉遺跡

2009年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



建山遺跡遠景（野鹿倉遺跡方向を望む）

巻頭カラー2



西原段Ⅰ遺跡出土遺物

## 序 文

この報告書は、東九州自動車道13次区間（末吉財部IC～大隅IC）の建設に伴つて、平成17・18年度に実施した曾於市大隅町（旧曾於郡大隅町）に所在する建山遺跡と、平成18・19年度に実施した曾於市大隅町に所在する西原段I遺跡、野鹿倉遺跡の発掘調査の記録です。

建山遺跡は、旧石器時代ナイフ形石器文化期と細石刃文化期、縄文時代草創期から晩期、古代から中世にかけての複合遺跡であることがわかりました。主な成果としては、旧石器時代の細石刃文化期でブロックや細石刃などが発見されました。また、縄文時代早期では集石遺構や落とし穴、変形撲糸文土器、手向山式土器、石鎌などが発見されました。さらに、古代から中世にかけての掘立柱建物跡や溝状遺構等の発見が注目されます。

西原段I遺跡は、旧石器時代から中世にかけての遺構や遺物等が発見されており、各々の時代の移り変わりを示す良好な資料を提供しております。

野鹿倉遺跡は、旧石器時代から古代にかけての遺構や遺物等が発見され、なかでも縄文時代早期の集石遺構が12基発見されたことは注目されます。

本報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たりご協力いただいた国土交通省大隅河川国道事務所や曾於市教育委員会及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所長 宮 原 景 信

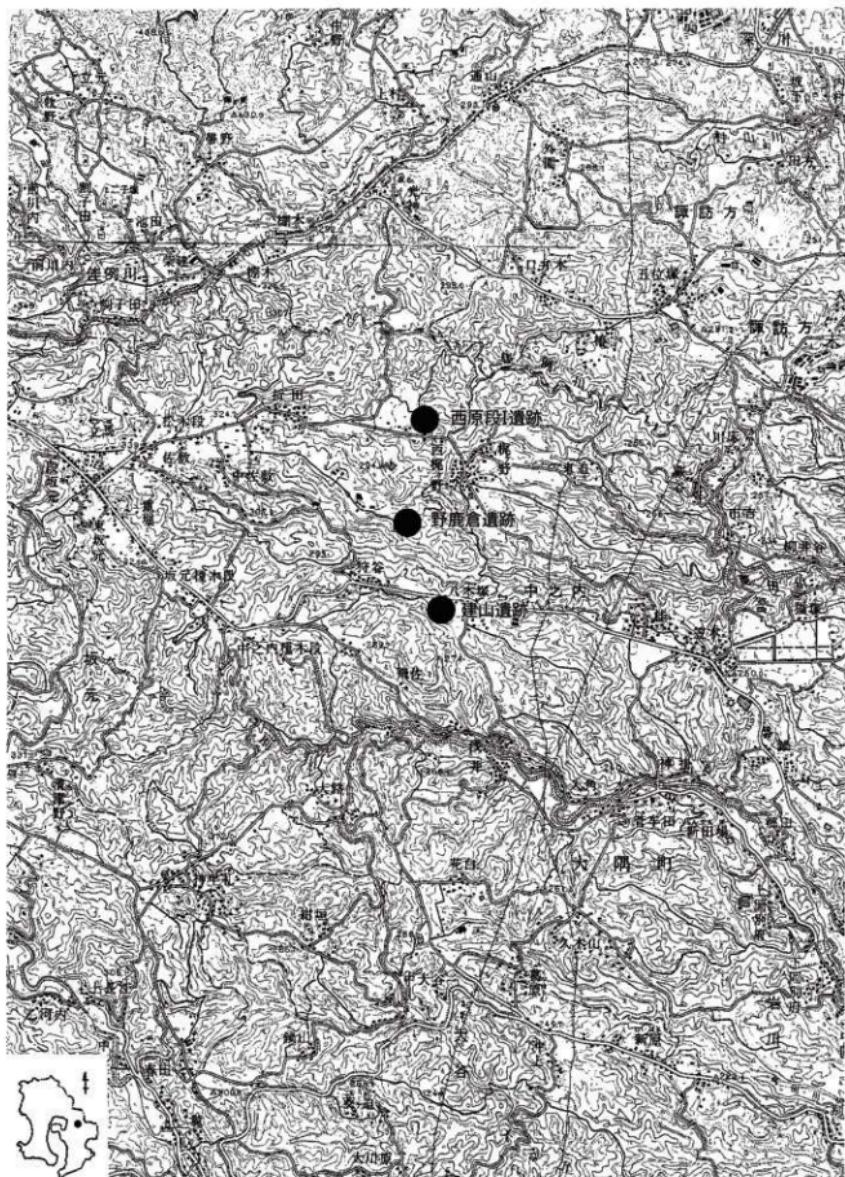
# 報告書抄録

ふりがな	たてやまいせき	にしらだんいちいせき	のかくらいせき				
書名	建山遺跡	西原段Ⅰ遺跡	野鹿倉遺跡				
副書名	東九州自動車道建設（末吉財部IC～大隅IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	IV						
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第139集						
編集者氏名	彌榮久志 宮田栄二 高岡和也 新保朋久 國師洋之 田畠哲治 木内敏生						
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター						
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原繩文の森2番1号 Tel0995-48-5811						
発行年月日	西暦2009年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 東経 度	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査起因	
たてやま い せき 建山遺跡	鹿児島県曾於市 おおすみちうやまの うち 大隅町 岩川 あさや しかだん 字屋敷段	63-253-0	31° 38° 04°	130° 56° 14°	確認・本調査 20050808～ 20060322 本調査 20060509～ 20070320	13,133	東九州自動 車道建設
にしらだんいち い せき 西原段Ⅰ遺跡	鹿児島県曾於市 おおすみちうやまの うち 大隅町 中之内 あさや なか 字鷺ノ尾 さぎの おと 堤ノ追 つつじの の おと 荒神ノ追	46217	31° 39° 11°	130° 56° 02°	確認・本調査 20061204～ 20070320 本調査 20070801～ 20071026	6,004	
の かくらいせき 野鹿倉遺跡	鹿児島県曾於市 おおすみちうやまの うち 大隅町 中之内 あさや なか 字野鹿倉	63-252-0	31° 38° 40°	130° 55° 58°	確認調査 20070201～ 20070216 確認・本調査 20070801～ 20071026	20 6,642	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
建山遺跡	散布地	旧石器時代	礫群、ブロックなど	三稜尖頭器、ナイフ形石器、細石刃、細石刃核、削器他			
		縄文時代	集石、落とし穴、土坑、堅穴住居跡	手向山式土器、変形撲糸文土器、石蹴、磨石他			
		古代～中世	掘立柱建物跡、溝状遺構、軽石集積	土師器、土師壺他			
西原段Ⅰ遺跡	散布地	旧石器時代	礫群	剥片			
		縄文時代 弥生時代 古代～中世	集石、土坑 道路状遺構、落とし穴	中津野式土器			
野鹿倉遺跡	散布地	旧石器時代 縄文時代	集石	石核、剥片			
遺跡の概要							

建山遺跡では主に旧石器時代から中世までの遺構・遺物が発見された。特に注目される遺構は、後期旧石器時代細石刃文化期のブロック、縄文時代早期の集石遺構、古代～中世の掘立柱建物跡や溝状遺構などが挙げられる。遺物は、後期旧石器時代細石刃文化期の細石刃、細石刃核、縄文時代早期の変形撲糸文土器、手向山式土器、古代～中世の土師器などが挙げられる。

西原段Ⅰ遺跡では、旧石器時代から縄文時代の早期、中・後期、晚期、古代～中世と長期に及ぶ遺構・遺物が発見されている。特に注目される遺構は、縄文時代早期の集石遺構、古代～中世の硬面化を伴う道路状遺構、落とし穴などが挙げられる。遺物については組織痕文土器、中津野式土器、土師器、石蹴、磨石、敲石、石皿等が出土した。

野鹿倉遺跡では主に旧石器時代の遺物、縄文時代早期の遺構・遺物が発見された。特に、縄文時代早期の集石遺構が12基検出されたことが注目される。



遺跡位置図（1 : 50,000）

## 例　　言

- 1 本報告書は、東九州自動車道(宋吉財部IC～大隅IC間)建設に伴う建山遺跡、西原段Ⅰ遺跡及び野鹿倉遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 建山遺跡は鹿児島県曾於市大隅町岩川に、西原段Ⅰ遺跡は鹿児島県曾於市大隅町中ノ内に、野鹿倉遺跡は鹿児島県曾於市大隅町中ノ内野鹿倉に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成(整理作業)は、国土交通省九州地方整備局大隅国道河川事務所及び鹿児島県土木部から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、建山遺跡が平成17年8月8日～平成18年3月22日、平成18年5月9日～平成19年3月20日の期間に実施した。西原段Ⅰ遺跡は平成18年12月4日～平成19年3月20日、平成19年8月1日～10月26日の期間に実施した。野鹿倉遺跡は平成19年2月1日～2月16日、平成19年8月1日～10月26日の期間に実施した。
- 5 遺物番号は、建山遺跡、西原段Ⅰ遺跡及び野鹿倉遺跡それぞれで通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は土器が1/3、石器の縮尺は小型の剥片石器は1/1または2/3、磨石・敲石、石皿等の大型の石器は1/3を基本としたが、一部この限りではない。遺構の縮尺は1/20を基本としたが、一部の遺構に関してはこの限りではない。各々、挿図毎に示した縮尺を参考とされたい。
- 7 本書で用いたレベル数値は、道路公団鹿児島工事事務所が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面作成、写真撮影は、調査担当者が行った。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理作業員の協力を得て國師洋之が行った。
- 10 土器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て彌榮久志と國師洋之が行った。
- 11 石器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て宮田栄二、田畠哲治、木内敏生、寒川朋枝が行った。一部は国際航業株式会社鹿児島支店、株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。
- 12 土器と石器の出土分布図関係は、全て木内敏生が作成した。
- 13 遺物の写真撮影は、福永修一が行った。
- 14 自然科学分析は、株式会社加速器分析研究所、株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 15 本報告書の執筆・編集は彌榮久志、宮田栄二、高岡和也、新保朋久、國師洋之、田畠哲治、木内敏生が行った。

第Ⅰ章……田畠哲治　　第Ⅱ章……新保朋久　　第Ⅲ章……國師洋之  
第Ⅳ章……彌榮久志（第5～11節）、宮田栄二（第2～4、11節）、國師洋之（第1、6～8、10、11節）、田畠哲治（第6～8節）、木内敏生（第6～8、11節）  
第Ⅴ章……高岡和也　　第Ⅵ章……高岡和也
- 16 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、建山遺跡の遺物注記の記号はタテ、西原段Ⅰ遺跡はNHD1、野鹿倉遺跡はNGKで表記してある。

# 目 次

卷頭カラー  
序 文  
報告書抄録  
例 言  
本文目次  
挿図目次  
表 目 次  
図 版 目 次  
あとがき

## 本 文 目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	1
第1節 調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査の組織.....	2
第3節 調査の経過（日誌抄）.....	6
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境.....	11
第1節 地理的環境.....	11
第2節 歴史的環境.....	12
第Ⅲ章 遺跡の層位.....	16
第Ⅳ章 建山遺跡.....	17
第1節 発掘調査の方法及び層位.....	17
確認トレーナーの状況.....	22
第2節 旧石器時代の調査成果.....	23
1 調査の概要.....	23
2 旧石器時代の石器石材.....	23
3 第Ⅰ文化層の遺構と石器群.....	24
第3節 第Ⅱ文化層の石器群.....	29
第4節 第Ⅲ文化層の石器群.....	32
第5節 繩文時代草創期の調査成果.....	79
1 調査の概要.....	79
2 遺物.....	79
第6節 繩文時代早期の調査成果.....	82
1 調査の概要.....	82
2 遺構.....	82
3 遺物.....	116
第7節 繩文時代前・中期の調査成果.....	154
1 調査の概要.....	154
2 遺構.....	154
3 遺物.....	159
第8節 繩文時代後・晚期の調査成果.....	171
1 調査の概要.....	171
2 遺構.....	171
3 遺物.....	173
第9節 弥生時代・古墳時代の調査成果.....	196

遺物.....	196
第10節 古代・中世の調査成果.....	198
1 調査の概要.....	198
2 遺構.....	198
3 遺物.....	223
第11節 まとめ.....	237
付編 自然科学分析（放射性炭素年代測定）.....	243
 第V章 西原段I遺跡.....	245
第1節 発掘調査の方法及び層位.....	245
第2節 旧石器時代の調査成果.....	252
1 調査の概要.....	252
2 遺物.....	252
第3節 繩文時代の調査成果.....	253
1 調査の概要.....	253
2 遺構.....	253
3 遺物.....	257
第4節 弥生時代～中世の調査成果.....	280
1 調査の概要.....	280
2 遺構.....	280
3 遺物.....	285
第5節 まとめ.....	289
付編 自然科学分析（放射性炭素年代測定）.....	291
 第VI章 野鹿倉遺跡.....	293
第1節 発掘調査の方法及び層位.....	293
第2節 旧石器時代の調査成果.....	298
1 調査の概要.....	298
2 遺物.....	298
第3節 繩文時代の調査成果.....	300
1 調査の概要.....	300
2 遺構.....	300
3 遺物.....	308
第4節 古代の調査成果.....	314
1 調査の概要.....	314
2 遺物.....	314
第5節 まとめ.....	316

# 挿 図 目 次

## 遺跡位置図

- 第1図 周辺遺跡位置図.....13  
第2図 基本土層図.....16

## 第IV章 建山遺跡

- 第3図 レンチ配置図及び周辺地形図.....17  
第4図 土層断面図(1).....18  
第5図 土層断面図(2).....19  
第6図 土層断面図(3).....20  
第7図 土層断面図(4).....21  
第8図 第I文化層の石器群位置図.....24  
第9図 第I文化層 第1ブロック石器群  
    出土分布図.....24

- 第10図 第I文化層 第1ブロック出土石器1).....25  
第11図 第I文化層 第1ブロック出土石器2).....26  
第12図 第I文化層の縄群.....27  
第13図 第I文化層 第2、3ブロック出土石器.....28  
第14図 第II文化層の石器群位置図.....29  
第15図 第II文化層 第1ブロック出土石器.....30  
第16図 第II文化層 第2ブロック出土石器.....31  
第17図 第II文化層 第2ブロック石器出土分布図.....31  
第18図 第III文化層の石器群位置図.....32  
第19図 第III文化層 第1ブロック出土石器1).....33  
第20図 第III文化層 第1ブロック出土石器2).....34  
第21図 第III文化層 第1ブロック石器出土分布図.....34  
第22図 第III文化層 第2ブロック出土石器1).....36  
第23図 第III文化層 第2、3ブロック出土石器.....37  
第24図 第III文化層 第4ブロック出土石器1).....39  
第25図 第III文化層 第4、5、6ブロック  
    出土石器.....40

- 第26図 第III文化層 第7ブロック出土石器1).....42  
第27図 第III文化層 第7ブロック出土石器2).....43  
第28図 第III文化層 第2~8ブロック石器群  
    出土分布図.....44  
第29図 第III文化層 第9ブロック出土石器.....46  
第30図 第III文化層 第11ブロック出土石器1).....47  
第31図 第III文化層 第11ブロック出土石器2).....48  
第32図 第III文化層 第11ブロック出土石器3).....49  
第33図 第III文化層 第12ブロック出土石器.....51  
第34図 第III文化層 第13ブロック出土石器1).....52  
第35図 第III文化層 第13ブロック出土石器2).....53  
第36図 第III文化層 第13ブロック出土石器3).....54  
第37図 第III文化層 第13ブロック出土石器4).....56  
第38図 第III文化層 第14ブロック出土石器1).....57  
第39図 第III文化層 第14ブロック出土石器2).....58  
第40図 第III文化層 第14ブロック出土石器3).....59

- 第41図 第III文化層 第15、16ブロック出土石器.....61  
第42図 第III文化層 第20ブロックほか出土石器.....62  
第43図 第III文化層 第11~20ブロック石器群  
    出土分布図.....63  
第44図 第III文化層 第1、2ブロック出土細石刃.....65  
第45図 第III文化層 第3、4ブロック出土細石刃.....66  
第46図 第III文化層 第5~9ブロック出土細石刃.....67  
第47図 第III文化層 第11~12ブロック出土細石刃.....68  
第48図 第III文化層 第13ブロック出土細石刃.....69  
第49図 第III文化層 第14~20ブロック出土細石刃.....70  
第50図 第III文化層 細石刃出土分布図1).....71  
第51図 第III文化層 細石刃出土分布図2).....72  
第52図 I類土器出土状況図.....78  
第53図 I類土器.....80  
第54図 縄文早期 遺構位置図.....81  
第55図 縄文早期 1号堅穴住居跡.....82  
第56図 縄文早期 2号堅穴住居跡、1号、  
    2号堅穴柱遺構.....83  
第57図 縄文早期 連穴土坑.....84  
第58図 縄文早期 連穴土坑内出土石器.....84  
第59図 縄文早期 1号、2号土坑.....86  
第60図 縄文早期 3号、4号土坑.....87  
第61図 縄文早期 5号~7号土坑.....88  
第62図 縄文早期 8号、9号土坑.....89  
第63図 縄文早期 10号土坑.....90  
第64図 縄文早期 1号~3号集石.....92  
第65図 縄文早期 4号~6号集石.....93  
第66図 縄文早期 7号~9号集石.....94  
第67図 縄文早期 7号集石内出土遺物.....94  
第68図 縄文早期 10号、11号集石.....96  
第69図 縄文早期 12号集石.....97  
第70図 縄文早期 13号~15号集石.....98  
第71図 縄文早期 16号、17号集石.....99  
第72図 縄文早期 18号集石.....100  
第73図 縄文早期 19号~22号集石.....102  
第74図 縄文早期 23号、24号集石.....103  
第75図 縄文早期 25号~28号集石.....104  
第76図 縄文早期 25号集石内出土土器.....104  
第77図 縄文早期 29号集石内出土石器.....104  
第78図 縄文早期 29号、30号集石.....105  
第79図 縄文早期 1号、2号落とし穴.....108  
第80図 縄文早期 3号落とし穴.....109  
第81図 縄文早期 4号、5号落とし穴.....110  
第82図 縄文早期 6号~8号落とし穴.....111  
第83図 縄文早期 9号、10号落とし穴.....112  
第84図 縄文早期 11号~13号落とし穴.....113  
第85図 縄文早期 磨石集積.....114  
第86図 縄文早期 磨石集積内出土石器.....114

第87図	II類～VII類土器出土状況図	115	第133図	XV類土器	161
第88図	IIa類土器	116	第134図	XVI類土器	162
第89図	IIb類・IIc類土器	117	第135図	XVII類土器	162
第90図	III類土器	118	第136図	XVIII類土器	163
第91図	IV類土器	118	第137図	XIX類土器	164
第92図	V類土器	120	第138図	XXa類土器	165
第93図	Vla類土器	122	第139図	XXb類土器	166
第94図	Vlb類土器	122	第140図	Va層（縄文前・中期）出土石器状況図	168
第95図	VIIa類土器	123	第141図	Va層（縄文前・中期）出土石器1	168
第96図	VIIb類土器	124	第142図	Va層（縄文前・中期）出土石器2	169
第97図	VIIc・VId類土器	124	第143図	縄文後・晚期 遺構位置図及びVla層・Vb層 出土石器状況図	170
第98図	VIII類・IX類土器出土状況図	125	第144図	縄文後・晚期 18号土坑 及び土坑内出土軽石製品	171
第99図	X類～XIII類土器出土状況図	126	第145図	XXI類～XXXI類土器出土状況図	172
第100図	VIIia類土器1)	128	第146図	XXI類土器	173
第101図	VIIia類土器2)	129	第147図	XXII類土器	174
第102図	VIIib類土器	129	第148図	XXII類～XXVII類土器	175
第103図	VIIic類土器	130	第149図	XXIX類・XXX類土器	177
第104図	VIIId類土器	131	第150図	無文土器及び底部と土製製品	178
第105図	VIIIe類土器	131	第151図	XXXIa類土器	180
第106図	IX類・X類土器	132	第152図	XXXIb類土器	182
第107図	XI類土器	133	第153図	XXXIc類土器1)	183
第108図	XIIa類土器1)	135	第154図	XXXIc類土器2)	185
第109図	XIIa類土器2)	136	第155図	XXXId類土器	186
第110図	XIIb類土器	136	第156図	XXXIe類土器	187
第111図	XIII類土器及び出土状況図	137	第157図	Va層・Vb層（縄文後・晚期） 出土石器(1)	191
第112図	VII層～Vla層（縄文早期） 出土石器状況図	140	第158図	Va層・Vb層（縄文後・晚期） 出土石器(2)	192
第113図	VII層～Vla層（縄文早期）出土石器1)	141	第159図	Va層・Vb層（縄文後・晚期） 出土石器(3)	193
第114図	VII層～Vla層（縄文早期）出土石器2)	142	第160図	Va層・Vb層（縄文後・晚期） 出土石器(4)	194
第115図	VII層～Vla層（縄文早期）出土石器3)	143	第161図	Va層・Vb層（縄文後・晚期） 出土石器5)	195
第116図	VII層～Vla層（縄文早期）出土石器4)	144	第162図	弥生・古墳 土器	196
第117図	VII層～Vla層（縄文早期）出土石器5)	145	第163図	古代・中世 遺構位置図	197
第118図	VII層～Vla層（縄文早期）出土石器6)	146	第164図	古代 1号掘立柱建物跡	198
第119図	VII層～Vla層（縄文早期）出土石器7)	147	第165図	古代 2号掘立柱建物跡	199
第120図	VII層～Vla層（縄文早期）出土石器8)	148	第166図	古代 3号掘立柱建物跡	200
第121図	VII層～Vla層（縄文早期）出土石器9)	149	第167図	古代 4号掘立柱建物跡	201
第122図	VII層～Vla層（縄文早期）出土石器00)	150	第168図	古代 5号掘立柱建物跡	202
第123図	VII層～Vla層（縄文早期）出土石器01)	151	第169図	古代 6号掘立柱建物跡	203
第124図	縄文前・中期 遺構位置図	153	第170図	古代 7号、8号掘立柱建物跡	204
第125図	縄文前・中期 3号竪穴状遺構	154	第171図	古代 軽石集積	206
第126図	縄文前・中期 4号竪穴状遺構	155	第172図	古代 9号掘立柱建物跡	207
第127図	4号竪穴状遺構内出土土器 及び出土状況図	155	第173図	古代 1号焼土跡	208
第128図	縄文前・中期 14号、15号土坑	156			
第129図	縄文前・中期 16号、17号土坑	157			
第130図	XIV類～XX類土器出土状況図	158			
第131図	XIV類土器1)	159			
第132図	XIV類土器2)	160			

第174図	古代	2号焼土跡	209
第175図	古代	3号、4号焼土跡	210
第176図	古代	5号焼土跡	211
第177図	古代	6号焼土跡	212
第178図	古代	1号～3号溝状遺構・断面図	213
第179図	古代	4号、5号溝状遺構・断面図	214
第180図	古代	軽石配石	215
第181図	古代	ピット	216
第182図	古代	軽石集積内出土土器	218
第183図	古代	軽石集積内出土軽石製品	219
第184図	古代	軽石集積及び軽石配石内 出土軽石製品	220
第185図	古代	2号溝状遺構内出土軽石製品	221
第186図	古代～中世	土器出土状況図	222
第187図	古代	土器(薄手甕)	224
第188図	古代	土器(厚手甕A)	225
第189図	古代	土器(厚手甕B)	226
第190図	古代	土器(土師器壺)	228
第191図	古代	土器(土師器塊)	230
第192図	古代	土器(土師器皿)	231
第193図	古代	土器(土師器鉢)	231
第194図	古代	土器(器種不明)	232
第195図	古代	土器(墨書き)	233
第196図	古代	土器(焼塙土器)	233
第197図	中世	木炭土坑	236
第198図	中世	出土遺物	236
第199図	帶磁率の高い範囲		239
第200図	帶磁率測定値		239
<b>第V章 西原段Ⅰ遺跡</b>			
第1図	遺跡周辺地形及びグリッド図		246
第2図	調査範囲図		247
第3図	遺物出土状況図		248
第4図	土層断面図1(C地点)		249
第5図	土層断面図2(A地点)		250
第6図	土層断面図3(B地点)		251
第7図	旧石器遺物出土状況図		252
第8図	旧石器出土遺物		252
第9図	縄文時代早期集石1		253
第10図	縄文時代遺物出土状況図		254
第11図	縄文時代早期集石2		255
第12図	縄文時代中期～後期集石		256
第13図	縄文時代中期～後期土坑		256
第14図	縄文時代晚期土坑		257
第15図	1・2・3類土器		258
第16図	4・5・6類土器		259
第17図	7a-1類土器		260
第18図	7a-2類土器		261
第19図	7a-3類土器		263
第20図	7a-4・5類土器		264
第21図	7b-1類土器		265
第22図	7b-2類土器1		266
第23図	7b-2類土器2		267
第24図	7b-3類土器		268
第25図	7b-4類土器1		270
第26図	7b-4類土器2		271
第27図	7b-4類土器3		272
第28図	7c-1類土器		273
第29図	7c-2・7d・7e類土器		274
第30図	縄文時代石器1		276
第31図	縄文時代石器2		277
第32図	縄文時代石器3		278
第33図	縄文時代石器4		279
第34図	古代～近世遺構配置図		281
第35図	落とし穴実測図		282
第36図	烟跡実測図		283
第37図	道路状遺構実測図		284
第38図	弥生～古代出土遺物		285
<b>第VI章 野鹿倉遺跡</b>			
第1図	遺跡周辺地形及びグリッド図		294
第2図	遺物出土状況図		295
第3図	土層断面図1		296
第4図	土層断面図2		297
第5図	旧石器遺物出土状況図		298
第6図	旧石器出土遺物		299
第7図	縄文時代早期集石配置図		301
第8図	縄文時代早期集石1		302
第9図	縄文時代早期集石2		303
第10図	縄文時代早期集石3		304
第11図	縄文時代早期集石4		305
第12図	縄文時代早期集石5		306
第13図	縄文時代早期集石6		307
第14図	1～5類土器		308
第15図	6～11類土器		309
第16図	12～14類土器		310
第17図	縄文時代石器1		311
第18図	縄文時代石器2		312
第19図	縄文時代石器3		313
第20図	古代遺物出土状況図		314
第21図	古代出土遺物		314

# 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表(1).....	14
第2表	周辺遺跡一覧表(2).....	15
<b>第IV章 建山遺跡</b>		
第3表	トレンチ別調査結果.....	22
第4表	旧石器 石器観察表(1).....	73
第5表	旧石器 石器観察表(2).....	74
第6表	旧石器 細石刃観察表(1).....	75
第7表	旧石器 細石刃観察表(2).....	76
第8表	旧石器 細石刃観察表(3).....	77
第9表	I類土器観察表.....	80
第10表	縄文早期 連穴土坑計測表.....	84
第11表	縄文早期 連穴土坑内出土石器観察表.....	84
第12表	縄文早期 土坑計測表.....	90
第13表	7号集石内出土土器観察表.....	95
第14表	7号集石内出土石器観察表.....	95
第15表	25号集石内出土土器観察表.....	101
第16表	29号集石内出土土器観察表.....	101
第17表	縄文早期 集石計測表.....	114
第18表	縄文早期 落しと穴計測表.....	114
第19表	縄文早期 磨石集積内出土石器観察表.....	114
第20表	II類～XIII類土器観察表(1).....	138
第21表	II類～XIII類土器観察表(2).....	139
第22表	VIII層～VIA層(縄文早期) 出土石器観察表.....	152
第23表	縄文前・中期 4号竪穴状構内 出土土器観察表.....	155
第24表	縄文前・中期 土坑計測表.....	156
第25表	XIV類～XXI類土器観察表.....	167
第26表	Va層(縄文前・中期)出土土器観察表.....	169
第27表	縄文後・晚期 土坑計測表.....	171
第28表	土坑内出土軽石製品観察表.....	171
第29表	XXI類～XXXI類土器観察表(1).....	188
第30表	XXI類～XXXI類土器観察表(2).....	189
第31表	IVa層・IVb層(縄文後・晚期) 出土土器観察表.....	195
第32表	弥生・古墳 土器観察表.....	196
第33表	古代 1号掘立柱建物跡計測表.....	198
第34表	古代 2号掘立柱建物跡計測表.....	199
第35表	古代 3号掘立柱建物跡計測表.....	200
第36表	古代 4号掘立柱建物跡計測表.....	200
第37表	古代 5号掘立柱建物跡計測表.....	205
第38表	古代 6号掘立柱建物跡計測表.....	205
第39表	古代 7号掘立柱建物跡計測表.....	205
第40表	古代 8号掘立柱建物跡計測表.....	205
第41表	古代 9号掘立柱建物跡計測表.....	207
第42表	古代 ピット計測表.....	216
第43表	古代 軽石集積内出土土器観察表.....	221
第44表	古代 軽石集積内ほか出土軽石製品 観察表.....	221
第45表	古代・中世 土器観察表(1).....	234
第46表	古代・中世 土器観察表(2).....	235
第47表	各検出層における縄の集中密度別の 集石分類表.....	239
第48表	縄文時代早期 (VIII～VIA層出土) 石器組成表.....	242
第49表	縄文時代前・中期 (Va層出土) 石器組成表.....	242
第50表	縄文時代後・晚期 (IVa, IVb層出土) 石器組成表.....	242
第51表	測定試料及び処理.....	243
第52表	放射性炭素年代測定及び曆年校正の結果.....	243
第53表	放射性炭素年代測定及び曆年校正の結果.....	244
<b>第V章 西原段1遺跡</b>		
第1表	縄文時代土器観察表(1).....	286
第2表	縄文時代土器観察表(2).....	286
第3表	縄文時代土器観察表(3).....	287
第4表	縄文時代土器観察表(4).....	288
第5表	弥生～中世遺物観察表.....	288
第6表	石器観察表.....	288
<b>第VI章 野鹿倉遺跡</b>		
第1表	縄文時代土器観察表.....	315
第2表	古代遺物観察表.....	315
第3表	旧石器時代石器観察表.....	315
第4表	縄文時代石器観察表.....	315

# 図版目次

## 建山遺跡

- 図版1 建山遺跡空中写真  
（狩猟遺跡方向を望む） ..... 317
- 図版2 調査風景、土層断面 ..... 318
- 図版3 旧石器時代遺物出土状況ほか ..... 319
- 図版4 繩文時代早期1号堅穴住居跡  
検出状況ほか ..... 320
- 図版5 繩文時代早期1号堅穴状構造坑完掘状況ほか ..... 321
- 図版6 繩文時代早期連穴坑完掘状況ほか ..... 322
- 図版7 繩文時代早期3号集石ほか ..... 323
- 図版8 繩文時代早期1号落とし穴半裁状況ほか ..... 324
- 図版9 繩文時代早期6号落とし穴半裁状況ほか ..... 325
- 図版10 繩文時代早期9号落とし穴半裁状況ほか ..... 326
- 図版11 繩文時代早期12号・13号落とし穴  
検出状況ほか ..... 327
- 図版12 繩文時代前・中期3号堅穴状構造  
検出状況ほか ..... 328
- 図版13 古代1号掘立柱建物跡検出状況ほか ..... 329
- 図版14 古代1号燒土跡検出状況ほか ..... 330
- 図版15 旧石器時代第I・II文化層出土石器 ..... 331
- 図版16 旧石器時代第III文化層出土石器1) ..... 332
- 図版17 旧石器時代第III文化層出土石器2) ..... 333
- 図版18 旧石器時代第III文化層出土石器3) ..... 334
- 図版19 細石刃の使用痕 ..... 335
- 図版20 I・IIa・IIb・V類土器 ..... 336
- 図版21 VIIa・VIIb・VIIc・VIIa類土器 ..... 337
- 図版22 VIIIa・VIIIb・VIIIc・X類土器 ..... 338
- 図版23 XIIIa・XIII・XIV類土器ほか ..... 339
- 図版24 XVII・XVIII・XIX・XXa・XXb類土器 ..... 340
- 図版25 XXXIc・XXXId類土器ほか ..... 341
- 図版26 繩文時代早期出土石器(2) ..... 342
- 図版27 繩文時代早期出土石器(3) ..... 343
- 図版28 繩文時代前期～晚期出土石器(1) ..... 344
- 図版29 繩文時代前期～晚期出土石器(2) ..... 345
- 図版30 古代 土師甕 ..... 346
- 図版31 古代 土師器環 ..... 347
- 図版32 古代 土師器塗ほか ..... 348

## 西原段Ⅰ遺跡

- 図版1 遺跡空中写真 ..... 349
- 図版2 土層断面、集石(1号・2号) ..... 350
- 図版3 集石(4号)、土坑(1・2・3号) ..... 351
- 図版4 落とし穴 ..... 352
- 図版5 烟跡、甕形土器出土状況・道路状遺構 ..... 353
- 図版6 作業風景 遺物出土状況 ..... 354
- 図版7 1～6類土器 ..... 355

- 図版8 7a類土器 ..... 356
- 図版9 7b類土器 ..... 357
- 図版10 織織痕土器1 ..... 358
- 図版11 織織痕土器2 ..... 359
- 図版12 復元土器 ..... 360
- 図版13 7c・7d・7e類土器 繩文時代石器1 ..... 361
- 図版14 繩文時代石器2 ..... 362
- ## 野鹿倉遺跡
- 図版1 遺跡空中写真 ..... 363
- 図版2 土層断面1 ..... 364
- 図版3 土層断面2 ほか ..... 365
- 図版4 集石(1～4号) ..... 366
- 図版5 集石(5～12号) ..... 367
- 図版6 遺物出土状況 ..... 368
- 図版7 調査風景 ..... 369
- 図版8 石器1、1～7類土器 ..... 370
- 図版9 8～14類土器 ..... 371
- 図版10 石器2、土師器 ..... 372

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るために、各開発関係機関との間で事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、末吉財部IC～志布志IC区間の事業に先立って事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育局文化財課に照合した。この計画に伴い文化財課は、平成11年11月に末吉財部IC～鹿屋串良IC間を、平成12年2月には鹿屋串良IC～志布志IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施した。その結果、50か所の遺跡（854,100m<sup>2</sup>）が存在することが明らかになった。

分布調査の結果をもとに、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部高速道路対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センターの4者で協議を重ね、対応を検討してきた。その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の緻密な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査や確認調査が実施されることとなった。

そこで、鹿児島県は平成13年7月10日から7月26日の間に、末吉財部IC～鹿屋串良IC間の工事計画図をもとに33の遺跡についての詳細分布調査と、平成13年9月17日から10月26日までと平成13年12月3日から12月25日にわたって遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

その後、日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）の民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設が確定し、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書締結、同年12月には末吉財部ICから大隅IC間の発掘調査協定書締結の運びとなり、本格的な埋蔵文化財の発掘調査が実施されることとなった。

平成16年3月には、国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事により新直轄方式施行に伴う確認書締結が結ばれ、工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま生きることになった。

これを受け、建山遺跡の調査は、平成17・18年度に過密植栽地を除いた部分の確認調査・本調査を実施した。

西原段I遺跡の調査は、まず平成18年度に過密植栽地を除いた部分の確認調査・本調査を実施した。さらに、高速道路建設予定地で遺跡に認定されていなかった遺跡隣接地の試掘調査を行った結果、遺構・遺物の存在が確認されたため、平成19年3月に遺跡の拡張が認定された。そこで平成19年度に、この拡張部分の本調査を実施した。

野鹿倉遺跡の調査は、平成18年度に用地買収が終了している箇所の確認調査を実施し、遺物及び遺物包含層が確認された。平成19年度は未調査であった箇所についての確認調査・本調査を実施した。

## 第2節 調査の組織

### 【建山遺跡】

(平成17年度 確認調査・本調査)

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 上今 常雄		
調査企画者	タ	次長兼総務課長 有川 昭人	
	タ	次長兼調査第一課長 新東 晃一	
	タ	調査第二課長 立神 次郎	
	タ	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長 彌榮 久志	
調査担当者	タ	タ	彌榮 久志
	タ	文化財主事 井ノ上秀文	
	タ	文化財研究員 木内 敏生	
	タ	タ	馬籠 亮道
	タ	文化財調査員 市来 真澄	
調査事務担当者	タ	主幹兼総務係長 平野 浩二	
	タ	主事 福山恵一郎	

(平成18年度 本調査)

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 上今 常雄 (～H18.7.31)		
調査企画者	タ	次長兼総務課長 有川 昭人 (H18.8.1～)	
	タ	次長兼南の綱文調査室長 新東 晃一	
	タ	調査第二課長 立神 次郎	
	タ	主任文化財主事 兼調査第二課第一調査係長 彌榮 久志	
調査担当者	タ	主任文化財主事 井ノ上秀文	
	タ	文化財主事 内山 伸明	
	タ	文化財主事 水濱 功治	
	タ	文化財主事 福永 修一	
	タ	文化財研究員 木内 敏生	
	タ	文化財調査員 市来 真澄	

調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	寄井田正秀
	タ	主事	五百路 真
調査指導者	鹿児島大学法文学部教授	森脇 広	
	鹿児島大学法文学部准教授	本田 道輝	
	熊本大学文学部准教授	小畠 弘己	

(平成19年度 整理・報告書作成)

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原 景信
作成企画者	タ	次長兼総務課長	平山 章
	タ	次長兼南の綱文調査室長	新東 晃一
	タ	調査第二課長	立神 次郎
	タ	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮 久志
作成担当者	タ	タ	彌榮 久志
	タ	文化財主事	新保 明久
	タ	文化財主事	國師 洋之
	タ	文化財主事	田畠 哲治
調査事務担当者	タ	総務係長	寄井田正秀
	タ	主事	五百路 真
調査指導者	福岡大学人文学部准教授	桃崎 祐輔	

(平成20年度 整理・報告書作成)

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原 景信
作成企画者	タ	次長兼総務課長	平山 章
	タ	次長兼南の綱文調査室長	池畠 耕一
	タ	調査第二課長	彌榮 久志
	タ	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	中村 耕治
作成担当者	タ	調査第二課長	彌榮 久志
	タ	文化財主事	國師 洋之
	タ	文化財主事	木内 敏生
調査事務担当者	タ	総務係長	紙屋 伸一
	タ	主査	五百路 真

監査或概要報告会	平成20年12月3日	宮原所長ほか 13名
監査或指點会	平成20年12月1日	池畠次長ほか 6名
企画担当者		文化財主事 鶴田 静彦
		文化財主事 上床 真

#### 【西原段Ⅰ遺跡】

(平成18年度 確認調査・本調査)

事業主体者 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県土木部高速道対策室

調査主体者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	上今 常雄 (～H18.7.31)
	タ		宮原 景信 (H18.8.1～)
調査企画者	タ	次長兼総務課長	有川 昭人
	タ	次長兼南の郷文調査室長	新東 晃一
	タ	調査第二課長	立神 次郎
	タ	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮 久志
調査担当者	タ	文化財主事	高岡 和也
	タ	文化財主事	田畠 哲治 (～H19.1.26)
	タ	文化財主事	松下 建生
	タ	文化財調査員	橋口 拓也
調査事務担当者	タ	総務係長	寄井田正秀
	タ	主事	五百路 真

#### 【西原段Ⅰ遺跡・野鹿倉遺跡】

(平成19年度 本調査)

事業主体者 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県土木部高速道対策室

調査主体者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原 景信
調査企画者	タ	次長兼総務課長	平山 章
	タ	次長兼南の郷文調査室長	新東 晃一
	タ	調査第二課長	立神 次郎
	タ	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮 久志

調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事	新保 朋久
	タ	文 化 財 主 事	國師 洋之
	タ	文 化 財 主 事	松下 建生
調査事務担当者	タ	総 務 係 長	寄井田正秀
	タ	主 事	五百路 真

(平成20年度 整理・報告書作成)

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	宮原 景信
作成企画者	タ	次 長 兼 総 務 課 長	平山 章
	タ	次長兼南の郷文調査室長	池畠 耕一
	タ	調 査 第 二 課 長	彌榮 久志
	タ	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	中村 耕治
作成担当者	タ	文 化 財 主 事	高岡 和也
調査事務担当者	タ	総 務 係 長	紙屋 伸一
	タ	主 事	五百路 真
報告書作成指揮委員会	平成20年12月3日	宮原所長ほか 13名	
報告書作成指導委員会	平成20年12月1日	池畠次長ほか 6名	
企画担当者		文 化 財 主 事	寺原 徹
		文 化 財 主 事	黒川 忠広
調査指導者	鹿児島大学法文学部准教授	授 本 田 道輝	
	鹿児島県歴史資料センター黎明館学芸課学芸調査係長	東 和幸	

### 第3節 調査の経過（日誌抄）

#### 【建山遺跡】

平成17年度は確認調査と本調査を、平成18年度は本調査を実施した。以下、発掘調査の経過を日誌抄により月単位で略述する。

#### （平成17年度 確認調査）

平成17年8月

環境整備。1トレンチのVI～VIII層及び2・4・5・6トレンチのIV～VII層掘り下げ・IX層上面検出・写真撮影・遺物取上げ・土層断面図作成。3トレンチのIII～V層掘り下げ・VI層上面検出・遺物取上げ。7トレンチのV層掘り下げ。

平成17年9月

8・9・10・11・12・14トレンチのIV～VIII層の掘り下げ・IX層上面検出・写真撮影・遺物取上げ・土層断面図作成。13トレンチのVII～XVII層掘り下げ・XVIII層上面検出・写真撮影・土層断面図作成。16・17トレンチのIV～V層掘り下げ。

平成17年10月

1・2・4・6トレンチの拡張・IVa層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ。15・22トレンチのV～VIII層及び16・17・21トレンチのIV～VIII層掘り下げ・IX層上面検出・写真撮影・遺物取上げ・土層断面図作成。23・24トレンチのIV～VI層及び25・26トレンチのIII～V層掘り下げ・写真撮影。全面調査部分表土剥ぎ。

#### （平成17年度 本調査）

平成17年11月

22・24・25トレンチのIX～XVII層掘り下げ・XVIII層上面検出・写真撮影・土層断面図作成。23トレンチのVI～VIII層掘り下げ・IX層上面検出・写真撮影。26トレンチのIV～X層掘り下げ・遺物取上げ。27・28トレンチのIII～IVa層の掘り下げ・軽石集積写真撮影及び実測。F～I-21～30区のIVa層掘り下げ・掘立柱建物跡柱穴検出・実測。G～I-25～27区のIVa～VII層掘り下げ。E～H-66～68区のIVa層掘り下げ・遺物取上げ。現地説明会（11月12日、参加者178名）。

平成17年12月

F～I-21～23区のNb～V層掘り下げ・遺物取上げ。F～G-27～30区の下層確認トレンチIVb～VI層掘り下げ。F～I-26～30区のIVa層掘り下げ・IVb層コンター図作成。G～I-24～27区のVII層掘り下げ。F～G-21～26区の掘立柱建物跡柱穴掘り下げ・実測・写真撮影。G-21～23区の堅穴住居跡実測・掘り下げ・写真撮影。

平成18年1月

F～G-21～26区の掘立柱建物跡写真撮影・実測。F～G-21区の溝状遺構掘り下げ。F-26～27区のIVb層上面コンター図作成。G-23区の堅穴住居跡実測・掘り下げ。G～I-25～27区のVIII層上面検出。G～I-27～30区のVII層上面検出。H～I-24～28区の下層確認トレンチVII～VIII層掘り下げ。

平成18年2月

F～G-21～26区の掘立柱建物跡柱穴半裁・掘り下げ・実測。F～I-30～31区の溝状遺構検出。

G-21～23区の堅穴住居跡掘り下げ・実測。H-21区の焼土遺構検出状況写真撮影・掘り下げ。H-26区の下層確認トレンチIX～X層掘り下げ。H-28区の集石実測。H-29区の確認トレンチX層以下掘り下げ。G～I-24～27区のIX層上面センター図作成。H～J-3～6区のVII層上面検出。I-6区の集石実測。I-21区の溝状遺構実測・掘り下げ・写真撮影。

平成18年3月

F～G-21～25区のIV層掘り下げ。F～H-6～8区のVI～VIII層掘り下げ。G-21～23区の堅穴住居跡掘り下げ・実測・写真撮影。G～H-20区の溝状遺構実測・掘り下げ。H-21～24区のVII～VIII層掘り下げ及びIX層上面センター図作成。H～I-18～22区のVII層遺物取上げ。H～I-21区の焼土遺構掘り下げ・実測。I-16～19区の土層断面実測。I-29区の落とし穴掘り下げ。

(平成18年度 本調査)

平成18年5月

環境整備。C～E-72～75区のV～XVI層掘り下げ・X層検出ブロック写真撮影・遺物取上げ。F-74区の土層断面図作成。

平成18年6月

E-63～64区のⅢb～Ⅳa層掘り下げ・遺物実測・遺物取上げ・焼土遺構実測・写真撮影。F～G-75～77区のVII～VIII層掘り下げ・遺物取上げ。F～H-73～75区のVII～VIII層掘り下げ・遺物取上げ・土坑実測・写真撮影・IX層上面センター図作成・X層掘り下げ。

平成18年7月

D～E-75区のⅢb～IV層掘り下げ・IVb層上面センター図作成。E-62～63区のVII～VIII層掘り下げ・遺物取上げ・VII層検出集石写真撮影。F～G-74～79区のVI～VIII層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ・IX層上面センター図作成・土層断面実測・X層細石器ブロック周辺掘り下げ・下層確認トレンチVII～XIV層掘り下げ。F-78区のIX層検出連穴土坑写真撮影・実測・掘り下げ。F-80区のVII層検出集石実測・写真撮影・X層掘り下げ。

平成18年8月

C～E-74～77区のVII～X層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ。D～E-80区の表土～VIII層掘り下げ・遺物取上げ。D～F-77～81区の土層断面図作成。F-80区のVII層検出集石実測・写真撮影・堅穴住居跡掘り下げ。F～G-77～79区のX層掘り下げ・遺物取上げ。F～G-80～81区のIX層検出土坑実測。

平成18年9月

C～E-77～78区のX～XI層掘り下げ。D～E-80区のX層掘り下げ。E-55～59区の土層断面実測。F-78～80区の土層断面実測・写真撮影。F～G-80～81区の堅穴住居跡及び土坑実測・写真撮影・掘り下げ。F～G-19区の土層断面実測・写真撮影。G-28～29区のXIV～XVI層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ。

平成18年10月

F～H-36～41区のIVa層掘り下げ・IVb層上面センター図作成・写真撮影・遺物取上げ・下層確認トレンチIVb～V層掘り下げ・6トレンチIX～XVII層掘り下げ。F～H-42～47区のIV～VI層掘り下げ・下層確認トレンチVII～VIII層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ。F～H-48～53区のⅢb～VII層

掘り下げ・IVb層及びIX層上面コンター図作成。

平成18年11月

F～I-30～31区の下層確認トレンチIVb～V層掘り下げ・溝状遺構実測・写真撮影・掘り下げ。E-44区の下層確認トレンチXI～XVII層掘り下げ。F～H-41～54区のIVb～VIII層掘り下げ・IX層上面コンター図作成・下層確認トレンチXIV～XVII層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ・土層断面実測・VII層検出集石及びIX層上面検出土坑実測。G-51区のVII層検出集石実測。

平成18年12月

F～G-34～37区のIII層掘り下げ。F-48～49区のXVI層掘り下げ・遺物取上げ・礫群実測。F～H-50～52区のX層掘り下げ・下層確認トレンチXI～XVII層掘り下げ・遺物取上げ。F～H-39～44区のVII～VIII層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ・IX層検出土坑実測・写真撮影・土層断面実測。G～H-53区のIIIb～IVa層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ。G～I-31～32区のV～VI層掘り下げ・下層確認トレンチVII～VIII層掘り下げ。空中写真撮影実施。

平成19年1月

F～I-30～31区の下層確認トレンチVIII～XII層掘り下げ・遺物取上げ。F～I-32～38区の下層確認トレンチIV～VIII層掘り下げ・IV層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ・IVb層上面コンター図作成。F～H-39～43区のVIII層掘り下げ・IX層上面コンター図作成・X～XI層掘り下げ・IX層上面検出落とし穴実測・写真撮影・下層確認トレンチXIV～XVII層掘り下げ。F～G-48～49区の下層確認トレンチXIII～XVII層掘り下げ。F～H-51区の下層確認トレンチX層掘り下げ。H-53区のIVb層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ。H～I-33～35区の焼土遺構実測。

平成19年2月

F～I-29～31区のXIV～XVI層掘り下げ。F～I-39～43区の下層確認トレンチVIII～XVII層掘り下げ・X～XI層掘り下げ・遺物取上げ・土層断面実測・VII層検出集石及びIX層上面検出土坑実測・写真撮影。G-32～33区のVII～VIII層掘り下げ・遺物取上げ・IX層上面コンター図作成。G～H-36～38区のVII～X層掘り下げ・遺物取上げ・IX層上面コンター図作成。

平成19年3月

H～I-29～31区のXV～XVII層掘り下げ・土層断面実測。E～I-32～43区のX～XI層掘り下げ・下層確認トレンチXIV～XV層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ・VII層検出集石及びIX層上面検出土坑実測・写真撮影。H-53～54区のIII～IX層掘り下げ・遺物取上げ・土層断面実測。F～G-61～62区の下層確認トレンチIII～VII層掘り下げ・遺物取上げ。調査終了。

### 【西原段 I 遺跡・野鹿倉遺跡】

調査の経過は、日誌抄により週単位で略述する。

(平成18年度) ※A地点、B地点は西原段 I 遺跡をあらわす。

平成18年12月4日(月)～8日(金)

A地点 確認トレンチ1・2調査。重機による表土剥ぎ。B地点 雑木、杉根除去作業。

平成18年12月11日(月)～15日(金)

A地点 VII～VIII層調査 土坑1号の調査。B地点 雑木、杉根除去作業。

平成18年12月18日（月）～22日（金）

A地点 ボラ抜きによってVIII層近くまで搅乱を受けているため、下層確認トレンチを設定し、調査を行う。土層断面実測。トレンチ配置図作成。

B地点 雑木、杉根除去作業。トレンチ調査。トレンチ配置図作成。

平成18年12月25日（月）～26日（火）

B地点 II層調査。

平成19年1月5日（金）～12日（金）

A地点 下層確認調査。土坑検出。

B地点 トレンチ調査。畝状遺構検出。検出状況写真撮影及び実測。III層調査。

平成19年1月15日（月）～19日（金）

A地点 下層確認調査。隣接地試掘トレンチ調査。

B地点 畝状遺構調査。III～IV層調査。センター図作成。

平成19年1月22日（月）～26日（金）

A地点 隣接地試掘トレンチ調査。

B地点 畝状遺構調査。IV～V層調査。センター図作成。土層断面図作成。

平成19年2月1日（木）～9日（金）

A地点 隣接地試掘トレンチ調査。

B地点 V～VII層調査。集石検出。写真撮影及び実測。下層確認調査。

野鹿倉遺跡 確認トレンチA・B2本設定。

平成19年2月13日（火）～16日（金）

A地点 隣接地試掘トレンチ調査。

B地点 V～VII層調査。集石検出。写真撮影及び実測。遺物取上げ。下層確認調査。

野鹿倉遺跡 確認トレンチA・B2本設定。IX層上面まで調査。

平成19年2月19日（月）～26日（月）

空中写真撮影（21日）。B地点 下層確認調査。集石調査。トレンチ配置図作成。

平成19年3月1日（木）～9日（金）

A地点 隣接地試掘トレンチ調査。

B地点 IV層上面落とし穴検出、平面実測、半裁。IV層上面センター図作成（F-30・31区）。

平成19年3月12日（月）～16日（金）

A地点 隣接地試掘トレンチ調査。

B地点 落とし穴調査、逆茂木痕検出。V層調査。下層確認トレンチ調査。

平成19年3月19日（月）～20日（火）

A地点 隣接地試掘トレンチ調査。埋め戻し。調査終了。

B地点 落とし穴調査。下層確認トレンチ調査。埋め戻し。調査終了。

（平成19年度）

平成19年8月1日（水）～10日（金）

西原段I遺跡 III～IV層調査。硬化面を伴う道路状遺構調査。

野鹿倉遺跡 確認トレンチ調査。重機による樹根除去及び表土剥ぎ。

平成19年8月16日（木）～17日（金）

西原段I遺跡 C・D-4～6区III～IV層調査。遺物取上げ。硬化面を伴う道路状遺構調査。

野鹿倉遺跡 確認トレンチ調査。重機による樹根除去及び表土剥ぎ。

平成19年8月20日（月）～24日（金）

西原段I遺跡 III～IV層調査。遺物取上げ。硬化面を伴う道路状遺構調査。

野鹿倉遺跡 確認トレンチ調査。遺物出土状況、土層断面写真撮影。

平成19年8月27日（月）～28日（火）

西原段I遺跡 B～D-3～6区III～IV層調査。遺物取上げ。C-5区東壁土層断面図作成。

野鹿倉遺跡 確認トレンチ調査。重機による樹根除去及び表土剥ぎ。

平成19年9月3日（月）～7日（金）

西原段I遺跡 B～D-4～5区IV層調査。遺物取上げ。E・F-1・2区北壁土層断面図作成。

野鹿倉遺跡 下層確認トレンチ調査。E・F-7区IIIa～IV層調査。

平成19年9月10日（月）～14日（金）

西原段I遺跡 IIIa～IV層調査。遺物取上げ。甕形土器出土状況実測及び取上げ。土坑調査。

野鹿倉遺跡 下層確認トレンチ調査。E・F-7区IIIa～IV層調査。

平成19年9月18日（火）～21日（金）

西原段I遺跡 IIIa～IV層調査。遺物取上げ。

野鹿倉遺跡 下層確認トレンチ調査。E・F-7区IIIa～IV層調査。

平成19年9月25日（火）～27日（木）

西原段I遺跡 B～D-1～3区IV層調査。遺物取上げ。

野鹿倉遺跡 1トレンチ拡張部分調査。E・F-7区VII層調査。I・J-5～6区VIII層調査。

VIII層上面検出集石調査。

平成19年10月2日（火）～5日（金）

西原段I遺跡 D・E-2・3区IVb層調査。B～D-1・2区IVb層調査。遺物取上げ。

野鹿倉遺跡 E・F-7・8区VIII層調査。集石調査。

平成19年10月9日（火）～12日（金）

西原段I遺跡 B～D-1・2区IV層調査。下層確認調査。

野鹿倉遺跡 E～J-7区VII～VIII層調査。集石調査。

平成19年10月15日（月）～19日（金）

西原段I遺跡 下層確認調査。C～E-3・4区IV層調査。

野鹿倉遺跡 E・F-7区X層調査。集石実測。

平成19年10月22日（月）～26日（金）

西原段I遺跡 C-2・3区（市道下部分）IV層調査。遺物取上げ。

野鹿倉遺跡 E・F-7・8区XI～XVII層調査。I・J-7・8区X～XVII層調査。

空中写真撮影（22日）。調査終了。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

建山遺跡は曾於市大隅町岩川に、西原段Ⅰ遺跡及び野鹿倉遺跡は曾於市大隅町中之内に所在する。曾於市は、鹿児島県の東部を形成する大隅半島の北部に位置し、東側に志布志市、南側に曾於郡大崎町及び鹿屋市、西側に霧島市、北側は都城市と接し、宮崎県との県境に位置している。

遺跡の所在する曾於市を含めた鹿児島県北部から大隅半島北半分にかけての地勢を概観すれば、東西の山地とこれらに挟まれた低地帯から構成されている。

山地は、東側に志布志湾北部から宮崎県に突出した形で、北から南へ延びている鰐塚山地（南那珂山地ともいう）で、主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119m）で中生層の地質からなっている。西側は、北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なる。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600m級の山々と、南部の大龜柄岳（1,236.8m）を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。東西の山地は、ともに九州山地の延長をなし、それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。

これらの山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この地域の火砕流は、南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や、大部分は湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。この火砕流堆積物は、堆積後現在に至るまでに大小多くの河川で開削され、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。一方、低地は、高隈山地や鰐塚山地などに水源を持つ大小の河川が志布志湾、鹿児島湾などに注いでいる。この河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また何段かの河岸段丘も認められる。

曾於市のうち大隅町の地形は、東西に狭長で北部高地に端を発する前川、後川、月野川の三川がそれぞれ町内の東部、中部の波状型の凹地を隨所に貫流し、東南に向かい、菱田川に入り志布志湾に注いでいる。大隅半島の基盤となる地層は、高隈山周辺に分布している新生代古第3紀の日南層群である。

建山遺跡が所在する岩川地区は、曾於市のほぼ中央部にあたり、西部の牧ノ原台地から東部の岩川低地に漸移する標高200m～300mの丘陵性台地が卓越する地域である。さらに、この丘陵性台地は、大淀川水系と菱田川水系に属する諸河川により浸食を受け、小台地群に分断された台地に立地している。

西原段Ⅰ遺跡は、曾於市大隅町岩川の標高約270mの台地状に位置する。谷部には志布志湾に注ぐ菱田川の支流である前川が流れ、さらにその支流となる川の開析によって南東から北西に延びるやせ尾根状の台地が形成されている。台地の北側と南側に開析する谷により、南北はさらに、小さな舌状台地が形成されている。谷の底部と遺跡の立地する台地との比高差は約30mである。

野鹿倉遺跡は、曾於市大隅町の西方で、複雑に入り込んだ狹少な標高約287mの台地縁辺端部に位置している。遺跡は、主要地方道志布志・福山線八木塚と、同線坂元を起点とする市道桂・二重堀線の西原段Ⅰ遺跡とのほぼ中間地点付近で、養豚場や養鶏場のある台地に所在する。周辺には台地

との比高差約30~60mの谷が複雑に貫入している。

## 第2節 歴史的環境

建山遺跡・西原段Ⅰ遺跡・野鹿倉遺跡の周辺は、これまで本格的な発掘調査がされていないため詳細は不明だったが、近年の東九州自動車道建設に伴って調査された遺跡によって、次第に様相がはっきりしつつある。

旧石器時代では、耳取・桐木・桐木B・閑山・建山・定段・チシャノ木などの遺跡で多くの資料が出土している。とりわけ耳取・桐木遺跡ではナイフ形石器文化期と細石刃文化期の二時期の遺構・遺物が発見され、これらはさらに細分化される様相もある。ナイフ形石器文化期ではナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器などとともに多くの礫群や石器製作跡が検出されており、耳取遺跡では日本最古級の女性像ともいわれる石製品も出土している。細石刃文化期でも細石核や細石刃とともに礫群・石器製作跡が検出されている。建山遺跡でもナイフ形石器文化期のナイフ形石器・剥片尖頭器とともに石器製作跡が、細石刃文化期の細石刃・細石核とともに石器製作跡が検出されている。

縄文時代の遺跡は各時期、多くの遺跡が発見されているが、なかでも古い時期のものが多い。

草創期のものは少ないが、桐木遺跡では隆起線文土器や石鏃が出土し、集石が検出されている。

早期の遺構は、堅穴住居跡・連穴土坑・集石・土坑・落とし穴などが、踊場・耳取・桐木・閑山・閑山西・地蔵免・唐尾・西原段Ⅰ・建山・狩俣・高古塚・定段・チシャノ木など多くの遺跡で検出されており、吉田式・前平式・撫糸文・押型文・石坂式・平柄式・塞ノ神A式・塞ノ神B式など多種の土器や多種多量の石器が出土している。この中では前平式土器などとともに堅穴住居跡約40軒、土坑約220基、集石約30基などが検出された定段遺跡が注目される。この地域は早期集落の密集度が高い地域といえる。

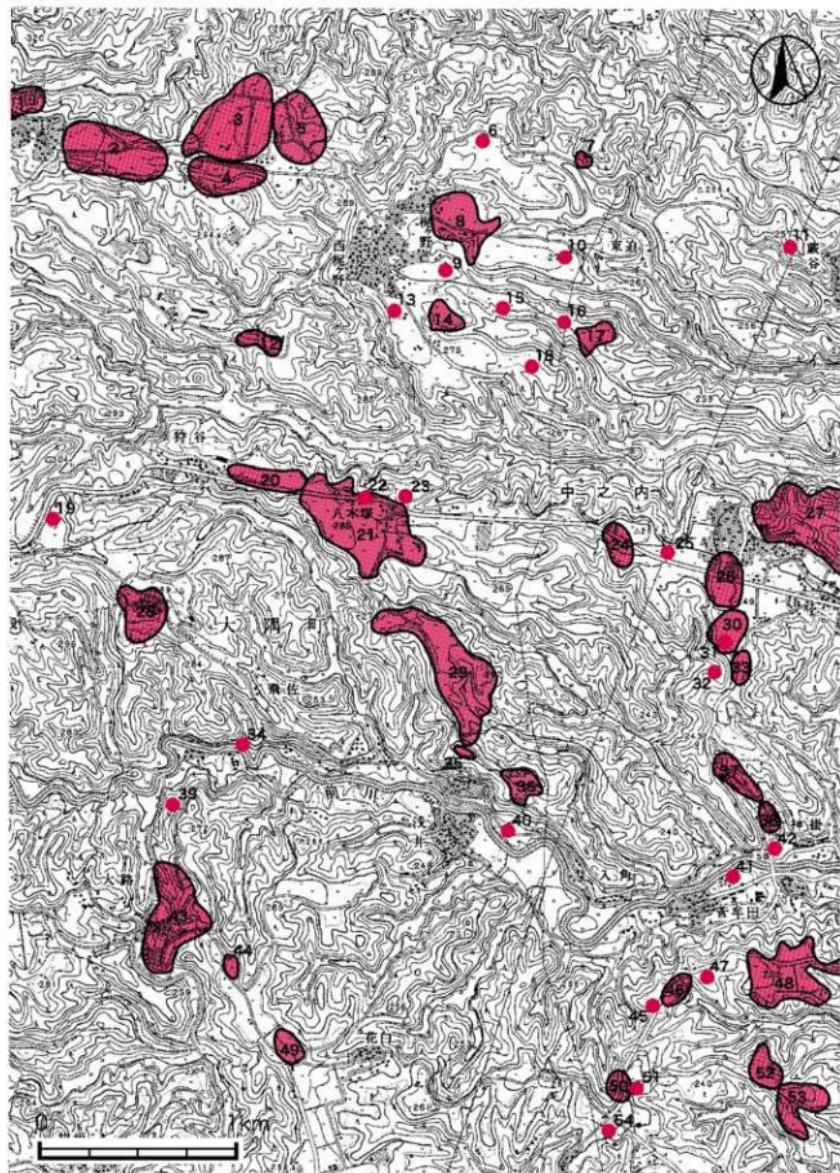
中期では桐木遺跡で船元式土器・石鏃・石匙が多く出土し、閑山・唐尾・高古塚などの遺跡で落とし穴が、小倉前・チシャノ木遺跡では土坑が検出されている。

後期の遺跡はそれほど多くないが、丸尾遺跡は丸尾式土器の標識遺跡である。

晩期の遺跡は各地にあるが、大きな集落遺跡はない。桐木遺跡では入佐式・黒川式土器とともに5軒の堅穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑などが検出されている。他に入佐式土器や黒川式土器とともに閑山・閑山西・唐尾・建山などの遺跡で堅穴住居跡が検出されている。上中段遺跡では夜白式土器の土器セットに丹塗り壺や粗痕土器などが含まれている。

地形のせいか、弥生時代・古墳時代の遺跡は少なく、閑山西・打込・吹切段Ⅱ遺跡などが挙げられるが詳細は不明である。墳墓や集落の様相も不明である。

古代は高築・踊場といった都城盆地に近い遺跡で掘立柱建物跡などが検出されているが、内陸部では少ない。中尾立・唐尾・建山・狩俣・高古塚などで掘立柱建物跡や焼土跡などが検出され、墨書き土器も出土している。上中段遺跡では墨書き土器や焼塙土器などとともに輪の羽口や鉄滓・鉄製品など製鉄関係の遺物が多く出ている。中世では桐木遺跡で遺跡が、狩俣遺跡で畠跡が検出されている。



第1図 周辺遺跡位置図 (1 : 25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表(1)

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	63-36-0	前畠段	曾於市大隅町中之内 前畠段	丘陵	繩文(後)	岩崎上層式	
2	63-101-0	東原	曾於市大隅町中之内 東原	台地	繩文(早~晚)、弥生、奈良、平安	繩文土器・土師器・打製石斧(半欠)・鐵滓	
3	63-57-0	西原段 II	曾於市大隅町中之内 西原段	台地	繩文	繩文土器	
4	63-186-0	峯段	曾於市大隅町中之内 峯段	台地	繩文、平安	土器・土師器	町埋文報(16)
5	63-27-0	西原段 I	曾於市大隅町中之内 西原段	台地	繩文(後)	岩崎上層式	本報告書
6	63-99-0	ノトロ	曾於市大隅町中之内 ノトロ	台地	繩文(晚)	繩文土器・局部磨製石斧・敲石	
7	63-206-0	谷川内	曾於市大隅町中之内 谷川内	丘陵	奈良~平安	土師器	
8	63-115-0	打込	曾於市大隅町中之内 打込	台地	弥生、歴史	土師器	
9	63-142-0	前岡	曾於市大隅町中之内 前岡	台地	歴史	土師器	
10	63-95-0	わらび堂	曾於市大隅町中之内 わらび堂	台地	繩文(晚)	繩文土器・頁岩剥片	
11	63-146-0	蕨谷	曾於市大隅町中之内 蕨谷	丘陵	繩文(早)、歴史	小片のため時代不明	
12	63-252-0	野鹿倉	曾於市大隅町中之内 野鹿倉	台地	繩文	土器	本報告書
13	63-141-0	前畠	曾於市大隅町中之内 前畠	台地	繩文、歴史	須恵器	
14	63-40-0	中崎追	曾於市大隅町中之内 中崎追	台地	繩文(晚)、歴史	土師器	
15	63-143-0	重ヶ迫	曾於市大隅町中之内 重ヶ迫	台地	古代	土師器	
16	63-144-0	重吉追 I	曾於市大隅町中之内 重吉追	台地	古代	土師器・黒色土器	
17	63-28-0	重吉追 II	曾於市大隅町中之内 重吉追	台地	繩文(後)、古代	土師器	
18	63-145-0	高尾追	曾於市大隅町中之内 高尾追	台地	歴史	土師器	
19	63-17-0	觀音段	曾於市大隅町中之内 4300	台地	繩文(早)	石皿	
20	63-29-0	狩谷	曾於市大隅町中之内 狩谷	台地	繩文(後)		
21	63-253-0	建山	曾於市大隅町岩川 建山	台地	旧石器、繩文、古代	土器	本報告書
22	63-187-0	八木塚	曾於市大隅町中之内 八木塚	台地	中世	墳丘(消滅)	
23	63-102-0	柿木渡	曾於市大隅町中之内 柿木渡	台地	繩文	石鍤(5例)	
24	63-213-0	一里山	曾於市大隅町中之内 一里山サセツ	台地	繩文(早)	前平式・塞ノ神式	
25	63-166-0	一里山	曾於市大隅町中之内 一里山・二本桟	台地	繩文(晚)、歴史	土師器・青磁	
26	63-239-0	尾ノ追	曾於市大隅町中之内 桂	台地	繩文、中世、近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
27	63-168-0	手取城跡	曾於市大隅町中之内 手取・陣之元	丘陵	中世、近世		「日本城郭体系」18、町埋文報(15)
28	63-16-0	赤松追	曾於市大隅町大谷 赤松追	台地	繩文(早)	石坂式	
29	63-254-0	狩俣	曾於市大隅町岩川 狩俣	台地	繩文、古代	土器・石器	H17年。18年発掘調査
30	63-240-0	吹切段A	曾於市大隅町中之内 西笠木	台地	繩文、中世、近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
31	63-41-0	吹切段 I	曾於市大隅町中之内 吹切段	台地	繩文(晚)	布目文	「大隅町誌」

第2表 周辺遺跡一覧表(2)

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
32	63-118-0	吹切段 II	曾於市大隅町中之内 吹切段	台地	縄文(早・晚)、 弥生、奈良、 平安、中世	弥生土器	
33	63-241-0	松ヶ迫田	曾於市大隅町中之内 笠木	台地	縄文	土器・石器	町埋文報(21)
34	63-152-0	宗ノ段	曾於市大隅町大谷 宗ノ段	丘陵	歴史	土師器	
35	63-234-0	入角	曾於市大隅町岩川 入角	台地	古墳?	墳丘?	
36	63-255-0	高古塚	曾於市大隅町岩川 高古塚	台地	古墳・古代	土器	H17年、18年発掘調査
37	63-52-0	松ヶ迫田	曾於市大隅町中之内 松ヶ迫田	台地	縄文(早・後 ・晚)、歴史	縄文土器	
38	63-242-0	長迫A	曾於市大隅町中之内 神掛	段丘	縄文、中世、 近世	土器・陶磁器	町埋文報(21)
39	63-174-0	宮田	曾於市大隅町大谷 宮田	丘陵	縄文	炭化物・鉄滓	
40	63-61-0	浅井	曾於市大隅町岩川 向上・仮屋ヶ段	丘陵	縄文	石斧・敲石	「大隅町誌」
41	63-136-0	光神免	曾於市大隅町岩川 2828-3	丘陵	古墳	土師器	削平を受けている が墳丘らしきもの が残存
42	63-119-0	長迫	曾於市大隅町中之内 長迫	丘陵	縄文(晚)、 弥生、歴史	石斧・叩石・土師器	
43	63-190-0	愛宿山墨跡	曾於市大隅町長江 字大路他	丘陵	中世(南北朝 ~戰国末)		県埋文報(29)
44	63-211-0	吹谷追	曾於市大隅町大谷 2428-4	台地	縄文	土器片	
45	63-156-0	菅牟田	曾於市大隅町岩川 菅牟田	丘陵	縄文、奈良、 平安	土師器	町埋文報(21) H16年発掘調査
46	63-243-0	菅牟田A	曾於市大隅町岩川 菅牟田	山腹	縄文、中世、 近世	土器・陶磁器	町埋文報(21)
47	63-43-0	イチノ木	曾於市大隅町岩川 イチノ木・前畠上	台地	縄文(晚)		
48	63-44-0	上山	曾於市大隅町岩川 上山	台地	縄文(晚)、 歴史		
49	63-212-0	船窪	曾於市大隅町岩川 船窪	台地	縄文・古墳、 平安・近世	土師器	町埋文報(9)
50	63-244-0	井手山A	曾於市大隅町岩川 久木山	台地	縄文(早)、 近世	土器・石器・陶磁器	報告書有
51	63-62-0	井手山	曾於市大隅町岩川 井手山・定塚	台地	縄文、歴史	土師器	
52	63-2-0	定段(定塚)	曾於市大隅町岩川 定塚・入佐	台地	旧石器、 縄文(早)、 歴史	前平式・塞ノ神式・ 土師器	H16年、17年発掘調査
53	63-63-0	稻村	曾於市大隅町岩川 稻村	丘陵	縄文		H17年、18年発掘調査
54	63-70-0	久木山	曾於市大隅町岩川 麥ヶ道	台地	縄文	叩石・石皿・石斧	「大隅町誌」

## 【参考文献】

1. 大隅町役場 昭和44年2月「大隅町史」
2. 鹿児島県立埋蔵文化財センター-2002.3「出水平遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(43)
3. 鹿児島県立埋蔵文化財センター-2002.3「九養糞遺跡・豚場遺跡・高篠遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(36)
4. 鹿児島県立埋蔵文化財センター-2005.3「柳木耳取遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(91)
5. 鹿児島県立埋蔵文化財センター-2008.3「開山遺跡・鳥居川遺跡・チャノ木遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(125)
6. 鹿児島県立埋蔵文化財センター-2008.3「開山遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(126)
7. 鹿児島県立埋蔵文化財センター-2008.3「唐尾遺跡・高古塚遺跡・菅牟田遺跡・中之追遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(127)
8. 国土調査1972「土地分類基本調査-岩川」
9. 末吉町教育委員会 昭和45年10月「末吉郷土史」
10. 旁 即正・塙田公彦編 旺文社1995.11「鹿児島県風土記」
11. 平凡社1998.7「鹿児島県の地名」日本歴史地名大系47

## 第Ⅲ章 遺跡の層位

層厚は異なるが、隣接する桐木耳取遺跡の基本層位と一致する。以下、各層について順に述べる。なお、P3、P11、P14、P15、P17は桜島を噴出源とするものである。

層順		噴出年代
I 層	表土	
II 層	文明ボラP3	AD1,471年
IIIa層		
IIIb層		
IVa層		
IVb層	御池火山灰	約4,600年前
Va層		
Vb層	アカホヤ火山灰	約7,300年前
VIa層		
VIb層	桜島P11	約8,000年前
VII 層		
VIII 層		
IX 層	薩摩火山灰P14	約12,800年前
X 層		
X I 層		
X II 層		
X III 層		
X IV 層	桜島P15含む	
X V 層		
X VI 层	桜島P17含む	約26,000年前
X VII 層		
	シラス	約26,000～ 29,000年前

第2図 基本土層図（網かけは、遺物包含層）

【参考文献】町田洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス」東京大学出版会

# 建山遺跡

## 第Ⅳ章 建山遺跡

### 第1節 発掘調査の方法及び層位

平成17年8月8日から平成18年3月22日まで（平成17年度）に確認調査と本調査を行い、平成18年5月9日から平成19年3月20日まで（平成18年度）本調査を行った。

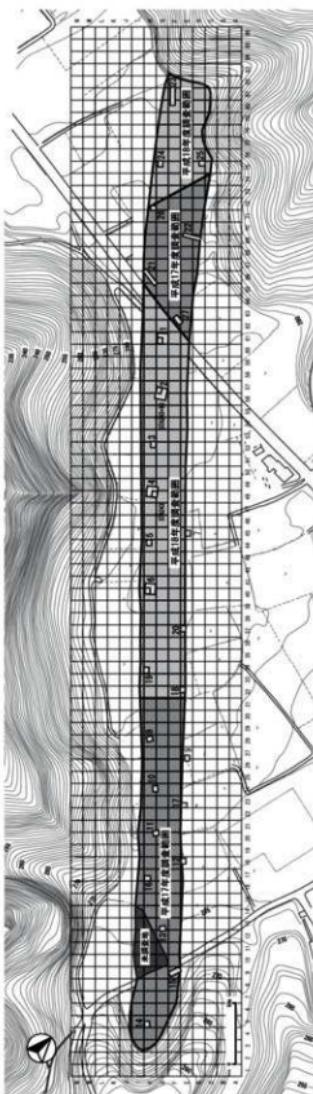
平成17年度の確認調査は、 $5 \times 4\text{ m}$ の大きさを基本とするトレーニチを27か所設定して実施した結果、ほぼ全てのトレーニチから遺構や遺物が確認され、遺跡は全域に広がることが明らかになった（第3図）。

確認調査の結果に基づき、平成17年度の本調査は遺跡の南端部及び県道63号線の北側部分（一部）を実施した。また、平成18年度の本調査は遺跡の北端部及び中央部を実施した。

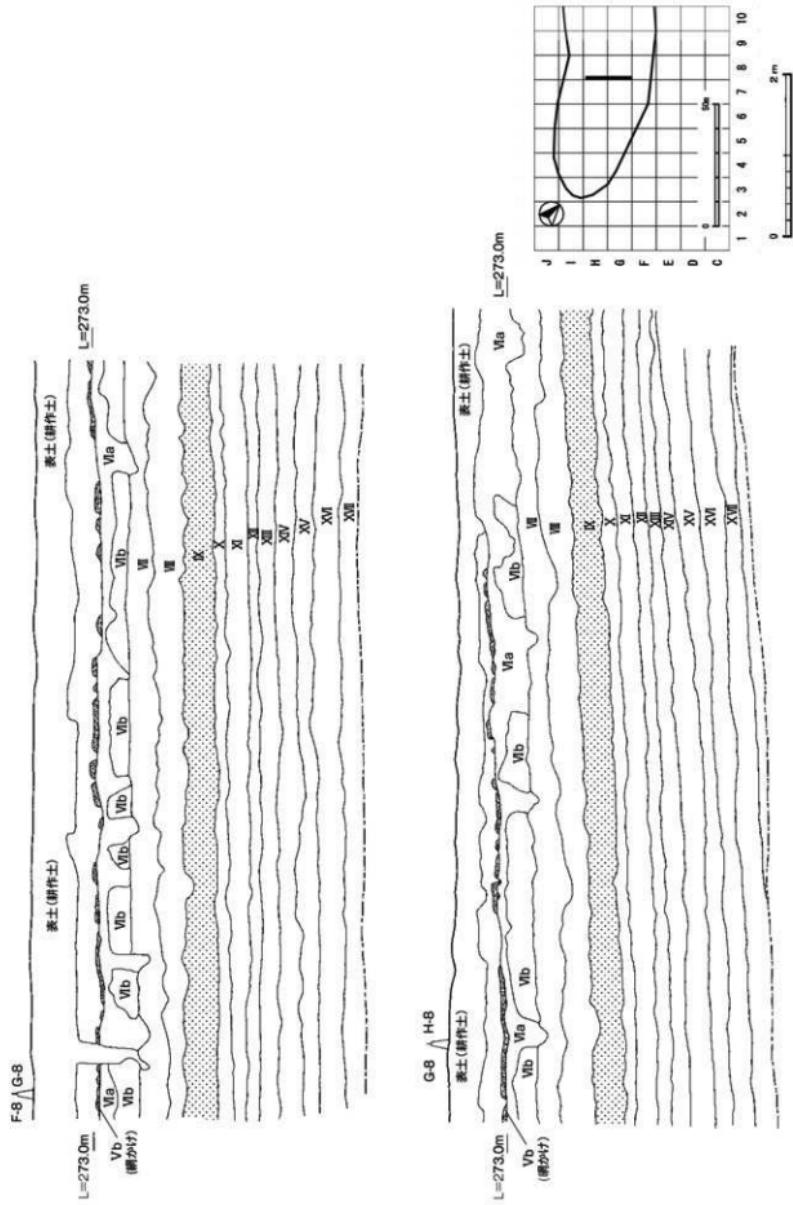
調査は、I層（現表土層）及び無遺物層と確認されたVb層、IX層については重機により掘削し、遺物包含層及びその可能性がある層については人力による掘り下げを行った。

遺跡内の位置を決定するために $10\text{ m} \times 10\text{ m}$ の区割り（グリッド）を設定した。グリッドは西日本高速道路株式会社により設定された高速道路センター基準杭STA243とSTA243+80の2点を結ぶ直線を基準軸として東から西側に向かって1, 2, 3・・・、北から南側に向かってA, B, C・・・とする $10\text{ m}$ 間隔のグリッドを設定した。

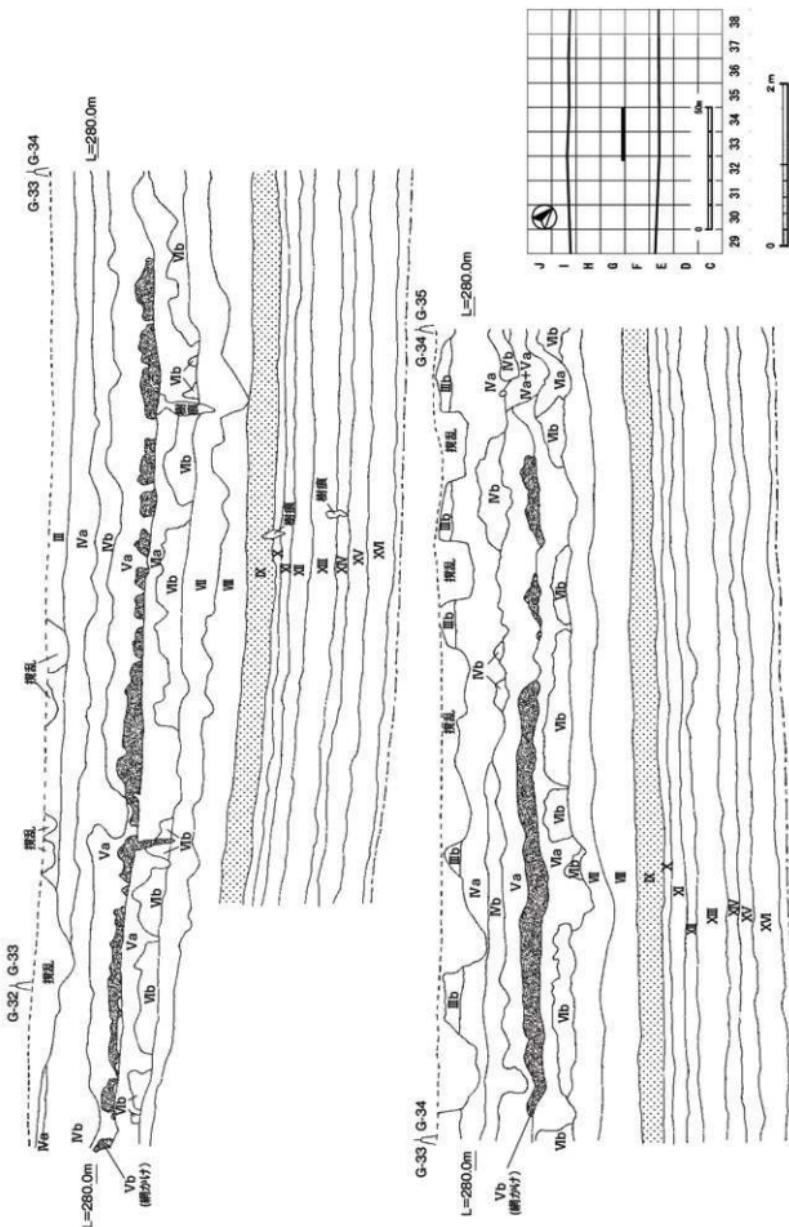
出土遺物及び遺構は写真撮影及び位置の記録、実測作業を行い、炭化物等は自然科学分析用のサンプリングを行った。



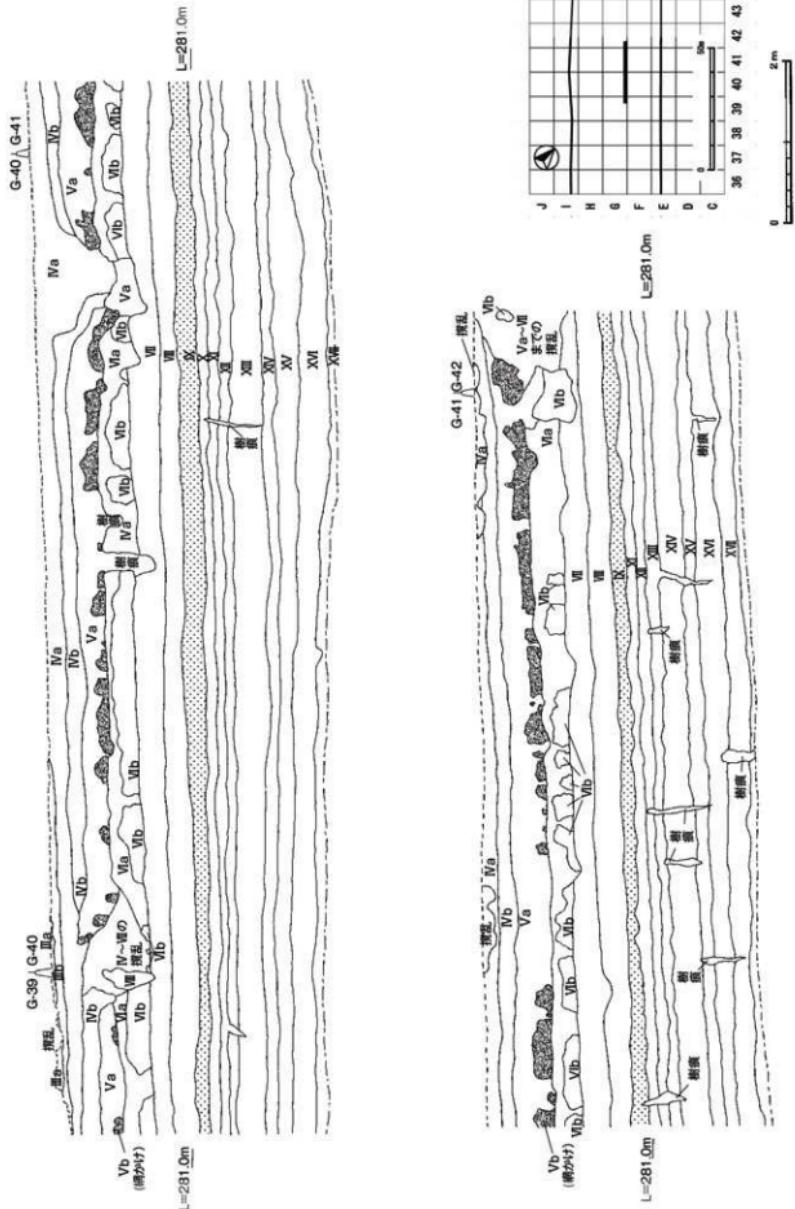
第3図 トレーニチ配置図及び周辺地形図



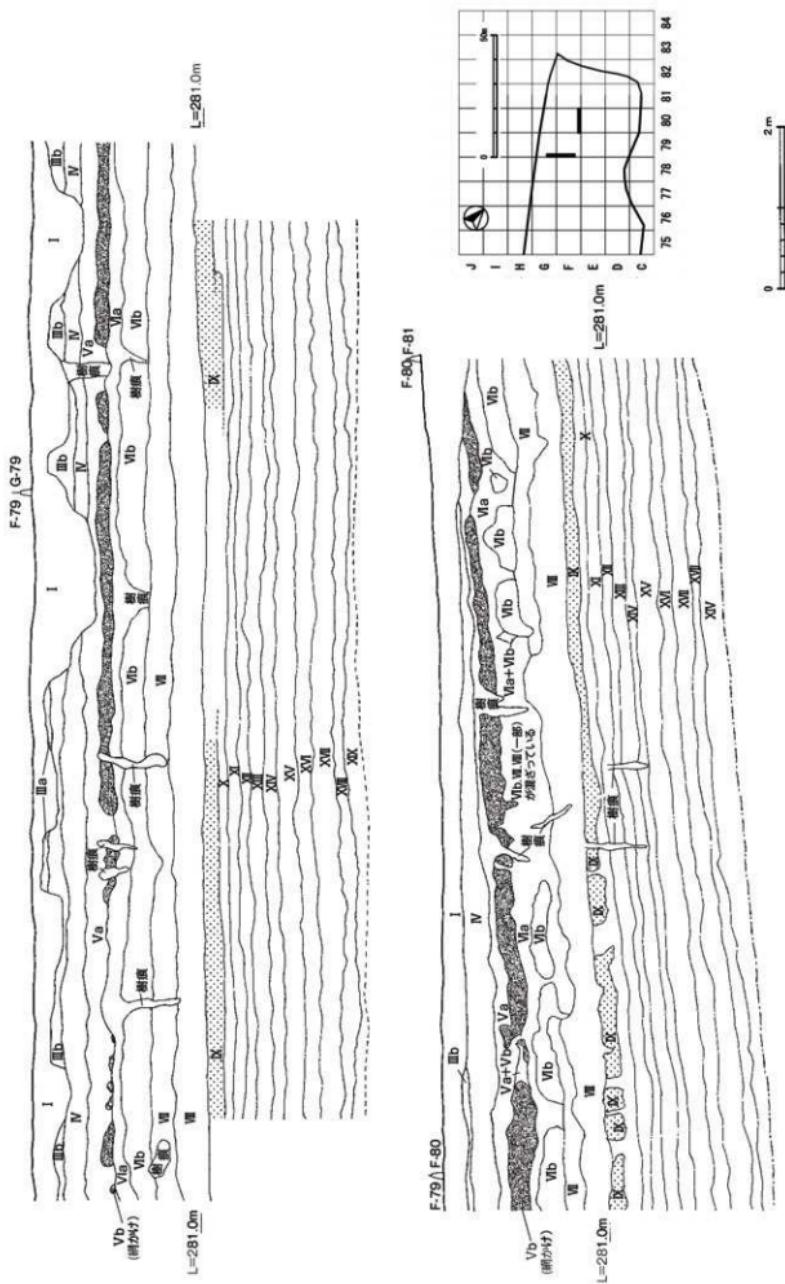
第4図 土層断面図(1)



第5図 土層断面図(2)



第6図 土層断面図(3)



第7図 土層断面図(4)

## 確認トレンチの状況

5×4mの大きさを基本とするトレンチを27か所設定して実施した結果、ほぼすべてのトレンチから遺構・遺物が確認された。

27トレンチでは、Ⅲb層から輕石集積が検出された。その他のトレンチにおいてVII、VIII層で検出された主な遺構は、集石遺構である。

第3表 トレンチ別調査結果

トレンチ番号	層	I層	II層	IIa層	IIb層	IVa層	IVb層	Va層	Vb層	Vla層	Vlb層	VII層	VIII層	IX層	X層	XI層	XII層	XIII層	XIV層	XV層	XVI層	XVII層
	時期	P3	中世	古代	縄文後期 暖期		縄文前期 中期		縄文早期		P11	縄文早期	縄文早期	P14	草創 期旧石器				P15		P17	
1T					○	×	×	×	×	×	×	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2T					○	○	×	×	×	×	×	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3T					○	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4T					○	○	×	×	×	×	×	○	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-
5T					○	×	×	×	○	×	○	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6T					○	○	×	×	×	×	○	×	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-
7T							×	×	×	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8T					○	○	×	×	×	×	○	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9T							×	×	×	×	×	○	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-
10T							×	×	○	×	×	○	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-
11T							○	×	×	×	○	○	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-
12T							○	○	×	×	×	○	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-
13T														×	×	×	×	×	×	×	×	×
14T									×	×	×	○	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-
15T												×	×	○	×	-	-	-	-	-	-	-
16T									×	×	×	×	○	○	×	-	-	-	-	-	-	-
17T									○	×	×	×	○	○	×	-	-	-	-	-	-	-
18T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
19T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
20T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21T					○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-
22T							×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
23T					○	×	×	×	×	×	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-
24T							×	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×
25T					○	×	×	×	×	×	○	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×
26T					○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-
27T					○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-

○：遺構検出 ○：遺物出土 ×：出土なし -：未調査

## 第2節 旧石器時代の調査成果

### 1 調査の概要

建山遺跡の旧石器時代遺物は、出土層の違いにより大きく三時期の文化層に区別できる。出土層が下位で時期的に古いものから、それぞれ第Ⅰ～Ⅲ文化層と呼称した。

第Ⅰ文化層は、第XVI層を出土層とするもので、3ヶ所のブロックからなり大型の槍先形尖頭器や三稜尖頭器を主体とするものである。また、礫群が1基検出されている。

第Ⅱ文化層は第XV層を包含層とするもので、2ヶ所のブロックが検出され、小型三稜尖頭器が主体となるものである。

第Ⅲ文化層は第X層からXI層を包含層とするもので、合計20ヶ所のブロックを認識した。主体となる石器群は細石刃石器群であるが、一部のブロックでは小型ナイフ形石器が主体となるものも存在し、また、石鎌や土器片を共伴するものも認められた。しかし、本来的に第Ⅲ文化層は細石刃文化期が主体であり、一部その前後の時期も存在していると考えられる。

これらのブロックのなかで特徴的なものが細石刃核型式と石材の違いであり、特に黒曜石の产地の差がブロックにより明確に異なり、それぞれの時期の細かな違いも反映していると考えられる。

### 2 旧石器時代の石器石材

出土した石器は多種多様の石材が使用されており、黒曜石についても南九州産のみでなく西北九州産が認められている。ここでは肉眼的観察により大きく区別し、それらの一部については产地同定分析を実施している。ここでは出土した主な黒曜石について区別しておく。

上牛鼻産… 風化が激しく、外觀は消し炭状で特徴的なものであるが、新しい割れ面は漆黒で光を通さない。薩摩川内市樋脇町上牛鼻が主産地であるが、日置市市来町平木場も産地として確認されている。

上青木・桑ノ木津留産… アメ色で透明感があり、不純物の少ない特徴のものである。以前には桑ノ木津留産とされていたが、近年大口市上青木で広い散布域が確認された黒曜石である。また、いわゆる霧島系と呼ばれる黒色でわずかに不純物を有する小角礫の黒曜石も本報告書ではこれに含む。ここでは桑ノ木津留系とした。

日東系… 大口市日東産地を標準とするものであり、不純物が多いものである。透明感がない点で三船産と異なる。日東周辺では多くの産出地が知られているが、まだ多くの露頭の存在が予想されている。ここでは大口市五女木産を含む意味で日東系とした。

腰岳産… 漆黒色を呈し、不純物がきわめて少ないものである。南九州では遠隔地石材であり、集団の移動などと関連して、特定の時期もしくは特定の石器形態と関連している可能性が考えられる。

淀姫・針尾系… 青灰色を呈し、ガラス質であり不純物は少ない特徴のものである。淀姫産と針尾産は外縞皮面や色調の差などがあるが、ここでは一括して取り扱った。これも南九州では遠隔地石材であり、集団の移動などを考慮する必要があろう。ここでは淀姫系として取り扱った。

### 3 第I文化層の遺構と石器群

第I文化層は第XVI層を遺物包含層とするものである。第XVI層は、赤褐色を呈する細かい火山噴出物が認められるもので、桜島起源のP17と推定され、年代の決め手となる。遺物集中部は3ヶ所存在しており、南から1、2、3ブロックとした。礫群も1基検出された。

#### 第1ブロック

H・I-29・30区付近に位置しており、経18m×10mの範囲に分布を有する。石材は、頁岩、粘板岩、黒曜石などで、大型の槍先形尖頭器や三稜尖頭器、搔器、使用痕剥片などである。

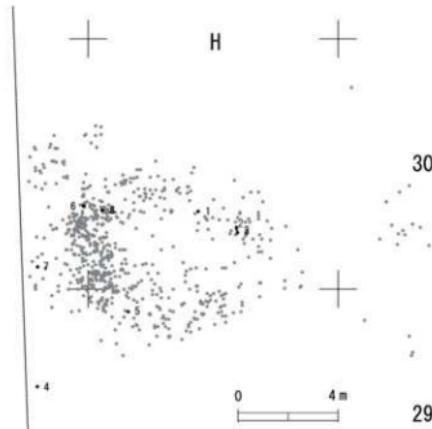
##### 槍先形尖頭器（第10図1）

1は幅広剥片を使用して比較的粗い剥離を両面から施して全体の整形を行ったものである。先端部は細かい剥離を丁寧に施して形成している。長さは15.5cm・幅4cmを計る。石材は粘板岩である。

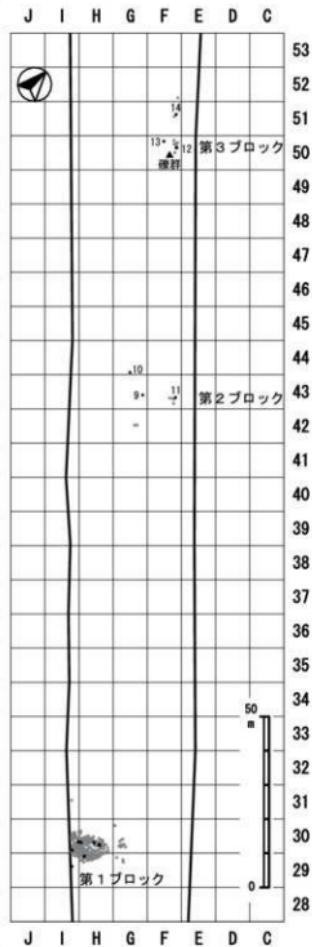
##### 三稜尖頭器（第10図2、第11図4・5）

2は背面に自然面をもつ横長剥片を素材としたもので、腹面側からの細かい連続した二次加工により整形を行い断面三角形で鋭い先端部をもつ。基部端は尖がらない。石材は安山岩が使用されている。3の整形剥離片が接合した状況である。

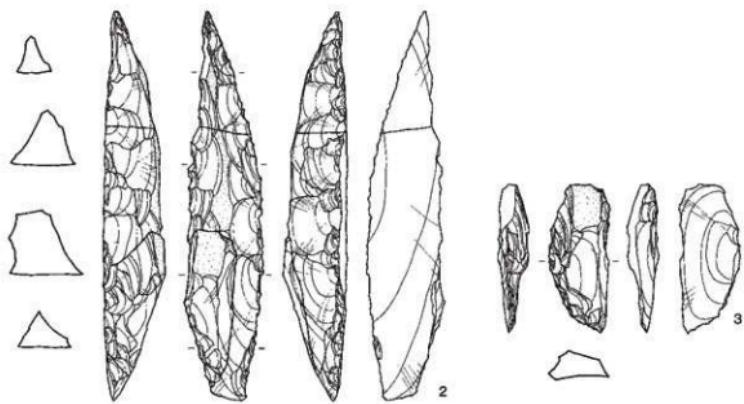
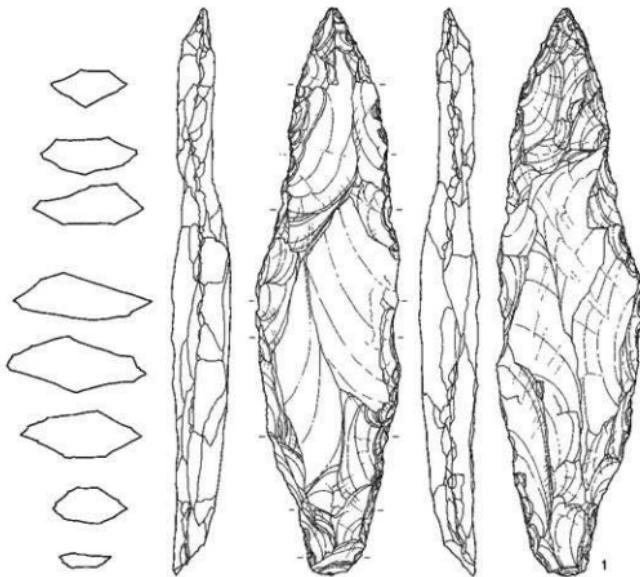
4は黒曜石製のものである。厚みのある横長剥片が素材とされ、剥片の打面部は平坦状の剥離により除去され



第9図 第I文化層 第1ブロック石器群出土分布図

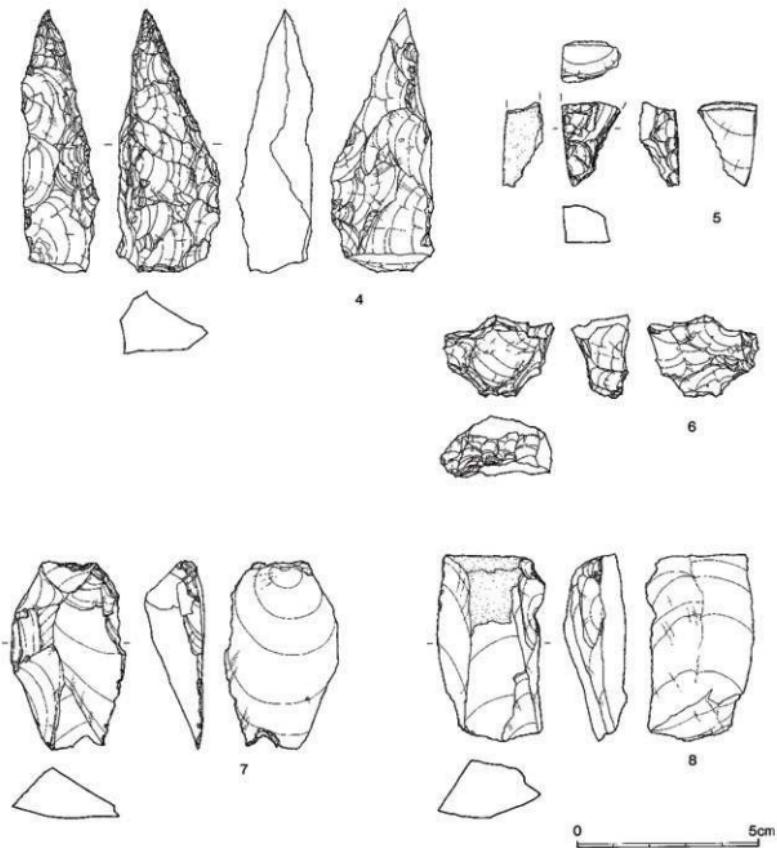


第8図 第I文化層の石器群位置図



0 5cm

第10図 第I文化層 第1ブロック出土石器(1)



第11図 第I文化層 第1ブロック出土石器(2)

ている。両側縁部は腹面側からの二次加工により整形されている。また背面の稜上剥離も施されている。5は2と同質の石材による欠損品である。細かい二次加工が施されている。

#### 搔器（第11図6）

6は4と同質の黒曜石製で、二次加工を急角度に施したものである。分析の結果日東系である。

#### 使用痕剥片（第11図7・8）

いずれも剥片の鋭利な縁辺に微細な使用痕が観察されるものである。7は珪質頁岩製、8は安山岩製である。

## 第2ブロック

G-43区及びF-42区から少量の遺物が出土した。ひとつのブロックとして認定できる出土量と言えないが、第2ブロックとした。石材は安山岩や頁岩である。

### ナイフ形石器（第13図9・10）

9は背面に平坦な自然面が残る縦長剥片を素材としたものであり、鋭利な一側縁を残して他の縁辺はプランティングを施したものである。打面は折断して、それに近い両側縁に細かい二次加工を直線状に施して基部としている。尖端部をわずかに欠損するものの、それでも長さ10cmを超すかなり大型のナイフ形石器である。10は頁岩製の縦長剥片を使用したものであり、剥片の打面は折断して、その近くの両側縁を直線的に二次加工して基部とした基部加工のナイフ形石器である。

### 剥片（第13図11）

11は頁岩製であり、打面は前方向からの剥離で形成された山形の頂部に位置している。このような打面の形状と位置は瀬戸内技法に類似している。

## 第3ブロック

F-50・51区に分布域を有するもので、遺物量は多くない。少量の石器などのほか、礫群が1基検出された。

### 検出遺構

#### 礫群（第12図）

F-50区のP17を含む第X VI層の下面で検出された。40×60cmの範囲に計6個の礫から構成されており、径5cmから12cm程度の礫が使用されていた。礫は火熱を受けて赤化が認められ、近辺には炭化物が多く認められた。ただし礫の下面に掘り込みは認められなかった。

出土した炭化物による年代測定(AMS)の結果は、 $23,539 \pm 84$ 年であった。

遺構周辺の出土遺物はナイフ形石器や使用痕剥片など少数であった。

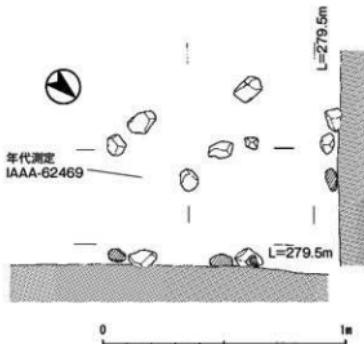
#### ナイフ形石器（第13図12・13）

12は横長剥片を素材とし、基部は両側縁に腹面側から細かいプランティングを施しており、先端部はほとんど二次加工を施していないものである。石材は頁岩である。

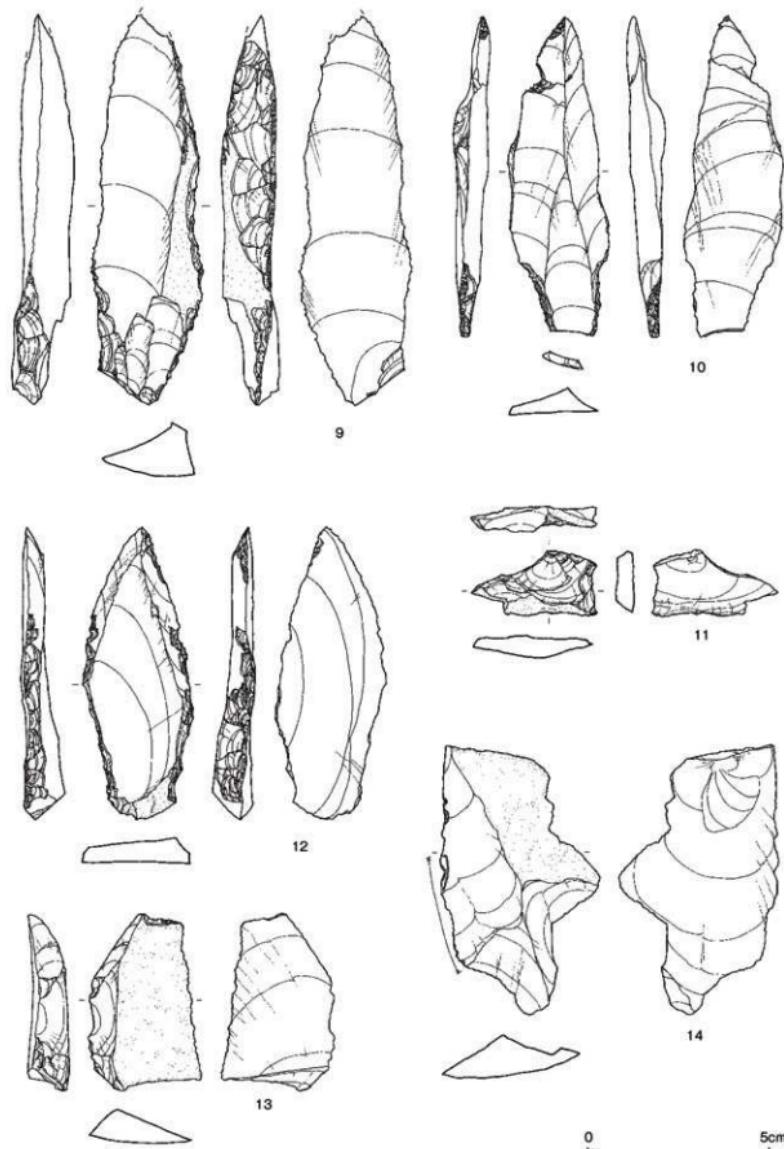
13は砂岩製の縦長剥片を使用したものである。基部を欠損している。鋭利な縁辺は残して、反対側には粗い二次加工が施されている。

#### 使用痕剥片（第13図14）

14は背面に自然面を残す縦長状の剥片であり、鋭利な側縁に使用痕が認められる。石材は砂岩である。



第12図 第I文化層の礫群



第13図 第I文化層 第2, 3ブロック出土石器

### 第3節 旧石器時代 第Ⅱ文化層の石器群

第Ⅱ文化層は、第XV層を遺物包含層とするものである。第XV層はP15が点在する第XIV層の下位であり、またP17が認められる第XVI層との中間の位置にある。

計2ヶ所のブロックが検出された。いずれも日東系黒曜石を主な石材とするもので、主体となる器種は小型の三稜尖頭器である。

#### 第1ブロック

G-29区に分布するもので、径約5m程度の分布域をもつ。2種類の黒曜石と頁岩が使用されている。

##### ナイフ形石器（第15図15）

15は頁岩製の縦長剥片を素材とし、基部近くの片側縁と稜上に二次加工を施して基部とするもので、中位から先は片側縁に粗い二次加工が施されている。先端部を欠損している。

##### 三稜尖頭器（第15図16）

16は横長剥片を素材とし、腹面側からと稜上からの二次加工により断面三角形に仕上げた三稜尖頭器の一部である。基部もしくは尖端部のみの破損品である。石材は桑ノ木津留産黒曜石である。

##### 削器（第15図17・18）

17はやや厚みのある比較的大型の剥片を使用し、両側縁に粗い二次加工により刃部を施したものである。18も同様の素材剥片を使用し、両側縁に粗い二次加工を施して刃部としたものである。いずれも黒曜石分析で日東産黒曜石と判定された。

##### ブロック外出土使用痕剥片

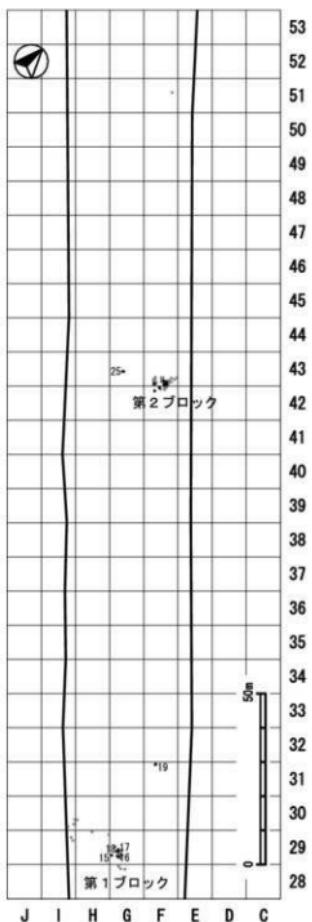
19はF-31区から出土した使用痕のある剥片である。石材は日東系黒曜石とは異なると推定される。

#### 第2ブロック

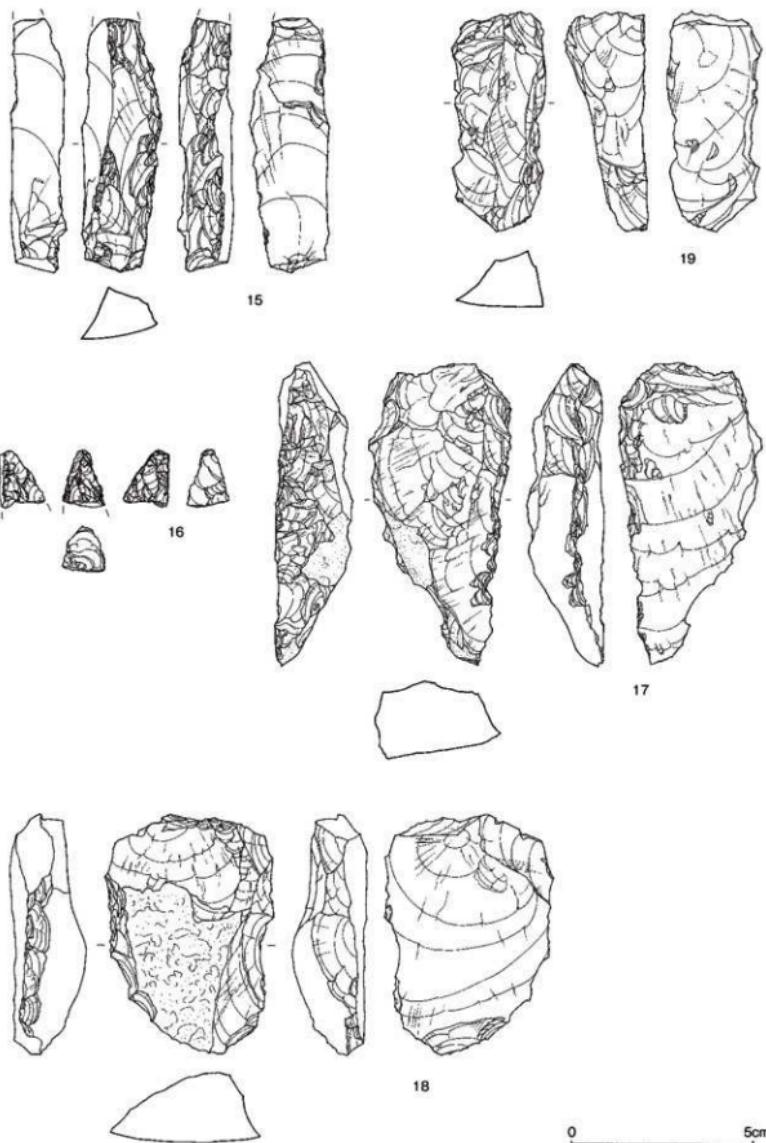
F-42・43区付近に分布するもので、小型の三稜尖頭器を主体とするものである。

##### 三稜尖頭器（第16図20～25）

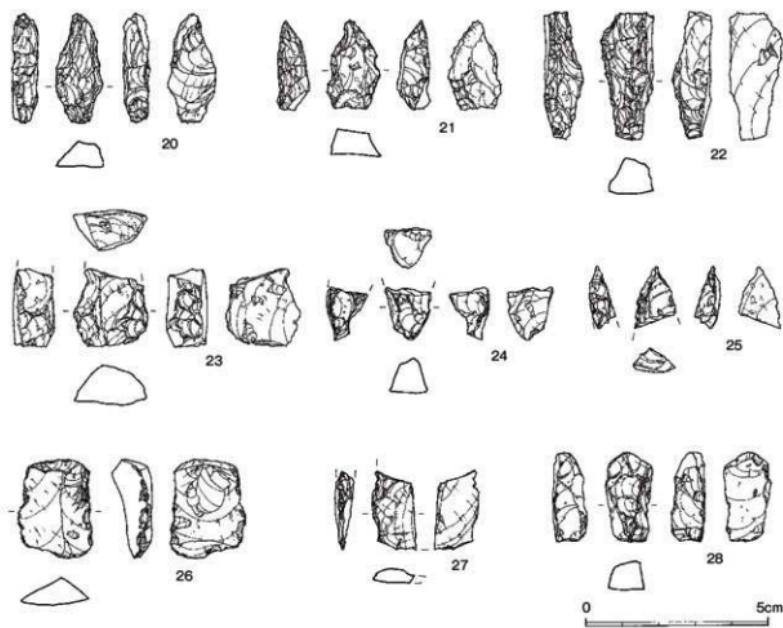
20は横長剥片を素材とし、腹面側から細かい二次加工を施して整形したものである。基部近くは両側縁をノッチ状に仕上げている。21・22も小型の横長剥片を使用したもので、21は基部を、22は先端部を欠損している。22も意図的に整形した基部を有する。



第14図 第Ⅱ文化層の石器群位置図



第15図 第Ⅱ文化層 第1ブロック出土石器



第16図 第Ⅱ文化層 第2ブロック出土石器

23~25も同様に横長剥片を素材にしたもので欠損品である。石材はいずれも日東系黒曜石である。

#### スクレイバー (第16図26~28)

26は縦長剥片が使用され両縁辺に細かい二次加工が施されたものである。27は細かい二次加工により刃部が形成された破損品。28は縁辺に細かい使用痕が観察される。石材は同様に日東系黒曜石である。

+

G

+

F

+



第17図 第Ⅱ文化層 第2ブロック石器出土分布図

#### 第4節 旧石器時代 第Ⅲ文化層の石器群

第Ⅲ文化層は、第X層と第XI層を遺物包含層とするものであり、その上位の第IX層が薩摩火山灰層(P14)で、第X層は黒褐色粘質土、第XI層は黄褐色粘質土である。第Ⅲ文化層は細石刃文化を主体とする石器群であるが、南九州では終末の細石刃石器群の一部に土器や石鎌が共伴する縄文時代草創期の時期もみられる特徴がある。本遺跡でも第X層から草創期土器の出土が認められている。ここではこれらの時期も含めて第Ⅲ文化層としている。

第Ⅲ文化層では視覚的な出土分布として、計20ヶ所の遺物集中部(区域)を認識してブロックとした。なお、ブロックは石器のみでなく、土器を主体とするものも含めている。ブロックは各々10m以内の近距離に接しているブロック集中部が2ヶ所認められ、これをブロック群とした。また、他と20m以上離れている単独のブロックも2基認められた。ブロックは南から1・2・3…と呼称した。また石器の中で細石刃については一括して後で記載した。

##### 第1ブロック

F-31・32区に径約11×8m程度の楕円形に分布し、細石刃核の出土は多く細石刃の数は少ない石器群である。石材は桑ノ木津留の黒曜石が主体となっている。

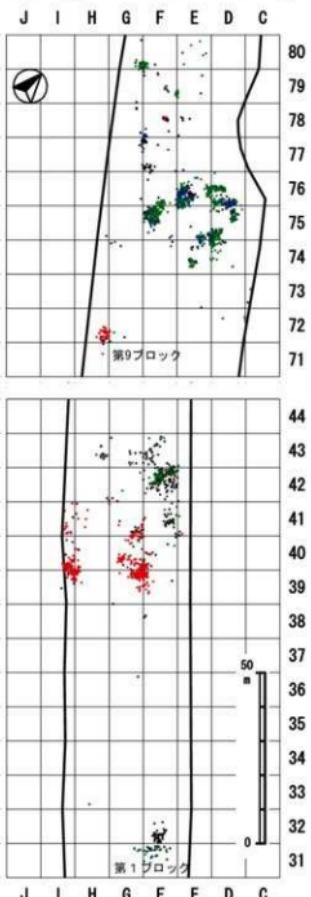
##### 細石刃核 (第19・20図29~43)

29は背面と両側面の一部に自然面が残る黒曜石の細角礫を使用したものである。打面は後方に傾斜しており、打面調整が顕著に施されている。背面には横方向から剥離が施されている。典型的な野岳・休場型細石刃核である。30も同様の細角礫を使用したものであり、後方に傾斜した打面には打面調整が施されている。

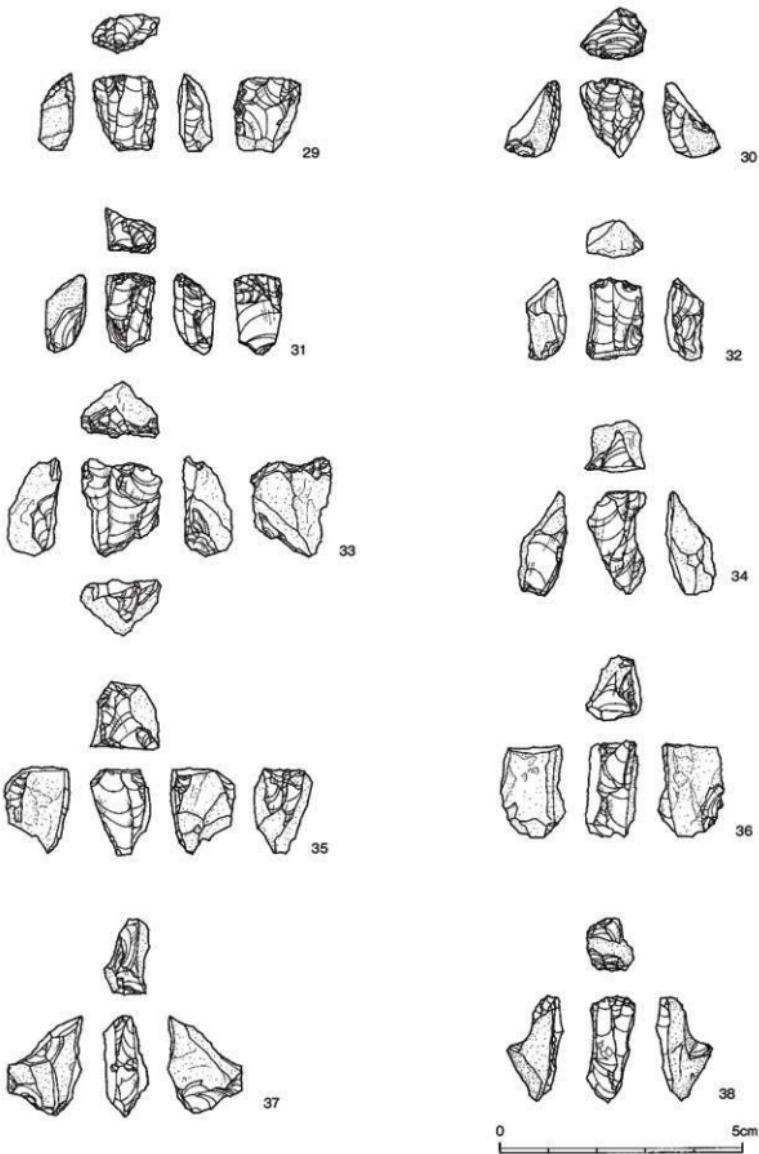
31は背面に広い剥離面がみられることから、細角礫を分割したものを素材としたものであろう。32は自然面をそのまま打面としたものであり、打面と作業面の角度は他とはほぼ共通した鋭角である。

33~39はもとの黒曜石細角礫の形状がよく理解できるもので33・34は比較的広い面を作業面にし、35~38は細角礫の小口部を作業面としている。40は細角礫の分割面を打面にしたものである。42は打面を側面方向からの細かい調整を施している。39は桑ノ木津留と分析された。

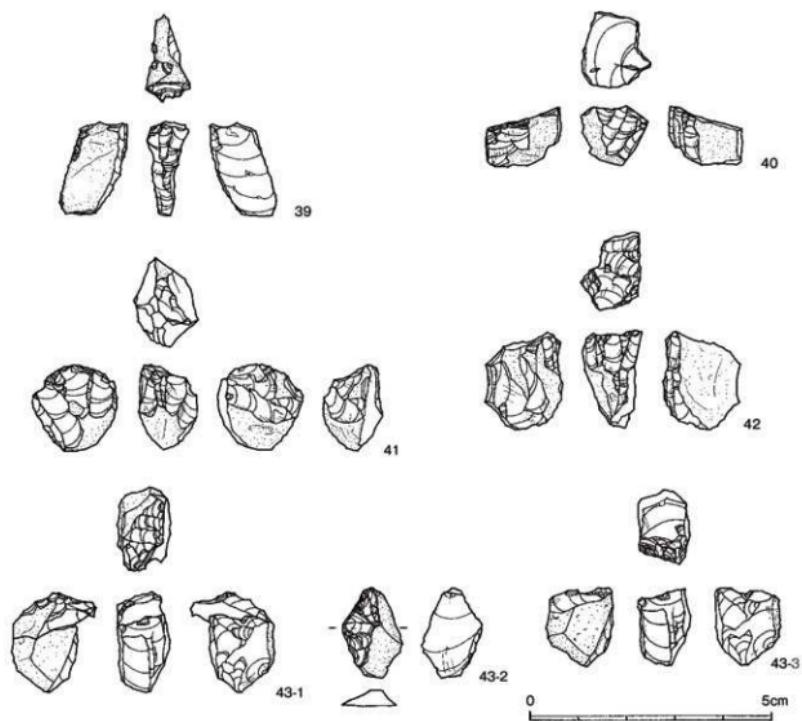
43は接合資料であり、打面は側面方向からの細かい調整をした後に作業面方向から剥離し平坦な打面を形成している。その後、細石刃剥離に先立ち、打面調整を顕著に行っている。



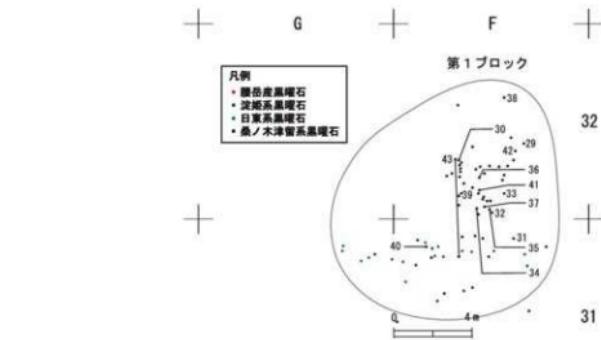
第18図 第Ⅲ文化層の石器群位置図  
(凡例は第21図に記載)



第19図 第Ⅲ文化層 第1ブロック出土石器(1)



第20図 第III文化層 第1ブロック出土石器(2)



第21図 第III文化層 第1ブロック石器出土分布図

## 第2～8ブロック群

E～I・39～40区にかけては、7ヶ所の石器群集中ブロックが隣接して検出されており、視覚的に第2～8ブロック群と認識することができるが、このうち第8ブロックは土器片が主体となっている。そして、ブロック群としているが、その各個別ブロックの内容は、細石刃核石器群のみのものや、一部土器片が出土する第3ブロック、また石礫が含まれる第6ブロック、あるいは小型ナイフが主体となる第7ブロックなど多様であることから、位置的に近接しているものの形成時期に関しては同一ではなく、異なる時期と考えられる。(第28図参照)

## 第2ブロック

H・I・39・40区に径約10×5mの範囲に分布域を有する。この中に径約2m程度の極めて遺物が集中している部分が2ヶ所存在している。多数の細石刃のほか細石刃核が出土した。ここでの石材は腰岳産黒曜石が主体であることが特徴のことと言える。

### 細石刃核接合資料（第22図44・45）

44は楔形細石刃核と打面再生剥片の接合資料である。44-1は接合状況であり、両面加工のプランクが使用され、打面再生剥片の正面部には作業面の痕が認められる。44-2の打面再生剥片は作業面方向からみて左側面方向から剥離されている。44-3は最終形態である。石材は腰岳産黒曜石が使用されている。

45も腰岳産黒曜石を使用した楔形細石刃核の接合資料である。45-1はその全体接合状況であり比較的大型の剥片が素材となっている。45-2はプランク形成の段階で剥離されたものであり、縁辺には二次加工が施されている。45-3は打面形成削片が接合した状況で、45-4は削片であり、作業面方向から剥離されている。細石刃剥離に先立ち45-5にみられるように打面調整は顕著に施されている。これらは黒曜石分析の結果まちがいなく腰岳産と判定された。

### 細石刃核の破片（第22図46）

46は細石刃剥離に際して、ヒンジフラクチャーが生じたものである。

### ファースト・スボール（第22図47）

47は断面三角形を呈し、稜上に丁寧な二次加工が施されていることから、プランク形成を伴う楔形細石刃核から剥離されたものであることが理解される。

### 削片と削片利用の彫器（第23図48）

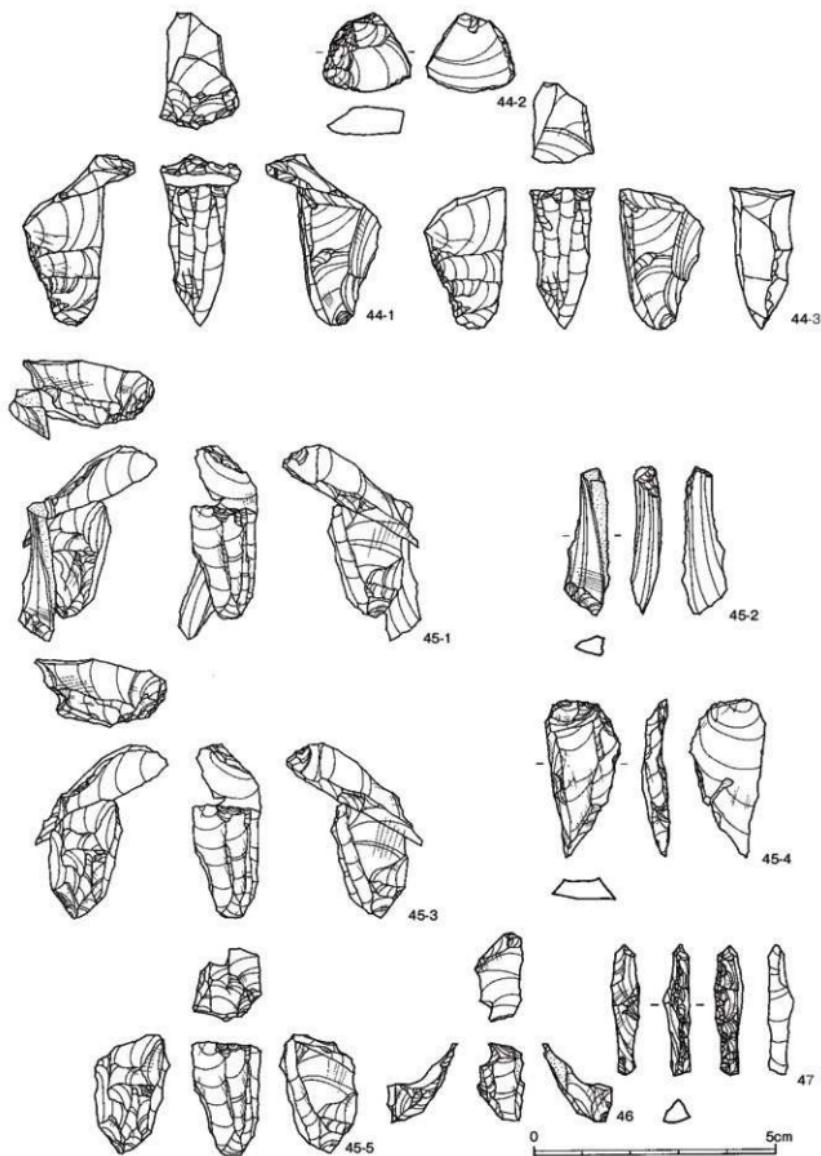
48-1は削片の接合資料であり、作業面方向から削片が剥離される以前の側面からの打面整形剥片と削片が接合したものである。削片の背面には側面からの連続した剥離痕が残っている。そして48-2は削片の打面近くに明瞭な植状の二次加工が認められる彫器である。このような彫器は唐津地域では多く出土している。石材は腰岳産黒曜石である。

### 削器（第23図49）

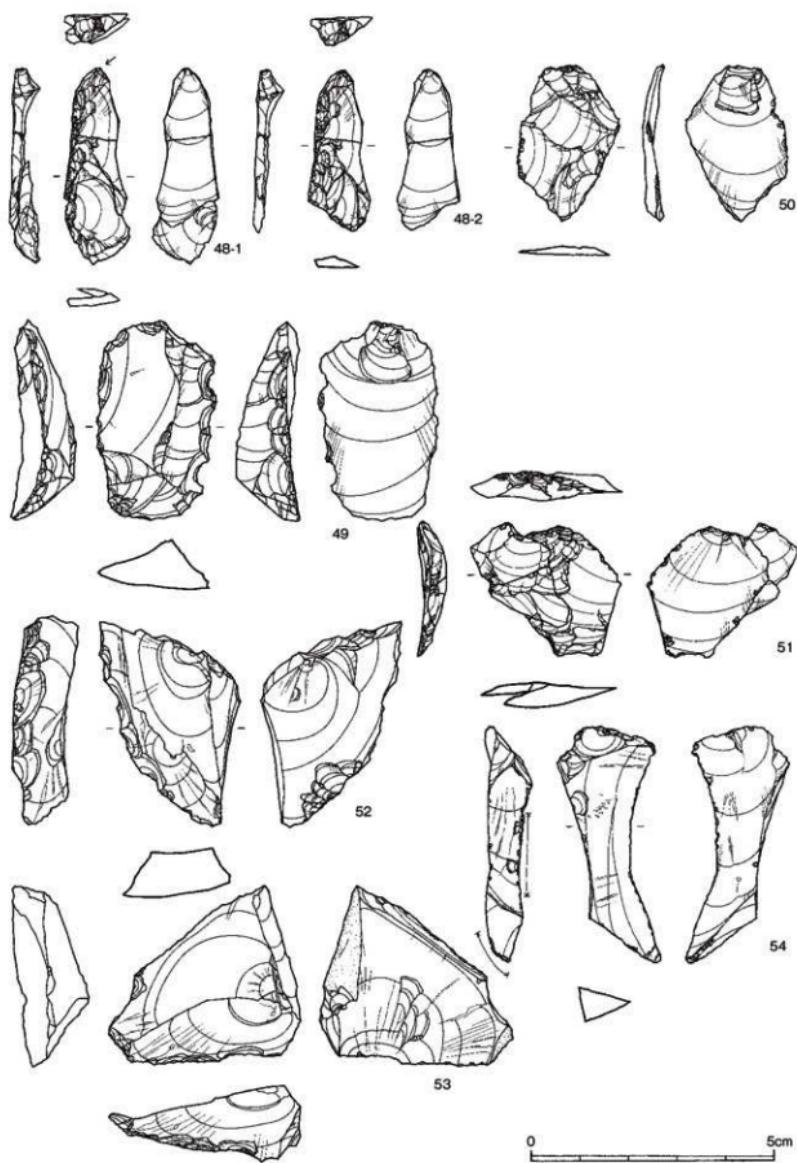
49は継長剥片を利用し、両側縁に二次加工を施して刃部としたものである。刃部の使用痕は著しく、また腹面にも使用による痕跡が顕著に残っている。

### 使用痕剥片（第23図50・51）

50・51はいずれも腰岳産黒曜石製であり、共通して打面がうすいことから鹿角による剥片で、プランク形成時に剥離されたものと考えられる。縁辺の一部に使用痕が認められた。



第22図 第Ⅲ文化層 第2ブロック出土石器(1)



第23図 第III文化層 第2, 3ブロック出土石器

### 第3ブロック

H・I-41区付近で第2ブロックの北側に隣接している。出土遺物数は多くなく、点在している状況であるが、土器片も出土している。

#### スクレイバー（第23図52・53）

52は腰岳産黒曜石製の幅広剥片を使用し、鋭利な縁辺に比較的丁寧な二次加工を施して刃部としたものである。53も剥片の一部に二次加工が施されたものである。53は黒曜石分析を行った。

#### 使用痕剥片（第23図54）

54は縦長状剥片の縁辺の一部及び、剥片の末端に使用痕が認められるものである。石材は腰岳産黒曜石である。

### 第4ブロック

F・G-39・40区に径約 $14 \times 10$ mの楕円形の範囲に分布している。第2ブロックと同様に、使用されている石材では腰岳産黒曜石が主体となっている。器種としては細石刃・細石刃核、使用痕剥片などが多い。

#### 細石刃核（第24図55～58）

いずれも漆黒色で良質な腰岳産黒曜石を使用したものである。側面に平坦面が残っていることから素材は剥片であり、また縁辺には平坦なプランク形成の剥離がみられる。正面形はV字形を呈し楔形となり、打面は作業面方向からの削片剥離によって形成されており、後方に傾斜する特徴をもつ。55は背面に自然面が残存し、打面調整が顕著である。56は削片剥離面が背面となっている。57は比較的うすく、削片剥離後もその面から石核整形を施している。58も腰岳産黒曜石の剥片を素材としたものであり、二次加工を施した部分を背縁としている。打面は作業面方向からの削片剥離により形成し、その後に打面調整を行いながら細石刃を剥離している。

#### ファースト・スポール（第24図59～61）

いずれも断面三角形を呈し、片側面には稜上からの丁寧な二次加工が連続して施されており、細石刃核に剥離されたものであることから、細石刃核から剥離された最初の剥片と考えられる。形状からプランク形成を施した楔形細石刃核から剥離されたことが理解される。全て腰岳産黒曜石製。

#### 使用痕剥片（第24図62～第25図66）

全て腰岳産黒曜石と考えられる良質なものであり、剥片の鋭い縁辺の一部に使用痕が観察される。63は接合資料である。65は黒曜石分析を行った。

#### 石核（第25図67）

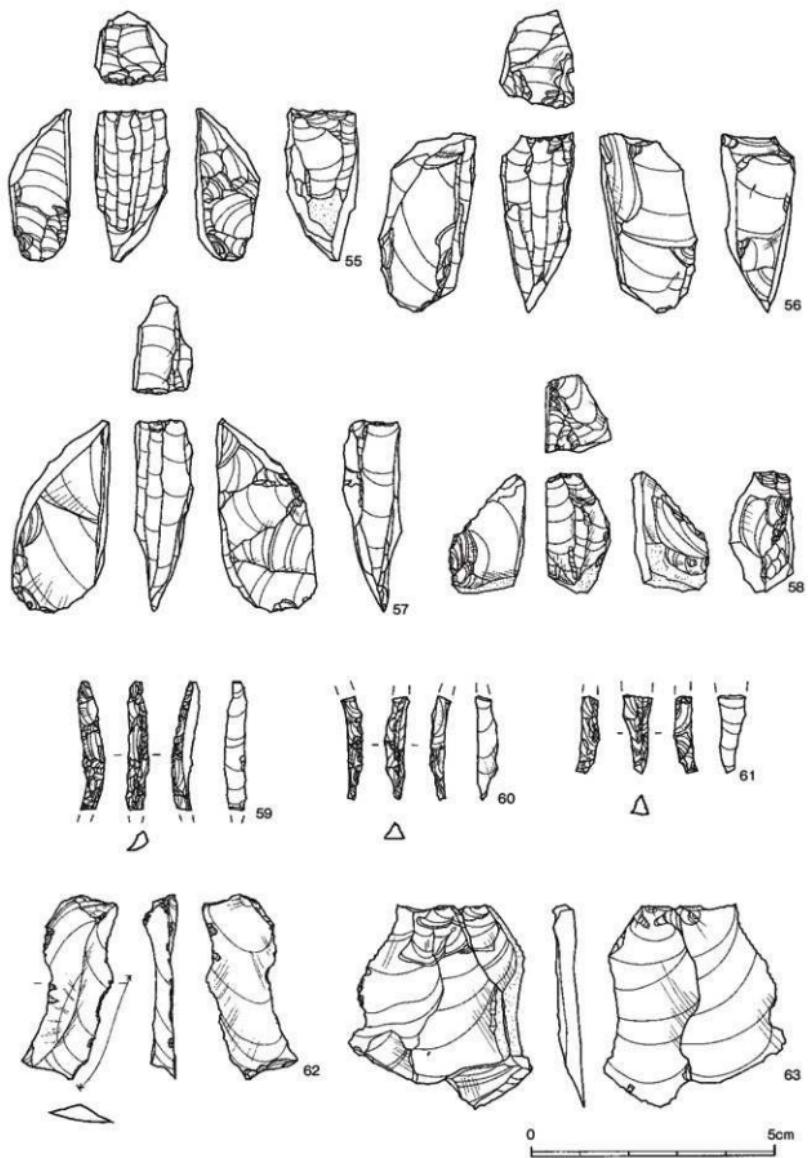
67は不純物の多い日東産黒曜石を石材とするもので、平坦な主剥離面を打面にして、小型の剥片を剥離している石核である。

### 第5ブロック

第4ブロックの北側に位置しており、遺物は多くない。径約 $8 \times 4$ mの分布域をもつ。腰岳産黒曜石の多数の細石刃が主体である。細石刃については後で説明する。

#### 削器（第25図68）

68は背面に自然面が残る剥片の縁辺に二次加工を施して刃部としたものである。石材は腰岳産黒曜石と考えられる。



第24図 第Ⅲ文化層 第4 ブロック出土石器(1)



第25図 第III文化層 第4, 5, 6 ブロック出土石器

## 第6ブロック

E・F・41区に分布し、径約11×5mの楕円形の範囲に広がる。遺物数は多くないものの、他と異なり石器が2点出土している。出土した石材は桑ノ木津留系黒曜石が主体である。

### ナイフ形石器（第25図69）

69は小型の縦長剥片を素材とし、片側縁に丁寧なプランティングを施したものである。基部を欠損している。

### 細石刃核（第25図70）

70は風化が著しい特徴を有する上牛鼻産黒曜石を石材とするもので、かなり小型の細石刃核である。打面は後方に傾斜し、側面方向からの調整剥離が行われている。

### 石鎌（第25図71・72）

71は頁岩製で、小型三角形鎌である。基部はわずかに凹み、両面とも丁寧な押圧剥離により整形されている。72は桑ノ木津留系黒曜石を石材とするものであり、先端部は欠損している。衝撃剥離による欠損であることから使用によるものであろう。

### 小型縦長剥片（第25図73）

打面は三角形を呈し、幅厚であることから押圧剥離ではなくソフトハンマーにより剥離されたもので、小型ナイフ形石器の素材剥片と考えられる。

## 第7ブロック

F・42区からG・43区にかけて比較的広い分布域をもち、器種では小型ナイフ形石器が最も多く、石材では他のブロックと異なり上牛鼻産黒曜石が主体的な石材となっている。

### ナイフ形石器（第26図74～78）

74は水晶製の縦長剥片を素材とし、基部の片側と背縁に細かいプランティングを施したものである。先端は尖らしている。75は頁岩製で、縦長剥片の打面はそのまま残して両側縁に二次加工を施し基部とし、また先端近くもプランティングにより尖らしている。76・78は欠損品であり、77は細かい二次加工を施したものである。

### 削器（第26図79）

79は剥片の縁辺に二次加工を施して刃部としたもの。80は打面部を折断した使用痕剥片とした。

### 細石刃核（第26図81～84）

81は剥片利用で後方に傾斜した打面に打面調整が著しい。82は角柱形、83は細碟使用、84は厚手の剥片を素材としたものである。

### 石核（第27図85）

85は良質な珪質頁岩製の縦長剥片を利用した石核である。主要剥離面側に片側面からののみでなく打面側や反対の先端部方向からも求心的に剥離している。

### ブロック外の石器

### 石鎌（第27図86）

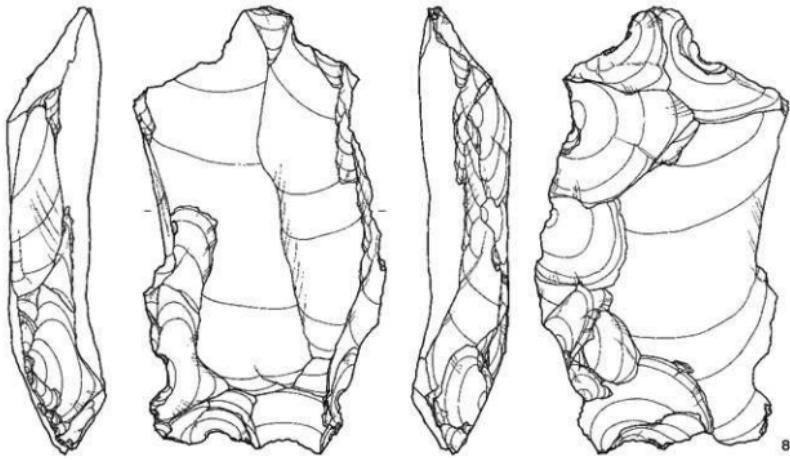
86は3・5・7・8ブロックの中間あたりで出土したもので、黒曜石製である。

### 使用痕剥片（第27図87）

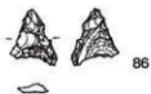
87は頁岩製の縦長剥片であり、縁辺には微細な使用痕が認められる。



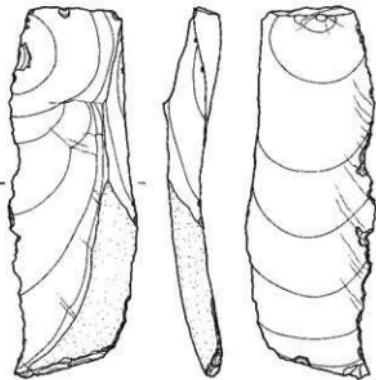
第26図 第Ⅲ文化層 第7ブロック出土石器(1)



85



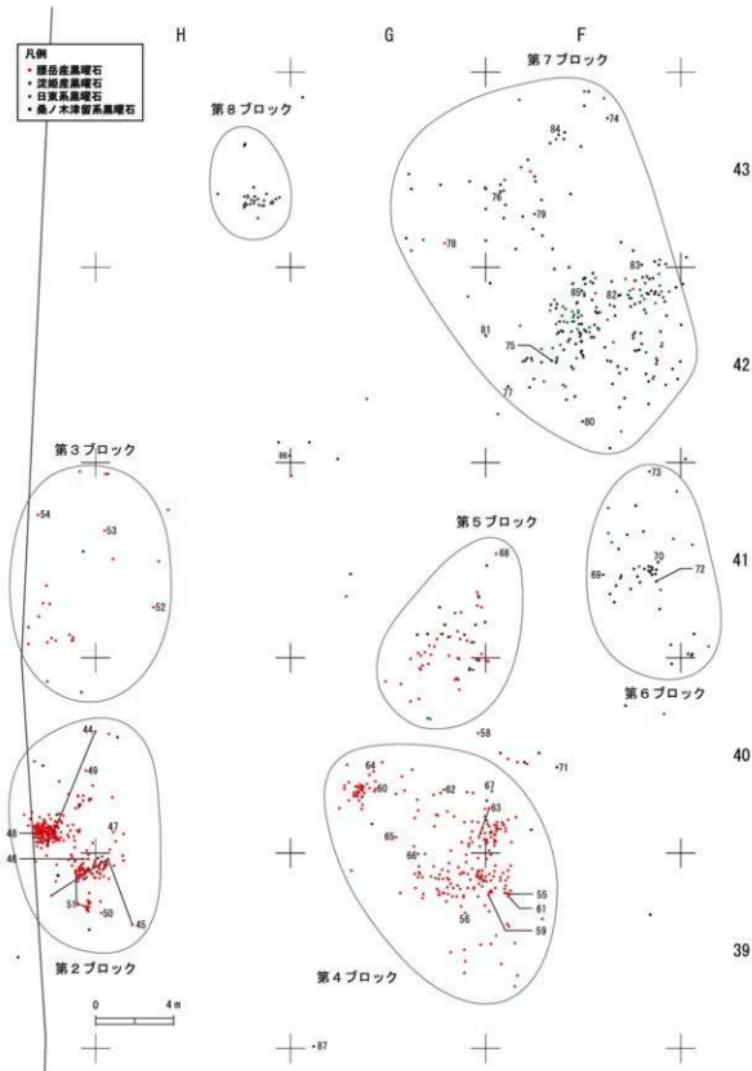
86



87



第27図 第Ⅲ文化層 第7ブロック出土石器(2)



第28図 第III文化層 第2～8ブロック石器群出土分布図

## 第9ブロック

H-72区付近で直径約6mの範囲に分布域がみられた。出土した石器は細石刃・細石刃核などであり、それらの石材は腰岳産黒曜石が主体であった。(第18図参照)

### 細石刃核 (第29図88・89)

88は典型的な野岳・休場型を呈するものであり、打面は後方に傾斜し打面調整が顕著なものである。作業面幅は比較的広く、左側面は背面からの整形剥離が行われており、背面には側面方向からの整形剥離が施されている。石材は良質な腰岳産黒曜石である。

89は典型的な楔形を呈し、打面は作業面方向からの削片剥離により形成されている。側面には周縁からの整形剥離が施されており、正面形はV字形となる。石材は腰岳産黒曜石である。

### 削片もしくはファースト・スポール (第29図90)

90は片側面に連続した剥離が施されており、プランク整形が施された楔形細石刃核から最初に剥離されたもので、削片もしくはファースト・スポールと考えられるものである。

### 使用痕剥片 (第29図91)

91は細石刃核の調整剥片と考えられるもので、2点が接合したものである。剥片の末端には細かい使用痕が認められる。90と同様腰岳産黒曜石が使用されている。

## 第10～20ブロック群

これらは各々10m以内に近接しており、視覚的にはブロック群として把握できる。しかし各々のブロックは主体となる石材に違いも認められ、時期などは検討する必要があろう。(第43図参照)

### 第10ブロック

E-74区に径約3m程度の範囲に分布するものである。剥片や細片が主体となっている。石材では日東産と推定される気泡の多い黒曜石が主である。

### 第11ブロック

D・E-74・75区で径約12×8mの楕円形に分布している。細石刃・細石刃核・スクレイバーなどがみられ、特に日東産と考えられる石材が主体となっている。

### 細石刃核 (第30図92・93)

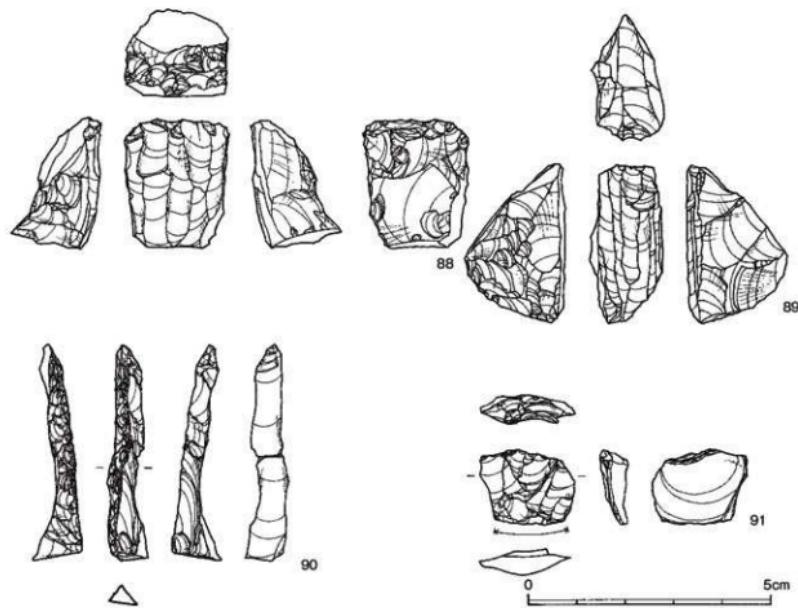
92は黒曜石細角礫を使用したもので、打面形成後に一つの面を作業面としている。93も同様の細角礫を使用したもので、正面の作業面がステップしており、その後の上面に作業面を転移している。黒曜石は黒色良質でいわゆる「霧島産」に近い。

### 尖頭状の搔器 (第30図94)

94は比較的厚手で幅広の剥片を素材とし、主要剥離面から背面に二次加工を施し、全体を尖頭状に仕上げたものである。このような形態から三稜尖頭器に類似するが、両側縁の刃部には細かい使用痕が認められる。石材は日東産黒曜石と考えられる。

### その他の搔器 (第30図95～第32図100)

95は角礫を使用したものであり、最も薄い縁辺に、両面から二次加工を施し刃部としている。良質の桑ノ木津留系黒曜石製である。96は幅広剥片の一端に急角度の二次加工を施し刃部としたものである。97・98も同様の剥片を使用し、縁辺の一部に二次加工を施して刃部としたものである。いずれも石材は気泡が多い特徴があり日東産黒曜石と考えられる。97は分析で日東系と判定された。



第29図 第III文化層 第9ブロック出土石器

99・100はそれぞれ接合資料である。100は3点が接合したもので、先に剥離された100-2の末端には細かい二次加工が施され、最後に剥離された幅広で厚みのある剥片100-3は丁寧な二次加工が施されて搔器とされている。

#### 剥片の接合資料（第32図101）

101-1は剥片4点の接合資料である。桑ノ木津留系黒曜石の角礫を使用したもので、101-2の鋭い縁辺には使用痕が認められる。

#### 使用痕剥片（第32図102）

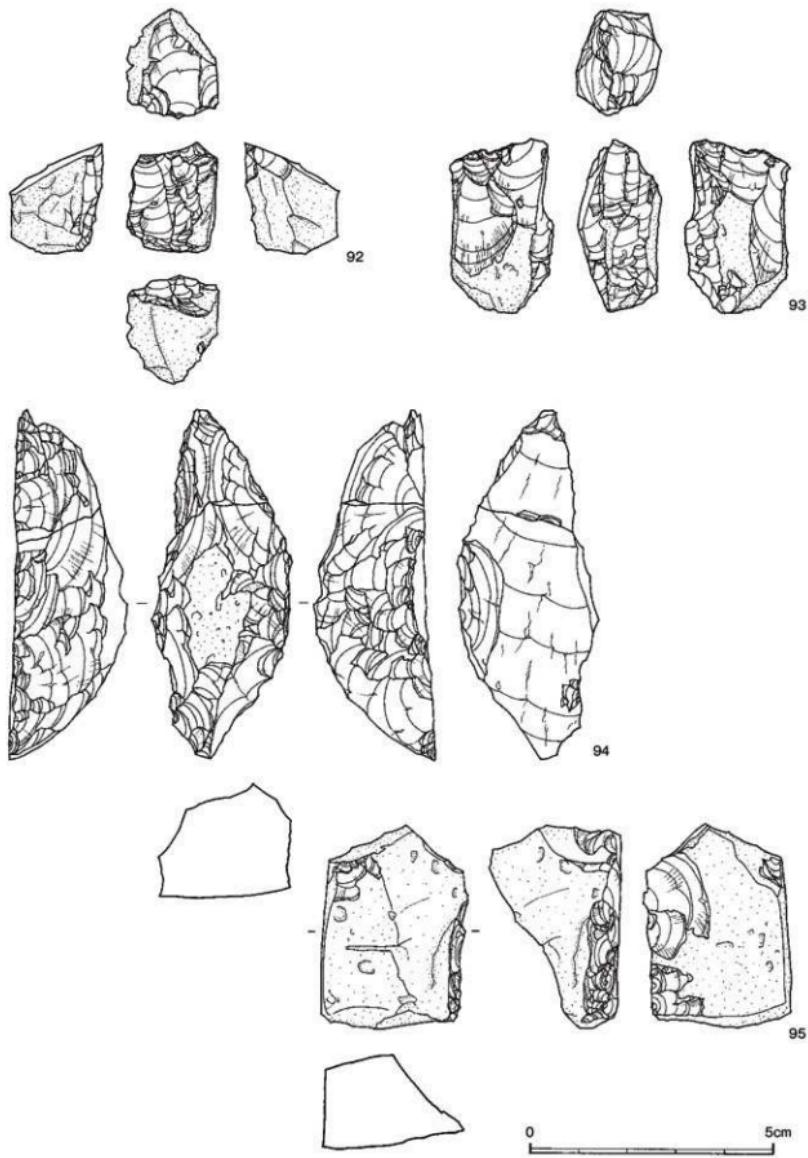
102は淀姫産黒曜石製の小型縦長剥片を素材としたもので剥片の末端には細かい使用痕が認められる。

#### 第12ブロック

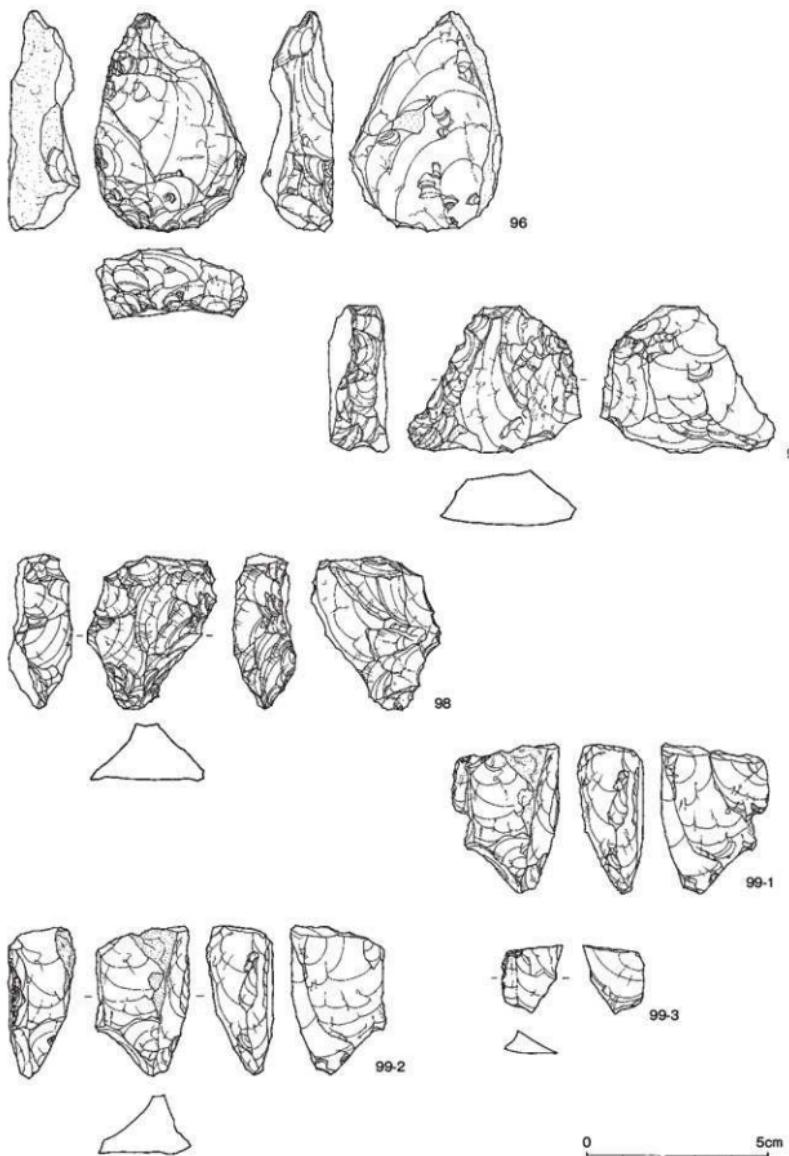
D-75・76区に分布域を有しており、径約 $14 \times 8$ mの橢円形の範囲に広がる。出土している器種は細石刃とスクレイバーなどであり、石材はスクレイバーに使用されている日東産と推定される黒曜石が主体である。なお、中心部に淀姫系黒曜石の集中部が1か所みられる。

#### スクレイバー（第33図103～108）

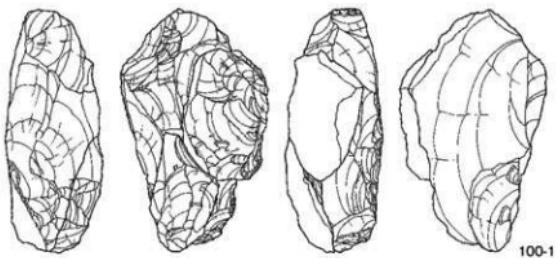
103はうすい剥片の両側縁に細かい二次加工を施したものである。104は不定形剥片の縁辺にそれぞれ腹面や背面に二次加工を施したものである。これは風化の特徴から淀姫産黒曜石と考えられ



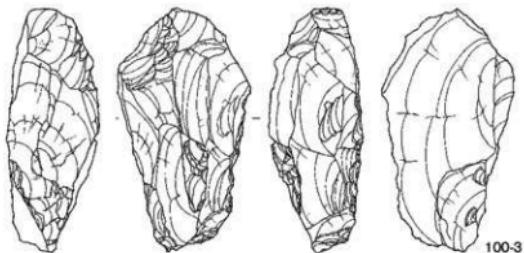
第30図 第Ⅲ文化層 第11ブロック出土石器(1)



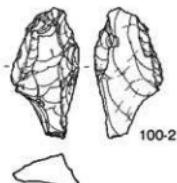
第31図 第Ⅲ文化層 第11ブロック出土石器(2)



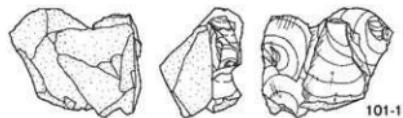
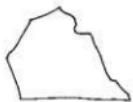
100-1



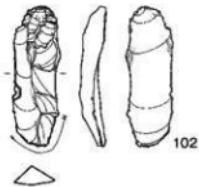
100-3



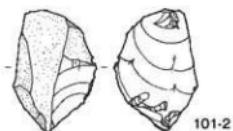
100-2



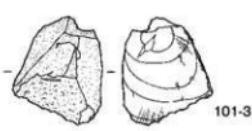
101-1



102



101-2



101-3



第32図 第Ⅲ文化層 第11ブロック出土石器(3)

る。105は幅広剥片の打面側に丁寧な二次加工を施して刃部としたものである。欠損後に再加工を施している。106は平坦な剥離面から、107は平坦な自然面から比較的粗い剥離により急角度の刃部を施したものである。108も部分的に二次加工による刃部が認められるが刃部の大部分は欠損している。石材はいずれも日東産黒曜石と思われる。

#### 接合資料（第33図109）

109は比較的厚手の剥片の接合資料である。2点の小片が剥落状に接合し、残存部には使用痕も認められる。

#### 縦長剥片（第33図110・111）

110は桑ノ木津留系黒曜石製の小型縦長剥片で、打面と先端部が折断されたものである。111は日東産黒曜石製と考えられるものである。

#### 第13ブロック

E-76区付近を中心とするもので、径約8×6mの範囲に分布していた。器種は細石刃・細石刃核・スクレイバーなどが主体であった。石材としては、淀姫系黒曜石と考えられるものが最も多く、次が、桑ノ木津留系黒曜石及び日東系黒曜石であった。

#### 細石刃核（第34図112～第35図117）

112は平坦な自然面が残る板状の剥片を素材とし、打面から背面にかけて側面からの整形剥離を行い、小口部分を作業面にしたものである。特徴的な風化面から淀姫系黒曜石製と考えられる。113も同質の黒曜石を石材としたものであり、周縁からの整形剥離により正面形をV字形に整えプランク整形をした楔形細石刃核である。

114は板状の黒曜石礫を使用し、側面方向からの剥離により傾斜した打面をつくり、小口部分を作業面にしたものである。同一作業面で下端からも剥いでいる。115は周縁からの剥離によりプランク形成をしたもので、114と同様に打面は左側面に傾斜している。116は背面に自然面が残る剥片を使用したもので、打面は側面方向からの剥離により形成している。分析で淀姫系と判定された。

117も自然面が残る剥片を使用したもので、打面転移をしていることにより作業面は前後に認められる。石材は114・115・117は桑ノ木津留系黒曜石と分析された。

#### 作業面再生剥片（第35図118）

118は周縁からプランク整形を施した細石刃核のステップした作業面を取り除くため、側面から剥離したものである。

#### スクレイバー（第35図119・120）

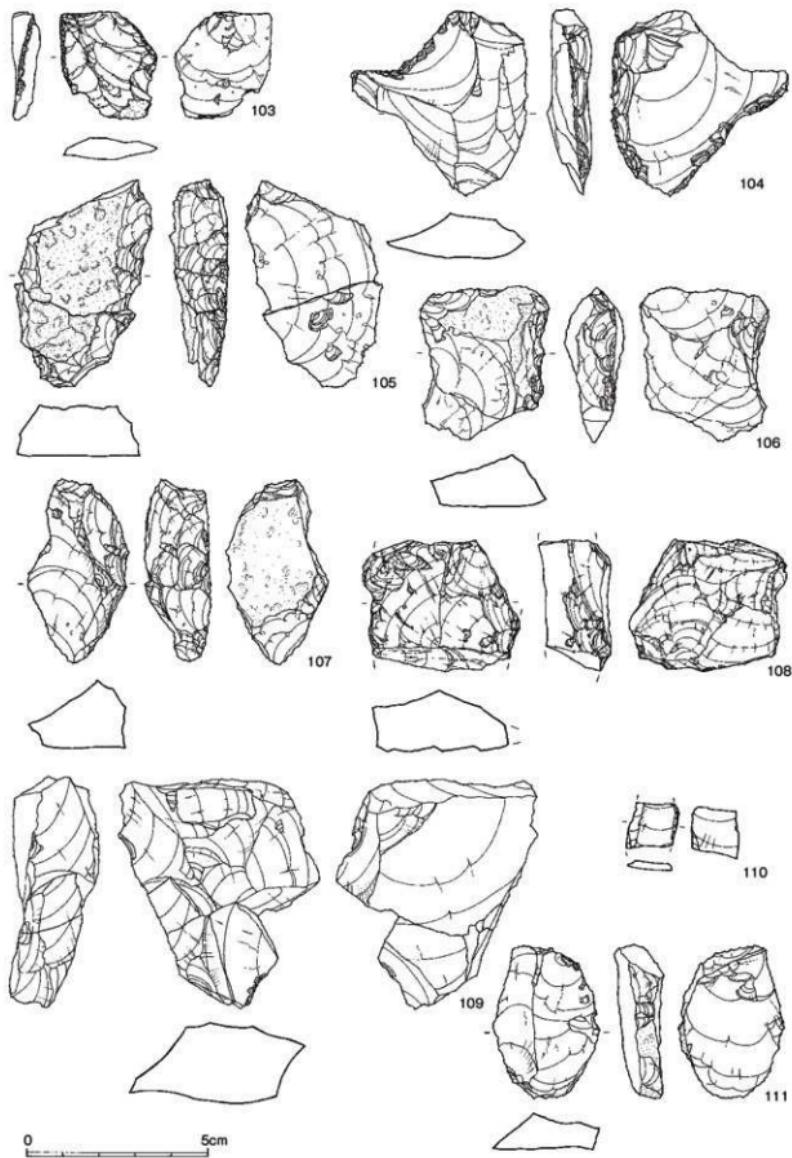
119は比較的厚みのある剥片の縁辺に二次加工を施して刃部としたもの。120は接合資料であり幅広剥片の末端に急角度の丁寧な二次加工を施して刃部とした搔器であるが、図の右側が欠損したことで、左側の刃部を再加工したものである。石材はいずれも日東産黒曜石と思われる。

#### 使用痕剥片（第35図121・122）

121は剥片の末端に使用痕が認められるものである。122はうすい剥片の末端を折断しており、側縁に使用痕が観察されるものである。

#### 接合資料（第36図123～第37図126）

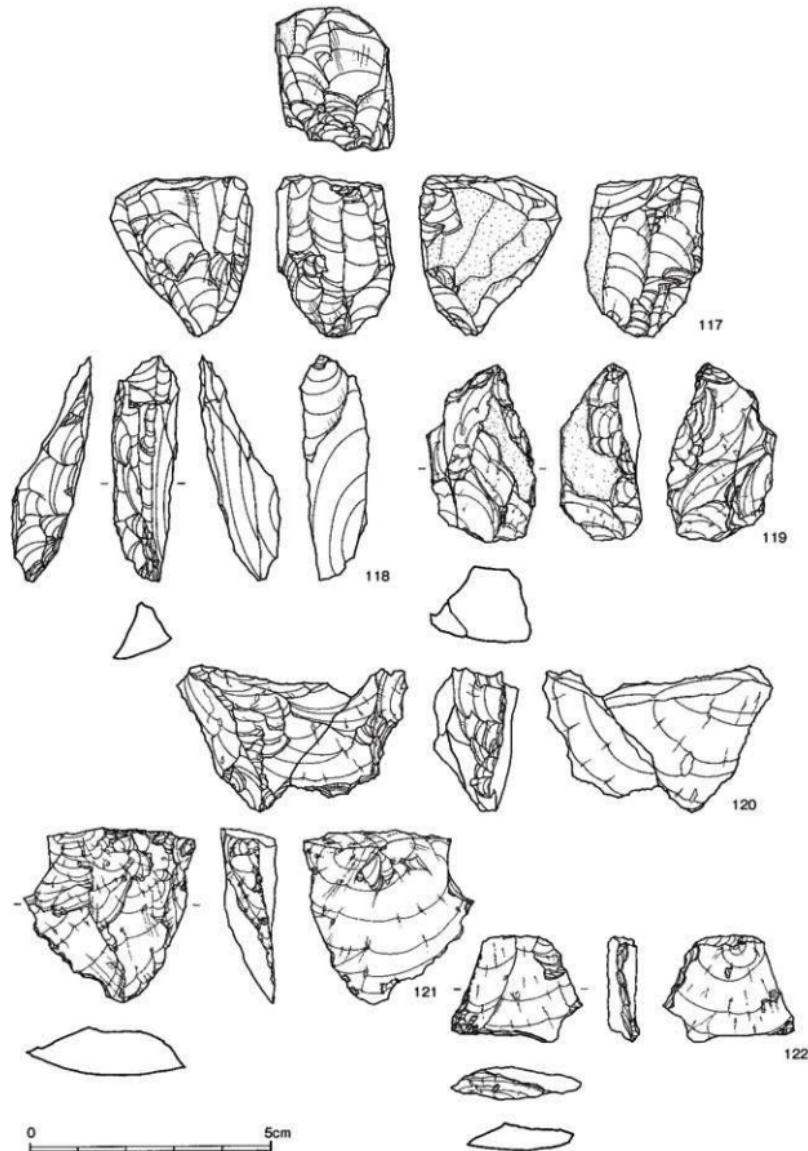
123は比較的大型の剥片を素材にした石核と搔器の接合資料である。切り合い関係から、先に搔



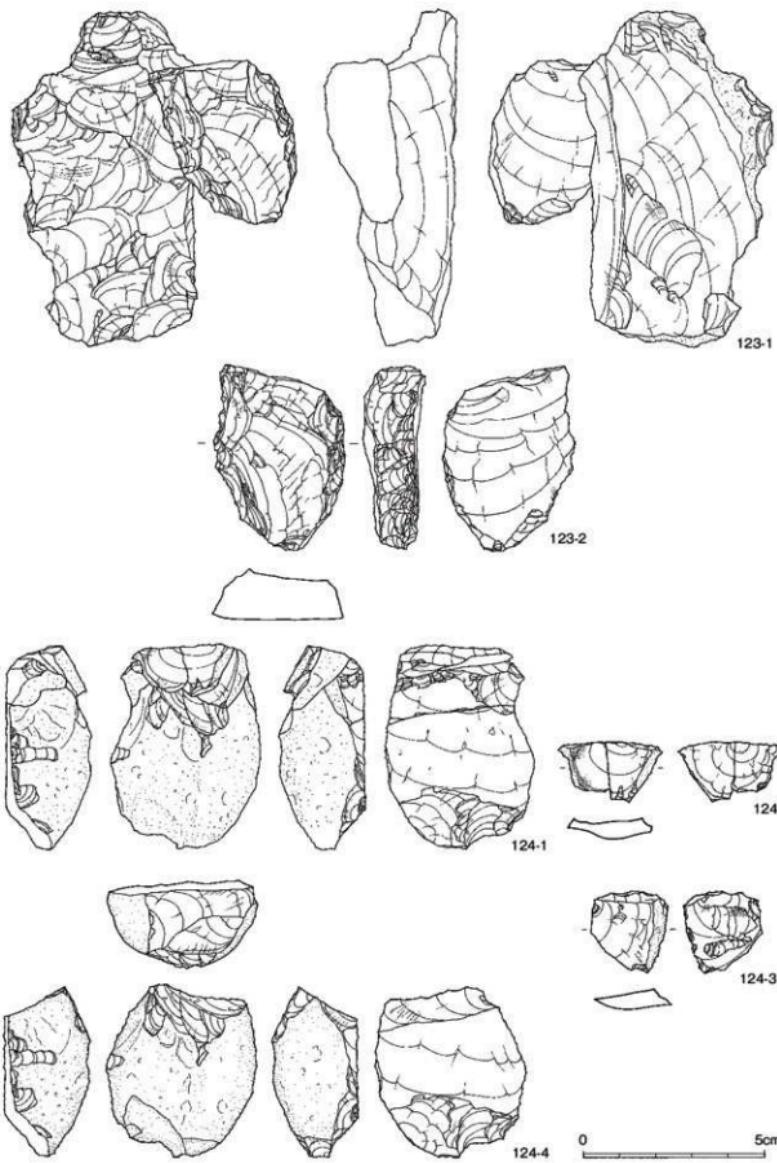
第33図 第Ⅲ文化層 第12ブロック出土石器



第34図 第Ⅲ文化層 第13ブロック出土石器(1)



第35図 第Ⅲ文化層 第13ブロック出土石器(2)



第36図 第Ⅲ文化層 第13ブロック出土石器(3)

器とされる幅広剥片が剥離され、その後に大型の剥片が剥離されたと考えられる。大型の剥片は中央から二つに分割され、また周辺から小型の剥片が剥離されている。最初に剥離された幅広剥片は両側縁と末端に丁寧な二次加工が施されて搔器（123-2）とされている。この搔器の裏面はかなり摩滅しており、著しい使用が考えられる。

124は石核と剥片の接合資料である。黒曜石円盤を分割したものを使用し、一端から小型の剥片を連続して剥離している。反対側の端部も自然縫面を打面にして数回剥離している。その後に横方向から剥離して124-4となっている。石材は日東産黒曜石である。

125は桑ノ木津留系黒曜石剥片と搔器の接合資料である。125-1は全体接合で、125-2が周縁に急角度で丁寧な二次加工を施したラウンド・スクレイバーであり、その後に正面をヒンジさせて剥ぎ取り、再度刃部の再加工を行っているのが125-3である。左側は剥落している。

126は同様の石材を使用した剥片の接合資料である。

#### 第14 ブロッック

F-75区を中心として、径約8×6mの分布範囲をもつ。器種は細石刃・細石刃核・小型ナイフ形石器・スクレイバーなどであり、石材のなかでは日東産黒曜石が量的に最多となっている。

##### 細石刃核（第38図127～129）

127は板状の黒曜石を使用しており平坦な自然縫面を両側面とし、背面は片側面からの丁寧な剥離により整形している。打面は側面からの折断の後に、作業面からの打面調整も施されている。

128は細石刃核の接合資料である。128-1の全体接合状況から素材は小角縫であったことが理解できる。角縫の角の部分から小型の剥片が連続して剥離されており（128-4、128-3）、残存部が細石刃核となっている。石材は127と同様に桑ノ木津留系黒曜石と考えられる。

129は特徴的な風化状況より淀姫系黒曜石と考えられるもので、自然縫面を打面として、下縁は両面から整形して正面形をV字形にしている。打面調整が顕著に施されている。

##### ナイフ形石器（第38図130）

130は背縁に細かいプランティングを施したもので、下半部を欠損するもの小型である。

##### スクレイバー（第39図131～135）

131は幅広剥片の厚みがうすい左側縁に二次加工を施したもので、削器的な使用が想定される。また、右側の急角度の縁辺には著しい使用痕が認められ搔器的な使用が考えられる。

132・133は比較的厚みのある剥片を素材とし、粗い二次加工を施して急角度の刃部を形成した搔器である。132の裏面は使用のため摩滅している。133は欠損品である。

134は縁辺に使用痕の細かい剥離が認められるもので、135も二次加工や使用痕の剥離が認められるものである。135は粘板岩製である。

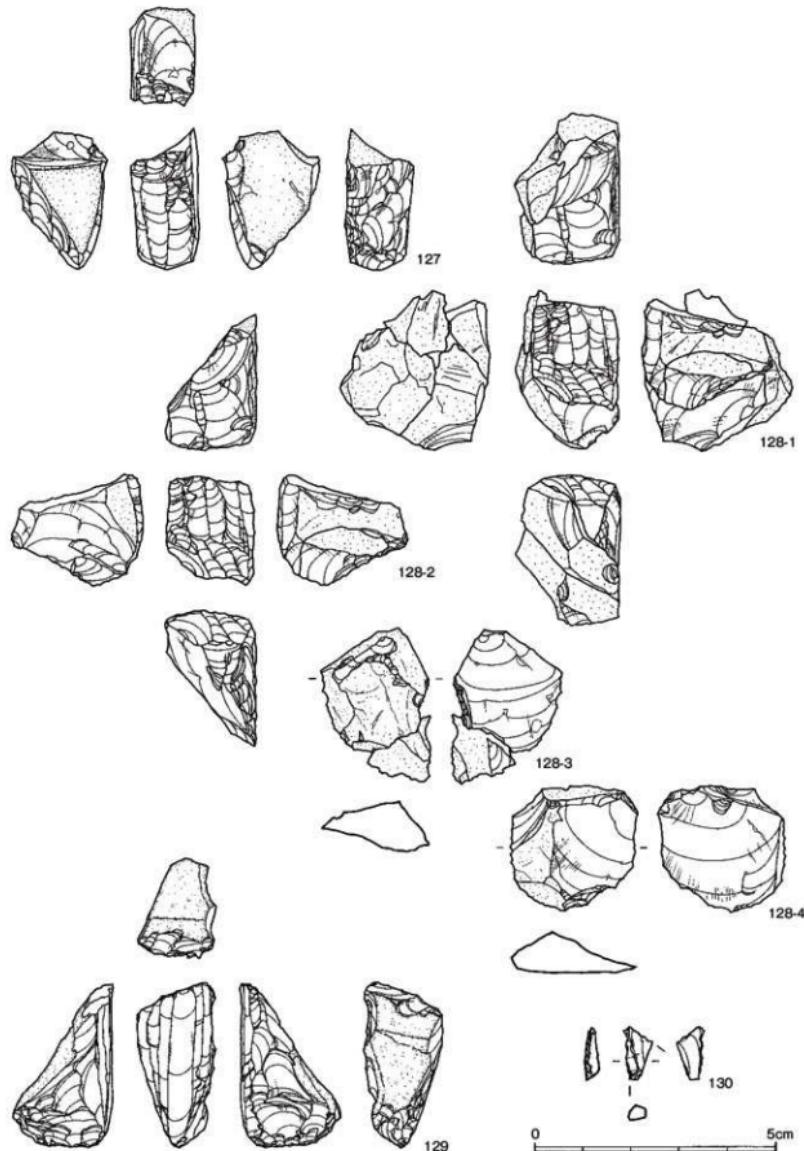
##### 接合資料（第40図136・137）

136は搔器と剥片の接合資料である。136-1が全体接合状況で、上端から剥片を剥いだものが136-2であり、剥離された剥片の縁辺にも細かい二次加工が施されている。136-2の段階で右側縁に刃部が形成されたと考えられる。次にまた上端から剥片剥離が行われ、刃部を再加したものが136-3である。なお、剥離された剥片の縁辺にも使用痕が認められる。

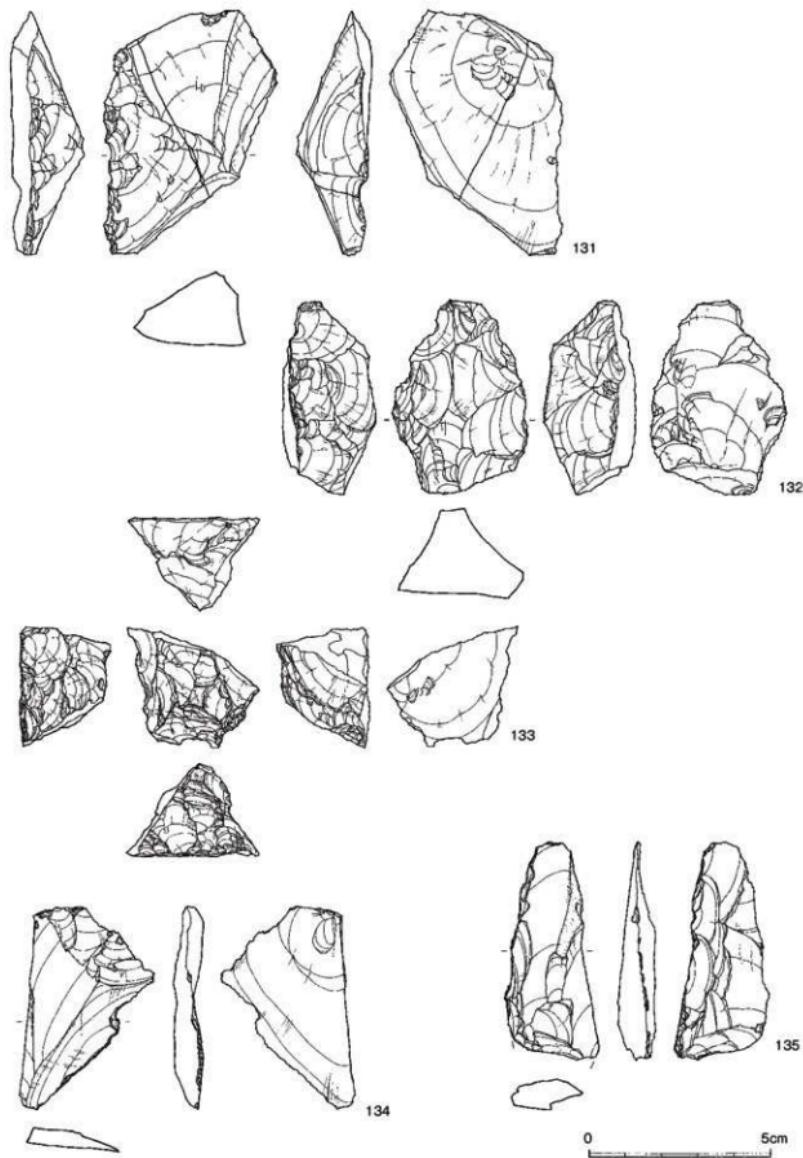
137はスクレイバーと剥片の接合資料である。137-2の側縁に細かい二次加工が認められる。



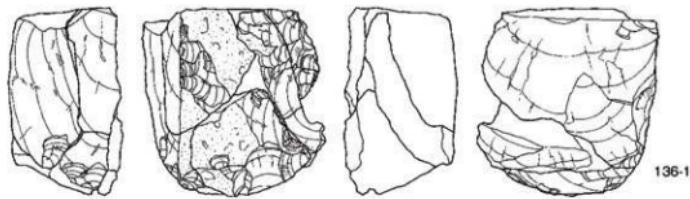
第37図 第Ⅲ文化層 第13ブロック出土石器(4)



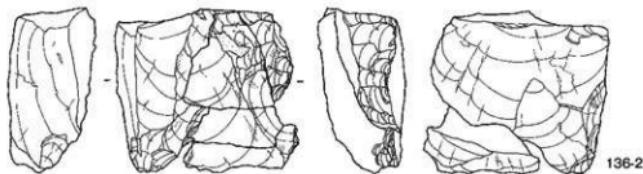
第38図 第Ⅲ文化層 第14ブロック出土石器(1)



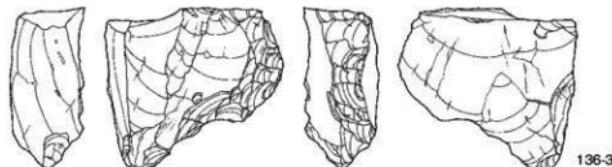
第39図 第Ⅲ文化層 第14ブロック出土石器(2)



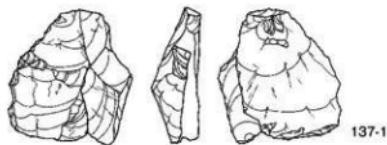
136-1



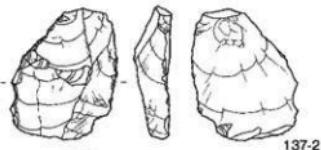
136-2



136-3



137-1



137-2



0

5cm

第40図 第Ⅲ文化層 第14ブロック出土石器(3)

## 第15ブロック

F-76・77区付近で、径約4m程度の範囲に分布域をもつものである。遺物数は多くなく、細石刃や細石刃核などが出土している。出土石材のほとんどが桑ノ木津留系黒曜石であった。

### 細石刃核（第41図138～141）

138は片面に自然礫面を残す小型剥片を素材とし、小口部分を作業面にしたものである。139は板状の剥片を素材として横方向からの剥離により打面を形成したものである。140も同様の剥片を使用しており、打面は折断により形成している。打面調整も行っている。

141は細石刃核の接合資料であり、141-1の接合状況により素材剥片は比較的大きく、それを腹面からの折断で分割したものであることがわかる。141-2の打面には打面調整が施されている。これらの石材は全て桑ノ木津留系黒曜石である。

## 第16ブロック

F・G-77・78区付近で約6×2mの範囲に分布している。出土した石器は細石刃・細石刃核などであり、それらの石材は桑ノ木津留系黒曜石が主体であったが、淀姫系黒曜石も認められた。

### 細石刃核（第41図142～144）

142・143はその特徴的な風化から淀姫系黒曜石と思われるもので、142は後方に傾斜する打面を有し、そこには打面調整が施されている。143はV字状の正面形を呈する楔形で、打面は作業面方向からの削片剥離により形成されている。

144は細石刃核の接合資料である。最も早い段階で打面の上のやや大きめの剥離が行われ、下端は折断されている。144-2の直前で右側面方向からの剥離で打面が形成されている。打面調整も顕著に行われている。石材は桑ノ木津留系黒曜石である。

## 第17ブロック

F-78区の中心部付近に径約2m程度の範囲に剥片や細片がやや集中していた。

## 第18ブロック

E・F-79区の境界付近に径約3×1m程度の広さに剥片や細片がやや集中していた。

## 第19ブロック

F-79区の中央付近に径約2m程度の範囲に土器片が集中していた部分がみられた。土器については縄文時代草創期の頃で取り扱った。

## 第20ブロック

F・G-80区付近で、径約4×4m程度の分布範囲を有し、細石刃核やスクレイバーなどが出土している。石材では日東産黒曜石が主体であった。

### 細石刃核（第42図145）

145は打面転移をしており、作業面は正面と右側面に2面認められ、それぞれ剥離角は異なる。

### スクレイバー（第42図146～148）

いずれも二次加工が認められるものである。

### ブロック外の石器（第42図149～154）

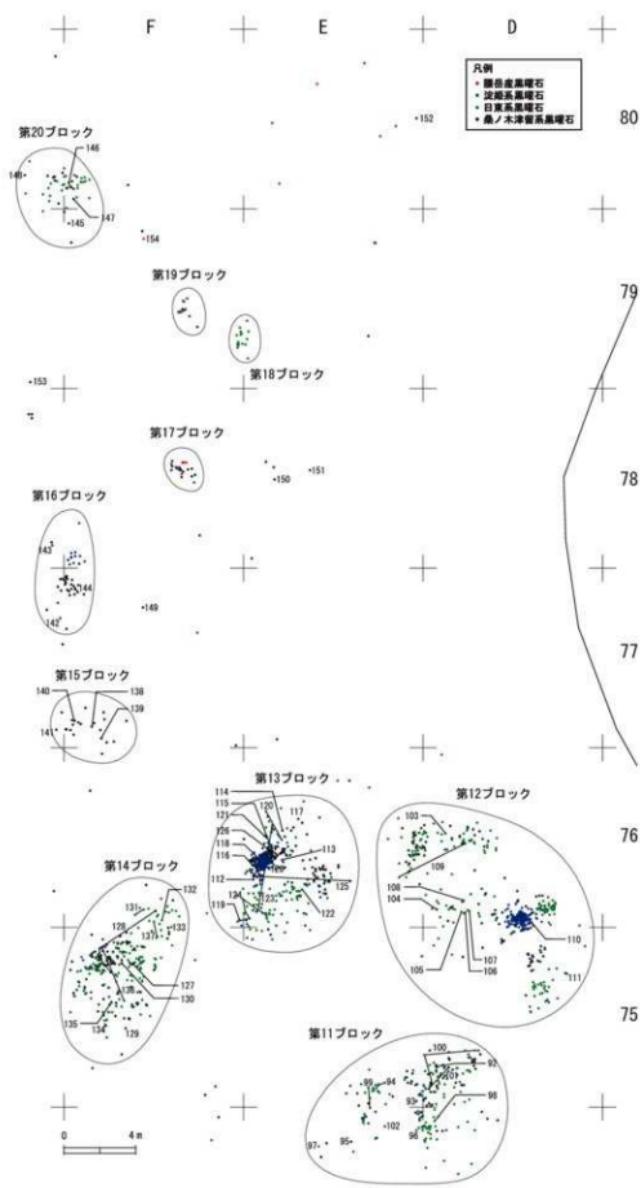
いずれも小型の細石刃核である。149は16ブロックに近い位置で、150・151は第17ブロックに近い位置で出土している。剥片素材や細礫を使用したものが認められ、153のみは水晶製である。



第41図 第III文化層 第15, 16ブロック出土石器



第42図 第Ⅲ文化層 第20ブロックほか出土石器



第43図 第III文化層 第11～20ブロック石器群出土分布図

### 細石刃について（第44図155～第49図419）

第1ブロックから第20ブロックまで、出土した細石刃は合計263点であった。基本的に、ブロックごとに頭部・中間部・尾部に区別して掲載した。出土分布は第50図と51図で示した。

細石刃の出土数は、第2ブロックが46点と最多であり、次が4ブロックの40点で、その次が第13・14ブロックの34点であった。細石刃核が最多の15点出土した第1ブロックの細石刃はわずか2点と少なかった。

各ブロックの細石刃と石材は下の表のとおりである。

ブロック	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
ob桑ノ木	2			5		5	14				8	17	15	21	14	2	1		1	1
ob腰岳		46	11	35	10				15		1	1								
ob淀姫											2	3	19	13						
ob上牛鼻							1													
合計	2	46	11	40	10	5	15		15		11	21	34	34	14	2	1		1	1

上の表のように細石刃の石材は、ブロック差により違いが明確であり、腰岳産黒曜石が主体の第2～5ブロックと、第9ブロックのほか、淀姫系黒曜石が主体となる第13ブロックがあり、そして在地産桑ノ木津留系黒曜石が主体の第1、6、7、12、14、15ブロックに分けられる。

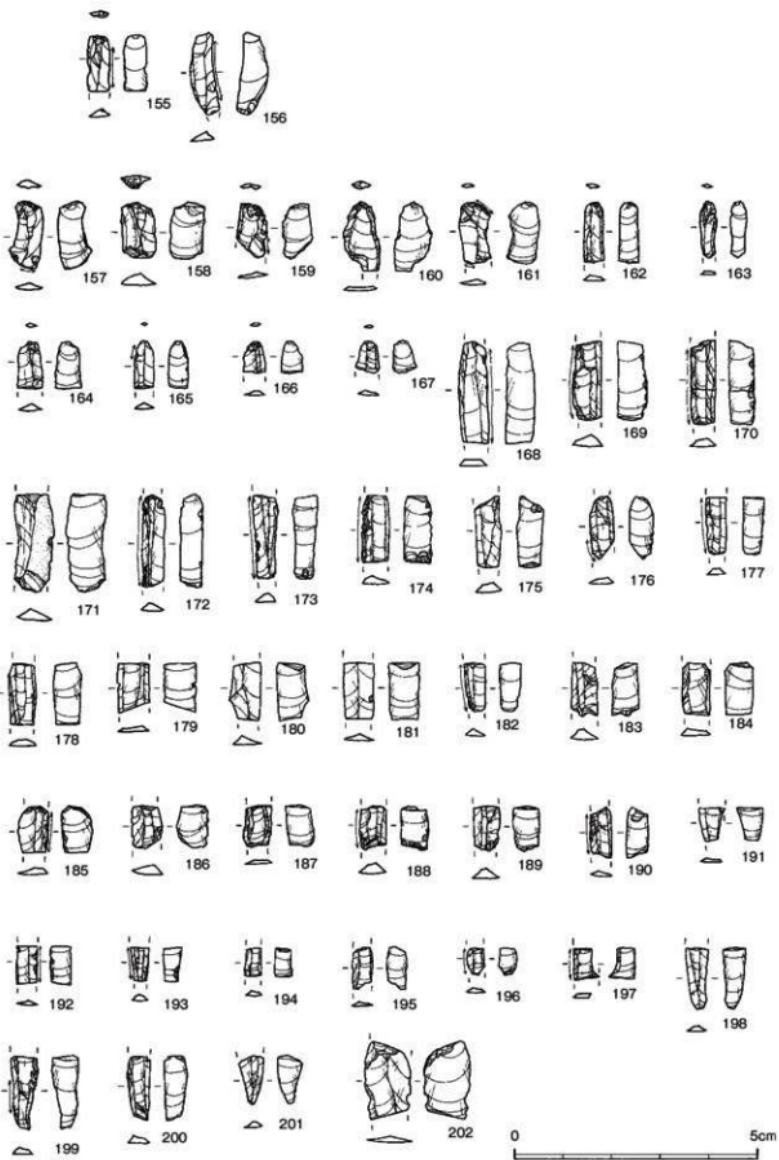
### 細石刃と使用痕（図版19参照）

出土した細石刃には、使用した痕跡と推定される連続した微細な剥離が縁辺に認められるものや、またその微細剥離の稜上などが磨滅しているもの、あるいはルーペなどで線状痕が観察されるものが認められている。このような細石刃の使用痕は、中間部のみでなく、頭部や尾部の細石刃にも認められるが、数的には中間部のものが多いようである。

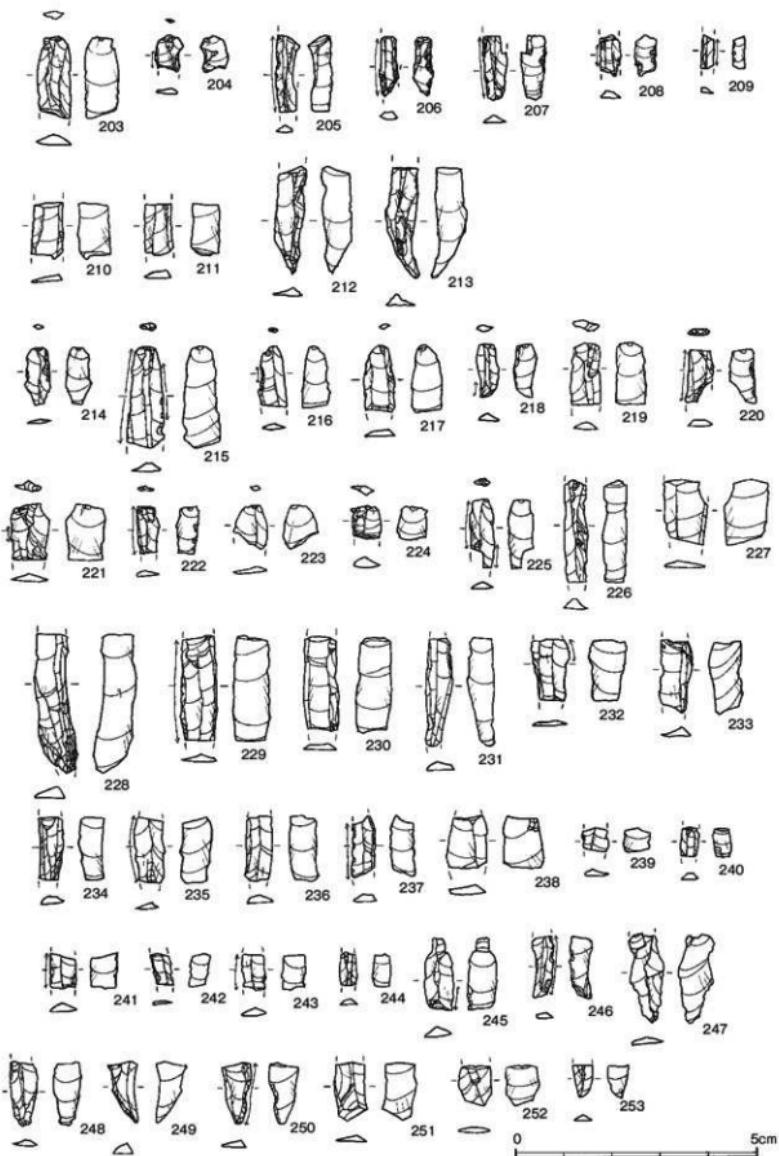
使用痕が認められる中間部の細石刃は、例えば第2ブロック第44図（157～202）を例にとると、長さ20mm程度の端正なもの（168）や、長さ15～18mm程度の比較的長いもの（169・170・172～174）などの他に長さ5～8mm程度の比較的小さいもの（188・190・192・193・196・197）など多様である。これらの使用痕のある細石刃は、長いものと短いものに分布がまとまる傾向がみられる。

前者の比較的長い細石刃では、左側縁に使用痕があり、線状痕が裏面（169、170）や左半分（172、174）にみられるものがあり、また後者の短く折断された細石刃でも長軸方向に線状痕が裏面（188、190、193）や右半分（192）に確認できるものがみられた。

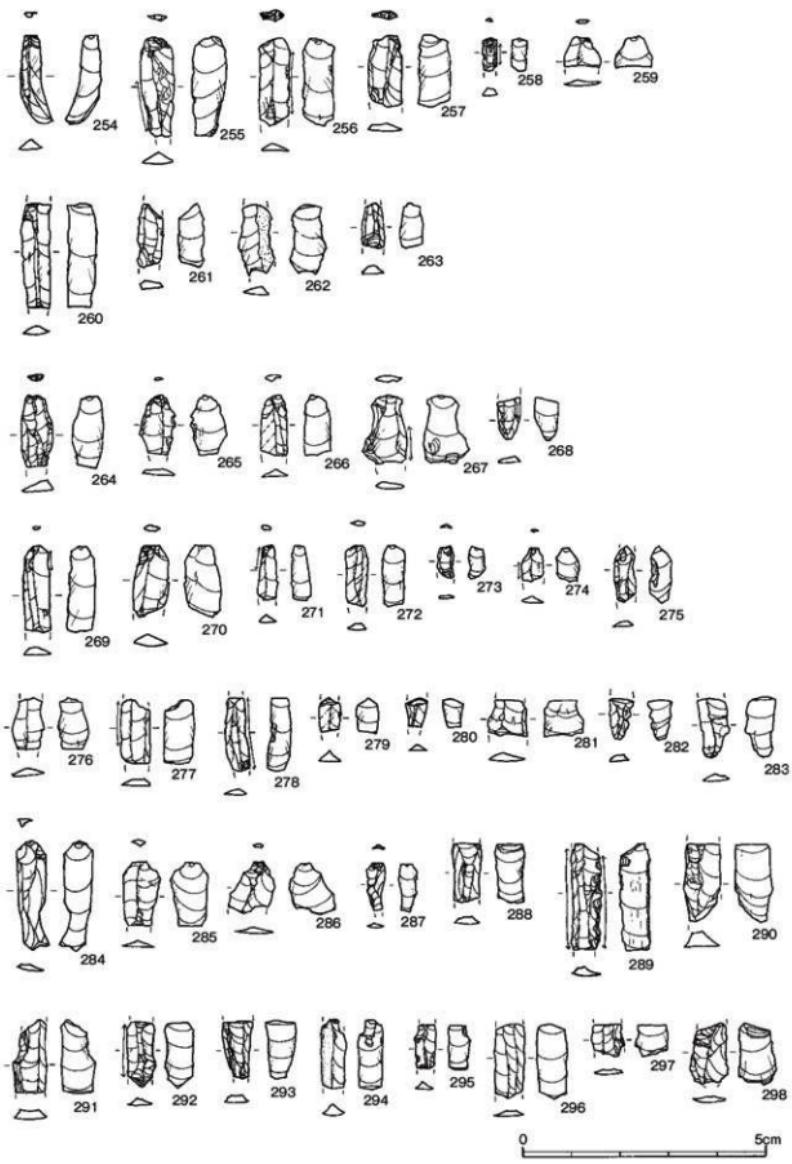
次に第3ブロックでは11点の細石刃が出土（203～212）している。石材はいずれも腰岳産黒曜石である。このうち204は左側縁に微細剥離があり、その裏面には長軸方向の線状痕が観察され、右側縁部はわずかに折れている。同様に205も左側縁に微細剥離があり、その裏面には長軸方向の線状痕が観察され、右側縁はわずかに折れている。さらに206・207・208も左側縁に微細な剥離が残り、その裏面には線状痕が明確に残り、右側縁と異なりわずかに変色している。これらも右側縁は一部破損している。いずれも左側縁に微細な剥離が認められ、裏面の長軸方向の線状痕の存在から長軸方向に使用されたと考えられる。また、これらは共通して右側縁が破損しており、装着部の関係と推定される。この5点の使用痕や装着痕が共通した細石刃は、近接した位置でほぼ直線状に出土していることから、この場所で、新たな新品と取り換えた可能性が考えられる。また4ブロックでも220・225・246など長軸方向の線状痕が観察された。



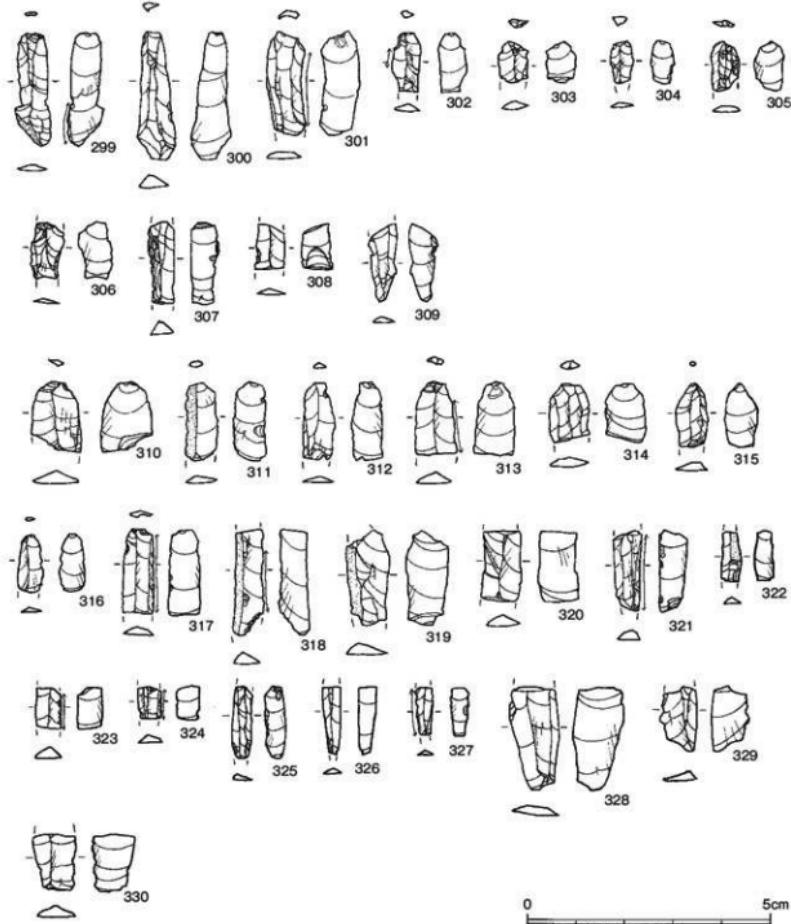
第44図 第III文化層 第1、2ブロック出土細石刃



第45図 第III文化層 第3, 4ブロック出土細石刃



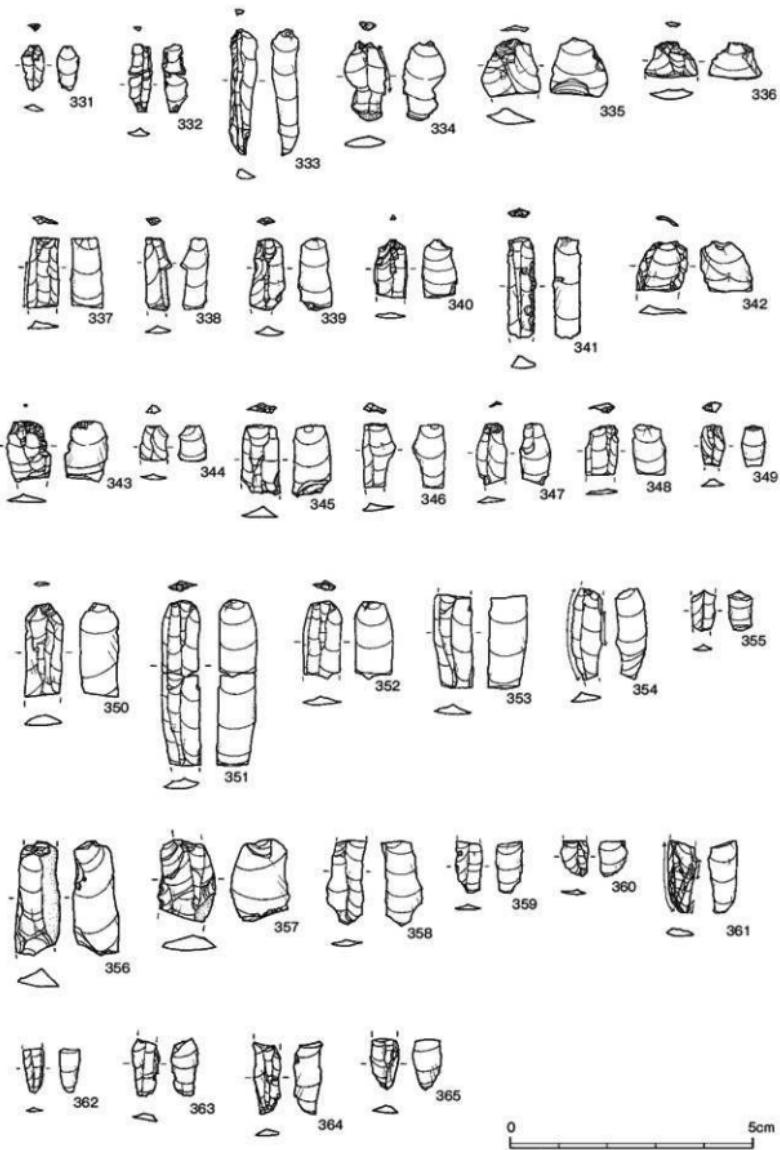
第46図 第III文化層 第5～9ブロック出土細石刃



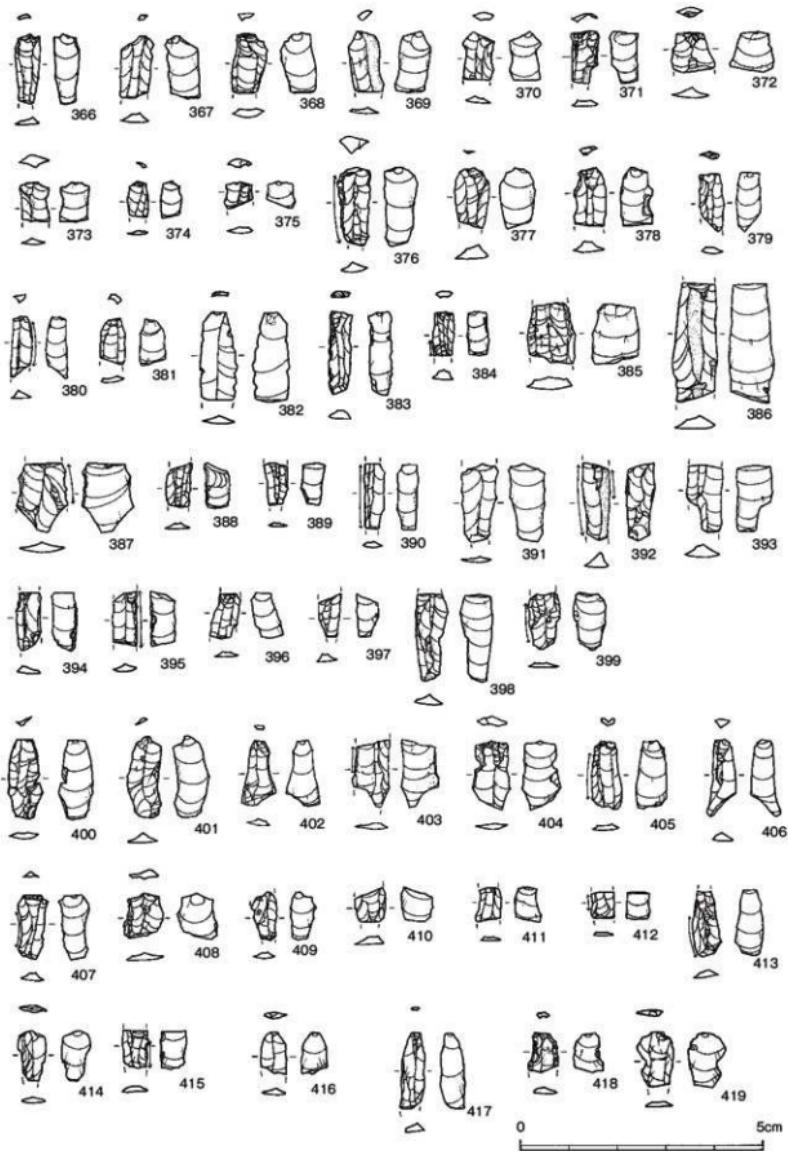
第47図 第III文化層 第11~12ブロック出土細石刃

このほか、桑ノ木津留系黒曜石を主体とする第12ブロックでも、321・324・325のように長軸方向に線状痕が明確に残り、かつ使用部分が右半分のみ変色している例（321）もみられた。

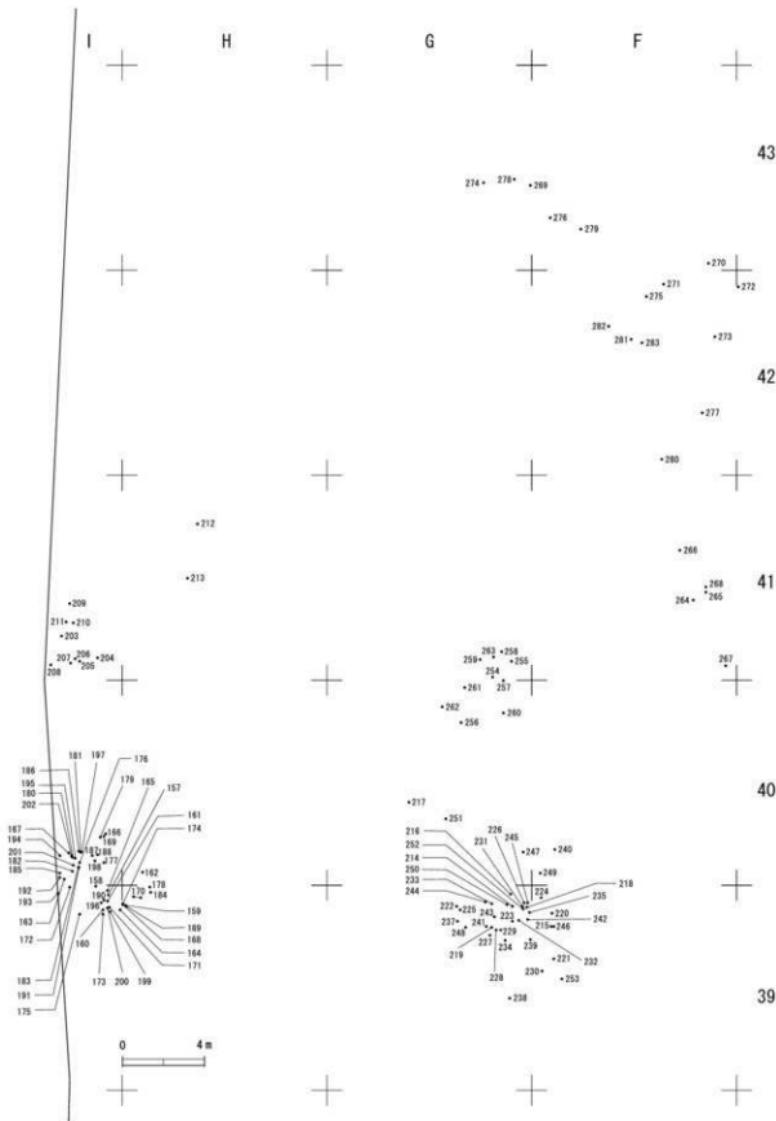
また13ブロックの341などでは裏面全体に長軸方向の線条痕が観察されており、これまでのシベリア出土例のような側縁の溝に埋め込む常識的な装着方法とは異なる装着が推定される。



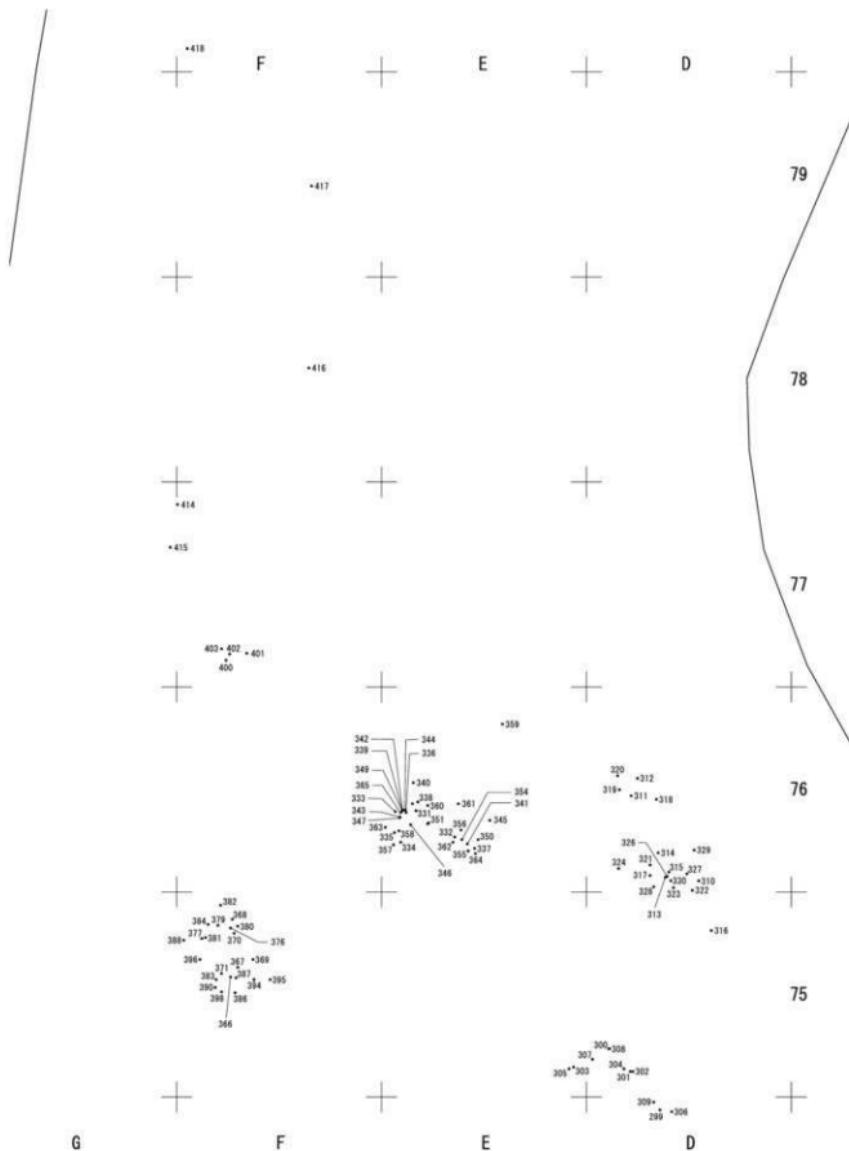
第48図 第Ⅲ文化層 第13ブロック出土細石刃



第49図 第III文化層 第14~20ブロック出土細石刃



第50図 第Ⅲ文化層 細石刃出土分布図(1)



第51図 第Ⅲ文化層 細石刃出土分布図(2)

第4表 旧石器 石器観察表(1)

種類番号	図版番号	区	層	プロック	断面	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	取入手番号	備考
10	1	H30	16	1	先端部	粘板岩	15.30	3.90	1.50	88.06	22384	
	2	H29	16	1	三棱尖頭部	粘板岩	10.50	2.20	1.00	36.00	22348-23504	
	3	H29	16	1	三棱尖頭部	粘板岩合質料	10.50	2.20	1.00	36.00	22348-23504	
11	4	I30	15	1	三棱尖頭部	砂目玉	7.20	2.80	1.70	32.20	21683	
	5	I29	16	1	三棱尖頭部	安山岩	2.30	1.60	1.10	3.80	21880	
	6	I30	16	1	断面	砂目玉	2.20	3.00	1.60	9.49	22146	
	7	I30	16	1	使用痕洞円	碧質頁岩	5.10	3.10	1.70	19.00	21696	
12	8	H30	16	1	使用痕洞円	安山岩	5.10	3.00	1.70	27.30	21614	
	9	G43	16	2	ナイフ形石器	安山岩	10.30	3.05	1.45	41.43	8422	
	10	G43	16	2	ナイフ形石器	安山岩	8.20	2.65	0.90	12.60	8555	
	11	F42	15	2	断面	安山岩	1.50	0.60	0.30	0.50	8474	
13	12	F50	16	3	ナイフ形石器	頁岩	8.00	3.00	0.70	38.57	6367	
	13	F50	16	3	ナイフ形石器	練岩	4.90	3.10	1.20	15.50	6608	
	14	F51	16	3	使用痕洞円	練岩	7.40	4.40	1.20	32.60	6356	
	15	G29	15	1	ナイフ形石器	頁岩	6.95	2.15	1.40	26.73	12933	
16	16	G29	15	1	三棱尖頭部	(砂)悉ノ木	1.60	1.20	1.30	1.30	12522	
	17	G29	15	1	断面	(砂)悉ノ木	8.20	3.90	2.10	55.53	12525	
	18	G29	15	1	断面	(砂)悉ノ木	6.55	4.55	1.90	36.30	12526	
	19	F41	14	3	使用痕洞円	(砂)悉ノ木	6.00	2.00	2.10	1.30	21676	
20	20	F42	15	2	三棱尖頭部	砂目玉	3.00	2.00	0.70	2.76	8517	
	21	F41	15	2	三棱尖頭部	砂目玉	2.40	1.40	1.30	2.43	8546	
	22	F42	15	2	三棱尖頭部	砂目玉	3.50	1.50	1.00	5.03	8510	
	23	F42	15	2	三棱尖頭部	砂目玉	2.20	2.00	1.10	5.00	8513	
24	24	F42	15	2	三棱尖頭部	砂目玉	1.40	1.30	1.10	1.30	8561	
	25	G42	15	2	三棱尖頭部	砂目玉	1.70	1.10	0.70	0.80	8559	
	26	F41	15	2	スライバー	砂目玉	2.20	2.10	1.00	5.03	8541	
	27	F42	15	2	スライバー	砂目玉	2.20	2.20	0.50	2.10	8531	
28	28	F42	15	2	スライバー	砂目玉	2.40	1.70	1.00	3.00	8516	
	29	F42	10	3	断面	(砂)悉ノ木	1.30	1.30	0.80	1.55	9230	
	30	F32	10	3	断面	(砂)悉ノ木	1.60	1.30	1.00	1.66	9284	
	31	F31	11	1	断面	(砂)悉ノ木	1.60	1.00	0.90	1.45	21565	
32	32	F32	11	1	断面	(砂)悉ノ木	1.65	1.10	0.75	1.63	9249	
	33	F32	10	3	断面	(砂)悉ノ木	1.95	1.60	1.10	3.08	8593	
	34	F32	10	3	断面	(砂)悉ノ木	2.10	2.20	0.90	1.92	8523	
	35	F32	10	3	断面	(砂)悉ノ木	1.70	1.30	0.90	2.93	8592	
36	36	F32	10	3	断面	(砂)悉ノ木	1.95	1.05	0.70	1.14	9241	
	37	F32	10	3	断面	(砂)悉ノ木	2.05	0.90	1.55	2.31	9250	
	38	F32	10	3	断面	(砂)悉ノ木	2.10	0.85	1.10	1.71	8594	
	39	F32	11	1	断面	(砂)悉ノ木	2.00	1.10	0.90	1.60	9254	
40	40	F31	10	1	断面	(砂)悉ノ木	1.20	1.30	1.55	2.00	21548	
	41	F32	10	1	断面	(砂)悉ノ木	1.70	1.20	1.80	3.40	9242	
	42	F32	10	1	断面	(砂)悉ノ木	2.00	1.20	1.60	2.51	9243	
	43	F32	10	1	断面	(砂)悉ノ木	2.00	1.60	0.90	3.00	9205-9258	
44	44-1	H40	10	3	断面	(砂)悉ノ木	1.85	1.30	0.70	2.1558		
	44-2	H40	11	2	断面	(砂)悉ノ木	1.50	1.30	1.30	2.51	9265	
	44-3	F32	10	3	断面	(砂)悉ノ木	1.50	1.30	1.30	2.51	9266	
	45-1	H40	10	11	断面	(砂)悉ノ木	3.50	1.60	2.30	7.27	8319-8416	
45-2	45-2	I30	10	2	断面	(砂)悉ノ木	1.60	1.80	0.60	1.38	8165	
	45-3	I30	10	2	断面	(砂)悉ノ木	2.90	1.30	1.70	5.90	8319	
	45-4	I30	10	2	断面	(砂)悉ノ木	3.95	1.60	0.90	8.10	8116-8250地	
	45-5	I30	10	2	断面	(砂)悉ノ木	3.05	0.95	0.40	1.50	8250	
46	46	I30	9	2	断面	(砂)悉ノ木	3.50	1.70	0.60	6.00	8116-8120地	
	47	I30	9	2	断面	(砂)悉ノ木	3.00	1.60	0.40	2.10	8116	
	48-1	I30-40	10-11	2	断面	片合質料	0.60	0.70	0.50	0.50	8128-8300-8349	
	48-2	I30-40	10-11	2	断面	片合質料	3.00	1.30	0.60	1.30	8128	
49	49	I40	10	2	グレイバー	砂目玉	3.30	1.30	0.60	1.30	8128	
	50	I40	10	2	スライバー	砂目玉	4.00	2.50	1.30	9.54	8676	
	51	I40	10	2	断面	砂目玉	2.50	2.50	0.90	2.50	8676	
	52	H41	10?	3	スライバー	砂目玉	2.80	3.10	0.60	2.90	8540-8570-8580	
53	53	H41	11	3	スライバー	砂目玉	4.20	2.80	1.30	11.73	20012	
	54	H41	11	3	使用痕洞円	砂目玉	3.70	3.90	1.50	12.40	8318	
	55	F39	11	4	断面	砂目玉	4.00	1.90	1.30	6.50	8282	
	56	G39	11	4	断面	砂目玉	3.70	1.50	1.70	10.84	2678	
57	57	G39	11	4	断面	砂目玉	4.00	1.20	1.80	8.22	8645	
	58	G40	11	4	断面	砂目玉	4.00	1.30	1.40	4.80	8645	
	59	G40	11	4	断面	砂目玉	2.50	0.90	0.50	0.50	8653	
	60	G40	10	4	フターストスヘル	砂目玉	2.10	0.40	0.40	0.30	8615	
61	61	F39	10	4	フターストスヘル	砂目玉	1.60	0.60	0.40	0.30	8279	
	62	G40	10	4	使用痕洞円	砂目玉	3.80	2.00	0.70	2.40	7239	
	63	F40	11	4	洞片合質料	砂目玉	4.10	3.70	0.60	5.57	8642-8625	
	64	G40	11	4	使用痕洞円	砂目玉	4.20	2.10	0.90	3.50	8010	
65	65	G40	11	4	使用痕洞円	砂目玉	3.20	3.30	0.70	5.90	8040	
	66	G40	10	4	使用痕洞円	砂目玉	2.90	1.90	0.40	1.10	7225	
	67	F41	10	4	断面	砂目玉	2.50	1.20	0.30	10.54	8654	
	68	F41	10	5	断面	砂目玉	4.50	3.30	0.60	14.60	8658	
69	69	F41	11	6	ナイフ形石器	(砂)悉ノ木	1.50	0.90	0.50	0.60	8311	
	70	F41	11	6	断面	(砂)悉ノ木	1.30	0.90	0.90	1.45	7364	
	71	F40	10	6	石器	頁岩	1.60	1.40	0.40	0.63	8310	
	72	F41	11	6	石器	(砂)悉ノ木	1.10	1.30	0.30	0.34	7357	
73	73	F41	11	6	断面	(砂)悉ノ木	2.10	0.95	0.40	0.82	7274	
	74	F43	10	2	ナイフ形石器	木	2.95	1.30	0.70	1.70	7293	
	75	F43	10	2	ナイフ形石器	木	1.60	1.50	0.80	4.00	7249	
	76	F43	11	2	ナイフ形石器	(砂)悉ノ木	2.20	1.70	0.70	1.60	7262	
77	77	F42	10	2	ナイフ形石器	(砂)悉ノ木	2.20	1.40	0.60	1.10	7230	
	78	F43	10	2	ナイフ形石器	砂目玉	2.00	1.10	0.50	1.20	7533	
	79	F43	10	2	スライバー	(砂)悉ノ木	1.80	2.10	0.40	1.60	7397	
	80	F42	11	7	使用痕洞円	(砂)悉ノ木	2.70	1.70	0.70	1.60	7421	
81	81	F42	10?	2	断面	(砂)悉ノ木	1.90	1.30	0.70	1.50	8661	
	82	F42	11	2	断面	(砂)悉ノ木	1.30	1.00	1.20	1.90	7510	
	83	F42	10	2	断面	(砂)悉ノ木	1.90	0.80	1.00	1.40	7960	
	84	F43	11	2	断面	(砂)悉ノ木	1.20	1.40	0.90	1.60	7283	

第5表 旧石器 石器観察表(2)

遺跡番号	遺跡名	X	Y	層	ブロック	石種	石材	最高高さ	最高幅	最大幅	重量	放工具	備考	
27	85	F42	11	9	ブロック9	石核	絆貝貝殻	9.20	5.20	2.00	85.20	2500		
	86	H42	10	9	ブロック9	石核	絆貝貝殻	1.00	1.00	0.30	9.56	2.00		
	87	G42	10	9	ブロック9	石核	貝殻	7.60	2.70	1.30	16.40	8098		
29	88	H72	10	9	石核	石核	石核	2.65	2.10	1.80	10.18	2015		
	89	26T	10	9	石核	石核	石核	3.20	1.50	2.10	9.31	547		
	90	26T・26T	10・10	9	スルガル	石核	石核	4.40	0.90	1.00	1.50	535・539		
30	91	H72・G72	10・10	9	使用痕跡付合資料	石核	石核	1.50	2.00	0.60	1.20	2035・2051		
	92	E75	11	11	石核	石核	石核	2.40	1.90	1.90	7.92	5652		
	93	E75	11	11	石核	石核	石核	3.55	1.70	2.15	13.88	5627		
31	94	E75	10	11	石核	石核	石核	7.20	2.90	2.30	41.30	5603・5605		
	95	E75	10	11	石核	石核	石核	4.15	2.70	0.90	30.32	5574		
	96	E75	10	11	石核	石核	石核	6.00	1.80	1.90	47.26	5699		
32	97	E75	10	11	石核	石核	石核	4.00	4.70	1.50	30.11	5572		
	98	D75	10	11	石核	石核	石核	4.15	3.50	1.50	20.38	2091		
	99-1	E75	10・11	11	頭部・操作合資料	石核	石核	4.10	2.90	1.80	18.89	5585・5586		
33	99-2	E75	10	11	石核	石核	石核	4.10	2.60	1.60	17.00	5585		
	99-3	E75	11	11	石片	石片	石片	1.90	1.70	0.60	1.80	5580		
	100-1	E75	10	11	頭部・操作合資料	石核	石核	6.00	4.00	2.70	64.32	5664・5668B		
34	100-2	E75	10	11	頭部・操作合資料	石核	石核	3.55	1.85	0.90	4.59	5669		
	101-1	E75	10	11	頭部・操作合資料	石核	石核	6.05	3.65	2.50	39.31	5670		
	101-2	E75	10	11	頭部・操作合資料	石核	石核	3.00	2.00	0.80	26.00	5649・5670B		
35	101-3	E75	10	11	石片	石片	石片	3.30	2.30	0.80	5.60	5649		
	102	E75	10	11	使用痕跡付	石核	石核	3.90	1.30	0.80	2.50	5594		
	103	O76	10	12	スクリュー	石核	石核	2.90	2.70	0.80	5.00	5452		
36	104	O76	10	12	石核	石核	石核	5.00	4.85	1.20	19.26	5303		
	105	O76	10・11	12	石核	石核	石核	5.60	3.80	1.40	28.85	5288B		
	106	O76	10	12	石核	石核	石核	4.20	3.50	1.30	2.50	5289		
37	107	O76	10	12	スクリュー	石核	石核	2.00	1.80	1.80	21.29	5254		
	108	O76	10	12	スクリュー	石核	石核	3.00	4.10	2.00	29.60	5213		
	109	O76	10	12	スクリュー・前骨質	石核	石核	6.30	5.50	2.30	64.40	5162・5196B		
38	110	O76	10	12	頭部・操作合資料	石核	石核	1.30	1.35	0.25	0.45	5437		
	111	26T	10	12	頭部・操作合資料	石核	石核	4.20	2.90	1.00	14.35	4715		
	112	E76	10	13	石核	石核	石核	3.40	2.00	1.80	11.24	4994		
39	113	E76	10	13	石核	石核	石核	3.20	1.20	1.70	5.85	4987		
	114	E76	10	13	石核	石核	石核	3.10	1.30	3.10	13.44	5078		
	115	E76	10	13	石核	石核	石核	3.20	1.50	2.20	9.40	5225		
40	116	E76	10	13	石核	石核	石核	2.85	1.80	1.60	10.00	5049		
	117	E76	10	13	石核	石核	石核	2.00	2.00	2.90	5.58	5001		
	118	E76	10・11	13	負担面骨舌	石核	石核	4.75	1.25	1.10	4.85	5272・5470		
41	119	E76	10	13	スクリューバー	石核	石核	3.00	2.20	1.70	10.90	4982		
	120	E76	10	13	スクリューバー	石核	石核	3.00	4.70	1.60	17.40	5071・5088		
	121	E76	10	13	使用痕跡付	石核	石核	3.60	3.50	1.20	11.50	5082		
42	122	E76	10	13	使用痕跡付	石核	石核	2.20	2.70	0.70	3.10	4944		
	123-1	E76	10	13	台形骨舌	石核	石核	9.15	7.70	3.60	157.80	5485・5492		
	123-2	E76	10	13	台形骨舌	石核	石核	5.00	3.60	1.40	30.30	5493		
43	124-1	E76	10	13	石核合合資料	石核	石核	4.00	3.20	2.30	26.97	5096・5101		
	124-2	E76	10	13	石片	石片	石片	1.00	2.80	0.60	2.57	4884・4887		
	124-3	E76	10	13	石片	石片	石片	2.20	2.10	0.55	3.34	4892・4893		
44	125	E76	10	13	石核	石核	石核	5.60	4.10	2.35	53.35	4895		
	126-1	E76	10・11	13	積木・操作合資料	石核	石核	4.10	2.90	2.40	21.55	5873・5961		
	126-2	E76	11	13	積木・操作合資料	石核	石核	4.10	3.00	2.10	20.15	5958-5961		
45	127-1	E76	10	13	石核	石核	石核	3.40	2.90	1.90	16.00	5263・5361		
	127-2	E76	10	13	石核	石核	石核	4.10	2.60	1.70	12.24	4990・5000B		
	127-3	E76	10	13	石核	石核	石核	3.50	2.60	0.40	4.30	5252		
46	128-1	F75	10	14	石核	石核	石核	2.20	2.20	0.60	2.70	5059		
	128-2	F75	26	10	14	合合骨資料	石核	石核	2.90	1.50	2.00	8.09	4008	
	128-3	F75	10	14	石核	石核	石核	3.30	2.10	2.00	20.80	3972・4000B		
47	129	F75	10	14	石片	石片	石片	3.10	2.25	1.05	6.98	4110・4195		
	129-1	F75	10	14	石片	石片	石片	2.60	2.60	0.85	6.17	4060		
	129-2	F75	10	14	石片	石片	石片	3.40	1.60	2.10	7.70	3886		
48	130	F75	10	14	ナイフ形石器	石核	石核	1.10	0.60	0.30	0.20	4031		
	131	F75	10	14	石核	石核	石核	6.60	4.20	1.90	43.40	4052・4061		
	132	F75	10	14	石核	石核	石核	3.20	2.45	0.60	6.07	4079		
49	133	F76	10	14	石核	石核	石核	2.40	3.55	3.30	21.40	4076		
	134	F76	10	14	スクリューバー	石核	石核	5.60	3.70	0.90	10.60	3859		
	135	F75	10	14	スクリューバー	石核	石核	6.00	2.60	1.10	13.00	3884		
50	136-1	F75	10	14	合合骨資料	石核	石核	5.15	5.00	3.10	84.05	3964・3990B		
	136-2	F75	10	14	石核	石核	石核	4.50	5.00	2.35	36.60	3998B		
	136-3	F75	10	14	石核	石核	石核	4.40	4.90	2.00	45.20	3954		
51	137-1	F76	10	14	合合骨資料	石核	石核	3.60	2.80	0.90	11.80	4063・4067		
	137-2	F75	10	14	石核	石核	石核	3.50	3.30	1.30	9.70	4074		
	138	F77	10	15	石核	石核	石核	2.00	0.90	1.70	2.29	4149		
52	139	F77	10	15	石核	石核	石核	1.75	1.20	1.60	3.34	4153		
	140	F77	10	15	石核	石核	石核	1.65	1.00	1.20	2.06	4133		
	141-1	G77	10	15	合合骨資料	石核	石核	3.10	2.70	2.70	5.20	4152B		
53	141-2	G77	10	15	石核	石核	石核	1.60	1.10	1.20	1.50	4152		
	142	G77	10	16	石核	石核	石核	2.20	1.45	1.10	3.91	4274		
	143	G78	10	16	石核	石核	石核	2.70	1.15	1.05	3.45	4224		
54	144-1	F77	10	16	頭部・操作合資料	石核	石核	4.40	2.60	1.80	39.10	4099・4264		
	144-2	F77	10	16	石核	石核	石核	1.80	1.40	2.00	2.95	4216		
	145	G79	10	16	石核	石核	石核	1.50	1.35	1.35	2.00	4781		
55	146	G80	10	20	スクリューバー	石核	石核	2.00	1.90	0.70	2.67	4797		
	147	G80	10	20	スクリューバー	石核	石核	2.20	1.40	1.00	2.65	4780		
	148	G80	10	20	スクリューバー	石核	石核	1.70	1.45	0.70	2.49	4830		
56	149	F77	10	20	ブロック9	石核	石核	1.60	2.00	2.10	7.31	4278	O分析	
	150	E78	10	20	ブロック9	石核	石核	1.95	1.40	1.50	3.76	5989		
	151	E78	10	20	ブロック9	石核	石核	1.45	1.10	1.70	2.77	5992		
57	152	E80	10	20	ブロック9	石核	石核	2.35	1.45	1.40	3.32	4767		
	153	G78	10	20	ブロック9	石核	石核	1.50	1.70	1.00	3.30	4765		
	154	F79	10	20	ブロック9	石核	石核	1.30	1.30	1.20	1.58	4710		

第6表 旧石器 細石刃観察表(1)

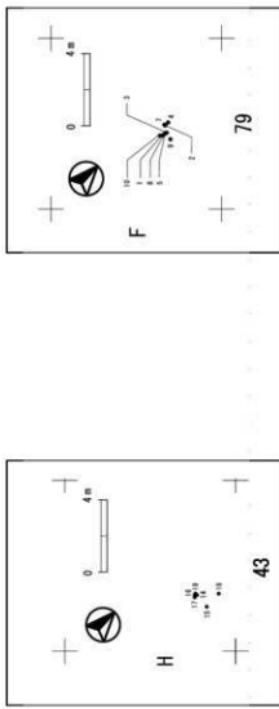
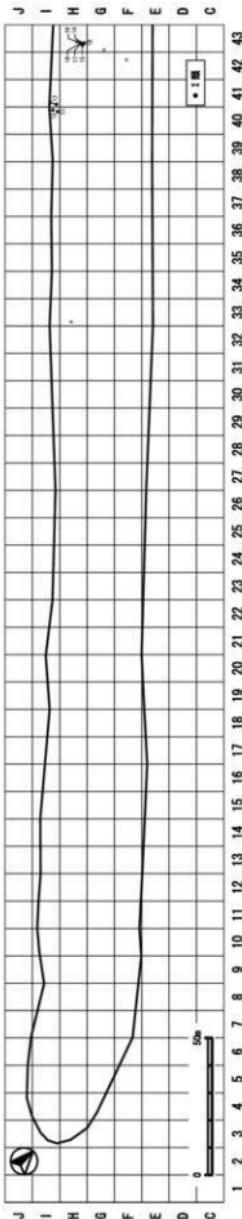
博物番号	国番号	プロック	石材	幅倍	長	幅	厚	重	打削調査			頭部調整	使用痕	身上番号	備考
									平坦	調整	点状				
155	1	Obs.ノ木	頭部	1.79	0.48	0.19	0.11	0.11	○				○	9244	
156	2	Obs.ノ木	中頭部	1.79	0.65	0.20	0.17	0.17	○				○	9243	
157	2	Obs.ノ木	頭部	1.80	0.56	0.15	0.09	0.09	○				○下部	8329	
158	2	Obs.ノ木	頭部	1.75	0.75	0.26	0.19	0.19	○					8249	
159	2	Obs.ノ木	頭部	1.75	0.60	0.12	0.08	0.08	○					8323	
160	2	Obs.ノ木	頭部	1.42	0.75	0.10	0.07	0.07	○					8333	
161	2	Obs.ノ木	頭部	1.28	0.68	0.12	0.10	0.10	○					8327	
162	2	Obs.ノ木	頭部	1.22	0.42	0.15	0.05	0.05	○					8190	
163	2	Obs.ノ木	頭部	1.15	0.35	0.08	0.03	0.03	○					8158	
164	2	Obs.ノ木	頭部	0.95	0.52	0.15	0.06	0.06	○					8215	
165	2	Obs.ノ木	頭部	0.98	0.42	0.12	0.05	0.05	○					8222	
166	2	Obs.ノ木	頭部	0.98	0.42	0.12	0.05	0.05	○					8086	
167	2	Obs.ノ木	頭部	0.65	0.49	0.10	0.03	0.03	○					8197	
168	2	Obs.ノ木	中頭部	2.00	0.60	0.15	0.07	0.07	○					8324	
169	2	Obs.ノ木	中頭部	1.65	0.60	0.25	0.27	0.27	○					8087	頭底部
170	2	Obs.ノ木	中頭部	1.72	0.50	0.19	0.22	0.22	○					8344	頭底部
171	2	Obs.ノ木	中頭部	2.00	0.82	0.25	0.34	0.34	○					8235	
172	2	Obs.ノ木	中頭部	1.88	0.48	0.18	0.14	0.14	○					8159	左半分に微仄面
173	2	Obs.ノ木	中頭部	1.75	0.52	0.18	0.17	0.17	○					8111	
174	2	Obs.ノ木	中頭部	1.40	0.58	0.15	0.13	0.13	○					8308	左半分に微仄面
175	2	Obs.ノ木	中頭部	1.48	0.55	0.22	0.13	0.13	○					8254	
176	2	Obs.ノ木	中頭部	1.29	0.50	0.14	0.07	0.07	○					8343	
177	2	Obs.ノ木	中頭部	1.18	0.42	0.15	0.08	0.08	○					8199	
178	2	Obs.ノ木	中頭部	1.28	0.55	0.15	0.11	0.11	○					8192	
179	2	Obs.ノ木	中頭部	1.00	0.65	0.10	0.08	0.08	○					8096	
180	2	Obs.ノ木	中頭部	1.20	0.68	0.18	0.12	0.12	○					8102	
181	2	Obs.ノ木	中頭部	1.18	0.65	0.15	0.09	0.09	○					8111	
182	2	Obs.ノ木	中頭部	0.98	0.45	0.16	0.06	0.06	○					8163	左半分に微仄面
183	2	Obs.ノ木	中頭部	1.10	0.52	0.25	0.11	0.11	○					8167	
184	2	Obs.ノ木	中頭部	1.05	0.58	0.15	0.12	0.12	○					8193	
185	2	Obs.ノ木	中頭部	0.95	0.65	0.15	0.08	0.08	○					8356	
186	2	Obs.ノ木	中頭部	0.85	0.60	0.20	0.10	0.10	○					8112	
187	2	Obs.ノ木	中頭部	0.85	0.60	0.10	0.04	0.04	○					8177	
188	2	Obs.ノ木	中頭部	0.95	0.55	0.15	0.11	0.11	○					8353	裏面に微仄面
189	2	Obs.ノ木	中頭部	0.92	0.55	0.22	0.10	0.10	○					8309	
190	2	Obs.ノ木	中頭部	1.00	0.45	0.10	0.06	0.06	○					8342	裏面に微仄面
191	2	Obs.ノ木	中頭部	0.68	0.50	0.09	0.02	0.02	○					8362	
192	2	Obs.ノ木	中頭部	0.75	0.40	0.10	0.03	0.03	○					8367	裏面に微仄面
193	2	Obs.ノ木	中頭部	0.68	0.35	0.12	0.03	0.03	○					8395	裏面に微仄面
194	2	Obs.ノ木	中頭部	0.60	0.35	0.09	0.02	0.02	○					8392	
195	2	Obs.ノ木	中頭部	0.82	0.41	0.10	0.02	0.02	○					8401	
196	2	Obs.ノ木	中頭部	0.51	0.35	0.10	0.02	0.02	○					8331	
197	2	Obs.ノ木	中頭部	0.65	0.50	0.10	0.02	0.02	○					8339	
198	2	Obs.ノ木	尾部	2.20	0.50	0.20	0.05	0.05	○					8176	
199	2	Obs.ノ木	尾部	2.00	0.45	0.15	0.11	0.11	○					8353	
200	2	Obs.ノ木	尾部	1.30	0.50	0.18	0.10	0.10	○					8234	
201	2	Obs.ノ木	尾部	0.96	0.50	0.10	0.06	0.06	○					8375	
202	2	Obs.ノ木	中頭部	1.60	0.98	0.12	0.15	0.15	○					8100	
203	3	Obs.ノ木	頭部	1.70	0.70	0.25	0.23	0.23	○					8061	
204	3	Obs.ノ木	頭部	0.75	0.58	0.10	0.03	0.03	○					8068	左半分に微仄面
205	3	Obs.ノ木	中頭部	1.00	0.50	0.15	0.09	0.09	○					8066	左半分に微仄面
206	3	Obs.ノ木	中頭部	1.20	0.40	0.18	0.05	0.05	○					8065	左半分に微仄面
207	3	Obs.ノ木	中頭部	1.30	0.50	0.15	0.10	0.10	○					8064	左半分に微仄面
208	3	Obs.ノ木	中頭部	0.85	0.45	0.15	0.05	0.05	○					8063	左半分に微仄面
209	3	Obs.ノ木	中頭部	0.65	0.25	0.10	0.05	0.05	○					8058	
210	3	Obs.ノ木	中頭部	1.00	0.55	0.15	0.11	0.11	○					8059	
211	3	Obs.ノ木	中頭部	0.60	1.15	0.15	0.10	0.10	○					8060	
212	3	Obs.ノ木	尾部	2.20	0.70	0.29	0.21	0.21	○					7623	
213	3	Obs.ノ木	尾部	2.30	0.70	0.29	0.29	0.29	○					7624	
214	4	Obs.ノ木	頭部	1.20	0.55	0.10	0.04	0.04	○					7715	
215	4	Obs.ノ木	頭部	2.10	0.75	0.15	0.30	0.30	○					7281	
216	4	Obs.ノ木	頭部	1.35	0.55	0.12	0.08	0.08	○					7719	
217	4	Obs.ノ木	頭部	1.35	0.65	0.15	0.12	0.12	○					8009	
218	4	Obs.ノ木	頭部	1.10	0.45	0.20	0.06	0.06	○					8067	
219	4	Obs.ノ木	頭部	1.25	0.65	0.28	0.17	0.17	○					7684	
220	4	Obs.ノ木	頭部	1.00	0.50	0.15	0.09	0.09	○					8289	
221	4	Obs.ノ木	頭部	1.10	0.80	0.15	0.14	0.14	○					7578	
222	4	Obs.ノ木	頭部	0.95	0.45	0.13	0.05	0.05	○					7690	
223	4	Obs.ノ木	頭部	0.90	0.70	0.15	0.05	0.05	○					7713	
224	4	Obs.ノ木	頭部	0.70	0.60	0.25	0.06	0.06	○					8620	
225	4	Obs.ノ木	頭部	1.40	0.50	0.12	0.09	0.09	○					7694	左半分に微仄面
226	4	Obs.ノ木	中頭部	2.10	0.50	0.20	0.20	0.20	○					8619	
227	4	Obs.ノ木	中頭部	1.30	0.90	0.12	0.15	0.15	○					7696	
228	4	Obs.ノ木	中頭部	2.35	0.70	0.24	0.60	0.60	○					7683	
229	4	Obs.ノ木	中頭部	2.15	0.70	0.15	0.30	0.30	○					7682	
230	4	Obs.ノ木	中頭部	1.90	0.75	0.17	0.24	0.24	○					8599	
231	4	Obs.ノ木	中頭部	2.00	0.55	0.18	0.22	0.22	○					7709	
232	4	Obs.ノ木	中頭部	1.70	0.75	0.19	0.09	0.09	○					7711	
233	4	Obs.ノ木	中頭部	1.50	0.70	0.20	0.14	0.14	○					7223	
234	4	Obs.ノ木	中頭部	1.30	0.55	0.18	0.12	0.12	○					7679	
235	4	Obs.ノ木	中頭部	1.38	0.65	0.12	0.31	0.31	○					8610	
236	4	Obs.ノ木	中頭部	1.30	0.60	0.18	0.10	0.10	○					一括	
237	4	Obs.ノ木	中頭部	1.28	0.50	0.18	0.11	0.11	○					7692	左半分に微仄面
238	4	Obs.ノ木	中頭部	1.05	0.85	0.20	0.16	0.16	○					7675	
239	4	Obs.ノ木	中頭部	0.55	0.58	0.18	0.03	0.03	○					8601	
240	4	Obs.ノ木	中頭部	0.60	0.38	0.15	0.03	0.03	○					8392	
241	4	Obs.ノ木	中頭部	0.70	0.50	0.25	0.08	0.08	○					7685	
242	4	Obs.ノ木	中頭部	0.68	0.48	0.18	0.04	0.04	○					8605	
243	4	Obs.ノ木	中頭部	0.72	0.53	0.20	0.06	0.06	○					7255	

第7表 旧石器 細石刃観察表(2)

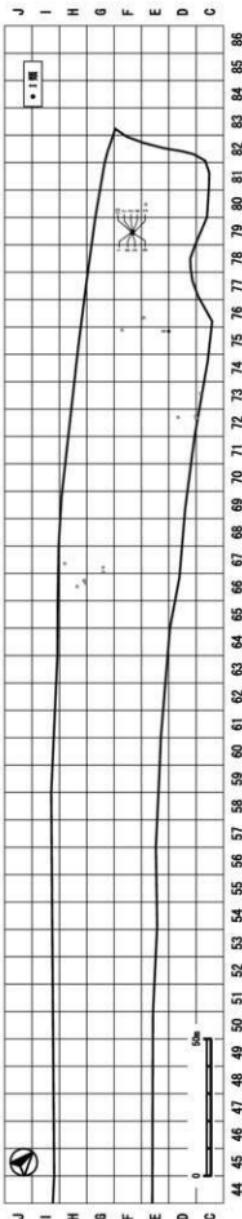
博物番号	国番号	プロック	石材	断面	長	幅	厚	重	打削調整			削刮調整	使用痕	断面番号	備考
									平凹	溝凹	点状				
45	244	4	Ob巻ノ木	半圓部	0.65	0.35	0.15	0.03					○	7724	
	245	4	Ob巻ノ木	尾部	1.30	0.65	0.28	0.15					○	8683	
	246	4	Ob巻ノ木	尾部	1.00	0.65	0.16	0.03					○	左半分に擦試痕	
	247	4	Ob巻ノ木	尾部	0.95	0.75	0.18	0.13					○	8637	
	248	4	Ob巻ノ木	尾部	1.35	0.55	0.12	0.09					○	7699	
	249	4	Ob巻ノ木	尾部	1.30	0.60	0.22	0.12					○	8630	
	250	4	Ob巻ノ木	尾部	1.28	0.65	0.20	0.10					○	7717	
	251	4	Ob巻ノ木	尾部	1.20	0.70	0.15	0.09					○	8013	
	252	4	Ob巻ノ木	尾部	0.85	0.70	0.12	0.06					○	8613	
	253	4	Ob巻ノ木	尾部	0.70	0.45	0.12	0.03					○	8226	
	254	5	Ob巻ノ木	頭部	1.80	0.70	0.20	0.17					○	7785	
	255	5	Ob巻ノ木	頭部	2.00	0.70	0.20	0.17					○	7789	
	256	5	Ob巻ノ木	頭部	1.80	0.60	0.18	0.09					○	7754	
46	257	5	Ob巻ノ木	頭部	1.50	0.75	0.15	0.13					○	7753	
	258	5	Ob巻ノ木	頭部	0.70	0.30	0.18	0.03					○	7785	
	259	5	Ob巻ノ木	頭部	0.60	0.80	0.10	0.02					○	7779	
	260	5	Ob巻ノ木	半圓部	2.30	0.60	0.18	0.21					○	7796	
	261	5	Ob巻ノ木	半圓部	1.30	0.55	0.15	0.10					○	7768	
	262	5	Ob巻ノ木	半圓部	1.40	0.75	0.18	0.13					○	8006	
	263	5	Ob巻ノ木	半圓部	0.98	0.49	0.20	0.07					○	7783	
	264	6	Ob巻ノ木	頭部	1.30	0.65	0.26	0.22					○	7367	
	265	6	Ob巻ノ木	頭部	1.20	0.80	0.15	0.09					○	7359	
	266	6	Ob巻ノ木	頭部	1.25	0.55	0.18	0.10					○	7372	
	267	6	Ob巻ノ木	頭部	1.00	0.60	0.15	0.15					○	7353	
	268	6	Ob巻ノ木	頭部	0.85	0.50	2.50	0.05					○	7526	
	269	7	Ob巻ノ木	頭部	1.78	0.55	0.20	0.16					○	7696	
	270	7	Ob巻ノ木	頭部	1.50	0.78	0.28	0.25					○	7699	
47	271	7	Ob巻ノ木	頭部	1.12	0.45	0.18	0.05					○	7417	
	272	7	Ob巻ノ木	頭部	1.25	0.48	0.15	0.08					○	7984	
	273	7	Ob巻ノ木	頭部	0.65	0.35	0.08	0.01					○	7943	
	274	7	Ob巻ノ木	頭部	0.70	0.45	0.15	0.03					○	7539	
	275	7	Ob巻ノ木	中間部	1.15	0.45	0.15	0.07					○	7506	
	276	7	Ob巻ノ木	中間部	1.02	0.65	0.20	0.09					○	7395	
	277	7	Ob巻ノ木	中間部	1.00	0.60	0.20	0.11					○	7393	
	278	7	Ob巻ノ木	中間部	1.50	0.50	0.15	0.09					○	7360	
	279	7	Ob巻ノ木	中間部	0.70	0.48	25.00	0.06					○	7403	
	280	7	Ob巻ノ木	中間部	0.60	0.45	0.15	0.03					○	7419	
	281	7	Ob巻ノ木	中間部	0.80	0.82	0.20	0.10					○	7484	
	282	7	Ob巻ノ木	尾部	0.80	0.50	0.18	0.04					○	7456	
	283	7	Ob巻ノ木	尾部	1.20	0.70	0.16	0.09					○	7480	
48	284	9	Ob巻街	頭部	2.25	0.70	0.15	0.12					○	550	
	285	9	Ob巻街	頭部	1.35	0.75	0.15	0.11					○	2037	
	286	9	Ob巻街	頭部	1.10	1.00	0.10	0.06					○	2045	
	287	9	Ob巻街	頭部	1.00	0.60	0.15	0.03					○	2038	
	288	9	Ob巻街	中間部	1.20	0.60	0.15	0.10					○	550	
	289	9	Ob巻街	中間部	2.30	0.65	0.29	0.34					○	2038	
	290	9	Ob巻街	中間部	1.60	0.75	0.35	0.32					○	2030	
	291	9	Ob巻街	中間部	1.50	0.75	0.20	0.18					○	2039	
	292	9	Ob巻街	中間部	1.35	0.60	0.15	0.12					○	2034	
	293	9	Ob巻街	中間部	1.20	0.60	0.15	0.10					○	2034	
	294	9	Ob巻街	中間部	1.45	0.55	0.25	0.14					○	2036	
	295	9	Ob巻街	中間部	0.90	0.45	0.15	0.06					○	2033	
	296	9	Ob巻街	中間部	1.55	0.60	0.10	0.12					○	545	
49	297	9	Ob巻街	中間部	0.70	0.65	0.10	0.05					○	549	
	298	9	Ob巻街	尾部	1.30	0.70	0.15	0.09					○	537	
	299	11	Ob巻街	尾部	2.00	0.60	0.15	0.03					○	5553	
	300	11	Ob巻街	尾部	2.05	0.80	0.15	0.42					○	5681	
	301	11	Ob巻街	尾部	2.15	0.80	0.15	0.27					○	5794	
	302	11	Ob巻街	尾部	1.25	0.60	0.20	0.11					○	5796	
	303	11	Ob巻街	尾部	0.85	0.65	0.20	0.07					○	5637	
	304	11	Ob巻街	尾部	0.90	0.50	0.15	0.04					○	5793	
	305	11	Ob巻街	尾部	1.00	0.60	0.15	0.07					○	5615	
	306	11	Ob巻街	尾部	1.15	0.70	0.10	0.08					○	2026	
	307	11	Ob巻街	中間部	1.70	0.55	0.30	0.19					○	5626	裏面に剥落痕
	308	11	Ob巻街	中間部	0.95	0.65	0.15	0.07					○	5790	
	309	11	Ob巻街	尾部	1.00	0.60	0.15	0.09					○	2034	
	310	12	Ob巻ノ木	尾部	1.50	1.05	0.30	0.29					○	5350	
	311	12	Ob巻ノ木	頭部	1.60	0.65	0.15	0.18					○	5159	
	312	12	Ob巻ノ木	頭部	1.60	0.70	0.15	0.13					○	5167	
	313	12	Ob巻ノ木	頭部	1.50	0.90	0.30	0.22					○	5219	
	314	12	Ob巻ノ木	頭部	1.20	0.85	0.20	0.19					○	5216	
	315	12	Ob巻ノ木	頭部	1.30	0.70	0.15	0.14					○	5624	
	316	12	Ob巻ノ木	頭部	1.20	0.55	0.15	0.06					○	497	
	317	12	Ob巻街	頭部	1.75	0.65	0.20	0.22					○	5223	面状痕
	318	12	Ob巻ノ木	中間部	2.15	0.65	0.25	0.30					○	5180	
	319	12	Ob巻ノ木	中間部	1.90	0.90	0.15	0.38					○	5154	
	320	12	Ob巻ノ木	中間部	1.65	0.65	0.20	0.26					○	5154	
	321	12	Ob巻ノ木	中間部	1.65	0.60	0.20	0.25					○	5218	右半分に擦試痕
	322	12	Ob巻ノ木	中間部	1.00	0.45	0.15	0.06					○	5493	
	323	12	Ob巻ノ木	中間部	0.85	0.50	0.25	0.09					○	5887	
	324	12	Ob巻ノ木	中間部	0.70	0.50	0.15	0.06					○	5208	右半分に擦試痕
	325	12	Ob巻街	尾部	1.50	0.40	0.15	0.08					○	532	右半分に擦試痕
	326	12	Ob巻街	中間部	1.40	0.40	0.15	0.05					○	5961	
	327	12	Ob巻街	中間部	1.00	0.40	0.15	0.03					○	5739	
	328	12	Ob巻ノ木	尾部	2.15	1.00	0.25	0.40					○	5221	
	329	12	Ob巻ノ木	尾部	1.35	0.75	0.20	0.16					○	5241	
	330	12	Ob巻ノ木	中間部	1.15	0.80	0.25	0.17					○	5220	
	331	13	Ob巻ノ木	空気	0.92	0.47	0.12	0.03					○	5011	

第8表 旧石器 細石刃觀察表(3)

博物番号	国番号	ブロック	石材	部位	長	幅	厚	重	打削調整			削刮調整	使用痕	削痕	取手番号	備考
									平出し	調整	点状					
332	15	Obh切端	尖部	1.35	0.49	0.15	0.02								4947	
333	15	Obh切端	尖部	2.35	0.58	0.20	0.09								5556	
341	15	Obh切端	尖部	1.00	0.45	0.15	0.02								5557	
335	15	Obh各ノ木	頭部	1.15	1.20	0.20	0.28								5874	
336	15	Obh各ノ木	頭部	1.25	1.10	0.20	0.15								5285	
337	15	Obh各ノ木	頭部	1.42	0.65	0.15	0.18								4956	
338	15	Obh各ノ木	頭部	1.50	0.55	0.15	0.10								5288	
339	15	Obh各ノ木	頭部	1.45	0.70	0.20	0.36								5028	
340	15	Obh各ノ木	頭部	1.20	0.70	0.10	0.09								5732	
341	15	Obh各ノ木	頭部	2.05	0.60	0.25	0.25								5260	裏面に鋸状痕
342	15	Obh切端	頭部	1.00	1.00	0.20	0.13								5692	
343	15	Obh切端	頭部	1.20	0.90	0.15	0.18								5625	
344	15	Obh各ノ木	頭部	0.95	0.60	0.20	0.05								5356	
345	15	Obh切端	頭部	1.20	0.55	0.20	0.24								5654	
346	15	Obh切端	頭部	1.30	0.70	0.15	0.09								5721	
347	15	Obh切端	頭部	1.22	0.60	0.10	0.08								5467	
348	15	Obh切端	頭部	1.00	0.60	0.10	0.08								4987	2
349	15	Obh切端	頭部	0.80	0.50	0.12	0.05								5345	
350	15	Obh切端	頭部	1.90	0.80	0.15	0.31								4959	
351	15	Obh切端	頭部	3.40	0.80	0.20	0.62								4985	5986
352	15	Obh切端	頭部	1.55	0.80	0.17	0.27								4985	
353	15	Obh切端	中間部	1.90	0.80	0.18	0.35								4986	
354	15	Obh各ノ木	中間部	1.90	0.60	0.15	0.18								4948	左半分に鋸状痕
355	15	Obh各ノ木	中間部	0.95	0.55	0.10	0.04								5119	
356	15	Obh切端	中間部	2.32	0.90	0.32	0.66								4956	
357	15	Obh切端	中間部	2.65	1.20	0.30	0.60								5282	
358	15	Obh各ノ木	尾部	1.20	0.80	0.12	0.13								5265	
359	15	Obh各ノ木	尾部	1.05	0.55	0.12	0.04								5094	
360	15	Obh各ノ木	尾部	0.70	0.60	0.10	0.03								5862	
361	15	Obh切端	尾部	1.45	0.60	0.15	0.15								4984	左半分に鋸状痕
362	15	Obh切端	尾部	0.90	0.45	0.08	0.02								5299	
363	15	Obh切端	尾部	1.20	0.55	0.20	0.08								5871	
364	15	Obh切端	尾部	1.45	0.60	0.15	0.12								5714	
365	15	Obh切端	尾部	1.00	0.60	0.10	0.07								5535	
366	15	Obh各ノ木	頭部	0.45	0.50	0.12	0.11								3667	
367	15	Obh各ノ木	頭部	1.30	0.70	0.20	0.36								3992	
368	15	Obh各ノ木	頭部	1.30	0.70	0.20	0.17								3960	
369	15	Obh各ノ木	頭部	1.25	1.05	0.10	0.11								3977	
370	15	Obh各ノ木	頭部	1.00	0.65	0.13	0.09								4037	
371	15	Obh各ノ木	頭部	1.05	0.60	0.10	0.06								3881	
372	15	Obh各ノ木	頭部	0.80	0.90	0.20	0.11								—	一筋
373	15	Obh各ノ木	頭部	0.28	0.62	0.14	0.06								—	一筋
374	15	Obh各ノ木	頭部	0.74	0.42	0.07	0.02								—	一筋
375	15	Obh各ノ木	頭部	0.35	0.50	0.15	0.04								—	一筋
376	15	Obh各ノ木	頭部	1.00	0.60	0.22	0.23								4114	
377	15	Obh各ノ木	頭部	0.25	0.70	0.25	0.30								3997	
378	15	Obh切端	頭部	1.18	0.70	0.20	0.18								—	一筋
379	15	Obh切端	頭部	1.20	0.50	0.12	0.07								3948	
380	15	Obh切端	頭部	1.40	0.50	0.18	0.07								4034	
381	15	Obh切端	頭部	0.95	0.50	0.12	0.05								3921	
382	15	Obh切端	頭部	1.85	0.75	0.17	0.25								3953	
383	15	Obh切端	頭部	1.68	0.45	0.20	0.15								3880	
384	15	Obh切端	頭部	0.90	0.45	0.12	0.08								4111	
385	15	Obh各ノ木	中間部	1.32	1.00	0.25	0.32								4116	
386	15	Obh各ノ木	中間部	2.45	0.95	0.26	0.59								4163	
387	15	Obh各ノ木	中間部	1.35	0.90	0.20	0.29								4164	
388	15	Obh各ノ木	中間部	0.90	0.55	0.12	0.06								3913	
389	15	Obh各ノ木	中間部	0.85	0.50	0.09	0.04								—	一筋
390	15	Obh各ノ木	中間部	1.35	0.40	0.10	0.07								3868	
391	15	Obh各ノ木	中間部	1.80	0.75	0.12	0.10								3818	
392	15	Obh各ノ木	中間部	1.60	0.60	0.30	0.22								4041	
393	15	Obh各ノ木	中間部	1.35	0.70	0.26	0.16								3943	
394	15	Obh切端	中間部	1.20	0.50	0.15	0.11								3896	
395	15	Obh切端	中間部	1.10	0.52	0.15	0.07								4096	
396	15	Obh切端	尾部	0.92	0.65	0.10	0.06								3874	
397	15	Obh各ノ木	尾部	0.90	0.60	0.10	0.05								—	一筋
398	15	Obh各ノ木	尾部	1.80	0.70	0.20	0.20								3866	
399	15	Obh各ノ木	尾部	1.10	0.60	0.10	0.06								—	一筋
400	15	Obh各ノ木	尾部	1.65	0.75	0.15	0.14								4156	
401	15	Obh各ノ木	尾部	1.70	0.70	0.20	0.20								4149	
402	15	Obh各ノ木	中間部	1.35	0.70	0.15	0.11								4155	
403	15	Obh各ノ木	頭部	1.40	0.80	0.10	0.11								4154	
404	15	Obh各ノ木	頭部	1.45	0.80	0.15	0.13								—	一筋
405	15	Obh各ノ木	頭部	0.40	0.65	0.15	0.14								—	一筋
406	15	Obh各ノ木	頭部	1.60	0.60	0.15	0.10								—	一筋
407	15	Obh各ノ木	頭部	1.35	0.65	0.15	0.11								—	一筋
408	15	Obh各ノ木	頭部	0.95	0.60	0.15	0.11								—	一筋
409	15	Obh各ノ木	中間部	1.00	0.50	0.10	0.05								—	一筋
410	15	Obh各ノ木	中間部	0.70	0.65	0.15	0.06								—	一筋
411	15	Obh各ノ木	中間部	0.70	0.55	0.05	0.03								—	一筋
412	15	Obh各ノ木	中間部	0.55	0.40	0.10	0.02								—	一筋
413	15	Obh各ノ木	尾部	1.35	0.60	0.15	0.10								—	一筋
414	16	Obh各ノ木	頭部	1.05	0.60	0.10	0.05								4258	
415	16	Obh各ノ木	頭部	0.75	0.58	0.15	0.05								4275	
416	17	Obh切端	頭部	0.90	0.55	0.15	0.05								4734	
417	18	Obh各ノ木	頭部	1.60	0.50	0.20	0.13								4751	
418	19	Obh各ノ木	頭部	0.80	0.60	0.12	0.06								4799	
419	その他	Obh各ノ木	頭部	1.12	0.72	0.10	0.08								5970	



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43



第52図 1類土器出土状況図

## 第5節 繩文時代草創期の調査成果

### 1 調査の概要

これらの土器は第X層に細石刃及び細石刃核等と同一層の状況で出土した。

各細石刃及び細石刃核のブロックとの出土状況関係はF-79区に9点、E-75区に1点、I-40・41区に4点出土している。また、H-43区では18点が出土している。これらをI類とした。細石器のブロックとの出土状況としては、石器との関係が良くつかめなかった。

### 2 遺物

#### I類（第53図1～19）

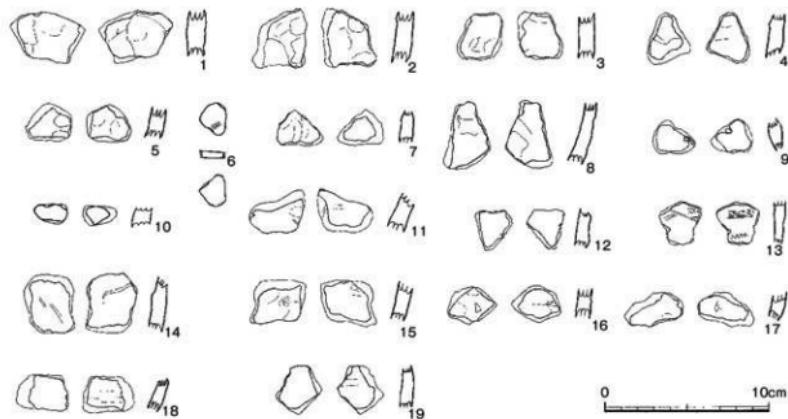
土器片では口縁部と底部がしっかり確認できるものがなく、器形が不明である。これらの土器は通称チヨコ層といわれる粘質土の中に包含されているため、器面の保存状態が悪い。土器は全て無文土器である。

1～9はF-79区の中に出土したものである。1は部位が胴部でやや厚めの深鉢である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。色調は外面に若干灰色の斑点が残るが茶褐色である。内面は膜状に灰色の面が全体的に残り、やや鈍い凸凹の調整面がみられる。2は部位が胴部でやや厚めの土器である。外面は一部はがれているが指圧状の調整痕である。内面は横位の調整痕がみられる。3は部位が胴部でやや厚めの土器である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。若干灰茶褐色の斑点がある。内面は膜状に灰茶褐色の面が全体的に残り、横位の調整面がみられる。4は部位が胴部でやや薄めの土器である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。若干黒茶褐色の斑点がある。内面は膜状に灰茶褐色の面が中央部に残り、調整面がみられる。5は部位が胴部でやや厚めの土器である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。若干灰茶褐色の面が残り丸く丁寧な調整面が想像され、無文である。内面は膜状に灰茶褐色の面が全体的に残り、やや凸凹の調整面がみられる。6はE-75区の中に1点だけ混在して出土している土器である。この土器は半分欠けた状態で、平坦である。よって、器面調整からみて底部の状態に類似している。色調は茶褐色である。7は部位が胴部でやや薄めの土器である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。若干灰茶褐色の面が残り一部剥がれている。内面は膜状に灰茶褐色の面が全体的に残り、やや凸凹の調整面がみられる。8は部位が胴部でやや厚手の土器である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。若干灰茶褐色の斑点がみられる。内面は灰茶褐色の面が部分的に残り、やや凸凹の調整面がみられる。9は部位が胴部でやや薄手の土器である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。若干灰茶褐色の面が残り丸く丁寧な調整面がある。内面は茶褐色の面が一部残っている。10は部位が胴部で厚手の無文土器である。外面は黒茶褐色で横位の筋状の調整痕がみられる。内面は茶褐色で小片のため調整痕は不明である。

11、12、13はF-79区の中の土器である。11は部位が胴部で無文の深鉢である。器面は横位の撫で調整で、外面が茶褐色、内面が黒褐色である。12は薄手の土器である。器面の色調は黒褐色で、器面調整は、内面が研磨気味に丁寧に施し、外面は一部剥げた状態で不明である。13は薄手の土器である。器面の色調は茶褐色で、器面調整は、内面が研磨気味に丁寧に施し、外面は一部剥げた状態で不明である。

H-43区には18点出土した。ここでは、しっかり図化できる2.5cm以上の6点を掲載する。14は

厚手の深鉢胴部である。色調は外面が茶褐色で、内面が灰褐色である。器面調整は、外面が撫でで、内面は粘土の輪積みの積み上げで一部剥げた状態である。15は厚手の深鉢胴部である。色調は外面が茶褐色で、内面が灰茶褐色である。器面調整は、外面が撫でで、内面は横位の撫でである。16は厚手の深鉢胴部である。色調は外面が灰色と茶褐色の斑点で、内面が暗茶褐色である。器面調整は、外面が撫でで、内面は横位の撫でである。17は厚手の深鉢胴部である。色調は外面が灰色と茶褐色の斑点で、内面が黒茶褐色である。器面調整は、外面が撫でで若干凹凸がみられる。内面は横位の撫でである。18は厚手の深鉢胴部である。色調は外面が暗灰色と茶褐色の斑点で、内面が黒茶褐色である。器面調整は、外面が撫でで、内面は横位の撫でである。19は厚手の深鉢胴部である。色調は外面が暗灰色と茶褐色の斑点で、内面が黒茶褐色である。器面調整は、外面が撫でで、内面は横位の撫でである。

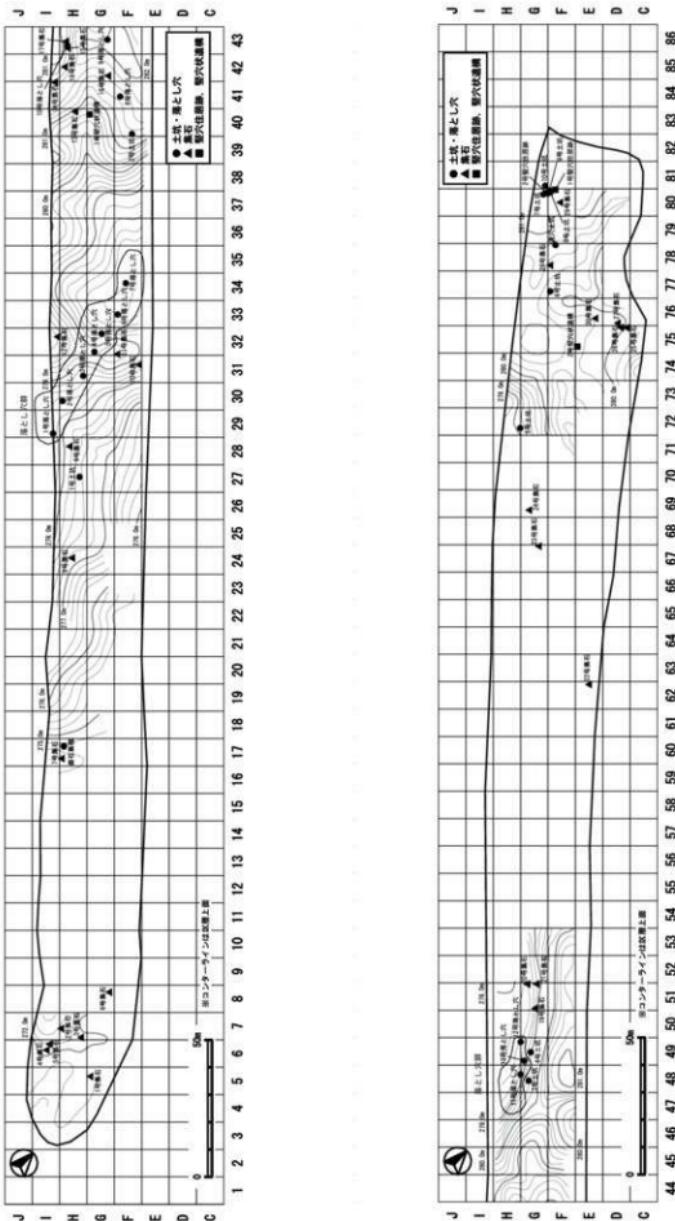


第53図 I類土器

第9表 I類土器観察表

順番	団番号	出土番号	分類1	分類2	区	割	割	文様・彫形(外)	文様・彫形(内)	色調(外)	色調(内)	施上	焼成	備考
1		6722	F	79	X	-	-	撫で	凹凸	茶褐色	灰褐色	黄・石・器・漆	軟質	
2		6716	F	79	X	-	-	指圧痕	撫で	茶褐色	灰褐色	黄・石・器・漆	軟質	
3		6721	F	79	X	-	-	撫で	撫で	茶褐色	灰褐色	黄・石・器・漆	普通	
4		4718	F	79	X	-	-	撫で	撫で	茶褐色	灰褐色	黄・石・器・漆	軟質	
5		4720	F	79	X	-	-	丁寧な撫で	凹凸	茶褐色	灰褐色	黄・石・器・漆	軟質	
6		5234	E	75	X	-	-	撫で	茶褐色	茶褐色	灰褐色	黄・石・角・漆	軟質	
7		4717	F	79	X	-	-	撫で	凹凸	茶褐色	茶褐色	灰・石・器・漆	軟質	
8		4719	F	79	X	-	-	撫で	凹凸	茶褐色	茶褐色	黄・石・器・漆	軟質	
9		4724	F	79	X	-	-	丁寧な撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	灰・石・器・漆	軟質	
10		4723	F	79	X	-	-	筋状	不明	茶褐色	茶褐色	黄・石・器・漆	軟質	
11		8072	I	40	XI	-	-	撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	黄・石・器・漆	軟質	
12		8071	I	40	XI	-	-	丁寧な撫で	茶褐色	茶褐色	茶褐色	黄・石・器・漆	軟質	
13		8062	I	41	X	-	-	不明	丁寧な撫で	茶褐色	茶褐色	黄・石・器・漆	軟質	
14		8070	I	41	XI	-	-	丁寧な撫で	茶褐色	茶褐色	茶褐色	黄・石・器・漆	軟質	
15	53	7571	I	43	X	-	-	撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	黄・石・器・漆	軟質	
16		7567	I	43	XI	-	-	撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	黄・石・器・漆	軟質	
17		7555	I	43	X	-	-	撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	黄・石・器・漆	軟質	
18		7553	I	43	X	-	-	撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	黄・石・器・漆	軟質	
19		7544	I	43	X	-	-	撫で	撫で	暗灰褐色	茶褐色	黄・石・器・漆	軟質	
		7566	I	43	X	-	-	撫で	撫で	暗灰褐色	茶褐色	黄・石・器・漆	軟質	

第54図 繩文早期 遺構位置図



## 第6節 繩文時代早期の調査成果

### 1 調査の概要

VIII層～VIa層までを縄文時代早期該当層として調査した。その結果、遺構は竪穴住居跡2軒、竪穴状遺構2基、連穴土坑1基、土坑10基、集石遺構30基、落とし穴13基、磨石集積1基が検出された（第54図）。

遺物は、前葉から後葉までのII類～XIII類土器と、石鏸、スクレイパー、磨石・敲石類や石皿等の石器が出土した。

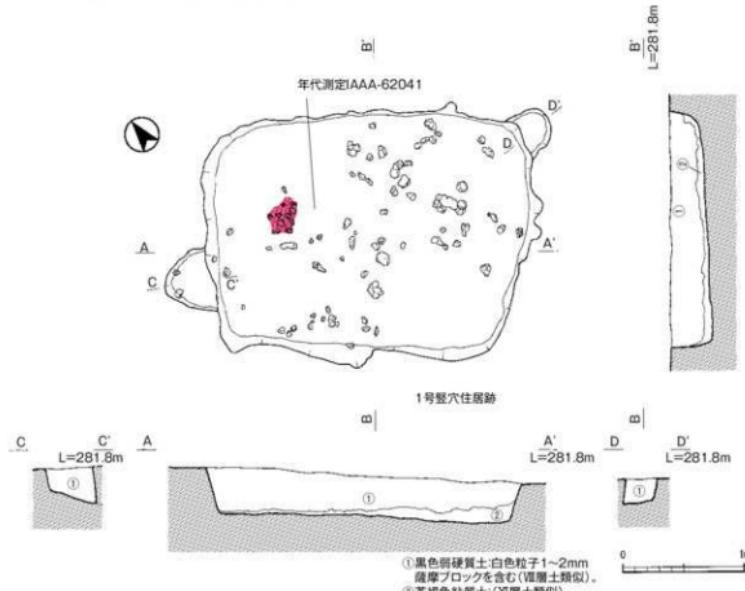
### 2 遺構

#### (1) 竪穴住居跡・竪穴状遺構

竪穴住居跡2軒、竪穴状遺構2基が検出された。柱穴、焼土跡は検出されなかつたが、埋土内炭化物の有無及び平面プランの形状によって竪穴住居跡と竪穴状遺構に分けた。

##### 1号竪穴住居跡（第55図）

F-80・81区のIX層上面で検出された。平面プランは264cm×196cmの隅丸長方形で、軸線はN-30°-Wである。また、長軸東南側と西北側の一部が突出している。検出面から床面までは約30cmで、壁はほぼ垂直に掘り込み、明瞭に確認できる。主体となる埋土はV層土で、径1～2mmの白色粒子および薩摩火山灰のブロックを含んでいる。なかでも埋土中位から下位にかけて炭化物や薩摩火山灰のブロックが多い。なお、炭化物の放射性炭素年代測定の結果は、 $8,960 \pm 40$ (yrBP)である。遺構内からは礫と土器片が数点が出土した。

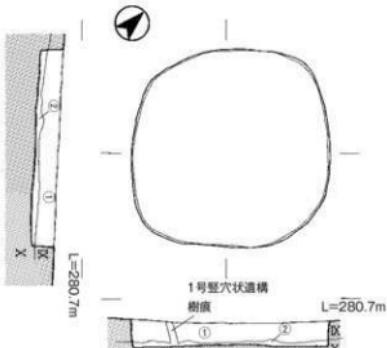


第55図 縄文早期 1号竪穴住居跡

### 2号竪穴住居跡（第56図）

F・G-80区のIX層上面で検出された。平面プランは200cm×170cmの方形、軸線はN-67°-Eである。検出面から床面までは7cmで、壁はほぼ垂直に掘り込み、明瞭に確認できる。

埋土は、径1~2mmの白色粒子を含んだVII層土である。1号竪穴住居跡と隣接する。



- ① 黒色土(10YR2/1):径1~2cm程度のオレンジ色のバニス(P13)と径1~2mm程度の白いバニスを少量含む。しまりややあり、粘りあり。
- ② 黒色土(10YR1.7/1):①とX層が1:2くらいの割合で混じっているようである。粘質。

### 2号竪穴状遺構（第56図）

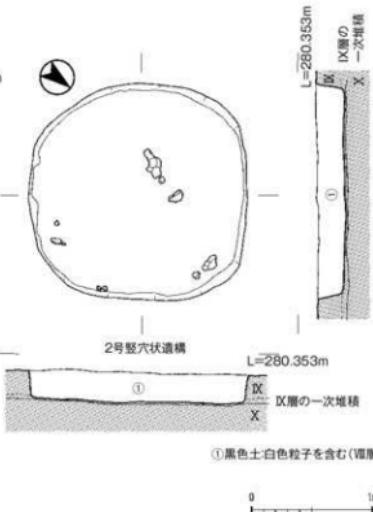
E・F-75区のIX層上面で検出された。平面プランは180cm×176cmの略円形、軸線はN-63°-Eである。検出面から床面までは25cmで、壁は垂直に掘り込み、明瞭に確認できる。

埋土はVII層土で、径1~3mmの桜島P13と思われる輕石と薩摩火山灰層のブロックが混在している。遺構内で焼土跡や柱状ピットは検出されなかった。



### 1号竪穴状遺構（第56図）

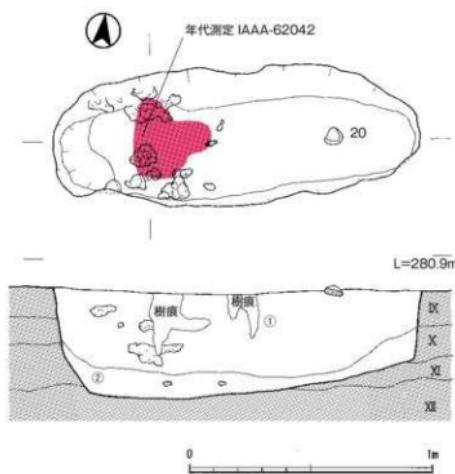
G-40区のIX層上面で検出された。平面プランは162cm×162cmの略円形、軸線はN-30°-Wである。検出面から床面までは18cmで、壁は垂直に掘り込み、明瞭に確認できる。



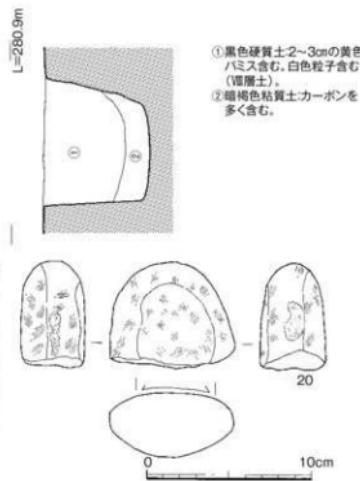
第56図 繩文早期 2号竪穴住居跡、1号・2号竪穴状遺構

## (2) 連穴土坑 (第57図)

F-78区のIX層上面において連穴土坑(炉穴)を1基検出した。検出面における平面形は長径150cm、短径54cmの楕円形で、検出面からの深さは40cmである。埋土は上位のVII層該当の黒色硬質土が大部分を占め、底面近くに暗茶褐色粘質土が約10cm堆積している。X層を掘り抜いており、東側はXI層を底面とし、西側はXII層を底面としている。長径はおおよそ東西方向を向いている。連穴土坑のブリッジに相当する部分は薩摩火山灰層で作られたと想定され、おそらく崩落した後、埋土が堆積したため底面付近に薩摩火山灰層がブロック状に存在する。また、検出面より磨石・敲石が1点出土している(第58図)。土坑底面の煙道該当部分手前に微量の炭化物が散在し、側面には焼土跡らしき色の変化がわずかに認められた。この炭化物の放射性炭素年代測定結果は、 $8,950 \pm 40$  (yrBP) であった。また、焼土部分と想定される部分の帶磁率を測定したところ、周囲よりも高い測定値が得られた。



第57図 繩文早期 連穴土坑



第58図 繩文早期 連穴土坑内出土石器

第10表 繩文早期 連穴土坑計測表

探査番号	番号	検出区	検出面	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
57	-	F-78	Ⅸ層	150	54	40	年代測定

第11表 繩文早期 連穴土坑内出土石器観察表

探査番号	因番号	取上番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
58	20	4218	磨石・敲石	砂岩	6.5	7.7	4.0	280.0	

### (3) 土坑

#### 1号土坑（第59図）

H-27区のIX層で検出された。平面プランは長辺118cm、短辺51cmの長方形状で、長辺西側の一部が突出している。検出面からの深さは51cmである。

#### 2号土坑（第59図）

F-40区のIX層で検出された。平面プランは長辺116cm、短辺75cmの楕円形で、検出面からの深さは53cmである。南北方向に長径をもつ。長径の西北側に1か所と南側に2か所小穴がみられる。小穴の深さはそれぞれ50cm、5cm、40cmである。また、遺構内には薩摩火山灰層のブロックが入り込んでいる。

#### 3号土坑（第60図）

G-48区のIX層の傾斜面で検出された。平面プランは長辺87cm、短辺73cmの方形で、検出面からの深さは49cmである。底面は西側に傾斜し、長辺東側に深さ85cmの小穴がみられる。平面プランがはっきりしており、人為的に掘られた可能性が高い。

#### 4号土坑（第60図）

G-49区のIX層で検出された。平面プランは長辺108cm、短辺54cmの楕円形で、検出面からの深さは73cmである。掘り込み形状はバケツ状で、底面は南側に傾斜している。279mのコンターライン上の傾斜地に掘られ、南北方向に長径をもつ。本遺構の近くには落とし穴があり、落とし穴の可能性も考えられる。

#### 5号土坑（第61図）

G・H-71区のVII層で検出された。平面プランは長辺207cm、短辺100cmの楕円形で、検出面からの深さ47cmである。埋土はVIIb層が主体である。

#### 6号土坑（第61図）

F-77区のIX層で検出された。平面プランは長辺105cm、短辺96cmの円形で、検出面からの深さは13cmである。底面は平坦面をなしている。

#### 7号土坑（第61図）

G-80区のIX層で検出された。平面プランは長軸126cm、短軸32cmの不定形で、検出面からの深さは18cmである。底面は平坦面をなしている。長軸南西側に深さ11cmの小穴がみられる。

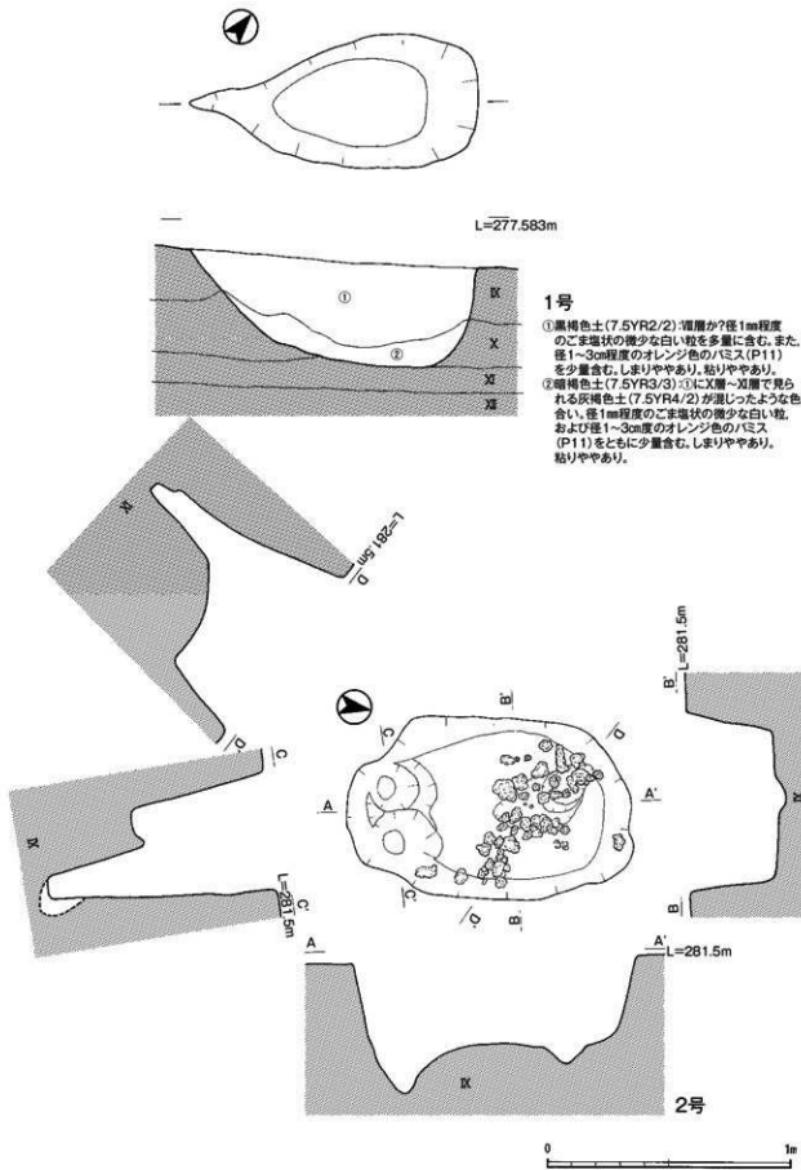
なお、7号から9号土坑は1号竪穴住居跡と切り合っている。しかし、埋土の違いから3基の土坑の方が1号竪穴住居跡より古いと判断した。

#### 8号土坑（第62図）

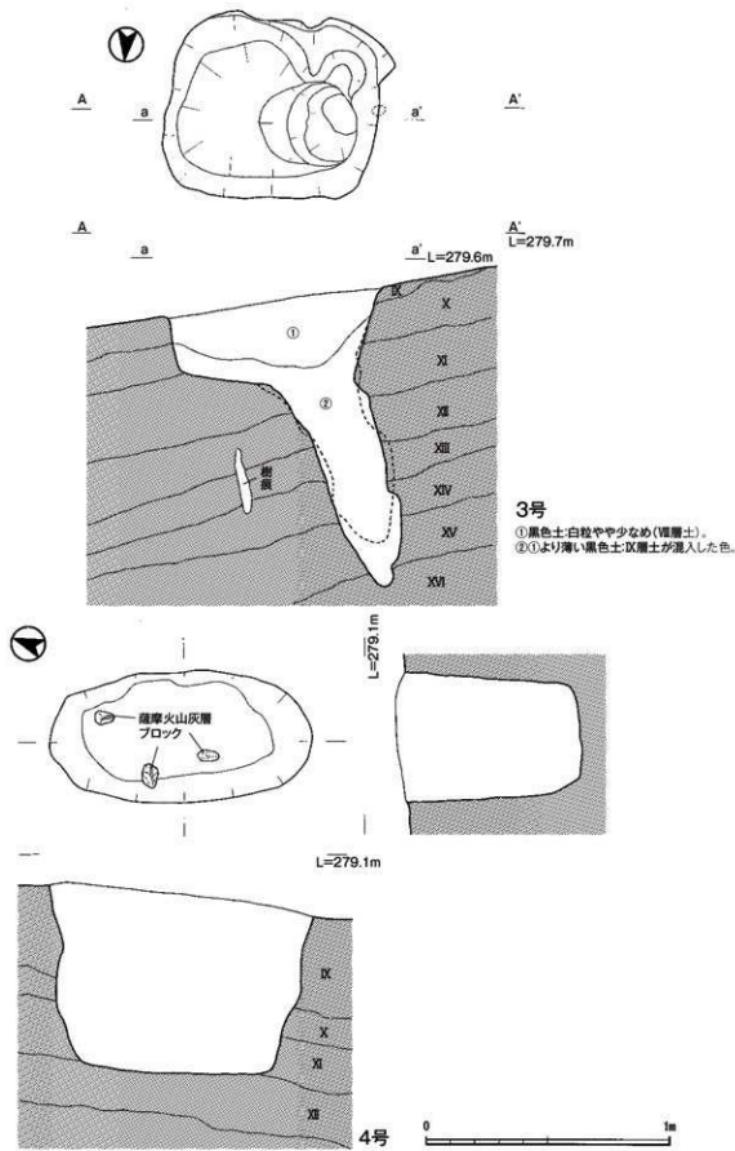
F・G-80区のIX層で検出された。平面プランは長軸117cm、短軸48cm、58cmの不定形で、検出面からの深さは26cmである。底面は平坦面をなしている。9号土坑と切り合う。

#### 9号土坑（第62図）

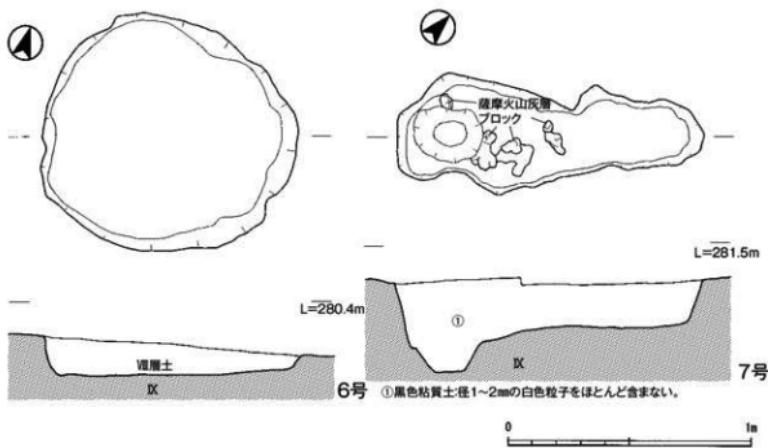
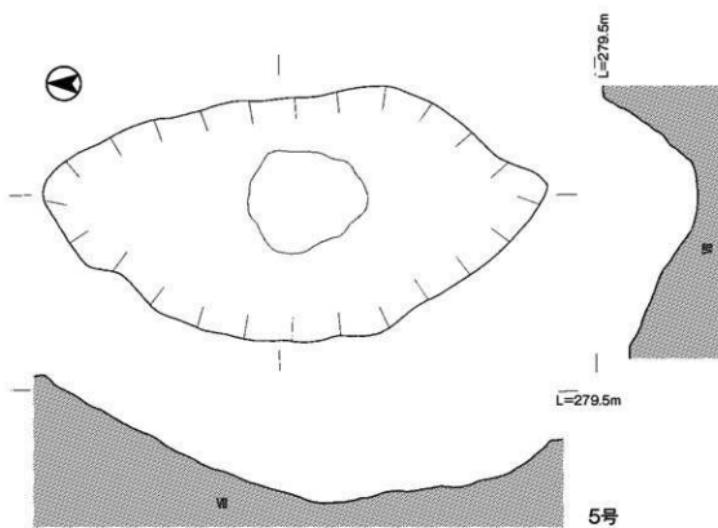
F・G-80区のIX層で検出された。平面プランは長辺69cm、短辺68cmの正方形状で、検出面からの深さは32cmである。底面は平坦で掘り込み壁はほぼ垂直に立ち上がる。



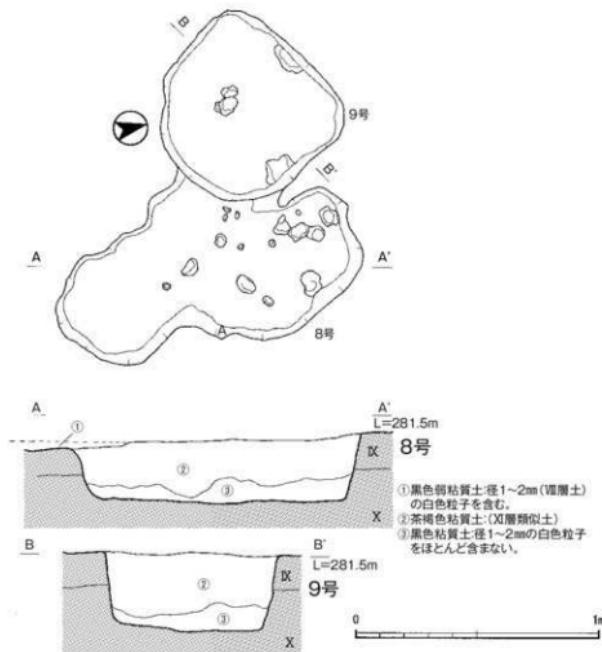
第59図 繩文早期 1号，2号土坑



第60図 縄文早期 3号, 4号土坑



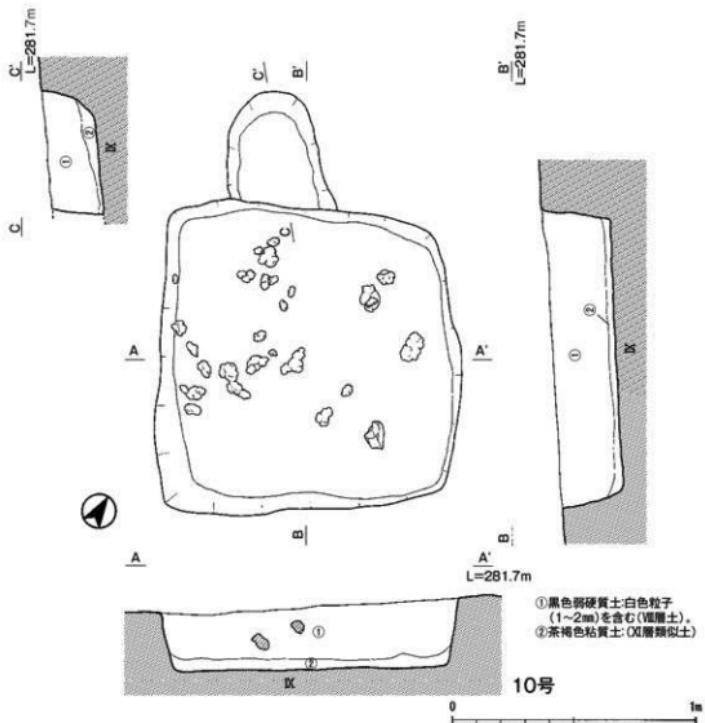
第61図 繩文早期 5号～7号土坑



第62図 繩文早期 8号、9号土坑

#### 10号土坑（第63図）

G-81区のIX層で検出された。平面プランは長辺124cm、短辺122cmの正方形形状で、検出面からの深さは26cmである。また、短辺北側の一部が突出している。底面は平坦面をなしている。埋土中より疊1点と落ち込みと思われる土師甕1点が出土した。他は薩摩火山灰層のブロックを固化した。炭化物はほとんど無く、床面付近の硬化面、焼土跡、柱穴跡などは確認できなかった。



第63図 繩文早期 10号土坑

第12表 繩文早期 土坑計測表

排列番号	番号	検出区	検出面	長辺・長辺・長軸(cm)	短辺・短辺・短軸(cm)	深さ(cm)	備考
59	1	H-27	Ⅴ層	118	51	51	
	2	F-40	Ⅴ層	116	75	37	
60	3	G-48	Ⅴ層	87	73	35	
	4	G-49	Ⅴ層	108	54	73	
61	5	G-H-71	Ⅴ層	207	100	47	
	6	F-77	Ⅴ層	105	96	13	
	7	G-80	Ⅴ層	126	32	18	
62	8	F-G-80	Ⅴ層	117	48,58	26	
	9	F-G-80	Ⅴ層	69	68	32	
63	10	G-81	Ⅴ層	124	122	26	

#### (4) 集石遺構

30基検出された。形態等により以下のように分類した。

I類集石遺構：掘り込みを伴い、礫の詰まり方で2類に細分した。

- ・ Ia類（掘り込みを伴い、礫が多い）
- ・ Ib類（掘り込みを伴い、礫が少ない）

II類集石遺構：掘り込みは確認されない。礫のみで構成され、礫の残存状況からII類に細分した。

- ・ IIa類（礫が集中する）
- ・ IIb類（散礫状態）

##### 1号集石（Ib類）（第64図）

G-5区のVII層で検出された。107cm×106cmの範囲に安山岩9個、頁岩6個、砂岩2個の計17個の礫が散在している。中央部にVII層とVIII層の混土層の入った深さ9cm掘り込みが確認できる。

##### 2号集石（Ib類）（第64図）

H-7区のVIII層で検出された。88cm×62cmの範囲に安山岩7個、頁岩1個、砂岩2個の計10個の礫が散在している。礫の大きさは小～中型で被熱している。

##### 3号集石（Ib類）（第64図）

H-7区のVII層で検出された。247cm×175cmの範囲に礫が散在している。

##### 4号集石（Ib類）（第65図）

I-6区のVII層で検出された。172cm×108cmの範囲に安山岩9個の礫が散在している。

##### 5号集石（Ib類）（第65図）

I-6区のVIII層で検出された。156cm×52cmの範囲に安山岩17個の礫が散在している。

##### 6号集石（Ib類）（第65図）

G-8区のVII層で検出された。187cm×186cmの範囲に礫が散在している。

##### 7号集石（IIa類）（第66図）

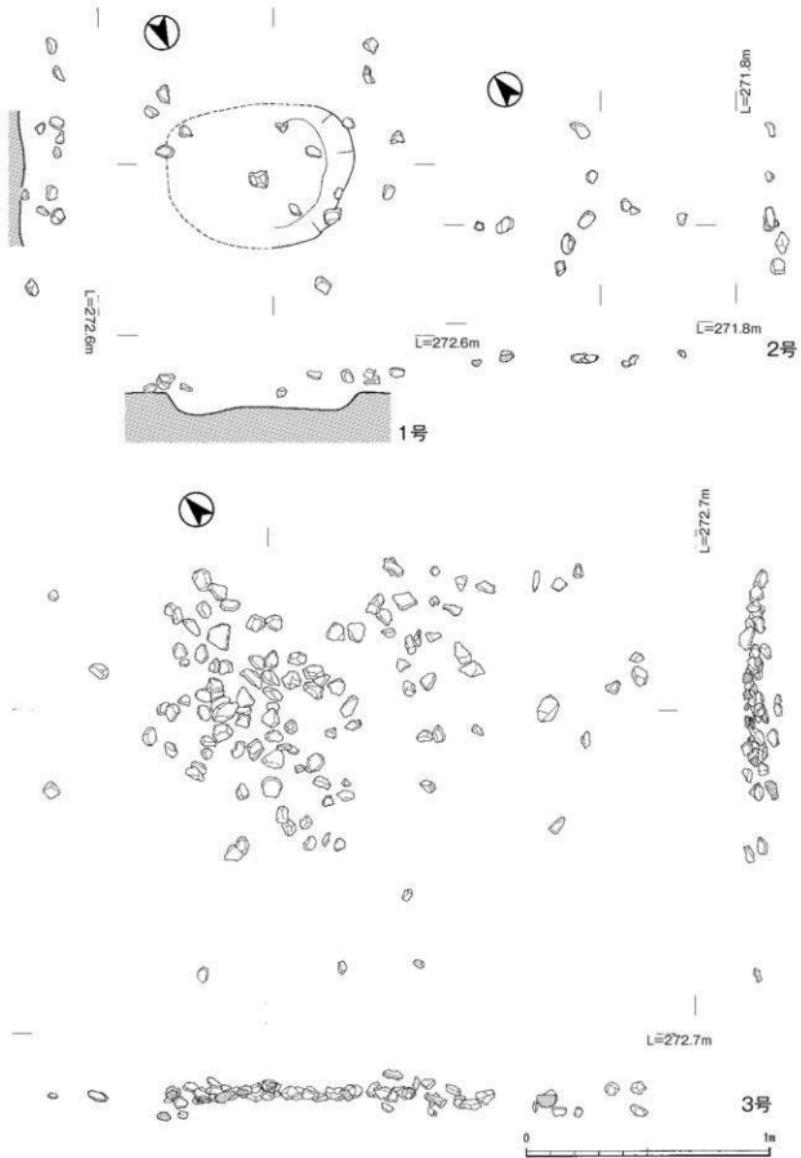
H-17区のVII層で検出された。127cm×75cmの範囲に安山岩56個、頁岩ほか7個の計63個の礫が集中している。礫の多くは被熱している。遺構内から土器片1点、石皿1点が出土した（第67図）。

##### 8号集石（IIa類）（第66図）

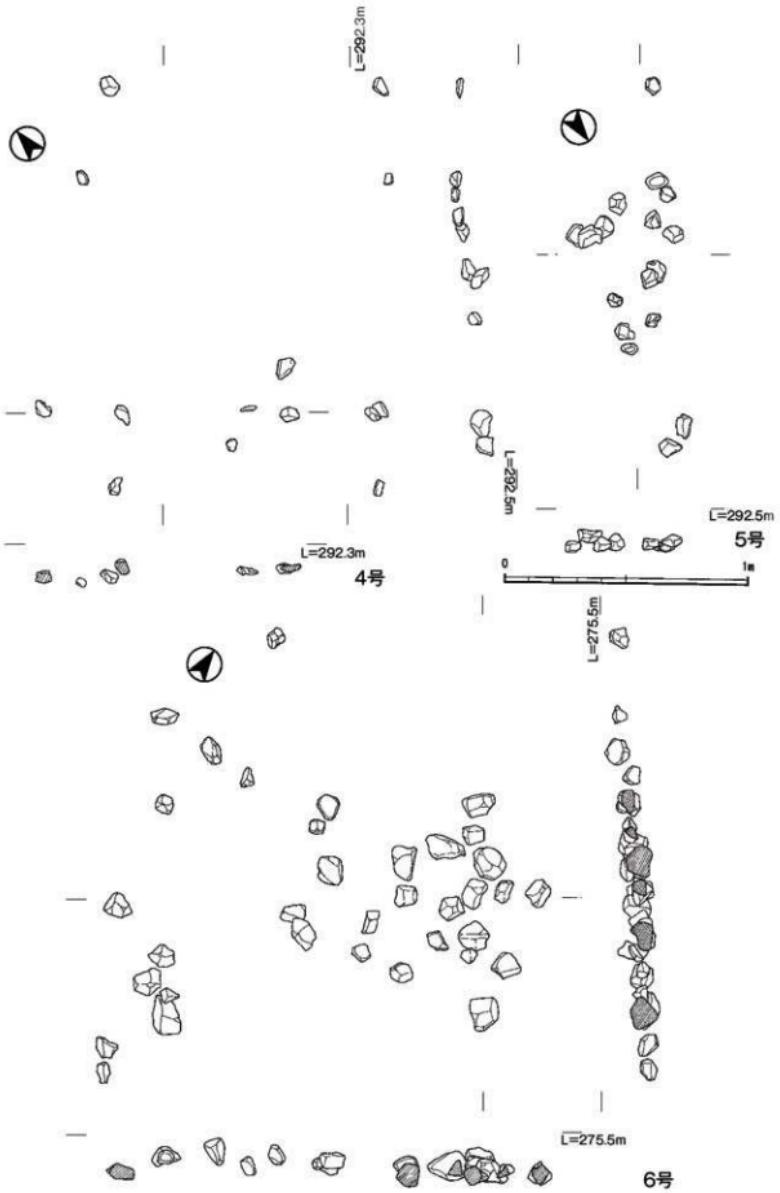
H-24区で検出された。95cm×60cmの範囲に安山岩56個、頁岩5個の計61個の礫が集中している。掘り込みは確認できなかった。

##### 9号集石（IIb類）（第66図）

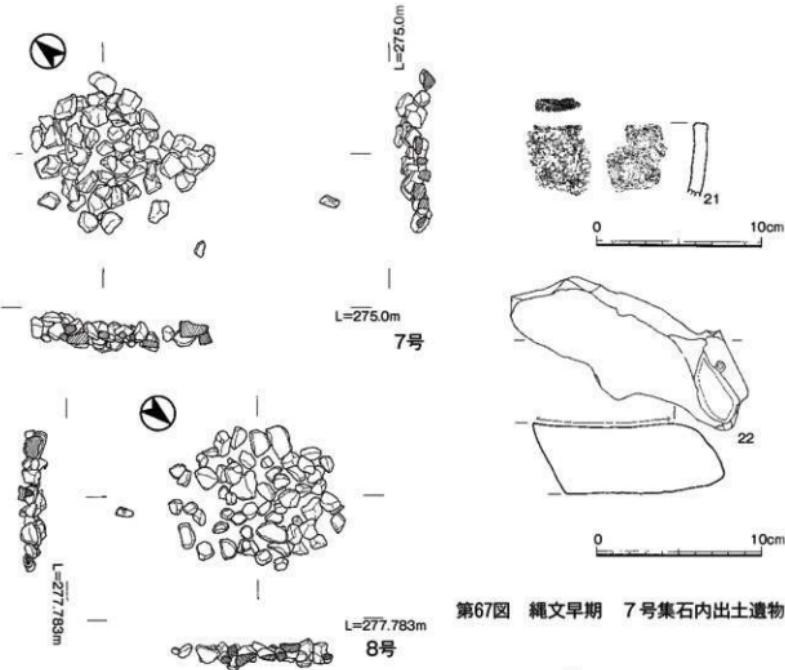
H-28区のVII層で検出された。145cm×110cmの範囲に安山岩8個、頁岩4個、砂岩ほか3個の計15個の礫が散在している。長軸南側に落ち込みがみられるが、遺構の掘り込みかどうかは不明である。



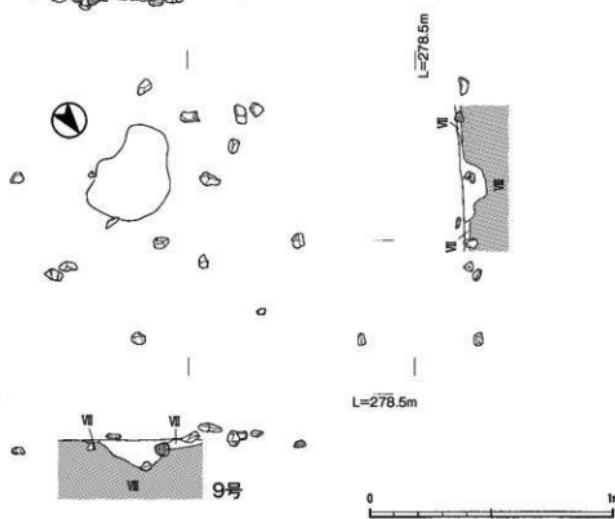
第64図 繩文早期 1号～3号集石



第65図 繩文早期 4号～6号集石



第66図 繩文早期 7号~9号集石



第67図 繩文早期 7号集石内出土遺物

第13表 7号集石内出土土器観察表

拠出番号	国番号	分類	器種	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考
67	21	算c	深鉢	撫子文	撫で	茶褐色	茶褐色	長・石・金雲・砂	硬質	

第14表 7号集石内出土石器観察表

拠出番号	国番号	取上番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
67	22	108-18	石皿	安山岩	9.5	14.6	4.4	610.0	

**10号集石(Ⅱb類)(第68図)**

F-31区のVII層で検出された。197cm×120cmの範囲に安山岩10個、砂岩6個の計16個の礫が散在している。礫は拳よりやや小さめのものが多い。被熱しているが、激しく赤化したり破碎したりした様子はみられない。

**11号集石(Ⅰa類)(第69図)**

F-32区のIX層で検出された。長径122cm、短径121cm、礫上面から深さ32cmのはば円形の掘り込みが確認できた。礫は掘り込み内に集中して、掘り込み底面には炭化物が多く出土した。

**12号集石(Ⅱb類)(第69図)**

I-32区のVII層で検出された。306cm×242cmの範囲に安山岩27個、頁岩7個、砂岩6個の計40個の礫が散在している。礫は全て被熱しているが、掘り込みや焼土跡、炭化物は確認できなかった。

**13号集石(Ⅱb類)(第70図)**

H-40区のVII層で検出された。194cm×150cmの範囲に安山岩21個、頁岩2個、砂岩3個の計26個の礫が散在している。礫の多くは被熱している。

**14号集石(Ⅱa類)(第70図)**

I-41区のVII層で検出された。111cm×104cmの範囲に礫が集中している。遺構の近くに横転の痕跡があるため、影響を受けている可能性がある。炭化物も少々出土した。

**15号集石(Ⅱa類)(第70図)**

H-43区で検出された。43cm×32cmの範囲に安山岩4個、砂岩1個の計5個の礫が集中している。

**16号集石(Ⅱb類)(第71図)**

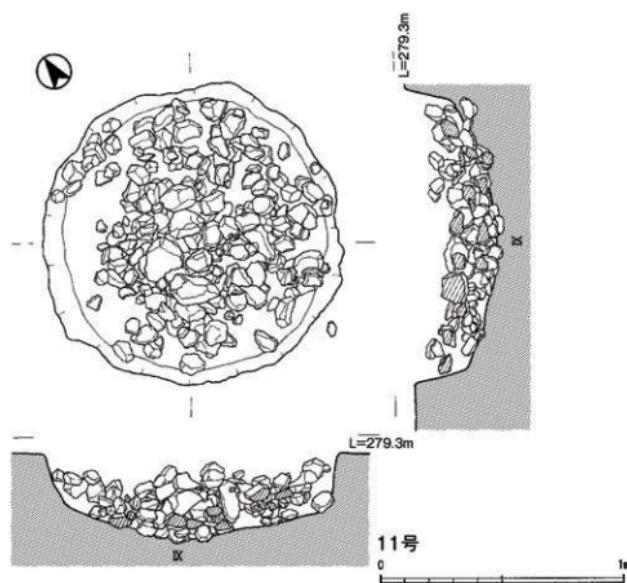
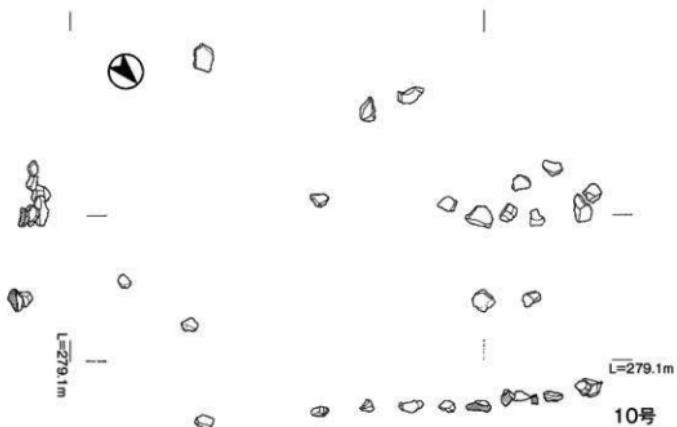
G-42区のVII層で検出された。215cm×155cmの範囲に安山岩25個、砂岩3個の計28個の礫が散在している。遺構の近くには樹痕や横転の箇所が多くみられた。

**17号集石(Ⅱb類)(第71図)**

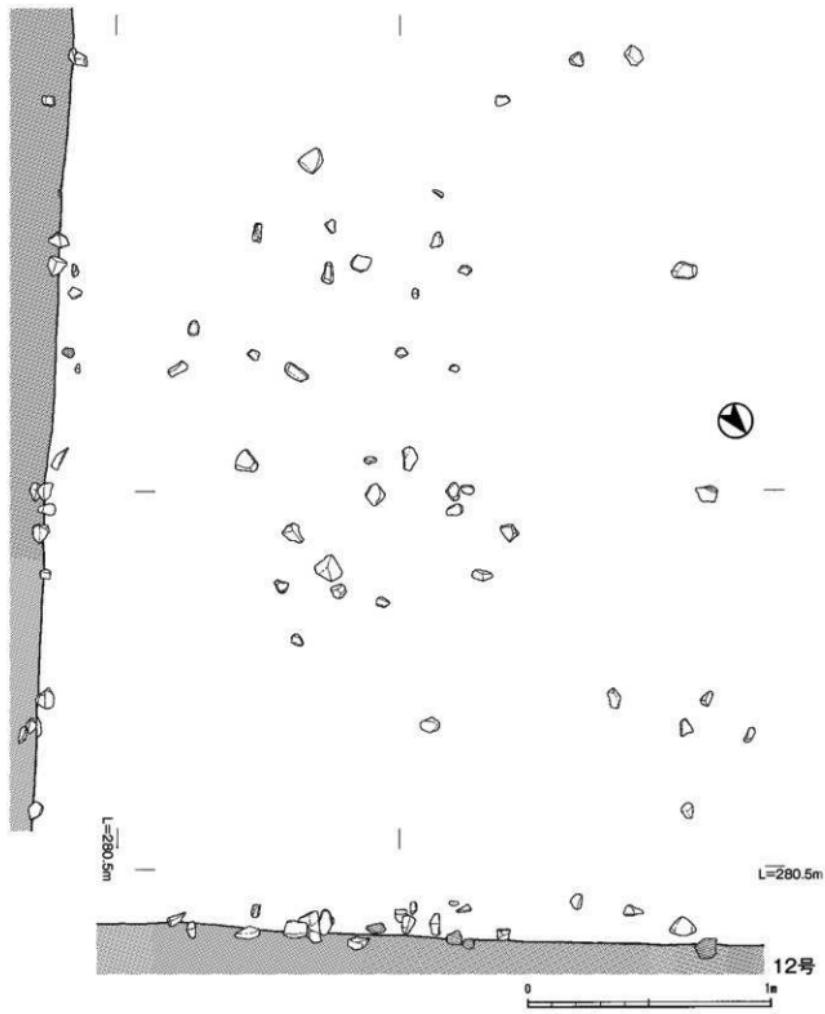
H-43区のVII層で検出された。165cm×161cmの範囲に安山岩26個、頁岩1個、砂岩1個の計28個の礫が散在している。

**18号集石(Ⅱb類)(第72図)**

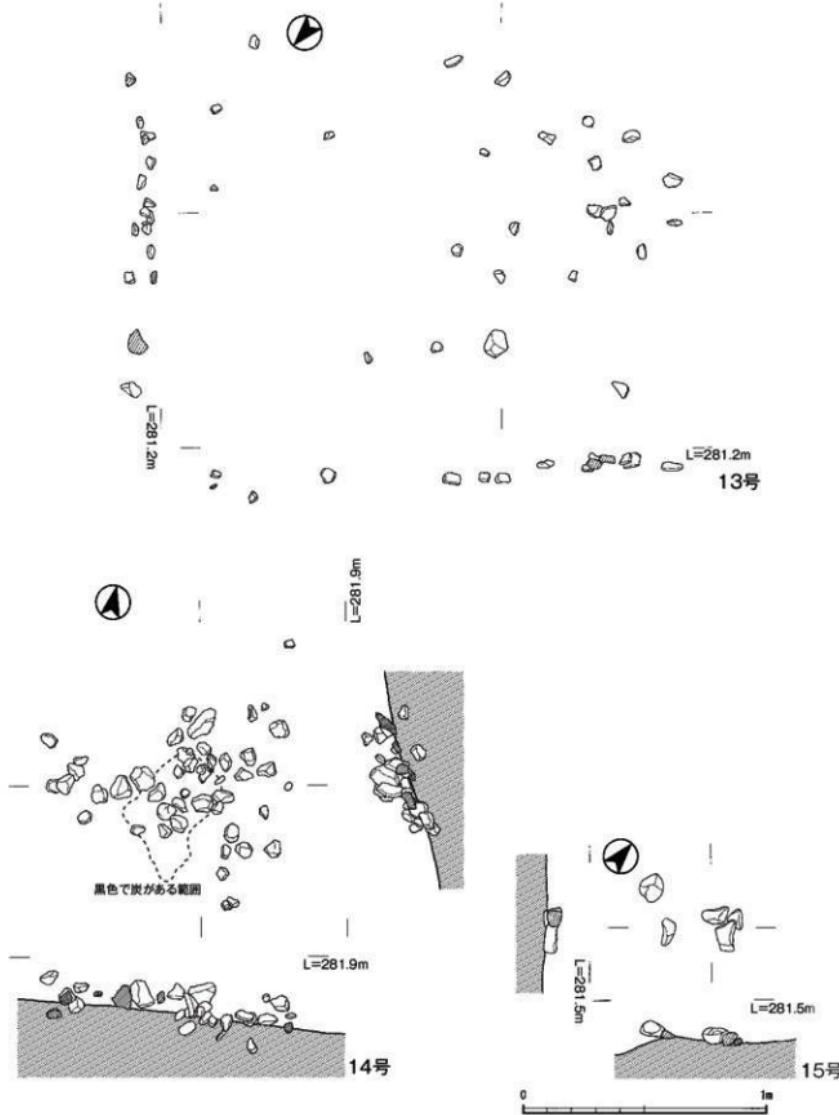
H-42区のVII層で検出された。246cm×191cmの範囲に安山岩15個、頁岩5個、砂岩12個の計32個の礫が緩やかな傾斜地に散在している。



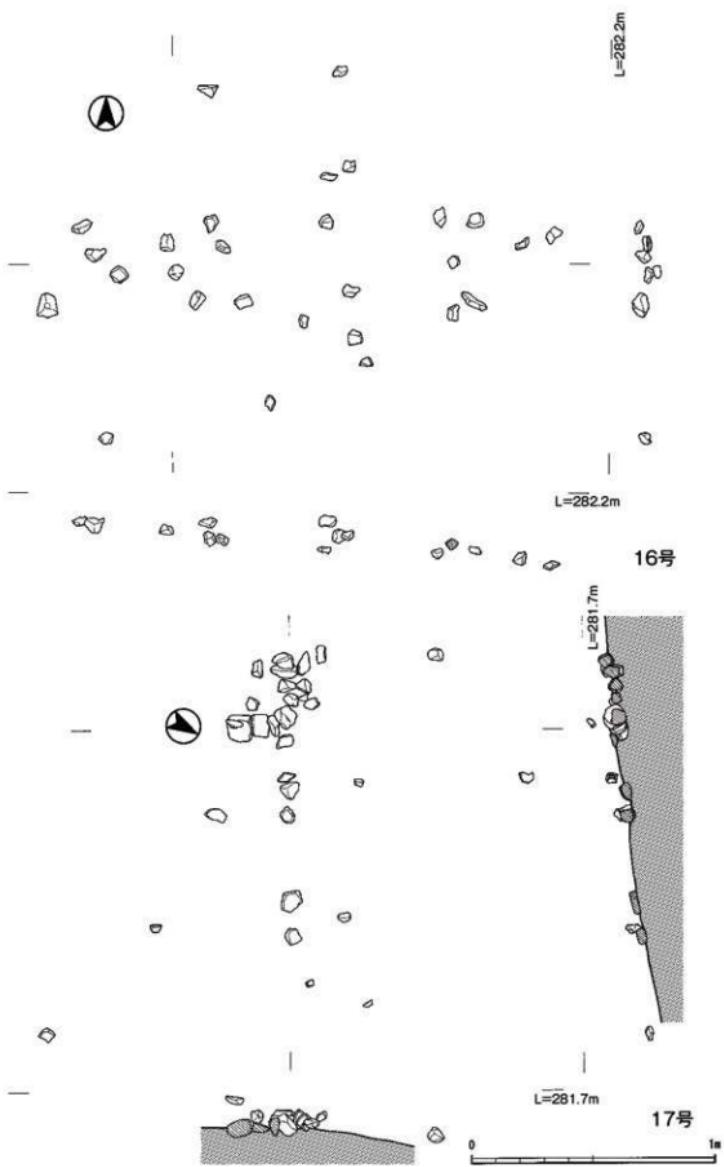
第68図 繩文早期 10号, 11号集石



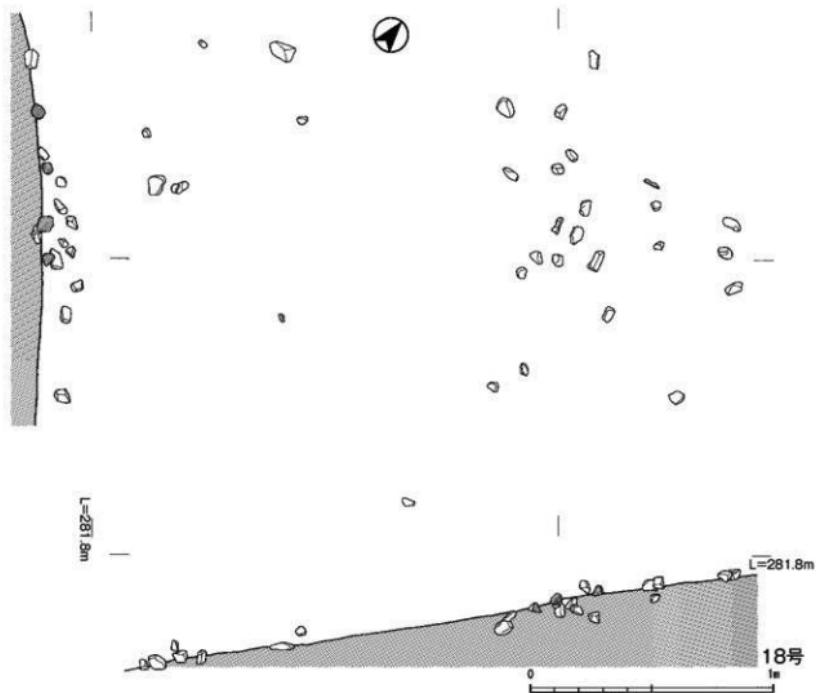
第69図 桶文早期 12号集石



第70図 繩文早期 13号～15号集石



第71図 繩文早期 16号, 17号集石



第72図 繩文早期 18号集石

#### 19号集石（IIb類）（第73図）

G-51区のVII層で検出された。210cm×144cmの範囲に礫が散在している。被熱や破碎した礫は少ない。掘り込み、焼土跡、炭化物は確認されなかった。

#### 20号集石（Ia類）（第73図）

G-51区のVia層で検出された。70cm×50cmの範囲内に長径42cm、短径36cm、礫上面から深さが21cmのほぼ円形の掘り込みが確認できた。礫は被熱による赤化と破碎がみられるが、炭化物の出土は少ない。

### 21号集石（Ⅱa類）（第73図）

G-51区のVII層で検出された。26cm×15cmの範囲に4個の角礫で構成されている。うち2個は赤化を確認できた。掘り込み、焼土跡、炭化物は確認されなかった。

### 22号集石（Ⅱb類）（第73図）

E-62区のVII層で検出された。73cm×72cmの範囲に20個の礫が散在している。

### 23号集石（Ⅱb類）（第74図）

G-67区のVIa層で検出された。186cm×115cmの範囲に拳大の角礫が約30個散在している。

### 24号集石（Ⅱb類）（第74図）

G-69区のVII層で検出された。185cm×112cmの範囲に34個の礫が全体的に散在している。礫の一部に被熱や破碎したものがみられた。

### 25号集石（Ⅱa類）（第75図）

D-75区の25トレンチ内のVII層で検出された。65cm×55cmの範囲に拳大の安山岩の礫が30個ほど集中している。掘り込みは確認されなかった。遺構内東側に円筒形土器の底部が出土した（第76図）。厚手の土器で底部は平底である。器面調整は外面・底面ともに丁寧な撫で調整で、内面は粗い。器面には貼り付け部分がみられる。

### 26号集石（Ⅱb類）（第75図）

D-75区の25トレンチ内のVII層で検出された。93cm×82cmの範囲に25個の礫が散在している。北東側約2mに25号集石が検出した。礫の多くは安山岩で5cm以下の大きさである。

### 27号集石（Ⅱb類）（第75図）

D-76区のVII層で検出された。130cm×110cmの範囲に18個の礫が散在している。

### 28号集石（Ⅱb類）（第75図）

F-78区のVII層で検出された。115cm×104cmの範囲に22個の礫が散在している。

### 29号集石（Ⅰa類）（第78図）

F-80区のVII層で検出された。227cm×178cmの範囲の中央部に礫が密集している。長径110cm、礫上面から深さ25cmの掘り込みが確認できた。遺構内からは礫器が1点出土した（第77図）。また、炭化物が約120cm×約100cmの範囲で散在している。なお、炭化物の放射性炭素年代測定の結果は、 $8,780 \pm 40$  (yrBP) である。

### 30号集石（Ⅱb類）（第78図）

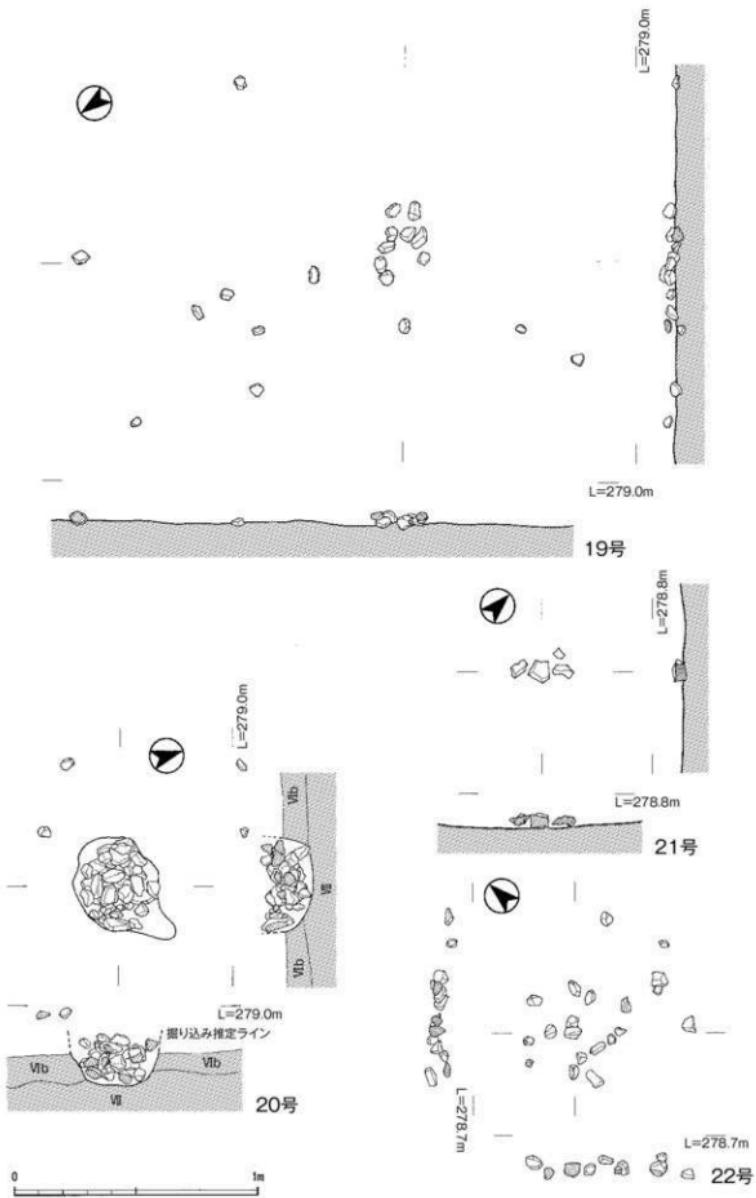
E-76区のVII層で検出された。140cm×88cmの範囲に16個の礫が散在している。

第15表 25号集石内出土土器観察表

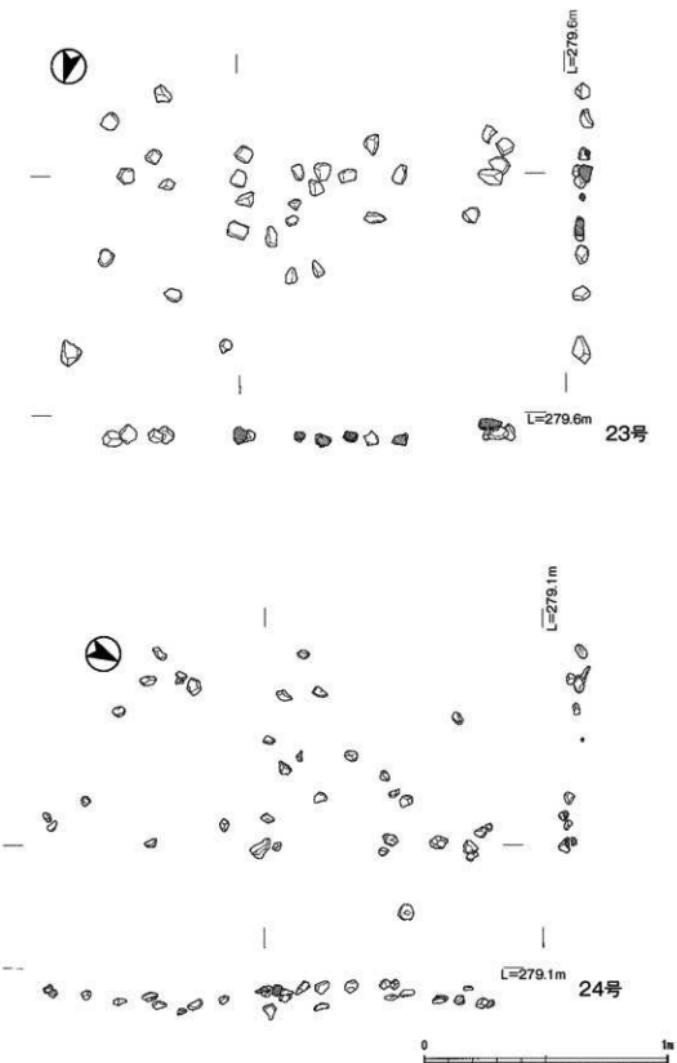
辨別番号	国番号	分類	器種	文様・調整（外）	文様・調整（内）	色調（外）	色調（内）	胎土	焼成	備考
76	23	Ⅱa	深鉢	丁寧な撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	長・石・角	硬質	底径14.0cm

第16表 29号集石内出土石器観察表

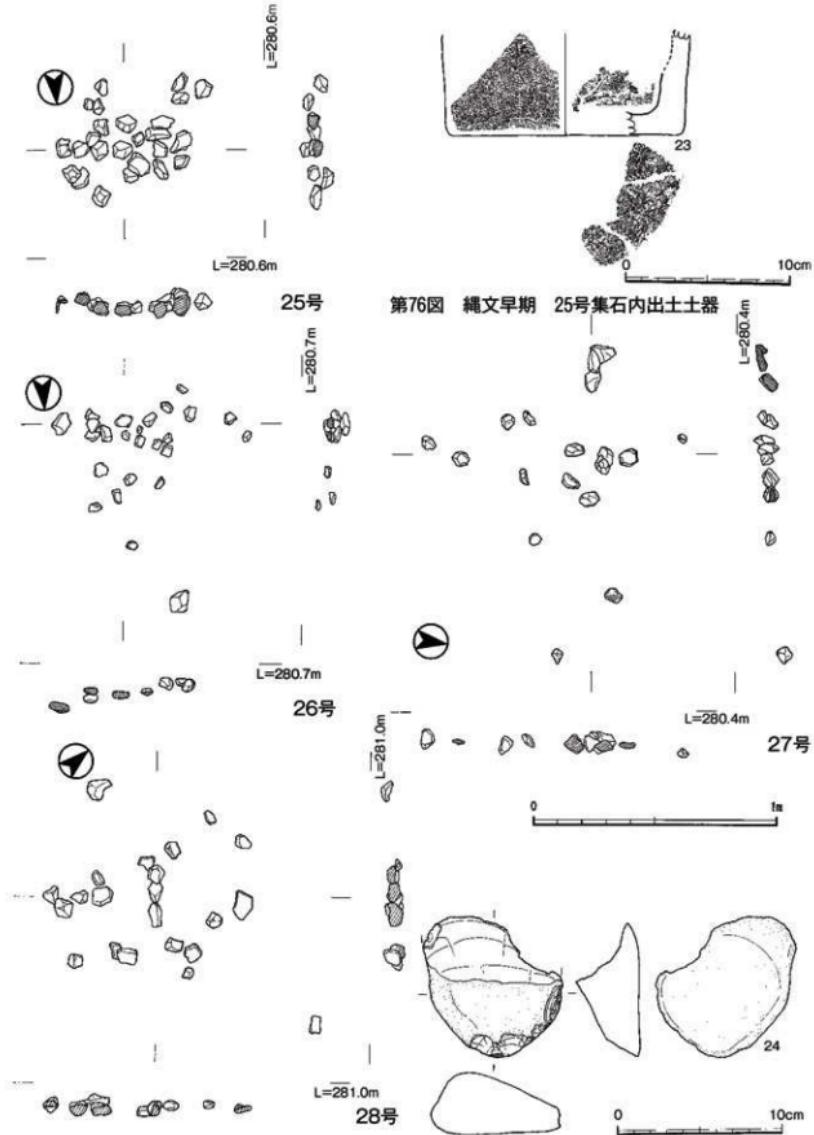
辨別番号	国番号	取上番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
77	24	4860	礫器	安山岩	8.7	8.6	3.8	250.0	



第73図 繩文早期 19号～22号集石

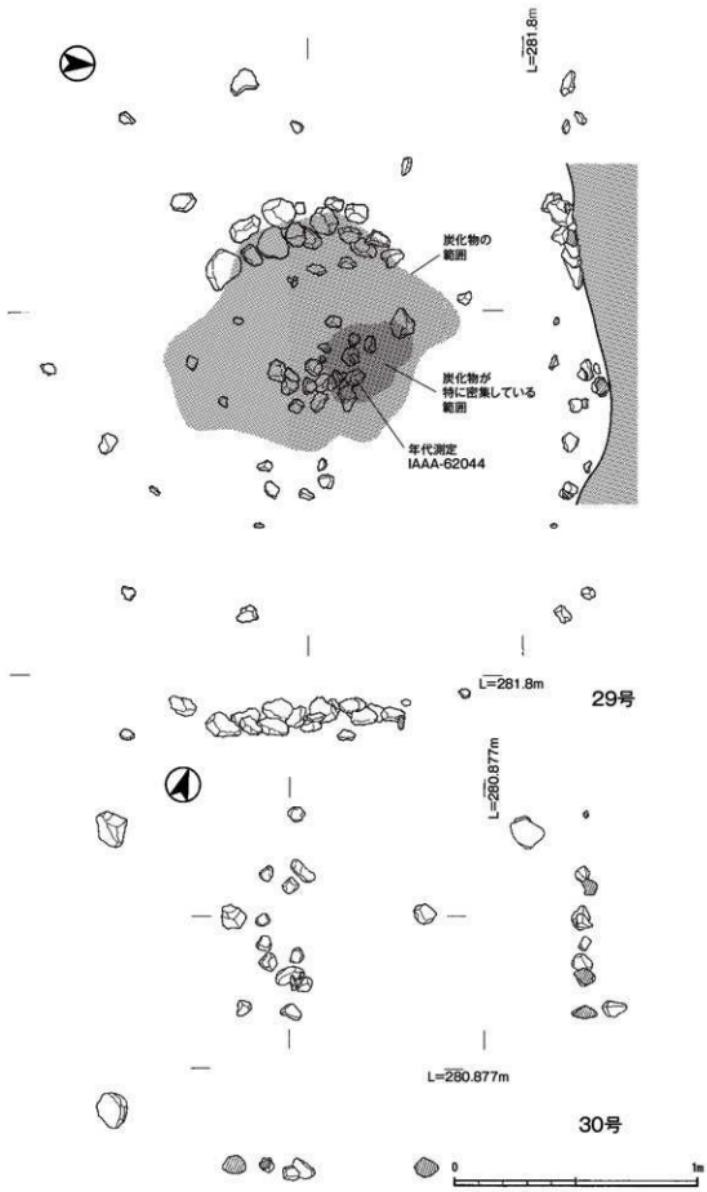


第74図 繩文早期 23号, 24号集石



第75図 繩文早期 25号～28号集石

第77図 繩文早期 29号集石内出土石器



第78図 繩文早期 29号, 30号集石

## (5) 落とし穴

縄文時代早期の落とし穴は13基検出された。遺構の形状は楕円形または長楕円形で、全ての遺構に小ビットが1か所検出された。また、落とし穴群として2群を認定した。1つは、H-29区からF-34区にかけて帶状に検出された7基で、G-32区の4号落とし穴を中心に、南北方向になだらかに下って検出された。もう1つは、G・H-48・49区内で隣接して検出された3基である。

### 1号落とし穴（第79図）

I-29区のIX層で検出された。平面プランは長径139cm、短径89cmの楕円形で、検出面からの深さは145cmである。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦面をなし、中央に直径18cm、深さ59cmの小ビットが検出された。主体となる埋土はVIII層で、埋土中には、大きさが5～25mmのオレンジ色バミス、5～15mmの灰白色バミスが全体的に混入している。

### 2号落とし穴（第79図）

H-30区のIX層で検出された。平面プランは長径110cm、短径65cmの楕円形で、検出面からの深さは136cmである。掘り込み形状はバケツ状で、底面は平坦面をなし、中央に直径10cm、深さ38cmの小ビットが検出された。埋土はレンズ状に堆積している様相が観察される。

### 3号落とし穴（第80図）

H-31区で検出された。平面プランは長径134cm、短径82cmの楕円形で、検出面からの深さは152cmである。東西方向に長径をもつ。底面は平坦面をなし、中央に直径16cm、深さ68cmの小ビットが検出された。

### 4号落とし穴（第81図）

G-32区のIX層で検出された。平面プランは長径140cm、短径97cmの楕円形で、検出面からの深さは148cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦面をなし、中央に直径9cm、深さ42cmの小ビットが検出された。遺構の長径方向は279mのコンターラインに並行するような形で掘られている。埋土からは、最終的にVIII層の黒褐色土を一気に充填した様相が観察される。

### 5号落とし穴（第81図）

G-32区のIX層で検出された。平面プランは長径115cm、短径71cmの楕円形で検出面からの深さは149cmである。底面の中央に直径12cm、深さ41cmの小ビットが検出された。主体となる埋土はVII層で①の埋土中には桜島P13が多く散在する。東西方向に長径をもつ。

### 6号落とし穴（第82図）

F-33区のIX層で検出された。平面プランは長径123cm、短径78cmの楕円形で、検出面からの深さは135cmである。掘り込み形状はほぼバケツ状で、底面は平坦面をなし、中央に直径10cm、深さ65cmの小ビットが検出された。主体となる埋土はVIII層である。遺構は東西方向に長径をもち、斜面で検出した落とし穴群7基のうち、最も標高の低い位置で検出された。

### 7号落とし穴（第82図）

F-34区のIX層で検出された。平面プランは長径107cm、短径60cmの楕円形で、検出面からの深さは135cmである。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦面をなし、中央に直径11cm、深さ51cmの小ビットが検出された。東西方向に長径をもち、最も標高の低い位置で検出された。

### 8号落とし穴（第82図）

F-41区のIX層で検出された。平面プランは長径118cm、短径63cmの楕円形で、検出面からの深さは115cmである。掘り込み形状はバケツ状で、底面は平坦面をなし、中央に直径13cm、深さ57cmの小ビットが検出された。埋土は①のVIII層が主体で、桜島P13が多く散在している。小ビットの埋土内炭化物の放射性炭素年代測定の結果は、 $22,200 \pm 90$  (yrBP) であった。これは旧石器時代に該当する年代であるが、該当する層にあった炭化物が小ビット内に落ち込んだと思われる。

### 9号落とし穴（第83図）

G-43区のIX層で検出された。平面プランは長径147cm、短径90cmの楕円形で、検出面からの深さは95cmである。掘り込み形状はバケツ状で、底面は平坦面をなし、中央に直径15cm、深さ70cmの小ビットが検出された。遺構は282mのコンターライン内に囲まれ、13基の落とし穴のなかでは標高が最も高いところで検出された。埋土は①のVII層が主体で、桜島P13や直径1~2mm程度の白いパミスが多く散在している。

### 10号落とし穴（第83図）

H-43区のXIV層で検出された。平面プランは長径137cm、短径62cmの楕円形で、検出面からの深さは108cmである。掘り込み形状はバケツ状で、底面は平坦面をなし、中央に直径10cm、深さ68cmの小ビットが検出された。遺構の長径方向は281.6mのコンターラインと重なる。

### 11号落とし穴（第84図）

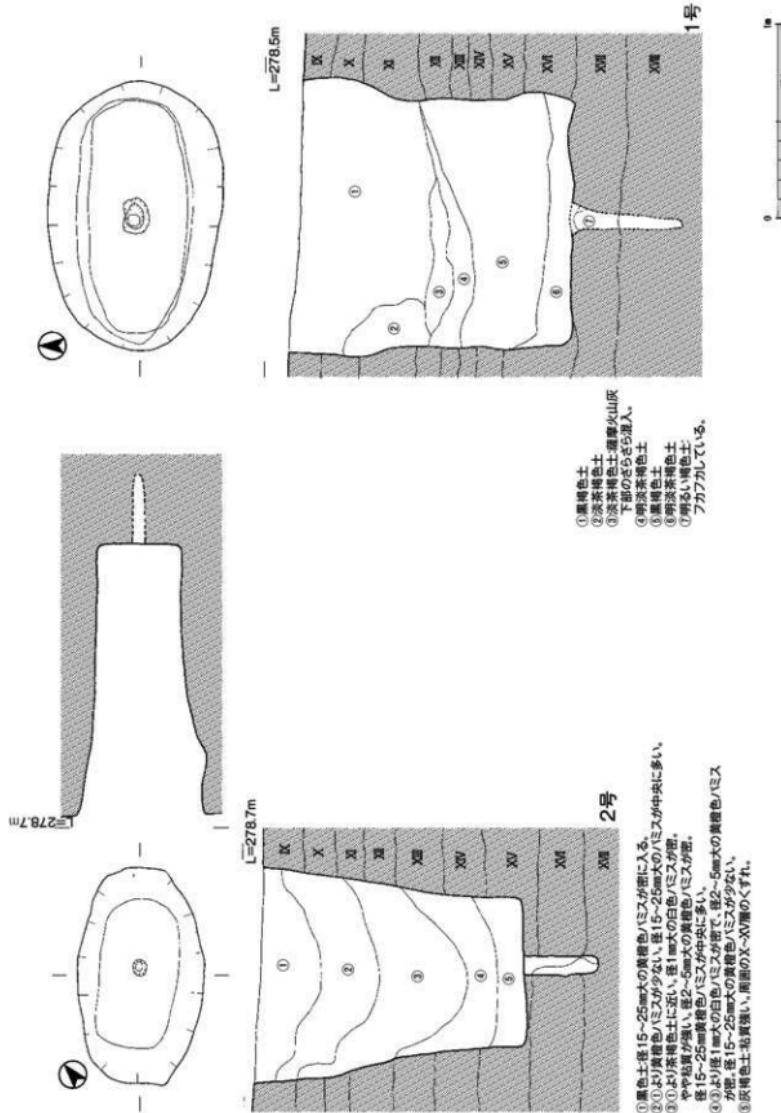
G・H-48区のX層で検出された。平面プランは長径90cm、短径54cmの楕円形で、検出面からの深さは52cmである。底面は平坦面をなし、中央に直径9cm、深さ62cmの小ビットが検出された。X層で検出されたが、遺構の形態や埋土などから、縄文時代早期のものと判断した。遺構から約50cm離れた土層壁を参考にすると、IX層の層厚は約35cm、VIII層の層厚は約60cmあるため、本遺構の実際の深さは100cm以上と想定される。遺構の長径方向はコンターラインと垂直に重なる。なお、小ビットの埋土内炭化物を放射性炭素年代測定したところ、 $8,920 \pm 50$  (yrBP) であった。

### 12号落とし穴（第84図）

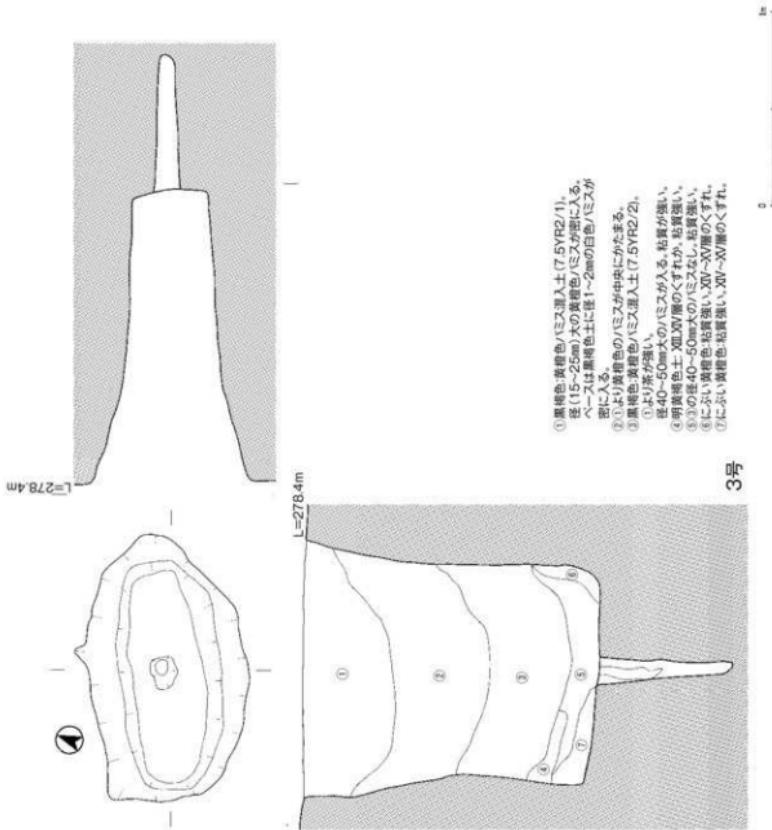
G・H-49区のIX層で検出された。平面プランは長径120cm、短径77cmの楕円形で、検出面からの深さは90cmである。底面は平坦面をなし、中央に直径12cm、深さ40cmの小ビットが検出された。埋土は大きく2つにわかれ、主体は桜島P13を多く含むVIII層である。斜面で検出された落とし穴群3基のうち、最も標高の低い位置で検出され、IX層の層厚は70cmを超える。

### 13号落とし穴（第84図）

G-49区のIX層で検出された。平面プランは長径118cm、短径58cmの楕円形で、検出面からの深さは92cmである。掘り込み形状はバケツ状で、底面は平坦面をなし、中央に直径15cm、深さ70cmの小ビットが検出された。遺構は、278.8mのコンターライン上に掘られ、南東-北西方向に長径をもつ。



第79図 繩文早期 1号, 2号落とし穴



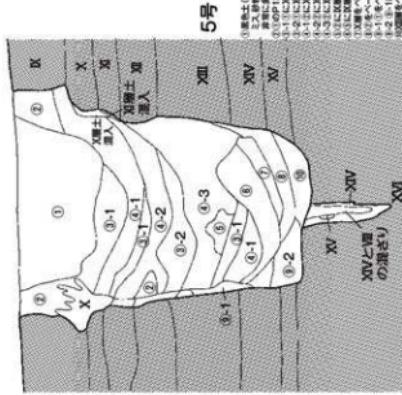
第80図 繩文早期 3号落とし穴

- ① 黒褐色・黄褐色ハニス入土 (7.5YR2/1),  
径 (15~25mm) 大の黄褐色ハニスが底に入る。  
ベースは黒褐色土に直径 1~2mm の白色ハニスが  
一部入る。  
② (1) 黄褐色のハニスが中央にかたまる。  
③ 黒褐色・黄褐色ハニス入土 (7.5YR2/2),  
④ より茶が強い、  
径 40~50mm のハニスが少々ある。色が強い。  
⑤ 黄褐色土・XIV-XV層のハニスが少々ある。  
⑥ 明褐色土・XIV-XV層のハニスが少々ある。  
⑦ 明褐色土・XIV-XV層のハニスが少々ある。  
⑧ (1) に少し黄褐色・粘質強い、XIV-XV層のくずす。

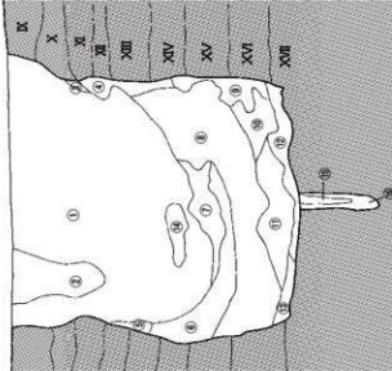
3号



— L=278.9m



— L=279.3m

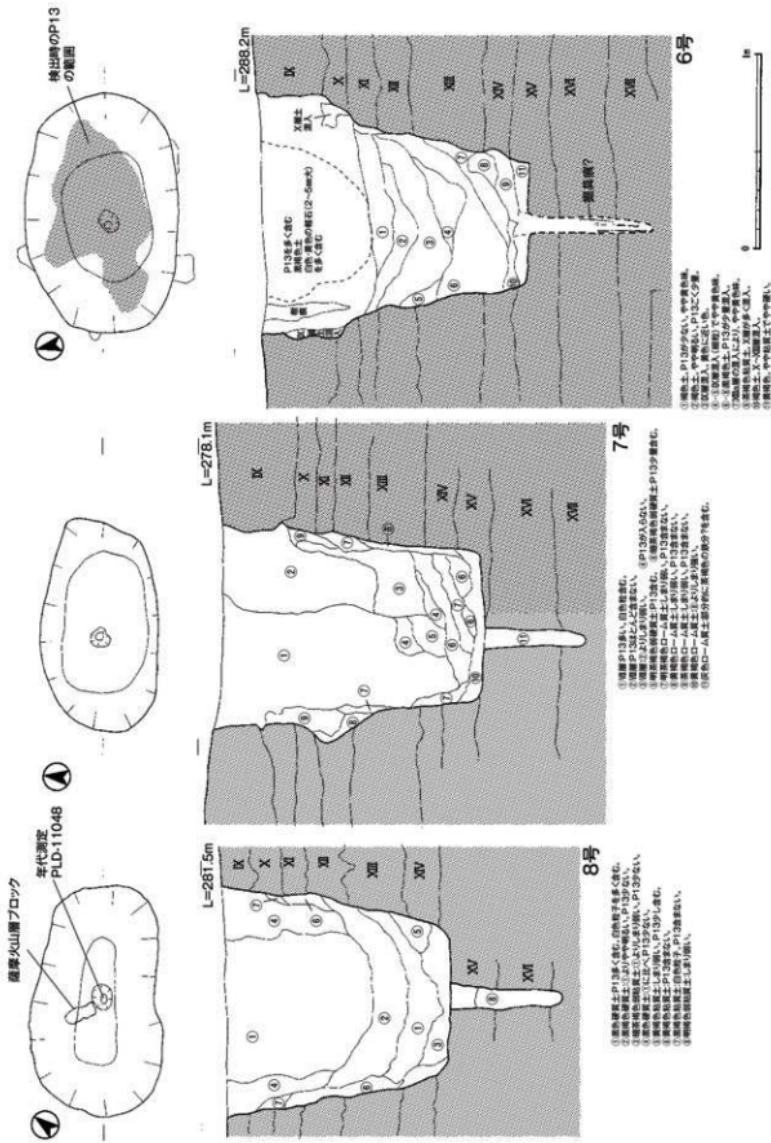


4号

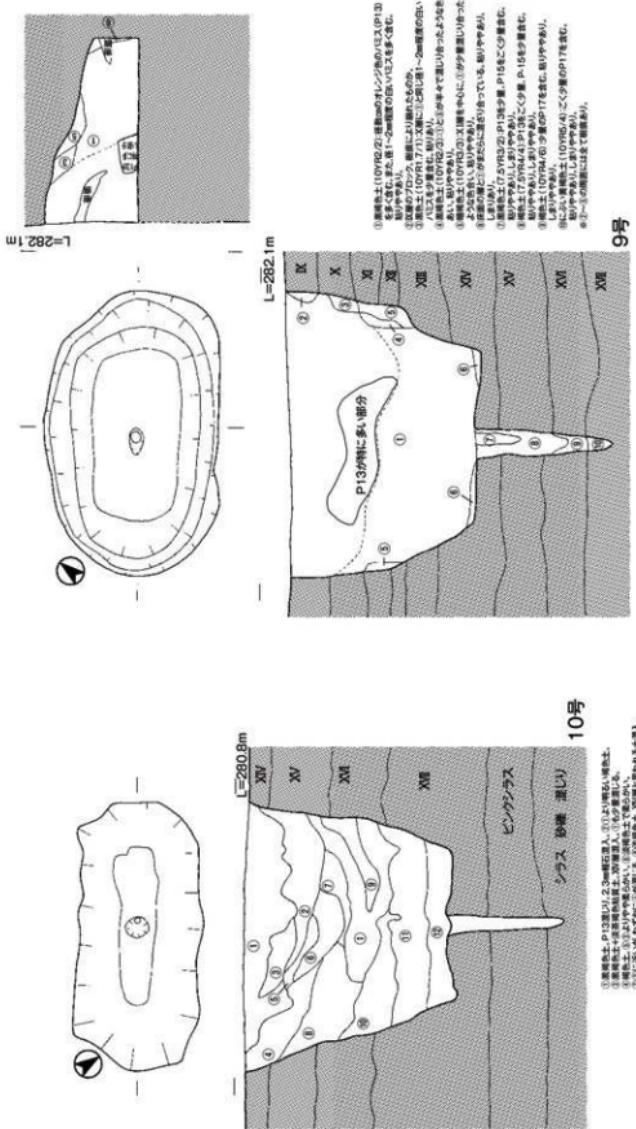
(説明文は10YR6/2色2-3mm程度のレンガ状の土)  
1. パス(1P13)を走る。また、表面は黒褐色の土の上に  
2. 灰色(10YR5/1)の砂利層がある。砂利層の厚さは約10cm。  
3. 黄褐色(10YR5/3)の土層がある。土の表面は黒褐色の土で  
4. 被覆。L6(6)やL7(7)、N6(6)やN7(7)と並んである。  
(説明文は10YR6/2色2-3mm程度のレンガ状の土)  
5. パス(1P13)を走る。表面は黒褐色の土の上に  
6. 黄褐色(10YR5/3)の土層がある。土の表面は黒褐色の土で  
7. 被覆。L8(8)やL9(9)、N8(8)やN9(9)と並んである。  
(説明文は10YR6/2色2-3mm程度のレンガ状の土)  
8. パス(1P13)を走る。表面は黒褐色の土の上に  
9. 黄褐色(10YR5/3)の土層がある。土の表面は黒褐色の土で  
10. 被覆。L10(10)やL11(11)、N10(10)やN11(11)と並んである。  
(説明文は10YR6/2色2-3mm程度のレンガ状の土)  
11. パス(1P13)を走る。表面は黒褐色の土の上に  
12. 黄褐色(10YR5/3)の土層がある。土の表面は黒褐色の土で  
13. 被覆。L12(12)やL13(13)、N12(12)やN13(13)と並んである。  
(説明文は10YR6/2色2-3mm程度のレンガ状の土)  
14. パス(1P13)を走る。表面は黒褐色の土の上に  
15. 黄褐色(10YR5/3)の土層がある。土の表面は黒褐色の土で  
16. 被覆。L14(14)やL15(15)、N14(14)やN15(15)と並んである。  
(説明文は10YR6/2色2-3mm程度のレンガ状の土)  
17. パス(1P13)を走る。表面は黒褐色の土の上に  
18. 黄褐色(10YR5/3)の土層がある。土の表面は黒褐色の土で  
19. 被覆。L17(17)やL18(18)、N17(17)やN18(18)と並んである。  
(説明文は10YR6/2色2-3mm程度のレンガ状の土)  
20. パス(1P13)を走る。表面は黒褐色の土の上に  
21. 黄褐色(10YR5/3)の土層がある。土の表面は黒褐色の土で  
22. 被覆。L20(20)やL21(21)、N20(20)やN21(21)と並んである。



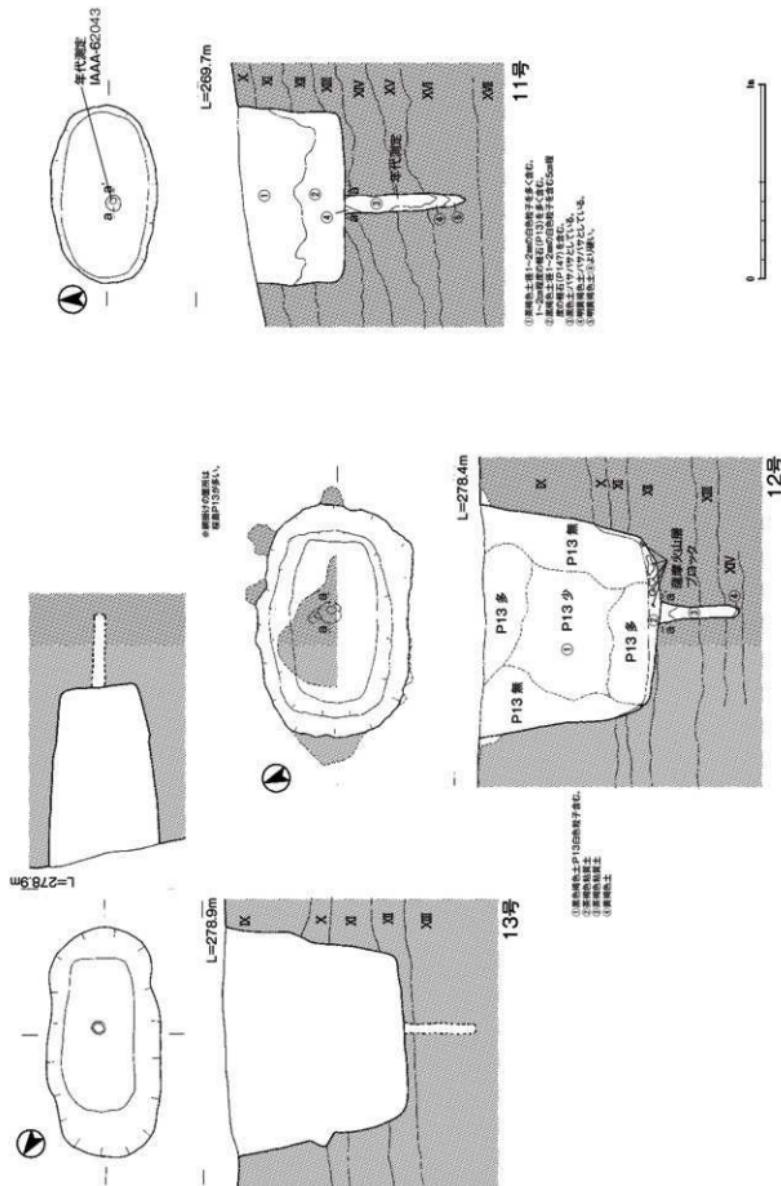
第81図 繩文早期 4号, 5号落とし穴



第82図 縄文早期 6号～8号落とし穴



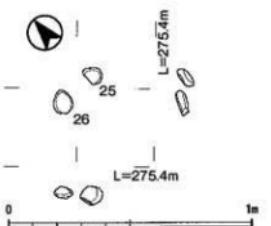
第83図 繩文早期 9号, 10号落とし穴



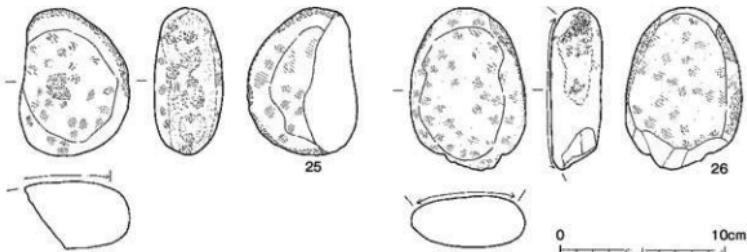
第84図 繩文早期 11号～13号落とし穴

### (6) 磨石集積 (第85、86図)

H-17区のVII層で検出された。磨石が2個近接して出土した。周辺には遺構は確認できなかった。磨石は2個とも一部分が欠けており、完形ではない。



第85図 繩文早期 磨石集積



第86図 繩文早期 磨石集積内出土石器

第17表 繩文早期 集石計測表

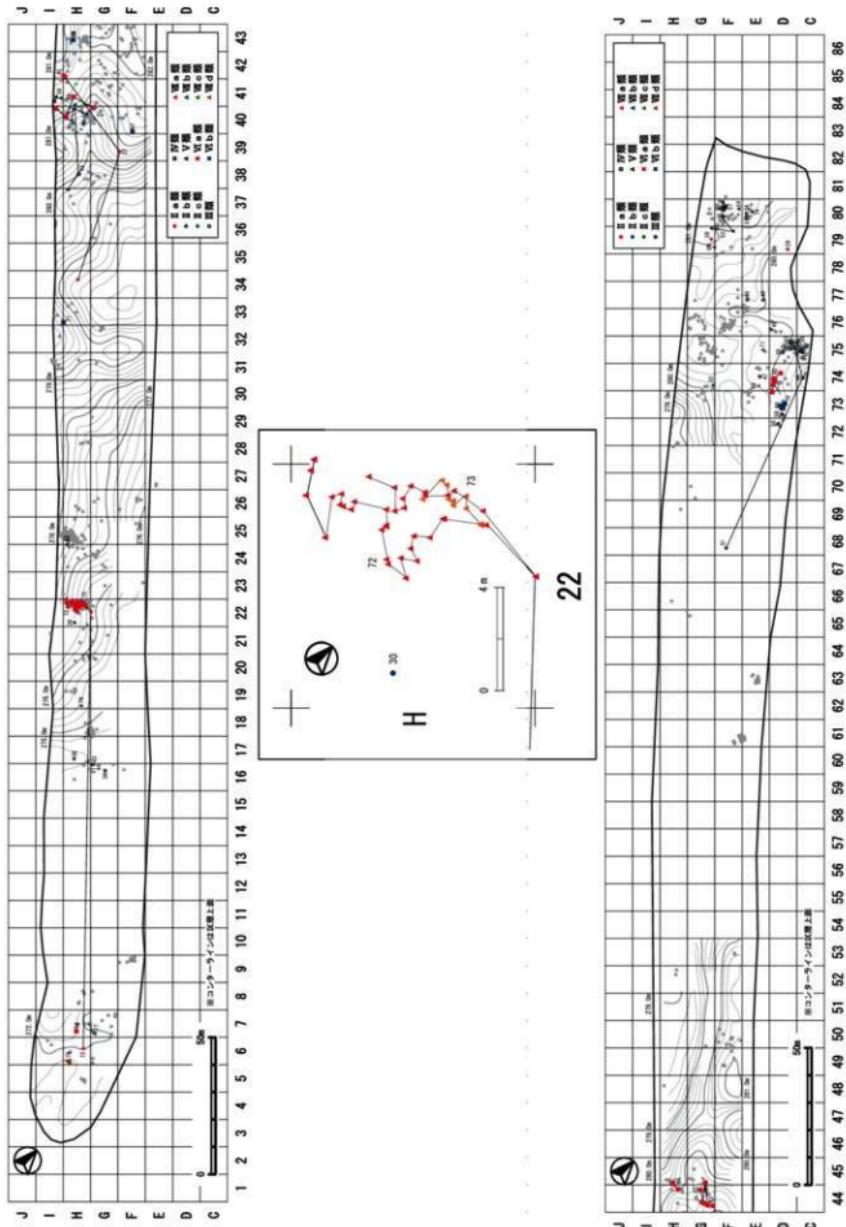
測定番号	番号	検出区	検出面	大きさ(cm)				備考	測定番号	番号	検出区	検出面	大きさ(cm)				備考
				長径	幅	厚さ	深さ						長径	幅	厚さ	深さ	
64	1	G-5	背面	107	106	29	-	8	71	16	G-32	背面	215	135	-	-	
	2	H-17	背面	89	62	-	-	-	72	17	H-45	背面	165	160	-	-	
	3	H-17	背面	247	175	-	-	-	73	18	H-46	背面	310	99	-	-	
65	4	I-6	背面	172	108	-	-	-	74	19	G-51	背面	210	144	-	-	
	5	I-6	背面	156	52	-	-	-	75	20	G-51	側面	70	50	42	36	21
	6	G-8	背面	185	186	-	-	-	76	21	G-51	背面	26	15	-	-	
66	7	H-17	背面	127	75	-	-	-	77	22	E-62	背面	73	72	-	-	
	8	H-24	-	95	60	-	-	-	78	23	G-67	V面	186	115	-	-	
	9	H-28	背面	145	110	-	-	-	79	24	G-69	背面	185	112	-	-	
68	10	F-31	背面	197	120	-	-	-	80	25	D-75	背面	65	55	-	-	
	11	F-32	背面	-	-	122	121	32	81	26	D-75	背面	90	82	-	-	
69	12	I-36	背面	206	242	-	-	-	82	27	D-76	背面	130	110	-	-	
	13	H-40	背面	191	120	-	-	-	83	28	E-76	背面	110	104	-	-	
	14	I-41	背面	111	104	-	-	-	84	29	F-80	背面	227	178	110	-	25 年代測定
70	15	H-43	背面	63	37	-	-	-	85	30	E-76	背面	140	88	-	-	

第18表 繩文早期 落とし穴計測表

測定番号	番号	検出区	検出面	形状				備考	測定番号	番号	検出区	検出面	形状				備考
				長径	幅	厚さ	小ピット(cm)						長径	幅	厚さ	小ピット(cm)	
79	1	I-29	背面	140	80	80	145	-	82	8	F-41	B面	118	63	115	1	13 年代測定
	2	H-17	背面	110	60	156	1	10	83	9	G-43	背面	147	90	95	1	15 年代測定
	3	F-31	側面	230	110	100	1	10	84	10	F-41	X面	112	63	104	1	13 年代測定
	4	G-32	背面	140	90	148	1	9	85	11	G-41	背面	90	54	52	1	9 年代測定
	5	G-32	背面	115	71	149	1	12	86	12	G-41	背面	120	77	90	1	12 年代測定
	6	P-33	背面	125	78	135	1	10	87	13	G-49	背面	118	58	92	1	15 年代測定
	7	P-34	背面	107	60	135	1	11	88	-	-	-	-	-	-	-	

第19表 繩文早期 磨石集積内出土石器観察表

測定番号	図番号	取上番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
86	25	SBI01.②	磨石・敲石	砂岩	9.0	6.8	4.2	320.0	
	26	SBI01.①	磨石・敲石	安山岩	10.0	7.1	3.1	350.0	



第87図 II類～VII類土器出土状況図

### 3 遺物

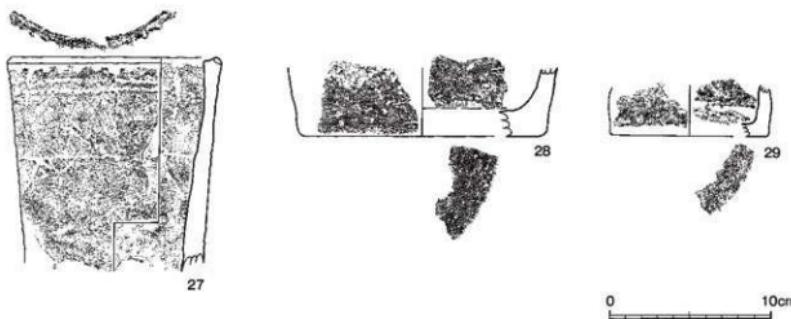
#### (1) 土器

##### II類

第II類は器形が円筒土器で外面に貝殻復縁による文様を施すタイプである。この類は文様によつてaからcの3類に分けられる。

##### IIa類（第88図27～29）

27は直行した口縁部をもつ円筒形の土器である。土器としては厚手で、口唇部は角がある平坦を呈している。文様は口唇部の外輪部に貝殻腹縁による連続刺突文と外面に2条の貝殻腹縁による刺突を施している。色調は外面が暗灰褐色で内面が黒褐色を呈している。器面調整は内外面とも竪状施文具による丁寧な横撫で調整である。28は円筒土器の底部で平底である。文様はなく色調は外面が暗灰茶褐色で内面が暗灰褐色を呈している。器面調整は内外面とも竪状施文具による丁寧な横撫で調整である。29は円筒土器の底部で平底である。文様はなく色調は外面が暗灰茶褐色で内面が黒色を呈している。器面調整は内外面とも竪状施文具による丁寧な横撫で調整である。



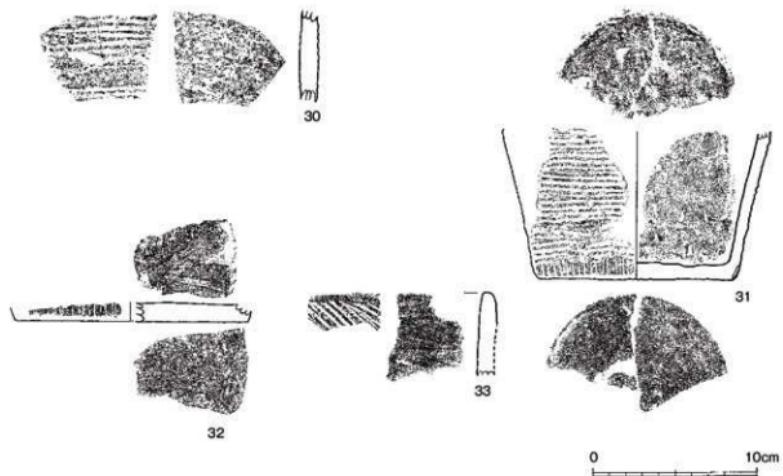
第88図 IIa類土器

##### IIb類（第89図30～32）

30は円筒形の貝殻文土器である。円筒土器の厚手の胴部である。文様は外面に横位の貝殻条痕を施している。色調は外面が茶褐色で内面が暗灰褐色を呈している。器面調整は内面に竪状施文具による横撫で調整である。31は円筒形の貝殻文土器である。円筒土器の薄手の胴部から底部で、平底である。文様は外面に横位の貝殻条痕を施し、底部の縁に縦位の沈線を連続して施している。色調は外面が黒茶褐色で内面が暗灰褐色、底面が茶褐色を呈している。器面調整は内面に竪状施文具による横撫で調整である。32は円盤状の平底である。底部の縁に縦位の沈線を連続して施している。色調は茶褐色で、器面調整は竪状施文具で丁寧に仕上げている。

##### IIc類（第89図33）

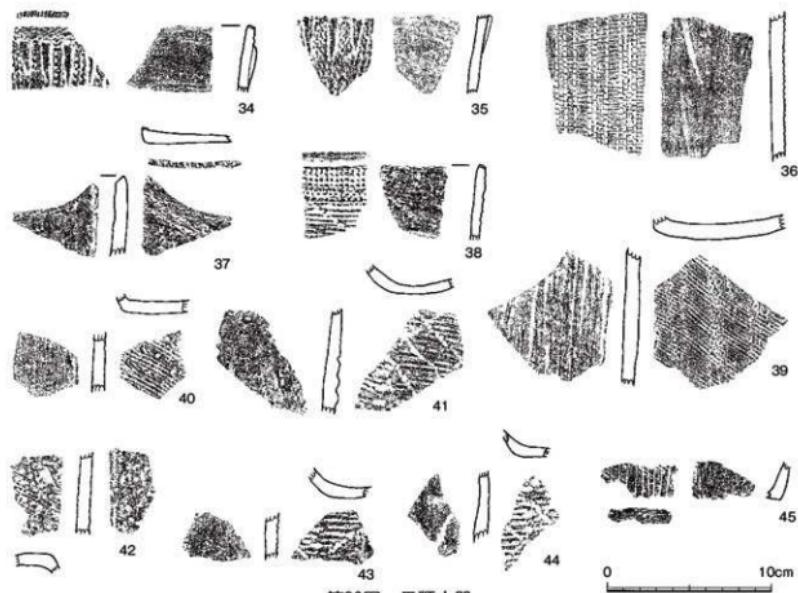
33は円筒形の貝殻文土器である。円筒土器の厚手の口縁部である。文様は外面に斜位の貝殻条痕を施している。色調は外面が灰茶褐色で内面が茶褐色を呈している。器面調整は内面に竪状施文具による横撫で調整である。



第89図 IIb類・IIc類土器

III類（第90図34～45）

第III類は円筒形と角筒形の器形をもつ貝殻条痕文土器である。34は口縁部がやや外反した円筒土器の薄手の深鉢である。口唇部は平坦に切り、細い刻み目を施している。口縁外面には貝殻腹縁部による横位の刺突文を施し、その下位に楔形の貼り付け突帯をまわしている。楔形突帯は逆三角形粘土を窓で押し付けて貼り付けている。その楔形突帯の間には縦位に貝殻腹縁部による刺突文を施している。色調には外面が暗茶褐色で煤の付着があり、内面は茶褐色を呈している。内面調整は縦位の後横位に丁寧な箒撫でを施している。35は口縁部が欠損しているが9同様に解釈できるので同一個体の可能性が高い。36は円筒土器の薄手の深鉢で、胴部にあたる。外面は貝殻腹縁部による条痕をやや斜位に施し、その上から3列に縦位に施している。内面の器面調整は縦方向に箒状調整具による搔き上げを施している。色調は外面が暗茶褐色に黒の斑点がみられ、内面は灰茶褐色である。37は角筒土器の口縁部で角部が山形状に呈している。口唇部は平坦に切り、細い刻み目を施している。口縁部には弧上に3列に貝殻腹縁部による刺突を施し、その下位は貝殻腹縁部による縦位の刺突を施している。角部は菱形状に刻み目を施している。色調は外面が暗茶褐色に黒の斑点がみられ、内面は灰茶褐色である。38は角筒土器の口縁部である。口唇部は平坦に切っているがやや丸みを持っている。口縁部の文様は貝殻腹縁部による押圧連続文を施し、器面は深い横位の貝殻条痕の上に貝殻腹縁部による刺突を斜位に施している。内面の調整は箒状具による搔き上げである。色調は外面が暗茶褐色で、内面は灰茶褐色である。39は角筒土器の胴部である。外面の文様は貝殻腹縁部による斜位の条痕の上に2列の貝殻腹縁部による刺突を菱状に施している。角部には菱形状に刻み目を施している。内面は箒状具による搔き上げ調整を施している。40は文様や器形からみて39と同一土器の可能性が高い。なお、37と39と40は同一個体の可能性が高い。41は角筒土器の胴部である。外面の文様は貝殻腹縁部による横位の条痕に斜位の刺突を



第90図 III類土器

施し、角部は菱状の刻み目を施している。色調は外面が暗茶褐色に黒の斑点がみられ、内面は灰茶褐色である。42、43、44は41と同じ文様と器形をしているが、43、44は内面の色調が黒褐色を呈している。これらは同一個体の可能性が高い。45は角筒土器の底部である。外面の文様は細長い沈線を縦位に刻み、その上には貝殻腹縁部による刺突が一部みられる。底面は角切りで籠状具による丁寧な撫で調整がみられる。内面調整は籠状具の搔きあげである。色調は内外面茶褐色を呈している。なお、この底部は37のグループと思われる。

#### IV類（第91図46～49）

第IV類は楔形突帯と押し引き条痕を持つ円筒土器と角筒土器である。

46は平坦に切られた口唇部に細い刻み目を施し、口縁端部に2条の貝殻腹縁部による横位の刺突を付け、貝殻腹縁部によるやや斜めの楔状文を二段に浮き上がらせるように施し、その下部に押し引き状の一部が見られる。内面は籠状具の撫で調整である。色調は内外面明茶褐色を呈している。



第91図 IV類土器

47は46と同じ文様と器形胎土焼成をしているが、外面の色調が黒斑になっている。48は47と同質であるが、口縁端部が破損し、その代わりに胴部の押し引き状痕が横位に施しているのが分かる。内面の調整は口縁部が丁寧な撫でで胴部が横位の箇状具の撫である。46、47、48は同一個体の可能性が高い。49は器形が角筒土器で、外面に押し引き状痕を横位に施した口縁部である。内面の調整は研磨状に施され、色調は内外面とも黒褐色である。

#### V類（第92図50～59）

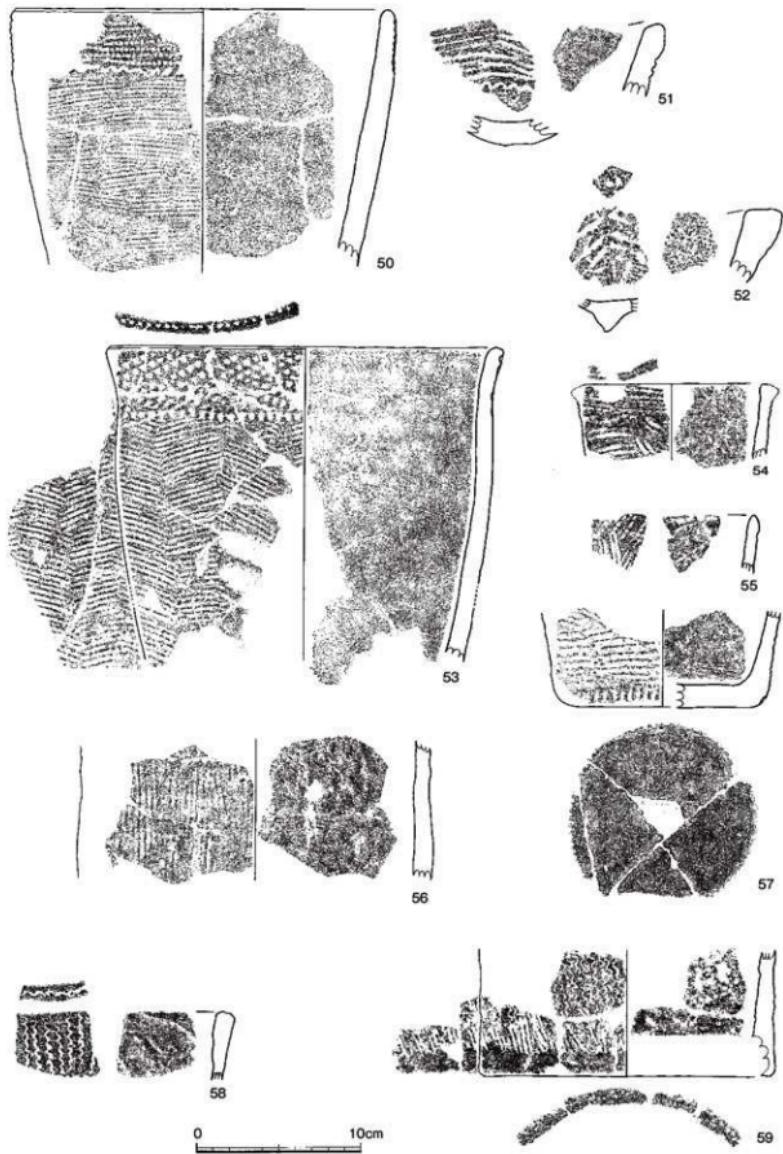
第V類は口縁部に貝殻腹縁部による刺突と胴部に条痕が綾杉状に施されている土器である。50と51は同一個体と考えられる。口縁部は波状でその部分は瘤状に膨らみ、胴部はやや丸みを持つ器形である。文様は、口縁部に幅の凹凸の狭い貝殻腹縁部による横位の7段刺突と凹凸の広い貝殻刺突を最下位に施している。胴部の条痕は浅く、斜位で一部綾杉状に施されている。内面の調整は横位の撫である。この土器は、全体的に厚めの土器で胴部が一番厚い。色調は内外面とも明茶褐色である。52は口縁部の瘤状に突起した部分である。三角柱の形を貼り付け貝殻刺突を3段に施している。周りは貝殻条痕が斜位にみられる。色調は内外面とも明茶褐色である。53は頭部でやや絞られ口縁部が外反し、肩部がやや張る器形である。文様は口唇部に貝殻腹縁部による刺突があり、口縁部には貝殻腹縁部による「く」の字形の連続刺突と頭部に貝殻腹縁部による横位の刺突を施している。肩部から胴部にかけては浅い綾杉文を縱位に施している。内面は丁寧な撫で調整である。色調は外面が明赤茶褐色で、内面には胴部に黒色の帯びが横位に見られる。54は直行する口縁部をもつ円筒土器である。口唇部は平坦に切られ、口縁部の上面形は角状部がみられる。角状の口縁部には剥がれている部分があり瘤がついている可能性がある。口縁部の文様は、横位の貝殻腹縁部による刺突が5条みられる。胴部は貝殻条痕が綾杉状に見られる。色調は暗茶褐色を呈している。55は口縁部に斜位の貝殻刺突連続文を付け、胴部に貝殻条痕をV字状に施している。色調は暗茶褐色を呈している。56は口縁部に貝殻刺突文があり、胴部に縦位の貝殻条痕が見られる。色調は暗茶褐色を呈し、黒色の煤付着部がみられる。57は平底の胴部及び底部である。外面の文様は胴部にV字状に貝殻条痕を施し、底部に横位の貝殻条痕と縦位の刻目文を施している。色調は外面が茶褐色を呈し、内面が黒色を呈している。58は縦位の貝殻腹縁部による連続刺突文の下に横位の刺突文を施しているやや外反した口縁部である。色調は外面が茶褐色を呈し、内面が黒色を呈している。59は円筒土器の底部である。外面の文様は貝殻腹縁部の縦位の刺突連続文と貝殻条痕文である。底部の中は厚い円盤部が抜けた状態である。底面の端部は調整が良いが、内面は一部剥がれた状態である。色調は外面が茶褐色を呈し、内面が暗茶褐色を呈している。

#### VI類

第VI類は土器の器形がバケツ形になるタイプである。この類は文様で分けられ、a類が貝殻腹縁部による刺突と貝頂による押圧、b類が貝殻腹縁部による筋状文と箇状施文具による筋状文を施すタイプである。a類は60と61と62と63と64と65と66で、b類は67と68と69と70と71である。

#### VIa類（第93図60～66）

60は口唇部の外側が削られ口縁部が丸みを持つ器形である。文様は、口縁部に5条の貝殻腹縁部による横位の刺突文が巡らされ、5ないし6条の貝殻腹縁刺突文を斜位にクロスする形で施している。内面の調整は丁寧に横撫でをしている。色調は外面が茶褐色であるが口縁部に煤などによる黒



第92図 V類土器

色がみられ、内面は黒茶色を呈している。61は貝殻刺突文を施した口縁部である。色調は茶褐色で、調整は磨きである。62と63は同一個体と考えられる。口唇部は平坦に整形され、口縁部が内側に向く丸みのある器形である。文様は口縁部に横位の沈線を廻し、胴部に貝殻腹縁部による横位に鋸歯状突文を連続で施している。内面は丁寧にやや磨きを掛けた仕上げである。色調は口縁部が茶褐色で、胴部が暗茶褐色である。64は口唇部の外側が丸みをもち、口縁部が内側に向く器形である。外面は瘤状突起の残りが縦位にみられ、文様は横位の貝殻腹縁による押し下げた文形を全体的に施している。内面の整形は簡単に撫で調整をしている。色調は外面が茶褐色であるが口縁部に煤などによる黒色がみられ、内面は黒茶色を呈している。65は口唇部が平坦に整形され、口縁部が内側に向く丸みのある器形である。文様は貝殻腹縁部による横位に押し下げた文形を全面的に施している。内面の調整は磨きが掛かり丁寧に仕上げている。色調は外面が胴部から口縁部にかけて黒灰褐色で胴部が明灰茶褐色である。内面は黒茶褐色の口縁部で見込みは灰茶褐色である。66は口唇部が平坦に整形され、内側に舌状に張り出し、口縁部が内側に向く丸みのある器形である。文様は貝殻背部による横圧文を全面的に施している。内面の調整は磨きが掛かり丁寧に仕上げている。色調は外面が胴部から口縁部にかけて黒灰褐色の斑点がみられ、胴部は灰茶褐色である。内面は黒茶褐色の口縁部で見込みは灰茶褐色である。

#### Vlb類（第94図67～71）

67と68は同一個体と思われる。口縁部が内側に向いた厚手のバケツ形の土器である。文様は貝殻腹縁部による曲線を縦位に組み合わせている。内面の整形は横位に撫で調整を行っている。色調は外面が灰茶褐色で、口縁部には煤による黒色の帯がみられる。内面は口縁部が灰茶褐色で胴部は黒色である。69と70は同一個体と思われる。やや薄手の土器で部位は胴部である。文様は細い沈線で縦位の鋸歯文を連続している。内面の調整は磨きである。色調は内面が黒褐色で、外面が口縁部に近い部分の黒褐色と胴部の灰茶色の組み合わせである。

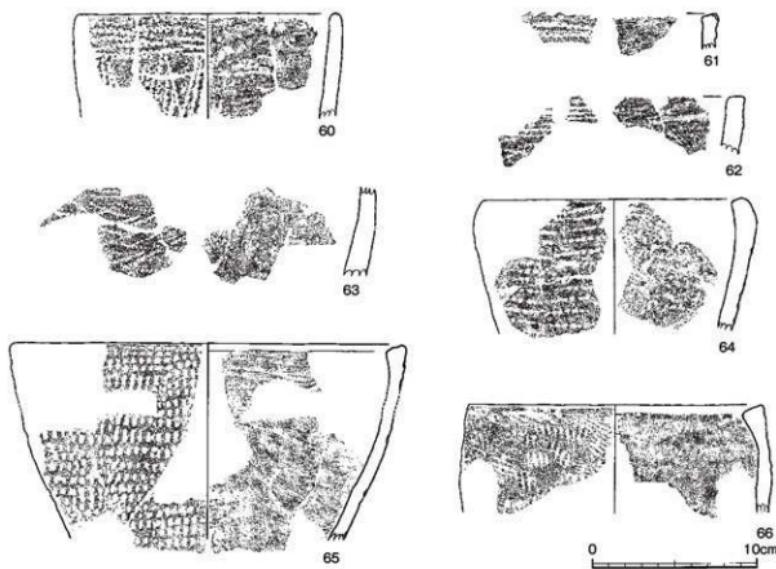
71は直行した口縁部をもつ円筒状の小形の土器である。文様は貝殻腹縁部による縦位の沈線を全面に施している。内面の調整は丁寧な磨きである。色調は外面が灰茶褐色で、内面が口縁部の暗茶褐色と胴部の黒色の組み合わせである。

#### VII類

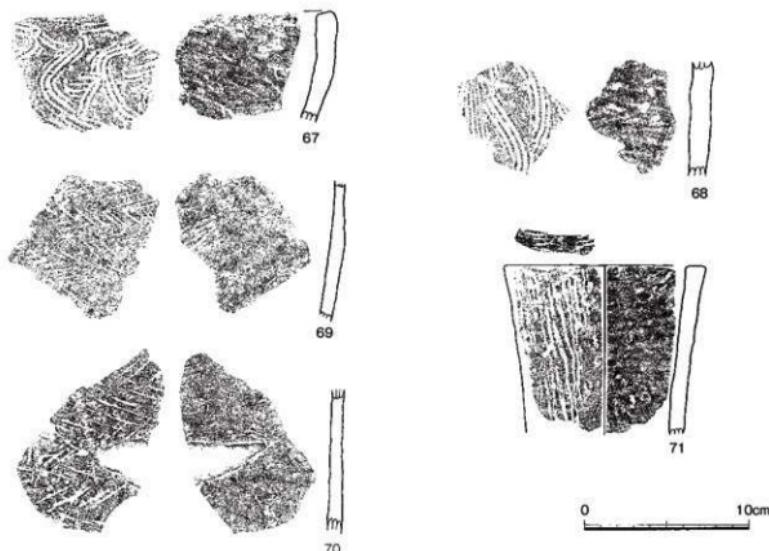
この類は文様が撚糸文系の土器でa～dに分けて説明をする。

#### VIIa類（第95図72・73）

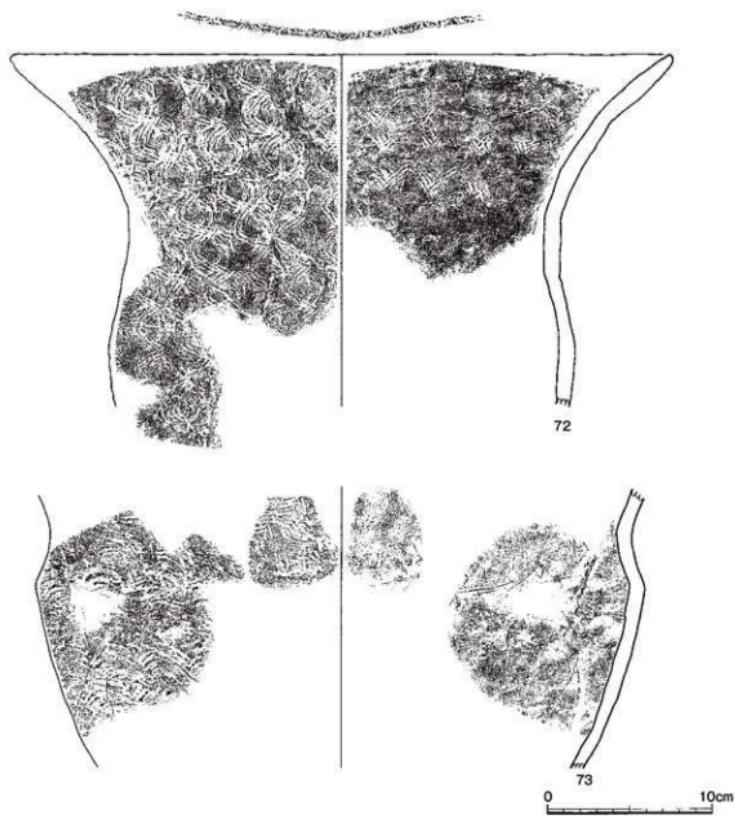
この類は撚糸文が変形に施されているものである。72は頸部で締まり口縁部が大きく朝顔状に外反し、胴部は球状に膨らむ器形をしている深鉢である。文様付けは間をおき巻きつけた撚糸原体を作り施したものである。いわゆる変形撚糸文である。文様が付いている部位は口唇部、外面の口縁部から胴部、内面の口縁部に縦位に施している。内面の変形撚糸文は上部から見える部分に施されているが、部分的に消されている状況である。また、2～4条の細い筋も描かれている。胴部の文様は変形撚糸を横位に回転して施文している。色調は茶褐色がベースであるが内外面の一部に黒斑がみられる。73は72の器形と文様と調整が類似している。



第93図 Vla類土器



第94図 Vib類土器

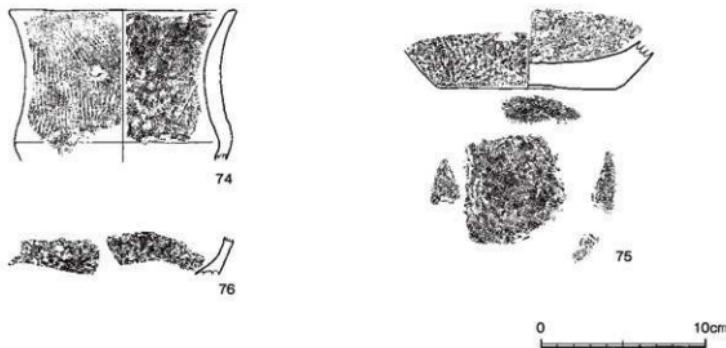


第95図 VIIa類土器

#### VIIb類（第96図74～76）

この類は極細撚糸文が極細である。

74は胴部で「く」字形に折れ、頸部でしまり、口縁部が外反する器形である。文様は細い目の詰まった撚糸文を胴部から口縁部にかけて、縱位に施している。内側の調整は横撚で器面を整形している。色調は外面の胴部が明茶褐色で、口縁部から頸部にかけては煤などで大方黒褐色になっている。内面は口縁部が黒色で頸部以下が暗茶褐色である。75は厚手の平底で、球状に胴部が立ち上がる器形である。外面文様は極細く目の詰まった撚糸文が全面に施されている。器面調整は外面が丁寧に撚で調整されている。内面は使用過程で変化したと考えられ、器面が荒くなり、凸凹が若干みられる。胎土の色調は黒色である。76は底部近くである。器は細い撚糸文を施したもので、色調が暗茶褐色である。前とは色調と厚みが違うが同一個体の可能性もある。



第96図 VIIb類土器

VIIc類 (第97図77・78)

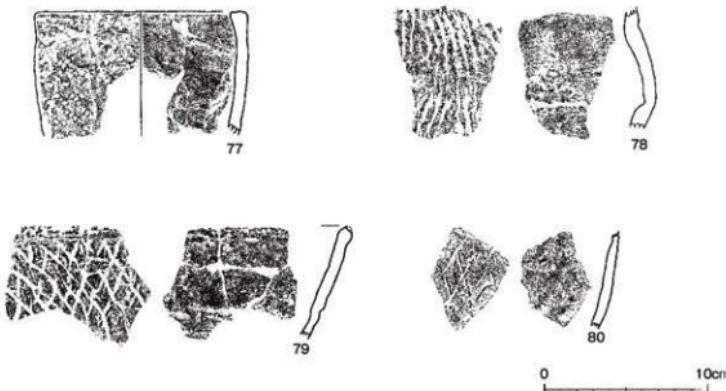
この類は極太の撚糸文土器である。

77は太めの撚糸文が口縁部と胴部に横位に施されたものである。内側の側器面調整は口縁部が横撫で、胴部は斜めである。口縁部は平坦で、器形は筒状をなし厚手である。色調は全体的に黒褐色である。78は肩部が張り、頸部で締まる器形である。文様は太めの撚糸文を縦位に施している。色調は肩部が煤で黒化しているが全体的に赤茶褐色である。内面にも黒斑がみられる。器面調整は外面が撚糸の上を撫で調整をしている。内面が横撫である。

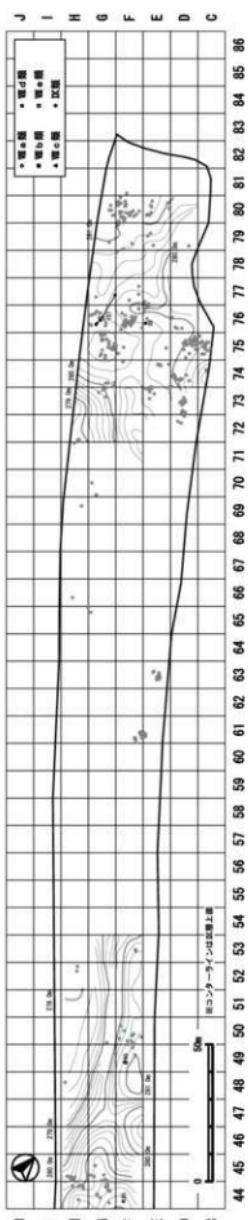
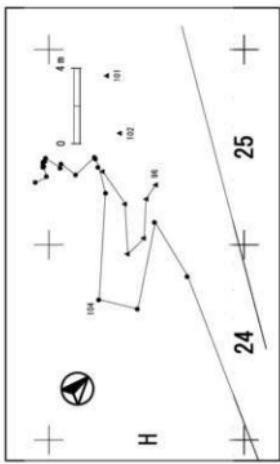
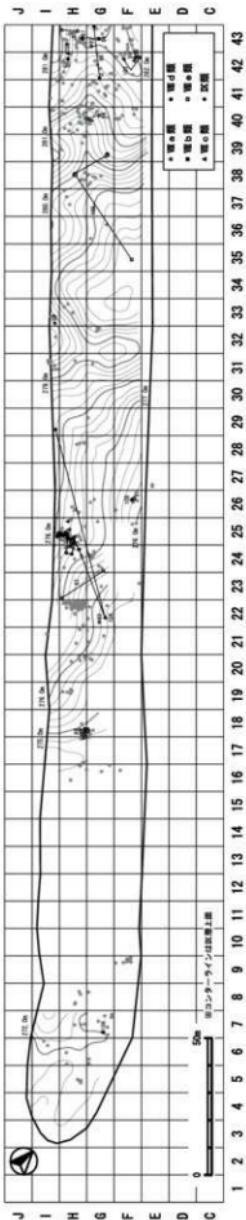
VId類 (第97図79・80)

この類は網目状撚糸文である。

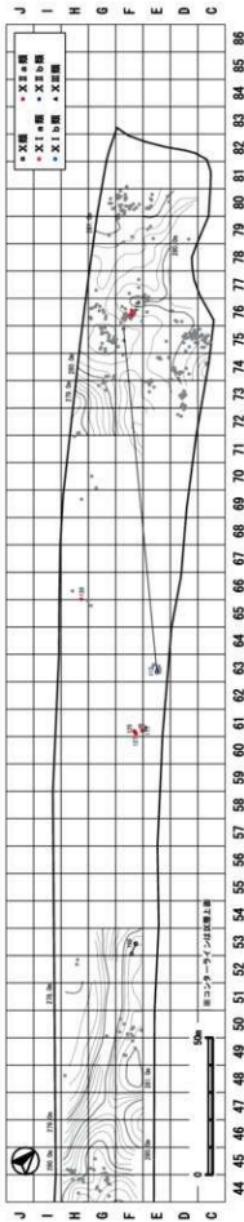
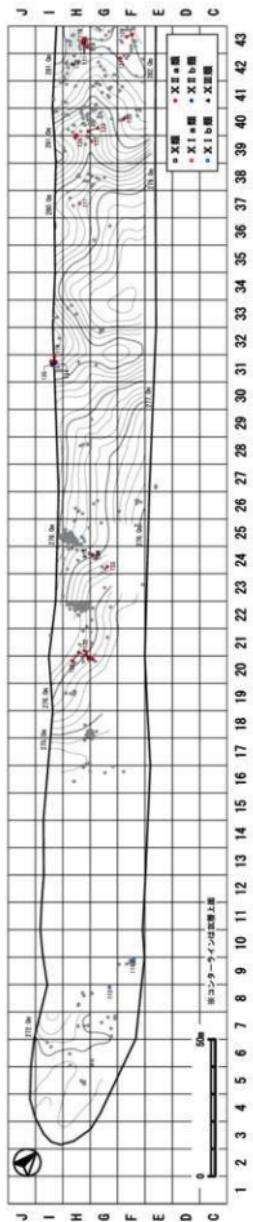
79は外開きの口縁部で、器面調整は撫で調整である。色調は灰茶褐色である。80は直行する胴部で、器面調整は撫でである。色調は灰茶褐色である。



第97図 VIIc・VId類土器



第96図 VIII類・IX類土器出土状況図



第99図 X類～Y類土器出土状況図

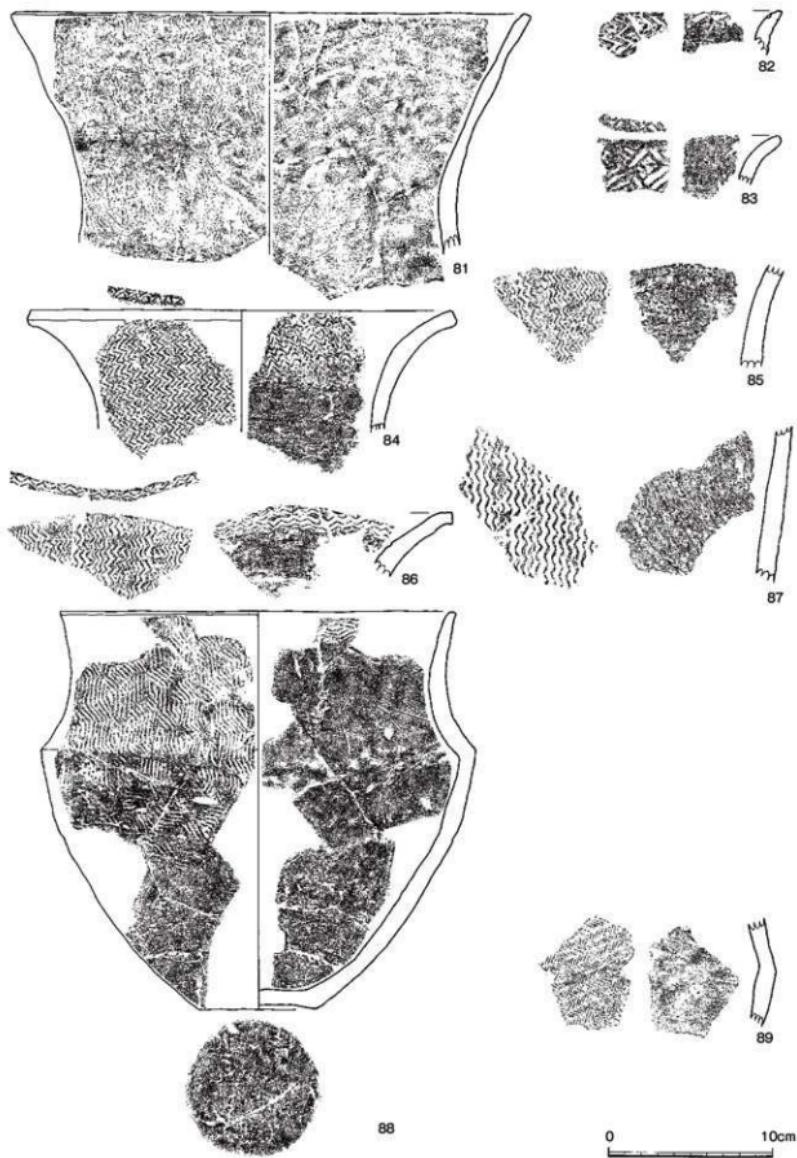
## VII類

この類は押型文を施したものである。

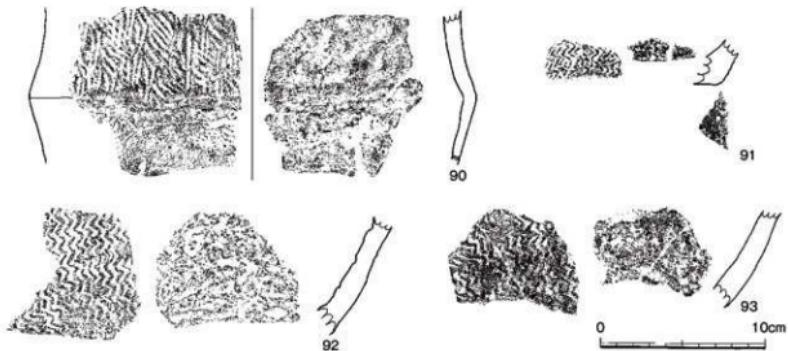
### VIIa類（第100・101図81～93）

この類は山形押型文を施した土器である。

81は頸部がしまり、口縁部が朝顔状に外反する器形である。文様は口唇部と外面に施している。山形押型文は施文具自体が大きく、幅広の溝を付けたもので、外面は縦位に施されている。器面は、外面口縁部に煤が付着し、黒色の色調で、頸部は赤褐色をしている。内面は明茶褐色で、横撫で調整をしている。土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は $8,080 \pm 40$ (yrBP)であった。82は外反する口縁部である。文様は大型の山形押型文である。外面は押型文を縦位に施し、内面には竹管状の施文具で刺して引いている文様がみられる。色調は外面が灰茶褐色で内面が明茶褐色である。83は外反する口縁部である。文様は大型の山形押型文である。外面は押型文を縦位に二重に施し、口唇部にも文様がみられる。色調は明茶褐色である。84は頸部がしまり、口縁部が大きく外反する器形である。文様は口唇部、外面、内面に山形押型文がみられる。その山形押型文の溝は1単位4本が目に付く。外面は山形押型文で縦位に、内面の押型文は横位に回転させている。色調は外面が茶褐色で、内面も茶褐色で口縁部には煤による黒斑も見られる。85は外反する厚手の頸部である。文様は7条と思われる溝のある原体で施した山形押型文である。外面は押型文を縦位に施している。内面は横撫で調整である。色調は外面が茶褐色で内面が黒色である。86は外反する山形口縁部である。口唇部はきちんと角を付け平坦に切っている。文様は6本の回転溝が目に付き、道具としては6本の溝がある施文具の可能性がある。それを外面は縦位に、内面は横位に回転させている。色調は暗茶灰色で胎土の色は黒色である。87は直行する厚手の胴部である。文様は7条と思われる溝のある原体で施した山形押型文である。外面は押型文を縦位に施している。内面は丁寧な横撫で調整である。色調は外面が茶褐色で内面が黒色である。88は肩部で稜線をつくり、「く」の字状に張り、頸部で丸みをもって締まり、口縁部はやや外反し、胴部は球状に膨らむ器形である。底部はやや上げ底である。文様は7条と思われる切り込みを入れた原体を口縁部から肩部まで縦位に、胴部は横位ないし斜位に山形押型文を施している。胴部の下部は無文である。内面は原体を横位回転している。外面の色調は明茶褐色が基調で、煤などで変化した暗灰茶褐色斑で構成し、内面の色調は暗茶褐色を基調に黒斑がみられる。89は肩部で「く」の字に稜をつくり、頸部が締まり、胴部は丸みをもって張る器形をもつ土器である。文様は胴部から頸部にかけて縦位に細目の山形押型文を施している。内面の調整は指圧痕がみられ、撫で調整である。色調は黄茶褐色であり、外面に煤が付着し、黒色の斑点がみられる。90は肩部で「く」の字に稜をつくり、頸部が締まり、胴部は丸みをもって張る器形をもつ土器である。文様は肩部から頸部にかけて縦位に大型の山形押型文を施している。施文具の筋彫りは5条と思われる。内面の調整は指圧の起伏が斜位にみられ、手撫でで調整している。色調は外面に煤が付着し、暗茶褐色の中に黒斑がみられ、内面は茶褐色である。91は平底である。胴部には山形押型文が縦位に施されている。92は胴部から底部にかけてのもので、丸みをもつ器形である。文様は大型の山形押型文で、縦位に施されている。内面は粗く凹凸がみられる。色調は外面が茶褐色で黒斑がみられる。内面は黒茶褐色である。



第100図 VIIa類土器(1)

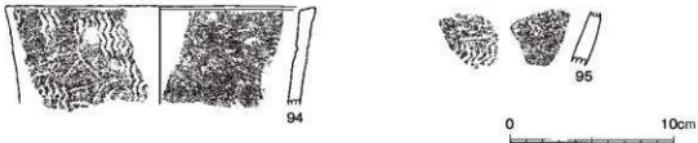


第101図 VIIIa類土器(2)

VIIIb類 (第102図94・95)

この類は山形押型文に貝殻刺突を施したものである。

94は平坦な口唇部で直行する口縁部である。文様は大型の山形押型文を縦位に施し、一部押型文を消し、貝殻腹縁で刺突を施している。内面は口唇部付近が横撫で調整であるが、縦位の調整痕がみられる。色調は黄茶褐色が基調であるが、口縁部に煤などの黒班がみられる。焼成度は硬質で、胎土には石英、角閃石、長石等がみられる。95は底部近くの胴部である。文様は大型の山形押型文と貝殻腹縁部の刺突文を組み合わせている。内面の器面調整はやや雑である。色調は外面が茶褐色で内面が暗茶褐色である。



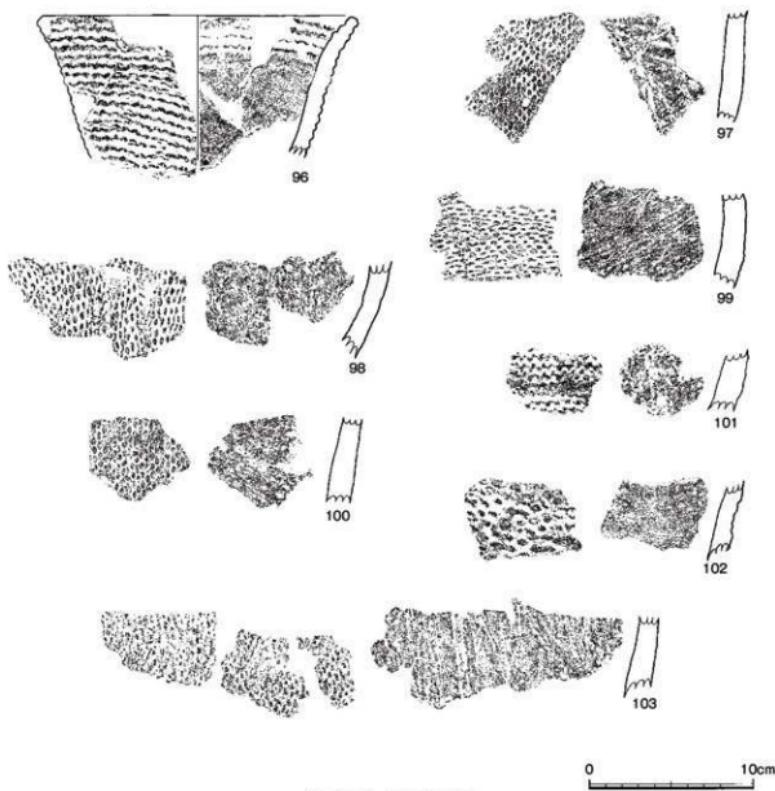
第102図 VIIIb類土器

VIIIc類 (第103図96~103)

この類は楕円押型文を施した土器である。

96は外反する口縁部である。口唇部は尖り気味につくり、頭部は厚い器壁である。文様は内側が3列、外側が5列と思われる楕円押型文を横位で外面全体と内面は口縁部に施している。内面調整は横撫である。内面色調は外面が茶褐色で内面が暗茶褐色である。97はやや締まった頭部から胴部にかけてである。文様は外面全体に楕円押型文を縦位に施している。内面の面調整は雑に斜位と横位の撫でがみられる。外面の色調は煤が付着し黒茶褐色である。内面は明茶褐色である。98は丸みをもつ胴部で、厚手である。文様は5列と思われる楕円押型文を縦位に施している。内面の器面調整はやや雑で縦位に施している。色調は外面が茶褐色で内面が暗茶褐色である。99は丸みをもつ胴部で、厚手である。文様は5列と思われる楕円押型文を縦位に施している。内面の器面調整は搔き上げで斜位に施している。色調は外面が暗茶褐色で内面が茶褐色である。100・101・102・103は

胴部である。100・103は縦位に、101・102は横位に施している。調整は撫で調整で、色調は黒褐色である。

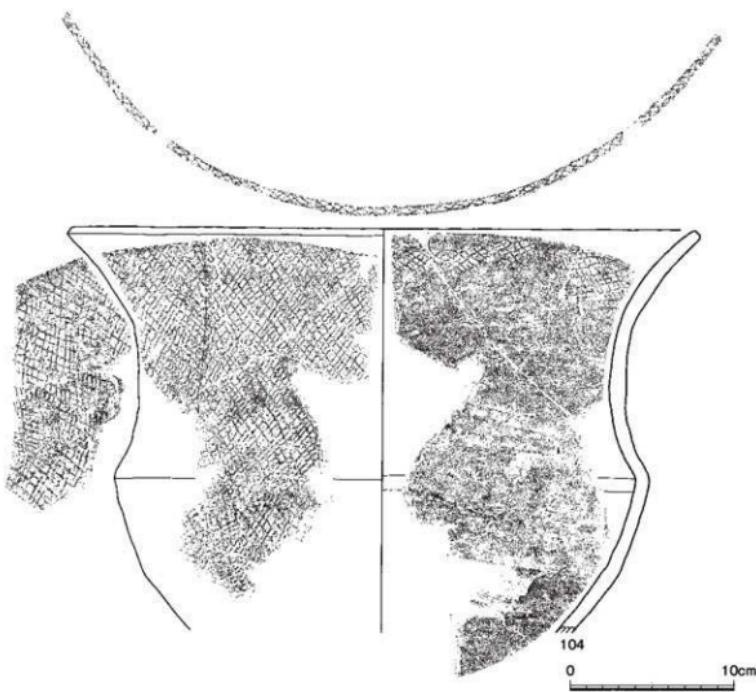


第103図 VIIIc 類土器

#### VIIId類 (第104図104)

この類は格子目押型文を施したものである。

104は肩部で稜をもち頭部で縮まり、口縁部が大きく開き、胴部が丸みを持つ器形である。縦位と横位の筋を掘り込んだ施文具で回転して押型文を施している。結果的に四角形の外が菱状に施文された形で、その内は5列と思われる。施文は口唇部と内側口縁部そして、外面全体である。押型文は口縁部内側や外面全体から観察すると菱形をなしているので、施文具の筋は斜状にクロスしていることが伺えられる。よって、施文方向は内面が横位に外面が縦位と考えられる。土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は、 $8,110 \pm 40$ (yrBP)である。



第104図 VId類土器

#### VIIe類 (第105図105)

この類は同心円状の褚円押型文が施されているものである。

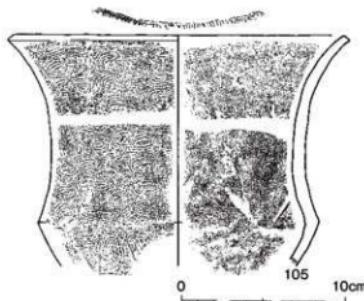
105は稜をもつ肩部が土器の下位になり、頭部が長くやや締まり、口縁部が外反する器形である。

なお、胴部は丸みをもっている。文様は口唇部と外面に縦位に施されている。内面の調整は横位の撫で調整である。色調は、外面が茶褐色の中に黒斑が有り、内面は明茶褐色である。

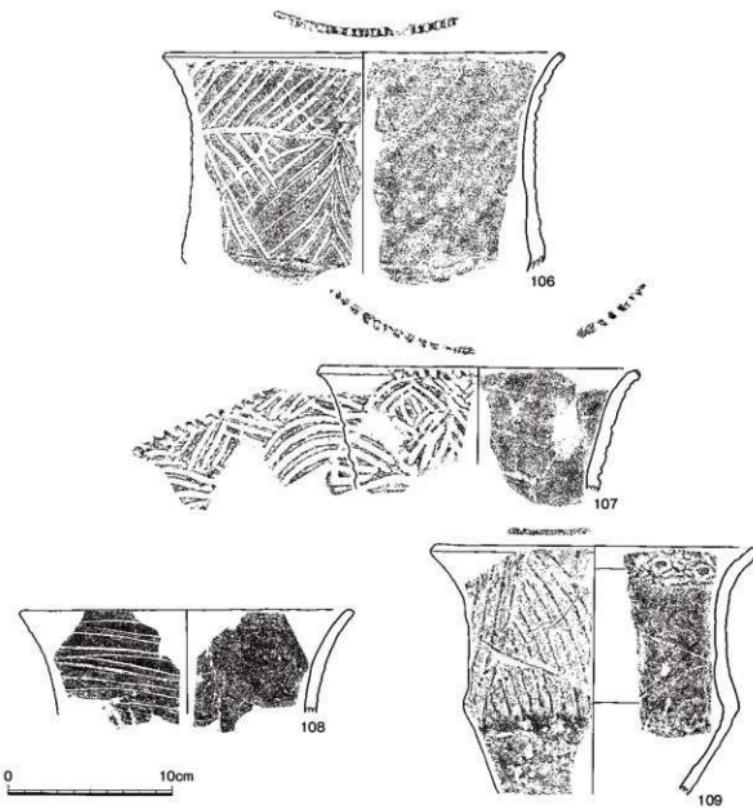
#### IX類 (第106図106~108)

この類は文様に沈線文を施すタイプである。

106は肩部に稜を付け「く」の字状に折れ、頭部が長く、やや締まり、口縁部が外反する器形である。文様は口唇部には刻み目を施し、口縁部から頭部の間に、沈線文を施している。文様の構成は頭部の上部に横位の沈線を施し、上部は斜位の沈線を廻し、下部には斜位の沈線を直角に組合わしている。内面の調整は丁寧な横撫で調整である。色調は外面が黄茶褐色で、内面が暗茶褐色である。



第105図 VIIe類土器



第106図 IX類・X類土器

器壁は薄手である。107は頸部から外反する器形の口縁部である。文様は口唇部に刻み目を入れ、弧文を重ねた重弧状と菱形をした内外に重ねた重外形状の文様を施している。また、重弧状と重樹形状の文様の間には山形状の文様を施している。なお、下部の文様は山形を重ねた部分らしいところが伺える。内面の調整は丁寧な横撫で調整である。色調は外面が暗灰茶褐色中に黒斑がある。器壁は薄手である。108は頸部から大きく外反する口縁部である。文様は細い沈線を横位に施している。内面の調整は丁寧な横撫で調整である。色調は外面が黒茶褐色で、内面が暗茶褐色である。器壁は薄手である。

#### X類（第106図109）

この類は微隆起突帯を施した土器である。

109は肩部に稜を付け「く」の字状に折れ、頸部が長く、やや締まり、口縁部が外反する器形である。なお、胴部は直線的に底部に向かっている。文様は肩部より上に微隆起突帯を弧状の縱位に重

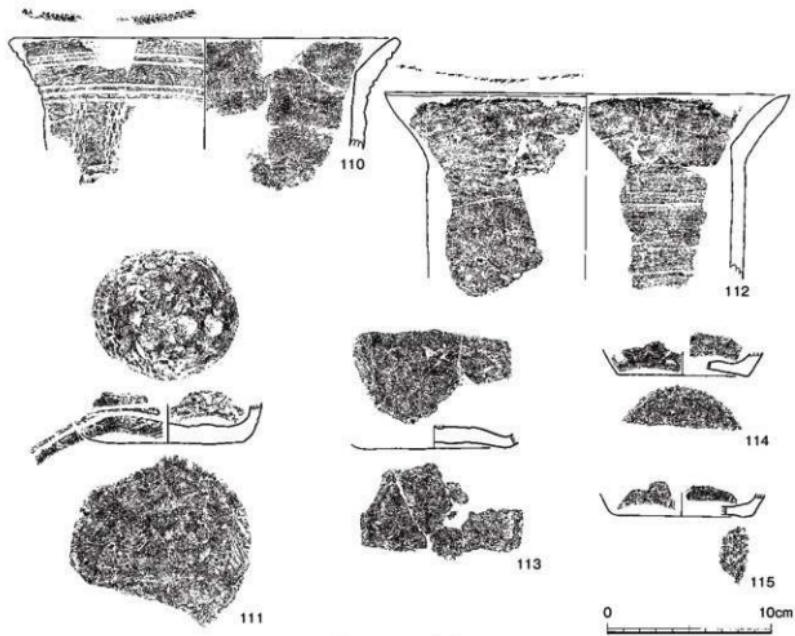
ねて施し、内面には円形と山形類似の押型文を横位に施している。内面の調整は丁寧な横撫で調整である。色調は外面が暗茶褐色で、内面が黒茶褐色である。器壁は薄手である。

#### XI類

この類は撚糸文と貝殻刺突文を施す土器群である。a類は撚糸と沈線文を施すもの、及び口唇部に刻みはあるが外面に施さないもの、b類は貝殻文と沈線文を施すものと、沈線のみのものに分類した。

##### XIa類（第107図110・111）

110は頸部で「く」の字状に折れ口縁部が外反し、胴部は直行する器形である。文様は口唇部に羽状の刻み目を施し、口縁部に2条の沈線、頸部に3条の沈線を横位に施している。胴部は網目状の撚糸文を縦位に施している。色調としては外面が暗灰茶褐色の胎土に黒色の煤が沈線内や口縁部に付着している。内面には煤が付着していない暗灰茶褐色を呈している。111は平底の底部である。底部の外面の器面調整は撫で調整で、角は丸く餅状に整形され、中には笠状の刺痕が走っていて



第107図 XI類土器

キズもある。内面の整形は中央部を厚く手撫ででつくり、胴部との縁を笠状施文具で押しながらおり、全体的に凹凸がみられる。文様は胴部の境に2条の沈線を横位に廻らし、縦位に網目状撚糸文を施している。この網目状撚糸文は底面まで届いている部分もある。器面の色調は外面周囲が茶褐

色で、中央部が煤付着で黒色を呈している。内面は縁が黒褐色で中央部が灰褐色を呈している。

#### XIb類（第107図112～115）

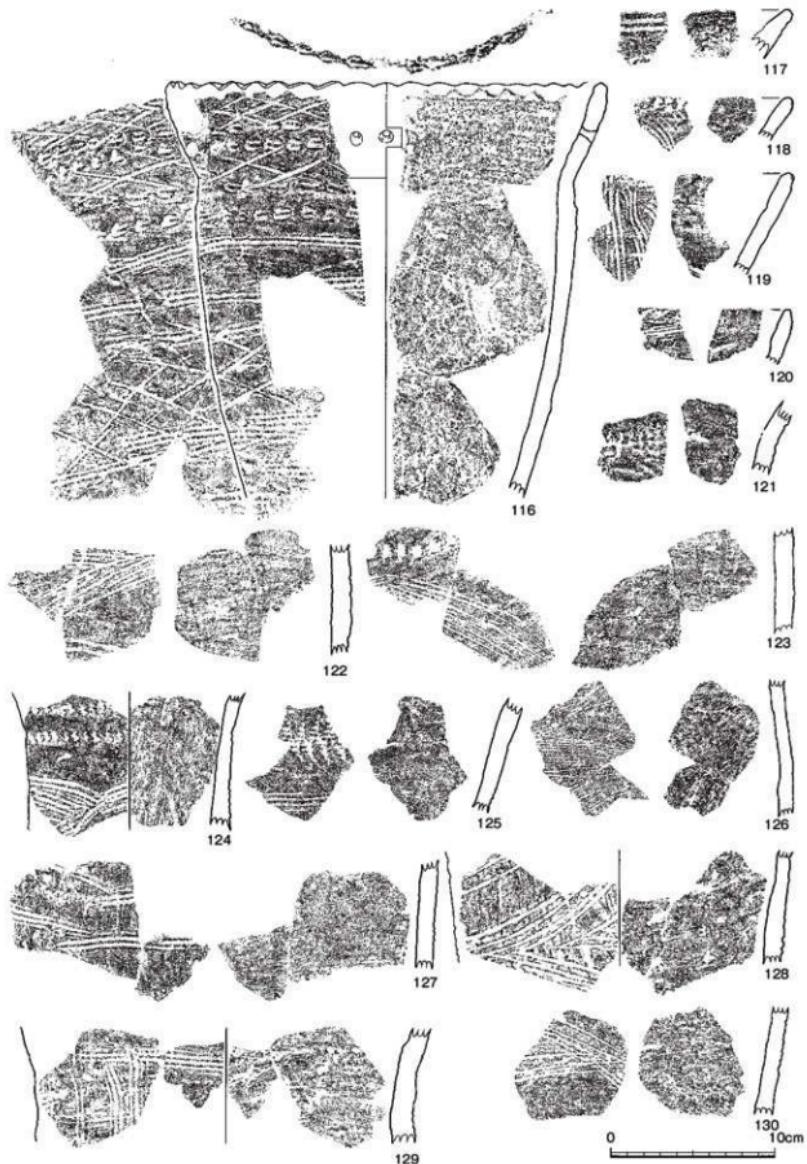
112は頸部で「く」の字状に外反し、直行した胴部の器形である。文様は口唇部に斜向した刻目文を施すのみである。器面調整は内外面とも籠状施文具による横撫でを施している。器面の色調は外面が灰茶褐色の上に黒色の煤が付着している。内面は茶褐色である。113、114、115は若干上げ底気味の底部である。上部の文様は不明であるが、薄手の整形、灰茶褐色の色調、胎土、焼成度で見れば第XI類に入る土器である。

#### XII類

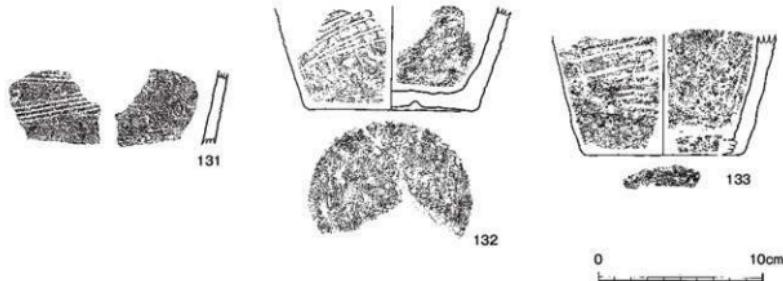
第XII類は頸部で屈折及び屈曲しやや外反した器形で、器壁が厚く、やや粗雑に器面調整されたもので、貝殻腹縁部による刺突文様や沈線を持つものである。この類は有文が第XIIa類、無文が第XIIb類に分けられた。

#### XIIa類（第108図116～133）

116は頸部で鈍角に「く」の字状に折れ、口縁部が外反し、胴部が若干丸みを持ちながら張る深鉢である。口唇部は貝殻腹縁部による押し引きの刻みを施し、口縁部は菱形格子の沈線文の上に貝殻腹縁部による押し引き刻文を頸部から上に施している。頸部は貝殻腹縁部による横位の沈線を施し、胴部は貝殻腹縁部の沈線を上位と下位に、一部は交差する2条をそれぞれに廻らし、中位は菱形格子目文の沈線を施している。色調は黒褐色を呈し、口縁部外面に煤が付着し黒色斑点がみられる。器面調整は、籠状施文具による撫で調整である。また、円形の補修孔が口縁部にみられる。117は外反する口縁部で、文様は沈線と貝殻刺突の一部が見られる。色調は外面が暗茶褐色で内面が黒褐色である。118は外反する口縁部で、文様は横位の貝殻刺突と曲状の貝殻条痕が見られる。色調は外面が灰茶褐色で内面が茶褐色である。119は外反する口縁部で、文様は横位貝殻刺突と縦位の貝殻状痕が見られる。色調は内外面暗茶褐色である。120は外反する口縁部で、文様は斜傾の貝殻刺突と貝殻条痕及び沈線が見られる。色調は外面が赤茶褐色で内面が茶褐色である。121はやや外反する頸部である。文様は貝殻腹縁部による横位の連続刺突文と同条痕である。色調は内面が灰茶褐色で、外面が茶褐色である。122は厚手の胴部である。文様は4本の沈線を束状にし、交差した沈線文である。色調は外面が黒茶褐色で、内面が灰褐色である。器面調整は籠撫で調整である。123は胴部である。文様は貝殻刺突文と束にした弧状の沈線文である。色調は外面が黒褐色で、内面が暗褐色である。器面調整は籠撫で調整である。124は外反する口縁部をもつ頸部で、文様は口縁部に横位の貝殻刺突と弧状の貝殻条痕及び沈線が見られる。器面調整は内面が縦位の撫で調整で、外面が丁寧な撫で調整である。色調は外面が黒茶褐色で、煤の付着もみられ、黒斑がある。内面は茶褐色である。125はやや外反する頸部である。文様は貝殻腹縁部による横位の連続刺突文と同条痕である。色調は内外面灰茶褐色である。126は薄手の頸部から胴部である。文様は束状にした弧状の沈線文である。色調は外面が茶褐色で、内面が暗褐色である。器面調整は籠撫で調整である。127は厚手の胴部である。文様は貝殻腹縁部による4本の条痕で、繋ぎながら横位に施している。色調は外面が茶褐色で、内面が灰褐色である。器面調整は籠撫で、内面は荒い籠撫で調整である。128は薄手の胴部である。文様は4本沈線を束状にした「く」の字状の沈線文の繰り返しである。色調は外面が茶褐色で、内面が暗褐色である。器面調整は籠撫で、内面は荒い籠撫で調整である。129はやや締まった厚手の



第108図 Xlla類土器(1)

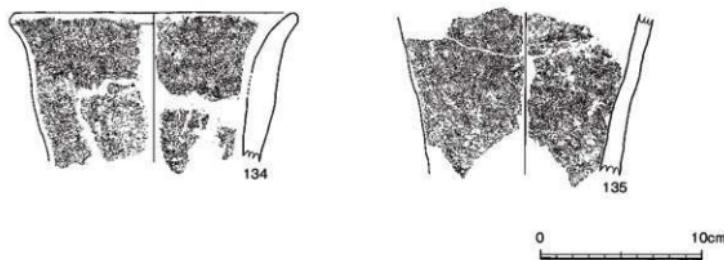


第109図 XIIa類土器(2)

頸部である。文様は格子目に施した貝殻条痕である。色調は外面が暗褐色で、内面が茶褐色である。器面調整は範拂で調整である。130は厚手の胴部である。文様は3ないし4本の沈線を束状にし、交差した沈線文である。色調は外面が茶褐色で、内面が明暗褐色である。器面調整は範拂で調整である。胎土は石英、長石、角閃石等がみられる。焼成度は良く硬質である。131は薄手の胴部である。貝殻腹縁部による沈線文である。色調は外面が暗茶褐色で、内面が茶褐色である。器面調整は範拂で調整であるが全体的に角が潰れ川で磨耗された状況で研磨状である。132は厚手の底部である。文様は4本の沈線を束状にした沈線文である。色調は外面が茶褐色で、内面が黒褐色である。器面調整は範拂で調整で、底面内部は凸凹である。133は厚手の底部である。貝殻腹縁部による斜条痕である。色調は外面が灰茶褐色で、内面が灰暗褐色である。器面調整は範拂で調整である。

#### XIIb類 (第110図134・135)

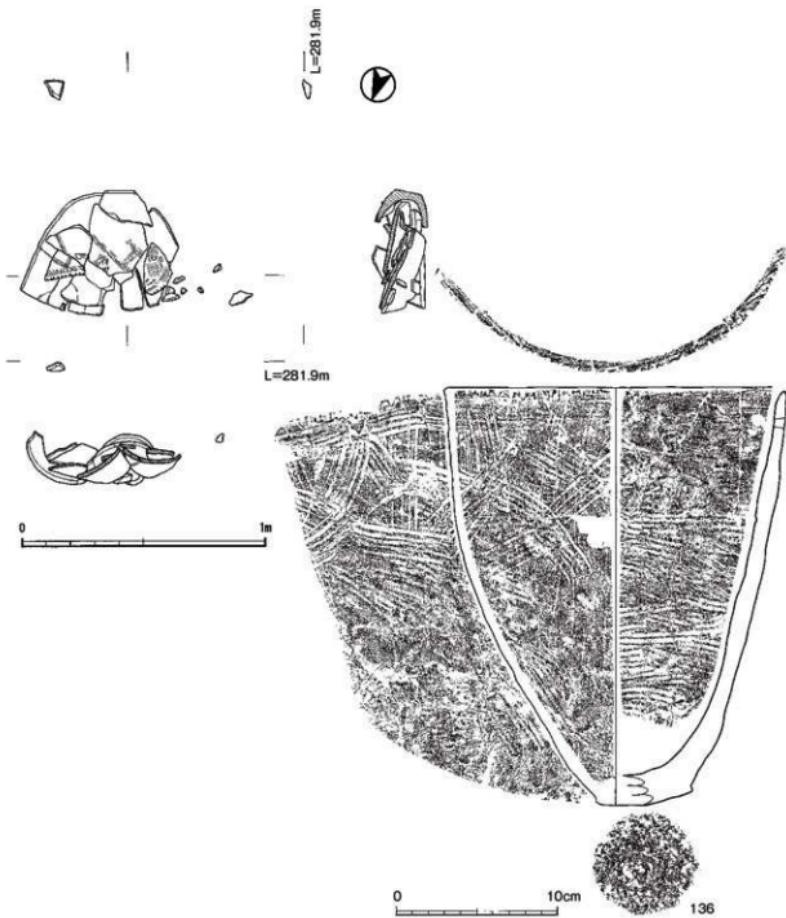
134は口縁部が外反する器形で、器壁の厚みは口縁部より胴部が厚くずんぐりとした深鉢である。色調は口縁部外面が黒褐色で胴部は暗茶褐色である。内面は口縁部が暗茶褐色で胴部は茶褐色である。135は深鉢の胴部である。器面調整は丁寧な拂で調整である。色調は外面が茶褐色で、内面が黒褐色である。



第110図 XIIb類土器

### XIII類 (第111図136)

この類は文様に条痕を施すものである。136は口縁部が直行し、胴部から底部に向かって絞り込まれ、丸底に若干貼り付けをして段を付けた底部をもつ深鉢の完形土器である。器形としてはいびつである。文様は口唇部外面に範状施文具による刻み目を施し、口縁部から胴部にかけて貝殻腹縁部による6条の条痕を3~4cm間隔で縦位に施し、口縁部には横位に、胴部には施文具を交差させ菱形の格子状に施している。器面調整は外面が貝殻条痕の上を撫で調整し、内面は貝殻腹縁部による横位の条痕を施している。色調は外面の口縁部に煤が付着し黒褐色を呈し、胴部から下は茶褐色である。なお、底部は使用されて白色化している。また、内面は黒茶褐色を呈している。



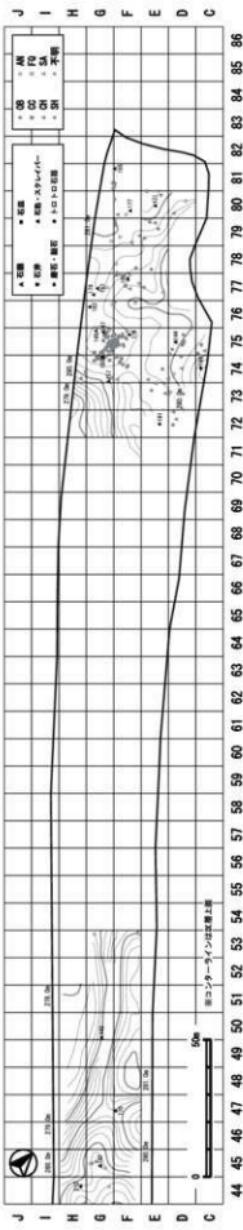
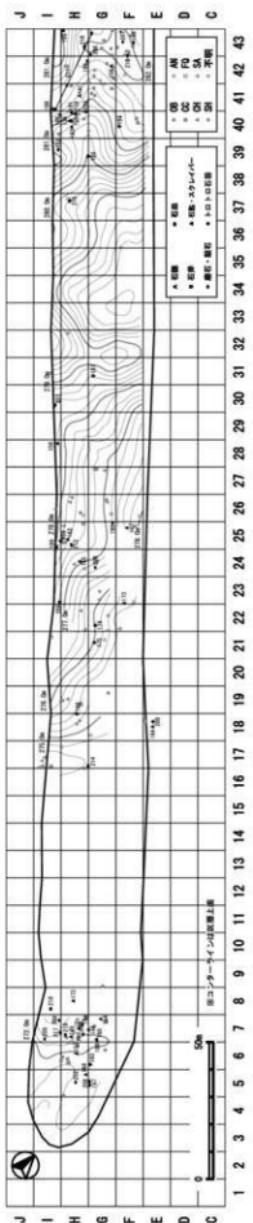
第111図 XIII類土器及び出土状況図

第20表 II類～XIII類土器觀察表(1)

組別	遺物番号	出土位置	分組別	分類別	式	文様・模様(内)	色調(内)	色調(外)	加工	傳成	備考	
88	27	-	II	a	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	暗灰褐色	黒褐色	長・石	研貫	口徑12.6cm
	31130	-		b	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	暗灰褐色	黒褐色	長・石	研貫	直径14.4cm 厚17.9mm
	31164	-		a	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	暗灰褐色	黒褐色	長・石	研貫	
	36135	-		b	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	暗灰褐色	黒褐色	長・石	研貫	
89	30	11366	II	a	G 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	暗灰褐色	暗灰褐色	長・石	研貫	直径14.4cm 厚17.9mm
	980	-		b	G 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	暗灰褐色	暗灰褐色	長・石	研貫	直径12.9cm
	1000	-		c	G 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	暗灰褐色	暗灰褐色	長・石	研貫	
	1992	-		d	G 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	暗灰褐色	暗灰褐色	長・石	研貫	
90	31	3356	III	a	E 98 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	直径14.4cm
	5962	-		b	E 98 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	6162	-		c	E 98 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	57	459		d	E 98 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	38	927		e	E 98 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	39	4672		f	E 98 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	40	4679		g	E 98 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	41	5898		h	E 98 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	42	407		i	E 98 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	43	5899		j	E 98 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
91	44	4678	IV	k	E 98 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	45	1967		l	C 25 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	46	1945		m	R 25 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	47	1962		n	R 25 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
92	48	4592	V	o	P 79 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	直径12.8cm
	49	399		p	C 25 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	50	1988 4838		q	P 79 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	51	10017		r	C 25 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	52	3851		s	P 79 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	53	3853		t	P 79 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	54	6217 5908		u	P 79 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	直径23.8cm
	55	59		v	P 79 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	56	3855		w	P 79 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	57	59		x	P 79 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
93	58	3109	VI	y	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	59	21957		z	G 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	60	4173		a	G 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	61	6265 6339		b	G 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
94	62	2966	VII	c	F 80 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	直径11.2cm
	63	新作山 6.18.18		d	F 80 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	64	1962		e	F 80 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	65	1960		f	F 80 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	直径23.8cm
95	66	6319	VII	g	F 80 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	直径18.0cm
	67	2118		h	F 80 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	68	5838		i	F 80 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	69	2899		j	F 80 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
70	70	2899 2991 2803	VII	k	F 80 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	直径17.8cm
	71	2293		l	F 80 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
96	72	11358	VII	a	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	直径16.8cm
	73	11358		b	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	74	11358		c	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	75	11358		d	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
97	76	11358	VII	e	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	直径12.0cm
	77	11358 1300 1301		f	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	78	12124		g	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	79	11001 11005		h	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
100	80	1941	VIII	i	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	81	1125 1126 1214		j	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	直径14.4cm 厚17.9mm
	82	2224		k	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	83	5981		l	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
101	84	21085	VIII	m	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	直径25.8cm
	85	5243		n	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	86	3883		o	G 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
	87	5972		p	G 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	
102	88	11349	VIII	q	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	直径24.0cm 厚17.2mm 高24.3cm
	89	5006		r	H 20 VI	-	丁寧な鉛錠で 丁寧な鉛錠で	素面	素面	長・石	研貫	部分有 鋼打鉢

第21表 II類～IV類土器觀察表(2)

番号	通番号	分類1	分類2	分類3	形態	文様・調査(四)	色調(外)	色調(内)	断土	傳承	備考
90	6245.66	a	F 49 VI	-	山形押模文	無で	暗茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	復行舟、鷺江舟
91	6245.67	a	G 49 VI	-	山形押模文	無で	暗茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	
92	30863	a	G 43 VI	-	山形押模文	凹凸	暗茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	
93	30864	a	G 43 VI	-	山形押模文	凹凸	暗茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	
94	7969	a	G 43 VI	-	山形押模文	無で	暗茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	口径39.9cm
95	28830	b	H 42 VI	-	山形押模文	無で	茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	
96	100108.967	c	H 25 VI	-	椎円押模文	無で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径38.8cm
97	10621.10619	c	H 43 VI	-	椎円押模文	無で	茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	
98	6245.671	c	H 42 VI	-	椎円押模文	無で	茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	
99	6245	c	F 43 VI	-	椎円押模文	無で	茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	
100	6245	c	F 43 VI	-	椎円押模文	無で	茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	
101	6245	c	F 43 VI	-	椎円押模文	無で	茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	
102	6245	c	H 25 VI	-	椎円押模文	無で	茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	
103	6245.631	c	F 42 VI	-	椎円押模文	無で	茶褐色	茶褐色	長・石・角	縦質	
104	100108.10041	d	H 25 VI	-							
105	100108.10041	d	H 24 VI	-	格子押模文	無で	明茶褐色	明茶褐色	長・石・角	軟質	口径39.9cm、年代未定
106	10621.10631	I	25 VI	-							
107	100108.10042	I	25 VI	-							
108	100108.10042	I	25 VI	-							
109	10621.10631	I	25 VI	-							
110	7969	I	25 VI	-							
111	8146	e	F 25 VI	-	同心円状渋円 押模文	無で	茶褐色	明茶褐色	長・石・角	縦質	口径39.9cm
112	2010.9116.2110	e	G 39 VI	-							
113	111111.11114.1110	G 7 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径38.9cm	
114	2010.9116.2120	G 7 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
115	111111.11116.1110	G 7 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径39.9cm	
116	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
117	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
118	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
119	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
120	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
121	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
122	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
123	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
124	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
125	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
126	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
127	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
128	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
129	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
130	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
131	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
132	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
133	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
134	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
135	111111.11116.1110	P 53 VI	-	網目状文	丁寧な撚で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	縦質	口径19.4cm	
136	20140	X III	H 42 VI	a	刻目条文	無で	茶褐色	黑茶褐色	長・石・角	軟質	復行舟、鷺江舟



第112図 VIII層～VIa層(縄文早期)出土石器状況図

## (2) 石器

縄文時代早期の石器は、VII層～VIa層を中心に出土している。同包含層内からは、縄文時代早期の土器が出土しており、石器類に関しても同様と想定する。以下に、石鏃21点、石匙11点、スクレイバー13点、トロトロ石器1点、局部磨製石斧1点、打製石斧5点、磨石・敲石22点、石皿9点を図示した。

### 石鏃 (第113・114図137～157)

25点出土し、21点図示した。

137～143は最大長2cm未満の小型のものである。137～140は、二等辺三角形形状を呈し、138・140は基部が浅く凹む。141～143は正三角形形状を呈し、141・142は基部に浅い抉りが、143は明確に脚部が作出された深い抉りが見られる。

144～151は最大長2cmを超える大型のものである。144・145は二等辺三角形形状を呈し、基部に抉りは見られない。146～151は二等辺三角形形状を呈し、基部に抉りが見られる。147～151は、明確に脚部が作出されている。150・151は、胴部中央のやや下位に角をもつ形状である。

152～154は、欠損のため形状の分類ができなかった。155～157は未製品である。

### 石匙 (第115・116図158～168)

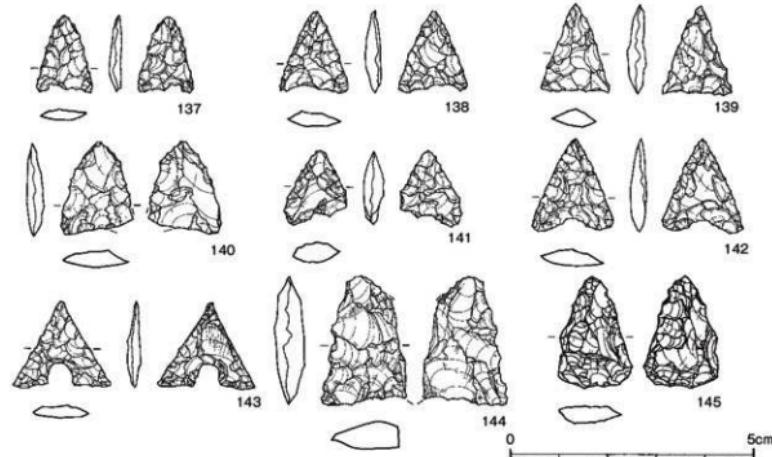
11点出土し、全て図示した。160・162～164はチャート製、158・159・161・165～168は安山岩製であり、チャート製4点のうちの3点は縱長の形状をしている。

### スクレイバー (第116・117図169～181)

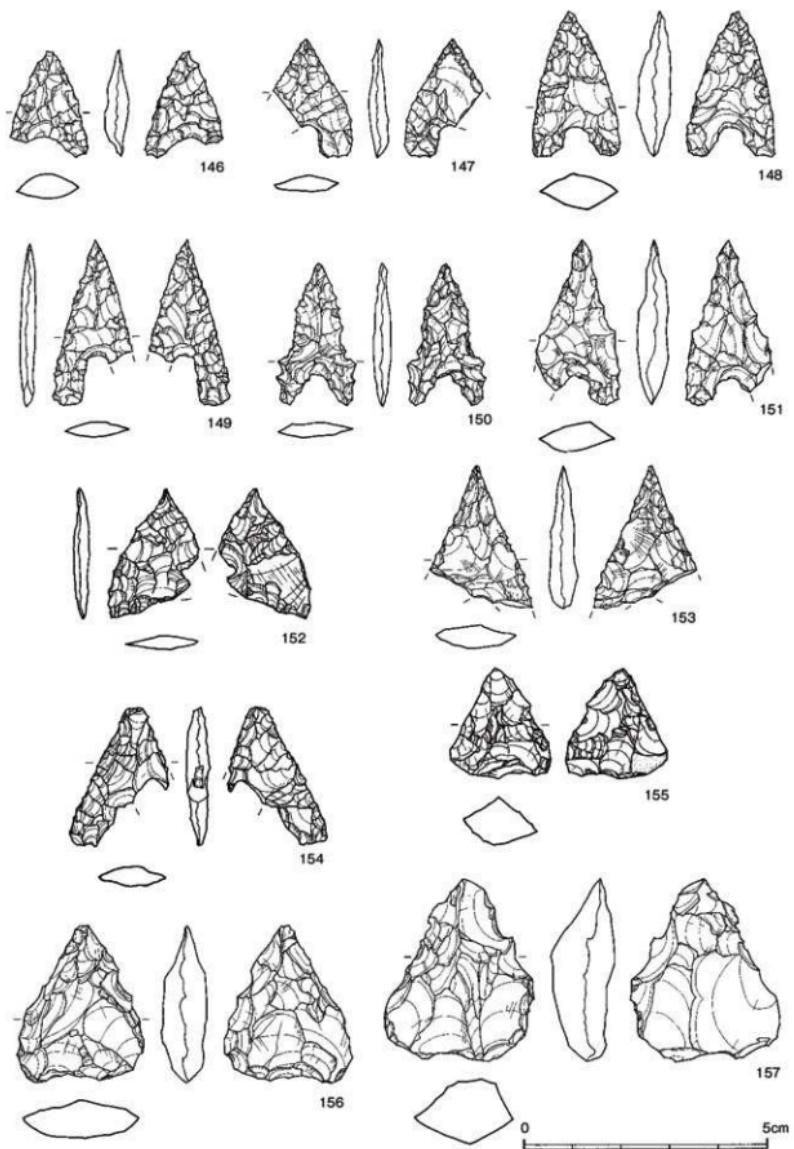
17点出土し、13点図示した。180は刃部が明確に形成され、その角度は急である。181は表裏面に研磨が加えられていることから、磨製石斧を再生してスクレイバーに利用したと考えられる。

### トロトロ石器 (第117図182)

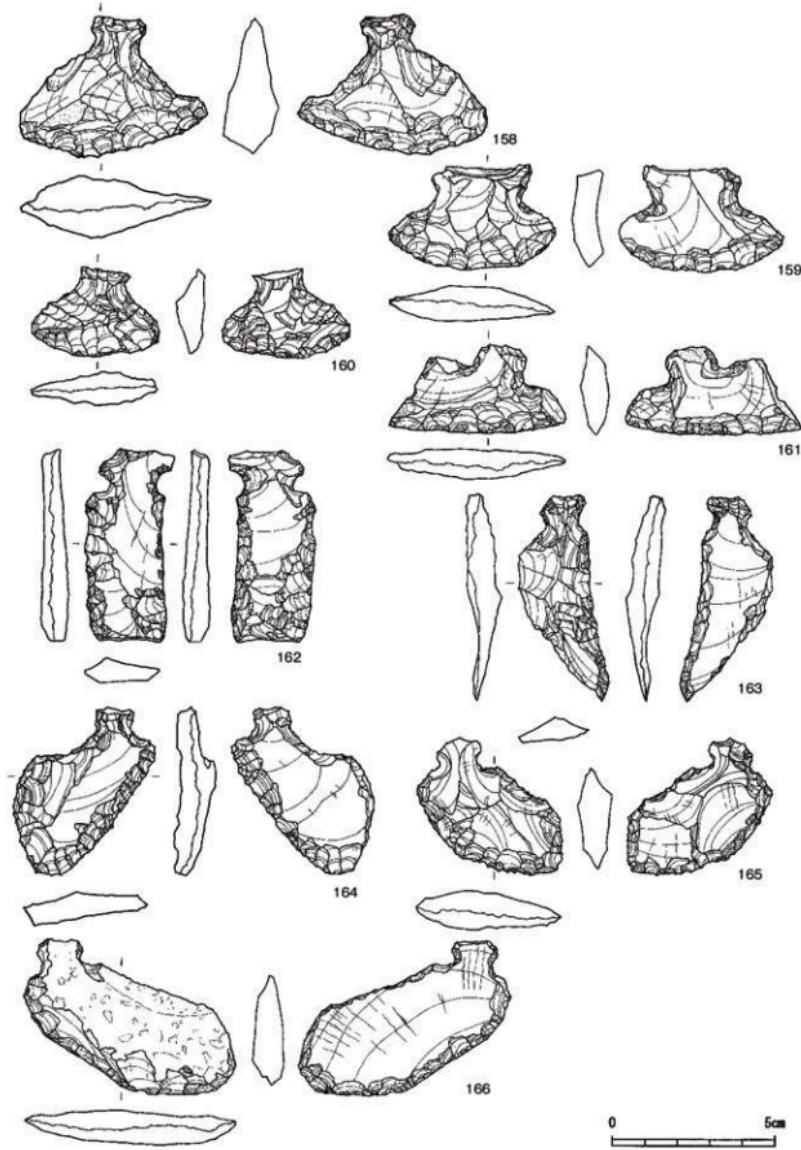
1点出土した。182は表裏面の剥離稜線が摩滅し光沢をもった、いわゆるトロトロ石器である。



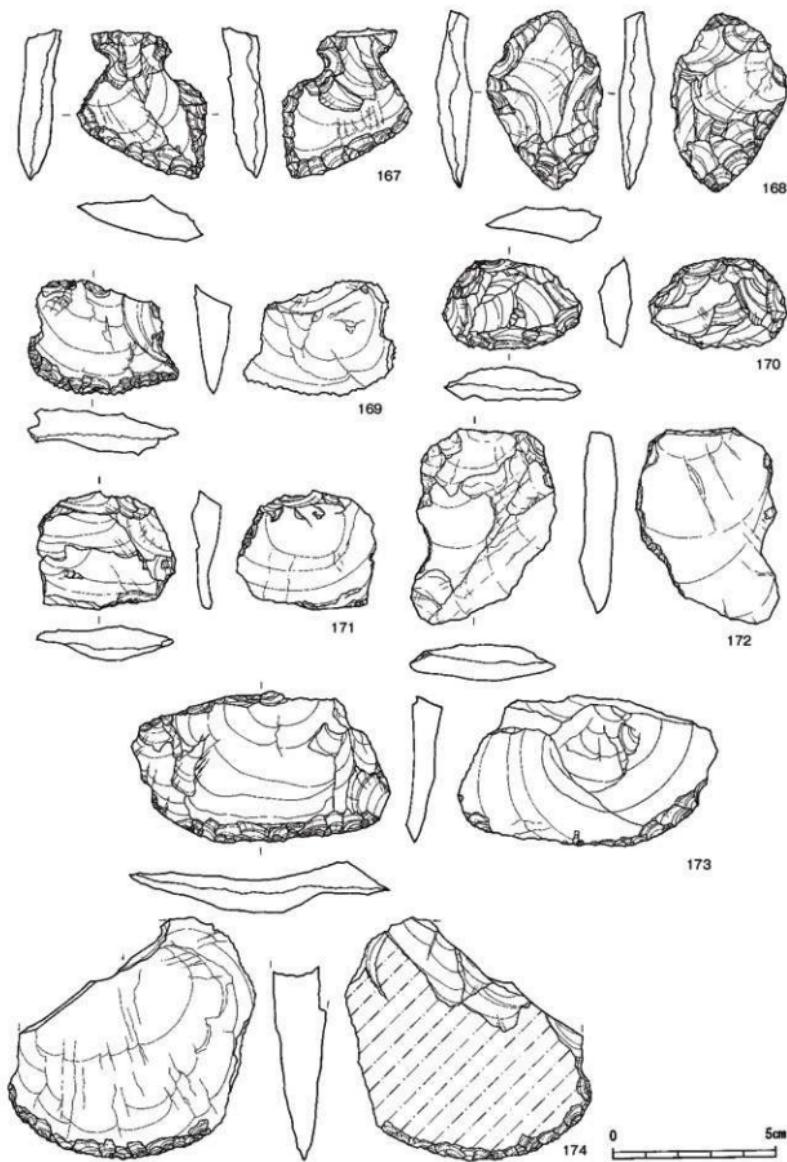
第113図 VII層～VIa層（縄文早期）出土石器(1)



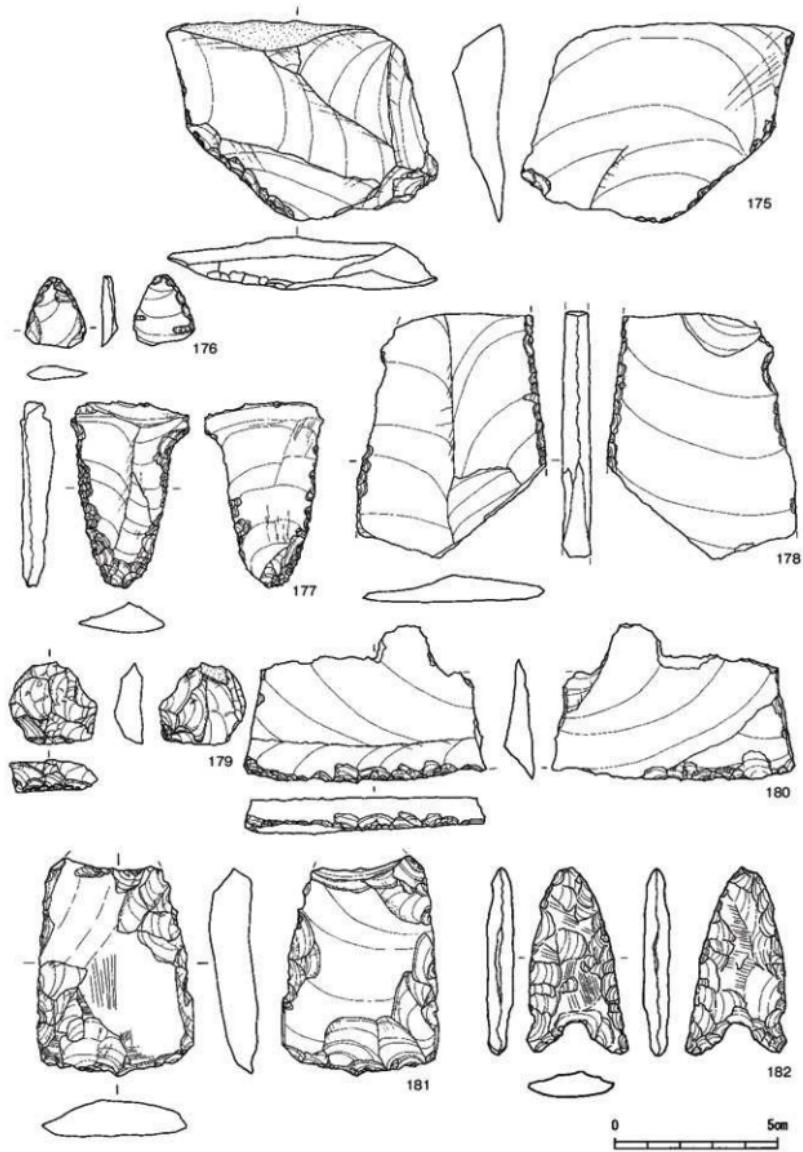
第114図 VII層～Via層（縄文早期）出土石器(2)



第115図 VII層～VIA層（縄文早期）出土石器(3)



第116図 VII層～VIA層（縄文早期）出土石器(4)



第117図 VII層～VIA層（縄文早期）出土石器(5)

### 石斧（第118図183～188）

6点出土し、全て図示した。磨製石斧と打製石斧を一括した。183は局部磨製石斧で、基部の両側縁に研磨を加えている。184～188は打製石斧である。187は裏面と左縁部に節理面が残る剥片を素材としている。188は自然縞皮面が残る剥片を利用しており、基部近くの両側面に抉りが認められる。他は基部や刃部が欠けた欠損品である。

### 磨石・敲石

磨面や敲打痕が認められるものを一括して取り扱い、使用痕や形態等から4類に大別した。

I類（第119図189～192）表・裏面に磨面が認められ、いわゆる「磨石」である。5点出土し、4点図示した。54は表面に磨面が認められ、やや扁平な素材を用いている。189・191は、表・裏面に磨面が認められる。

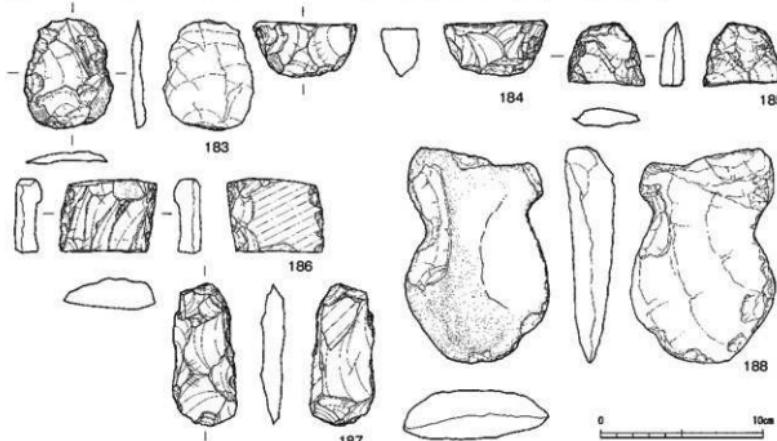
II類（第119・120図193～200）平面形態が円形または梢円形であり、表・裏面に磨面を有し、主に端部や周縁部に敲打痕が認められるものである。8点出土し、全て図示した。194・197・199は円形を、193・196・200は梢円形を呈してそれぞれ周縁に敲打痕が認められる。197は1号集石遺構内から出土した破片と接合した。198は隅丸方形を呈した扁平な素材を用いている。

III類（第120～122図201～207、210）平面形態が円形または梢円形であり、表・裏面に磨面を有し、主に表・裏面や周縁部に敲打痕が認められるものである。8点出土し、全て図示した。201～204、206は円形を、205・210は梢円形を呈している。204は表面と周縁部に、203・206は表・裏面と周縁部に敲打痕が集中している。

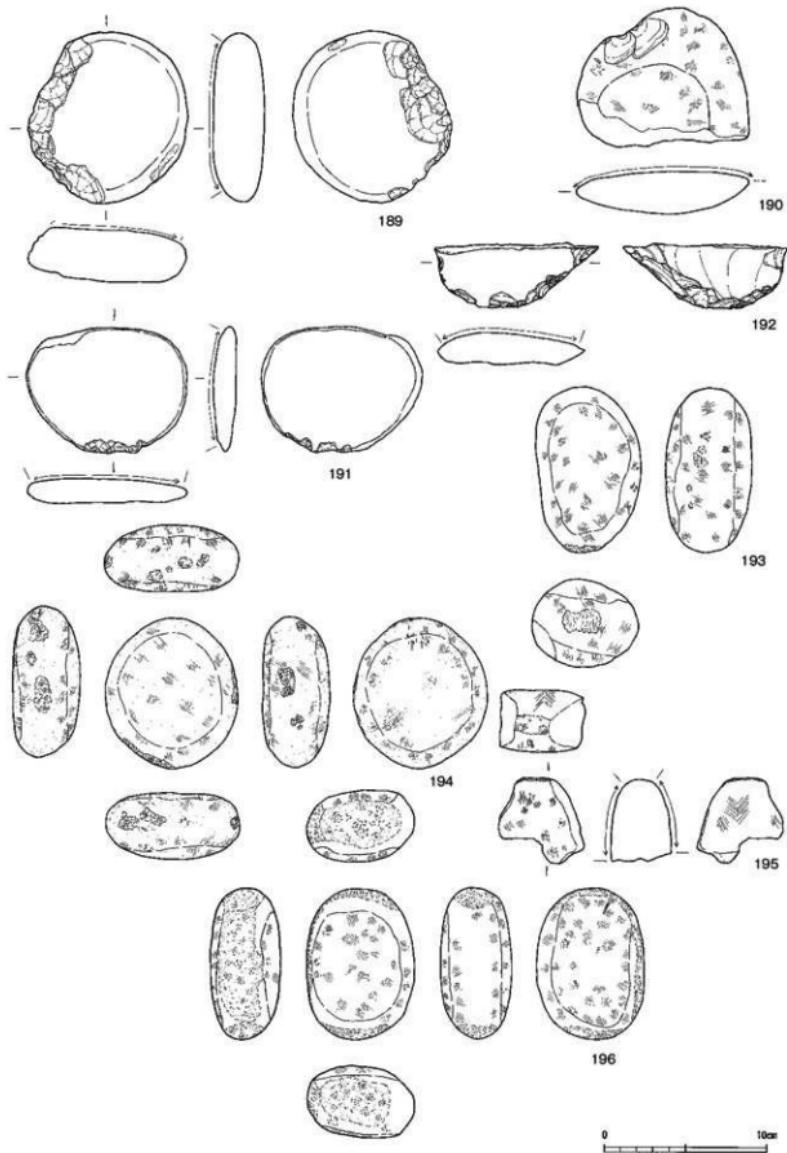
IV類（第122図208・209）敲石としてのみ使用されている。2点出土し、全て図示した。208・209ともに安山岩である。

### 石皿（第122・123図211～219）

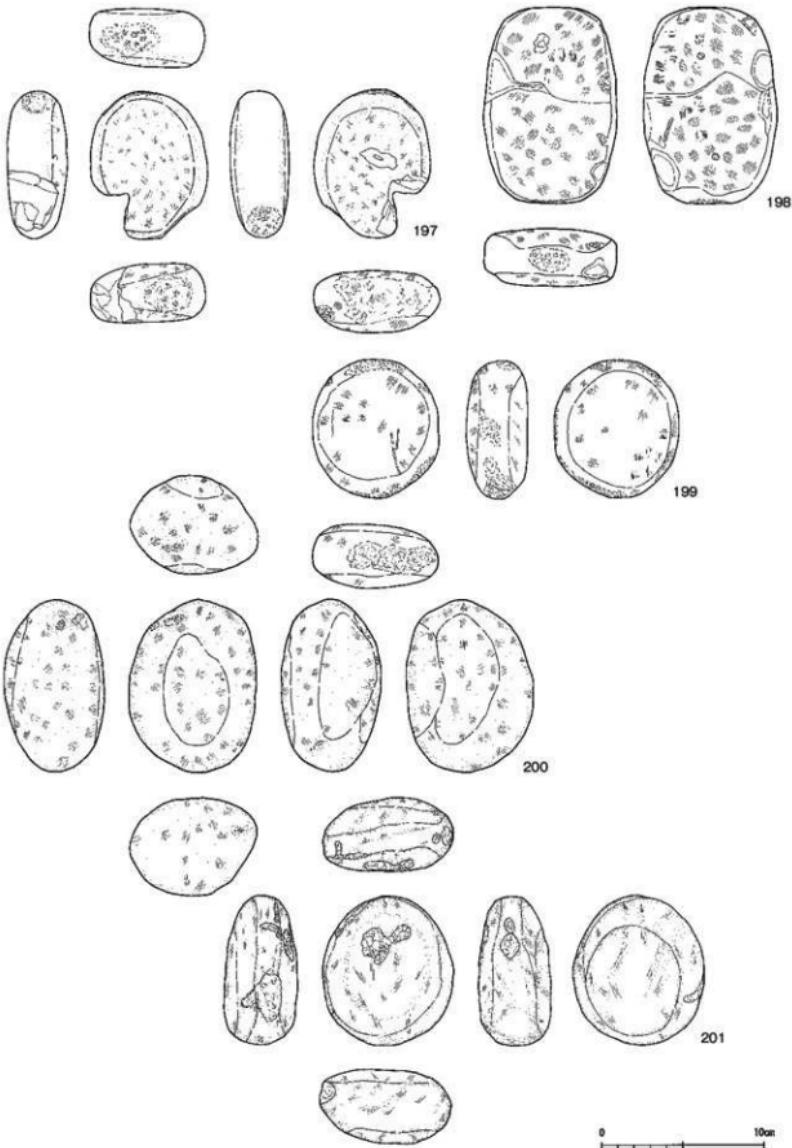
平坦面が使用により磨かれているものである。13点出土し、9点図示した。破碎したものが多く、完形は214の1点のみである。213・214の2点は砂岩で、その他7点は安山岩である。



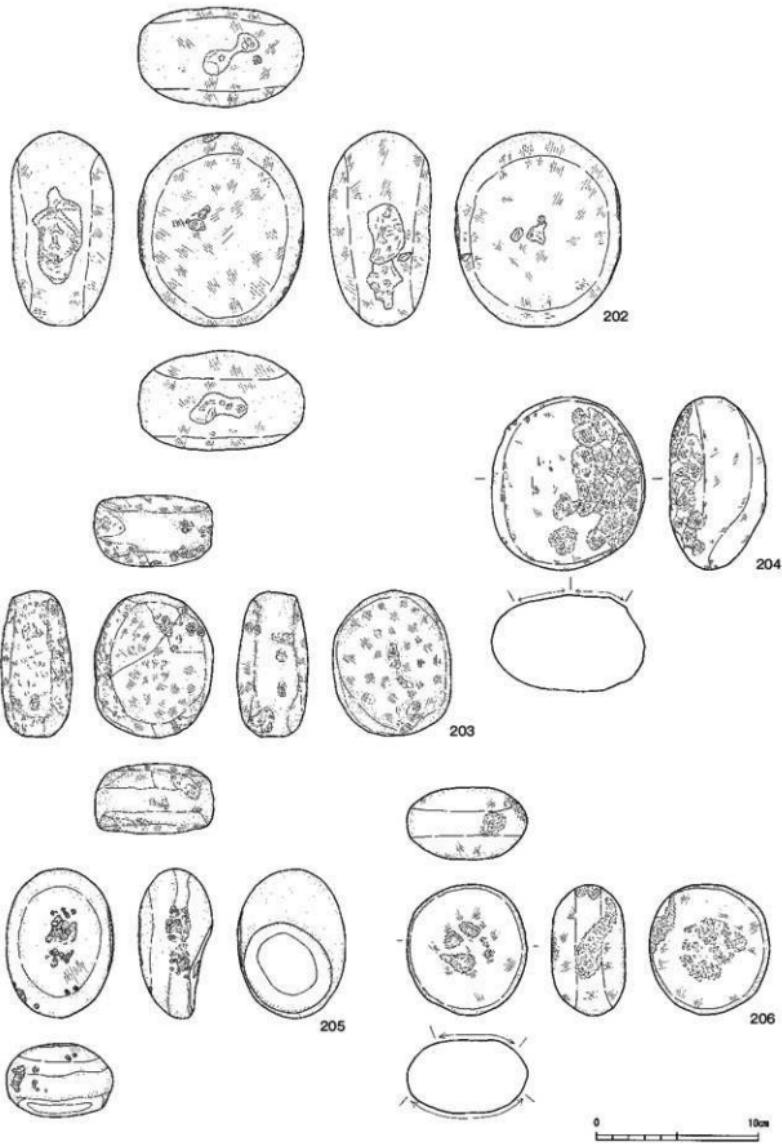
第118図 VII層～VIa層（縄文早期）出土石器(6)



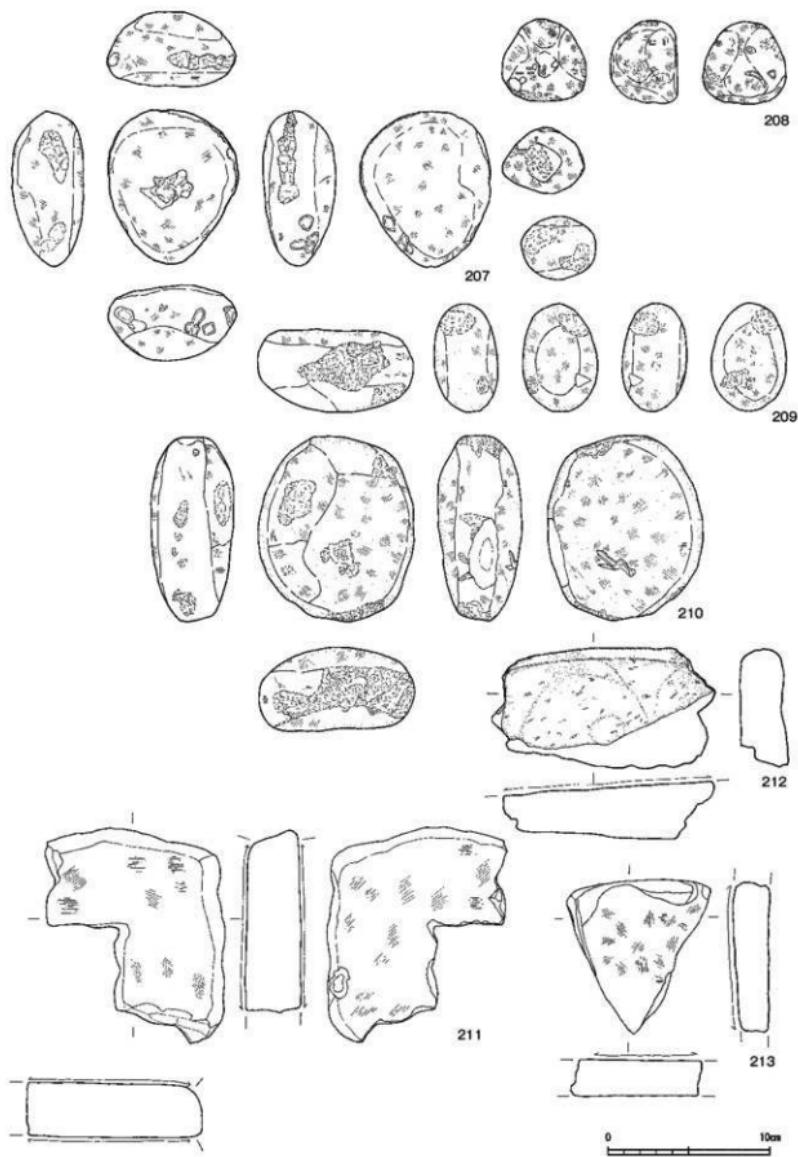
第119図 VII層～VIa層（縄文早期）出土石器(7)



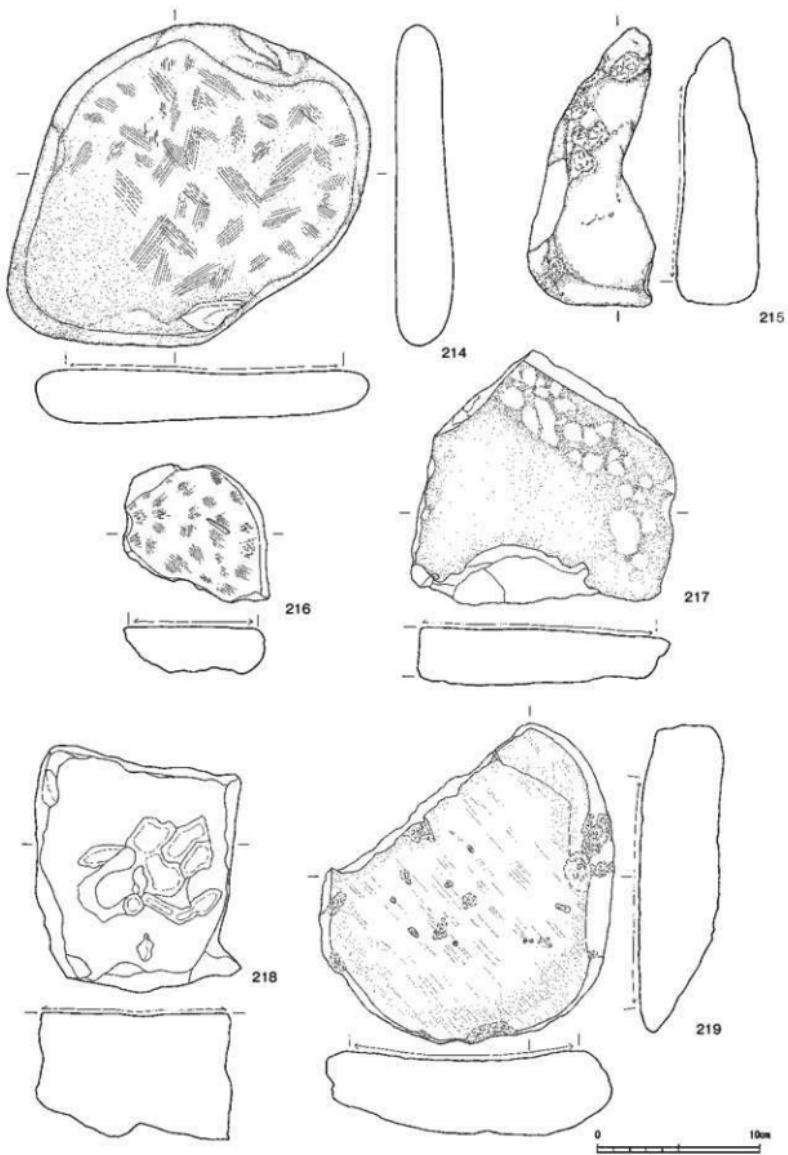
第120図 VII層～Via層（縄文早期）出土石器(8)



第121図 VII層～Via層（縄文早期）出土石器(9)



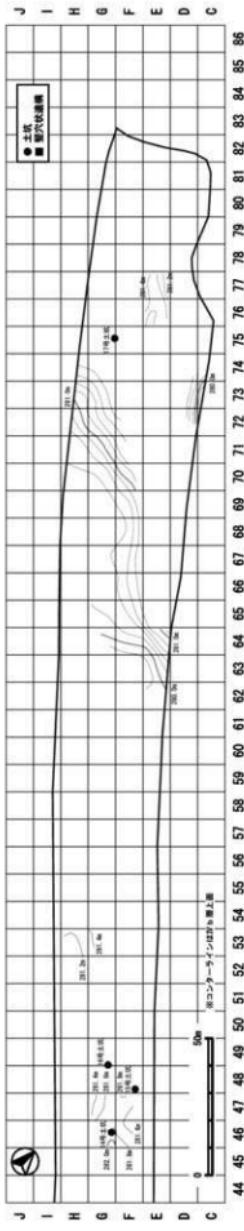
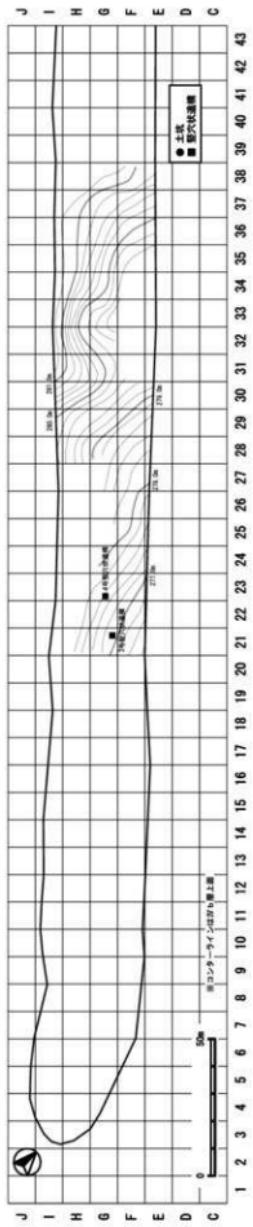
第122図 VII層～Vla層（縄文早期）出土石器(10)



第123図 VII層～VIa層（縄文早期）出土石器(1)

第22表 V層～VIa層（繩文早期）出土石器観察表

博物番号	団番号	出土番号	器種	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	色	備考1	備考2
113	137	3650	打削石器	1.6	1.1	0.2	0.41	Obsコノ木	G	77	7
	138	45	打削石器	1.7	1.4	0.3	0.51	Obsコノ木	H	40	7
	139	55	打削石器	1.8	1.4	0.4	0.64	Obsコノ木	H	40	7
	140	4	打削石器	1.9	1.5	0.3	0.81	安山岩	F	73	7
	141	21117	打削石器	1.5	1.3	0.4	0.58	Obsコノ木	H	41	8
	142	6255	打削石器	1.9	1.7	0.3	0.76	ナホト	G	45	7
	143	6192	打削石器	1.8	2.0	0.3	0.47	Oh御島	G	50	7
	144	4827	打削石器	2.6	1.7	0.6	2.57	Ob.土生典	B	25	7
	145	11906	打削石器	2.3	1.5	0.4	1.50	ナホト	H	7	7
	146	11867	打削石器	2.2	1.6	0.5	1.01	ナホト	H	7	7
114	147	3478	打削石器	2.4	1.6	0.4	0.91	安山岩	G	75	7
	148	尾見	打削石器	3.0	1.8	0.7	2.54	ナホト	F	20	6
	149	450	打削石器	3.4	1.6	0.3	1.28	ナホト	G	25	7
	150	3510	打削石器	2.9	1.6	0.3	1.19	ナホト	G	74	7
	151	11913	打削石器	3.3	1.7	0.6	2.70	安山岩	H	7	7
	152	21145	打削石器	2.8	1.6	0.3	1.10	Obsコノ木	H	40	8
	153	11761	打削石器	2.9	2.1	0.5	2.19	安山岩	H	6	7
	154	11723	打削石器	2.8	2.0	0.4	1.60	安山岩	G	7	7
	155	428	石頭未製品	2.3	2.1	1.0	3.50	鈍石糸	F	81	7
	156	20871	石頭未製品	3.2	2.6	0.8	6.86	安山岩	G	42	7
115	157	3531	石頭未製品	3.7	3.1	1.3	11.70	ギヨクサイ	G	74	7
	158	10818	石器	4.3	5.8	1.9	25.36	ナホト	I	28	7
	159	10652	石器	3.2	5.1	1.1	17.63	ナホト	I	25	7
	160	12334	石器	2.7	3.9	0.9	8.26	ナホト	G	7	7
	161	6	石器	2.7	5.5	0.9	12.53	ナホト	G	62	6
	162	3638	石器	5.9	2.8	0.9	34.79	ナホト	G	76	7
	163	10037	石器	6.3	2.8	1.0	30.50	ナホト	H	25	7
	164	129	石器	5.0	4.3	1.3	38.07	ナホト	E	18	7
	165	88	石器	4.2	4.4	1.2	36.02	ナホト	H	24	7
	166	11068	石器	4.7	6.5	1.0	36.41	ナホト	H	5	7
116	167	11224	石器	4.5	3.9	1.1	36.60	ナホト	F	25	7
	168	20651	石器	5.4	3.5	1.3	30.70	ナホト	H	43	7
	169	10659	スレリバイ	3.4	4.6	1.3	16.50	ナホト	I	25	7
	170	6270	スレリバイ	2.8	4.2	1.0	12.50	ナホト	F	47	7
	171	4763	スレリバイ	3.5	4.2	1.0	13.10	ナホト	E	80	7
	172	12364	スレリバイ	6.0	4.4	1.1	36.00	ナホト	H	8	7
	173	5980	スレリバイ	4.6	8.0	1.0	43.60	ナホト	F	23	7
	174	6051	スレリバイ	7.4	7.6	1.8	77.90	ナホト	G	32	7
	175	6070	スレリバイ	6.1	8.2	1.6	64.40	ナホト	G	21	7
	176	3366	スレリバイ	2.2	1.9	0.5	1.74	ナホト	F	25	7
117	177	4194	スレリバイ	5.6	3.6	0.9	15.50	ナホト	F	80	7
	178	21142	スレリバイ	7.4	5.7	0.9	41.40	豆岩	H	49	8
	179	3648	スレリバイ	2.5	2.6	0.9	6.50	Oh御島	G	77	7
	180	25390	スレリバイ	1.7	2.5	1.1	31.50	安山岩	I	40	8
	181	49	スレリバイ	6.7	4.8	1.2	52.59	豆岩	H	49	8
	182	21997	トドロク	5.9	8.0	0.9	26.50	ナホト	F	29	7
	183	11970	細長打削石器	6.8	5.5	0.8	30.50	豆岩	G	6	7
	184	21137	打削石器	3.2	6.2	2.5	55.00	豆岩	F	49	7
	185	21103	打削石器	3.9	4.7	1.4	25.50	豆岩	G	39	8
	186	21965	打削石器	4.6	6.0	1.9	63.00	豆岩	I	41	8
118	187	21206	打削石器	8.6	3.9	1.5	57.70	豆岩	G	31	8
	188	11463	打削石器	13.2	8.8	3.0	335.50	豆岩	H	18	7
	189	11741	磨石	9.8	10.5	3.3	480.00	安山岩	G	7	7
	190	11158	磨石	8.5	10.6	2.7	320.00	安山岩	G	25	8
	191	2862	磨石	7.8	9.9	1.6	168.50	安山岩	E	72	7
	192	3771	磨石	3.8	9.9	2.0	80.00	安山岩	F	27	7
	193	21041	磨石	9.0	6.5	5.3	520.00	安山岩	H	49	7
	194	11945	磨石	9.3	8.2	4.1	470.00	安山岩	H	7	7
	195	11836	磨石	5.2	5.2	3.8	130.00	花崗岩	H	7	7
	196	6272	磨石	9.0	6.6	4.4	410.00	砂岩	F	43	7
119	197	11978	磨石	9.0	7.0	3.6	330.00	安山岩	G	5	7
	198	11988	磨石	9.0	7.0	3.6	320.00	安山岩	G	5	7
	199	2122	磨石	12.1	8.2	3.6	620.00	安山岩	C	24	8
	200	20834	磨石	8.6	7.8	3.8	380.00	砂岩	H	42	6
	201	127	磨石	10.6	7.8	6.1	740.00	砂岩	F	18	7
	202	21209	磨石	9.1	8.1	4.0	500.00	安山岩	I	30	8
	203	11643	磨石	1.2	10.1	6.0	1,150.00	安山岩	H	5	7
	204	11348	磨石	8.9	7.3	4.4	380.00	安山岩	I	23	7
	205	10653	磨石	10.5	9.8	6.1	820.00	安山岩	I	2	7
	206	20111	磨石	8.0	7.4	4.5	380.00	砂岩	I	7	7
120	207	6262	磨石	9.5	8.0	4.6	430.00	砂岩	G	43	6
	208	11077	磨石	5.2	5.1	4.1	150.00	安山岩	G	5	7
	209	6048	磨石	7.7	4.6	3.9	170.00	安山岩	G	24	7
	210	6254	磨石	11.4	9.5	5.1	790.00	安山岩	F	43	7
	211	20853	石皿	13.3	11.0	3.4	790.00	安山岩	G	43	7
	212	21586	石皿	-	-	-	-	安山岩	I	41	8
	213	6342	石皿	7.4	3.7	3.4	480.00	安山岩	H	44	7
	214	19617	石皿	9.5	8.8	2.3	230.00	砂岩	H	25	7
	215	12365	石皿	19.9	22.3	3.3	2,280.00	砂岩	H	37	7
	216	2860	石皿	7.7	17.3	5.0	720.00	安山岩	H	37	2
121	217	30845	石皿	8.5	9.0	2.6	300.00	安山岩	H	43	7
	218	10872	石皿	15.7	16.2	3.6	1,100.00	安山岩	H	7	7
	219	11937	石皿	15.2	12.7	7.8	2,460.00	安山岩	I	8	7
	220	59840	石皿	19.9	18.2	5.4	1,960.00	安山岩	H	7	7



第124図 繩文前・中期 通構位置図

## 第7節 繩文時代前・中期の調査成果

### 1 調査の概要

Va層を縄文時代前・中期該当層として調査した。その結果、遺構は竪穴状遺構2基、土坑4基が検出された（第124図）。

遺物は、XIV類～XX類土器と、石鎌、スクレイバー、磨石・敲石等の石器が出土した。

### 2 遺構

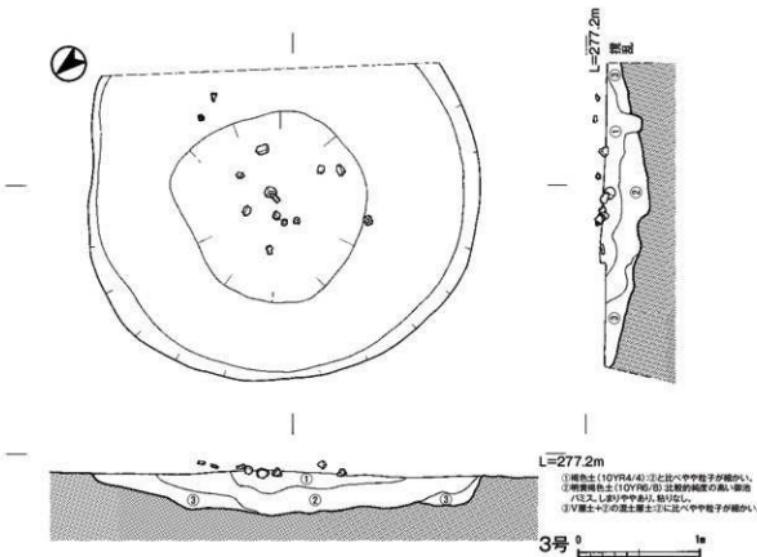
#### (1) 竪穴状遺構

##### 3号竪穴状遺構（第125図）

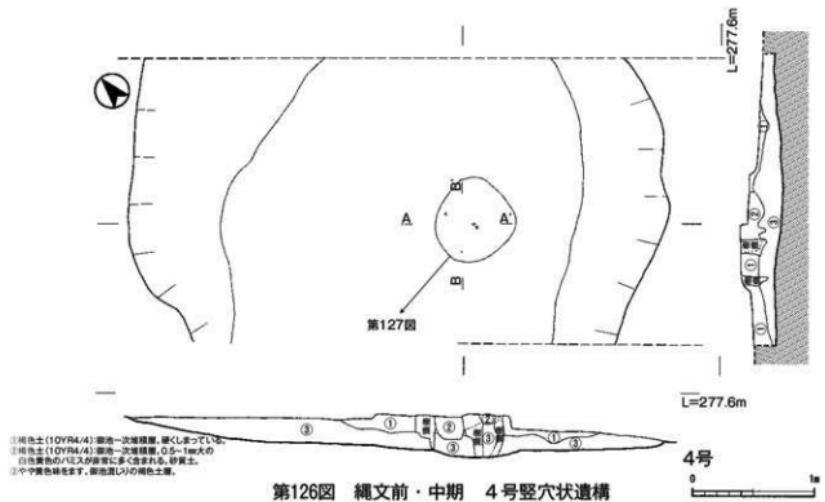
G-21区で検出された。西側が用地外のため、全形を確認できなかったが基本的には円形のプランで中央部がややくぼんでいる。推定規模は直径約320cm、検出面から床面までは36cmである。床面はやや段をもっているようである。埋土上部で安山岩12点、頁岩2点の計14点の礫が出土した。遺構内で焼土跡や柱状ピットは確認できなかった。

##### 4号竪穴状遺構（第126図）

G-23区で検出された。床面付近しか残存しておらず、壁の立ち上がりを正確につかみにくいため、基本的にはほぼ円形のプランとみられる。残存状況での規模は440cm×235cm、検出面から床面までは32cmである。また、遺構内からは同一個体の土器片等が出土した（第127図）。



第125図 縄文前・中期 3号竪穴状遺構



第127図 4号竪穴状遺構内出土土器及び出土状況図

第23表 縄文前・中期 4号竪穴状遺構内出土土器観察表

辨別番号	国番号	分類	器種	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考
127	220	XX I	深鉢	沈線、撫で	撫で	黒色	暗茶褐色	長・石・角	硬質	
	221	X IX	深鉢	貝殻条痕	撫で	赤茶褐色	茶褐色	長・石・角	硬質	底径11.0cm

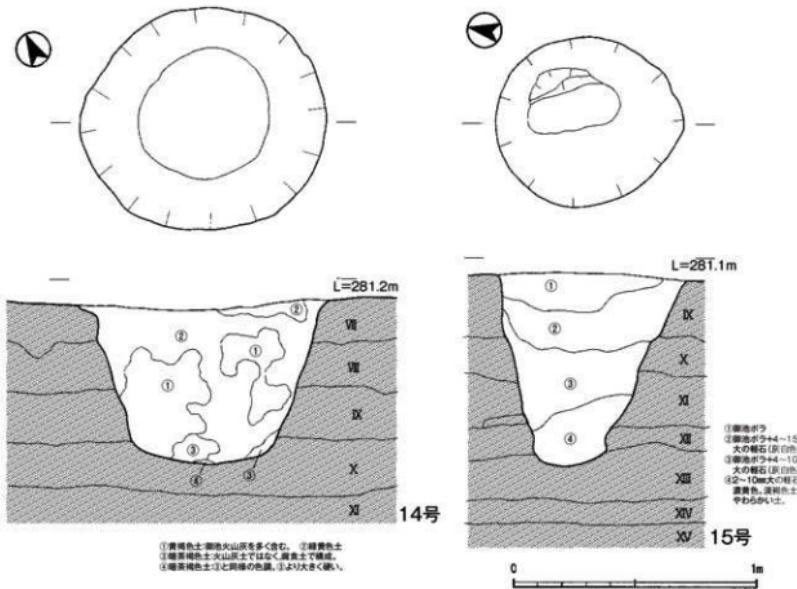
## (2) 土坑

### 14号土坑（第128図）

G-46区のVII層で検出された。平面プランは長径102cm、短径91cmの円形で、検出面からの深さは63cmである。掘り込み形状はバケツ状で、底面は平坦面をなしている。遺構の形態等から落とし穴を想定したが、小ピットは検出されなかった。遺構はVII層上面で検出されたが、埋土状況からプラス50cm程度上部のVa層上面を掘り込んでいると考えられる。よって、実際の深さは110cm～120cm程度と想定される。

### 15号土坑（第128図）

F-48区のIX層で検出された。平面プランは長径77cm、短径70cmの円形で、検出面からの深さは78cmである。掘り込み形状はバケツ状で、底面はほぼ平坦面をなしている。



第128図 繩文前・中期 14号、15号土坑

第24表 繩文前・中期 土坑計測表

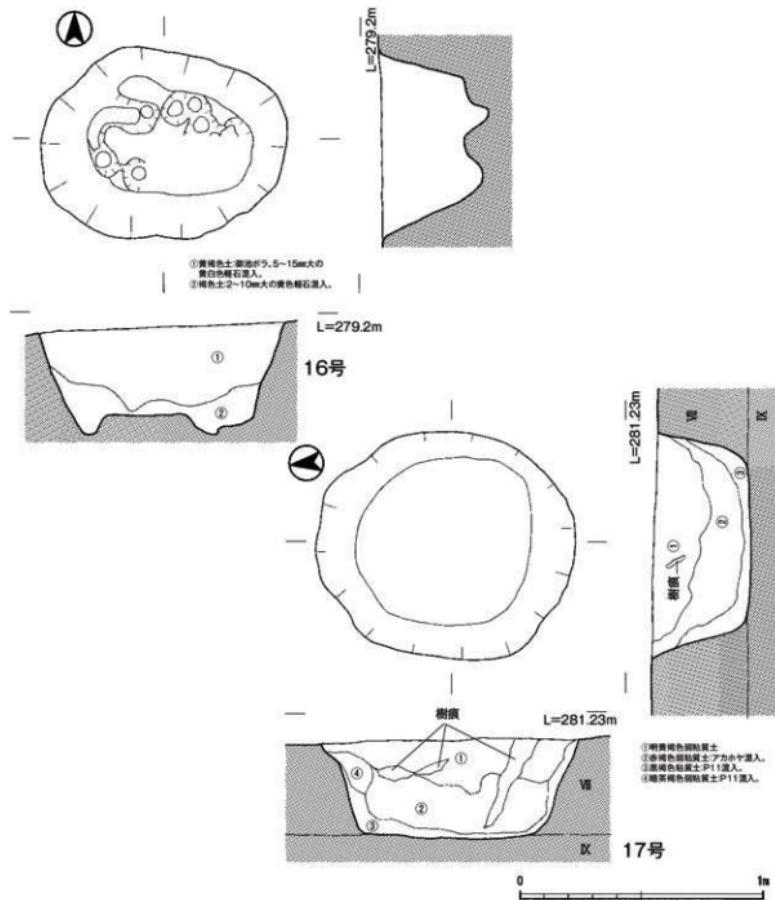
排列番号	番号	検出区	検出面	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
128	14	G-46	VII層	102	91	63	
	15	F-48	IX層	77	70	78	
129	16	H-49	-	100	76	36	
	17	F-G-75	VII層	106	93	40	

### 16号土坑（第129図）

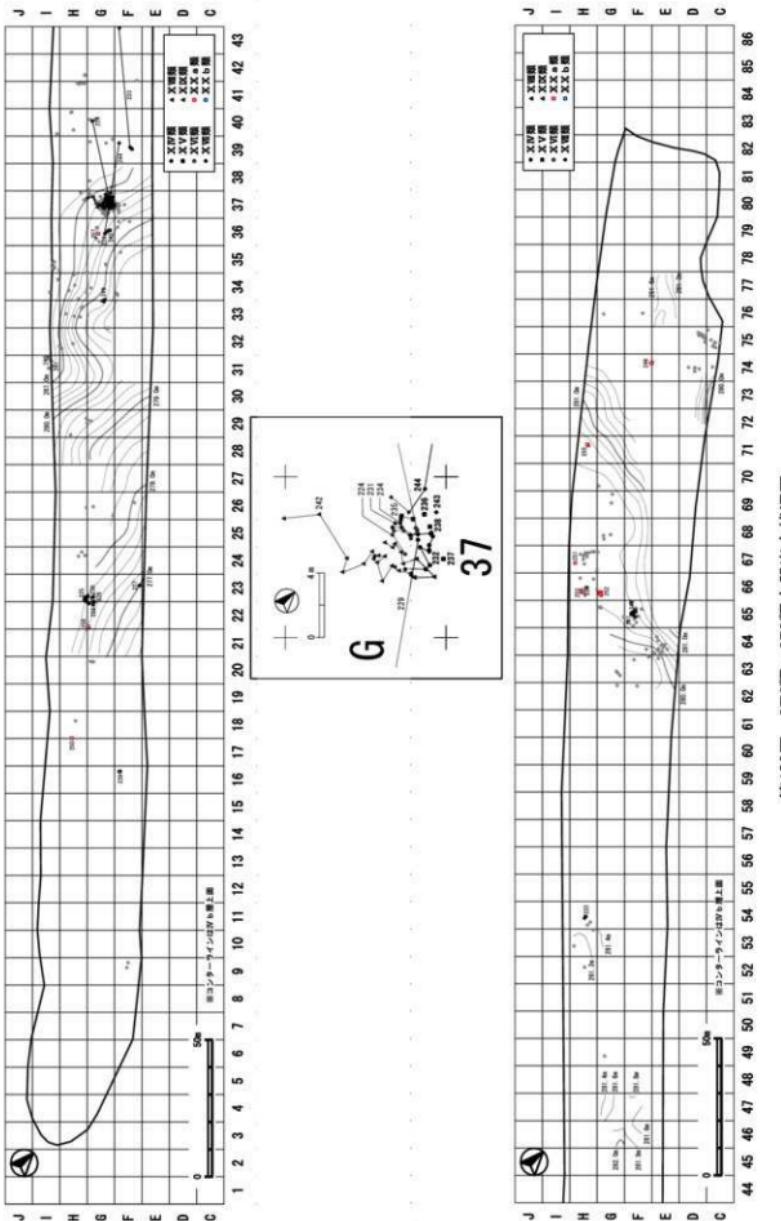
H-49区で検出された。平面プランは長径100cm、短径76cmの梢円形で、検出面からの深さは36cmである。床面端部に9か所の小穴がみられる。小穴の深さは、5～9cmである。

### 17号土坑（第129図）

F・G-75区のVII層で検出された。平面プランは長径106cm、短径93cmの円形で、検出面からの深さは40cmである。南北方向に長径をもつ。掘り込み形状はバケツ状で、底面は平坦面をなしている。



第129図 繩文前・中期 16号, 17号土坑



第130図 XVII類～XX類土器出土状況図

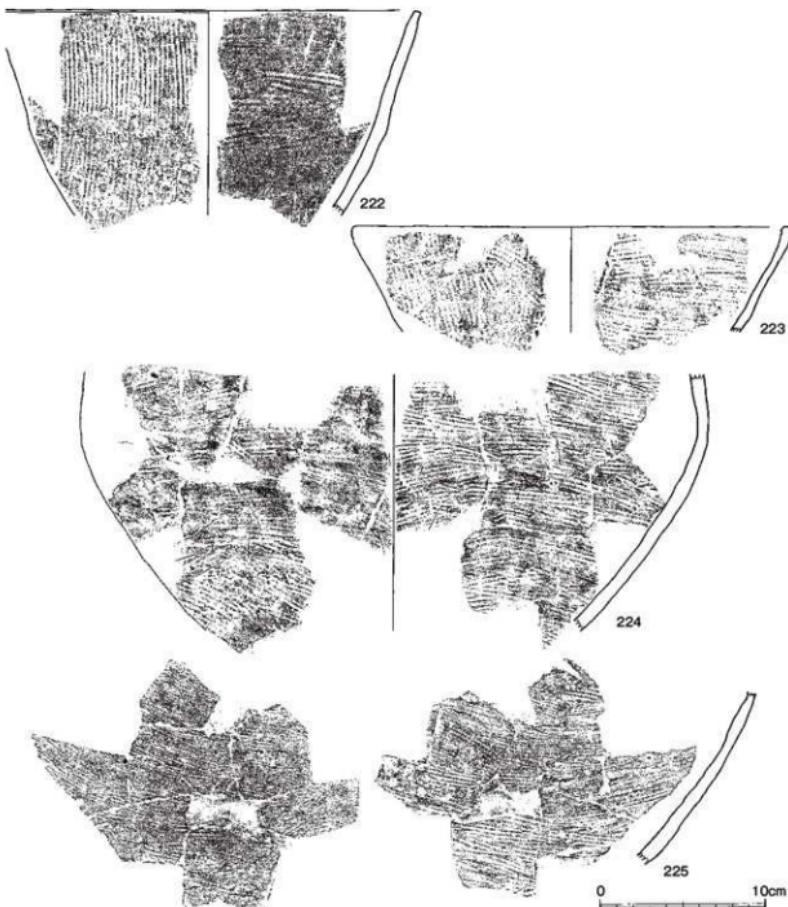
### 3 遺物

#### (1) 前期土器

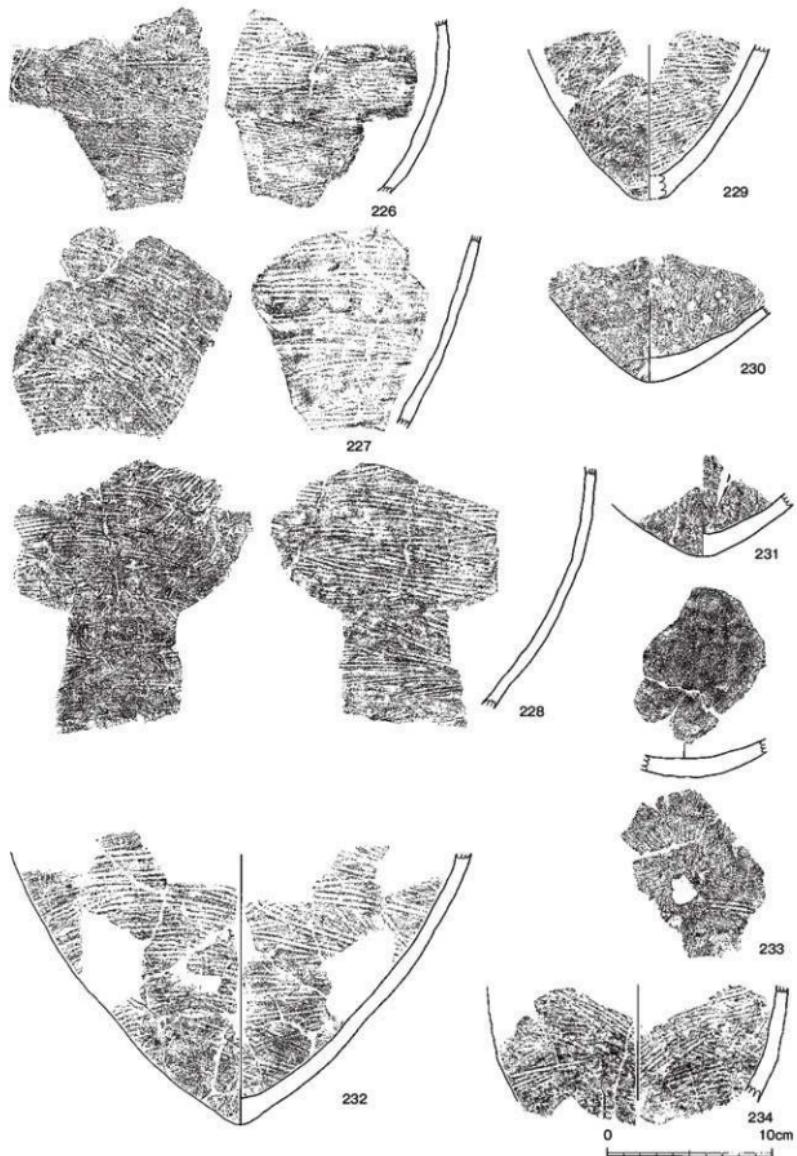
XIV類 (第131・132図222~234)

この類は丸底で、器面調整が貝殻腹縁部による調整を施すものである。

222は胴部から口縁部にかけて外向し、円錐形の器形である。器面調整は外面が貝殻腹縁部による継位の条痕を施し、内面は横位の条痕の上を研磨状に施している。色調は外面上部に煤が付着し黒色を呈し、内面は暗茶褐色を呈している。胎土は長石、角閃石等が入り黒色を呈している。焼成度は良く硬質である。223は胴部から口縁部にかけて外向し、円錐形の器形である。器面調整は外



第131図 XIV類土器(1)

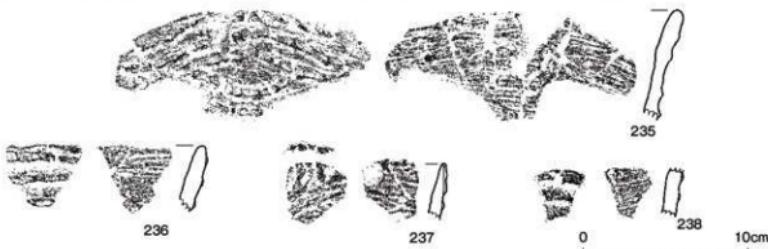


第132図 XIV類土器(2)

面が貝殻腹縁部による縦位及び斜位の条痕を施し、内面は横位の条痕を施している。土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は $4,055 \pm 30$ (yrBP)である。224は胴部から口縁部へは直行し、底部へは円錐状に絞り込む器形である。器面調整は外側が横位及び斜位に施し、内側が横位に施している。色調は外面上部に煤が付着し黒色と黒褐色を呈し、胴部は茶褐色である。内側は上部が暗茶褐色を呈し、胴部が茶褐色を呈している。225と226は同一個体と思われる。器形は胴部から口縁部へは直行し、底部へは円錐状に絞り込む器形である。器面調整は外側内面ともに横位に貝殻条痕を施している。色調は外面上部に煤が付着し黒色と黒褐色を呈し、胴部は茶褐色である。内側は茶褐色を呈している。227と228は底部へは円錐状に絞り込む器形の胴部で同一個体と考えられる。器面調整は外側内面ともに横位に貝殻条痕を施している。色調は外側に煤が付着し黒色と黒褐色を呈している。内側は茶褐色を呈している。229はやや丸みをもった尖底部である。器面調整は同様である。色調は基本的に茶褐色である。230、231、232は尖底部である。器面調整は貝殻腹縁部での調整で縦位横位が見られる。色調は内側が黒色で、外側が茶褐色である。なお、231は白色化している。233は丸底である。器面調整は外側が浅い条痕で、内側が黒色の研磨である。この類とは若干異なる。234の内側に黑色斑点がみられる。

#### XV類（第133図235～238）

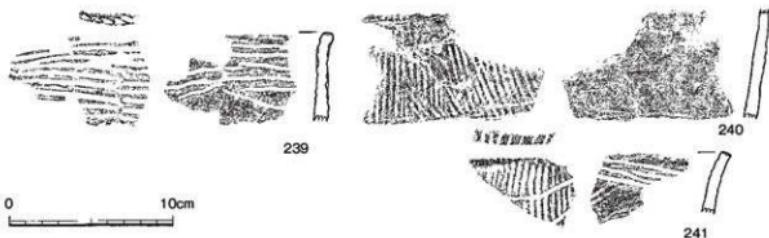
この類は隆起線文土器である。235、236、237、238は同一個体と思われる。器形は直行する口縁部で口唇部は波状を呈す。文様は2条の隆起突帯を波状に廻し、高い部分には下部に逆の隆起突帯を施している。また、237では口唇部に縦位に貼り付け突帯がみられる。器面調整は外側が撫で調整で、内側が貝殻条痕の横位の調整である。色調は外側が黒褐色で、内側が暗茶褐色である。



第133図 XV類土器

#### XVI類（第134図239～241）

この類は器面全体にやや細い沈線を施す土器である。239は直行する薄手の口縁部である。文様は口唇部に斜位の刻み目を施し、外側に横位の沈線を全面に廻し、内側には横位の5条の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外側が暗茶褐色で、内側が茶褐色である。240は直行する薄手の胴部である。文様は胴部外側に縦位と斜位の刻み目を施し上下に沈線を廻らしてそれを開む形である。器面調整は撫で調整である。色調は外側が茶褐色と暗茶褐色斑点で、内側が黒茶褐色である。241はやや外反する薄手の口縁部である。文様は口唇部に刻み目を施し、外側に横位の沈線を全面に縦位と横の曲線を施し、内側には横位の3ないし4条の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外側が茶褐色で、内側が明茶褐色である。

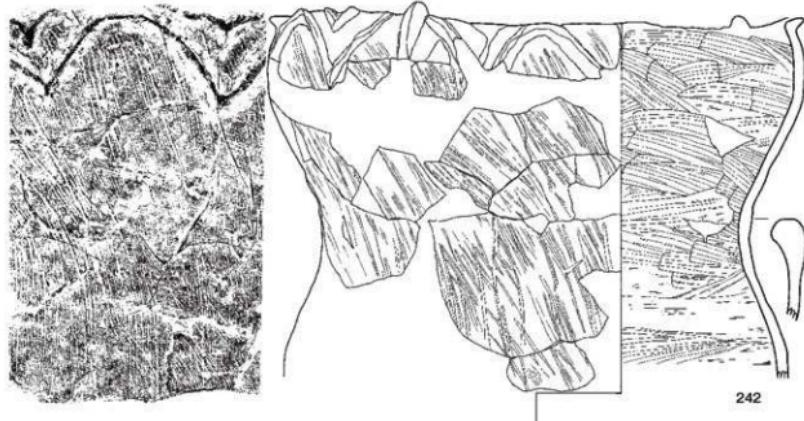


第134図 XVI類土器

(2) 中期土器

XVII類 (第135図242~244)

この類は沈線文と撚糸文を施す土器である。242は頭部で締まり口縁部はキャリッパー形で、胴部は丸く張っている器形で、薄手である。文様は口縁部から口唇部にかけて背の高い突帯を鋸歯状に貼り付け、間にV字の貼り付けと口唇部まで貼り付けた瘤状の突起を施している。また、外面は



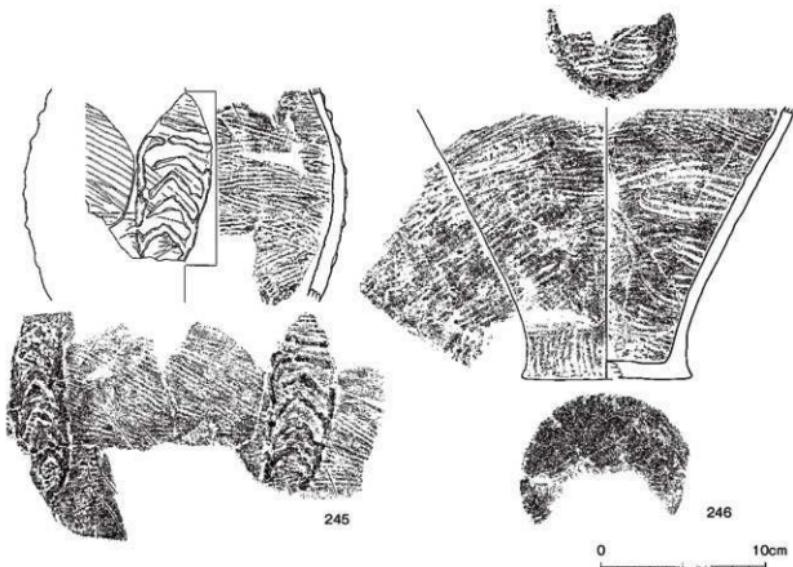
第135図 XVII類土器

櫛目状施文具による器面調整がやや斜位に重ねて施している。内面は貝殻腹縁部による丁寧な横位の器面調整である。色調は全体的に濃淡のある暗灰褐色であるが部分的に茶褐色が見られる。243は口唇部が破損した口縁部と思われる。器形は膨らみをもつ口縁部で内湾する通称キャリッパー形と言われるものである。文様は内湾するキャリッパーの一番膨らんだ部分から頸部まで、縱位に沈線を連続に施している。一部に撲糸文も見られる。244も同じ文様であるので同一個体の可能性が高い。器面調整は外面が丁寧な撫で調整で、内面は粗い撫で調整で、器面に接合の貼り付け部分もみられる。色調は外面が全体的に灰茶褐色で口縁部は煤付着で黒色化されている。内面は黒褐色で、胎土は内面が黒褐色である。244は胴でやや張り、頸部でやや縮まり口縁部に向かう器形である。器壁は接合部による肥厚もみられる。文様は外面に斜位の撲糸文を施している。内面の器面調整は籠状施文具による撫で調整である。色調は外面が黒褐色で、内面が暗灰褐色である。

#### XIII類（第136図245・246）

この類は薄手で貝殻条痕文の器面調整を主としたもので、突帯と沈線等で文様を施しているものである。

245は薄手で球状の器形である。文様は貼り付け突帯で蓄枠形に5ないし6段に仕切るものを2面に施している。器面調整は外面が斜位の貝殻条痕の上を撫で調整をし、内面は横位の貝殻条痕を施している。色調は外面上部が黒褐色で、下部が茶褐色である。内面は暗茶褐色である。246はやや張った平底をもつ薄手の胴部から底部である。器面調整は胴部が横位の貝殻条痕で、底部が縱位の貝殻条痕である。色調は外面が赤茶褐色で内側は底部の内側が黒色で、他は淡茶褐色である。

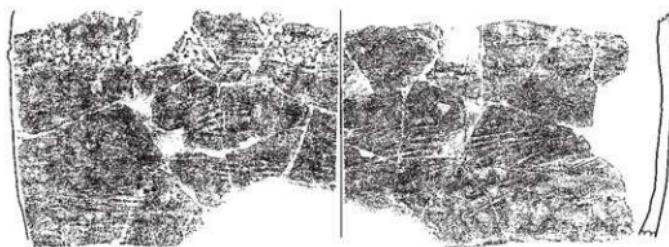


第136図 XIII類土器

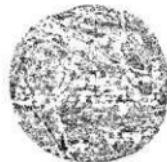
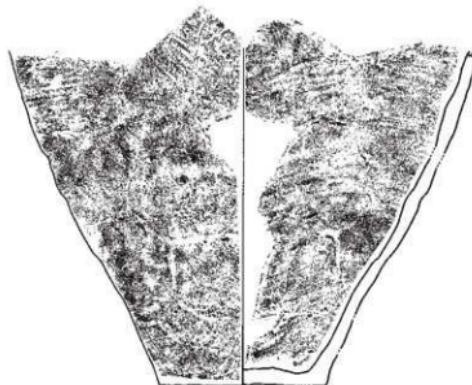
XIX類（第137図247・248）

この類は肥厚口縁部をもつものである。

247は口縁部が肥厚し、口唇部が欠損している。口縁部は直行し、胴部は張った深鉢である。文様は肥厚面に連点と沈線を横位とV字型に施している。器面調整は内外面とも貝殻腹縁部の横位の条痕がみられる。色調は茶褐色で口縁部近くの肥厚部には煤が付着しているため黒色の斑点がみられる。248は247と質が類似しているためこの類にいたれた。また、器壁、器面調整、胎土が類似し、見方によっては同一個体と考えられる。器形は深鉢で、胴が張り、底部に向かって絞られている。底部は平坦の底面をもつ平底である。平底の外面には網代の版文がみられる。



247



248



第137図 XIX類土器

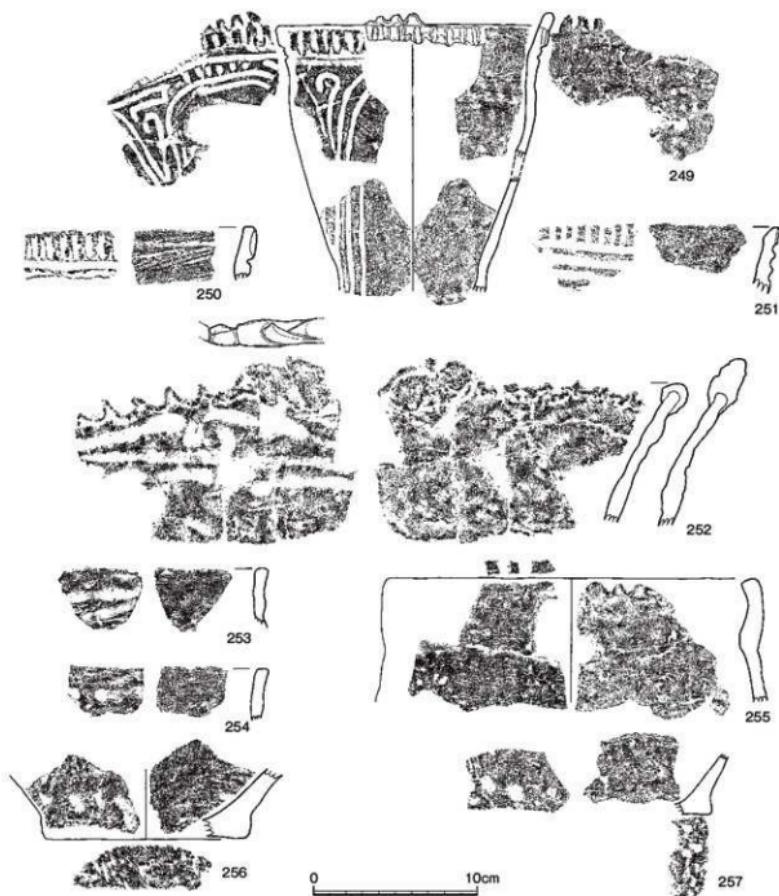
XX類

この類は沈線文ないし凹線文を器面全体および胴部から口縁部にかけて文様を施すものである。この中を胎土で a と b に分けた。

XXa類 (第138図249~257)

同類は南九州の胎土と若干異なるもので中九州の文様に近いものである。

249は底部の端が無い完形品に近い土器で、器形は底部がやや広い深鉢である。口唇部には3箇所に刻みを入れて4箇所の突起をつくった部分と、突起と沈線を施した部分をついている。文様は口縁部に継続沈線の刻みを廻らし、突起の下部や頸部の一部に連点と沈線を施し、頸部は横位に、

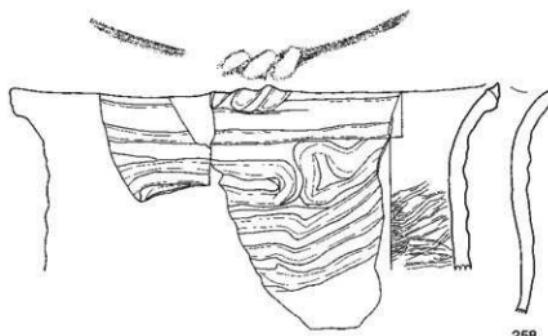


第138図 XXa類土器

頸部から底部まで縦位に窓枠状に施し、その間に蕨手状の文様を施している。器面調整は笠状の撫で調整である。色調は外面が暗赤茶褐色で内面が黒茶褐色である。250は口縁部がやや外反する器形の深鉢である。文様は口縁部に棒状の施文具で縦位に深い沈線を施し、その下に横位の深い沈線を施している。器面調整は横位の撫で調整である。色調は外面が茶褐色で内面が暗茶褐色である。251は口縁部がやや外反する器形の深鉢である。文様は口縁部に棒状の施文具で縦位に沈線を施し、その下につけた横位の深い沈線を施している。器面調整は横位の撫で調整である。色調は外面が茶褐色で内面が暗茶褐色である。252は頸部が若干縮まりながら胴部から口縁部が直行する器形をもつ深鉢である。口唇部には粘土を撚り紐状に組んだ突起を貼り付け、また、粘土紐をつまみながら波状に施している。文様は蕨手状の凹線を横位に組んだ構成をしている。色調は外面が茶褐色で口唇部から口縁部の一部まで煤の付着で黒色化し、内側は茶褐色である。253は深鉢の口縁部である。文様は凹線文で横位に施している。器面調整は笠状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が茶褐色で内側は黄茶褐色である。254は深鉢の口縁部である。文様は凹線文で横位に施している。器面調整は笠状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が煤による黒色化で内側は黄茶褐色である。255は頸部内側で段を作り直行する深鉢の口縁部である。口唇部には押し圧による刻みがみられるだけで外面の文様は口唇部のみである。文様は凹線文で横位に施している。器面調整は撫でを横位に施している。色調は外面が暗茶褐色で内側は黒茶褐色である。256は底部である。底部に張り出しがみられ、底面は網代底である。器面調整は撫でで、色調は外面が暗茶褐色で内側は赤茶褐色である。257は底部である。底部に張り出しがみられ、底面は網代底である。器面調整は撫でで、色調は外面が茶褐色で内側は暗茶褐色である。

#### XXb類（第139図258）

この類は同類aの胎土より南九州に良く見られる土器に中九州の文様を施しているものである。259は口縁部が外反し胴部が球状になる器形の深鉢である。口唇部は波状になり、一部には指厚による凹線を斜位に施している。胴部の文様は凹線文を靴形状に施している。器面調整は笠状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が茶褐色で内側は淡茶褐色である。



第139図 XXb類土器

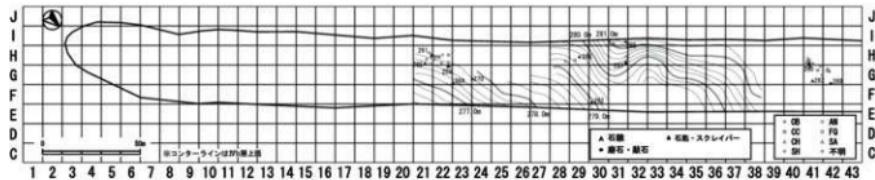


第25表 XV類～XX類土器觀察表

順位	用器名	工具番号	分類1	分類2	分類3	分類4	文様・調節(有)	文様・調節(無)	形態(有)	形態(無)	底面	縁	傳送	備考
131	220	2024.10.29		H-34	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	圓底色	圓底色	長・角	軌質	傳送	直径1.5cm
	223	20072.20083		F-39	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	223	20072.20085		F-43	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	224	6071.67.9.6801		G-40	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	224	6809.6813		G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	224	6997.7022		H-23	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	225	10438.10440		G-20	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	225	10444.10448		G-20	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	225	10450		H-22	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	226	10450.10459	XIV	G-22	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	保付着
132	226	10450.10459	XIV	F-23	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	227	12933.19962		G-22	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	保付着
	228	10416.10423		G-22	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	保付着
	229	5262.5268		G-22	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	保付着
	230	10450		G-23	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	231	6816.6851		G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	231	6852.6852		H-31	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	232	6997.6998.6948		G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	232	6997.6999.7003		H-31	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	233	21158.21161		G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
133	234	6819.6820	XV	H-31	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	黒底丸
	235	6821.6824.2001	XV	G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・角	軌質	軌質	
	236	6857		G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	237	6858		G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	238	6859.6860		G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	239	11048.11417.11448	XVI	F-16	V-a	斜直・凸弧		斜直・凸弧	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	240	30192	XVI	H-31	V-b	斜直・凸弧		斜直・凸弧	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	241	30212	XVI	G-37	V-b	斜直・凸弧		斜直・凸弧	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	241	30212	XVI	H-31	V-b	斜直・凸弧		斜直・凸弧	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	242	6291.6684.6689	XVII	G-37	V-b	斜直・凸弧		斜直・凸弧	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
134	242	6690.6691.6710	XVII	G-37	V-b	斜直・凸弧		斜直・凸弧	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	242	6741.6752.6765	XVII	F-23	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	242	6752.6757	XVII	G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	242	6765.6777.6800	XVII	G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	242	6891.6892.6901	XVII	G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	243	6905.6908.6911	XVII	G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	243	6915.6919.6962	XVII	G-37	V-b	貝殻条痕		貝殻条痕	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	244	6273.6811.6849	XVIII	G-37	V-b	斜直・凸弧		斜直・凸弧	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	244	6849	XVIII	G-37	V-b	斜直・凸弧		斜直・凸弧	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	245	6726.6728.21024	XVIII	G-36	V-b	斜直・凸弧		斜直・凸弧	黑色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
135	246	21026.21030.21031	XIX	G-34	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	長・石・角	軌質	直径10.4cm	
	246	21508.21529	XIX	G-34	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	長・石・角	軌質	軌質	
	246	21520.21532	XIX	G-33	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	長・石・角	軌質	軌質	
	246	21509.21510	XIX	G-33	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	長・石・角	軌質	軌質	
	247	1302.1311.1315	XIX	F-65	V-a	連点・斜線		貝殻条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	長・石・角	軌質	軌質	
	247	1317.1319.1326	XIX	F-65	V-a	連点・斜線		貝殻条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	長・石・角	軌質	軌質	
	247	1312.1313.1314	XIX	F-65	V-a	連点・斜線		貝殻条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	長・石・角	軌質	軌質	
	248	1318.1320.1321	XIX	F-65	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	長・石・角	軌質	直径10.2cm	
	248	1324.1500.1501	XIX	F-65	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	長・石・角	軌質	軌質	
	248	1505.1506.1507	XIX	F-65	V-a	貝殻条痕		貝殻条痕	赤茶褐色	赤茶褐色	長・石・角	軌質	軌質	
136	249	6328.6329	XX	a	F-71	V-b	沈縫・斜手状	ヘラ撇で	暗赤褐色	黑色	長・角	軌質	直径8.4cm	
	249	6436.6427	XX	a	H-1	V-b	沈縫・斜手状	ヘラ撇で	暗赤褐色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	250	6435	XX	a	H-1	V-b	沈縫・斜手状	ヘラ撇で	暗赤褐色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	251	6436	XX	a	H-1	V-b	沈縫・斜手状	ヘラ撇で	暗赤褐色	黑色	長・石・角	軌質	軌質	
	252	747.748.751	XX	a	G-66	V-b	凹縫文	ヘラ撇で	黑色	暗赤褐色	長・石・角	軌質	軌質	
	252	755.764	XX	a	G-66	V-b	凹縫文	ヘラ撇で	黑色	暗赤褐色	長・石・角	軌質	軌質	
	252	806.807	XX	a	H-71	V-b	凹縫文	ヘラ撇で	黑色	暗赤褐色	長・石・角	軌質	直径9.2cm	
	253	807	XX	a	H-71	V-b	凹縫文	ヘラ撇で	黑色	暗赤褐色	長・石・角	軌質	軌質	
	254	284	XX	a	H-71	V-b	凹縫文	ヘラ撇で	黑色	暗赤褐色	長・石・角	軌質	軌質	
	255	1800.1801	XX	a	G-22	V-a	圓点	ヘラ撇で	暗赤褐色	暗赤褐色	長・石・角	軌質	直径12.2cm	
137	256	10399	XX	a	G-36	V-b	圓点	ヘラ撇で	暗赤褐色	暗赤褐色	長・石・角	軌質	軌質	
	257	6742.6745	XX	b	G-23	V-a	凹縫文	ヘラ撇で	黑色	暗赤褐色	長・石・角	軌質	直径9.0cm	
139	258	201.210.211.212.213	XX											

### (3) 石器

縄文時代前・中期の石器は、Va層を中心に出土している。同包含層内からは、縄文時代前・中期の土器が出土しており、石器類に関しても同様と想定する。以下に、石鎌6点、石匙1点、スクレイバー2点、磨石・敲石3点を図示した。



第140図 Va層（縄文前・中期）出土石器状況図

#### 石鎌（第141図259～264）

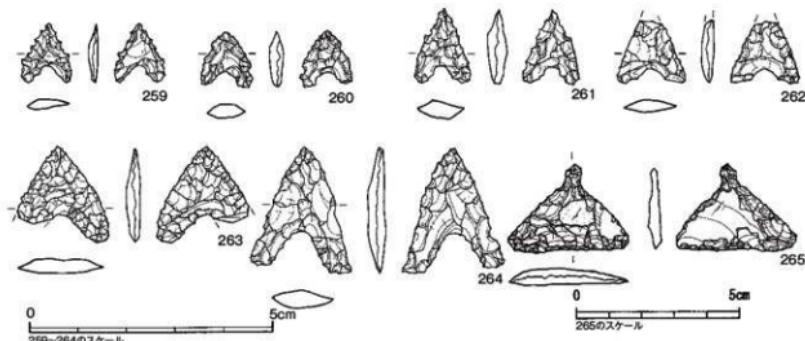
欠損品も含め計8点出土し、6点図示した。259・260は正三角形状を呈し、基部に抉りが見られる。259の側線部は明確な鋸歯状を呈している。261・262は二等辺三角形状を呈し、基部に抉りが見られる。263・264は基部に深い抉りが見られ、明確に脚部が作出されている。特に263は、抉りの内側からも丁寧な調整が施されている。

#### 石匙、スクレイバー（第141・142図265～267）

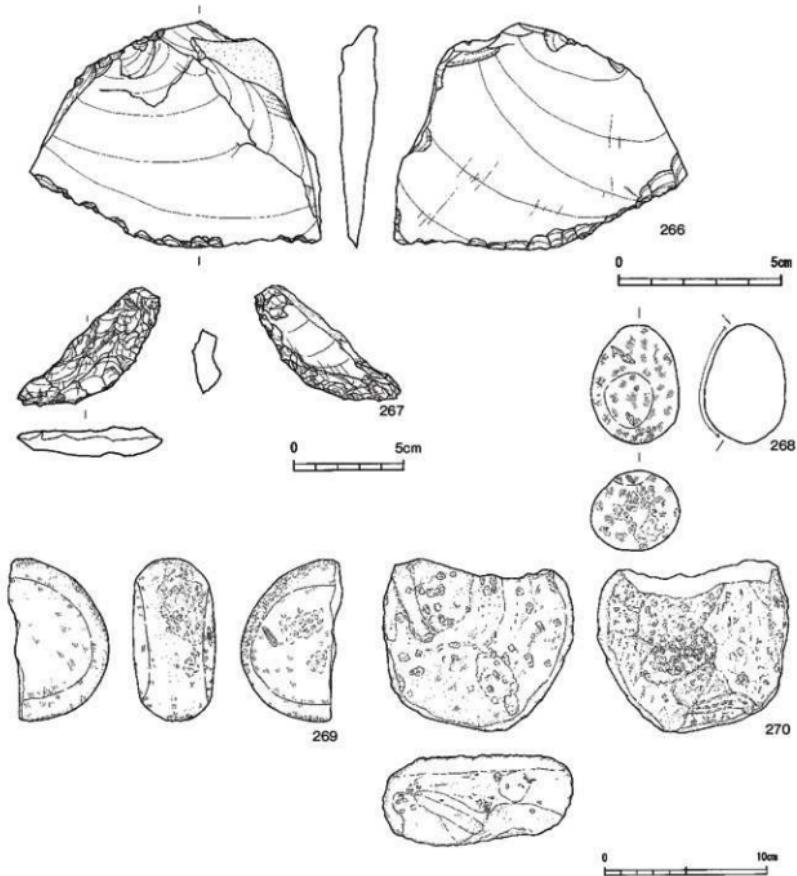
石匙は1点出土した。265は玉隨製で、刃部は横方向に丁寧に整形されている。スクレイバーは2点出土した。267は良質な頁岩製で、縱長の形状に整形されている。

#### 磨石・敲石（第142図268～270）

3点出土し、全て図示した。磨面のみでなく、表・裏面または側面に敲打痕が認められる。268は敲石としてのみ使用されている。269は砂岩、270は凝灰岩を石材として使用している。



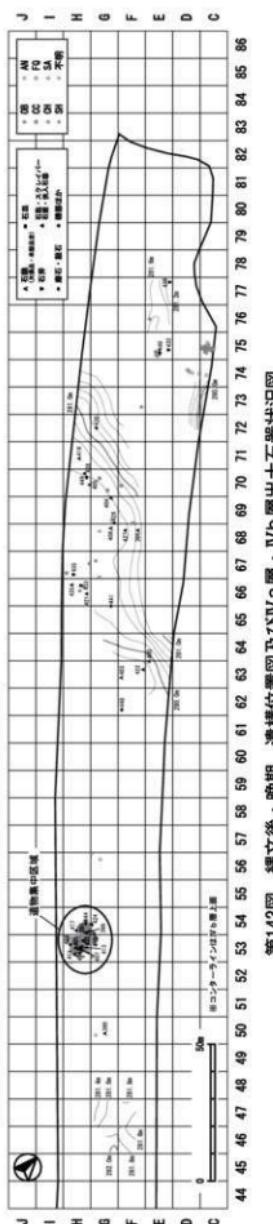
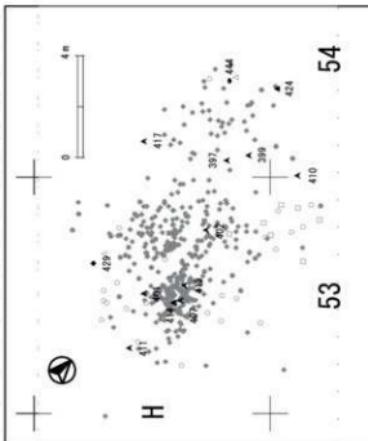
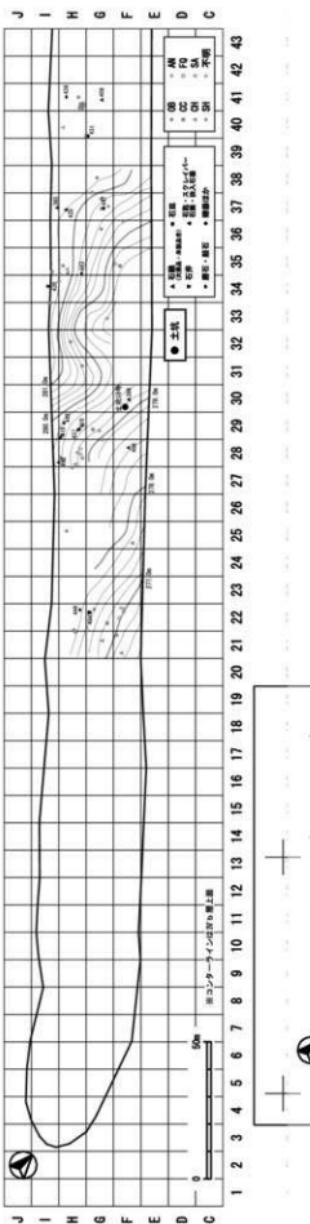
第141図 Va層（縄文前・中期）出土石器(1)



第142図 Va層（縄文前・中期）出土石器(2)

第26表 Va層（縄文前・中期）出土石器観察表

標本番号	採取番号	取上面号	器種	最大幅(cm)	最小幅(cm)	最大厚(cm)	最小厚(cm)	重量(g)	石材	区	年代1(1)	年代1(2)
141	259	10432	打削石器	1.2	1.0	0.2	0.19		チャート	G	22	5 a
	260	20170	打削石器	1.1	1.1	0.3	0.25		Obsidian	H	41	5 a
	261	10360	打削石器	1.5	1.1	0.4	0.49		西北系	H	21	5 a
	262	10315	打削石器	1.3	1.4	0.3	0.39		チャート	F	30	5 a
	263	20184	打削石器	2.0	1.9	0.3	0.81		Obsidian	G	41	5 a
	264	10464	打削石器	2.6	2.0	0.4	1.06		宝山系	G	23	5 a
142	265	10375	石器	2.6	3.7	0.5	3.54		チャコツイ	H	21	5 a
	266	10217	スクレイバー	6.9	8.8	1.5	85.10		碧岩	H	29	5 a
	267	20205	スクレイバー	5.4	6.6	1.3	27.00		碧岩	H	31	5 a
	268	20198	磨石・敲石	7.4	5.4	4.9	260.00		宝山系	I	31	5 a
	269	20104	磨石・敲石	1.0	6.2	5.1	408.00		砂岩	G	42	5 a
	270	10770	磨石・敲石	10.6	11.7	5.2	400.00		湖尻系	G	24	5 a



第143図 繩文後・縄期 遺構位置図及びIVa層・IVb層出土石器状況図

## 第8節 繩文時代後・晩期の調査成果

### 1 調査の概要

IVa層、IVb層を縄文時代後・晩期該当層として調査した。その結果、遺構は土坑1基、チップやフレイクを主体とした遺物集中区域が1か所検出された（第143図）。

遺物は、XXI類～XXXI類土器と、石鎌、石錐、石匙、スクレイバー等の石器が出土した。

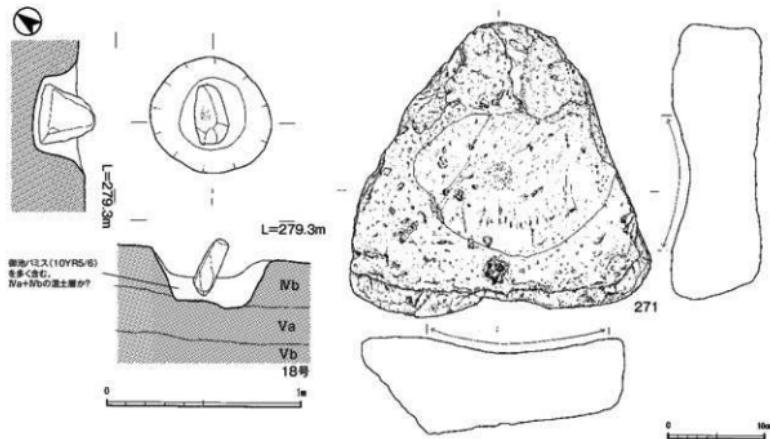
### 2 遺構

#### 18号土坑（第144図）

F-30区のIVb層上面で検出された。掘り込み面は不明であるが、埋土の状況から縄文時代後・晩期該当の遺構と判断した。埋土中からは三角形状の軽石製品1点が直立した状態で出土した。片面に凹みを作った石皿状を呈している。また、凹みの中には線刻が多くみられる。

#### 遺物集中区域（第143図）

H-53区を中心にチップ、フレイクを主体として検出された。石材別でみてみると、頁岩が一番多く544点、次いで安山岩35点、黒曜石39点、鉄石英8点、ギョクズイ5点、チャート3点、砂岩2点であった。また、区域内には頁岩製や安山岩製の石鎌が出土しているため、石器制作跡の可能性が高い。



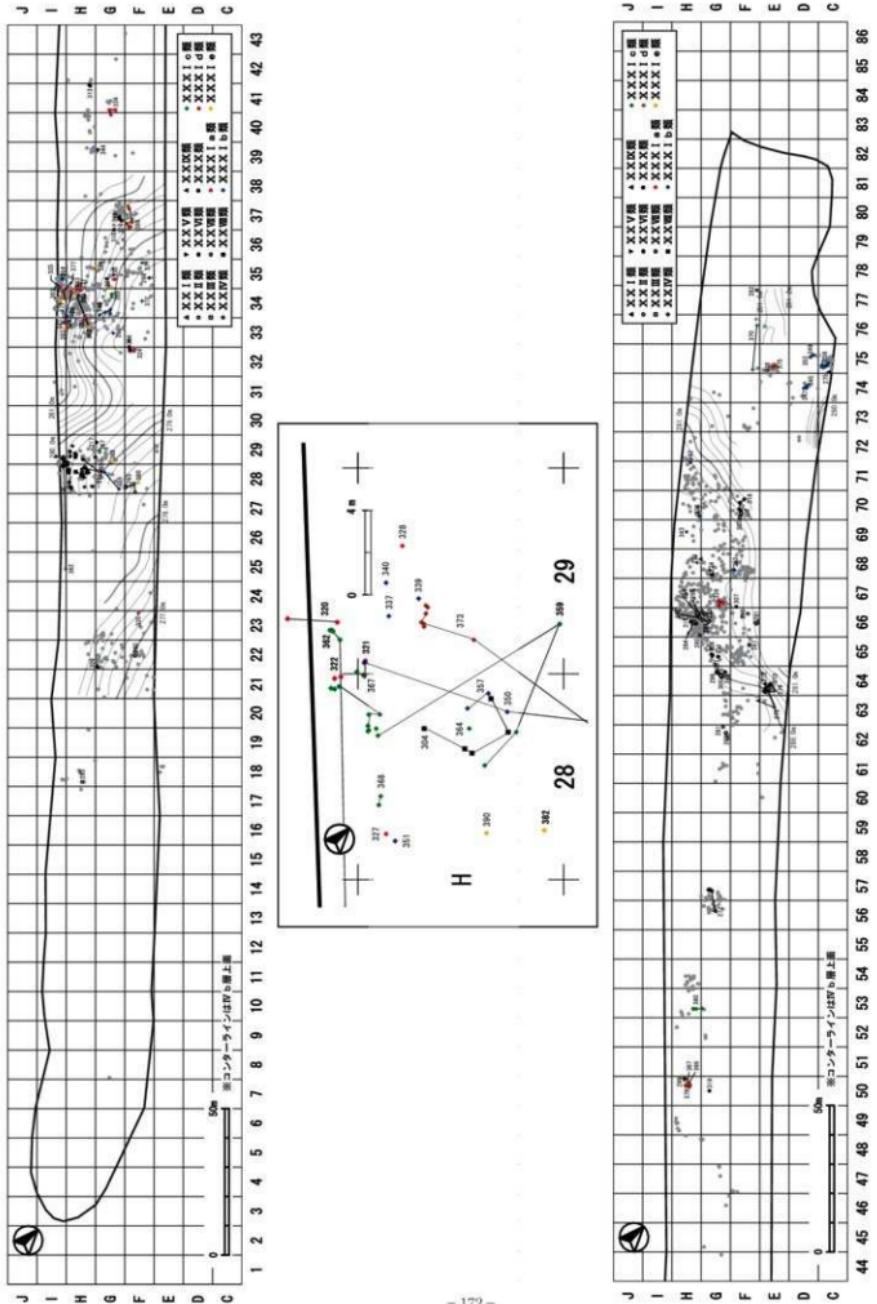
第144図 縄文後・晩期 18号土坑及び土坑内出土軽石製品

第27表 縄文後・晩期 土坑計測表

探査番号	番号	検出区	検出面	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
144	18	F-30	IVb層	62	60	23	

第28表 土坑内出土軽石製品観察表

探査番号	図面番号	取上番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
144	271	SD103-1	軽石製品	軽石	304.0	310.0	100.0	2247.0	



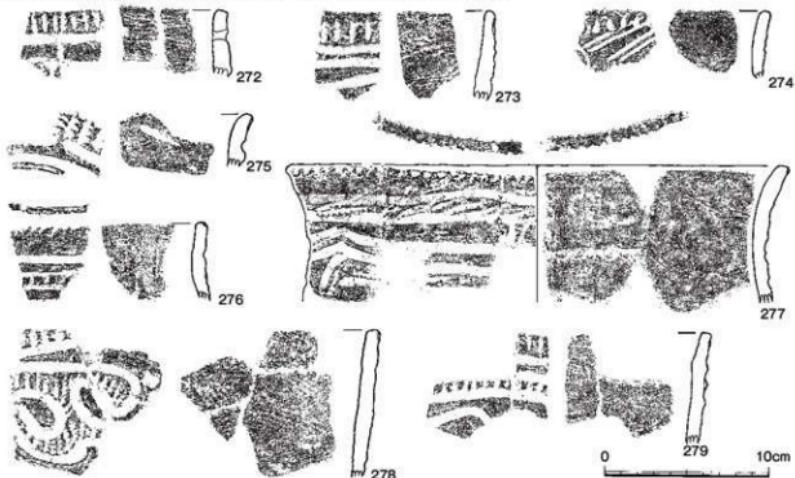
第145図 XXI頃～XXIII頃土器出土状況

### 3 遺物

#### (1) 後期土器

##### XVI類 (第146図272~279)

この類は沈線文と貝殻腹縁部の刻み目を施すものがaで細めの沈線文を施すものがbである。272は直行する口縁部である。文様は口縁上部に貝殻腹縁部による縦位の押し引き状の刺突連続文をつけその下位に横位の沈線を施している。器面調整は笠状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が暗茶褐色で内側は淡茶褐色である。273は直行する口縁部である。文様は口縁上部に貝殻腹縁部による縦位の刺突連続文をつけその下位に横位の沈線を施している。器面調整は笠状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が茶褐色で内側は暗茶褐色である。274は直行する口縁部である。文様は口縁上部に貝殻腹縁部による縦位の押し引き状の刺突連続文をつけその下位に斜位の細い2条沈線を施している。器面調整は笠状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が茶褐色で内側は暗茶褐色である。275は直行する口縁部である。文様は口縁上部に貝殻腹縁部による縦位の押し引き状の刺突連続文をつけその下位に横位の沈線を施している。器面調整は笠状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が黒褐色で内側は暗茶褐色である。276は直行する口縁部である。文様は口唇部に刻み目を入れ、下位に横位の沈線文と間に貝殻刺突文を施している。器面調整は横撫である。色調は外面が口唇部が煤付着で黒褐色化し他は茶褐色で、内側は暗茶褐色である。277は脛部がやや張り、頭部でやや縮まり直行する口縁部をもつ深鉢で、口唇部に台状の突起を貼り付け、刻み目を施している。文様は横位の凹線である。器面調整は笠状施文具による撫でを横位に施している。沈線と沈線の間に貝殻腹縁部の刻み目が見られる。色調は外面が煤付着で黒褐色化し、内側は淡茶褐色である。278・279は直行する口縁部をもつ深鉢である。文様は口縁部に貝殻刺突の連続文を廻らし、やや細めの凹線で蕨手状を描きその中を貝殻腹縁部による刺突連続文を施している。器面調整は横撫である。

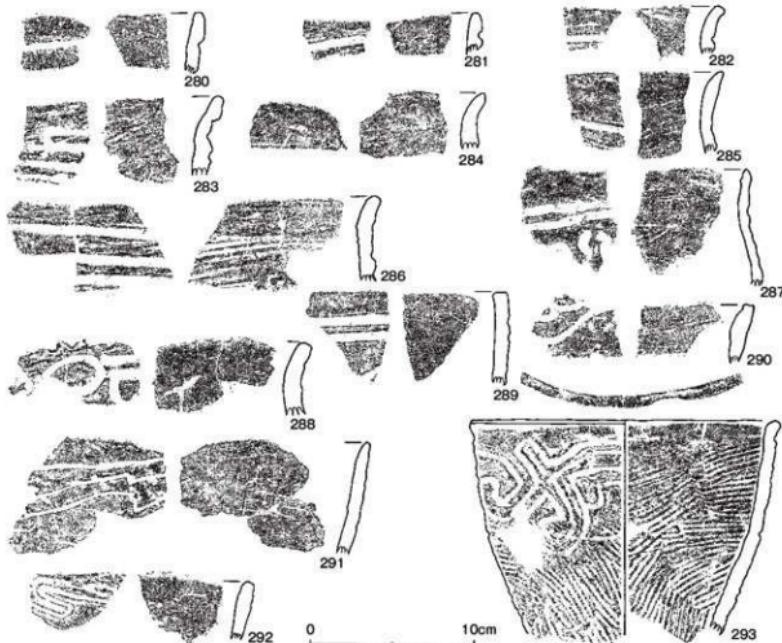


第146図 XVI類土器

### XII類 (第147図280~293)

この類は沈線のみで文様を施すものである。

280は直行する深鉢の口縁部である。文様は横位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が暗赤茶褐色で、内面が茶褐色である。281は直行する深鉢の波状口縁部である。文様は横位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が暗黄茶褐色で、内面が黄茶褐色である。282は外反する深鉢の口縁部である。文様は横位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は内外面とも明褐色である。283は頸部で締まり、外反し肩部で張る深鉢である。そのため、口縁部及び肩部は肥厚している。文様は横位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が黒茶褐色で黒色の煤が付着している。内面は暗茶褐色で口縁部は黒色である。284は外反する深鉢の口縁部である。文様はかろうじて頸部に横位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は内外面とも暗茶褐色である。胎土には石英、角閃石、長石等が見られる。焼成度は良く硬質である。285は外反する深鉢の口縁部である。文様は斜位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が暗茶褐色で、内面が茶褐色である。胎土には石英、角閃石、長石等が見られる。焼成度は良く硬質である。286は外反する深鉢の口縁部である。文様は横位の沈線を施している。器面調整は貝殻腹縁部の撫で調整である。色調は外面が赤茶褐色で、内面が灰茶褐色である。287は頸部で締まり外反する深鉢の波状口縁部である。文様は横位の

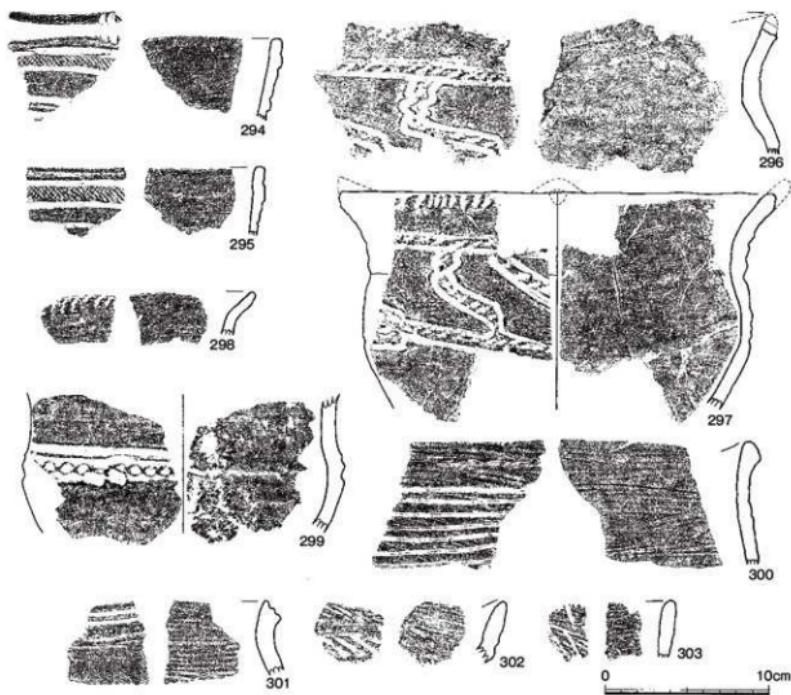


第147図 XII類土器

2本沈線と縦位の曲線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が暗赤茶褐色で、内面が茶褐色である。288は外反する深鉢の波状口縁部である。口唇部には刻み目がみられる。文様は円形と角形の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が黒茶褐色で、内面が茶褐色である。289は直行する深鉢の口縁部である。文様は横位の2本沈線と斜位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は内外面とも暗赤茶褐色である。290は直行する深鉢の波状口縁部である。口唇部には刻み目がみられる。文様は横位の沈線を曲線状に施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が赤褐色と灰褐色で、内面が茶褐色である。291は直行する深鉢の口縁部である。文様は横位の沈線を波状に施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が赤茶褐色で、内面が黒茶褐色である。292は直行する深鉢の波状口縁部である。口唇部には刻み目がみられる。文様は湾曲の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が暗赤茶褐色で、内面が茶褐色である。293は直行する小型の深鉢である。文様は横位の沈線と蕨手状の沈線を施している。器面調整は貝殻腹縁部による斜位の撫で調整である。色調は外面口縁部が黒色で下部が暗赤茶褐色である。内面は黒茶褐色である。

#### XII類 (第148図294・295)

この類は磨消繩文土器である。



第148図 XII類～XIII類土器

294・295は同一個体と思われ、直行に近い口縁部の部分である。

文様は口唇部の一部に刻み目を付け、外面に横位の平行沈線と撲糸文を施している。器面調整は沈線と撲糸文以外は内外面とも研磨されている。色調は黒茶褐色が基本で、外面の一部に茶褐色がみられる。

#### XIV類（第148図296～298）

この類は貝殻文で擬似繩文化したものである。

296・297は同一個体と考えられる。器形は頸部で締まり、口縁部が外反し、胴部が球状に張っている。296は波状口縁の山形部である。頂上部が破損しているが口唇部には刻み目がかろうじて残り、中位には円孔が半欠状に残っている。文様は口唇部に貝殻腹縁部による押引連続文を施し、頸部から胴部にかけて2条の平行沈線の中に貝殻刺突文を施している。これは擬似繩文の範疇に入ると考えられる。文様構成は頸部と胴部に横位に付け、その間を斜位に繋ぐ描き方をしている。器面調整は丁寧な横撫である。色調は296が内外面とも茶褐色で、297が茶褐色と黒褐色である。298は器形が頸部で外反し、文様は口唇部に貝殻刺突の連続文が施されている。破片のため頸部以下は判断できないが、口縁部と胎土、色調、調整等で判断してこの類にした。

#### XV類（第148図299）

この類は胴部に沈線と凹点刻みがみられるものである。

299の器形は胴部が球状になるものである。文様は胴部の一番張ったところに凹点を横位に連続し、上下に断面V字形の沈線を施している。加えて、凹点連続文の下に大き目の凹点を2点施している。器面調整は外面が黒色研磨で内面が横撫である。色調は外面が黒色ないし暗灰褐色で、内面が暗灰色である。

#### XVI類（第148図300）

この類は口縁部が断面三角形をなし、頸部以下に沈線を施しているものである。

300は波状口縁部と思われるもので、頸部で締まり、断面三角形の口縁部が外反する器形である。文様は頸部以下に浅い筋状の沈線が7本みられ、山形部付近では沈線の間隔が狭くなっている。器面調整は外面が研磨で内面が貝殻条痕の横撫である。色調は外面が赤褐色で、内面が茶褐色である。

#### XVII類（第148図301）

この類は口縁部が断面三角形をなし、口縁部に沈線を施しているものである。

301は波状口縁部と思われるもので、頸部で締まり、断面三角形の口縁部が外反する器形である。文様は口縁部に沈線が2本みられる。器面調整は外面が丁寧な磨きで内面が貝殻条痕の横撫である。色調は外面が暗茶褐色で、内面が赤茶褐色である。

#### XVIII類（第148図302・303）

この類は口縁部に貝殻腹縁部の連続刺突文を施すものである。

302、303は外反する口縁部で同一個体と思われる。302は波状口縁部で段がつき、外面には稜がつき、その上部に貝殻刺突文を斜位に施している。器面調整は貝殻条痕で外面は斜位と横位で内面は横位である。色調は外面が煤付着で、黒赤茶褐色で内面が赤茶褐色である。303は口縁部の平坦部と思われる。

### XXIX類（第149図304・305）

この土器は無文で胴部が球状になるものである。

304は球状の胴部で、頸部で締まり、口縁部は大きく外反する器形である。器面調整は横位の研磨である。色調は外面の口縁部が暗茶褐色で、他は灰茶褐色である。305は球状の胴部である。器面調整は外面が横位の研磨で、内面は横撫である。色調は外面の肩部が黒色で胴部は明茶褐色である。内面は灰褐色である。

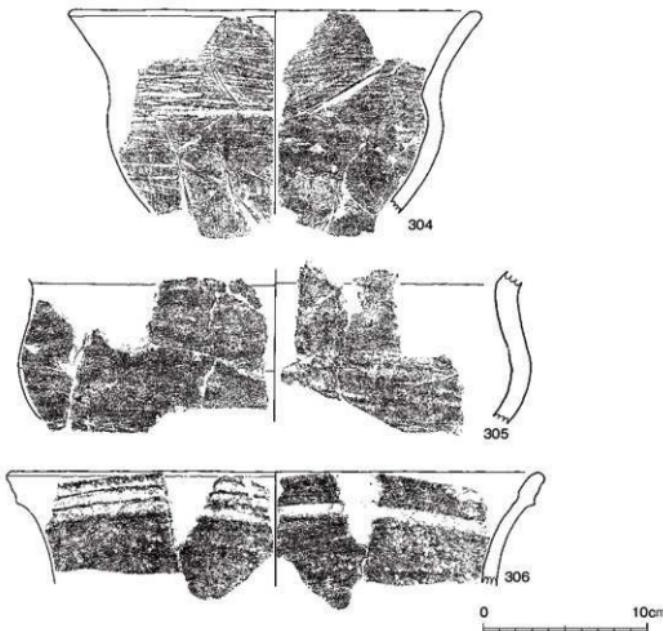
### XXX類（第149図306）

この類は口縁部に凹線文が見られるものである。

306は外反する口縁部で、口縁部に2条の凹線文が施されている。器面は研磨調整である。色調は暗赤茶褐色と黒色である。

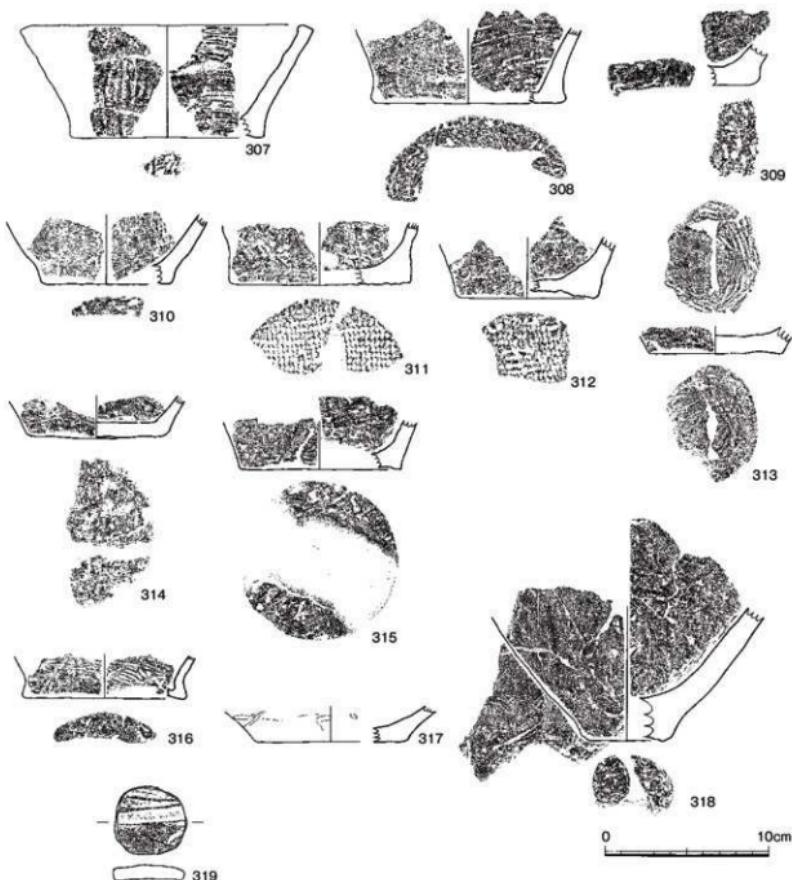
### 無文土器及び底部と土製製品（第150図307～319）

307は小型の無文土器である。器形は底部から直線状に外反し、口縁部は波状を呈する。器面調整は外面が縱撫で、内面が横撫である。底面は網代底で平坦と思われる。色調は外面が茶褐色で、内面が暗茶褐色である。胎土には石英、角閃石、長石等が含まれる。焼成度は硬質である。308・309・310は平底で広い張りがみられるタイプである。311・312は張りがない底部で、312がやや上げ底状態である。底面に網代痕がみられる。器面調整は撫で調整で、色調は茶褐色である。313は絞



第149図 XXIX類・XXX類土器

られた底部で若干上げ底である。器面調整は外面が研磨に近い撫で調整で、内面は貝殻腹縁部による調整である。色調は外面が灰茶褐色で、内面が茶褐色である。314は角が丸みに調整した平底である。器面調整は撫で調整で、色調は茶褐色である。315は張りのない底部で平底である。器面調整は撫で調整で、色調は茶褐色である。316はやや上げ底で、内外面貝殻条痕がみられるものである。色調は灰褐色で薄手の土器である。317は胴部から段をつけて作られた平底である。器面調整は内外面が研磨調整である。色調は外面が灰白褐色で、内面が黒褐色である。318は厚手で底面が狭い上げ底をもつ土器である。器面調整は外面が研磨に近い撫で調整で、内面は撫で調整である。319は沈線文のある土器片を利用した土製円盤である。



第150図 無文土器及び底部と土製製品

## (2) 晩期土器

### XXXa類（第151図320～335）

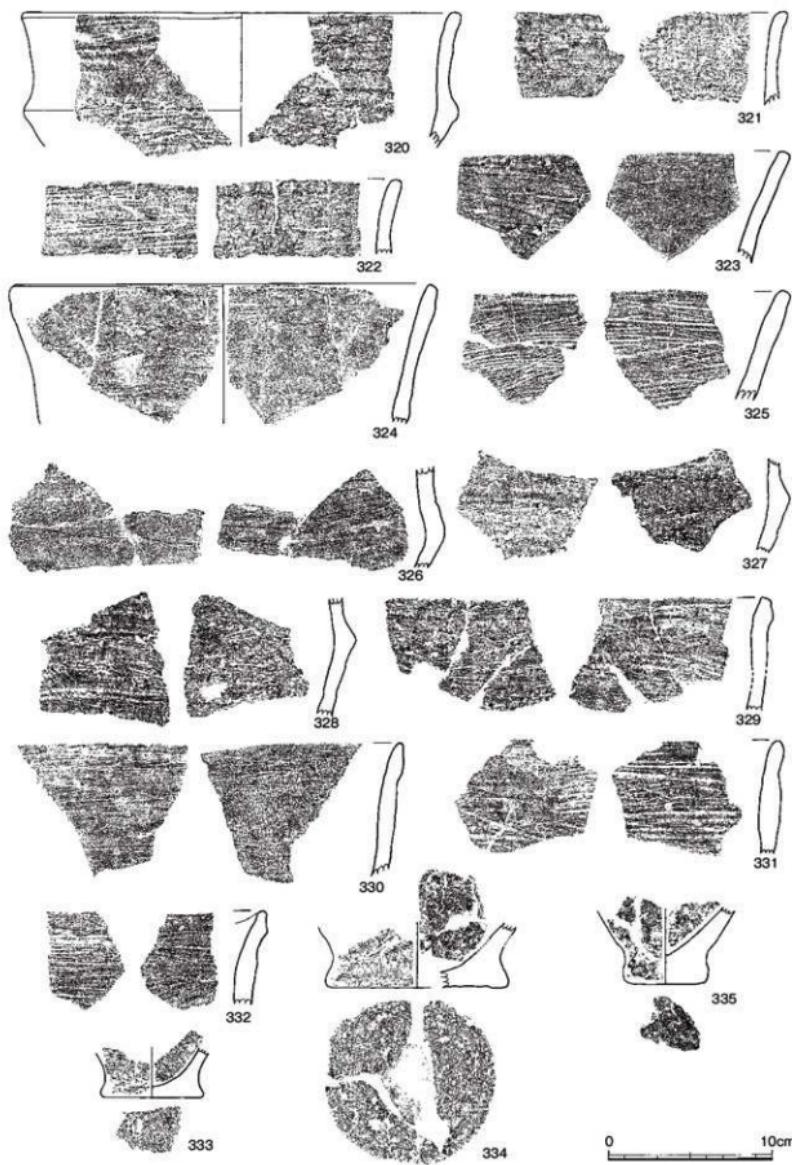
この類は縄文時代晩期の深鉢である。

320・321・322は同一個体と思われる。頭部と肩部が「く」の字状になり、口縁部が直行気味にやや外反し肩部で大きく張る器形である。器面調整は内外面とも横撫で、外面の肩部以下に貝殻条痕文がみられる。色調は外部の口縁部と頭部には煤が付着し黒色化している。肩部以下は茶褐色である。内面は暗茶褐色である。323は頭部がやや縮まり、直行気味に外反する口縁部である。器面調整は内外面とも弱い研磨で施している。色調は外面が灰色の上に黒色の煤が付着している。内面は暗茶褐色の上に煤が付着し、黒色化している。324は頭部がやや縮まり、直行気味に外反する口縁部である。器面調整は内外面とも弱い撫で施しているが外面がやや粗い。色調は外面が暗灰色の上に黒色の煤が付着している。内面は茶褐色で、一部には焼成時でできた黒斑がみられる。325は頭部がやや縮まり、直行気味に外反する口縁部である。器面調整は内外面とも強い貝殻腹縁部による撫で調整がみられる。色調は外面が赤茶褐色の上に黒色の煤垂れがみられる。内面は茶褐色である。326は張り出しのある「く」の字に折れる肩部である。器面調整は弱い研磨である。色調は外面が黒茶褐色で、黒色の煤もみられる。内面は暗赤茶褐色である。327は張り出しのある「く」の字に折れる肩部である。器面調整は内面が粗い撫で調整で、外面は頭部が丁寧な調整で、胴部が粗い横撫である。色調は外面が茶褐色で、黒色の斑点がある。328は張り出しのある「く」の字に折れる肩部である。器面調整は内面が粗い撫で調整で、外面は頭部が丁寧な調整で、胴部が粗い横撫である。色調は外面が茶褐色で、黒色の斑点がある。黒色の煤もみられる。内面は暗茶褐色である。329～332は口縁部に肥厚した部分がみられるものである。329は口縁部にやや肥厚した部分をつくり、肩部に向かって丸みをもつ器形である。器面調整は内外面とも粗い撫で調整である。色調は外面が明茶褐色で内面が暗茶褐色である。330は口縁部に肥厚した部分をつくり、肩部に向かって丸みをもつ器形である。器面調整は内外面とも粗い撫で調整である。色調は外面が明茶褐色で内面も明茶褐色である。331は波状口縁で口縁部に肥厚した部分をつくり、肩部に向かって丸みをもつ器形である。器面調整は内外面とも粗い撫で調整である。色調は外面が黑色で内面が明茶褐色である。333は張り出しのある底部で平底である。器面調整は撫で調整で、色調は外面が明茶褐色で内面は黒茶褐色である。334は張り出しのある底部で平底である。器面調整は撫で調整で、色調は外面が明茶褐色で内面は暗茶褐色である。335は張り出しが欠損している底部で平底である。器面調整は撫で調整で、色調は外面が茶褐色で内面も茶褐色である。

### XXX b類（第152図336～358）

この類は縄文晩期の浅鉢である。

336は口縁部に断面玉縁がみられ、頭部で深く縮まり、胴部に向かって大きく張る器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内外面とも黒色である。337は口縁部に断面玉縁がみられ、頭部で浅く縮まり、胴部に向かってやや張る器形である。胴部には沈線が横位にみられる。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が茶褐色で、外面は黒色と茶褐色である。338は断面玉縁が口縁部に

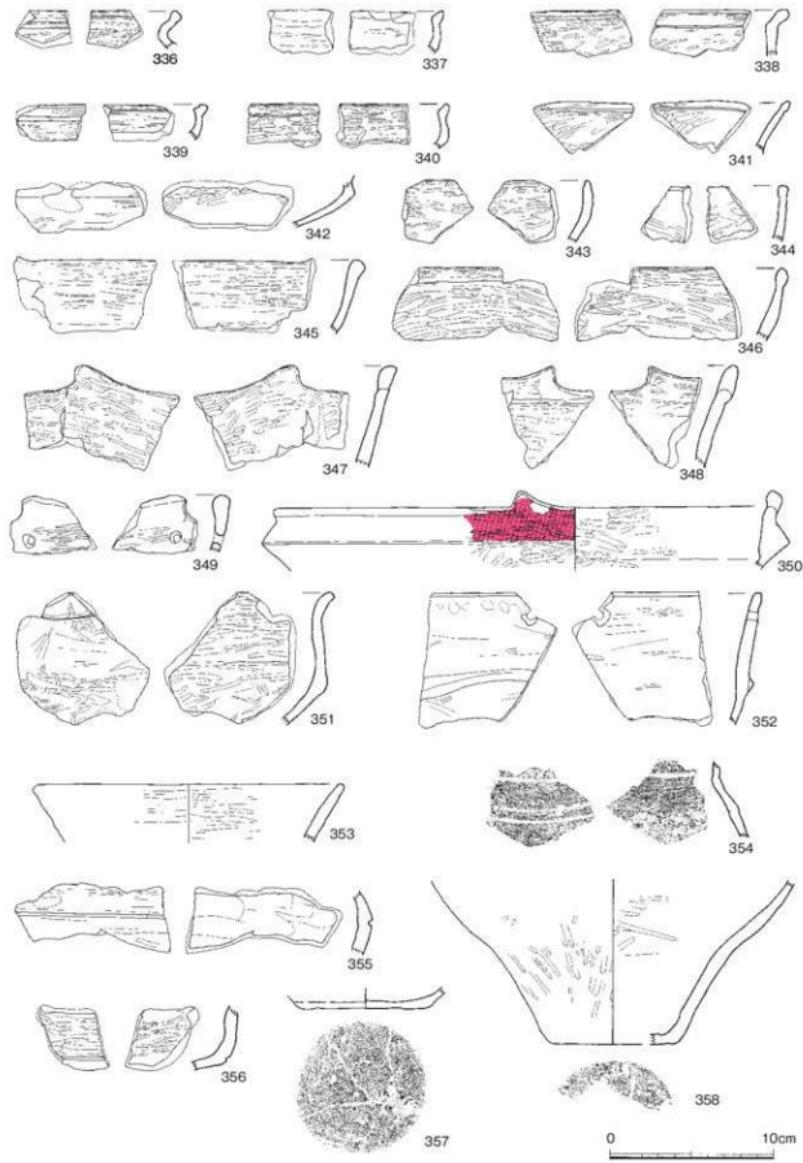


第151図 XXXIa類土器

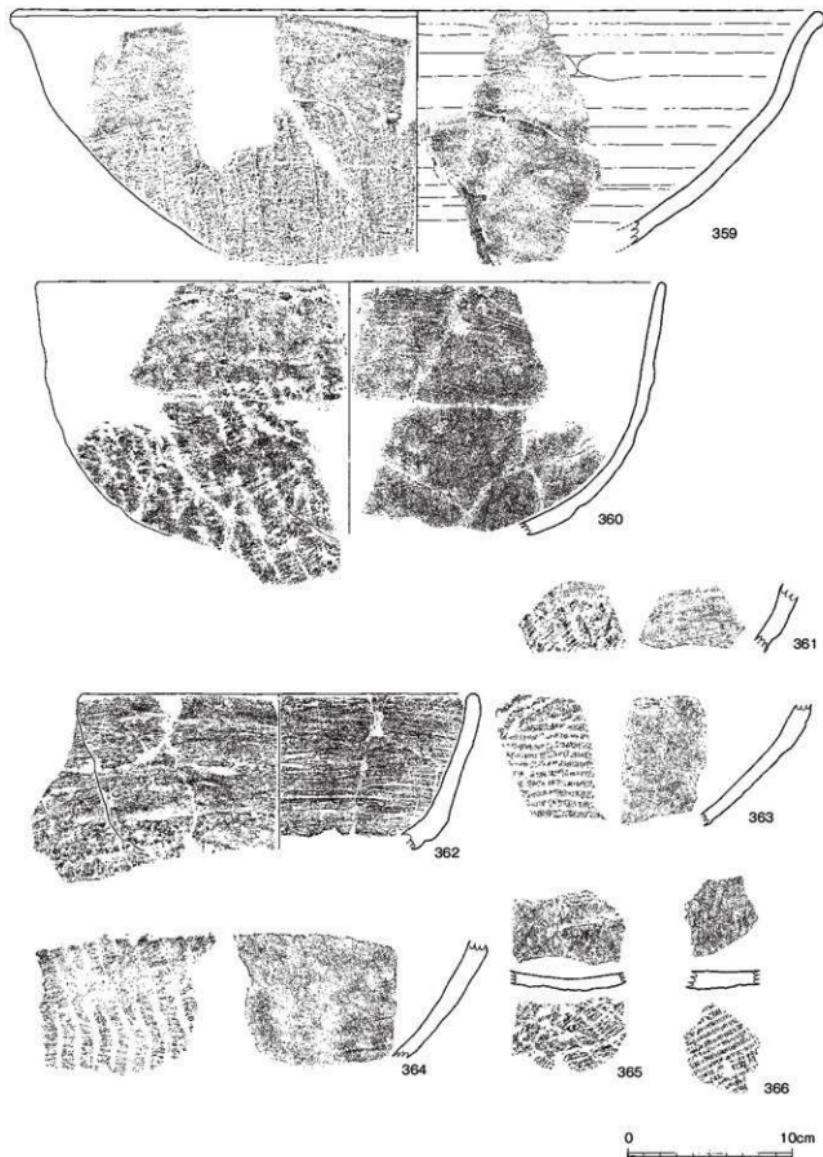
みられ、頸部で浅く締まり、胴部に向かってやや張る器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が茶褐色で、外面は黒色と茶褐色である。339は断面玉縁が口縁部にみられ、頸部で浅く締まり、胴部に向かってやや張る器形である。胴部には沈線が横位にみられる。器面調整は黒色研磨である。色調は内外面とも黒色である。340は断面玉縁が口縁部にみられ、頸部で浅く締まり、胴部に向かってやや張る器形で、胴部には稜線がみられる。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が暗茶褐色で、外面は黒色である。341は断面玉縁が口縁部にみられ、頸部で口縁部が大きく開く器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が黒茶褐色で、外面は黒色と暗茶褐色である。342は頸部で締まり、肩部で棱を持つ頸部から底部までである。器面調整は黒色研磨である。色調は内面外面とも茶褐色である。343は断面玉縁が口縁部にみられ、頸部から胴部は球状になる器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が黒色で、外面は黒色と茶褐色である。344は断面玉縁が口縁部にみられ、頸部から胴部は球状になる器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が灰黒色で、外面は黒色と灰褐色である。345は丸く膨らむ断面玉縁が口縁部にみられ、頸部から胴部は球状になる器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が黒色で、外面は灰褐色である。346は丸く膨らむ断面玉縁が口縁部にみられ、頸部から胴部は球状になる器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内外面とも口縁部が黒色で、胴部が赤茶褐色である。347は口縁部に鱗状突起（別称リボン）を付けたもので外反する器形である。器面調整は外面が黒色研磨で内面が研磨である。色調は外面が黒茶褐色で、内面が明茶褐色である。348は口縁部に鱗状突起を付けたもので外反する器形である。器面調整は内外面とも黒色研磨である。色調は内外面とも黒褐色である。349は口縁部に鱗状突起を付けたものでやや内反する器形である。器面調整は外面が黒色研磨で内面が研磨である。色調は外面が暗茶褐色で、内面が赤茶褐色に黒色が一部混ざっている。350は口縁部に鱗状突起を付けたもので、口縁部と肩部が断面三角形をした直行する器形である。器面調整は内外面が黒色研磨である。色調は内外面とも灰茶褐色である。351は肩部で「く」の字状に折れ、肩部から口縁部までは直行し、口縁部で外反する器形をもつものである。器面調整は研磨である。色調は内外面とも茶褐色と黒褐色がみられる。352は肩部でやや折れ、外面に断面三角突帯を貼り付け、直行する器形をもつものである。器面調整は研磨である。色調は外面が黒茶褐色で、内面が茶褐色である。353は外側に直行する器形である。器面調整は研磨である。色調は外面が黒茶褐色で、内面が黒色と一部茶褐色である。354は沈線を頸部と胴部横位に施し、球状をした胴部である。器面調整は弱い研磨である。色調は外面が暗茶褐色と灰茶褐色で、内面が黄茶褐色である。355は沈線を胴部に横位に施し、球状をした胴部である。器面調整は研磨である。色調は外面が黒褐色と灰茶褐色で、内面が暗褐色である。356は沈線を胴部に横位に施し、球状をした胴部である。器面調整は研磨である。色調は外面が赤茶褐色で、内面が暗茶褐色である。357は段をつくり上部は立ち上がっている。器壁は薄手の平底である。器面調整は弱い研磨である。色調は外面が黄茶褐色に黒班があり、内面が黄茶褐色である。358は底面がやや丸みをもつ底部から1回段を作るよう絞り込みながら胴部へ開く器形をしている。器面調整は弱い研磨である。色調は外面が黒褐色で、内面が茶褐色である。

### XXXc, d類

この類は浅鉢の中で頸部から口縁部の器形が内側に大きく曲がらず、直行ないし外反するもので、



第152図 XXXIb類土器



第153図 XXXc類土器(1)

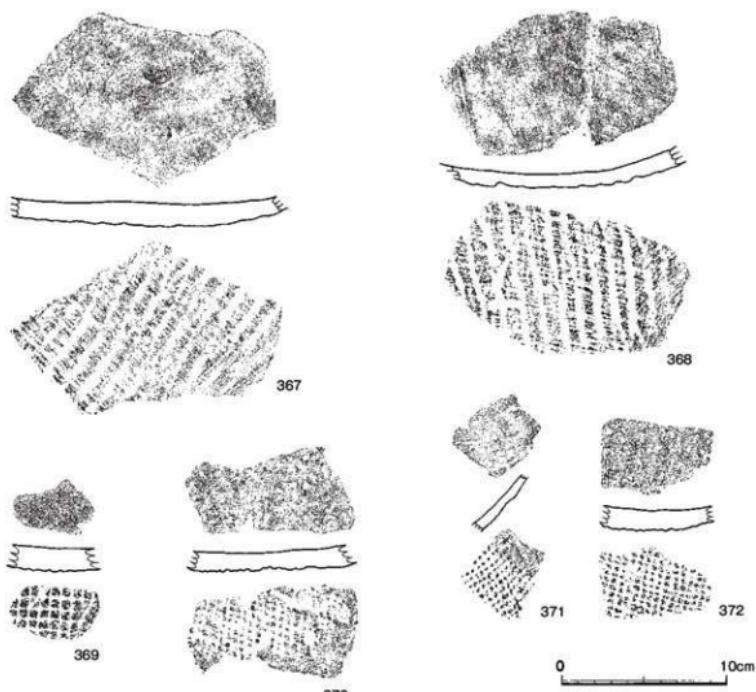
通称ボウル状鉢と呼ばれる大型の浅鉢である。この土器は製作方法に違いがある。共通点は内面が丁寧な研磨があり、外面底部に組織痕があるものと無いもの2つのタイプがある。

#### XXXc類 組織痕のある土器（第153・154図359～372）

359は厚手で大型のもので、丸底から肩部で1回折れ、頸部で絞込み、口縁部で外反する器形である。器面調整は、内面には横位の研磨が施され、外面には頸部と口縁部は横撫でがみられ、肩部から底部には幅の広いムシロ目状の組織痕が縦位にみられる。色調は外面が口縁部から頸部にかけて煤で黒色化がみられる。ほかは灰茶褐色である。内面は黄茶褐色が大方で、一部黒斑がみられる。360は深みのあるボウル状鉢で、丸底からやや開きながら直行する器形である。器面調整は、内面には横位の研磨が施され、外面には頸部と口縁部は横撫でがみられ、底部には幅の広いムシロ目状の組織痕が縦位にみられる。この組織痕は後から撫で調整があり消えかけている部分もみられる。色調は外面が口縁部から頸部にかけて煤で黒色化がみられるほかは明茶褐色である。内面は黄茶褐色と黒斑がみられる。361は肩部から底部にかけての部分と思われる。器面調整は外面に幅の広いムシロ目压痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が煤付着のため黒色で、内面は暗茶褐色である。362は肩部から直行気味に口縁部が開き、口縁上部ではやや内側に立つ器形である。器面調整は、内面に横位の弱い研磨が施され、外面の口縁部には粗い横撫でがみられ、肩部から胴部には幅の広いムシロ目状の組織痕が横位にみられる。色調は外面が口縁部から頸部にかけて煤で黒色化がみられる。内面は黄茶褐色が基本で、底部近くには黒色化がみられる。363は肩部から底部にかけての部分と思われる。器面調整は外面に幅の狭いムシロ目压痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が煤付着のため黒色で、内面は茶褐色である。364は組織痕土器すなわちボウル状鉢の底部である。器面調整は、内面には横位の研磨が施され、外面には肩部と底部にはムシロ目状の組織痕が縦位にみられる。色調は外面が明茶褐色で、内面は灰茶褐色で、一部黒斑がみられる。365は底部の部分と思われる。器面調整は外面に変則のムシロ目压痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が黒褐色で、内面は黒茶褐色である。366は底部の部分と思われる。器面調整は外面に幅の狭いムシロ目压痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面は黒茶褐色である。367は底部の部分と思われる。器面調整は外面に幅の広いムシロ目压痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が明茶褐色で、内面は灰茶褐色である。368は底部の部分と思われる。器面調整は外面に幅の広いムシロ目压痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が茶褐色で、内面は灰茶褐色である。369は底部の部分と思われる。器面調整は外面に目の広い網目压痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面は黑色である。370は底部の部分と思われる。器面調整は外面に目の狭い網目压痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面は黑色である。371は薄手土器で、底部の部分と思われる。器面調整は外面に網目压痕の組織痕がみられ、内面には撫で調整がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面は黑色である。372は厚手土器の底部の部分と思われる。器面調整は外面に網目压痕の組織痕がみられ、内面には撫で調整がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面は灰黒色である。

#### XXXd類 組織痕の無い土器（第155図373～378）

これらの土器はボウル状鉢で組織痕の無いものである。



第154図 XXXc類土器(2)

373は口径約51cmになる浅鉢で、同質のものを推定復元したものである。器形は胴部から直行気味に口縁部が開き、口縁上部ではやや外反するものである。器面調整は内面に横位の研磨が施され、外面の口縁部から底部にかけては粗い横撫でがみられる。色調は外面が口縁部から頸部にかけて灰黒色で一部煤による黒色化がみられる。内面は口縁部が桃茶褐色で、胴部は桃茶褐色、底部は茶褐色である。374は浅いボウル状鉢で、器形は胴部から直行気味に口縁部が開き、口縁上部ではやや外反するものである。また、胴部では折れて底部に至り、口唇部には鱗状突起が付けられている。器面調整は内面に横位の黑色研磨が施され、外面の口縁部から底部にかけては横撫で調整がみられる。色調は外面が口縁部から頸部にかけて煤による黒色化がみられる。内面は口縁部から底部まで黒色である。375は胴部から折れて底部に至るボウル状鉢である。内面は横研磨され、外面は粗い撫で調整である。色調は外面が黄茶褐色に黒斑がみられ、内面は灰茶褐色を呈する。376は胴部から折れて底部に至るボウル状鉢である。内面は横研磨され、外面は粗い撫で調整である。色調は内外面とも茶褐色である。377は胴部から湾曲状に底部に至るボウル状鉢である。内面は弱い横研磨がされ、外面は粗い撫で調整である。色調は外面が茶褐色で、内面は黒茶褐色を呈する。378は湾曲状の底部である。内面は弱い横研磨で、外面は粗い撫で調整である。色調は茶褐色である。

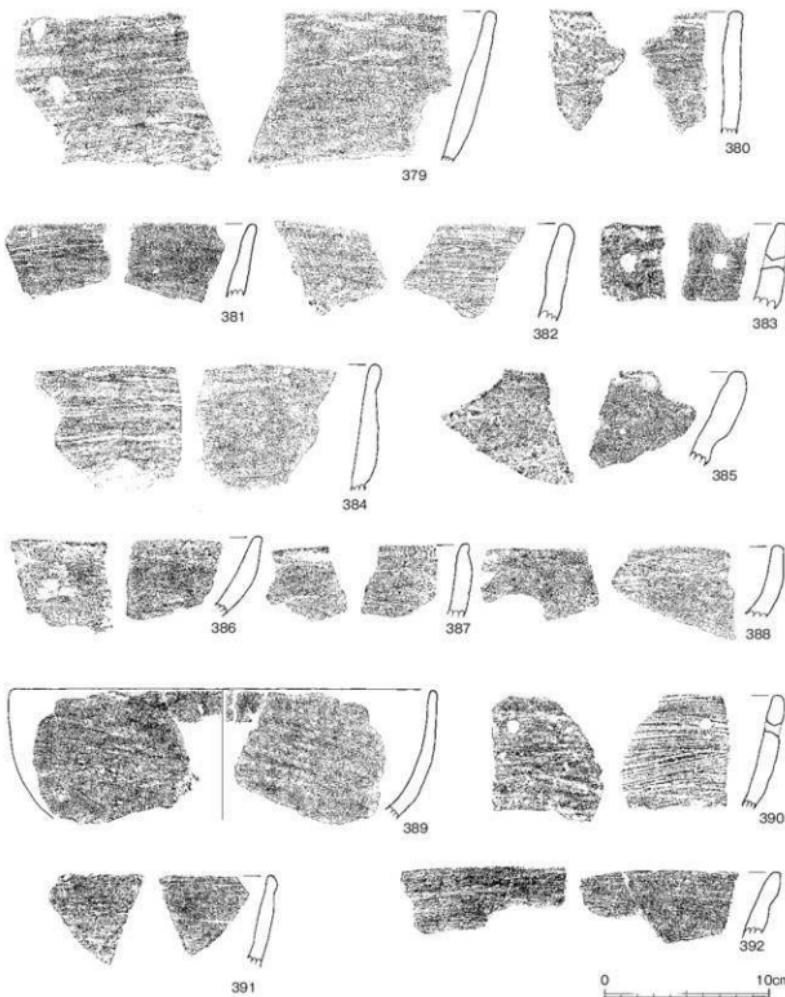


第155図 XXXd類土器

XXXe類 組織痕有無不明の土器（第156図379～392）

379～392は口縁部に限るため組織痕か撫で調整か不明として取り上げた。器形は鉢形土器である。

382は直行する口縁部である。器面調整は内面が横研磨で外面が横撫である。内面には初痕らしきものが見られる。383は直行する口縁部である。器面調整は内面が横研磨で外面が粗い横撫である。口縁部には補修孔がみられる。



第156図 XXXe類土器

第29表 XX類～XXX類土器觀察表(1)

順位	通巻号	出土場所	分類	種類	外文種	測量(内)	色調(内)	色調(外)	断面	傳承	備考
146	202	3520 32-32	XX I	R 1/64 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	
	203	3520 32-32		R 1/64 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	204	930		G 68 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	205	1091		C 75 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	206	1091		-	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	
	207	6 14		G 22 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	208	280 248		G 22 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	209	1248		G 22 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	210	3520 32-32		F 1/62 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	211	3520 32-32		F 1/62 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
147	280	1230	XX II	G 22 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	281	5538		G 62 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	282	2385		G 62 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	283	1031		I 1/66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	284	166		I 1/66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	285	166		I 1/66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	286	735.834		G 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	287	1230		G 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	288	1230		G 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	289	2489		G 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
148	290	1247	XX III	F 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	291	1233		F 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	292	119		H 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	293	119		H 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	294	119		F 28 N	印刷文	只詰柔軟	暗赤系褐色	深褐色	長・石・角	輕質	口徑18.8cm
	295	119		H 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角・平	輕質	
	296	119		H 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角・平	輕質	
	297	119		G 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角・平	輕質	
	298	119		F 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角・平	輕質	
	299	119		H 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角・平	輕質	
149	300	5537	XX IV	F 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	301	5537		G 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	302	5537		G 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	303	5537		F 66 N	印刷文	ヘラ彫で	黒褐色	淡茶褐色	長・石・角	軽質	保存
	304	65.69.76		H 28 N	研磨	研磨	暗赤褐色	灰褐色	長・石・角	輕質	口徑24.8cm
	305	125.29		G 66 N	印刷文	研磨	黒褐色	灰褐色	長・石・角	輕質	
	306	125.29		G 66 N	印刷文	研磨	黒褐色	灰褐色	長・石・角	輕質	口徑3.4cm
	307	290		F 66 N	印刷文	研磨	黒褐色	灰褐色	長・石・角	輕質	
	308	290		G 66 N	印刷文	研磨	黒褐色	灰褐色	長・石・角	輕質	底径11.8cm
150	309	1098	XX V	G 65 H	N	擦で	黒褐色	暗赤系褐色	長・石・角	輕質	保存
	310	3815		G 65 H	N	擦で	黒褐色	暗赤系褐色	長・石・角	輕質	直径8.9cm
	311	1533		G 65 H	N	擦で	黒褐色	暗赤系褐色	長・石・角	輕質	直径9.0cm
	312	1521		G 65 H	N	擦で	黒褐色	暗赤系褐色	長・石・角	輕質	直径8.5cm
	313	300.120.200.		G 41 N	研磨	研磨で	黒褐色	暗赤系褐色	長・石・角	輕質	直径8.2cm
	314	100		H 66 N	擦で	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	口径8.9cm
	315	636.636.636.636.		G 32 N	擦で	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	直径9.8cm
	316	636.636.636.636.		G 32 N	擦で	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	直径9.8cm
	317	636.636.636.636.		G 32 N	擦で	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	直径9.8cm
	318	1846.1846.1846.		F 70 N	研磨	研磨に近い擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	口径4.6cm
151	319	6368	XX VI	G 50 N	N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	320	10500.10500.		n	擦で	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角・薄	輕質	底径13.4cm
	321	1051		a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	保存
	322	1051		a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	323	10499.10489		a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角・薄	輕質	保存
	324	—		a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角・薄	輕質	
	325	—		a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角・薄	輕質	
	326	10510		a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角・薄	輕質	
	327	10510		a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角・薄	輕質	
	328	10510.10510.		a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角・薄	輕質	
152	329	2524	XX VII	a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	330	2406		a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	331	2439		a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	332	2496		a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	333	2496.2496.2496.		a	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	底径6.0cm
	334	200.200.200.		a	G 41 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	底径11.9cm
	335	10676		a	F 25 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	底径4.8cm
	336	10261		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	337	10261		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	338	10261.10261.		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
153	339	10261	XX VIII	b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	340	10261		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	341	10261		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	342	10261		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	343	10261		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	344	2006		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	345	1059		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	346	1059.1059.1059.		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	347	1059.1059.1059.		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	348	2137		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
154	349	300	XX IX	b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	350	10548		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	351	10515		b	1/38 N	擦で	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	352	388		b	D 75 N	研磨	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	353	921.920.920.		b	F 68 N	研磨	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	底径9.9cm
	354	10599.10599.10599.		b	G 28 N	研磨	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	355	10599.10599.10599.		b	G 33 N	研磨	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	356	2137		b	H 28 N	研磨	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	
	357	66.70.73		b	C 75 N	研磨	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	底径7.4cm
	358	102.107.107.		b	C 75 N	研磨	赤褐色	赤褐色	長・石・角	輕質	底径7.4cm

第30表 XXX類～XXXI類土器観察表(2)

測定	番号	出土番号	分類	分類	IC	II	III	IV	文様・調査(内)	文様・調査(外)	色調(内)	色調(外)	土	焼成	備考	
153	359	1031 1032 1033 1034 1035 1036 1037 1038 1039 1040	C	H	28	IV	a		縹で、ムシロ 目状の施釉面		研磨	灰茶褐色	黄茶褐色	長・石・角	普通	保付番 口徑44.2cm
				I	28	IV	a									
				I	29	IV	a									
	360	888 889 890 894 895 896		c	H	33	IV	a	縹で、ムシロ 目状の施釉面		研磨	明茶褐色	黄茶褐色	長・石・角	普通	保付番 口徑38.4cm
	361	21008		c	I	33	IV	a	ムシロの施釉面		研磨	黑色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番
	362	10590 10591 10592 10593		c	I	29	IV	a	ムシロの施釉面		剥い研磨	黑色	黄茶褐色	長・石・角	普通	口徑24.4cm
	363	20348		c	H	33	IV	a	ムシロの施釉面		研磨	黑色	茶褐色	長・石・角	現買	保付番
	364	24		c	H	36	IV	a	ムシロの施釉面		研磨	黑色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番
	365	21419 21451		c	G	34	IV	a	ムシロの施釉面		研磨	黑色	暗茶褐色	長・石・角	現買	
	366	21009		c	H	26	IV	a	ムシロの施釉面		研磨	明茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	
154	367	10594 10595	C	G	35	IV	a	ムシロの施釉面		研磨	明茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買		
	368	10566 10567 10568 10569		H	26	IV	a	ムシロの施釉面		研磨	黑色	暗茶褐色	長・石・角	現買		
	369	35		c	H	36	IV	a	ムシロの施釉面		研磨	黑色	暗茶褐色	長・石・角	現買	
	370	20009		c	F	25	IV	a	網目状施釉		研磨	赤茶褐色	黑色	長・石・角	普通	
	371	21009 21634		c	P	35	IV	a	網目状施釉		擦穴	土茶褐色	黑色	長・石・角	普通	
	372	21635		c	P	34	IV	a	網目状施釉		擦穴	灰茶褐色	黑色	長・石・角	普通	
	373	10591 10592 10593 10594 10595		d	H	29	IV	a	細い縦で		研磨	灰黑色	桃茶褐色	長・石・角	現買	保付番 口徑51.4cm 器高13.6cm
				G	28	IV	-									
	374	486 487 487 488 489 489		d	F	37	IV	-	縦状突出部		黑色研磨	黑色	黑色	長・石・角	普通	保付番 1.0cm 器高13.6cm
	375	486 487 487 488 489 489		d	H	35	IV	-	細い縦で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	普通	
155	376	486 487 487 488 489 489	C	d	H	35	IV	-	細い縦で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	
	377	10596 10597 10598 10599		d	H	34	IV	-	細い縦で		剥い研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	
	378	699 699 699 699 699 699		d	H	50	IV	a	細い縦で		剥い研磨	茶褐色	茶褐色	長・石・角	研買	
	379	21336		e	I	34	IV	a	細い縦で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番
	380	69912		e	F	28	IV	a	細い縦で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番
	381	21337		e	H	28	IV	a	細い縦で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番
	382	21338		e	I	33	IV	a	細い縦で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番
	383	21339		e	I	33	IV	a	細い縦で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番 1.0cm 器高13.6cm
	384	21416		e	G	35	IV	a	廣で		研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	長・石・角	現買	保付番
	385	21417		e	H	35	IV	-	細い縦で		研磨	黑色	明茶褐色	長・石・角	現買	保付番
156	386	69913	C	e	H	30	IV	-	細い縦で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番
	387	6998		e	H	30	IV	-	細い縦で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番
	388	30302		e	G	39	IV	-	細い縦で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番
	389	6160 6166		e	F	32	IV	-	廣で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番 1.0cm 器高13.6cm
	390	21340		e	H	28	IV	-	細い縦で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番
	391	21341		e	H	33	IV	-	細い縦で		研磨	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	現買	保付番
	392	21345		e	H	34	IV	-	細い縦で		研磨	黑色	茶褐色	長・石・角	現買	

### (3) 石器・石製品

縄文時代後・晩期の石器は、IVa層・IVb層を中心に出土している。同包含層内からは、縄文時代後・晩期の土器が出土しており、石器類に関しても同様と想定する。以下に、石鎚24点、磨製石鎚1点、石錐3点、石匙5点、スクレイバー2点、抉入石器1点、二次加工剥片1点、原石1点、有孔石製品1点、磨製石斧4点、打製石斧3点、磨石・敲石9点、石皿2点を図示した。

#### 石鎚（第157図393～416）

未製品・欠損品も含め計32点出土し、24点図示した。

393～401は、最大長2cm未満の小型のものである。393・394は正三角形状を呈し、基部に浅い抉りが見られる。395～401は二等辺三角形状を呈し、395は基部に浅い抉り、396～401は明確に脚部が作出された深い抉りが見られる。396は姫島産黒曜石であり、特に丁寧に整形されている。

402～412は最大長2cmを超える大型のものである。二等辺三角形状を呈し、基部に抉りが見られ、409～412は明確に脚部が作出されている。404・405は、頭部に近い両側縁が角をもって張り出す形状である。413・414は未製品である。415・416は欠損のため形状の分類ができなかった。

#### 磨製石鎚（第157図417）

1点出土した。417は薄い頁岩の剥片を素材とし、刃部にまで丁寧な研磨が施されている。

#### 石錐（第158図418～420）

3点出土し、全て図示した。419の側縁部はやや鋸歯状を呈する。420は玉隨製で厚みがある。

#### 石匙（第158図421～425）

5点出土し、全て図示した。424は針尾系黒曜石製で、横長の形状に丁寧に形成されている。

#### スクレイバー（第158図426・427）

4点出土し、2点図示した。427は玉隨製であり、自然面を多く残している。

#### その他（第158図428～431）

全て図示した。428は玉隨を素材とした抉入石器である。429は二次加工剥片であり、縁辺の一部に二次加工が施されている。430は水晶の原石である。431は丁寧な研磨が施された有孔石製品である。穿孔は中央部が最も狭くなっている。

#### 石斧（第159図432～438）

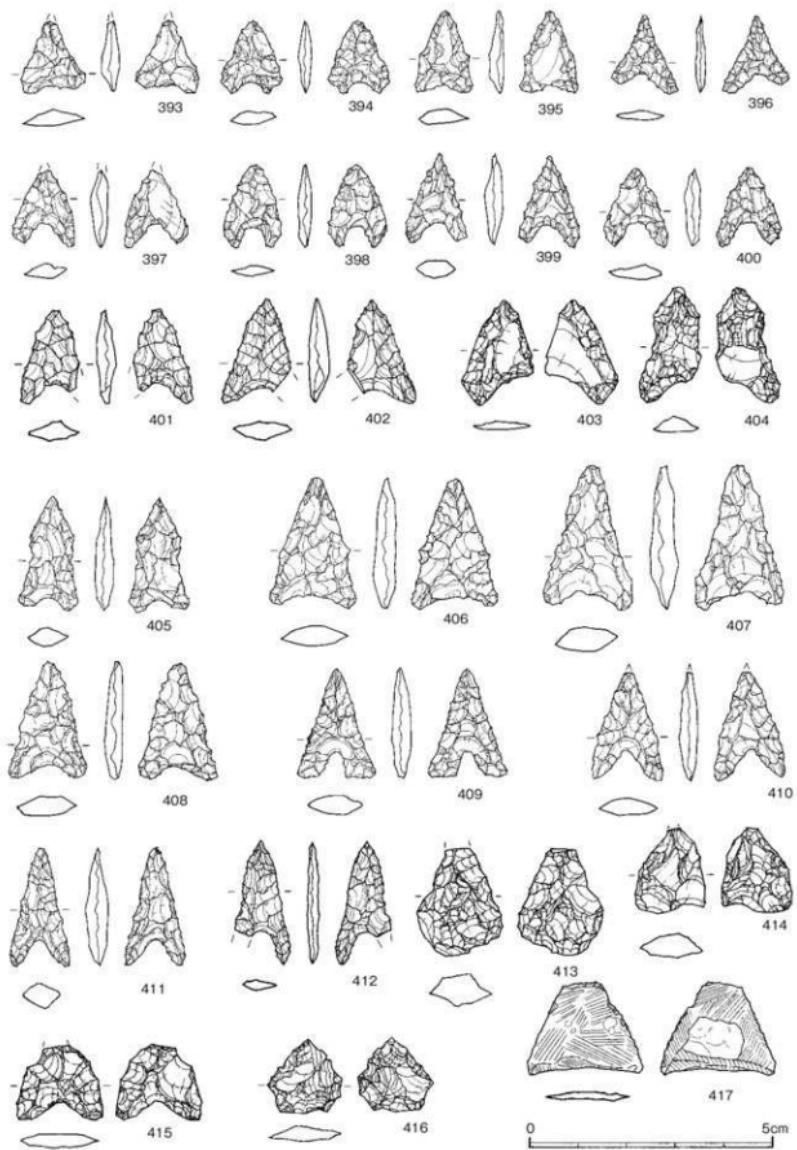
7点出土し、全て図示した。磨製石斧と打製石斧を一括した。432～435は磨製石斧である。432はバチ形をし、側辺も丁寧に磨いている。434は左側縁部に敲打痕が集中して認められる。435は表裏両面に丁寧な研磨が施され、刃部下半は欠損している。436～438は打製石斧である。437・438はラケット形で扁平な剥片を素材としている。

#### 磨石・敲石（第159・160図439～447）

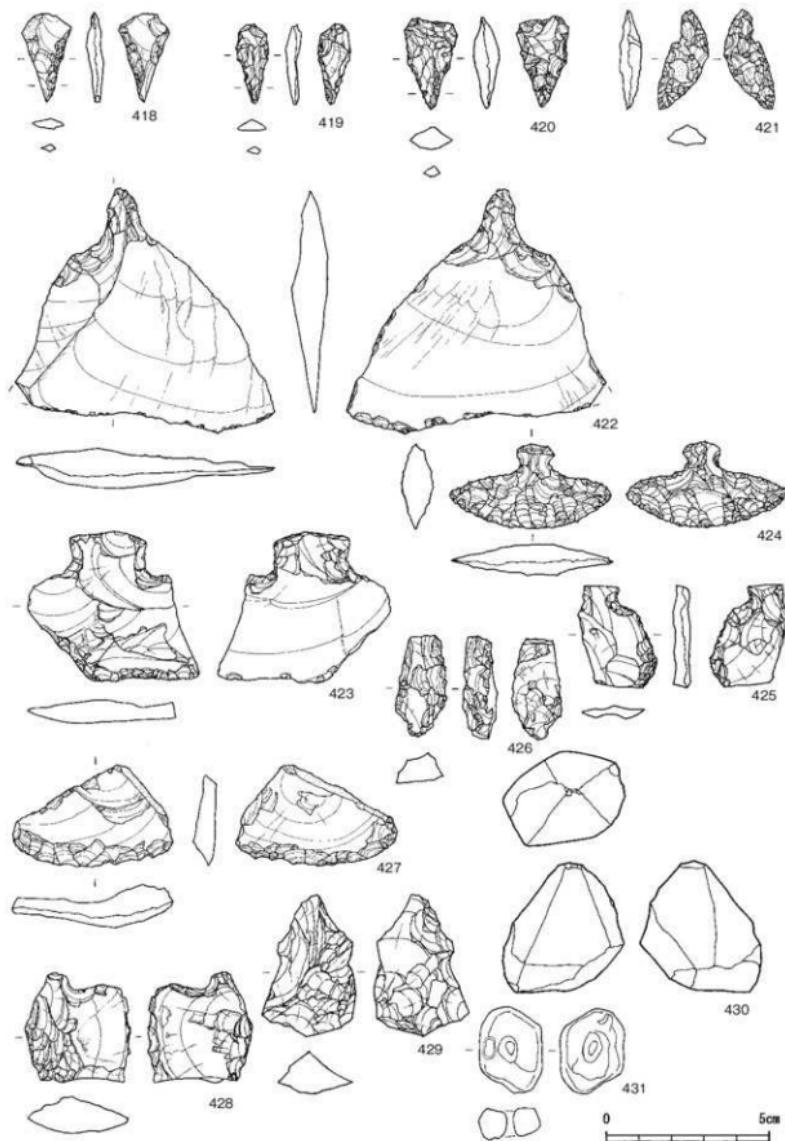
9点出土し、全て図示した。439・442・446は表裏面には磨面が、周縁部には集中した敲打痕が認められる。444は周縁下部に深い凹みが認められる。440・441は小型のもので、磨面と敲打痕が認められる。

#### 石皿（第161図448～449）

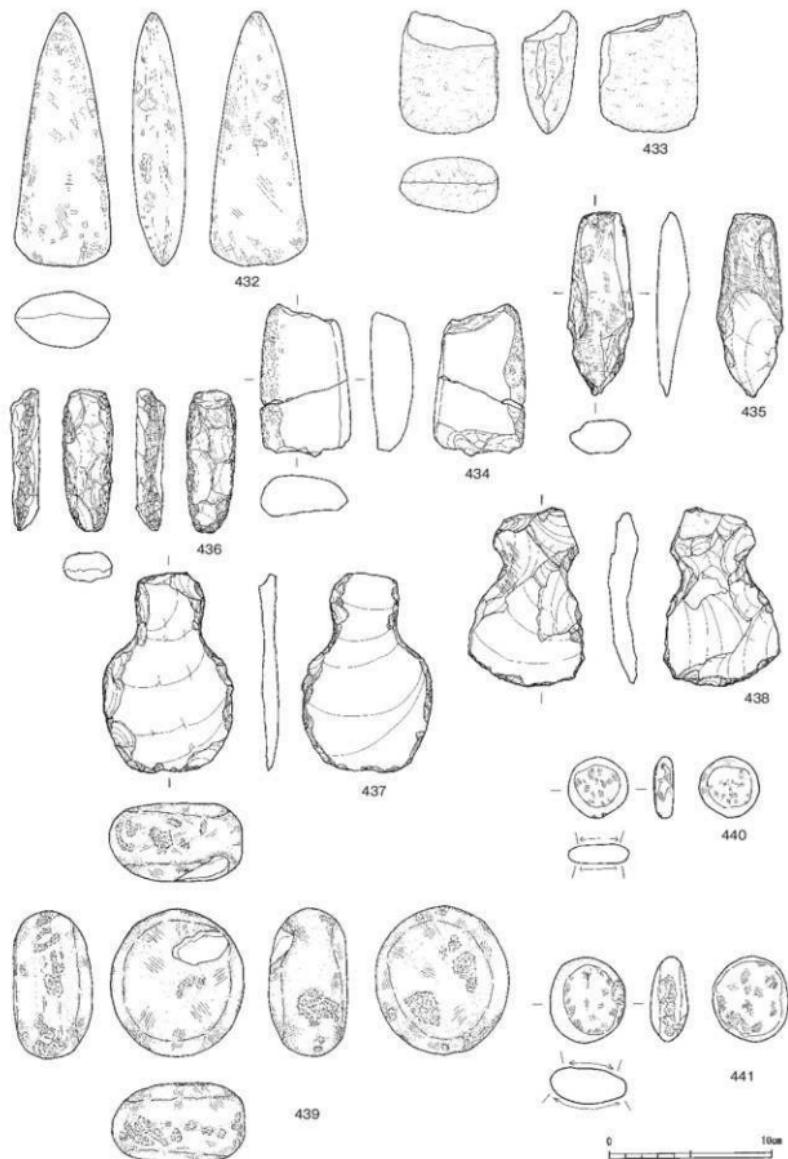
3点出土し、2点図示した。2点とも表面に磨面が認められる。448は砂岩を、449は平坦な安山岩を利用している。また、448は被熱している。



第157図 IVa層・IVb層（縄文後・晩期）出土石器(1)



第158図 IVa層・IVb層（縄文後・晩期）出土石器(2)



第159図 IVa層・IVb層（縄文後・晩期）出土石器(3)



442



443



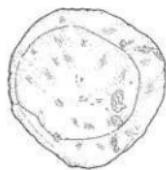
444



446



445

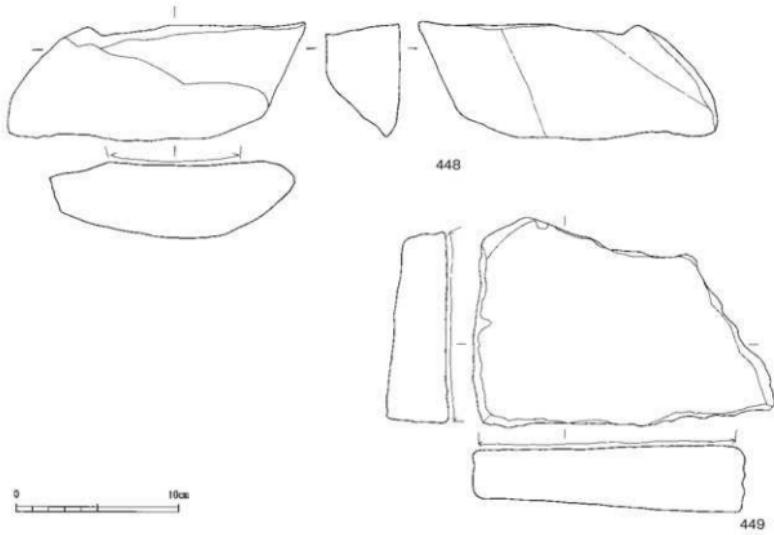


447



0 10mm

第160図 IVa層・IVb層（縄文後・晩期）出土石器(4)



第161図 IVa層・IVb層（縄文後・晩期）出土石器(5)

第31表 IVa層・IVb層（縄文後・晩期）出土石器観察表

剖面番号	回文番号	面上番号	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	深入度(cm)	重量(g)	石材	KX	留出部	留出L
	353	5853	打削石器	3.0	0.6	0.3	0.49	サヌカイト	II	24	a
	354	5854	打削石器	3.0	0.6	0.3	0.49	サヌカイト	II	24	a
	355	5855	打削石器	3.0	0.6	0.3	0.49	サヌカイト	II	24	a
	356	6109	打削石器	3.0	0.6	0.3	0.58	ナホト	G	50	a
	357	6117	打削石器	1.6	1.4	0.2	0.25	Ob.頭鈴	P	30	a
	358	6261	打削石器	1.0	0.6	0.3	0.44	ナホト	H	54	a
	359	6262	打削石器	1.8	0.6	0.3	0.51	ナホト	H	54	a
	360	6263	打削石器	1.6	0.6	0.4	0.59	安山岩	H	54	a
	361	6265	打削石器	1.9	0.6	0.4	0.70	Ob.頭鈴	P	63	a
	362	6266	打削石器	1.5	0.6	0.5	0.50	ナホト	P	23	a
	363	6267	打削石器	1.5	0.6	0.5	0.50	ナホト	P	23	a
	364	6268	打削石器	2.3	1.3	0.3	1.00	タンバク石	G	69	a
	365	6269	打削石器	2.3	1.3	0.4	0.80	ナホト	P	20	a
	366	6270	打削石器	2.0	1.3	0.5	2.96	ナホト	P	26	a
	367	6271	打削石器	2.0	1.3	0.5	2.96	ナホト	P	26	a
	368	6272	打削石器	2.4	1.6	0.4	2.32	ナホト	G	68	a
	369	6273	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.88	ナホト	G	41	a
	370	6274	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	371	6275	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	372	6276	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	373	6277	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	374	6278	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	375	6279	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	376	6280	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	377	6281	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	378	6282	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	379	6283	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	380	6284	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	381	6285	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	382	6286	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	383	6287	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	384	6288	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	385	6289	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	386	6290	打削石器	2.2	1.6	0.4	0.95	安山岩	H	54	a
	387	6291	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	388	6292	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	389	6293	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	390	6294	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	391	6295	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	392	6296	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	393	6297	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	394	6298	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	395	6299	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	396	6300	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	397	6301	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	398	6302	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	399	6303	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	400	6304	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	401	6305	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	402	6306	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	403	6307	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	404	6308	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	405	6309	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	406	6310	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	407	6311	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	408	6312	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	409	6313	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	410	6314	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	411	6315	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	412	6316	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	413	6317	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	414	6318	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	415	6319	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	416	6320	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	417	6321	石斧	2.3	1.7	0.7	2.50	日影	P	53	a
	418	6233	石斧	2.2	1.5	0.4	1.30	サヌカイト	P	53	a
	419	6234	石斧	2.2	1.5	0.4	0.80	サヌカイト	P	59	a
	420	6235	石斧	2.2	1.5	0.4	0.80	サヌカイト	P	59	a
	421	6236	石斧	2.0	1.5	0.2	2.35	Ob.玉手石	P	66	a
	422	6237	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	423	6238	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	424	6239	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	425	6240	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	426	6241	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	427	6242	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	428	6243	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	429	6244	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	430	6245	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	431	6246	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	432	6247	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	433	6248	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	434	6249	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	435	6250	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	436	6251	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	437	6252	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	438	6253	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	439	6254	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	440	6255	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	441	6256	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	442	6257	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	443	6258	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	444	6259	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	445	6260	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	446	6261	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	447	6262	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	448	6263	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	449	6264	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	450	6265	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	451	6266	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	452	6267	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	453	6268	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	454	6269	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	455	6270	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	456	6271	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	457	6272	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	458	6273	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	459	6274	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	460	6275	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	461	6276	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	462	6277	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	463	6278	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	464	6279	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	465	6280	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	466	6281	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	467	6282	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	468	6283	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	469	6284	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	470	6285	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	471	6286	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	472	6287	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	473	6288	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	474	6289	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	475	6290	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	476	6291	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	477	6292	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	478	6293	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	479	6294	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	480	6295	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	481	6296	石斧	2.0	1.5	0.2	2.80	サヌカイト	P	63	a
	482										

## 第9節 弥生時代・古墳時代の調査成果

### 遺物

#### (1) 弥生時代（第162図450～452）

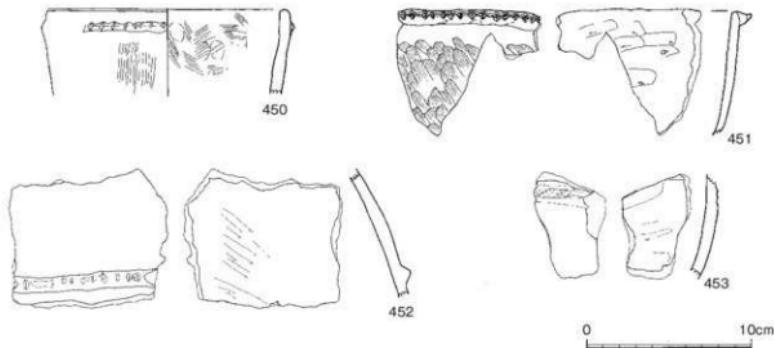
この時代の土器の出土状況は、F-24区を中心にIVa層に出土しているが量は少ない。よって、分布図は省く。

450は壺形土器の口縁部である。文様は口縁部において一段下がった部分に細い刻目突帯を貼り付けている。刻み目は三角突帯に縱位に施されている。器面調整は外面が縱研磨で、内面が横研磨である。色調は内面及び胎土が黒色で、外面が灰黒色である。451は壺形土器の口縁部である。口縁部は三角突帯を貼り付け、縱位の刻み目を施している。器面調整は外面が斜位のヘラナデで、内面がヨコナデである。色調は外面が暗茶褐色で、内面は口縁部側が茶褐色で胴部側が黒色である。452は壺形土器の肩部である。文様は三角突帯に縱位の刻み目を施している。器面調整は外面が丁寧な横ナデで、内面が斜位のナデである。色調は外面が茶褐色に明茶褐色の斑点があり、内面には茶褐色に黒斑がみられる。

#### (2) 古墳時代（第162図453）

この時代の土器の出土状況は、G-45区を中心にIVa層に出土しているが量は少ない。よって、分布図は省く。

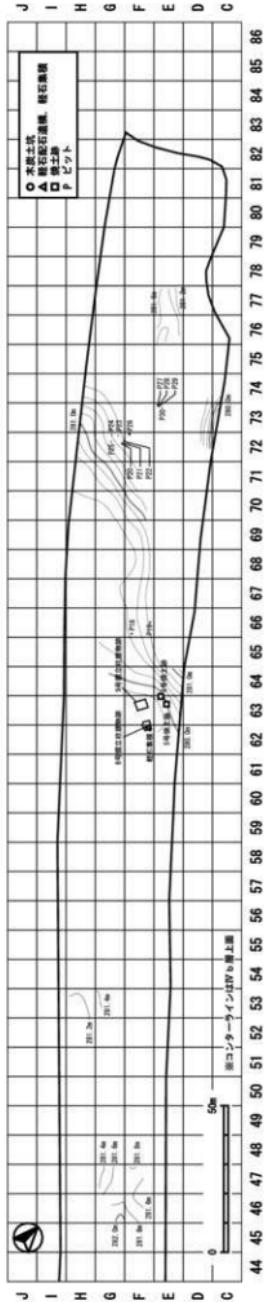
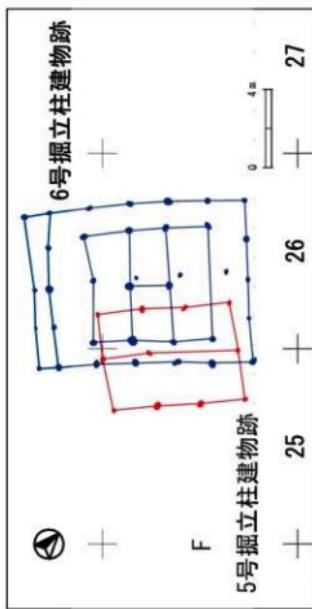
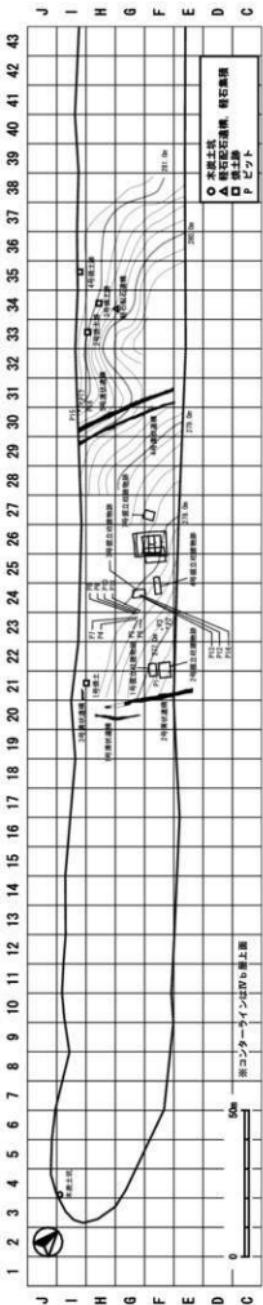
453は壺形土器の肩部である。文様は上下に沈線をつけた狭い蒲鉾形突帯に斜位の刻み目を施している。器面調整は外面が丁寧な横ナデで、内面が斜位のナデである。色調は外面が茶褐色に煤付着の黒色斑点があり、内面は茶褐色である。



第162図 弥生・古墳 土器

第32表 弥生・古墳 土器観察表

編番	図番号	取上番号	分類1	分類2	区	削印	縫合	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考
162	450	12285	弥生		F 24	IV a	縫目突起、研削	研磨	灰黒色	黒色	長・石・角	硬質	175×15.0cm	
	451	1067 1287	弥生		F 24	IV a	三段突、ハナナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長・石・角	硬質		
	452	12308	弥生		G 23	IV a	三段突、丁寧ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長・石・角	硬質		
	453	1295	古墳		G 65	IV a	蒲鉾形突起、ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長・石・角	普通		



第163図 古代・中世 遺構位置図

## 第10節 古代・中世の調査成果

### 1 調査の概要

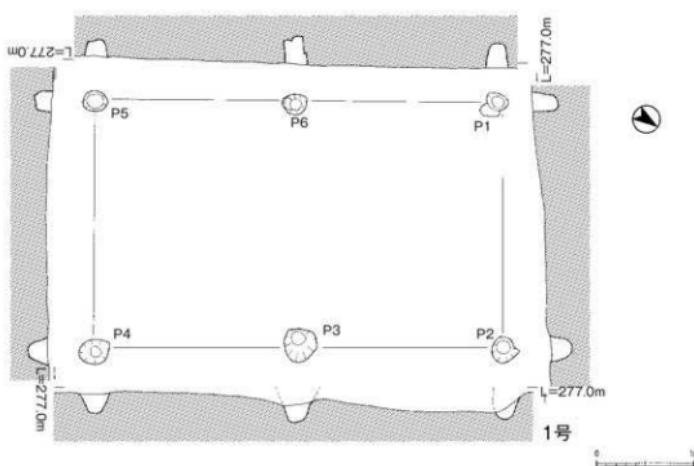
IIIa層を主に古代から中世該当層、IIIb層を主に古代該当層として調査した。その結果、奈良・平安時代に該当する古代の遺構は掘立柱建物跡9棟、焼土跡6基、溝状遺構5条、軽石集積1基、軽石配石1基、ピット30基が検出され、鎌倉時代以降に該当する中世の遺構は木炭土坑1基が検出された（第163図）。

遺物は、IIIa、IIIb層から甕、壺、塊、焼塙壺、青磁、軽石製品などが出土した。

### 2 遺構

#### （1）掘立柱建物跡（第164図）

F-21・22区で検出された。1間×2間の建物で、大きさは2.50m×4.23mである。梁間と桁行の柱穴が整然と並ぶ。柱穴の深さは、最も浅いものが17cm、最も深いものは28cmである。北側梁間の中央部に小ピットが1基検出されたが、南側梁間の中央部はピットが検出されなかった。



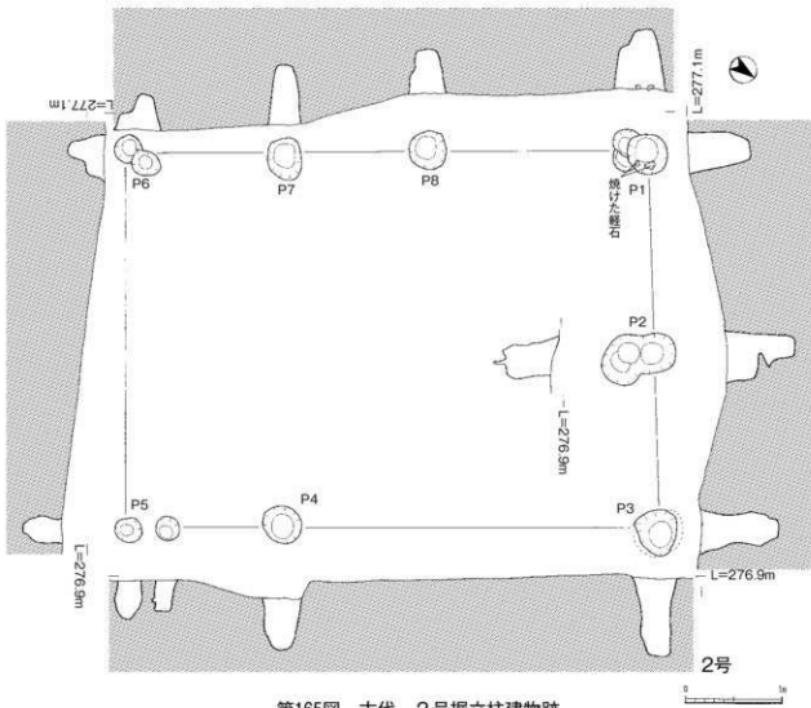
第164図 古代 1号掘立柱建物跡

第33表 古代 1号掘立柱建物跡測定表

建物	梁間	桁間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁間	下屋桁間	検出区
SH1	北側上屋1間 南側上屋1間	東側上屋2間 西側上屋2間	2.50m 2.55m	4.23m 4.18m			F-21・22区
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間	上屋桁行柱間	下屋桁行柱間			柱穴の長径×幅×深さ(cm)
P1～P2	2.50m		P2～P3 P3～P4	2.13m 2.10m			P1_23×18×27 P2_29×23×25 P3_36×33×24
P4～P5	2.55m		P1～P6 P6～P5	2.10m 2.08m			P4_33×26×23 P5_26×16×17 P6_24×16×28

## 2号掘立柱建物跡（第165図）

F-21・22区で検出された。2間×3間の建物で、大きさは3.92m×5.32mである。柱穴の深さは、最も浅いものが38cm、最も深いものは81cmである。P1、P2、P5、P6はそれぞれ複数の柱穴が見られることから添え柱か建て替えの可能性がある。また、P1内からは10cmと5cm大の焼けた軽石が出土した。1号掘立柱建物跡と隣接し、大きさを比較すると約1.5倍大きい。



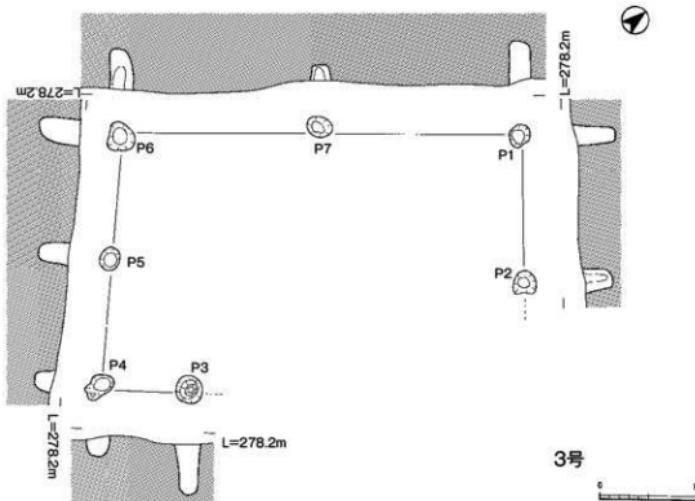
第165図 古代 2号掘立柱建物跡

第34表 古代 2号掘立柱建物跡計測表

建物	梁間間	桁行間	上梁梁間	下梁梁間	上梁桁行	下梁桁行	検出区
SH2	北側上層2間	東側上層2間	3.92m		5.49m		F-21・22区
	南側上層1間	西側上層3間	3.92m		5.32m		方位 N-W 35°
	上梁梁間柱間	下梁梁間柱間	上梁桁行柱間	下梁桁行柱間	上梁桁行柱間	下梁桁行柱間	柱穴の長辺×幅辺×深さ(cm)
P1～P2	2.07m		P3～P4	3.88m			P1, 45×40×63
P2～P3	1.85m		P4～P5	1.61m			P2, 79×40×72
P5～P6	3.92m		P1～P8	2.27m			P3, 48×39×81
			P8～P7	1.45m			P4, 43×37×53
			P7～P6	1.60m			P5, 29×25×41
							P6, 30×27×38
							P7, 45×34×61
							P8, 41×48×45

### 3号掘立柱建物跡（第166図）

F・G-24区で検出された。推定2間×2間の建物で、大きさは2.55m×4.08mである。柱穴の深さは、最も浅いものが17cm、最も深いものは53cmである。



第166図 古代 3号掘立柱建物跡

第35表 古代 3号掘立柱建物跡計測表

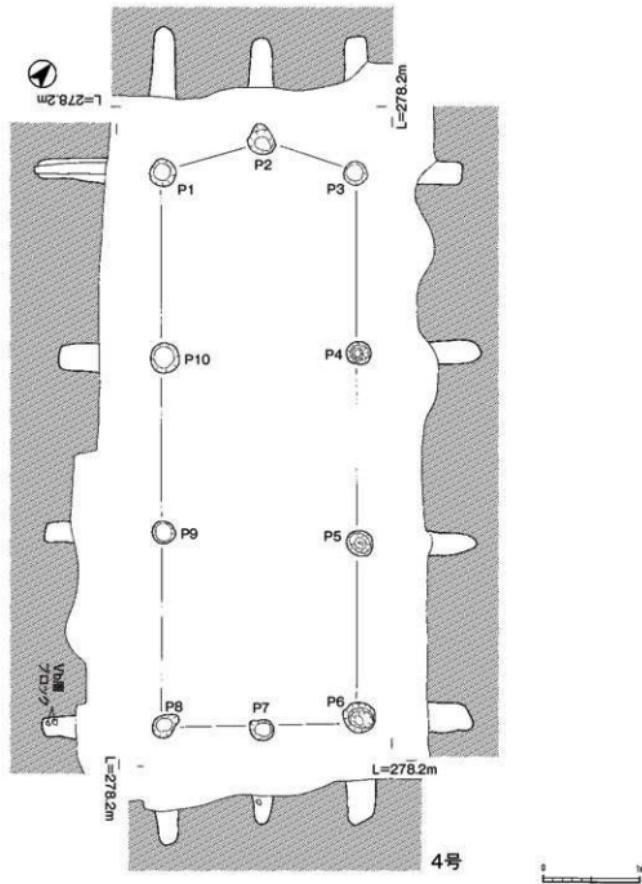
建物	梁間間	折行間	上原梁間	下原梁間	上原桁間	下原桁間	検出区
SH3	北側上屋1間 南側上屋2間	東側上屋半間 西側上屋2間	—	2.55m	—	4.08m	F・G-24区
P1～P2	1.51m		P3～P4	0.91m			柱穴の長径×幅径×深さ(cm)
P4～P5	1.28m		P1～P7	2.05m			P1, 25×19×45
P5～P6	1.27m		P7～P6	2.03m			P2, 26×22×31
							P3, 30×27×53
							P4, 32×18×21
							P5, 24×21×31
							P6, 32×28×43
							P7, 27×21×17

第36表 古代 4号掘立柱建物跡計測表

建物	梁間間	折行間	上原梁間	下原梁間	上原桁間	下原桁間	検出区
SH4	北側上屋2間 南側上屋2間	東側上屋3間 西側上屋3間	1.96m 2.00m	5.63m 5.69m	—	—	F-24-25区
P1～P2	1.07m		P3～P4	1.86m			柱穴の長径×幅径×深さ(cm)
P2～P3	1.00m		P4～P5	1.90m			P1, 29×27×75
P6～P7	0.98m		P5～P6	1.82m			P2, 25×26×51
P7～P8	1.02m		P1～P10	1.90m			P3, 25×24×46
			P10～P9	1.80m			P4, 26×24×54
			P9～P8	1.90m			P5, 29×28×81
							P6, 34×31×46
							P7, 27×21×30
							P8, 31×21×34
							P9, 24×23×30
							P10, 32×29×42

#### 4号掘立柱建物跡（第167図）

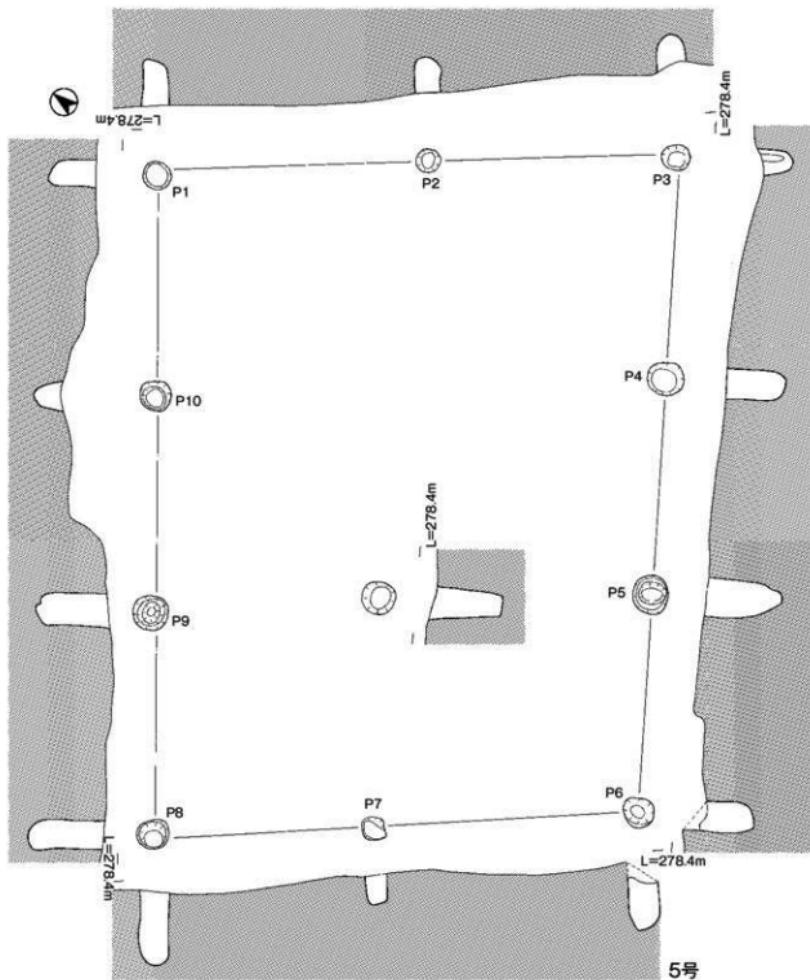
F-24・25区で検出された。2間×3間の建物で、大きさは2.00m×5.69mと細長い建物である。梁間と桁行の柱穴が整然と並ぶ。柱穴の深さは、最も浅いものが30cm、最も深いものは75cmである。



第167図 古代 4号掘立柱建物跡

### 5号掘立柱建物跡（第168図）

F・G-25・26区で検出された。2間×3間の建物で、大きさは5.35m×6.85mである。梁間と桁行の柱穴が整然と並ぶ。柱穴の深さは、最も浅いものが20cm、最も深いものは79cmである。南側から2本目の列中央にも1本の中央柱が添えられている。

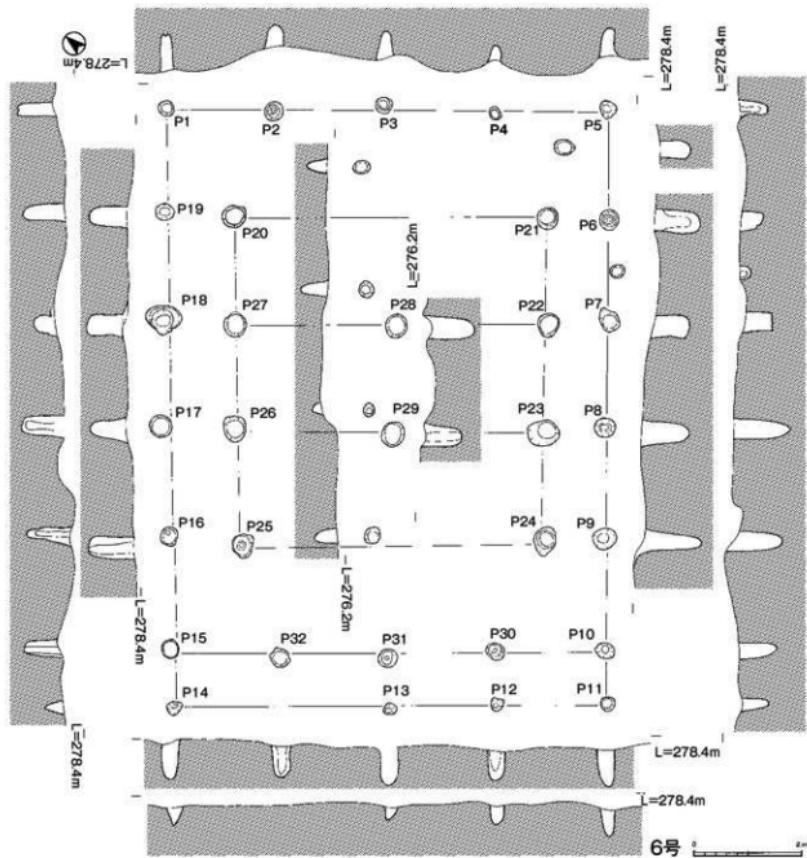


第168図 古代 5号掘立柱建物跡



### 6号掘立柱建物跡（第169図）

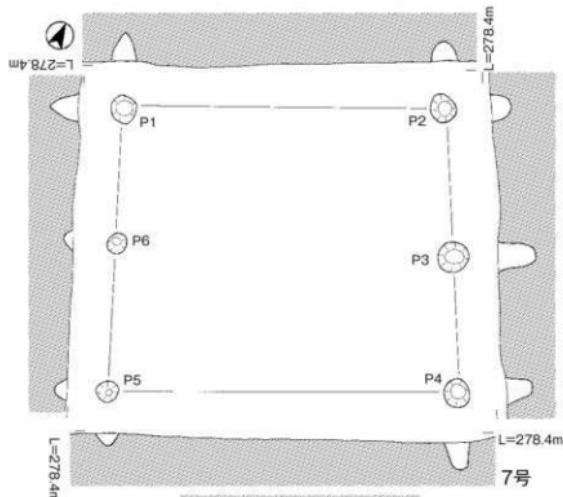
F・G・25・26区で検出された。上屋が2間×3間、下屋は4間×5間半の建物である。上屋の大きさは5.70m×6.12m、下屋の大きさは7.66m×11.10mで、梁間と桁行の柱穴が整然と並ぶ。柱穴の深さは、最も浅いものが25cm、最も深いものは123cmである。



第169図 古代 6号掘立柱建物跡

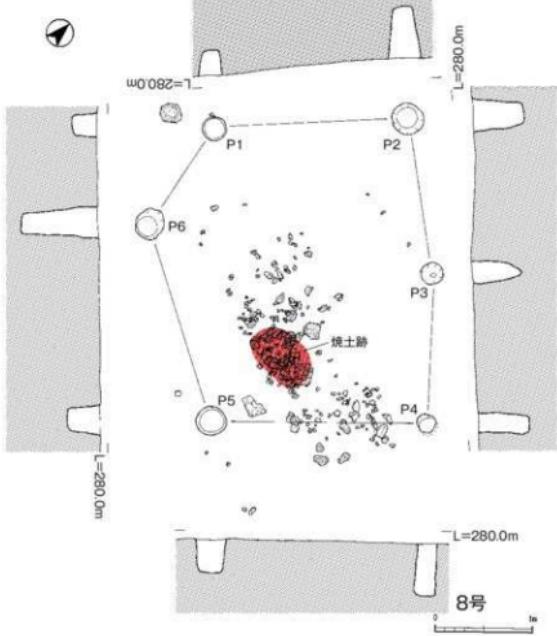
### 7号掘立柱建物跡（第170図）

F・G-27区で検出された。1間×2間の建物で、大きさは3.29m×2.92mである。梁間と桁行の柱穴が整然と並ぶ。柱穴の深さは、最も浅いものが10cm、最も深いものは81cmである。



### 8号掘立柱建物跡（第170図）

F-62・63区で検出された。1間×2間の建物で、柱穴の深さは、最も浅いものが26cm、最も深いものは81cmである。この掘立柱建物跡内には焼土跡がみられ、土器片と割れた軽石が散乱（軽石集積 第171図）していた。これらは共伴関係にあり、土間として利用された可能性が高い。



第170図 古代 7号、8号掘立柱建物跡

第37表 古代 5号据立柱建物跡計測表

建物	梁間間	桁行間	上層梁間	下層梁間	上層桁行	下層桁行	棟出区
SH5	東側上層2間	北側上層3間	5.35m		6.85m		F・G-25・26区
	西側上層2間	南側上層3間	4.98m		6.73m		方庭 N-E 50°
上層梁間柱間	下層梁間柱間	上層桁行柱間		下層桁行柱間			柱穴の長径×幅径×深さ(cm)
P1～P2	2.80m	P 1～P 10	2.30m				P1.31×29×49
P2～P3	2.55m	P 10～P 9	2.20m				P2.26×24×37
P6～P7	2.72m	P 9～P 8	2.35m				P3.30×35×37
P7～P8	2.26m	P 3～P 4	2.28m				P4.39×34×60
		P 4～P 5	2.20m				P5.49×36×78
		P 5～P 6	2.25m				P6.34×30×72
							P7.31×23×32
							P8.34×19×79
							P9.38×36×76
							P10.34×32×20

第38表 古代 6号据立柱建物跡計測表

建物	梁間間	桁行間	上層梁間	下層梁間	上層桁行	下層桁行	棟出区
SH6	東側上層2間	東側下層4間	北側上層3間	北側下層5間半	5.70m	6.12m	11.10m F・G-25・26区
	西側上層2間	西側下層4間	南側上層3間	南側下層5間半	5.64m	6.00m	11.04m 方庭 N-E 50°
上層梁間柱間	下層梁間柱間	上層桁行柱間		下層桁行柱間			柱穴の長径×幅径×深さ(cm)
P20～P21	5.70m	P 1～P 2	1.48m	P 20～P 27	2.02m	P 1～P 19	1.92m P1.28×26×70 P7.47×36×54
P22～P28	2.98m	P 2～P 3	2.04m	P 27～P 26	1.94m	P 19～P 18	2.00m P2.27×34×40 P8.44×50×40
P28～P22	2.80m	P 3～P 4	2.08m	P 26～P 25	2.16m	P 18～P 17	1.96m P3.32×29×53 P9.35×31×61
P26～P29	2.94m	P 4～P 5	2.06m	P 21～P 22	2.00m	P 17～P 16	2.06m P4.26×19×29 P9.46×40×71
P29～P23	2.86m	P 15～P 16	2.04m	P 22～P 23	2.00m	P 16～P 15	2.10m P5.33×32×52 P2.39×35×60
P25～P24	5.64m	P 32～P 31	1.96m	P 23～P 24	2.00m	P 15～P 14	1.06m P6.39×32×42 P2.41×36×72
		P 31～P 30	1.98m			P 5～P 6	2.04m P7.47×34×54 P2.59×36×88
P30～P10	2.04m					P 6～P 7	1.90m P8.38×36×42 P8.31×30×123
P14～P13	3.94m					P 7～P 8	1.98m P9.43×36×103 P5.43×30×86
P13～P12	1.98m					P 8～P 9	2.04m P10.36×30×69 P6.47×39×69
P12～P11	2.06m					P 9～P 10	2.08m P11.36×25×49 P2.42×39×74
						P10～P11	1.00m P12.25×23×33 P8.42×40×92
							P13.28×22×25 P9.46×42×73
							P14.30×26×34 P10.34×32×55
							P15.30×28×76 P11.35×33×70
							P16.30×31×53 P12.38×33×57

第39表 古代 7号据立柱建物跡計測表

建物	梁間間	桁行間	上層梁間	下層梁間	上層桁行	下層桁行	棟出区
SH7	北側上層1間	東側桁行2間	3.29m		2.90m		F・G-22区
	南側上層1間	西側桁行2間	3.57m		2.92m		方庭 N-W 25°
上層梁間柱間	下層梁間柱間	上層桁行柱間		下層桁行柱間			柱穴の長径×幅径×深さ(cm)
P1～P2	3.29m	P 2～P 3	1.51m				P1.30×26×30
P4～P5	3.57m	P 3～P 4	1.39m				P2.30×26×20
		P 1～P 6	1.36m				P3.33×30×38
		P 6～P 5	1.56m				P4.29×26×27
							P5.23×21×13
							P6.22×19×10

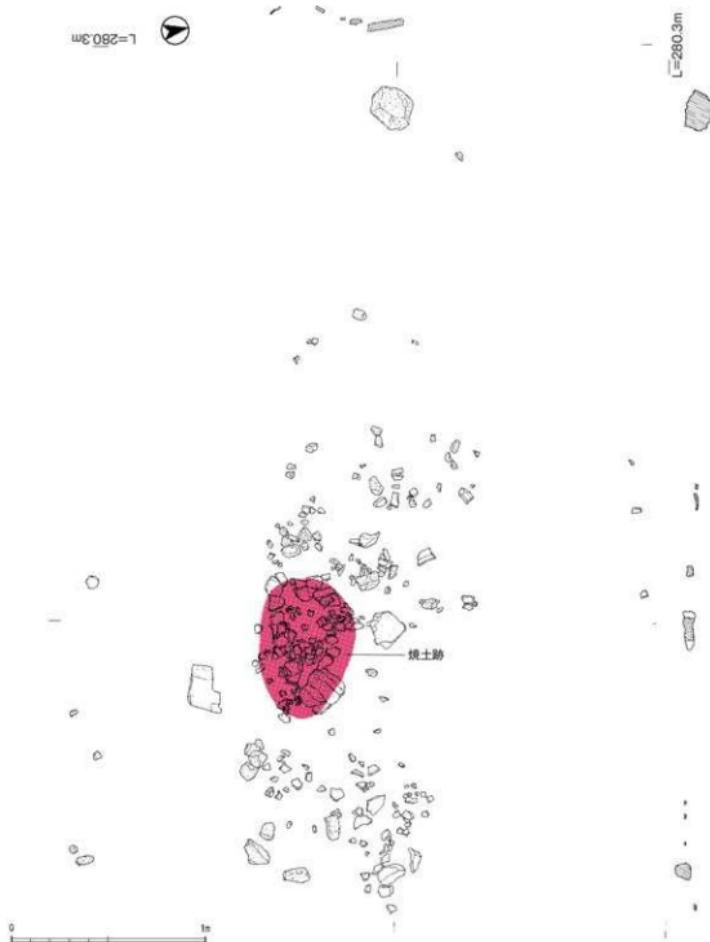
第40表 古代 8号据立柱建物跡計測表

建物	梁間間	桁行間	上層梁間	下層梁間	上層桁行	下層桁行	棟出区
SH8	東側上層1間	北側上層2間	2.20m		3.15m		F-62・63区
	西側上層1間	南側上層2間	1.98m		3.00m		方庭 N-W 50°
上層梁間柱間	下層梁間柱間	上層桁行柱間		下層桁行柱間			柱穴の長径×幅径×深さ(cm)
P1～P6	2.20m	P 2～P 3	1.58m				P1.25×25×26
P3～P4	1.98m	P 3～P 4	1.54m				P2.34×32×54
		P 1～P 6	1.20m				P3.23×22×50
		P 6～P 5	2.10m				P4.20×18×54
							P5.32×30×35
							P6.33×28×81

### 軽石集積（第171図）

東西約4m、南北約2mの範間に及ぶ。中心部には、厚さ3~4cmの板状の軽石が多く出土し、その周辺に土師壺の破片が集中している。土師壺口縁部の破片は比較的大きいが、胴部や底部の破片はそれに比べると小さい。

周辺の軽石の大きさは、こぶし大あるいは長さ10~15cmほどの立方体に近いものである。また、中心部より2.5m西側では、径が約30cmの大きな軽石が出土した。いずれの軽石も被熱のためか、非常にろく赤色化したものが多い。

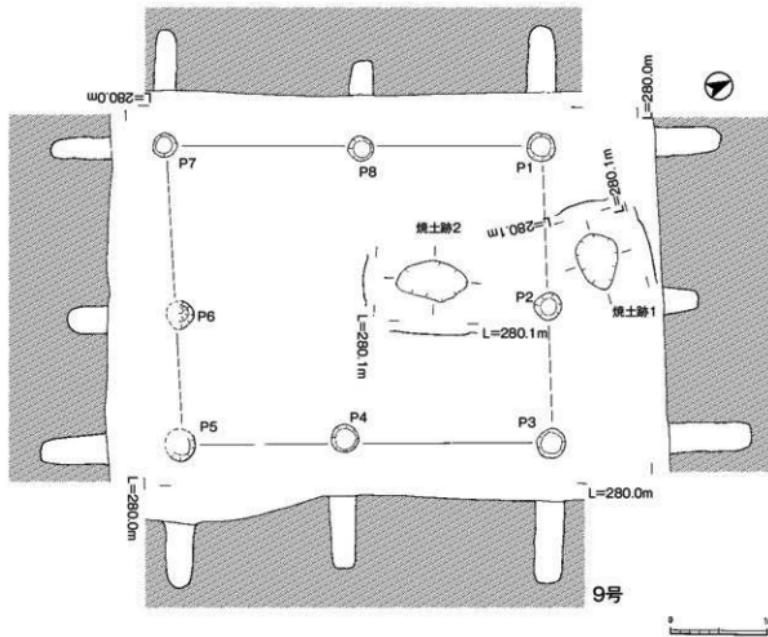


第171図 古代 軽石集積

### 9号掘立柱建物跡（第172図）

F-63区で検出された。2間×2間の建物で、大きさは3.05m×3.82mである。梁間と桁行の柱穴が整然と並ぶ。柱穴の深さは、最も浅いものが36cm、最も深いものは86cmである。P5とP6は、県道に隣接しており完掘できなかった。

本建物跡の内外に付随すると思われる焼土跡が2基検出された。焼土跡1の長軸は58cmではば東西方向をとり、短軸は41cmではば南北方向をとる。深さは3cmで浅い。焼土跡2の長軸は70cmではば北東-南西方向をとり、短軸は40cmではば東南-西北方向をとる。深さは2cmで浅い。



第172図 古代 9号掘立柱建物跡

第41表 古代 9号掘立柱建物跡計測表

建物	梁間	桁行	上梁間	下梁間	上桁行	下桁行	検出区
SH9	北側上梁2間 南側上梁2間	東側上梁2間 西側上梁2間	3.06m 3.09m	3.82m 3.87m			F-63区 方位 N-E 23°
上梁間柱間	下梁間柱間	上梁間柱間	下梁間柱間	上桁行柱間	下桁行柱間	柱穴の長辺×幅辺×深さ(cm)	
P1-P2	1.64m		P3-P4	2.11m		P1_31×28×68	
P2-P3	1.41m		P4-P5	1.71m		P2_29×26×37	
P5-P6	1.38m		P1-P8	1.84m		P3_31×29×86	
P6-P7	1.71m		P8-P7	2.03m		P4_29×28×78	
						P5_34×31×71	
						P6_30×27×43	
						P7_26×24×62	
						P8_27×24×36	

(2) 焼土跡

1号焼土跡（第173図）

H・I-21区で検出された。遺構内では土器片や礫、破碎した軽石が散在している。散在している軽石の表面は茶褐色を呈していることから被熱したと思われる。

2号焼土跡（第174図）

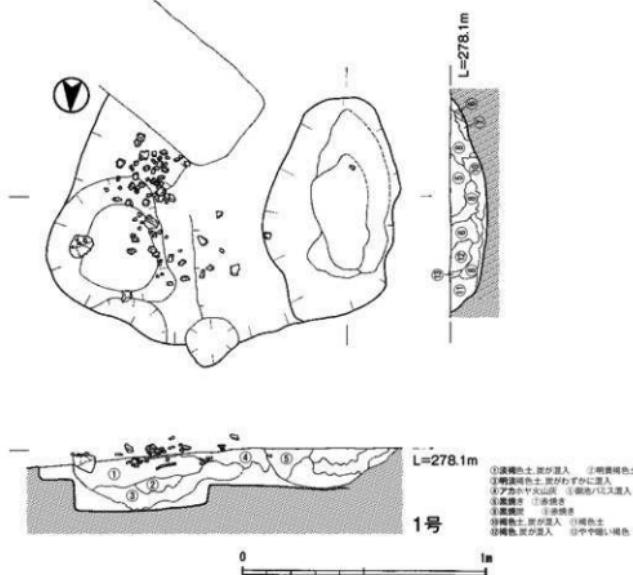
H・I-33区のIVa層で検出された。現代の搅乱により、本遺構は南北の間を搅乱溝で切られており全体の形状は残っていない。同一遺構の可能性が考えられる。また、断面の掘り込みのように見える部分は、IVa層の被熱範囲を示している。

3号焼土跡（第175図）

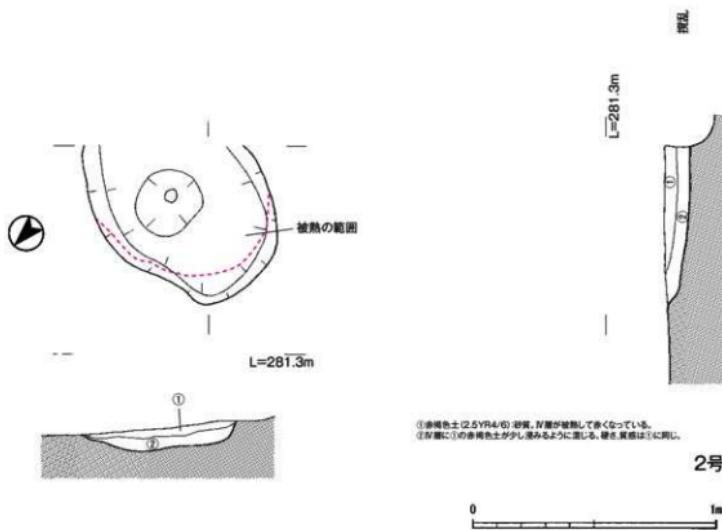
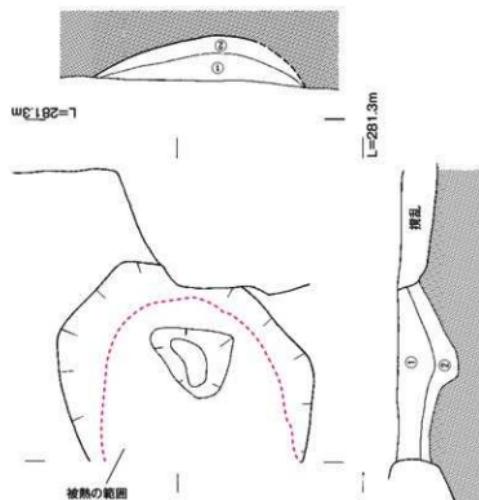
H-34区のIVa層で検出された。図面中の赤線内は赤褐色を呈しており、被熱の中心と考えられる。その周りは暗褐色を呈し、IVa層がわずかに赤褐色化した層で熱の伝わった範囲を示す。

4号焼土跡（第175図）

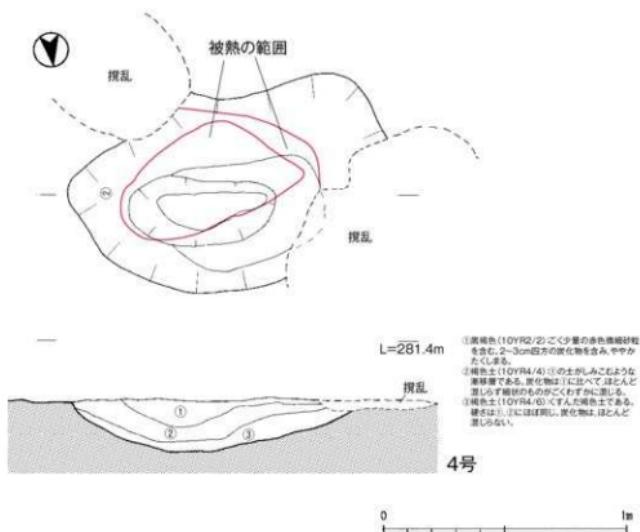
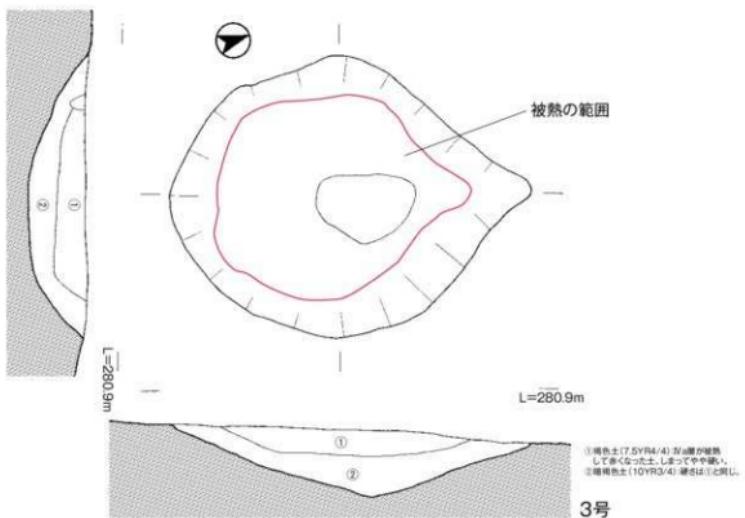
I-35区のIVb層で検出された。遺構内から6点の土器片が出土した。遺構が一部搅乱で切られている。



第173図 古代 1号焼土跡



第174図 古代 2号焼土跡



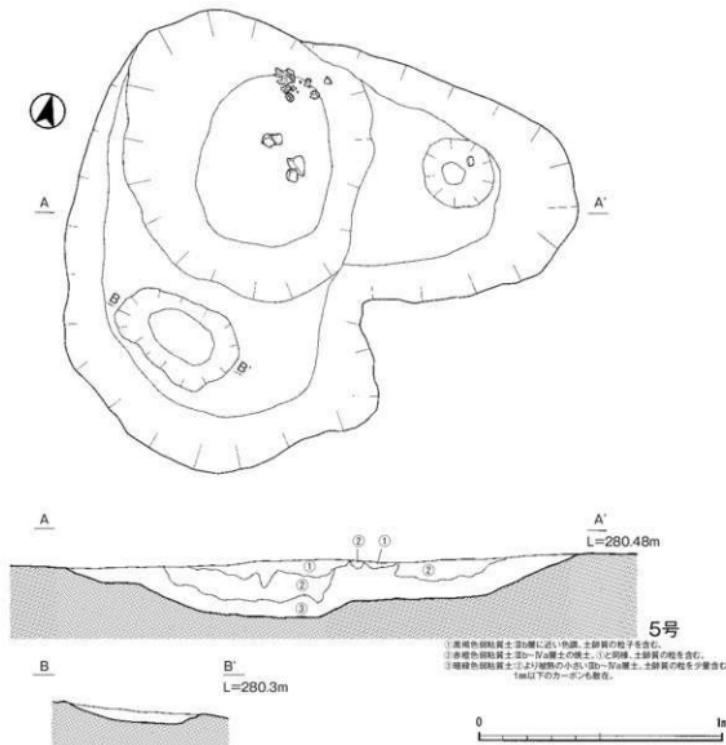
第175図 古代 3号, 4号焼土跡

### 5号焼土跡（第176図）

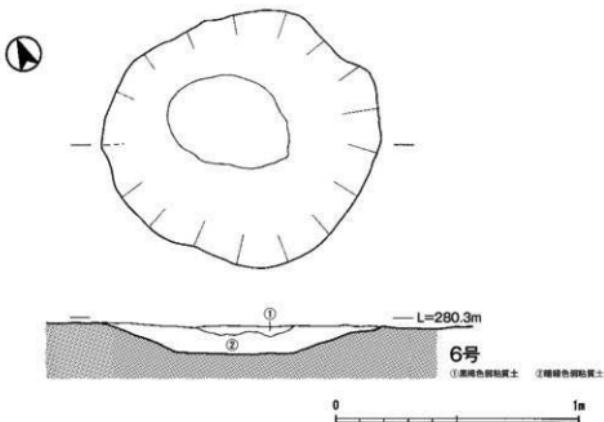
E-63区のⅢb層で検出した。東西方向に2.1m、南北方向に1.9mの範囲にわたる。遺構内炭化物の放射性炭素年代測定の結果は $3,490 \pm 30$  (yrBP) で、縄文時代後期後葉に相当する時期であるが、遺物は軽石や土師器片などが出土している。

### 6号焼土跡（第177図）

E-63・64区のⅢb層で検出した。形状はやや円形で径が1.1mある。



第176図 古代 5号焼土跡



第177図 古代 6号焼土跡

### (3) 溝状遺構

いずれも途中で切れているため、つながりは確認できない。そのためここでは個々の溝状遺構として扱う。

なお、溝状遺構として扱っているため、人為的に掘り込んでいるもの以外についてもここではあえて掘り込みという言葉を用いた。

#### 1号溝状遺構（第178図）

H・G-20区で検出された。搅乱を受けているため残存状況が良好ではない。検出状況の最大幅約1.1m、深さ約20cm程度の掘り込みがみられるもので、北東-南西方向に約7.5mの長さが残存する。硬化面は確認できなかった。

#### 2号溝状遺構（第178図）

E～H-20・21区で検出された。最大幅約1.8m、深さ約70cm程度の掘り込みがみられるもので、北東-南西方向に約31mの長さが残存する。硬化面は確認できなかった。本遺構のE・F-21区内では、土師器片、木炭片、焼けた軽石が出土した。

#### 3号溝状遺構（第178図）

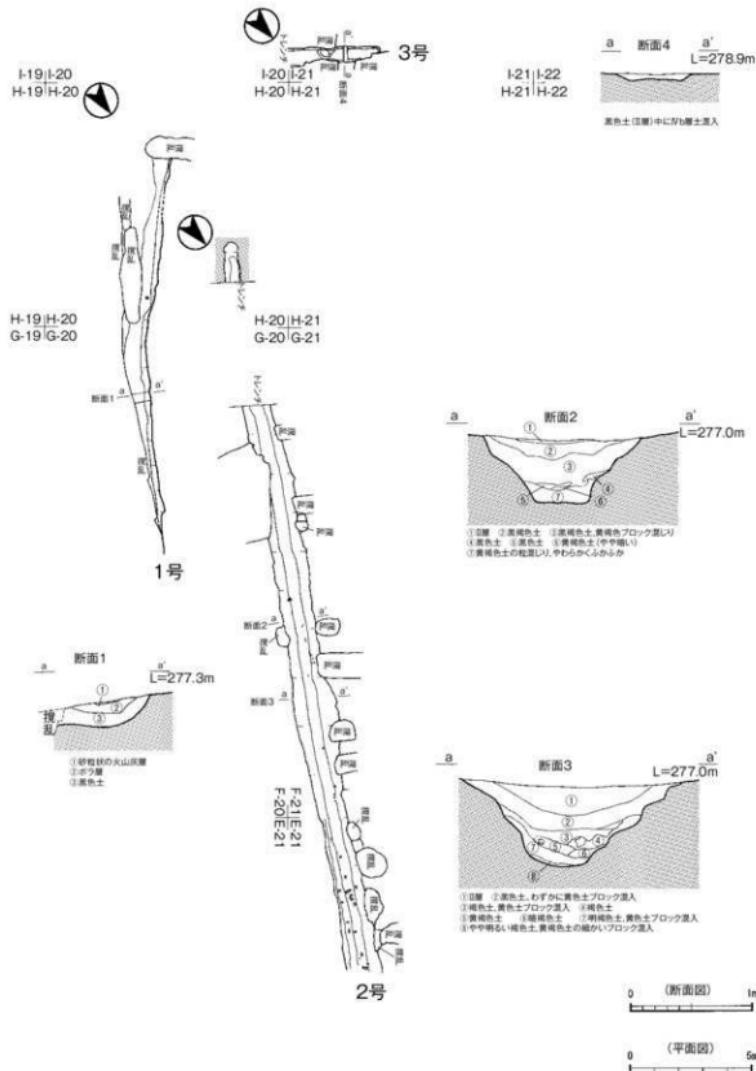
I-21区で検出された。最大幅約75cm、深さ約5cm程度の掘り込みがみられるもので、東南-西北方向に約3.7mの長さが残存する。硬化面は確認できなかった。

#### 4号溝状遺構（第179図）

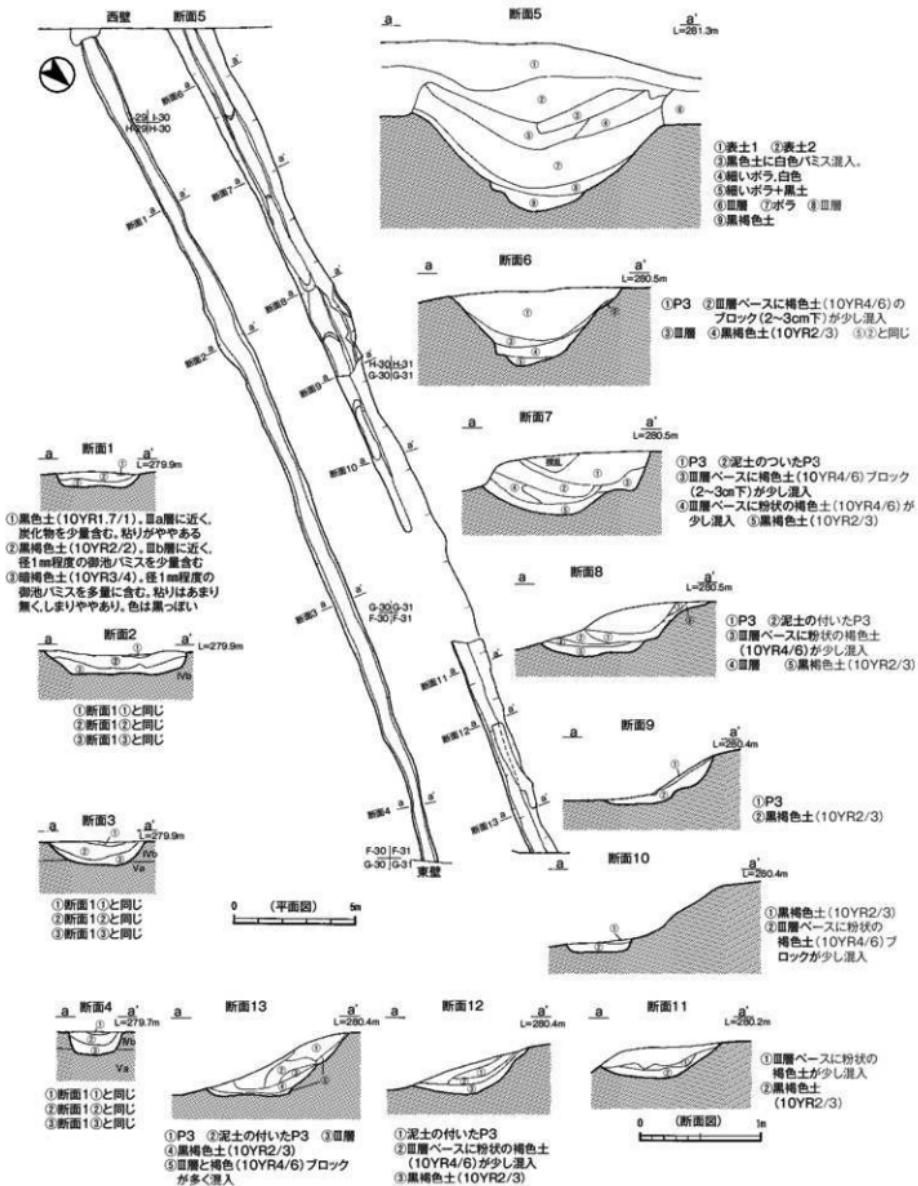
E～I-29～31区で検出された。最大幅約1.2m、深さ約20cm程度の掘り込みがみられるもので、北東-南西方向に約37mの長さが残存する。硬化面は確認できなかった。

#### 5号溝状遺構（第179図）

F～I-30・31区で検出された。最大幅約1.9m、深さ約60cm程度の掘り込みがみられるもので、北東-南西方向に約37mの長さが残存する。硬化面は確認できなかった。



第178図 古代 1号～3号溝状遺構・断面図

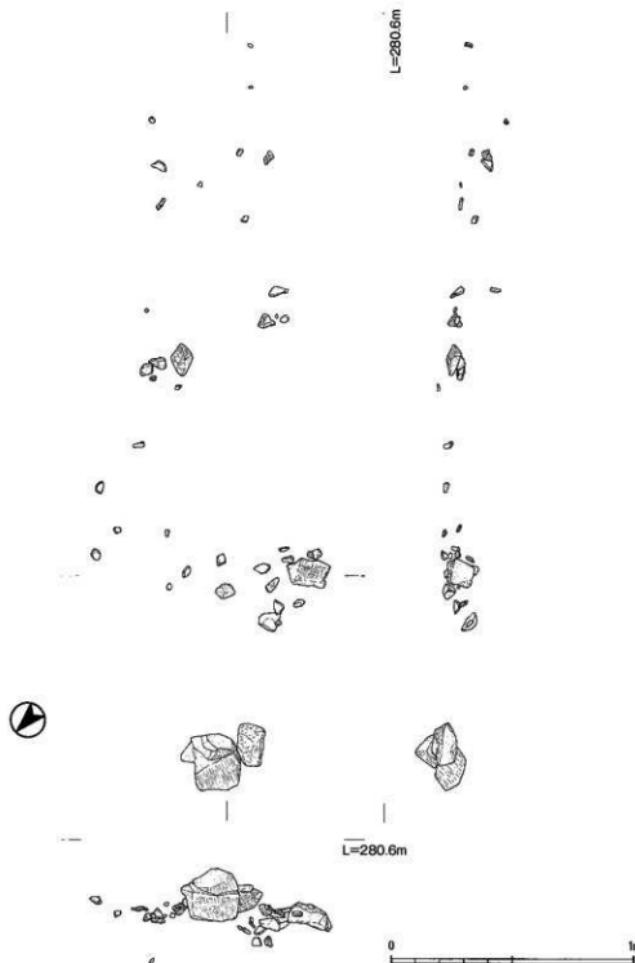


第179図 古代 4号、5号溝状構造・断面図

(4) 軽石配石（第180図）

G-34区で検出された。中心部から北方向へ約1.2m離れたところに20~30cm四方の赤色化した大きな軽石がある。中心部で軽石の破片が散在しており、その周辺からは土師器や土師甕などがほぼ同レベルで出土した。

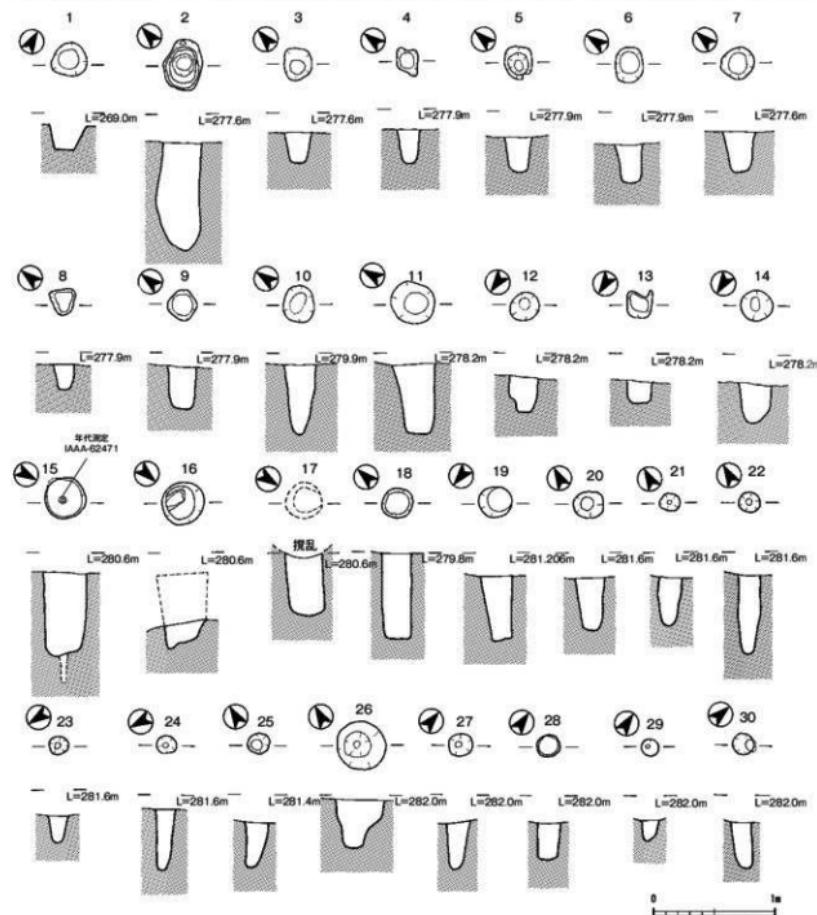
また、遺構内では炭化物も多く散在していた。当時周辺で火を焚くなどして、その際に何かの用途で使用した軽石と燃えかすである炭化物が散在した可能性が考えられる。



第180図 古代 軽石配石

### (5) ピット (第181図)

30基を掲載した。ピット15内の炭化物の放射性炭素年代測定結果は、 $1,250 \pm 30$  (yrBP) である。



第181図 古代 ピット

第42表 古代 ピット計測表

	斜	斜	傾	傾	斜	傾	斜	斜	斜	傾	傾	斜	傾	斜	斜	斜	傾	傾	斜	傾	傾	斜	傾	傾	傾	傾	傾	傾	傾	傾	
1	29.5	24.5	21.5	6	30.5	25.0	34.0	11	37.0	34.5	59.0	16	36.0	33.5	19.0	21	17.0	14.5	41.0	26	42.0	39.5	40.0								
2	43.5	32.5	89.5	7	28.0	25.0	33.5	12	25.5	22.5	30.5	17	31.5	28.5	52.0	22	17.5	17.5	66.5	27	20.5	19.5	42.5								
3	27.5	22.5	25.5	8	23.5	21.0	21.0	13	24.0	18.5	20.0	18	27.5	24.5	72.0	23	16.5	15.5	23.0	28	20.0	18.5	33.0								
4	27.5	19.5	29.0	9	26.5	24.0	37.0	14	26.0	25.5	34.5	19	27.0	25.5	54.0	24	16.0	14.5	51.5	29	14.5	14.0	18.0								
5	27.5	24.0	30.0	10	31.0	25.5	57.5	15	35.5	32.0	70.0	20	24.5	22.0	44.0	25	19.0	16.5	38.0	30	17.5	17.0	29.5								

## (6) 遺構内遺物

軽石集積、軽石配石等で土器や軽石製品が出土した。遺物について以下にまとめた。

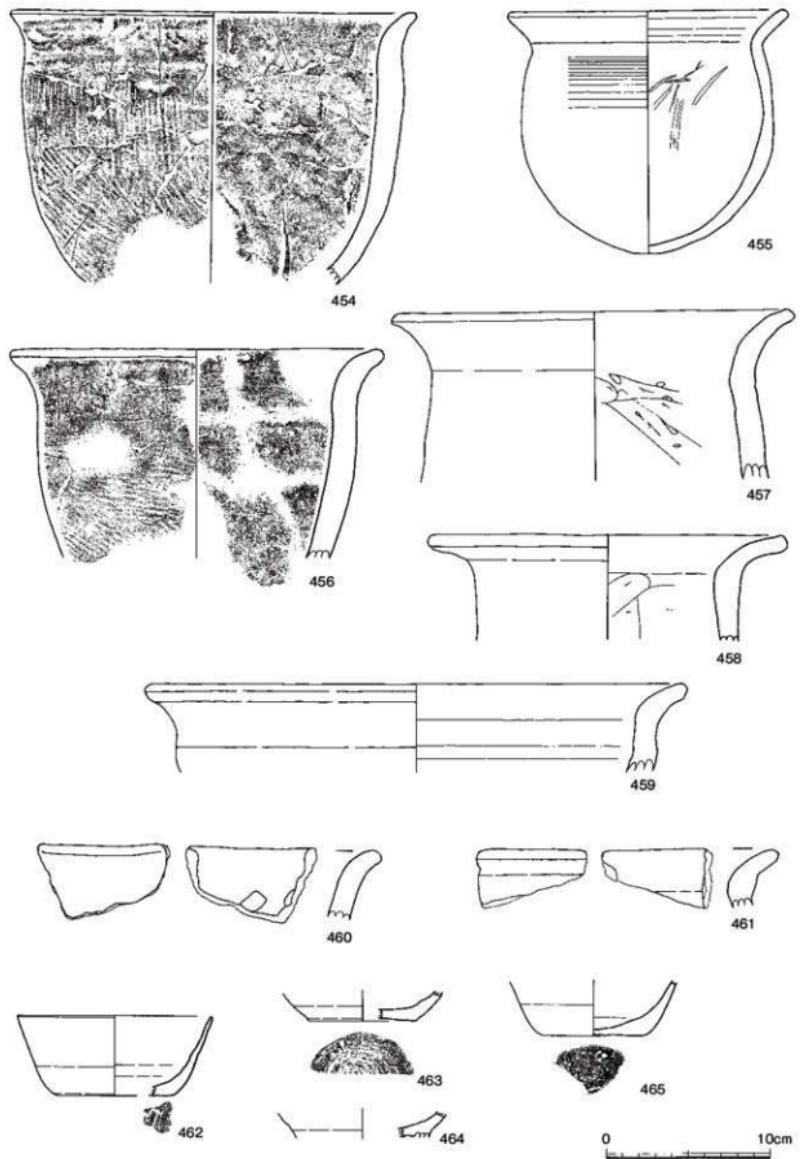
### 軽石集積内出土遺物（第182～第184図454～474）

454は壺形土器である。器形は口縁部が短く、頸部で外反するものである。器面は外面が頸部から口縁部にかけてヨコナデで、頸部から下はヘラ先で縦位に、胴部から下は斜位に撫でた調整である。内面はヨコナデである。また、器壁は厚く作られている。口縁部は煤の影響で黒褐色部分もある。455は壺形土器である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から底部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、胴部から底部は搔き上げである。また、器壁は薄く作られている。456は壺形土器である。器形は口縁部が頸部で外反するものである。器面は外面が胴部から口縁部にかけてヨコナデで、胴部から下はヘラ先で横位に、その下は斜位に撫でた調整である。内面はヨコナデである。また、器壁は厚く作られている。457は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で丸く外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ搔き上げがみられるが稜線ははっきりしない。また、器壁は胴部にかけて厚く作られている。458は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位の弱い搔き上げで弱い稜線がみられる。459は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、内側の稜線がみられない。460は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、内側の稜線がみられない。461は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、内側の稜線がみられない。462は壊である。底部はヘラ切り離しで、立ち上がりは直行の外開きである。器面調整は輶轆の水引がみられる。463は壊の底部である。底部はヘラ切り離しで、立ち上がりは直行の外開きである。器面調整は輶轆の水引がみられる。464は壊の底部である。立ち上がりは直行の外開きで、高台部は欠損している。器面調整は輶轆の水引がみられる。465はナデ仕上げの底部で、胴部は直行しながら立ち上がり、口縁部も直行して外開きである。器面調整は輶轆の水引である。

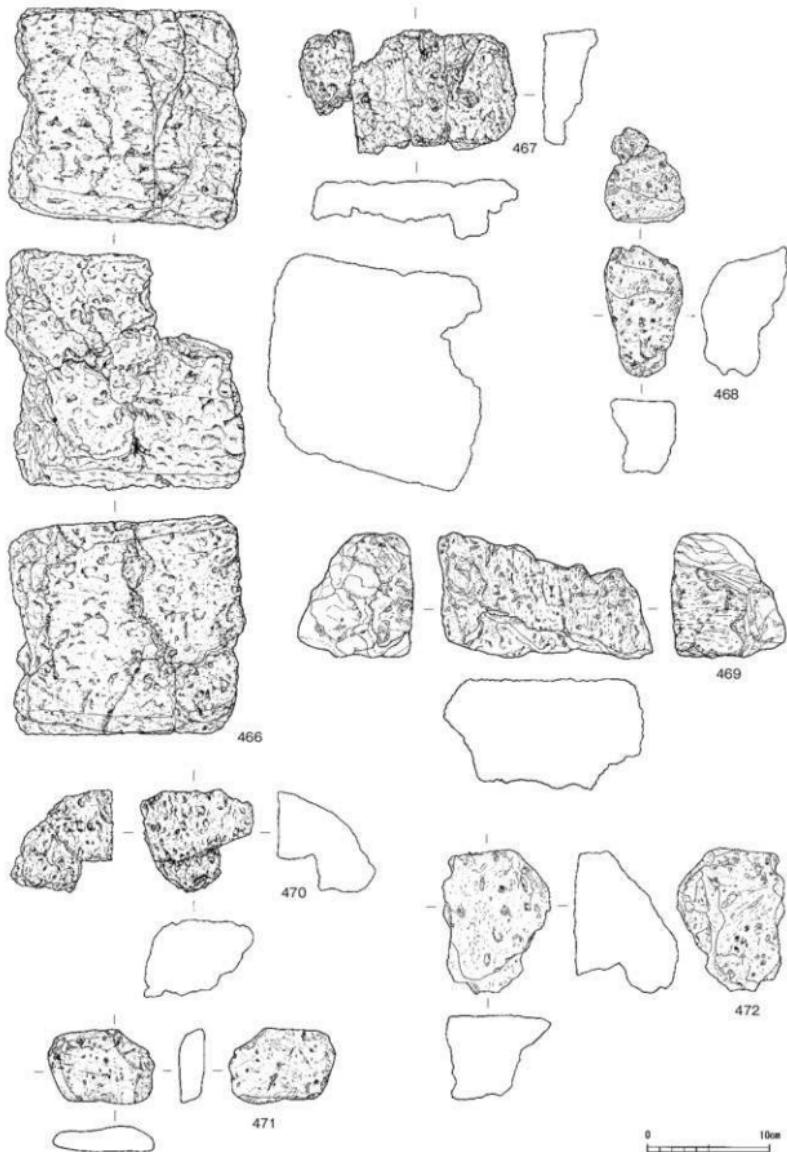
軽石製品を9点図示した。466は4面を丁寧に加工した角筒状の形である。各面は3面が平坦で、1面が内側に窪んでいる。角は1辺が丸く加工され他は鋭い角を持っている。各面の色調は1面に赤茶褐色がみられ、これは火を受けた面と思われる。また、両端は欠損している。

### 軽石配石内出土遺物（第184図475・476）

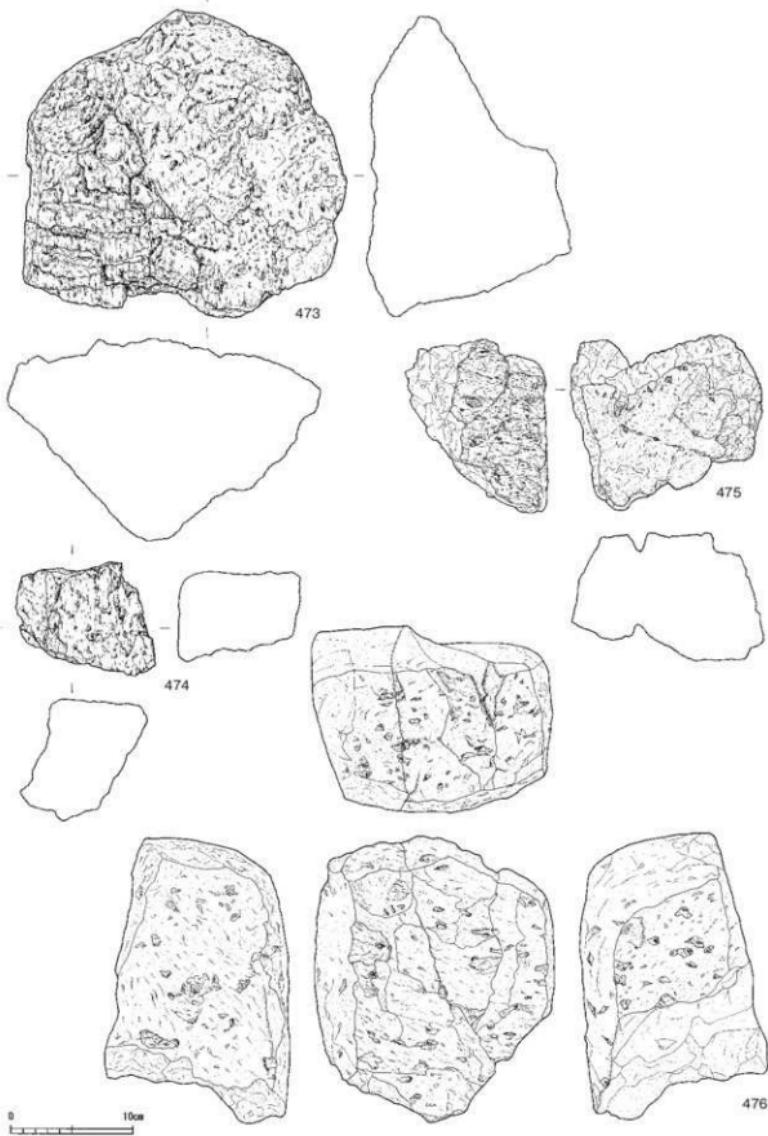
軽石製品を2点図示した。475は3面が平坦に加工され、他の面は粗く加工されているが、欠損した面になっている。各面の色調は1面に赤茶褐色がみられ、これは火を受けた面と思われる。



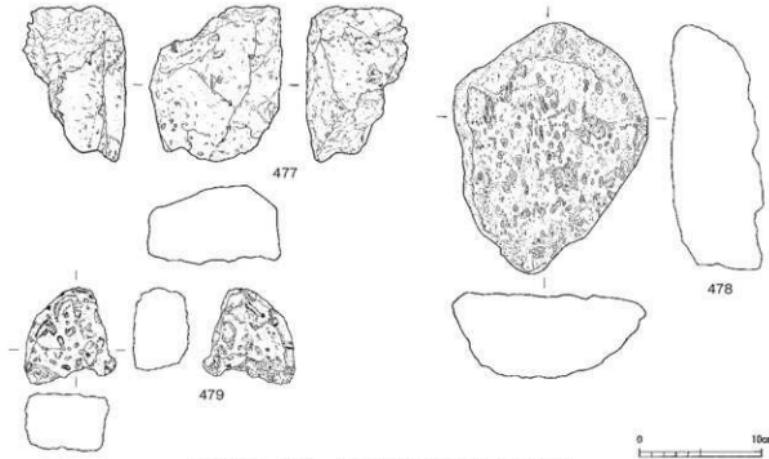
第182図 古代 軽石集積内出土土器



第183図 古代 軽石集積内出土軽石製品



第184図 古代 軽石集積及び軽石配石内出土軽石製品



第185図 古代 2号溝状遺構内出土軽石製品

#### 2号溝状遺構内出土遺物（第185図477～479）

軽石製品を3点図示した。477は金属性の道具で粗く削り取って面を整形している。その面は3面みられ、他の面は欠損部の面である。若干黄色がかったり、火を受けたと思われる。

479は円形に加工した四分の一の部分と思われる。上下は平坦に、円周部は丸く加工されている。角の一部に赤茶褐色の部分が円周状にみられる。用途は不明である。

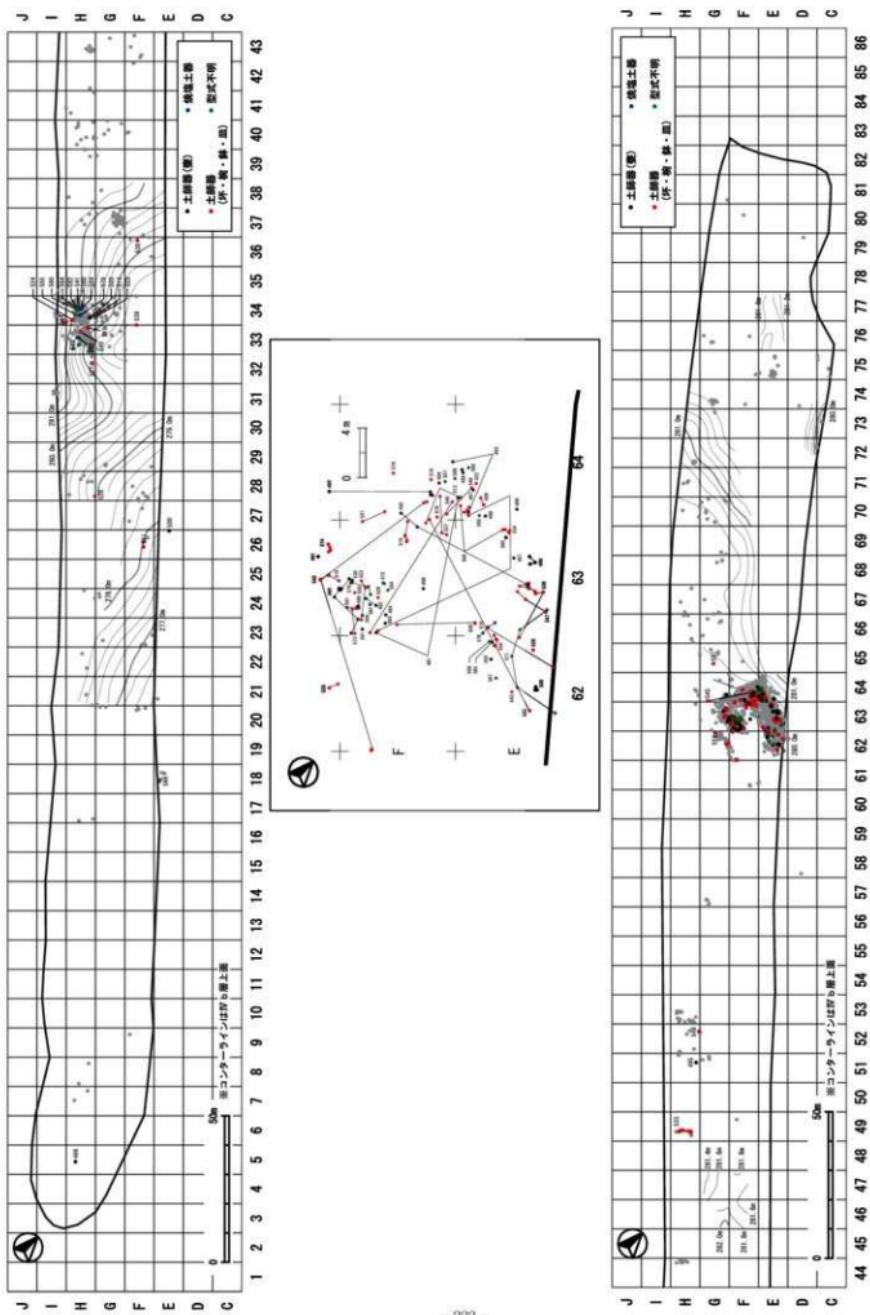
第43表 古代 軽石集積内出土土器観察表

排団番号	国番号	分類	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考
182	454	変形土器	ナデ	ナデ	赤茶褐色	灰茶褐色	長・石・角	硬質	口径24.4cm
	455	変形土器	ナデ	ナデ	白茶褐色	白茶褐色	長・石・角	硬質	口径17.2cm
	456	変形土器	ナデ	ナデ	灰茶褐色	灰色	長・石・角	硬質	口径29.9cm
	457	変形土器	ナデ	ナデ	明赤褐色	暗赤褐色	長・石・角	硬質	口径24.4cm
	458	変形土器	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長・石・角	硬質	口径22.2cm
	459	変形土器	ナデ	ナデ	赤黒褐色	赤黒褐色	長・石・角	硬質	口径33.3cm
	460	変形土器	ナデ	ナデ	黒色	黒色	長・石・角	硬質	
	461	変形土器	ナデ	ナデ	赤茶色	赤茶色	長・石・角	硬質	
	462	土師器环	輪縁の水引き	輪縁の水引き	明茶褐色	明茶褐色	粒の小さい粘土	硬質	口径8cm 高さ2cm
	463	土師器环	輪縁の水引き	輪縁の水引き	明茶褐色	明茶褐色	粒の小さい粘土	硬質	底径6.8cm
	464	土師器环	輪縁の水引き	輪縁の水引き	赤茶褐色	赤茶褐色	粒の小さい粘土	硬質	
	465	土師器环	輪縁の水引き	輪縁の水引き	茶褐色	茶褐色	粒の小さい粘土	硬質	底径6.2cm

第44表 古代 軽石集積内ほか出土軽石製品観察表

排団番号	国番号	取上番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
183	466	70	軽石製品	軽石	19.6	19.9	18.2	2024.0	軽石集積内
	467	日 佐 2 3 2	軽石製品	軽石	10.2	17.9	4.9	278.5	軽石集積内
	468	9171	軽石製品	軽石	10.8	6.5	7.0	131.0	軽石集積内
	469	9368	軽石製品	軽石	10.3	17.5	9.7	467.0	軽石集積内
184	470	4631 4633	軽石製品	軽石	8.4	9.4	8.4	113.0	軽石集積内
	471	3010	軽石製品	軽石	6.2	8.8	2.2	26.5	軽石集積内
	472	69	軽石製品	軽石	11.8	8.3	8.8	239.5	軽石集積内
	473	1	軽石製品	軽石	25.3	26.6	16.9	3170.0	軽石集積内
185	474	1585	軽石製品	軽石	9.3	11.5	10.1	323.0	軽石集積内
	475	軽石②(軽石③)	軽石製品	軽石	14.3	15.6	11.5	590.5	軽石配石内
	476	軽石①(軽石④)	軽石製品	軽石	23.5	19.8	15.3	1811.0	軽石配石内
	477	6494	軽石製品	軽石	12.9	10.9	8.5	479.5	2号溝状遺構内
185	478	6493	軽石製品	軽石	20.8	16.1	7.7	798.5	2号溝状遺構内
	479	6505	軽石製品	軽石	7.9	7.6	4.8	91.5	2号溝状遺構内

第186図 古代～中世 土器出土状況図



### 3 遺物

包含層の出土遺物は壺、土師器の壺・塊、焼塙土器が出土している。

#### 壺

壺は大きく薄手と厚手に分かれる。

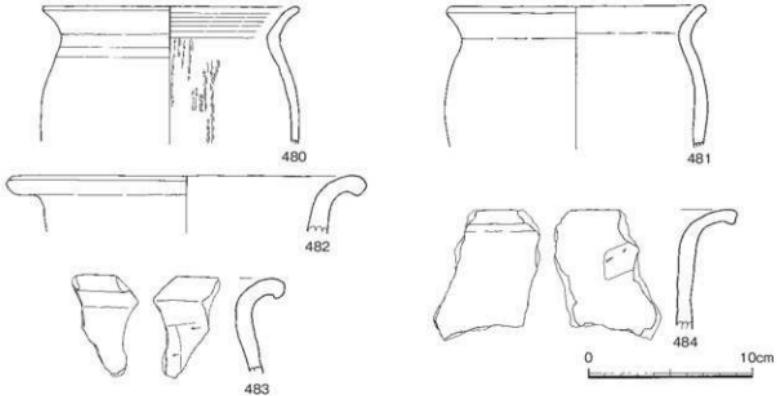
#### 薄手壺（第187図480～484）

480は壺形土器である。器形は口縁部が長く、頸部で締まり外反するものである。器面は外面が口縁部から胴部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、胴部から底部は搔き上げである。また、器壁は薄く作られている。色調は外面が赤茶褐色で、内面が暗灰茶褐色である。481は壺形土器である。器形は口縁部が長く、頸部で締まり外反するものである。器面は外面が口縁部から胴部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、胴部は搔き上げである。また、器壁は薄く作られている。色調は内外面とも黄茶褐色である。482は壺形土器である。器形は口縁部が長く下がり気味で、頸部で外反するものである。器面は内外面ヨコナデである。色調は内外面とも茶褐色である。483は壺形土器である。器形は口縁部が長く下がり気味で、頸部で外反するものである。器面は内外面ヨコナデである。色調は内外面とも茶褐色である。胎土には石英、長石、角閃石等が含まれ、焼成度はやや硬質である。484は壺形土器である。口縁部は長く、口唇部が下がり巻き気味である。器形は頸部で外反するものである。器面は内外面ヨコナデである。色調は内外面とも暗茶褐色である。

#### 厚手壺A（第188図485～497）

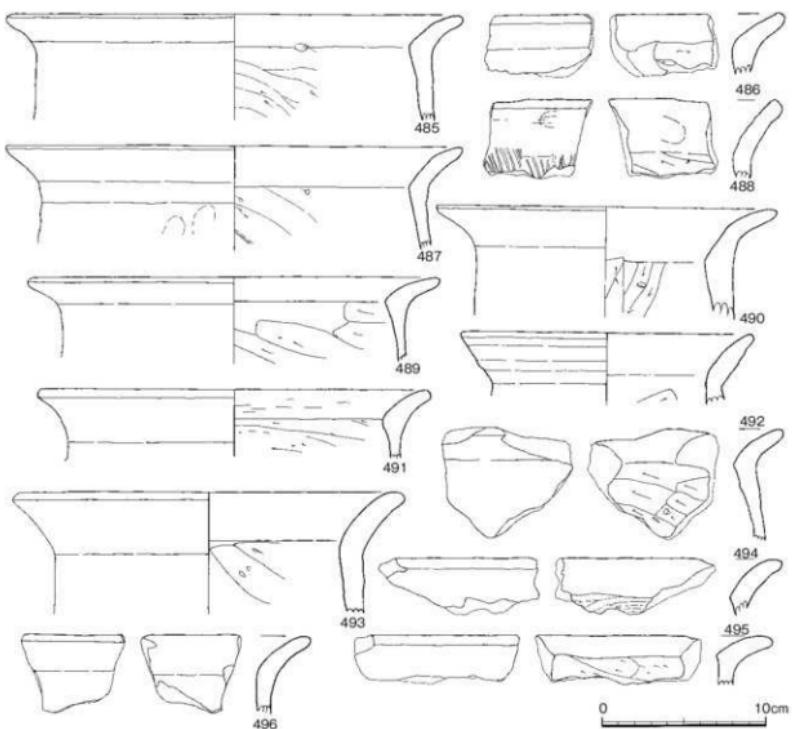
このタイプは口縁部が長く頭部内側に稜線がみられるものである。

485は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ搔き上げで稜線がみられる。また、器壁は胴部にかけて薄く作られている。色調は外面が赤茶褐色で、内面が暗茶褐色である。486は壺形土器の口縁部である。器形は口縁部が長く、頸部で締まり外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は横位のヘラ搔き上げで稜線がみられる。色調は内外面とも赤茶褐色である。胎土には石英、長石、角閃石等が含まれ、焼成度はやや硬質である。487は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で締まり外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、胴部は横位のヘラ搔き上げで稜線がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面が灰茶褐色である。488は壺形土器の口縁部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から胴部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、胴部は横位のヘラ搔き上げで稜線がみられる。色調は外面が茶褐色で、内面が赤茶褐色である。489は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけて丁寧なヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ搔き上げで稜線がみられる。また、器壁は胴部にかけて薄く作られている。色調は外面が赤茶褐色で、内面が赤茶褐色に黒斑がみられる。490は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。



第187図 古代 土器（薄手壺）

内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位の搔き上げで稜線がみられる。色調は外面が暗茶褐色で黒斑がみられ、内面は暗茶褐色である。491は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ搔き上げで稜線がみられる。また、器壁は胴部に向かって薄く作られている。色調は外面が暗赤茶褐色で黒斑がみられ、内面は暗茶褐色である。492は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけて粗いヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ搔き上げで若干の稜線がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面が暗茶褐色である。493は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ搔き上げで稜線がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面が暗茶褐色である。494は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ搔き上げで稜線がみられる。また、器壁は胴部に向かって薄く作られている。色調は外面が赤茶褐色で、内面が暗茶褐色である。495は壺形土器の口縁部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面がヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ搔き上げで稜線がみられる。色調は内外面とも茶褐色である。496は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ搔き上げで稜線ではなく丸みがみられる。色調は内外面とも明茶褐色である。497は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ搔き上げで稜線がみられる。色調は外面が黒赤茶褐色で、内面が口縁部の茶褐色と頸部の暗茶褐色である。

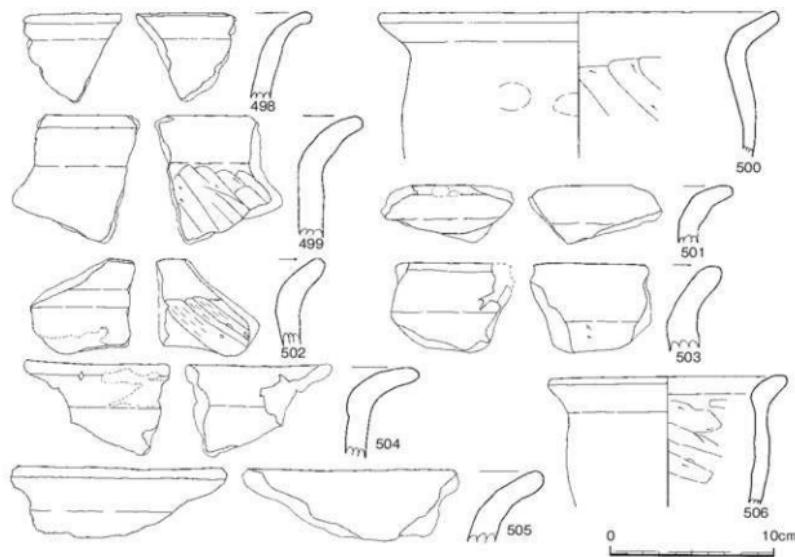


第188図 古代 土器（厚手壺A）

#### 厚手壺B（第189図498～506）

このタイプは口縁部内側に稜線がないタイプである。

498は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで稜線がみられない。また、器壁は胴部にかけて厚く作られている。色調は外面が赤茶褐色で、内面が茶褐色である。499は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から胴部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部から胴部は斜位のヘラ搔き上げで内側の稜線がみられない。また、器壁は胴部にかけて薄く作られている。色調は外面が茶褐色で、内面が明赤茶褐色である。500は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から胴部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部から胴部は斜位のヘラ搔き上げで内側の稜線がみられない。また、器壁は胴部にかけて薄く作られている。色調は外面が茶褐色に黒斑がみられ、内面が暗茶褐色である。501は壺形土器の口縁部から頸部である。器



第189図 古代 土器（厚手甕B）

形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部から胴部は斜位のヘラ搔き上げで内側の稜線がみられない。色調は外面が茶褐色で黒斑がみられる。内面は明赤茶褐色である。502は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部から胴部は斜位のヘラ搔き上げで内側の稜線がみられない。また、器壁は胴部にかけて厚く作られている。色調は外面が茶褐色で黒斑がみられる。内面は明赤茶褐色である。503は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部から胴部は斜位のヘラ搔き上げで内側の稜線がみられない。色調は外面が茶褐色で黒斑がみられる。内面は明赤茶褐色である。504は壺形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部から胴部は斜位のヘラ搔き上げで内側の稜線がみられない。また、器壁は胴部にかけて厚く作られている。色調は外面が茶褐色で黒斑がみられる。内面は灰茶褐色である。505は壺形土器の口縁部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は内外面ともヨコナデである。色調は外面が茶褐色で煤の黒色がみられ、内面が茶褐色である。506は小形の壺形土器の口縁部から胴部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部から胴部は斜位のヘラ搔き上げで内側の稜線がみられない。色調は外面が明赤茶褐色で、内面は明茶褐色である。

## 土師器坏 (第190図507~532)

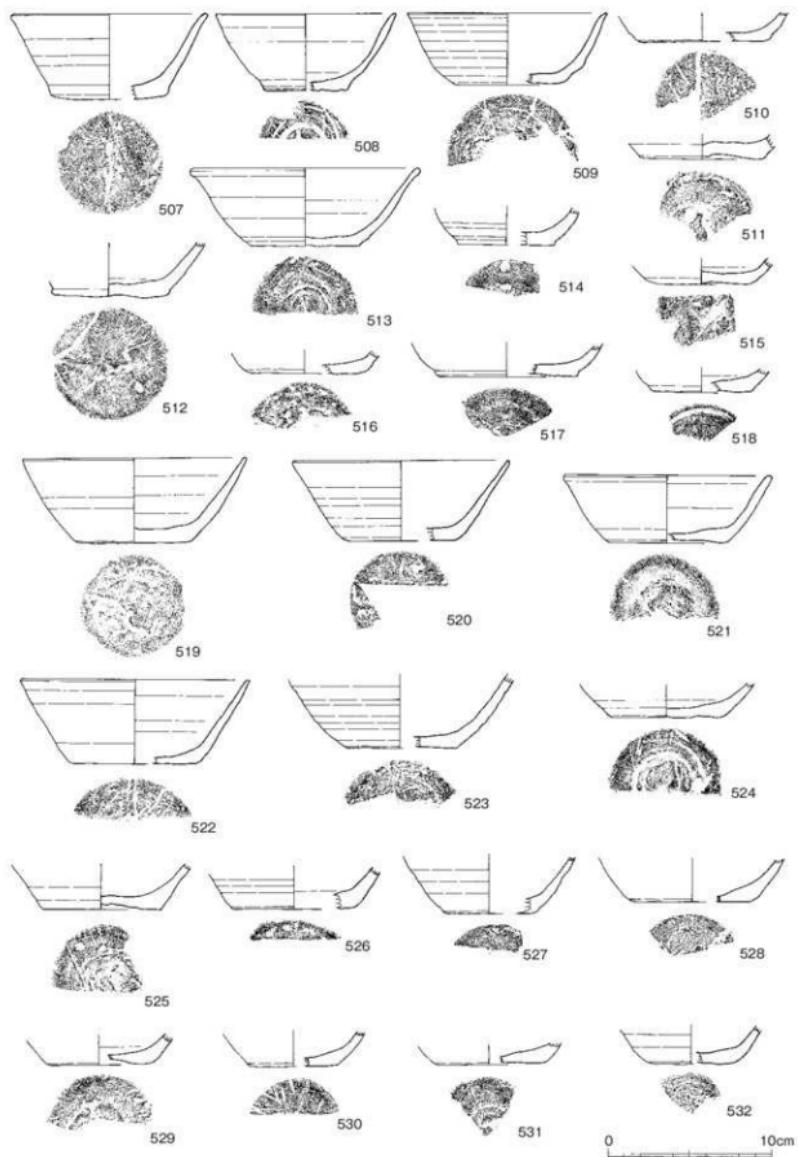
坏は底部と胴部の間に充実高台気味に段をもつものともたないものに分けられる。前者は507~518で、後者が519~532である。

### 段をもつもの

507はナデ仕上げの底部で、胴部は直行しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。508はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。509はヘラ切り離しの底部で、胴部は湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。510はナデ仕上げの底部で、胴部は湾曲しながら立ち上がる器形である。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面白茶褐色である。511はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明灰褐色である。512はヘラ切り離し後にナデ調整をした底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。513はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面白茶褐色である。514はナデ仕上げの底部で、胴部は湾曲しながら立ち上がる器形である。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。515はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。516はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面白茶褐色である。517はナデ仕上げの底部で、胴部は湾曲しながら立ち上がる器形である。器面調整はヘラナデである。色調は内外面明茶褐色である。518はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。

### 段がないもの

519はヘラ切り離しのナデ調整底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色に黒斑がみられる。520はヘラ切り離しのナデ調整底部で、胴部は直線状に立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。521はヘラ切り離しのナデ調整底部で、胴部は直線状に立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面白桃茶褐色である。522はヘラ切り離しのナデ調整底部で、胴部は直線状に立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面白茶褐色である。523はヘラ切り離しの底部で、胴部は湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。524はヘラ切り離しの底部で中央部が上がっている。胴部は直行しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面灰茶褐色である。525はヘラ切り離しの底部で中央部が上がっている。胴部は直行しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面白茶褐色である。526はヘラ切り離しの底部である。色調は内外面茶褐色である。527はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。528はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや



第190図 古代 土器（土師器坏）

湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。529はヘラ切り離しナデ仕上げの底部で中央部が上がっている。胴部は直行しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面灰茶褐色である。530はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。531はヘラ切り離しの底部である。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。532はヘラ切り離しナデ仕上げの底部で、胴部は直行しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面暗茶褐色である。

#### 土師器塊（第191図533～548）

塊は無色彩と内赤土器と内黒土器といわれる黒色土器が出土している。

##### 塊（533～542）

533はヘラ切り離しの後、三角断面の低い高台をついている。底部にはヘラによる記号が1つ刻まれている。胴部から口縁部の立ち上がりは直線状に外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも明茶褐色である。534はヘラ切り離しの後、半円断面の低い高台をついている。胴部から口縁部の立ち上がりは直線状に外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも茶褐色である。535はヘラ切り離しの後、三角断面の低い高台をついている。底部にはヘラによる「十」印がみられる。胴部から口縁部の立ち上がりは直線状に外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも明茶褐色である。536はヘラ切り離しの後、細い半円断面の低い高台をついている。胴部から口縁部の立ち上がりは直線状に外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも黄茶褐色である。537は半円断面の低い高台をついている。胴部の立ち上がりは直線状に外に開いている。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも茶褐色である。538はヘラ切り離しの後、半円断面のやや高い高台をついている。胴部の立ち上がりは直線状に外に開いている。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも灰茶褐色である。539はヘラ切り離しの後、半円断面のやや高い高台をついている。胴部から口縁部の立ち上がりは直線状に外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも明茶褐色である。540はヘラ切り離しの後、半円断面のやや高い高台をついている。胴部の立ち上がりは直線状に外に開いている。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも明茶褐色である。541は塊である。底部の高台は外開きに貼り付け、胴部の立ち上がりは球状に作っている。器面調整はヘラナデの刺し痕がみられる。色調は灰白色である。

542は特殊塊である。器形は高い高台に直線的に開く外側に張り出しを廻らしているものである。器面調整はナデ調整で、色調は内外面とも灰茶褐色に黒斑がみられる。

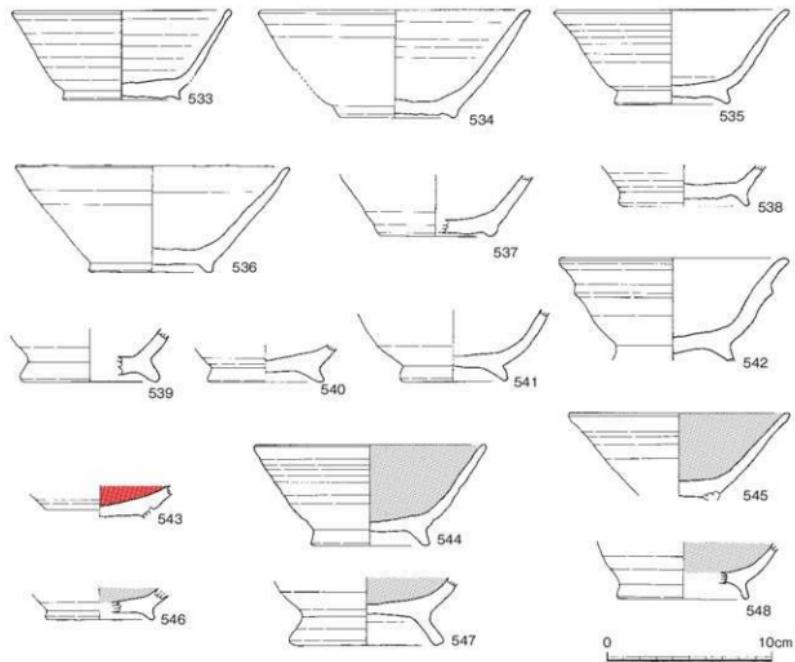
##### 内赤土器（543）

543は高台が欠損しているもので、胴部の立ち上がりは直線状に外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は内面に赤色の部分が残っている。外面は明茶褐色である。

##### 内黒土器（544～548）

544はヘラ切り離しの後、細い半円断面の低い高台をついている。胴部から口縁部の立ち上がりはやや湾曲状に外に開いている。器面調整は外面に轆轤の水引がみられ、内面に研磨がみられる。色調は外面が黄茶褐色で、内面は黒色である。545はヘラ切り離しの後、高台をついている。胴部か

ら口縁部の立ち上がりは直線状に外開きをしている。器面調整は外面に輶轔の水引がみられ、内面に研磨がみられる。色調は外面が白茶褐色に黒帯斑がみられ、内面は黒色である。546はヘラ切り離しの後、細い半円断面の低い高台をつけている。胸部の立ち上がりはやや湾曲状に外開きをしている。器面調整は外面に輶轔の水引がみられ、内面に研磨がみられる。色調は外面が白茶褐色で、内面は黒色である。547はヘラ切り離しの後、細い半円断面の高い高台をつけている。胸部の立ち上がりはやや湾曲状に外開きをしている。器面調整は外面に輶轔の水引がみられ、内面に研磨がみられる。色調は外面が黄茶褐色で、内面は黒色である。548はヘラ切り離しの後、細い半円断面の高い高台をつけている。胸部の立ち上がりはやや湾曲状に外開きをしている。器面調整は外面に輶轔の水引がみられ、内面に研磨がみられる。色調は外面が茶褐色で、内面は黒色である。

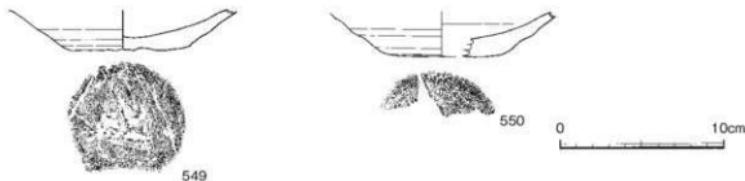


第191図 古代 土器（土師器塊）

#### 土師器皿（第192図549・550）

やや大きめで口縁部が大きく開く器形のものである。

549はヘラ切り離しナデ仕上げの底部で、底部の角は丸みを帯びている。胸部は直行しながら立ち上がり大きく開く器形である。器面調整は輶轔の水引である。色調は内外面明茶褐色である。550はヘラ切り離しナデ仕上げの底部で、底部の角は丸みを帯びている。胸部は直行しながら立ち上がり大きく開く器形である。器面調整は輶轔の水引である。色調は内外面茶褐色である。

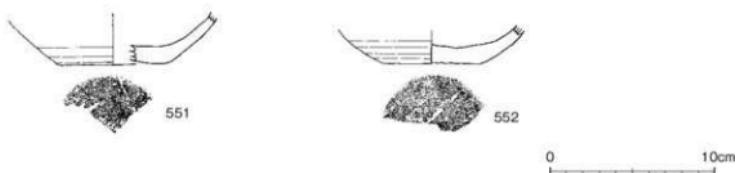


第192図 古代 土器（土師器皿）

**土師器鉢（第193図551・552）**

底部が厚く小さめで、壺の底部と異なるものを鉢とした。

551は底部が厚く平底で、胴部は湾曲して立ち上がる器形である。器面調整は横ナデ調整である。色調は内面が白茶褐色で、外面が白茶褐色と赤褐色である。552は黒色土器である。底部が厚く平底で、胴部は湾曲して立ち上がる器形である。器面調整は外面が横ナデ調整で、内面が黒色研磨である。色調は内面が黒色で、外面が白茶褐色と赤褐色である。



第193図 古代 土器（土師器鉢）

**器種不明の土器（第194図553～572）**

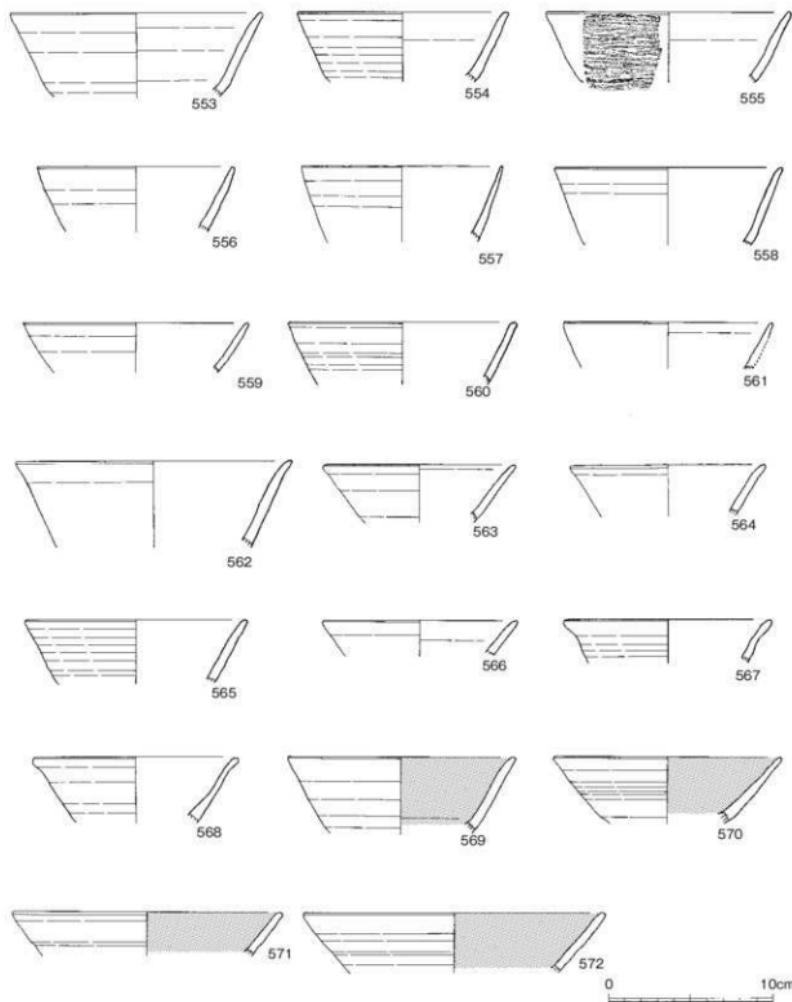
底部欠損のため主なものを掲載した。これらは、壺、塊、皿等の一部である。553～568は無色彩で、569～572は内黒土器である。器面調整は黒色土器以外が輻轂の水引がみられる。なお、内黒土器は内面が黒色研磨調整である。553・554・555は立ち上がりがやや湾曲し、口縁部が直線状に開く器形である。色調は553が暗茶褐色に黒斑がある。また、554の色調は茶褐色、555は明茶褐色である。器面調整は輻轂の水引がみられる。559・560は立ち上がりが直線状で、口縁部まで開く器形である。567と568は口縁部が外反する器形である。器面調整は輻轂の水引がみられる。色調は561が暗黒褐色、565が暗茶褐色、568は白茶褐色に黒斑がみられる。それ以外は茶褐色である。569～572の調整は内面が黒色研磨で、外面が輻轂の水引がみられる。色調は内面が黒色で、外面が茶褐色である。

**墨書土器（第195図573～577）**

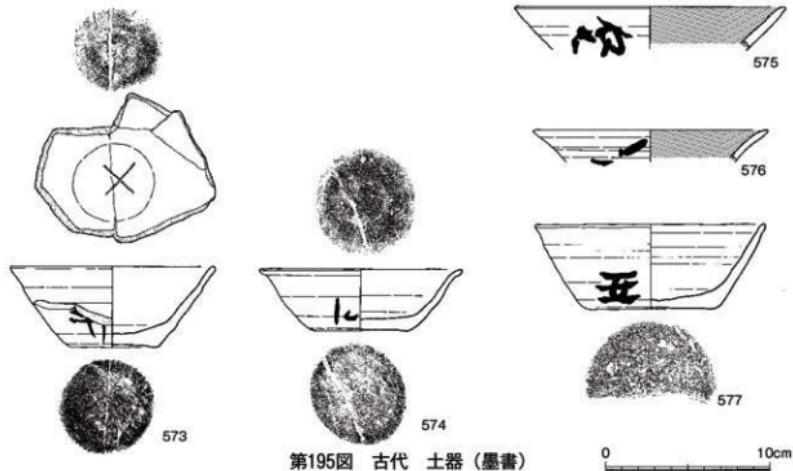
この土器は5点出土している。

573はヘラ切り離しナデ仕上げの底部で、底部の角は丸みを帯びている壺である。胴部から口縁部は直行しながら立ち上がり開く器形である。器面調整は輻轂の水引である。色調は内外面明茶褐色である。見込みに「×」印があり、側面の墨書は「神？」がみられる。574はヘラ切り離しナデ仕上げの底部で、底部の角は丸みを帯びている壺である。胴部は直行しながら立ち上がり、口縁部は外反する器形である。器面調整は輻轂の水引である。色調は内外面明茶褐色である。墨書は側面に

「九？」がみられる。575は直線状に開く内黒土器の側面に「寶？」がみられる。576は直線状に開く内黒土器の側面にみられるものは不明である。577はヘラ切り離しのナデ調整底部で、胴部は直線状に立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。側面に「安？」がみられる。器面調整は輻轂の水引である。色調は内外面白茶褐色である。



第194図 古代 土器（器種不明）



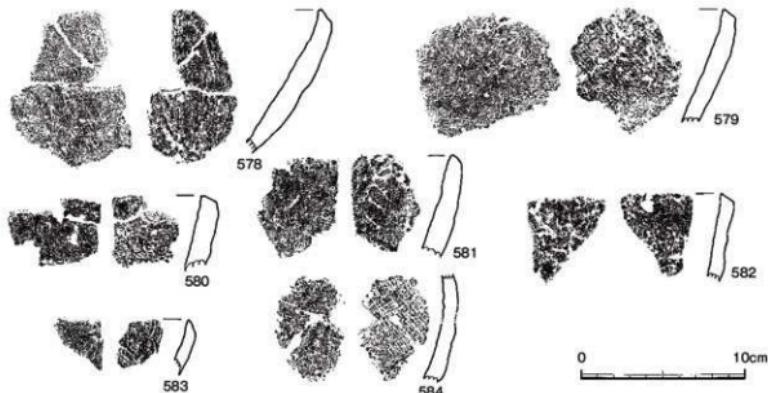
第195図 古代 土器（墨書）

0 10cm

#### 焼塩土器（第196図578～584）

この土器は内面に布目痕がみられるもので外面は粗雑にできている。

578は口縁部の外側は切られ、断面三角形をなしている。器形は尖底状で胴部に丸みを持つ。器壁は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目圧痕とヘラナデである。色調は茶褐色である。  
 579は口縁部の外側は切られ、断面三角形をなしている。器形は尖底状で胴部に丸みを持つ。器壁は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目圧痕とヘラナデである。色調は明茶褐色である。  
 580は口縁部の外側は切られ、断面三角形をなしている。器形は尖底状で胴部に丸みを持つ。器壁は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目圧痕とヘラナデである。色調は灰茶褐色である。  
 581は口縁部の外側は切られ、断面三角形をなしている。器形は尖底状で胴部に丸みを持つ。器壁



第196図 古代 土器（焼塩土器）

### 第45表 古代・中世 土器觀察表(1)

は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目压痕とヘラナデである。色調は灰茶褐色である。582は口縁部の外側は切られ、断面三角形をなしている。器形は胴部に丸みを持つ。器壁は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目压痕とヘラナデである。色調は紫茶褐色である。583は口縁部の外側は鋭く切られ、断面三角形をなしている。器形は胴部に丸みを持つ。器壁は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目压痕とヘラナデである。色調は茶褐色である。584は器形が胴部に丸みを持つ。器壁は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目压痕とヘラナデである。色調は茶褐色である。

第46表 古代・中世 土器観察表(2)

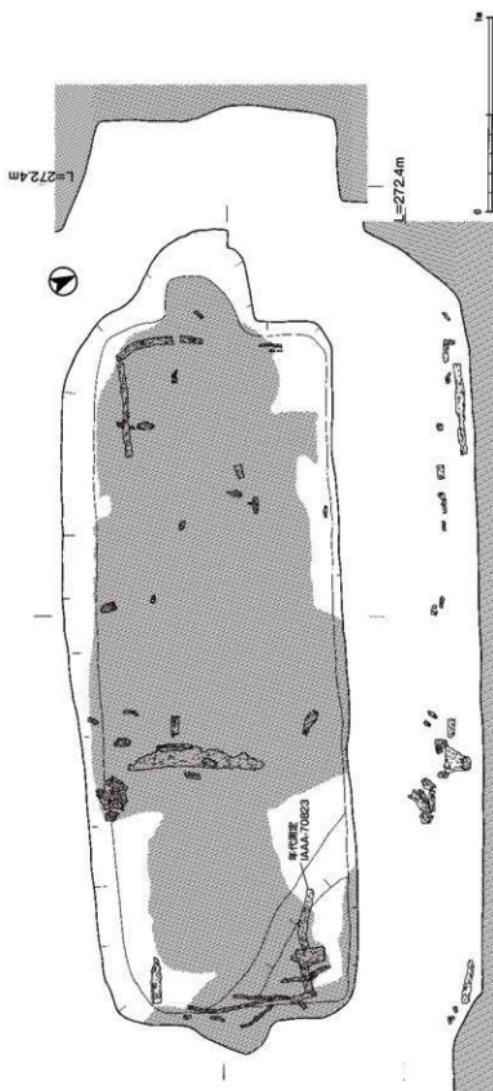
登録番号	目次番号	分類1	分類2	区	1号の文書	文書	測量(寸)	地圖(5)	測量(6)	船上	底板	備考
192	549 9295	土器留出	F-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	明茶褐色	明茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	550 8893		F-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
193	551 8461	土器部跡	G-62 I b	上	ナテ	黒色絞り	白茶褐色	白茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	552 21604		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	553 9248		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	554 9250		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	555 9112		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	556 1356		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	557 3856		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	558 21501		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	559 2649		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	560 8893 8893		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	561 9251 I		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	562 9251 II		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	563 8453		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	564 2968		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	565 21504		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	566 4474		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	567 21501		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	568 8893 8893		H-62 I b	上	織輪の水引	織輪の水引	茶褐色	茶褐色	角	縦貫	底16.4cm	
	569 9252 9175		F-62 III -	織輪の水引	黒色研磨	茶褐色	黑色	角	縦貫	底16.4cm		
	570 318 319 324		E-62 II b	織輪の水引	黒色研磨	茶褐色	黑色	角	縦貫	底16.4cm		
	571 8893 3303		E-62 II b	織輪の水引	黒色研磨	茶褐色	黑色	角	縦貫	底16.4cm		
	572 E		E-62 II b	織輪の水引	黒色研磨	茶褐色	黑色	角	縦貫	底16.4cm		
	573 8434 8690		F-62 II b	織輪の水引	織輪の水引	明茶褐色	明茶褐色	角	縦貫	底16.4cm, 室18.4cm, 壁18.4cm		
	8119 8479		F-62 II b	織輪の水引	織輪の水引	明茶褐色	明茶褐色	角	縦貫	底16.4cm, 室18.4cm, 壁18.4cm		
	8723 9155		G-62 II -	織輪の水引	織輪の水引	明茶褐色	明茶褐色	角	縦貫	底16.4cm, 室18.4cm		
195	575 3421	悪善土器	H-62 II b	織輪の水引	内黒	にい 黄褐色	黑色	角	縦貫	底16.4cm		
	576 1613		H-62 II b	織輪の水引	内黒	にい 黄褐色	黑色	角	縦貫	底16.4cm, 室18.4cm, 壁18.4cm		
	577 一柄		H-62 II b	織輪の水引	織輪の水引	白茶褐色	白色	角	縦貫	底16.4cm		
	578 302 387 386		H-62 II b	ヘラナデ	白目压痕	茶褐色	茶褐色	小円錐	普通			
	579 303 694		H-62 II b	ヘラナデ	白目压痕	茶褐色	茶褐色	小円錐	普通			
	580 304 36 20433		H-62 II b	ヘラナデ	白目压痕	茶褐色	茶褐色	小円錐	普通			
	581 305 36 20434		H-62 II b	ヘラナデ	白目压痕	茶褐色	茶褐色	小円錐	普通			
	582 306 36 20435		H-62 II b	ヘラナデ	白目压痕	茶褐色	茶褐色	小円錐	普通			
	583 3388		H-62 II b	ヘラナデ	白目压痕	茶褐色	茶褐色	小円錐	普通			
	584 20538		H-62 II b	ヘラナデ	白目压痕	茶褐色	茶褐色	小円錐	普通			
	585 3141	上部留出	H-62 II b	ナテ	織輪の水引	明茶褐色	明茶褐色	角	縦貫	底16.4cm		
	586 E	青面	N	ナテ	織輪の水引	青褐色	青褐色	縦溝	縦貫	底16.4cm		

【中世の遺構】(第197図)

木炭土坑

I - 4 区で検出した。平面プランは長辺420cm、短辺143cmの隅丸長方形で、検出面からの深さは64cmである。

なお、遺構内炭化物の放射性炭素年代測定の結果は $700 \pm 30$  (yrBP) である。

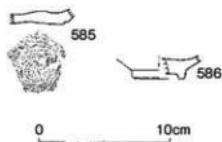


【中世の出土遺物】(第198図)

土師器の壊と青磁が出土した。

585は土師器の糸切り底の壊底部である。色調は明茶褐色で、内面には轆轤の水引がみられる。焼成は良く、硬質である。

586は青磁である。底部は断面四角の高台で、高さは低く、豊付けの内側には暗茶褐色の露胎がみられる。底部から立ち上がりの面にしお連弁の一部がみられる。釉の色調は青緑色である。



第198図 中世 出土遺物

第197図 中世 木炭土坑

## 第11節まとめ

### 旧石器時代について

ここでは旧石器時代第Ⅰ文化層と第Ⅲ文化層の石器群について、それらの編年的な位置づけを中心にして若干の検討を行い、まとめとする。

#### 1 第Ⅰ文化層について

検出されたブロックは多くないが、石器群は特徴的なものであった。第1ブロックでは大型の槍先形尖頭器と大型三棱尖頭器、搔器が出土した。第2ブロックでは大型の基部加工ナイフ形石器が出土した。このナイフ形石器は剥片時の打面は折り取り、基部の整形などは直線的に浅くなっている。剥片尖頭器の形骸化したものであることが理解できる。出土層もP17火山灰相当層であり、桐木・耳取遺跡の剥片尖頭器出土層よりかなり新しくなる。また石器組成的には前山遺跡の大型尖頭器の第Ⅱ文化層と極めて近い関係と考えられる。このようにP17の時期に南九州では大型の尖頭器が出現することが明確となった。

南九州旧石器編年（宮田2006）では、VC期2群からVII期の初頭ごろに位置づけられよう。

#### 2 第Ⅲ文化層について

第Ⅲ文化層は第X層とXI層を遺物包含層とするものであり、計20ヶ所の遺物集中ブロックを認識した。そのなかには2ヶ所の土器集中部（第8・19ブロック）も含んでおり、また第3ブロックでは4点の土器が含まれ、そして第6ブロックでは2点の石鏃も出土している。しかし第6ブロックでは小型ナイフ形石器も認められており、このブロック全体が同一時期とは言えない。

全体の20ブロックの石器群のうち、第1・15・16ブロックの石器群は、桑ノ木津留系黒曜石の細角礫を主として使用した小型の細石刃核が特徴となるものである。第1ブロックでは計16点の細石刃核が出土しており、この中には打面が後方に傾斜して作業面幅が広く、古い時期の典型的な野岳・休場型細石刃核（宮田2004）もみられた。

また、第2と第4ブロックは南九州において極めて異例の細石刃石器群であった。まず石材はそのほとんどが良質で黒色を呈する腰岳産と分析された黒曜石であり、細石刃核はランク形成後に削片を剥離して正面形V字形に仕上げる削片系の楔形細石刃核であった。これは、これまで南九州で多く出土している「福井型細石刃核」ではなく、「唐津型細石刃核」（岡本2002）もしくは「石ヶ元型細石刃核」（小畑1987・2005）と呼称されているものである。第2ブロックでは細石刃核と削片の接合資料もあり、加えて削片を使用した彫器も出土した。このような彫器は西北九州では多く出土しているが、南九州では初見である。これらのブロックでは製作上の剥片が多く出土しており、特定石器の持ち込みではなく、この地で製作したことが理解される。ブロック全体の腰岳産黒曜石比率が99%を超えていた。以上のことはこのブロックを形成した集団が、腰岳産黒曜石を何らかの方法で入手したものではなく、細石刃核の技術的特徴と製作技術や彫器の存在などから、西北九州の集団がこの地に来て、これらのブロックを残したと判断することができよう。

また、他のブロックから一つだけ離れた位置に所在する第9ブロックについては、出土石材の90%以上が腰岳産黒曜石であり、同様に削片系の細石刃核と典型的な野岳休場型細石刃核が出土した。この両細石刃核型式は、技術的には全く異なるものであるが、同一ブロックであり同様の腰岳産黒曜石を使用するという共通性から、共伴と考える必要がある。

そして、北側の区域で隣接していた第11・12・13・14ブロックの石器群は、石材的にも他のブロックと異なり、淀姫系と分析された黒曜石が中心の第13ブロックや、日東産黒曜石が圧倒的に多い第12ブロックと第14ブロックなどがみられた。

第13ブロックでは桑ノ木津留系黒曜石を使用し、横打打面形成による福井型細石刃核と、淀姫系黒曜石を使用した泉福寺8層類型の細石刃核が出土している。これらの各ブロックでは腰岳産黒曜石は認められず、第2～5や9ブロックとは形成時期にも違いがあるものと考えられる。

第11・12・14ブロックで出土している日東産と分析された黒曜石は、主としてスクレイパーとして利用されており、細石刃核として使用される桑ノ木津留産黒曜石と石材利用差をもつ。

第7ブロックで石材率が最も高かったのは、他ブロックでほとんど出土していない上牛鼻産黒曜石であり、このブロックでは小型ナイフ形石器が多く出土したことと関連する可能性がある。

以上のように、第Ⅲ文化層は小型ナイフ形石器が主体となるナイフ形石器文化終末期から細石刃文化、そして石鎚や土器が主体となる縄文時代草創期までの時期を含む各種の時期のブロックからなるものであり、そのなかで唐津型あるいは石ヶ元型と呼称される削片系の細石刃核が主体となる特別な石器群が確認できた。これらの削片系の楔形細石刃核は、唐津地域のみの地域性ではなく、福井型とは異なる一定時期を画す型式として認識する必要がある。そして、野岳・休場型細石刃核との共伴例から福井型より古い時期で、野岳・休場型にきわめて近い時期と考えられる。

### 3 細石刃と使用痕について

出土した細石刃には特徴的な使用痕が認められた。これまで細石刃の使用痕に関しては、刃部の微細な剥離や線状痕が主として言及されてきた（芝2007）。ところが仁田尾遺跡出土の細石刃では刃部に摩滅痕があるものが確認され、加えて金属顕微鏡で線状痕も確認するなど、細石刃の使用方法や機能についての新たな認識（宮田・寒川2008）が必要となっている。

建山遺跡の細石刃の使用痕観察でも明瞭な線状痕などや変色部が確認できており、細石刃の使用に関して若干の検討を行う。第3ブロックで出土した複数の細石刃は、打面を上に置いた場合の左側縁には微細な剥離が認められ、その裏面には長軸方向の線状痕が明瞭に残っていた。その線状痕は左半分にのみ観察され、著しいものは左半部が変色していた。このことは明らかにシャフトに装着されたことを示しており、そして長軸方向に刃部が運動するような使用方向が推定される。そして、線状痕が認められるほどの使用回数（長期的な使用期間）の存在が想定されることとなる。

ところで、これらは共通して刃部と反対側の縁辺が折れていたことから、同一の装着状況そして取り替え時点での類似した縁辺の破損が推定される。すなわち同一シャフトに装着されていた可能性をも示唆しており、そして第3ブロックで近接した位置で出土したことから、ここで新しい細石刃と付け換えた可能性も考えられる。

また、線状痕が裏面全体の長軸方向に形成されていた例も少なからず確認され、これはシャフトへの装着が縁辺の細い溝に埋め込むシベリア出土例と異なる。平坦に装着する方法などを新たに考慮する必要があろう。すなわち、機能的にはこれまで常識的に言われていたシャフトに装着して槍先に使用していたものではなく、装着した植刃ナイフ的な使用方法と機能が推定されよう。

今回、出土した細石刃の線状痕などの使用痕観察から、南九州における細石刃の機能や使用方法について再考をうながす結果となった。

（宮田栄二）

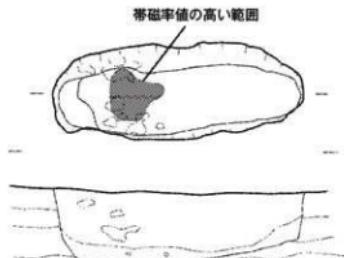
## 遺構について

### 縄文時代早期

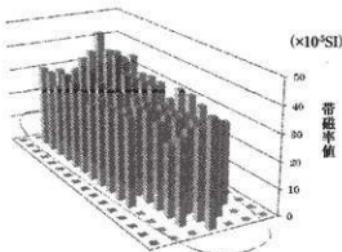
堅穴住居跡2軒、堅穴状遺構2基、連穴土坑1基、土坑10基、集石遺構30基、落とし穴13基、磨石集積1基が検出された。以下に、主な遺構についてまとめた。

南九州における縄文時代早期の連穴土坑は、薩摩火山灰層上面において検出される場面が多く、埋土に遺物が含まれない場合、遺構としての判断材料は検出面での形状や埋土の特徴的なバミスなどの視覚的情報に頼らざるを得ない。建山遺跡で検出された土坑内部の帯磁率を測定したところ、底面及び側壁の一部において周囲とは異なる高い数値が得られ、遺構内部において帯磁率値の変化する行為が行われたことが推察された。

鹿児島県における連穴土坑（炉穴）は早期前葉を中心に17遺跡、合計84基以上調査されており、その分布域は県本土の中心～北東側（宮崎県側）で比較的多く検出されている。形態は小型土坑と大型土坑が並び、それぞれの土坑が内部でトンネル状に繋がるため橋状に残る部分（ブリッジ）が存在していたと思われるものが多い。ブリッジ下部（煙道部）の手前及びその側壁部付近を中心焼土・赤色化が認められる事例が多く、本遺跡の連穴土坑はブリッジ部分に該当する薩摩火山灰が崩落し、底面に落ちたと想定される。底面及び側壁の一部に若干の赤色化が認められた。そこで土坑底面、側壁部分の帯磁率を測定し、被熱の可能性を探った。帯磁率計は（株）田中地質コンサルタント製WSL-Cを使用した。



第199図 帯磁率の高い範囲



第200図 帯磁率測定値

結果は、被熱部分における帯磁率値は周囲と比べ約1.3倍高いという結果が出ている（第199図、200図）。被熱による土壤の変化等の視覚的情報以外の情報として活用するため、更にデータの増加を図り、土壤の違いや遺構の配置等との関係を調べ、精度を高めていく必要がある。（永濱功治）

次に集石遺構である。礫の集中密度の多少を基に各集石を第47表のように分類した。

第47表 各検出層における礫の集中密度別の集石分類表

検出層	Ⅳ層	VⅢ層	VⅡ層	VⅠa層	層不明
疊が密（Ia類・IIa類）	11号	22号	7, 14, 21, 29号	20号	8, 15号
疊が散在（Ib類・IIb類）	-	2, 5号	1, 3, 4, 6, 9, 10, 12, 13, 16~19, 22, 24, 26~28, 30号	23号	-

この表からわかるように、本遺跡の集石は礫が散在しているものが多いのが特徴である。

落とし穴は、底面中央部に小ピットが検出されたもの13基を認定した。3つの区域内(29~34区、41~43区、48~49区)でまとめて検出された。うち、29~34区内と48~49区内の落とし穴をそれぞれ落とし穴群とした。また落とし穴の時期を分析すると、埋土内の桜島P13が、6号と13号を除き密に混入していることから、本遺跡の落とし穴の多くは早期前半の時期に該当すると考えられる。

### 縄文時代前期～晚期

前・中期の遺構は、竪穴状遺構2基、土坑4基が検出された。2基の竪穴状遺構は全体を確認できなかったが、基本的には円形の平面プランである。また、土坑の性格は不明で、平面プランは4基とも円形であった。後・晚期の遺構は、大型の軽石製品を伴う土坑が1基検出された。

### 古代～中世

奈良・平安時代の遺構は掘立柱建物跡9棟、焼土跡6基、溝状遺構5条、軽石集積1基、軽石配石1基、ピット30基が検出され、鎌倉時代以降に該当する中世の遺構は木炭土坑1基が検出された。

掘立柱建物跡9棟のうち、軽石集積を伴うものと焼土跡を伴うものがそれぞれ1棟検出された。近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査で、軽石集積を伴う掘立柱建物跡は曾於市末吉町の唐尾遺跡で2棟、焼土跡を伴う掘立柱建物跡は唐尾遺跡で1棟、曾於市大隅町の高古塚遺跡で3棟、曾於市末吉町の関山西遺跡で1棟検出されている。

また、6号掘立柱建物跡は9棟の中でも最も大きいが、建物の構造については今後検討を要する。

(國師洋之)

### 土器について

#### 縄文時代草創期

I類は桜島起源P14降下火山灰層(薩摩火山灰、約11,500年B.P.)より下層で出土したもので無文土器である。

#### 縄文時代早期

IIa類は指宿市岩本遺跡出土の円筒形土器を標識とする岩本式土器に比定される。IIb類は熊本県の中原遺跡出土の土器を標識とする中原式土器に比定される。IIc類は鹿児島市吉野町雀ヶ宮前平遺跡出土の土器を標識とする前平A式土器に比定される。

III類は鹿児島市吉野町雀ヶ宮前平遺跡出土の土器を標識とする前平A式土器に比定される。

IV類は鹿児島市本名町大原遺跡出土の土器を標識とする吉田式土器に比定される。

V類は南九州市知覧町石坂上遺跡出土の土器を標識とする石坂式土器に比定される。

VI類はバケツ形の器形で、VIa類は西之表市下剥峰遺跡出土の土器を標識とする下剥峰タイプに比定される。VIb類は霧島市溝辺町桑ノ丸遺跡出土の土器を標識とする桑ノ丸タイプに比定される。

VII類は撲糸文系の文様をもつもので、VIIa類は霧島市溝辺町石峰遺跡出土の土器を標識とする変形撲糸文土器に比定される。VIIb類は細い撲糸文で、VIIc類は撲糸文、VIId類は網目状の撲糸文土器である。

VIII類は押型文を施した白坂・手向山式土器に比定される。VIIIa類は山形押型文、VIIIb類は山形押型文と貝殻腹縁刺突文を施したものである。VIIIc類は楕円及び穀粒押型文を施しているものである。VIIId類は格子目状の押型文、VIIe類は同心円文の押型文を施している。

IX類は沈線を施し、X類は微隆起突帯を貼り付けた白坂・手向山式土器に比定される。

XI類は塞ノ神式A式土器に比定している。XIa類は撫糸文をもつ塞ノ神A式土器で、XIb類は塞ノ神A式土器の無文タイプと考えられる。

XII類は塞ノ神B式土器に比定している。XIIa類は貝殻刺突文をもつ塞ノ神B式土器で、XIIb類は塞ノ神B式土器の無文タイプと考えられる。

XIII類は貝殻条痕で文様を施した鹿児島市本城町小山遺跡や宮崎県の右京西遺跡出土の土器を標識とするタイプに比定する。

#### 縄文時代前期

XIV類は尖底土器及び丸底土器で、器面を貝殻条痕で施したもので、森A式土器に比定される。

XV類は器面に隆起線文を施した森B式土器に比定される。

XVI類は器面を細い沈線で文様を施した曾畠式土器に比定される。

#### 縄文時代中期

XVII類は沈線と突帯貼付文と撫糸文で構成される岡山県の船元遺跡出土の土器を標識とする船元Ⅲ式土器として分類した。

XVIII類は貝殻条痕と突帯貼付文を施した春日式土器の範疇に含まれる。

XIX類は口縁部が肥厚する霧島市横川町中尾田遺跡出土のⅢ層Ⅲ類土器を標識とする。

XXa類は凹線や沈線を施す阿高式土器に、XXb類は凹線文の土器であるが器形等で志布志市中原遺跡出土の土器を標識とするタイプに類似している。

#### 縄文時代後期

XXI類は貝殻刺突文と沈線の組み合わせの文様で岩崎上層式土器に比定される。

XXII類は2本の平行沈線文の文様をもつ土器で指宿式土器に比定される。

XXIII類は鐘ヶ崎式土器で、XXIV類は前類が疑似縄文化した土器である。XXV類は曾於市末吉町中岳洞窟出土の土器を標識とするタイプに比定される。XXVI類はタイプ不明としておきたい。

XXVII類は屋久島町一添松山遺跡出土の土器を標識とするタイプに比定される。XXVIII類は曾於市丸尾遺跡出土の土器を標識とするタイプに比定される。XXIX類は器形が西平式土器に類似するが形式としては不明としたい。XXX類は口縁部が三万田式土器に類似するが形式としては不明としたい。

#### 縄文時代晚期

XXXIa～e類に分類され、深鉢、浅鉢、ボウル状の鉢がみられる。これらは黒川式土器の範疇に比定できる。

#### 弥生時代・古墳時代

弥生時代前期の壺形土器と古墳時代前期から中期の壺形土器が出土している。

#### 奈良・平安時代

9世紀前後の壺形土器、壺、塊、鉢が出土している。この中に、墨書き土器や線刻された土器も含まれる。また、焼塙土器も出土している。

#### 鎌倉時代以降

糸切り底の壺底部が出土している。

以上、土器に関してのまとめである。本遺跡の土器の特徴は2つ考えられる。

第1に草創期の土器が細石刃文化の包含層で出土したことである。同一包含層中で出土した事例は少ないが、細石刃文化と土器共伴出土事例は鹿児島市加治屋園遺跡で大量の細石刃文化の石器と100点以上の土器が同一包含層に共伴して出土した例もあるので、今後の調査の事例が増えたことがあれば土器の発生についての指標になる遺跡と思われる。

第2に白坂・手向山式土器、通称「手向山式土器」が多く出土していることである。この型式は押型文化の範疇である事で知られていたが、今までセットとして出土した遺跡は少なく、本遺跡では押型文を中心に、沈線文、突帯文が組み合わされて施文されていることが確認された。器形としては変形捺糸文の流れをくむ可能性が強いことも考えられる。  
(彌榮久志)

#### 縄文時代の石器について

本遺跡における縄文時代の石器組成については、石鎚が最も多いという特徴が見られる。分布については、後・晩期に石鎚の製作が行われたと考えられるブロックが1基認められるが、他は散在している状況である。以下に石器組成を示す。(出土率は小数第2位を四捨五入した。)

第48表 縄文時代早期(VII~VIA層出土)石器組成表

器種	石鎚	石匙	スクレイバー	トロトロ石器	石斧	磨石・敲石	石皿	計
出土数	25	11	17	1	6	24	13	97
出土率	25.8%	11.3%	17.5%	1.0%	6.2%	24.7%	13.4%	

第49表 縄文時代前・中期(Va層出土)石器組成表

器種	石鎚	石匙	スクレイバー	磨石・敲石	計
出土数	8	1	2	2	14
出土率	57.1%	7.1%	21.4%	14.3%	

第50表 縄文時代後・晩期(IVa, IVb層出土)石器組成表

器種	石鎚	石鎌	石匙	スクレイバー	石斧	磨石・敲石	石皿	その他	計
出土数	33	3	5	4	7	9	3	4	68
出土率	48.5%	4.4%	7.4%	5.9%	10.3%	13.2%	4.4%	5.9%	

(木内敏生)

#### 【参考文献・引用文献】

- 岡本東三 (2002) 「九州島の細石器文化と神子柴文化」「泉福寺洞穴研究編」
- 小畠弘巳 (1987) 「西南日本の楔形石核とその系譜について」「東アジアの考古と歴史」
- 。 (2005) 「削片系細石刃技法の分布図と日本列島」「考古学ジャーナル」No.527
- 芝康次郎 (2007) 「非削片系細石刃石器群における行動論的考察」「阿蘇における旧石器文化の研究」
- 宮田栄二 (2004) 「九州地方 - 九州細石刃石器群の東西対構造と集団」「中・西・四国地方旧石器文化的地域性と集団関係」
- 。 (2006) 「九州東南部の地域編年」「旧石器時代の地域編年」同成社
- 新東晃一 (1997) 「縄文時代早期の炉穴の復元」「南九州縄文通信」No.11
- 。 (2005) 「九州の連穴土坑の再検討 - 南九州の初期縄文文化を代表する遺構について -」「南九州縄文通信」No.16
- 町田洋・新井房夫 (2003) 「新編火山灰アトラス」東京大学出版会
- 森永達夫 (2007) 「土壤・岩石の磁気を利用して考古科学 - 被熱遺構探査」「地球電磁気・地球惑星圈学会第122
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター (2008) 「関山西遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書 (126)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター (2008) 「唐尾遺跡・高塚遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書 (127)

## 建山遺跡の遺構内出土炭化物及び出土土器付着炭化物の自然科学分析（放射性炭素年代測定）

### I 「株式会社 バレオ・ラボ」による報告（一部抜粋）

#### 1 はじめに

鹿児島県に位置する建山遺跡から検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料の調製は廣田、瀬谷、Lomtadze、Jorjoliani、測定は伊藤、丹生、小林が行い、報告文は伊藤、中村が作成した。

#### 2 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表51のとおりである。

第51表 測定試料及び処理

報告書番号	測定番号	道路データ	試料データ	前処理
博国番号 第131回 国番号 223	PLD-11047	遺跡名：建山遺跡 調査区：F-39区 試料No. : 3 その他：地点No.20071ほか	試料の種類：粉状の炭化物 (土器付着) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N、水酸化ナトリウム: 0.1N、塩酸1.2N) サルフィックス
博国番号 第82回	PLD-11048	遺跡名：建山遺跡 調査区：F-41区 遺構：逆甌 試料No. : 4	試料の種類：炭化材(小片4点) 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N、水酸化ナトリウム: 0.1N、塩酸1.2N) サルフィックス

#### 3 結果

放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果は表52のとおりである。

第52表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

報告書番号	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
博国番号 第131回 国番号 223	PLD-11047 試料No. : 3	-26.87 $\pm$ 0.14	4053 $\pm$ 28	4055 $\pm$ 30	2622BC (44.1%) 2566BC 2525BC (24.1%) 2496BC	2836BC (5.3%) 2816BC 2666BC (90.1%) 2480BC
博国番号 第82回	PLD-11048 試料No. : 4	-24.39 $\pm$ 0.13	22198 $\pm$ 87	22200 $\pm$ 90	較正曲線範囲外	較正曲線範囲外

#### 4 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。2σ暦年代範囲（95.4%の確率でこの範囲に暦年代が収まることを意味する）に着目して結果を整理する。年代値と考古学編年との対応について、縄文時代はキーリ・武藤1982と小林2008、弥生時代は春成・今村編2004、西本編2006、西本編2007を参照した。

建山遺跡の試料No.3 (PLD-11047) は、2836–2816calBC (5.3%) および2666–2480calBC (90.1%) で、縄文時代中期後葉に相当する。試料No.4 (PLD-11048) は年代値が古く較正曲線範囲外であったため $^{14}\text{C}$ 年代のみ示した。これは旧石器時代に相当する。

## II 「株式会社 加速器分析研究所」による報告（一部抜粋）

### 1 測定対象試料

測定試料は、F-50区のXVI層検出の礫群内から出土した炭化物ほか計11点である。

### 2 化学処理工程（略）

### 3 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシユウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も同時に行う。

### 4 算出方法（一部略）

(1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

(2) BP年代値は、過去において大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として過る14C年代である。

(3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 $\chi^2$ 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

(4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

### 5 測定結果

放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果は表53のとおりである。

第53表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

報告書 番号	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し		暦年較正用 (yrBP)	$1\sigma$ 年代範囲	$2\sigma$ 年代範囲
		Age(yrBP)	pMC(%)			
博団番号 第55回	IAAA-62041	8,960 ± 40	32.77 ± 0.17	8,961 ± 40	827BC-819BC(42.2%)	828BC-816BC(52.4%) 812BC-790BC(43.0%)
					810BC-809BC(6.6%)	
					808BC-806BC(2.2%)	
					804BC-799BC(17.2%)	
博団番号 第57回	IAAA-62042	8,950 ± 40	32.82 ± 0.16	8,949 ± 40	825BC-818BC(35.0%)	828BC-816BC(43.5%) 814BC-790BC(51.9%)
					823BC-809BC(8.3%)	
					809BC-806BC(4.1%)	
					805BC-799BC(20.8%)	
博団番号 第84回	IAAA-62043	8,920 ± 50	32.94 ± 0.2	8,919 ± 50	823BC-816BC(21.8%)	828BC-793BC(95.4%) 812BC-788BC(46.4%)
					820BC-810BC(2.6%)	
					813BC-788BC(46.4%)	
博団番号 第78回	IAAA-62044	8,780 ± 40	33.53 ± 0.17	8,777 ± 40	794BC-775BC(68.2%)	820BC-810BC(2.6%) 800BC-765BC(92.8%)
					790BC-770BC(68.2%)	
					800BC-765BC(92.8%)	
博団番号 第12回	IAAA-62045	13,510 ± 50	18.6 ± 0.12	13,510 ± 51	14300BC-1391BC(68.2%)	14500BC-13750BC(95.4%) 2170BC-2143BC(95.4%)
					14300BC-1391BC(68.2%)	
					2170BC-2143BC(95.4%)	
博団番号 第176回	IAAA-62469	2,3540 ± 90	5.34 ± 0.06	23,539 ± 84	21680BC-21500BC(68.2%)	2170BC-2143BC(95.4%) 1900BC-1750BC(68.2%)
					21680BC-21500BC(68.2%)	
					1880BC-1750BC(68.2%)	
博団番号 第81回	IAAA-62470	3,490 ± 30	64.78 ± 0.25	3,487 ± 30	1900BC-1730BC(95.4%)	1900BC-1730BC(95.4%) 695AD-780AD(68.2%)
					695AD-780AD(68.2%)	
					673AD-870AD(95.4%)	
博団番号 第100回 番号 81	IAAA-62471	1,250 ± 30	85.56 ± 0.32	1,253 ± 30	718BC-691BC(87.9%)	718BC-691BC(87.9%) 689BC-683BC(7.5%)
					689BC-683BC(7.5%)	
					683BC-680BC(7.5%)	
博団番号 第104回 番号 104	IAAA-70406	8,080 ± 40	36.56 ± 0.19	8,082 ± 41	714BC-700BC(68.2%)	714BC-700BC(68.2%) 709BC-704BC(36.5%)
					709BC-704BC(36.5%)	
					710BC-709BC(31.7%)	
博団番号 第197回	IAAA-70407	8,110 ± 40	36.44 ± 0.19	8,108 ± 42	719BC-723BC(4.9%)	719BC-723BC(4.9%) 719BC-709BC(99.5%)
					719BC-709BC(99.5%)	
					710BC-709BC(31.7%)	
IAAA-70823	IAAA-70823	700 ± 30	91.68 ± 0.37	698 ± 32	1270AD-1300AD(57.1%)	1250AD-1320AD(72.7%) 1360AD-1380AD(11.1%)
					1250AD-1320AD(72.7%)	
					1360AD-1380AD(11.1%)	

## 第V章 西原段Ⅰ遺跡

### 第1節 発掘調査の方法及び層位

調査区域は、10m×10mのグリッドを設定して調査を行った。グリッドの設定は、工事用基準杭S T A262+60とS T A262+80の2点を結ぶ直線を基準軸とし、西側から東側に向かってA・B・C・・・南側から北側に向かって1・2・3・・・とし、A-1区、B-2区のように呼称した。

調査区が、過密植栽及び市道で分断されるため、C～G-8区～16区までをA地点、C～G-24区～36区までをB地点、18年度の試掘調査の結果、遺跡範囲を拡張したB～G-1区～7区をC地点として調査を行った。

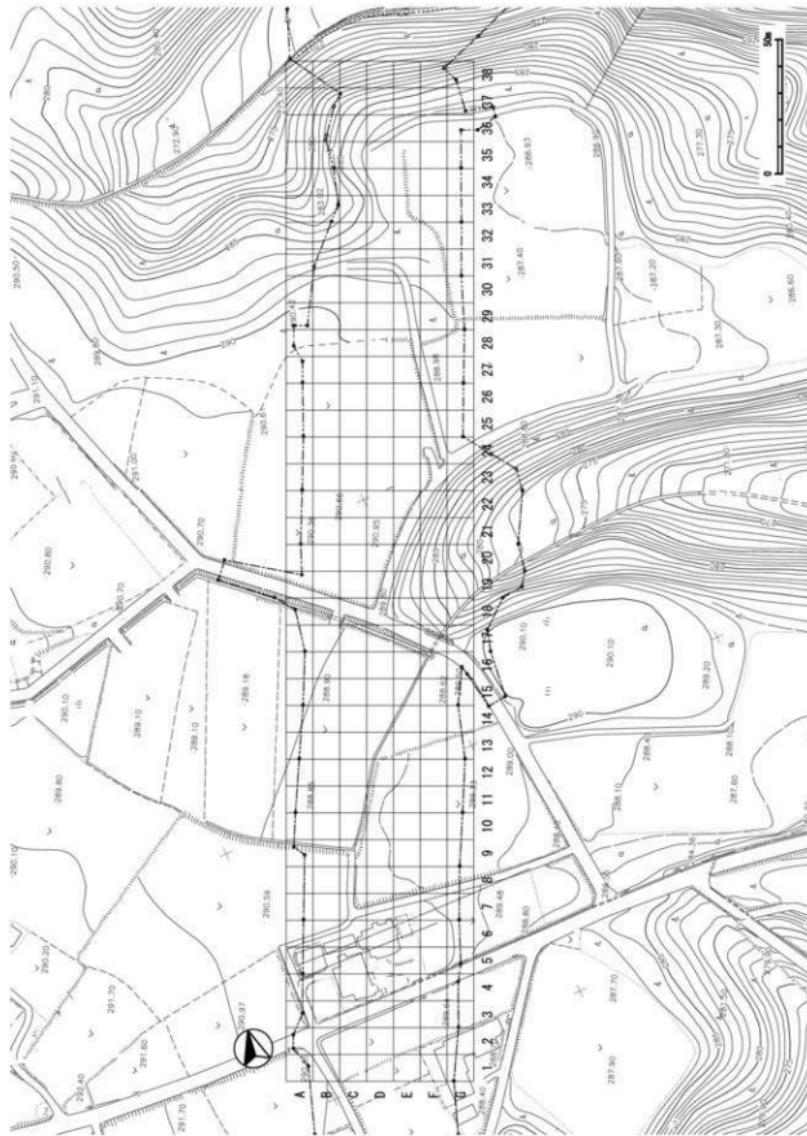
A地点は、重機で表土剥ぎを行ったが圃場整備による天地返しのため地表から3m近くまで搅乱を受けておりVIII層上面から層が残っていることが判明した。VIII層上面からIX層上面まで人力で掘り下げ、その後下層確認トレンチを7か所(1T～7T)設定しXVIII層(シラス)上面まで人力で掘り下げ調査を行った。調査の結果、旧石器時代、縄文早期、縄文時代中期～後期の遺構・遺物が確認された。

B地点は、調査開始時は畑部分と買収済みの山林部分があったので2班に分かれて調査を始めた。畑部分は、重機で表土剥ぎを行ったところ、A地点と同じく圃場整備による天地返しのため地表から1m近く搅乱されていた。一部V・VI層が残存していた場所もあったが、VII層からは層が残っていることが判明した。表土を剥いだ後、確認トレンチを4か所(8T～11T)設定し、IX層上面まで人力で掘り下げた。9・10Tで遺構・遺物が確認されたので、E～G-32～36区にかけて全面調査を行った。調査の結果、旧石器時代の遺構・遺物は確認できなかつたが、縄文時代早期の遺構・遺物が確認された。

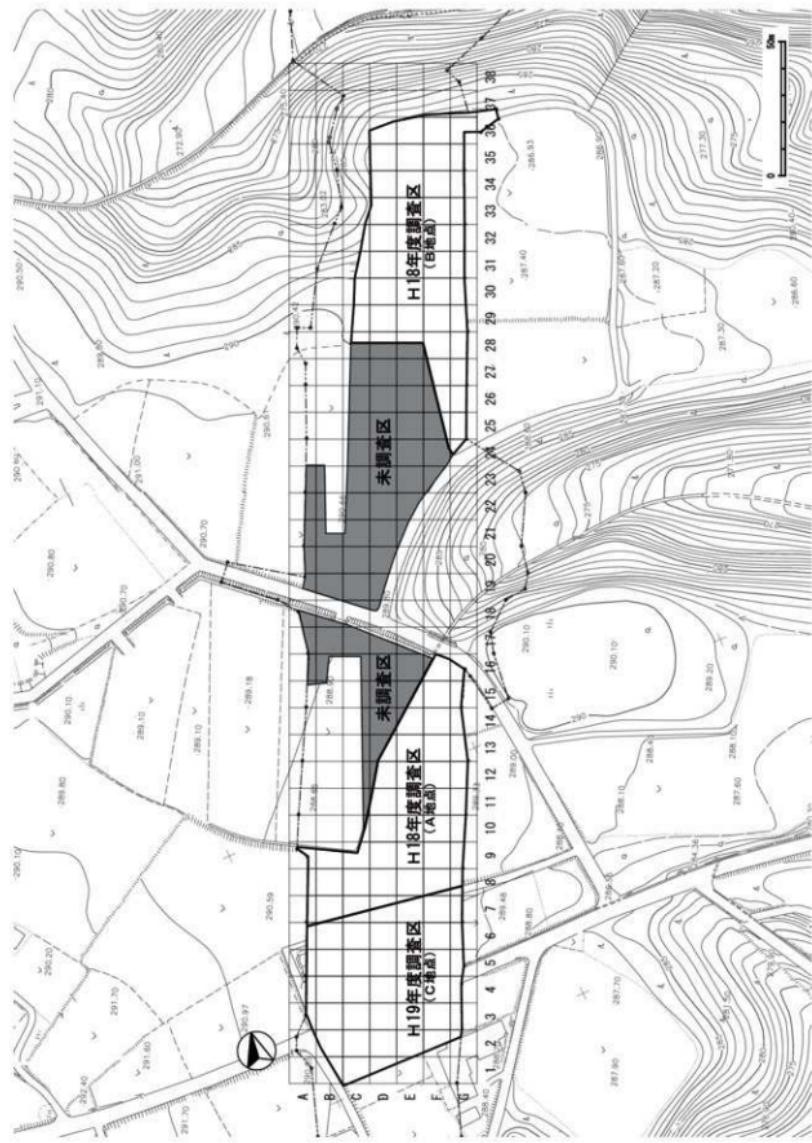
山林部分は、まず人力で伐採や根起こしをした後、重機でⅢ層上面まで剥ぎ、Ⅲ層上面からⅥ層上面まで人力で掘り下げた。掘り下げ中、C・D-31・32区から北西方向に、E-33～35区から西及び南西方向に、地形が傾斜していることが判明し、特に、D-33・34区付近は傾斜が急になつていてることが判明した。そこで、VI層からの下層確認トレンチを13か所(12T～24T)設定し、XVIII層上面まで人力で掘り下げ調査を終了した。調査の結果、旧石器時代、縄文時代早期～中期の遺構・遺物は確認されなかつたが、縄文時代後期～晚期、古代～中世の遺構・遺物が確認された。

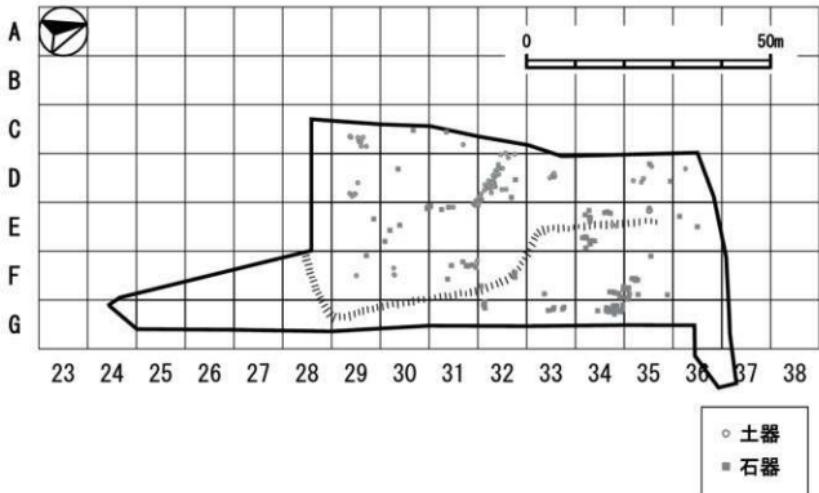
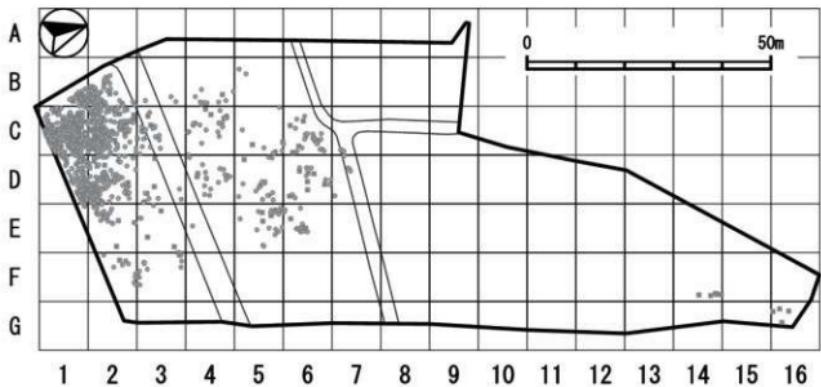
C地点は、平成18年度に試掘トレンチを11か所(A～Kトレンチ)設定し、人力で浅いところはⅢb層、深いところはVII層上面まで掘り下げ調査を行った。調査の結果、縄文時代後期～晚期、古代～中世の遺構・遺物が確認されたため、西原段Ⅰ遺跡の範囲をB～G-1区～7区まで広げ平成19年度調査を行つた。重機で表土からⅢ層上面まで剥いだ後、人力でVI層上面まで掘り下げた。その後、平成18年度の調査結果から、縄文時代早期以前の遺構・遺物は確認されていなかつたので、確認トレンチを8か所設定しIX層上面まで人力で掘り下げた。さらに、8か所の内の3か所は旧石器時代の遺構・遺物を確認するためXVIII層上面まで人力で掘り下げた。調査の結果、旧石器時代、縄文時代早期～中期の遺構・遺物は確認されなかつたが、縄文時代後期、縄文時代晚期～弥生時代初期の遺物、古代～中世の遺構・遺物が確認された。

第1図 遺跡周辺地形及びグリッド図

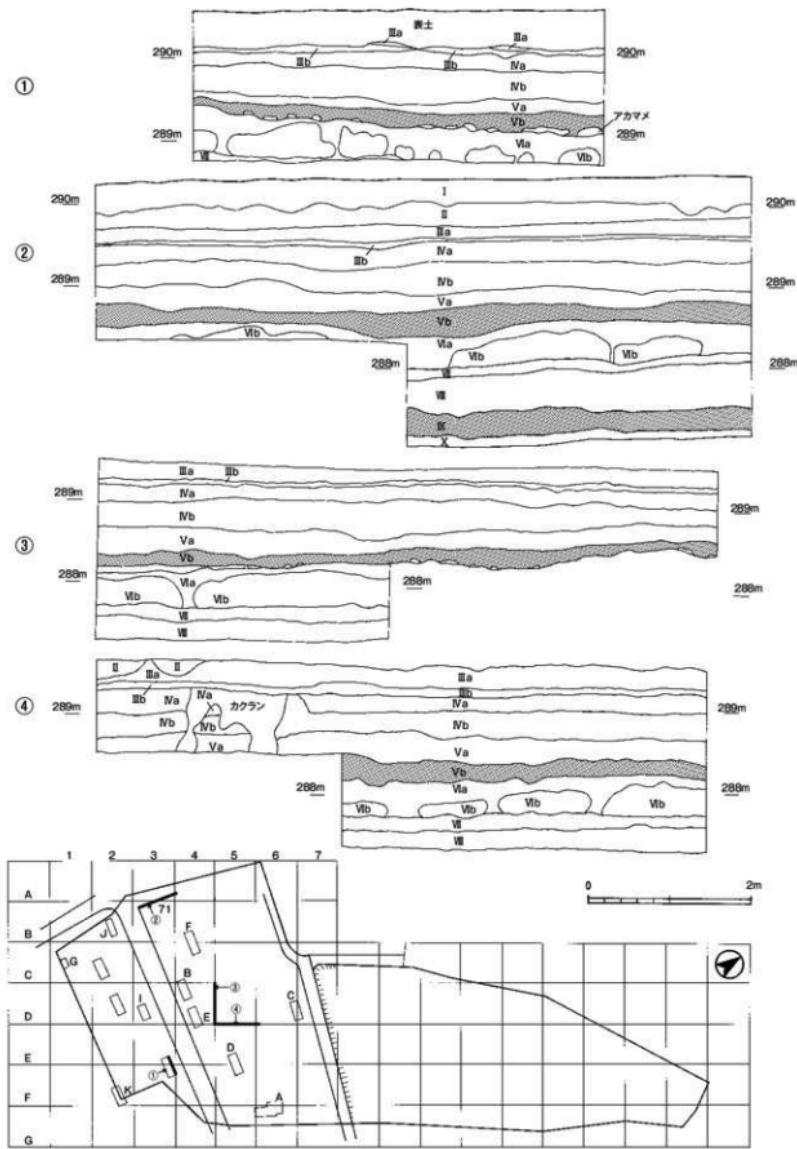


第2図 調査範囲図

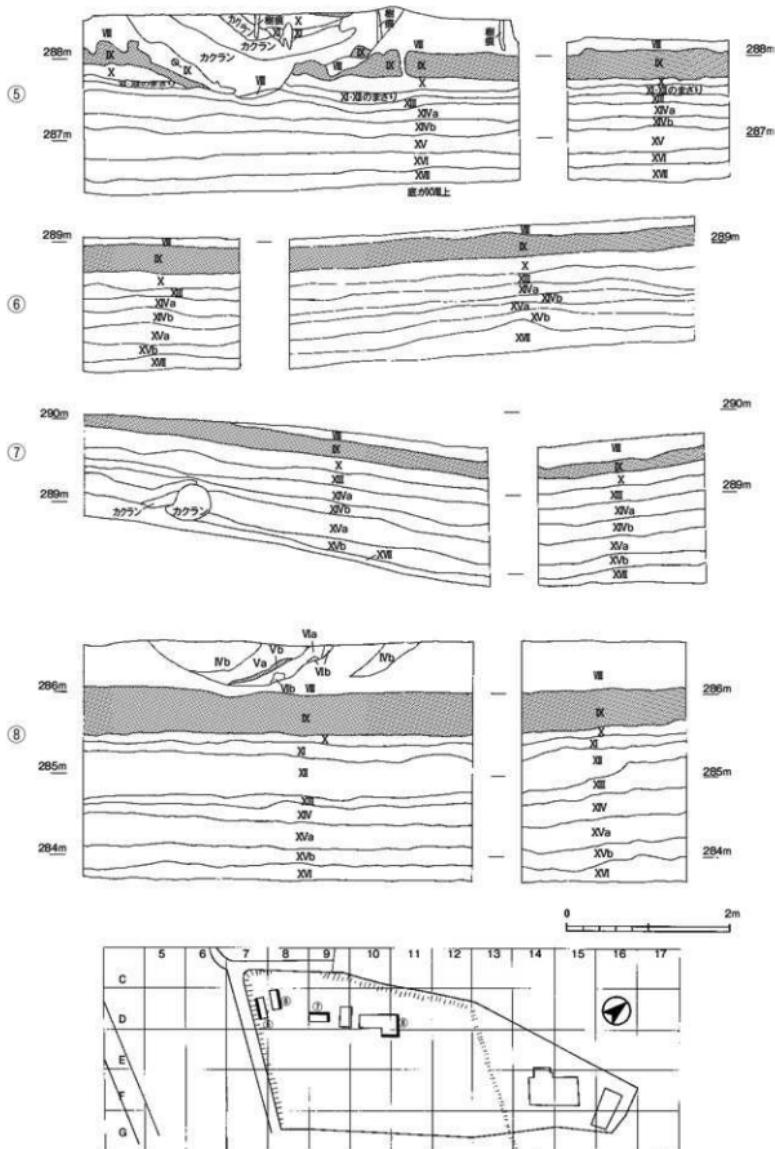




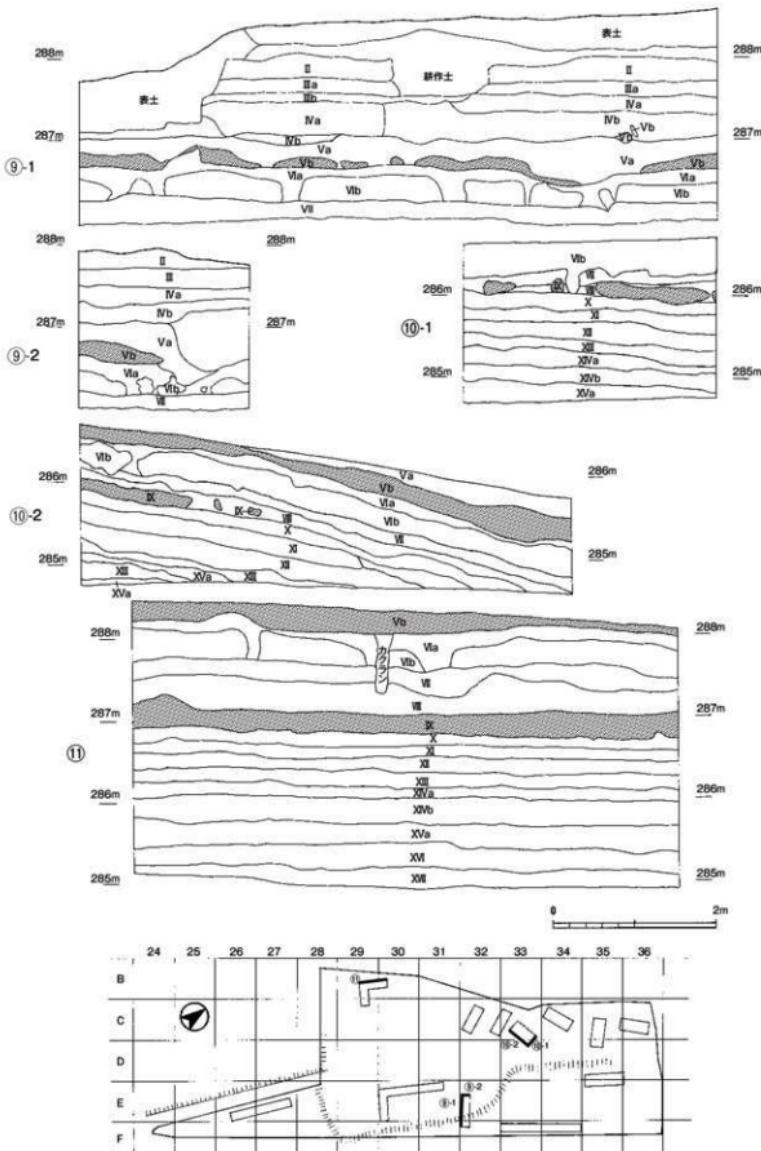
第3図 遺物出土状況図



第4図 土層断面図1 (C地点)



第5図 土層断面図2 (A地点)

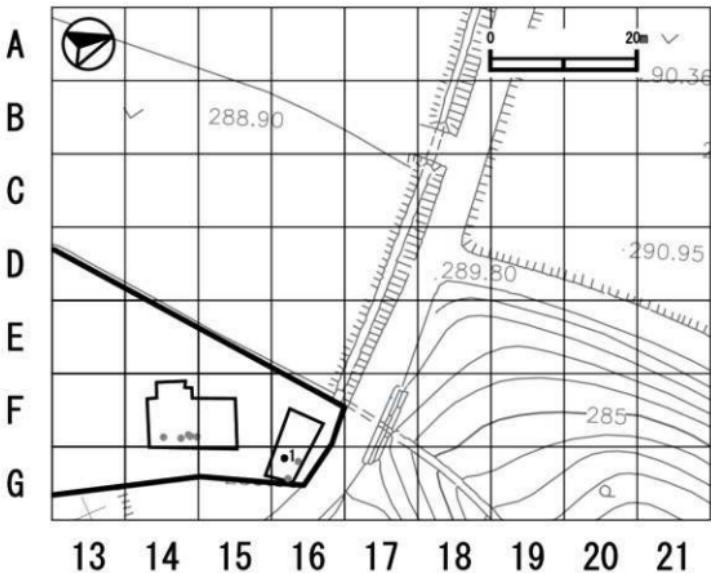


第6図 土層断面図3 (B地点)

## 第2節 旧石器時代の調査成果

### 第1項 調査の概要

旧石器時代の遺物が確認されたのは、平成18年度調査範囲のF-16区7トレンチ及び7トレンチ拡張部分のみである。F-16区は、調査区南東側から北西側にかけて入る谷の谷頭に当たる部分である。XIII層よりハンマーストーン1点、XVII層から剥片が1点出土している。図化したのはXIII層出土の1点のみである。



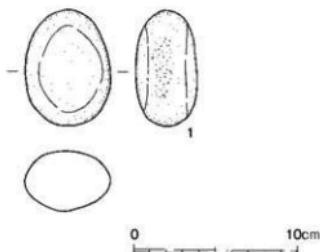
第7図 旧石器遺物出土状況図

### 第2項 遺物（第8図 1）

XIII層出土遺物は1点のみである。

1は河原から採取してきたと思われる円礫を利用したもので、側面にわずかに敲打痕が確認されることからハンマーストーンであると考えられる。

最大長70mm、最大幅51mm、最大厚38mm、重さ204.5gを測る。



第8図 旧石器出土遺物

### 第3節 繩文時代の調査成果

#### 第1項 調査の概要

縄文時代早期の包含層はアカホヤ火山灰層であるVb層と薩摩火山灰であるIX層との間のVI~VIII層である。

遺構・遺物はE~G-15・16区、D~F-30~35区を中心に分布している。

縄文時代前期~後期の包含層は、霧島御池火山灰層の二次堆積層であるIVa層とアカホヤ火山灰層の二次堆積層のIVa層・Va層である。圃場整備による天地返しのため削平されており、遺物が確認されたのは、D~F-30区~34区のB地点の一部のみである。

縄文時代晩期の包含層は、IIIb・IVa層である。包含層が残存しているのは、宅地部分であったため、圃場整備による天地返しを受けていないB~F-1~7区のC地点のみである。

#### 第2項 遺構

##### 1 縄文時代早期

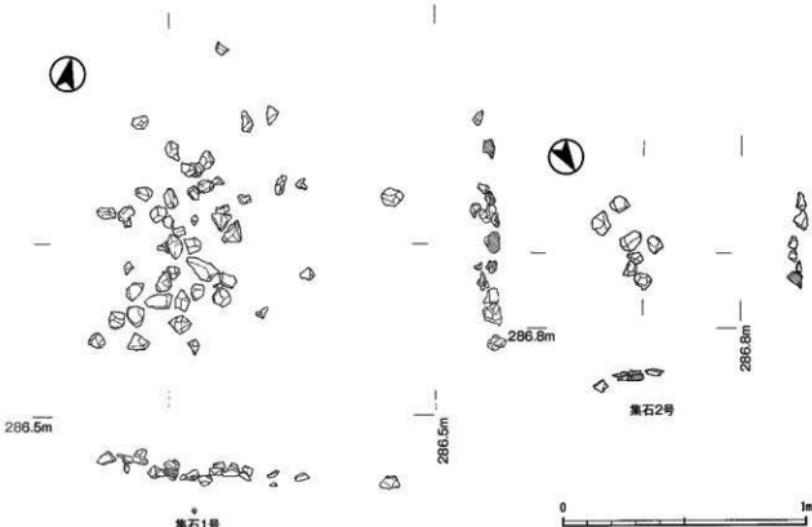
###### (1) 集石

###### 集石1号（第9図左）

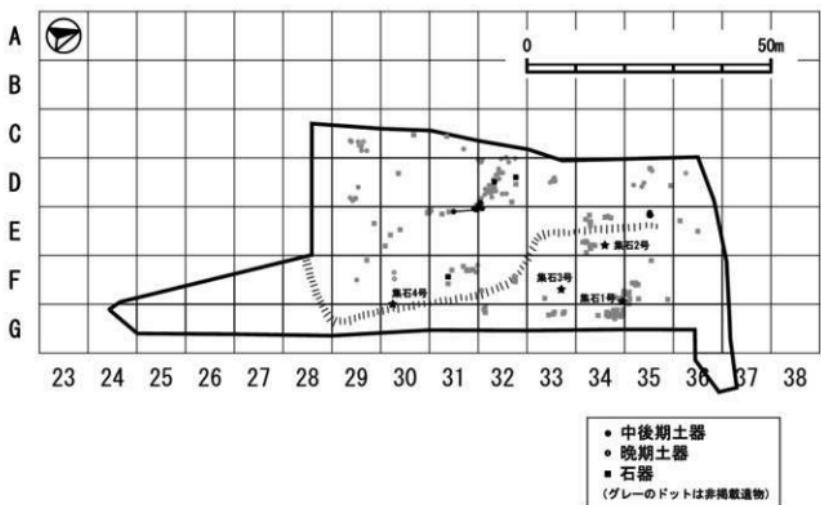
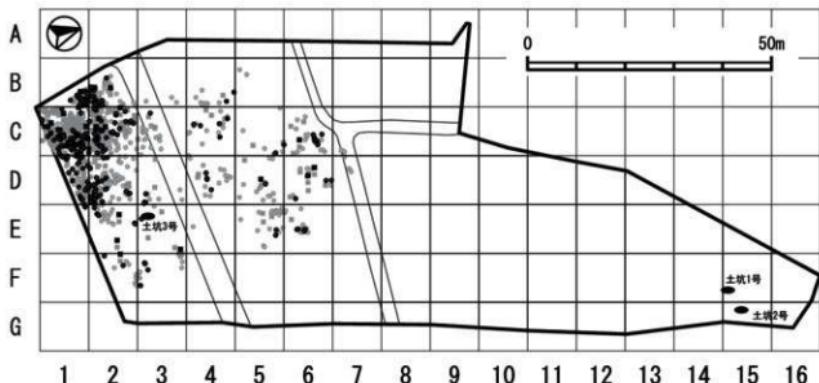
F-34区、VII層上面で検出された。こぶし大前後の角礫合計49個の石を確認した。被熱により赤化したり、破碎した石が多く見られる。堀込みは確認されなかった。石材は安山岩を中心であるが、頁岩も4個確認された。

###### 集石2号（第9図右）

E-34区、VII層上面で検出された。7個の石を確認した。堀込みは確認されなかった。石材は安山岩である。



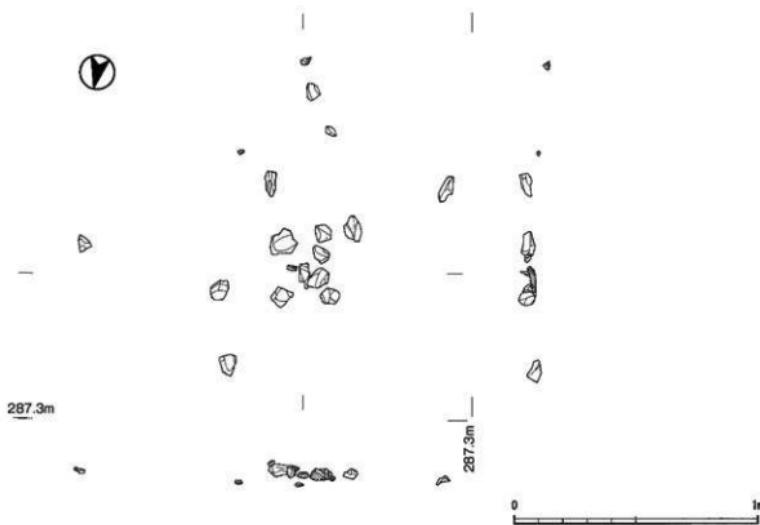
第9図 縄文時代早期集石1



第10図 繩文時代遺物出土状況図

### 集石3号（第11図）

F-33区、VIII層上面で検出された。12cm程度のやや大きめの角礫を含み合計18個の石を確認した。堀込みは確認されなかった。石材は安山岩が中心であるが、熱で破碎した頁岩も確認できた。軽石も1個確認された。



第11図 繩文時代早期集石2

## 2 繩文時代前期～後期

### (1) 集石

#### 集石4号（第12図）

F-30区、IVa層で検出された。34個の石を確認した。被熱により赤化したり、ひび割れたりした石もあった。堀込みは確認されなかった。石材は安山岩が中心であるが、砂岩、凝灰岩、頁岩、軽石なども確認された。

### (2) 土坑

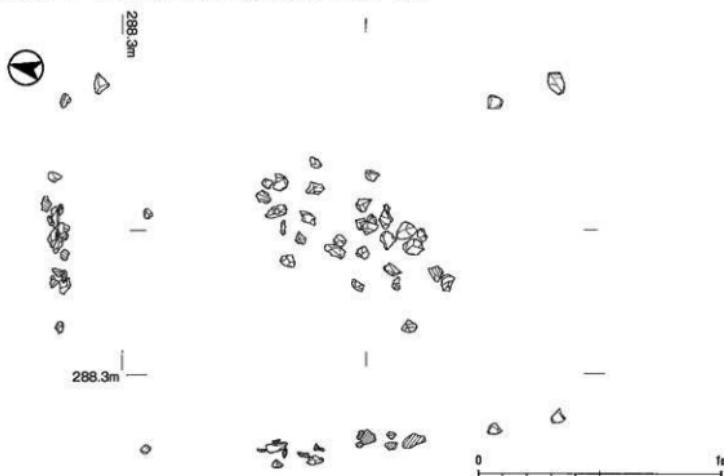
#### 土坑1号（第13図左）

F-15区、VIII層上面で検出された。平面形は、直径約80cmの円形で、検出面からの深さは、約40cmを計り、X層のチョコ層上面まで堀り込んでいる。底面形も直径約50cmの円形を呈する。埋土はIV層にVib層のP11のバミスが混じった土である。

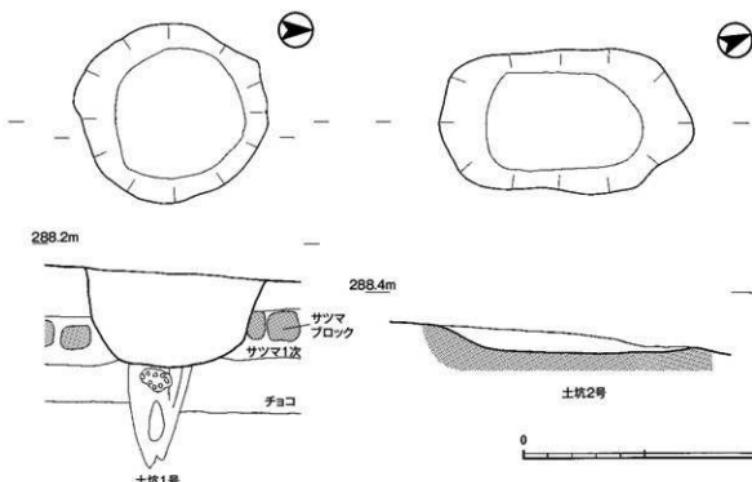
落とし穴である可能性も考え、断ち割り調査を行ったところ、樹痕と思われるしまりのないX層混じりの黒色土の部分と、XIII層と思われるブロックが確認された。X層中に落とし穴の底面に見られる逆茂木の跡のような部分も一部確認できたが、逆茂木痕であるとは断定できなかった。

### 土坑2号（第13図右）

G-15区、VIII層面で検出された。平面形は、長径約100cm、短径60cmの楕円形で、検出面からの深さは、圃場整備の影響で表土の下がVIII層～IX層上面まで削平を受けている場所であるため、約10cmであったが、検出時のプランははっきりと確認できた。埋土は、IVa層の御池火山灰混じりの黄褐色の單一層である。逆茂木痕は確認されなかった。



第12図 縄文時代中期～後期集石

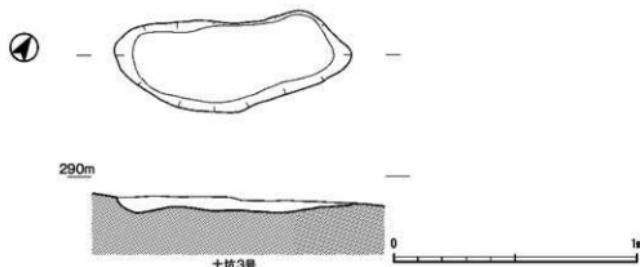


第13図 縄文時代中期～後期土坑

### 土坑3号（第14図）

E-3区、IV層面で検出された。平面形は、長径約100cm、短径40cmの楕円形で、検出面からの深さは、圃場整備の影響でIV層あたりまで削平を受けているため、6~8cm程度である。

埋土は、炭化物を含む黒褐色土である。



第14図 繩文時代晩期土坑

### 第3項 遺物

#### 繩文時代の土器

繩文時代の土器は、中期、後期、晩期のものが出土している。1~6類土器は、繩文時代中期から後期の土器である。出土数は少なく、出土範囲は削平の影響もあってかなり限られている。接合はできなかったが、1個体になると思われるものが多い。

圃場整備による削平を受けていないC地点に、晩期末~弥生時代初頭の土器が数多く出土している。これらの土器は、繩文時代と弥生時代の並行期の土器のため、どちらの時代の物と明確に区分しにくい時期の物である。そこで、時代区分は繩文時代の土器として扱うこととした。深鉢型を呈する土器は、「深鉢・壺形土器」と呼称することとした。また、本来は弥生時代として扱うべき壺形土器、高坏についてもこの項で取り扱うこととした。

#### 1類土器（第15図 2）

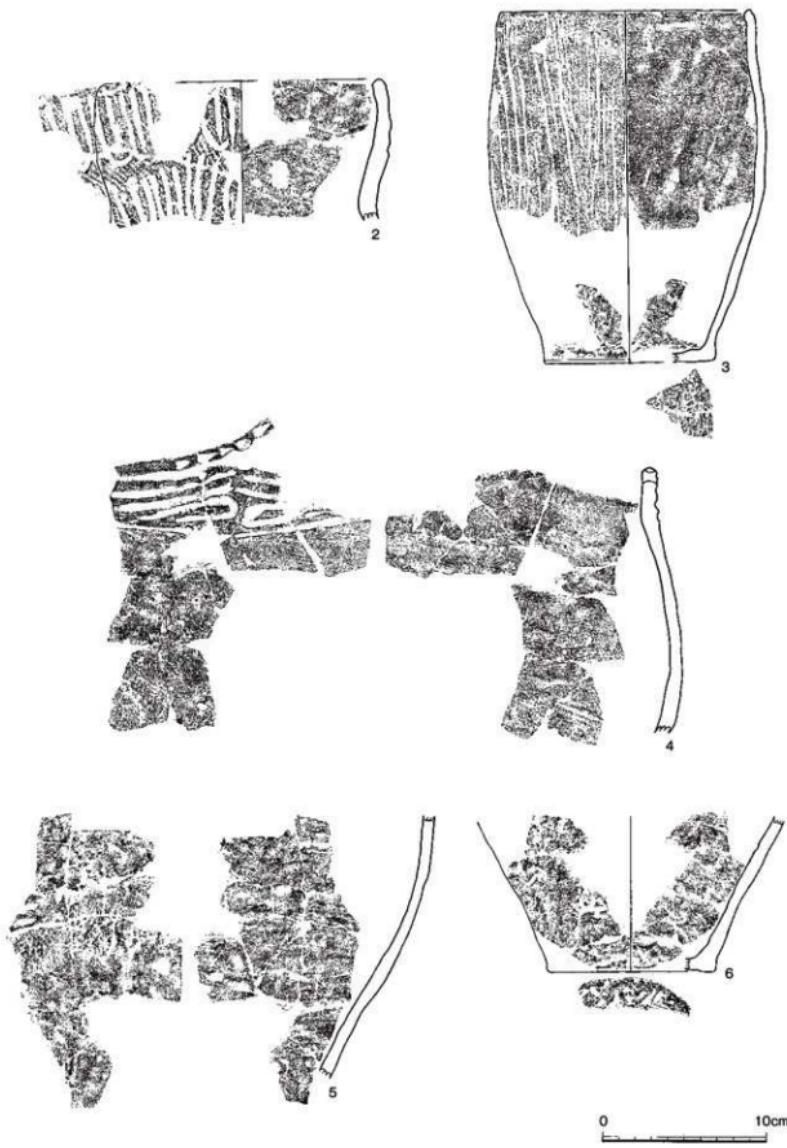
2はE-6区IVb層から出土した。キャリバー状の器形で、口唇部を丸く取める。文様は単節縄文を施後、口縁部及び頭部から胴部にかけて太めの沈線を縦位に施している。

#### 2類土器（第15図 3）

3はD-7区IVb層から出土した。砲弾形に近い器形で、底部は平底である。器壁は6~7mm程度で薄手である。文様は口縁部から底部近くにかけて密に浅い沈線を縦位に施している。胎土に大粒の金雲母がわずかに含まれる。

#### 3類土器（第15図 4~6）

4~6はD-31区を中心にしてIV層から出土した。接合はできなかったが同一個体と思われるものである。波状の口縁をもち口唇部に刺突を施す。口縁部付近のみに凹線文が施され胴部以下は無文である。底部には網代压痕が観察される。



第15図 1・2・3類土器

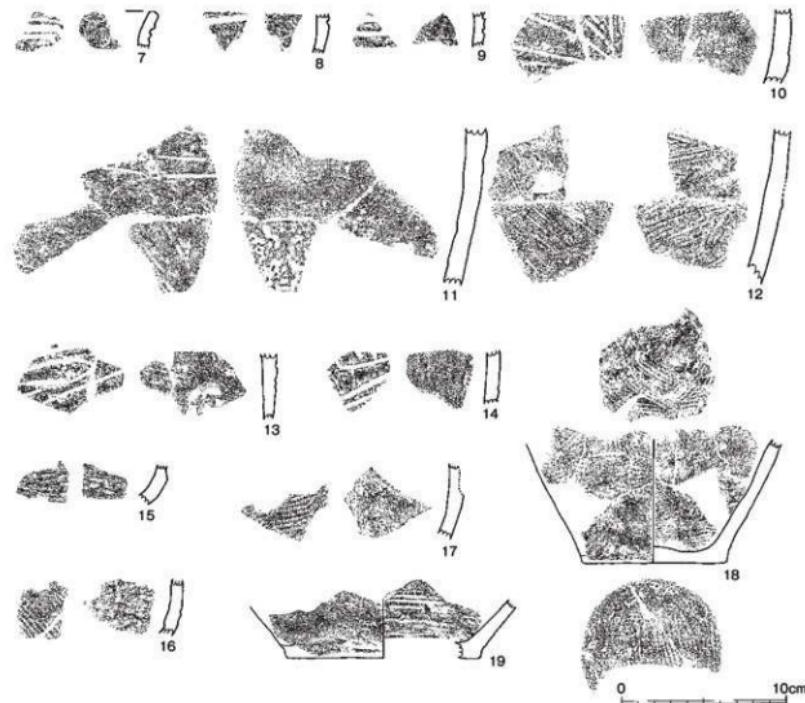
#### 4類土器 (第16図 7~15)

7・8・9は同一個体の可能性が高い。これらの土器は薄手の深鉢である。7は口縁部でやや外反し2本の平行沈線をもつ。8は文様帶の中位で、9は下位にあたると思われる。器面調整は外面が丁寧なナデ調整である。外面の色調は茶褐色で、内面は暗茶褐色である。胎土は金雲母、石英、長石を含み、焼成は良い。

10~14は同一個体の可能性が高い。これらの土器は厚手の深鉢である。13・14は2本の沈線を施した文様帶の中位にあたり10・11は下位にあたる。12は胴部で文様がない部分と思われる。器面調整は内面が外面より丁寧なナデ調整を施している。色調は外面が茶褐色の一部に黒斑点がみられ、内面は暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。焼成は外面が良くない。15は内外面に条痕がみられる土器である。色調は内外面暗茶褐色である。胎土は前項と同じで、焼成は良い。

#### 5類土器 (第16図 16・17)

16・17は外面に沈線と撲糸文が施されているものである。色調は外面が明茶褐色で、16の内面が暗茶褐色、17が黒色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。内面の色調はやや異なるが同一個体の可能性が高い。



第16図 4・5・6類土器

## 6類土器（第16図 18・19）

底部を一括した。18は底部である。器面調整は外面がナデで、内面が貝殻調整痕である。色調は茶褐色である。19は平底の底部からやや外開きに立ち上がる胴部である。器面調整は外面がナデで、内面が貝殻調整痕である。色調は内面底部が黒褐色で、他は茶褐色である。胎土はともに石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。

## 7類土器

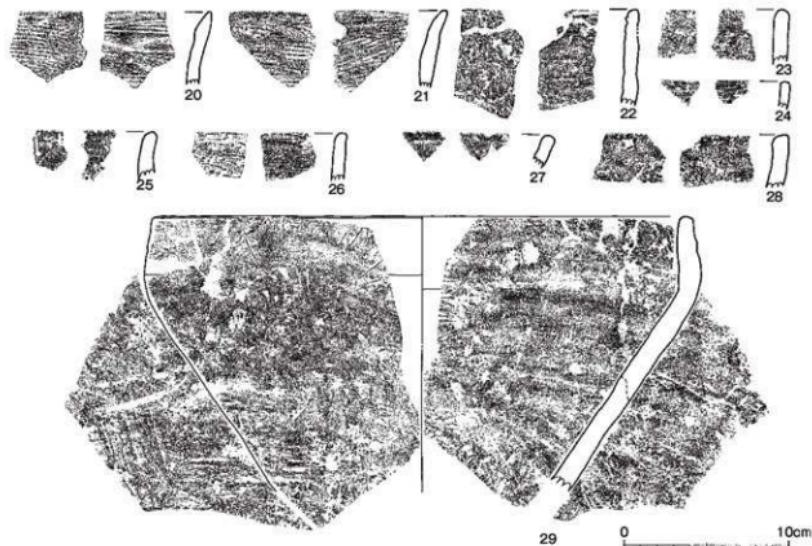
7類土器は、本遺跡の出土遺物の主体を占める一群である。先にも述べたが、縄文時代晩期から弥生期にかけての時期と考えられるため、縄文土器として扱うか、弥生土器として扱うか区別しにくい時期であるが、他に弥生土器が出土していないことから縄文時代晩期の土器として取り扱うこととした。

器形によって、深鉢・壺（7a類）、鉢（7b類）、浅鉢（7c類）、壺（7d類）、その他（7e類）で分類した。

### 7a-1類（第17図 20~29）

粗製の「深鉢・壺形土器」で突帯をもたず体部上半での屈曲もないタイプのものである。20~22は口唇部を丸く収め口縁部が、外反もしくは直口するものである。20、21は内外面に条痕による器面調整がなされている。23~27は小片のため鉢または浅鉢の可能性もあるが、内側の器面調整がやや粗いことからこの類とした。

28・29は突帯をもたず体部上半で内湾して立ち上がるものである。器壁も12~15mmほどあり分厚



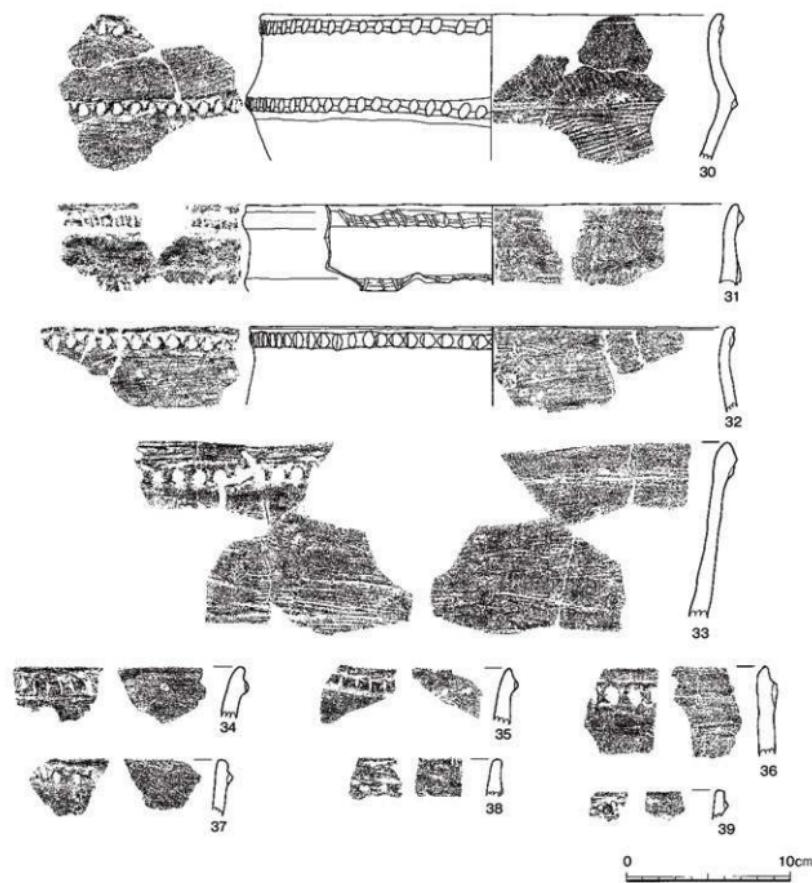
第17図 7a-1類土器

く、内外面とも非常に粗い。29は脇部に輪積みの跡がはっきりと観察できる。

7 a - 2類 (第18図 30~39)

「深鉢・壺形土器」で口唇部より少し下がった位置に横方向の刻みを有する突帯が巡っている。また、口縁部より下部の張り出した部分にも同様な突帯が巡っているものもある。突帯に付される刻目にはいろいろなバリエーションが見られる。

30~32は口縁部の下位にも同様な突帯が巡り、そこを脇部の最大径として内側へ屈曲して底部へと向かっている。口唇端部は丸まっており、口縁部は上端で幾分外反している。30・32は指頭状刻目突帯で31はヘラ状工具による刻目突帯である。器面は両面とも貝殻腹縁による条痕によって調整



第18図 7 a - 2類土器

されている。

33～39は口縁部片である。33、36、37、38、39は指頭による刻目突帯が34、35はヘラ状工具による刻目突帯が口唇部より少し下がった位置に巡る。33は口唇部が肥厚している。器面は両面とも貝殻腹縁による条痕によって調整されている。

#### 7 a - 3類 (第19図 40～48)

「深鉢・壺形土器」で口唇部に接した位置に横方向の刻みを有する突帯が巡っているものである。また、7 a - 2類と同様に、口縁部より下部の張り出した部分にも同様な突帯が巡っているものもある。突帯に付される刻目にはいろいろなバリエーションが見られる。

40は口縁部の下位にも同様な突帯が巡り、そこを胴部の最大径として内側へ屈曲して底部へと向かっている。口唇端部は丸まっており、口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。器面は内外両面とも貝殻腹縁による条痕によって調整されている。底部は平底で底部の上端はストンと真下へ落ちる。年代分析の結果<sup>14</sup>C年代2400±30yrBPの結果を得た。41～48は口縁部片である。42～46は指頭による刻目突帯が47、48はヘラ状工具による刻目突帯が口唇部に接した位置に巡る。44は口縁部より下部の張り出した部分にも同様な刻目突帯が巡っている。

#### 7 a - 4類 (第20図 49～58)

「深鉢・壺形土器」で口縁部より下部の張り出した部分に突帯が巡っているもの（口縁部の突帯の有無、位置が不明）である。突帯に付される刻目は指頭によるものが多い。54、55、58は内側が磨かれているため7 b類（鉢形土器）の可能性も考えられる。

#### 7 a - 5類 (第20図 59～62)

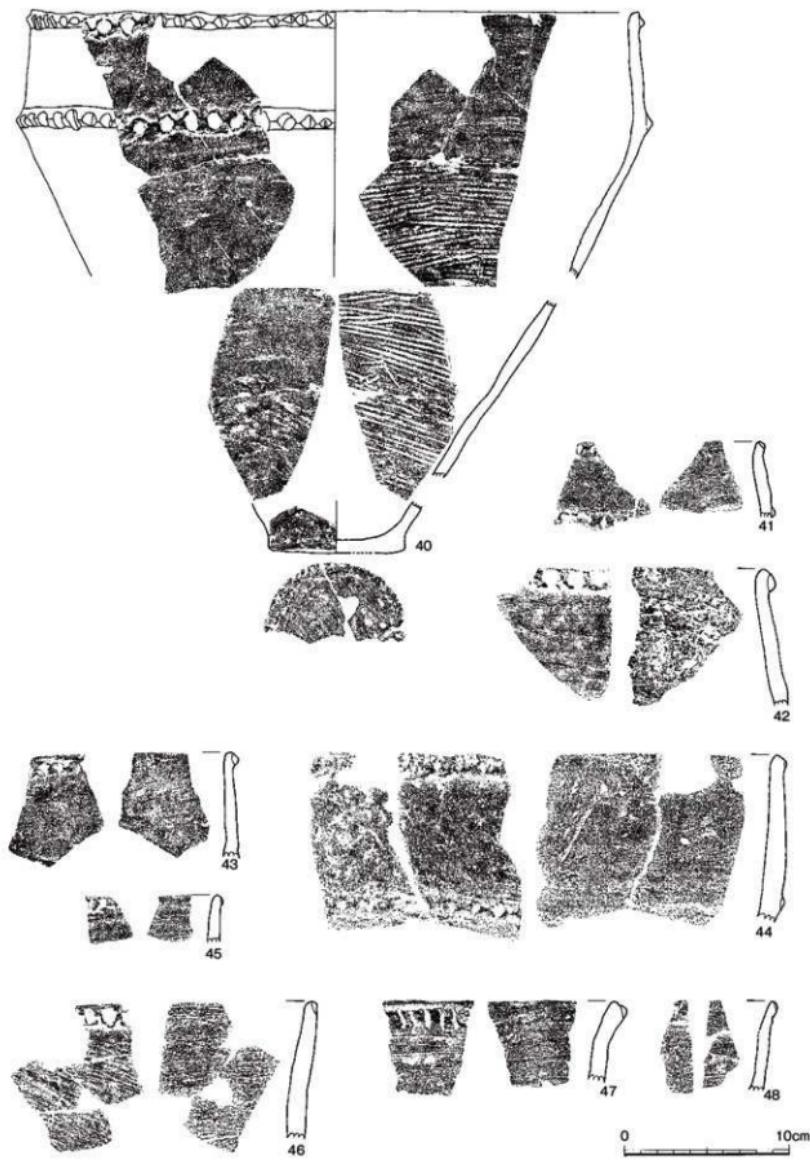
「深鉢・壺形土器」の底部片である。いずれも張り出しをもつ安定した底部である。62は網代網の圧痕をもつ。胴部その他に圧痕が見られないことから、土器作りの回転台代わりに使った痕と思われる。

#### 7 b類土器

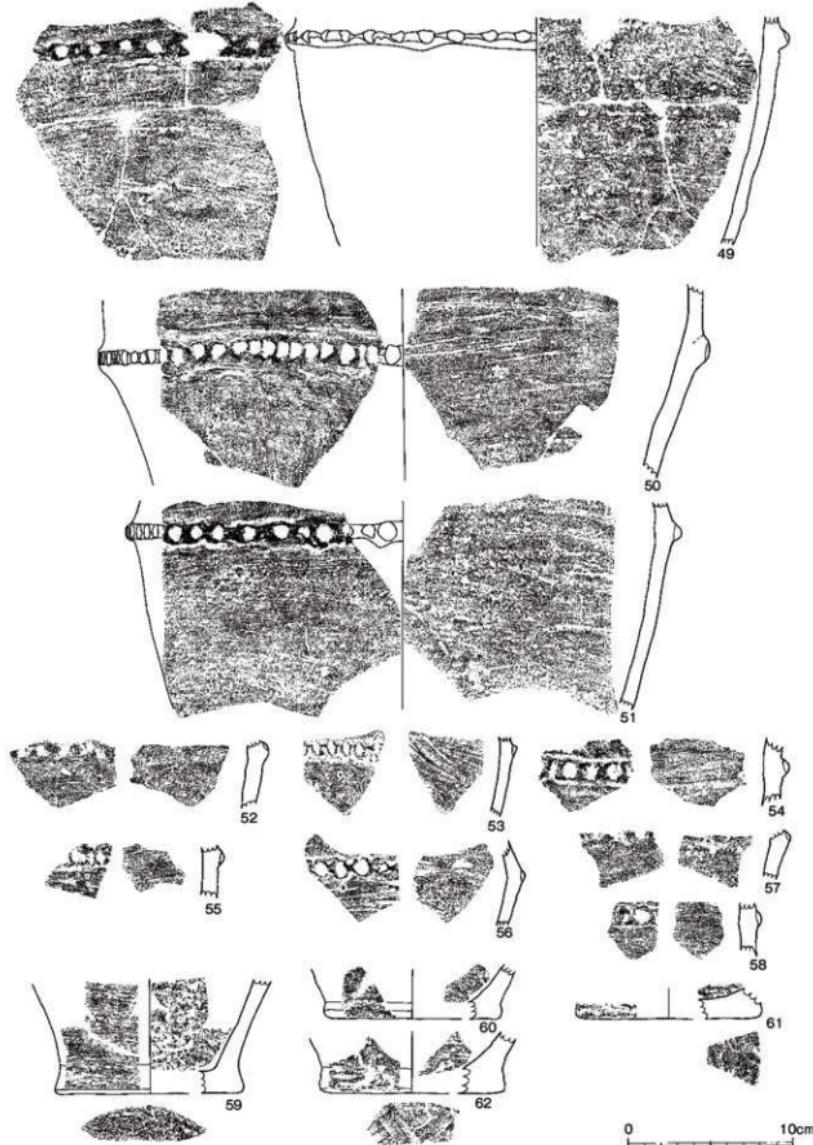
7 b類土器は中華鍋形の器形のものである。外面は粗いナデによるものの内面は丁寧に磨かれているのが特徴で、ススが多く付着しているものが多い。「深鉢・壺形土器」と同様に、突帯のあるなし、及び突帯の位置により分類した。組織痕をもたないものとものがある。

#### 7 b - 1類 (第21図 63～71)

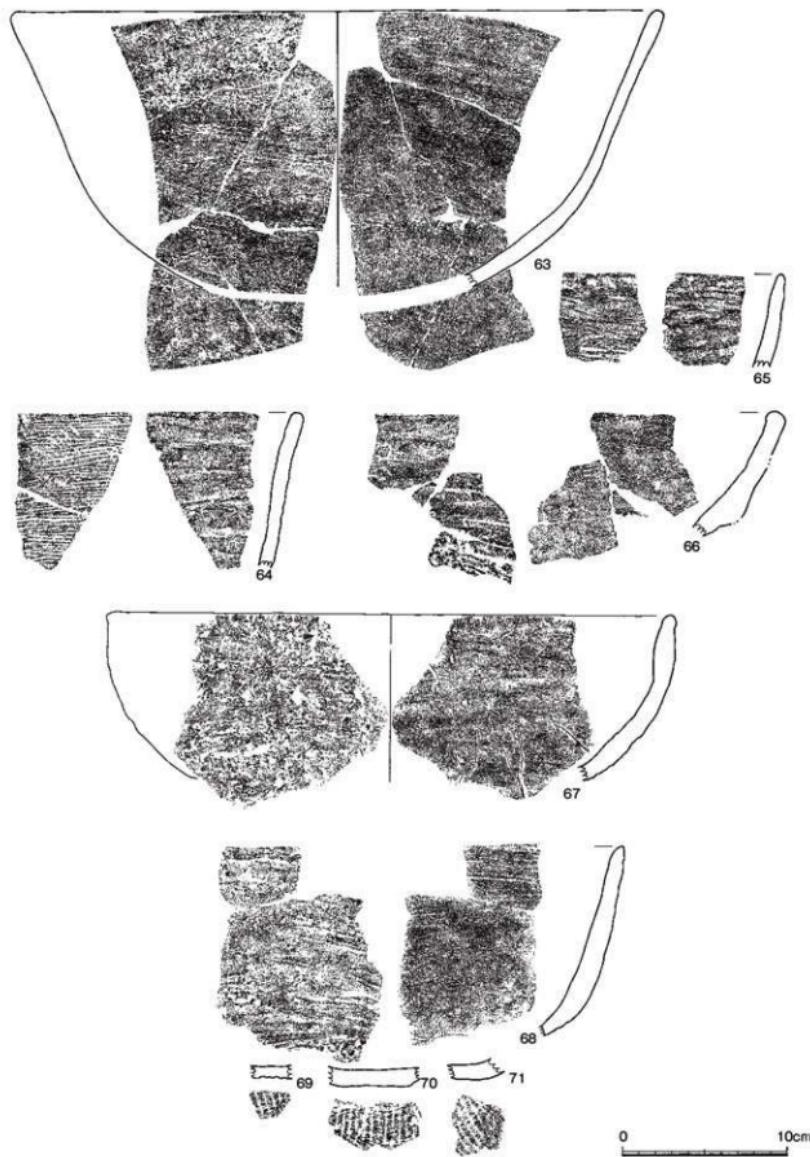
鉢形土器で突帯をもたないものである。63～65は組織痕をもたない（確認できない）ものである。63は内面は丁寧に磨かれ外面も丁寧にナデられている。外面口縁部付近にススが付着しており、年代分析の結果<sup>14</sup>C年代2500±30yrBPの結果を得た。64は外面に貝殻腹縁による条痕によって調整されている。65は内外面ともヘラケズリ後にナデによる器面調整が施される。66～71は組織痕をもつものである。66は底面部分との接合部分に組織痕が確認できる。内面は丁寧なナデである。67は内面はナデによる器面調整で、外面は粗い。胎土に白い砂粒を多く含む。外面底部付近にわずかに組織痕が確認できる。68と69～71は接合できなかったが胎土及び出土状況から同一個体と考えられる。底部に縦糸が4mm間隔の細かい編布圧痕が確認できる。内面は大変丁寧に磨かれている。



第19図 7 a-3類土器



第20図 7 a-4・5類土器

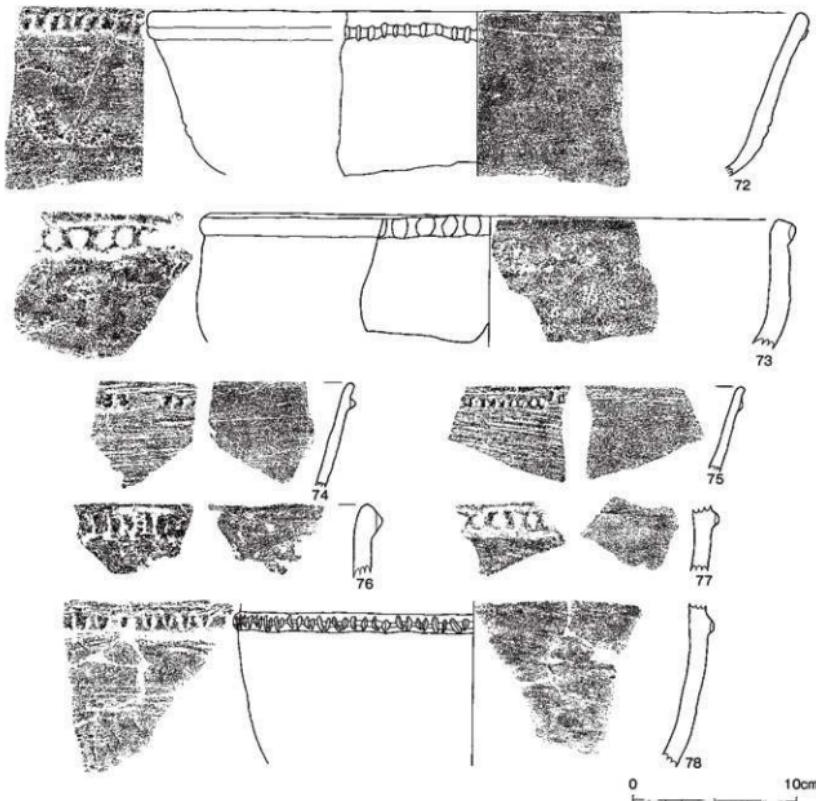


第21図 7 b-1類土器

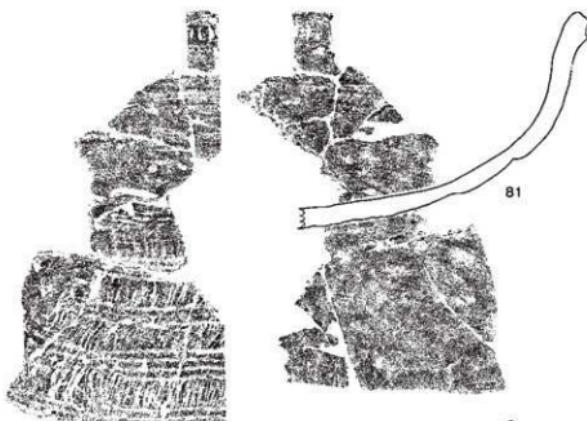
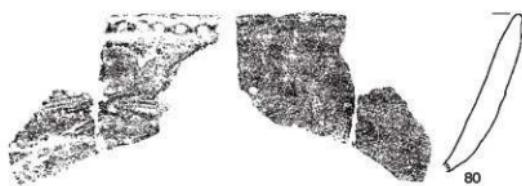
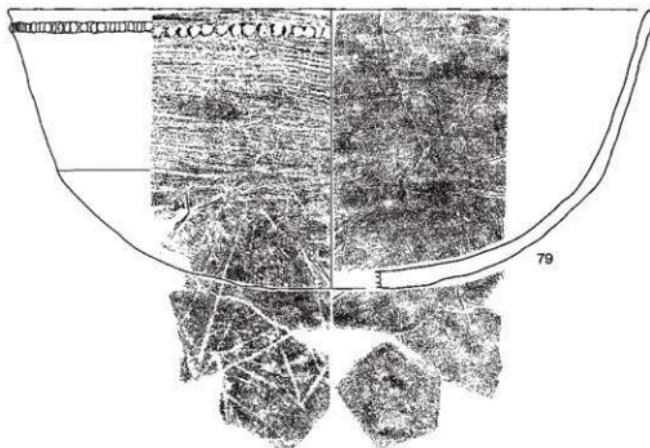
7 b-2類 (第22図 72~第23図 81)

鉢形土器で突帯の位置が口縁部より少し下がった位置にあり、72~78は組織痕が見られないものである。

72は口唇部から7mm~1cm下がったところに刻目突帯があり、内面は丁寧に磨かれている。外面口縁部付近にススが付着しており、年代分析の結果<sup>14</sup>C年代2505±30の結果を得た。73は一部口唇部に接するが3~5mm下がったところに刻目突帯があり、外面口縁部付近にススが付着している。74、75は器壁が5~7mmと薄く、内面は磨き、外面は貝殻条痕による器面調整が施される。76はヘラ状の工具で刻みを施したもので、胎土は白っぽい粘土で、突帯と口縁が一体化し口縁部下部が肥厚したように見えるものである。77·78は口縁部がないが下がった位置に突帯が付くと考えられる。77は内面はナデ調整である。78は内面はヘラケズリ後に磨きである。



第22図 7 b-2類土器(1)



0 10cm

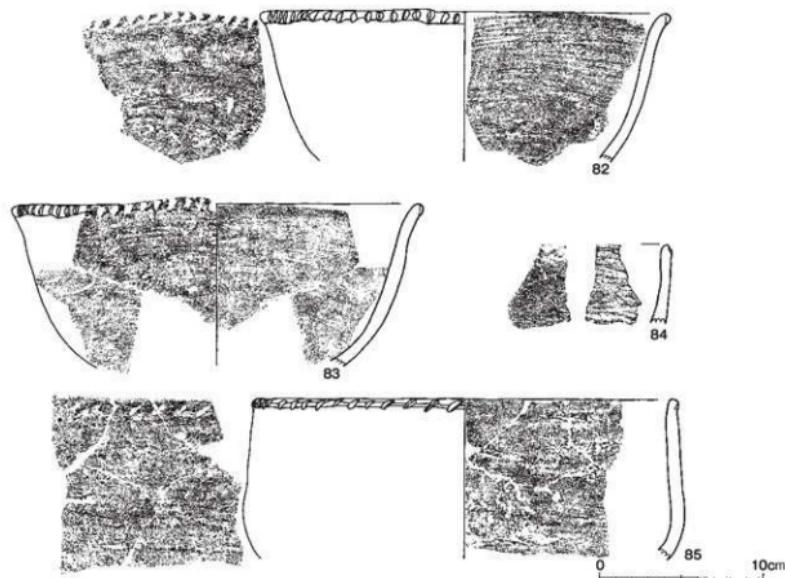
第23図 7 b-2類土器(2)

79~81は組織痕をもつものである。79は口径約40cm、器高17.5cmを測る。口縁部より約1cm下がった部分に幅約6mmの突帯が横位に一条巡る。突帯には指頭圧痕が施される。器壁が5~7mmと薄く、内面は丁寧に磨かれ、外面には貝殻条痕による器面調整が施される。底部から胴部下位に木葉痕が確認できる。木の種類は不明である。年代測定の結果 $2470 \pm 30$ yrBPの結果を得た。80は口縁部より約3mm下がった部分に幅約6mmの突帯が横位に一条巡る。突帯には指頭圧痕が施される。内面は丁寧に磨かれ、外面突帯付近にススが付着する。胴部端の底部との接合部付近に編布圧痕が観察される。81は突帯が口縁部と一体化するようになっており、口唇部下端が肥厚したようになっている。ヘラ状工具による刻みを施す。組織痕は編布圧痕で縦糸の間隔が約5mm~5mm~15mm~5mm~5mm~15mmといったように一様でなく変化している。底部から立ち上がる部分の組織痕は一部ナデ消されている。80・81とも白色粘土を胎土とするものである。

#### 7 b - 3類 (第24図 82~85)

鉢形土器で突帯の位置が口縁部に接した位置にあるものである。この類で組織痕をもつものは確認できなかった。

82は幅約6mmの突帯が口縁部に接し一条巡る。深さ3mm程の明瞭なヘラ状工具による刻みを施す。83は幅約1cmの突帯が口縁部に接し一条巡る。ヘラ状工具による刻みを施す。84は突帯は明瞭ではなく、棒状工具による浅い刻みを施す。内面はヘラ磨きによる調整である。85は直口気味に立ち上がる。ヘラ条工具により斜位にやや間隔を開けて刻みを施す。



第24図 7 b-3類土器

## 7 b - 4類 (第25図 86~第27図 127)

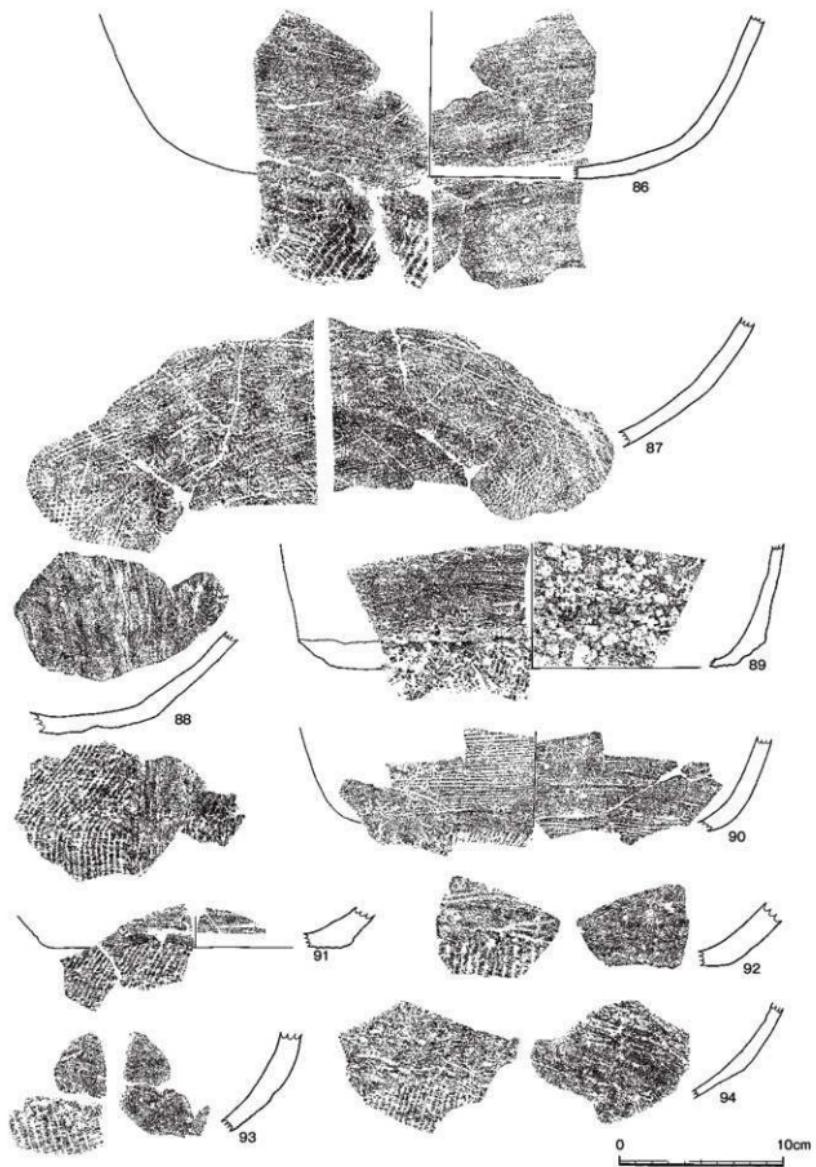
鉢形土器の胴部または底部で、突帯の有無、位置は不明だが組織痕をもつものである。

86は底部から胴部へ立ち上がる部分である。底面に編布圧痕をもつ。縦糸の間隔は約5mmではほぼ等間隔である。外面の底部組織痕の部分にはススは付着しておらず、胴部へと立ち上がる部分にススが付着しており、口縁部に近い部分に多くススが残っている。内面は丁寧に磨かれており、外面とは逆に底部が黒くなっている。87は外面とも貝殻条痕で器面調整されナデされている。底部から立ち上がる部分に一部だけ網目圧痕が確認できる。88も底部から胴部へ立ち上がる部分である。底面に編布圧痕をもつ。縦糸の間隔は約3mmと密である。底部に2箇所凹んだ部分があるが凹みの中にも組織痕が確認できる。底部から立ち上がる部分の組織痕がナデ消されているのが確認できる。86と同様外面の底部組織痕の部分にはススは付着しておらず、胴部へと立ち上がる部分にススが付着しており、口縁部に近い部分に多くススが残っている。89は底部から胴部へ立ち上がる部分で、底部と貼り合わせた部分である。凸凹した貼り合わせ部分に編布圧痕が一部確認できる。内面は剥落が激しい。90は胴部へと立ち上がる部分に編布圧痕が一部確認できる。外面は貝殻条痕による器面調整が横位に施される。内面は貝殻条痕による器面調整後ナデされている。91は縦糸間隔約3mmと密である。底面の薄くなった部分にも組織痕が確認できる。92は縦糸が約7mm間隔であるが、磨滅のため横糸は確認できない。93は縦糸が約5mm間隔である。94は縦糸の間隔が約3mmと密である。87以外はいずれも編布圧痕である。89~93の胎土は、白っぽい粘土である。

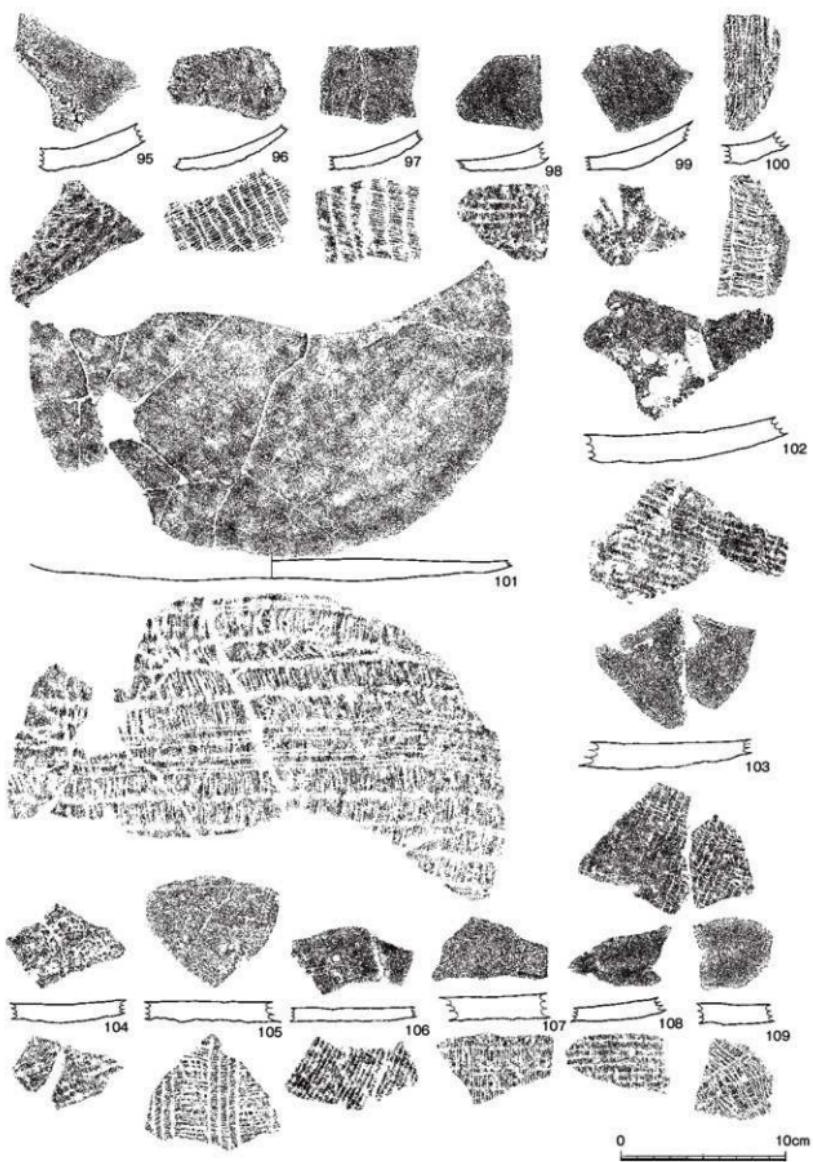
95は縦糸間隔が11mmの編布圧痕をもつ。外面の胴部へと立ち上がる付近の圧痕はナデ消されている。内側は丁寧に磨かれており、底部の平坦に近い部分にススが付着している。96は縦糸間隔が3mm~11mmと変化している。縦糸の継ぎりが明瞭に観察できる資料である。97は縦糸間隔が12mmの編布圧痕をもつ。内面は丁寧に磨かれている。98・99の内面は内黒土師器のように黒く磨かれている。100は縦糸間隔が23mmと広く横糸も詰まっていない。101は直径30cmを越える平板状の底部で内面は丁寧に磨かれている。縦糸間隔は2mm~5mm~2mm~5mm~2mm~15mmといったように縦糸の幅を変えることによってデザイン性に富んでいる。102~104は磨滅のため組織痕が見えにくいか縦糸間隔6mm程度の編布圧痕をもつ。白っぽい粘土で同一個体の可能性も考えられる。104は内面にススが付着している。105は縦糸間隔6mm~6mm~6mm~22mmと縦糸の幅を変化させている。106は縦糸間隔3mm、横糸も1cm内に9~10本と大変密である。107~122も編布圧痕をもつ底部片である。111は内面に貝殻条痕による器面調整が見られる。縦糸間隔14mmで横糸は詰まっていない。116、117は縦糸間隔が3mmで横糸も大変密である。123は縦糸間隔が7mmの編布圧痕をもつ。編布圧痕の上に粘土を薄く貼り付けている部分が観察できる。124は縦糸間隔が10mmの編布圧痕をもつ。編布圧痕の上に粘土を薄く貼り付けている部分が観察できる。

125~127は網目圧痕をもつ底部片である。網の目の大きさは6~8mmと細かい網目である。

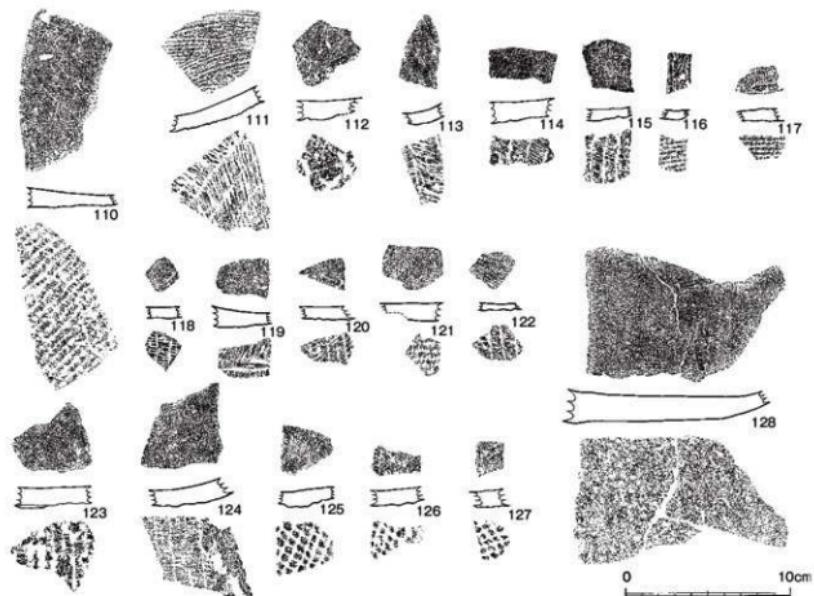
128は組織痕は観察できないが101と同様の平板状の底部である。組織痕の上に粘土が貼り付けられている可能性も考えられる。



第25図 7 b-4類土器(1)



第26図 7 b-4類土器(2)

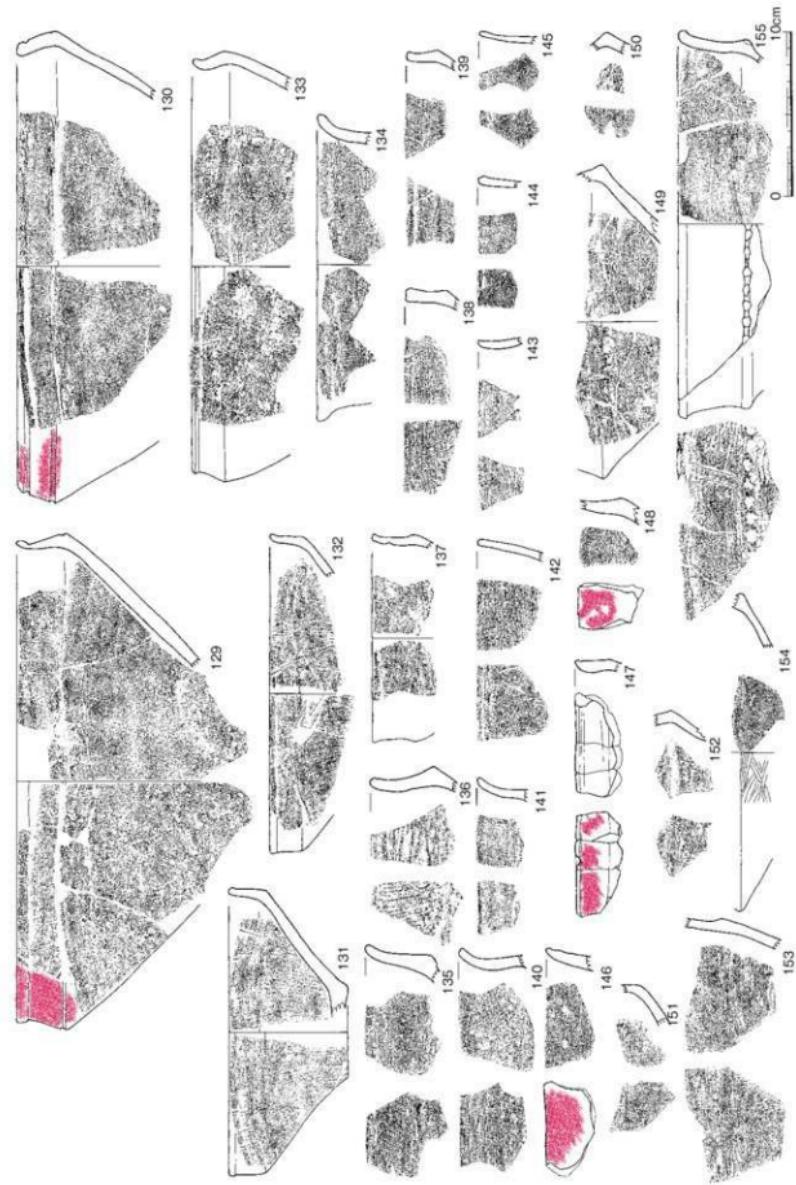


第27図 7 b-4類土器(3)

#### 7 c 類土器 (第28図 129~155)

7 c 類土器は浅鉢形土器である。逆「く」の字形のものが多く口縁部と屈曲部に沈線をもつものも見られる。129・130は口縁部と屈曲部に沈線をもち屈曲部に丹が確認される。陵から口縁部にかけての立ち上がり方は内傾している。129は復元口径29.8cm、130は復元口径27.5cmを測る。130・131は口縁部に沈線をもつ。口縁部下方の陵からの立ち上がりはほぼ真上に立ち上がる。器面調整は内面口縁部付近は横方向の内面の陵より下位は縦方向の丁寧なナデ調整及びヘラ磨きによって仕上げられている。131は復元口径15.8cm、器高7.4cmを測る。132は復元口径18.6cmを測る。134は外反しながら立ち上がる。復元口径19cmを測る。内外面ともナデによる器面調整である。

135~147は口縁部である。外面の口縁部下方の陵から口縁部にかけての立ち上がり方には陵が明瞭で内傾するものや、ほぼ真上に立ち上がるもの、外反するものなどいくつかのパターンがある。また、口唇部の形態も丸みを帯びるもの、平坦になるもの等いくつかのパターンがあるようである。148~154は屈曲部である。147・148は丹が確認される。154は器面調整は内面はヘラ磨きによって仕上げられている。155は口縁部より下部の屈曲部に横方向の刻みを有する突帯が巡っている。口唇部端は丸まっており、口縁部は上端で幾分外反している。内面は横方向のヘラ磨きで丁寧に仕上げられている。内面の器面調整、器高等の違いから浅鉢形土器であると考えられる。



第28図 7C-1類土器

### 7c-2類 (第29図 156~163)

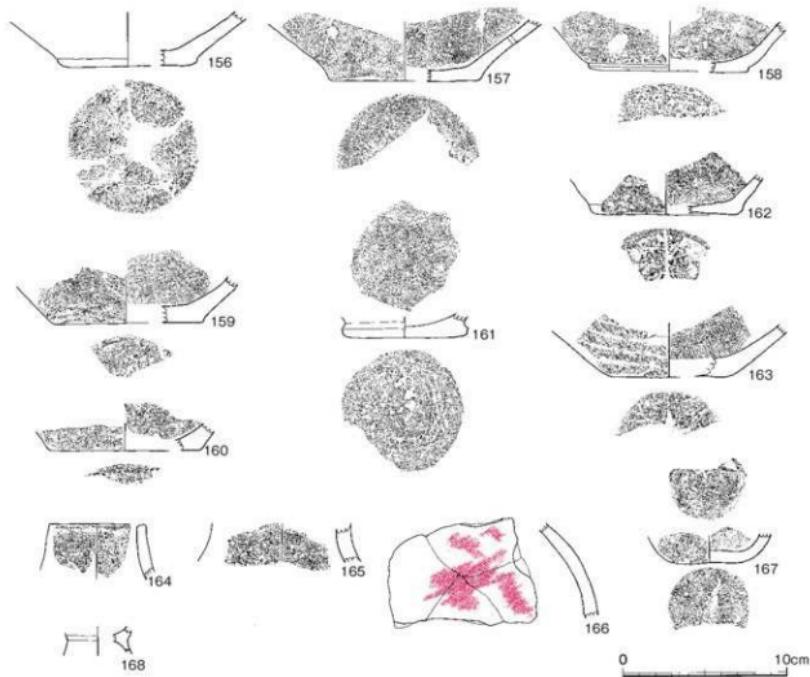
156~163は浅鉢形土器の底部であると思われる。156は内面の剥落が激しい。157は内面が研磨されており、補修孔と思われる穿孔が一箇所確認される。162は底部に木葉痕が確認される。木の種類は不明である。163は胴部からのラインが角が無く底部につながるもので、底部ではなく胴部に編布圧痕をもつものである。縦糸間隔が約7mmで横糸はナデ消されているため確認しにくいが密である。

### 7d類 (第29図 164~167)

7d類は小片のため確実に壺形土器であるとはいえないが、壺形土器の可能性のあるものである。164は脚の可能性もあるが径がやや小さいことからこの類とした。165・166は丹塗りが確認された。165は壺形土器の口縁部、166は壺形土器の胴部片の可能性が考えられる。167は成川式土器の壠のようだが、古墳時代遺物の出土例が他にないことから小型の壺形土器の可能性が考えられる。

### 7e類 (第29図 168)

168は壺部と脚部の接点に巡らす突帶でしか確認することができないが、高壺形土器であると考えられる。



第29図 7c-2・7d・7e類土器

## 1 石器

### 石鎌（第30図 169～187）

縄文時代の石鎌は、IV層及び表土から欠損品や未製品を含め21点出土した。以下のように分類した。

#### 1類：直線的な基部を持つ石鎌

169・170は直線的である。169は形状が正三角形である。170は先端部が欠損しているが、二等辺三角形である。

#### 2類：浅い抉りの基部を持つ石鎌

171・172は逆刺が鋭く、浅い抉りのある基部を持つ石鎌である。171・172は側刃が外湾する。173・174は、側刃が直線的である。175は側刃が内湾する。176は先端部が欠損している。

#### 3類：深い抉りの基部を持つ石鎌

177～179は逆刺が丸みを持ち、深い抉りのある基部を持つ石鎌である。177は側刃が鋸歯状になっている。180は逆刺が鋭く、深い抉りのある基部を持つ石鎌である。

#### 4類：剥片石鎌

181は逆刺が鋭く、深い抉りのある基部を持つ剥片石鎌である。

#### 5類：未製品の石鎌

182～187は自然面を残したり、押圧剥離がされていない面などを持つ石鎌である。

#### 6類：基部が欠損する石鎌

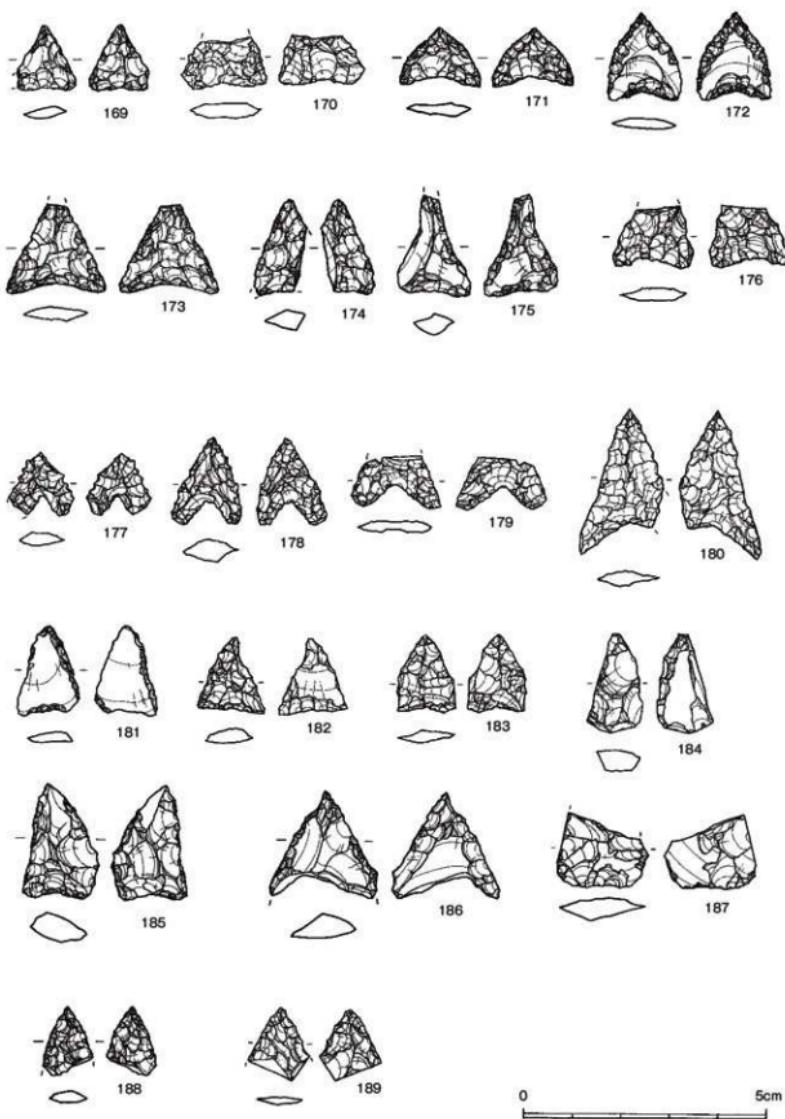
188・189は基部が欠損した石鎌の先端部である。188は側片がやや外反する。189は直線的である。

## 楔形石器（第31図 190）

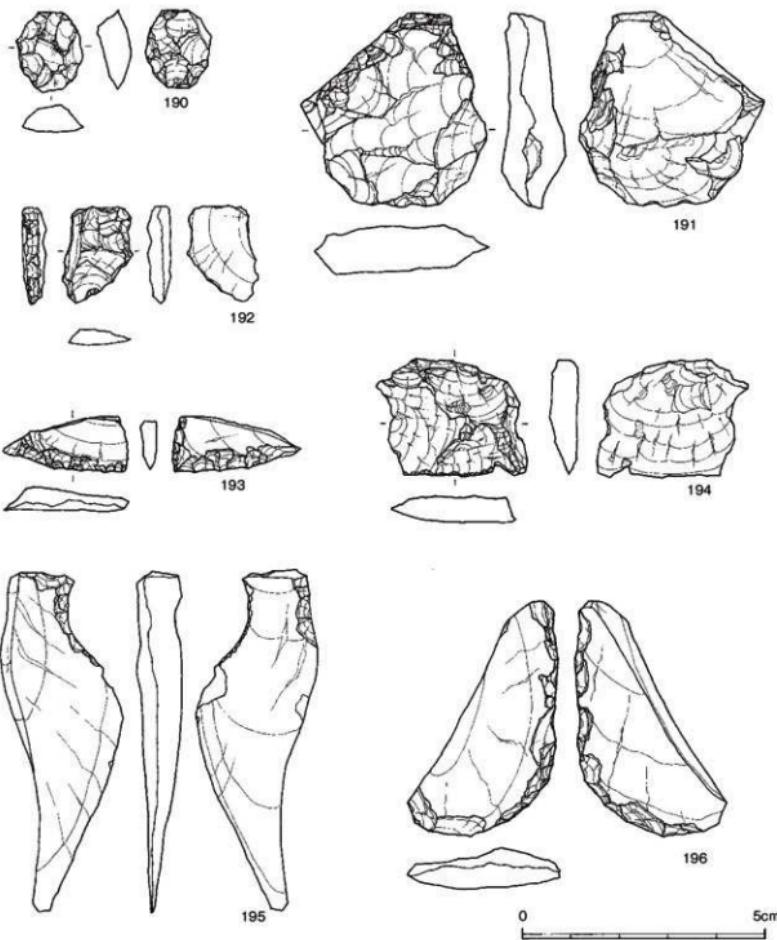
190は気泡の少ない質の良い鉛質状の黒曜石で作られたものである。製作としては小母岩を利用して、亀の甲羅状に両面に剥離を入れている。特に、幅の狭い部分は鋭利であるので機能としては楔形石器の可能性が高い。

## 削器（第31図 191～195）

191は灰色と黒色の色調が互層にみられるため石材はチャートと思われる。上部には風化面がみられ、そこから薄く剥いでいる。主要剥離面は凸凹がみられ、右側の刃に二次調整剥離を加え、交互剥離で鋸歯状の刃部を作っている。機能としては削器の可能性が高い。192は黒灰色を呈し、熱を受けた頁岩である。薄く剥がれた剥片を片面剥離で片刃状に剥離を入れて刃部を作っている。機能は削器の可能性が高い。193は黒灰色を呈し、熱を受けた頁岩である。薄く剥がれた剥片を両刃状に剥離を入れて刃部を作っている。機能は削器の可能性が高い。194は黒色の中に透明感があり、気泡を多く含んだ黒曜石である。薄く剥がれた剥片を片面剥離で片刃状にプランティングを入れて刃部を作っている。機能は削器の可能性が高い。195は黒灰色を呈し、熱を受けた頁岩である。薄く剥がれた剥片に小さな二次調整剥離を入れて刃潰しを作っている。機能は削器の可能性が高い。



第30図 縄文時代石器(1)



第31図 縄文時代石器(2)

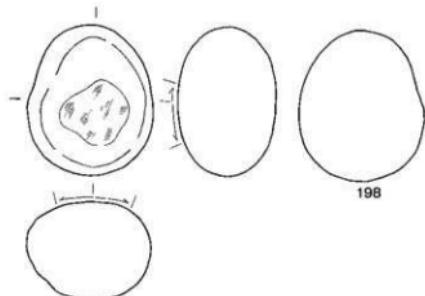
#### 石斧（第31図 196・197）

196は熱を受けた砂岩質で灰茶褐色を呈す。薄く剥がれた剥片を両刃状に二次調整剥離を入れて刃部を作っている。これは破損した刃部で、小型打製石斧の刃部の可能性が高い。

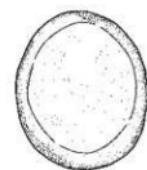
磨製石斧は197のみ1点の出土である。刃部の形は両刃で円刃形を呈するものである。左側面は研磨により整形されているが、右側面には敲打による整形が行われている。



197



198



199



200



201



202



203



204



205

0 10cm

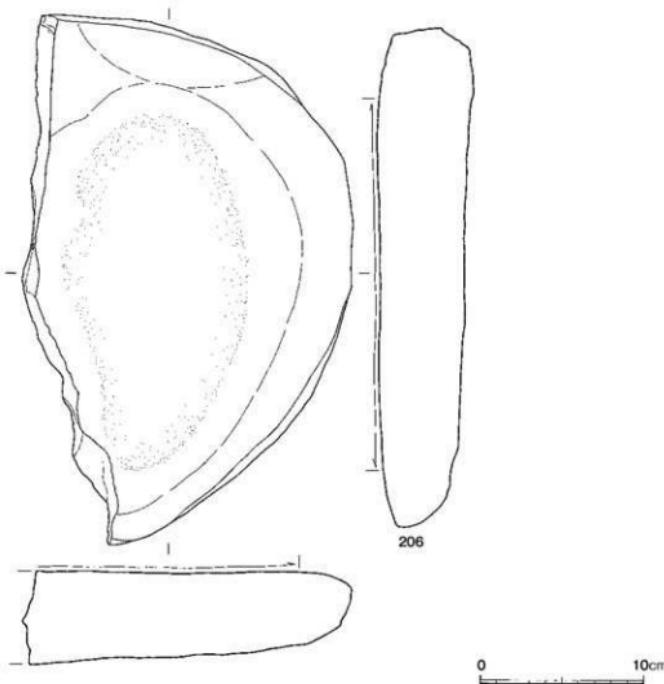
第32図 繩文時代石器(3)

### 磨石・敲石（第32図 198～205）

磨石・敲石類の分類は、磨面のみが観察されるものを磨石、磨面と敲打痕が観察されるものを磨敲石、敲打痕のみが観察されるものを敲石としている。198は球状の礫を利用した磨石である。片面のみに磨痕が観察される。199は扁平な亜円礫を利用したもので、両面に磨面があり、側面の全周にわたって敲打痕が観察される。200・201は長軸6cm以下の小型の礫を利用した敲石で、200は長軸に対して2・4・8・10時方向、201は4時の方向に激しい敲打痕が観察される。202は長軸の上端部に激しい敲打痕が観察される。203は長軸に対して2・4・10時の方向に激しい敲打痕が観察される。204は小型の礫を利用したもので上端部及び左右下端部に激しい敲打痕が観察される。205は三角形の礫を利用したもので、上端部及び下端部に敲打痕が観察される。

### 石皿（第33図 206）

206は平面形が亜円形で板状の礫を利用したものである。石材は砂岩である。皿部縁辺に一部敲打痕が観察される。片面のみ磨面が観察される。約半分ほどに破損していると思われるが、中央付近が光沢をもつほど平滑な磨面となっていることから、破損した後に砥石として使用したと考えられる。



第33図 繩文時代石器(4)

## 第4節 弥生時代～中世の調査成果

### 第1項 調査の概要

弥生時代から中世の包含層は、Ⅱ層の西暦1471年桜島起源の噴出物である文明ボラと御池火山灰の腐植土層であるⅣa層の間のⅢa・Ⅲb層である。

先述のとおり、圃場整備等により層が削平されており、古墳時代から中世の包含層が残存しているのは、B地点北西部の山側部分とC地点のみである。また、弥生時代の調査成果は、甕形土器の完形品1点のみである。

### 第2項 遺構

遺構は、Ⅱ層の文明ボラの下から、中世のものと考えられる落とし穴1基、道路状遺構4条、畑の跡1か所が確認された。跡は未調査部分に広がる可能性が考えられる。

#### 1 落とし穴（第35図）

F-30区と31区のちょうど境にあたる部分で検出された。検出面は、Ⅳa層上面である。平面形は、約260cm×約80cmの細長い方形で、検出面から底面までの深さは、約180cmを測る。底面形も約210cm×約30cmの細長い方形で、平坦である。断ち割り調査を行ったところ、底面の長軸の中央付近に、ほぼ一列に並んで逆茂木痕が合計11本検出された。逆茂木痕の平面形は約10cmの円形で、先端を尖らせてある。底面からの深さは、約20~40cmを測る。Ⅸ層の薩摩火山灰層まで打ち込まれていることが確認できた。

#### 2 畑跡（第36図）

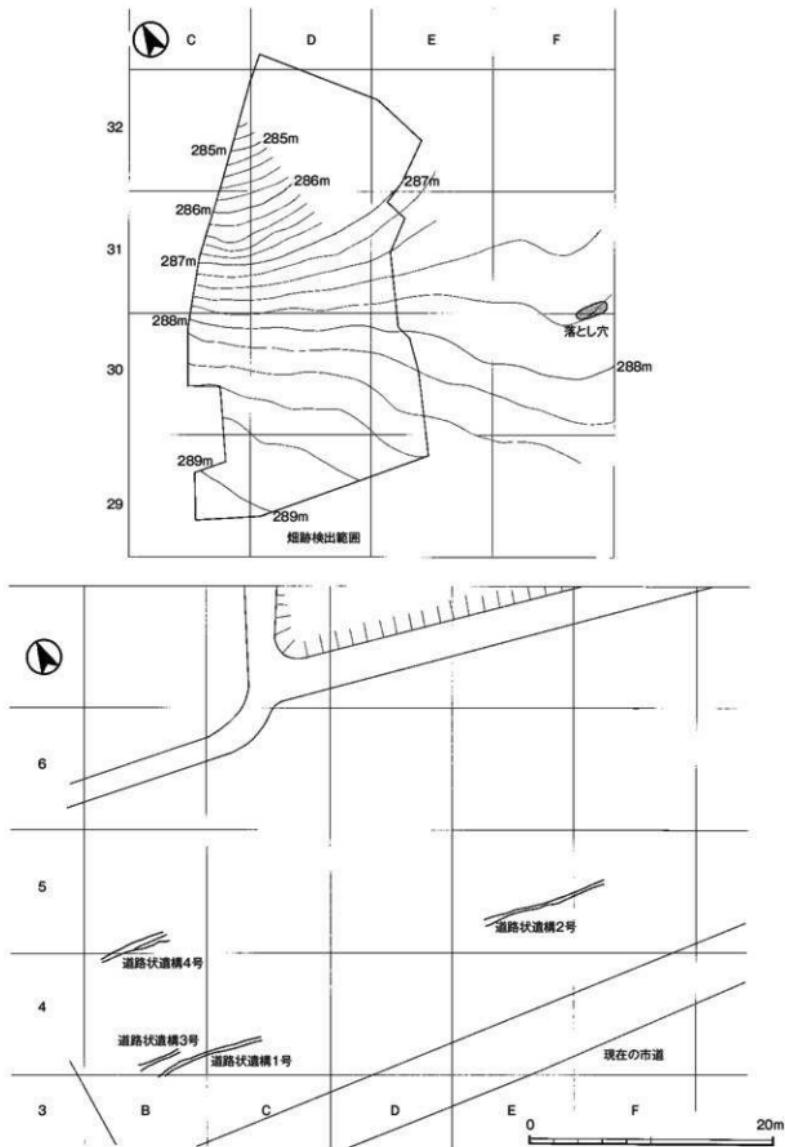
C-E-29~32区の北西方向に落ちていく斜面で検出された。検出面は、Ⅱ層の文明ボラ層（1471年）直下のⅢa層上面である。段々畑のように畑部分と段の部分を明確には分けづらいが、斜面の傾斜に沿って平坦な部分と段になる部分が織模様のように見えるのが確認できる。平坦部分の幅は概ね40cm、段の部分の幅は25cm程度である。

畑にはば直交する方向で、道跡と考えられる溝状に延びる部分が3条確認された。道跡Aは上場幅約90cm、下場幅約40cm、深さ約3~10cmである。道跡Bは、道跡Aとはば直角に交わる。谷の傾斜に沿って北側へ延びている。上場幅約80cm、下場幅約30cm、深さ約3~8cmである。道跡Cは、上場幅約90cm、下場幅約40cm、深さ約3cmである。削平により確認できなかつたが<sup>5</sup>、道跡AとE-30区で直交している可能性がある。

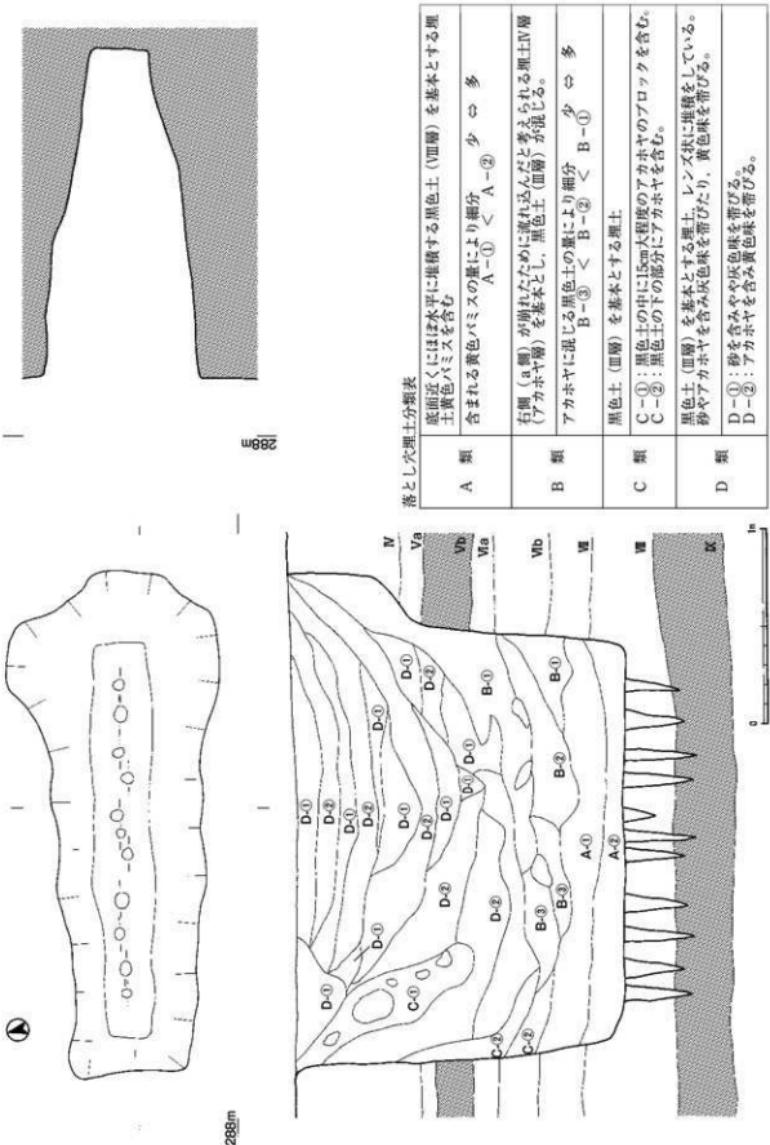
#### 3 道路状遺構（第37図）

B-F-4~5区で4条検出された。検出面はⅣa層上面である。4条とも現在の市道と平行する方向に延びており、道跡1号は、幅約40cm、長さ約10m。道跡2号は、幅約40cm、長さ約9m。道跡3号は、幅約40cm、長さ約3m。道跡4号は、幅約40~90cm（一部分時期差のある2条が重なっている）、長さ約6mが確認された。

4条とも硬化面を持つ。硬化面が2層確認された部分もあり、ある程度長期間使用されていたと考えられる。



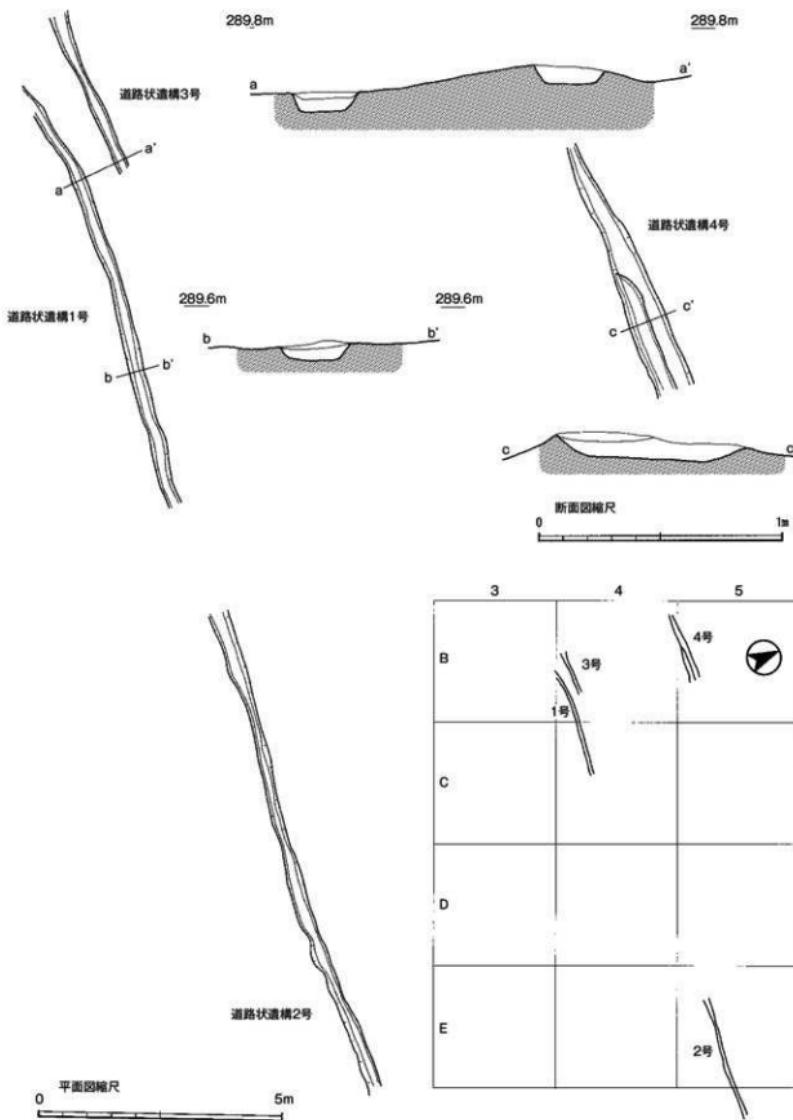
第34図 古代～近世遺構配置図



第33図 落とし穴実測図



第36図 番跡実測図



第37図 道路状造構実測図

### 第3項 遺物

#### 弥生時代（第38図 207）

弥生時代の遺物は、壺形土器の完形品1点である。207は壺形土器である。口縁部径18cm、底部径8.5cm、器高20.2cmを測る。底部は中空の脚台で、胴部はやや膨らみながら立ち上がり頸部てしまう。口縁部は「く」の字状に近く外反し、内面の稜線はわずかに認められる。外面は胴部下位はハケ目でその上位はヘラケズリ、胴部中位から頸部はハケによるカキ上げを施した後、横ナデが見られる。内面は胴部は工具ナデ、口縁部はハケ目である。

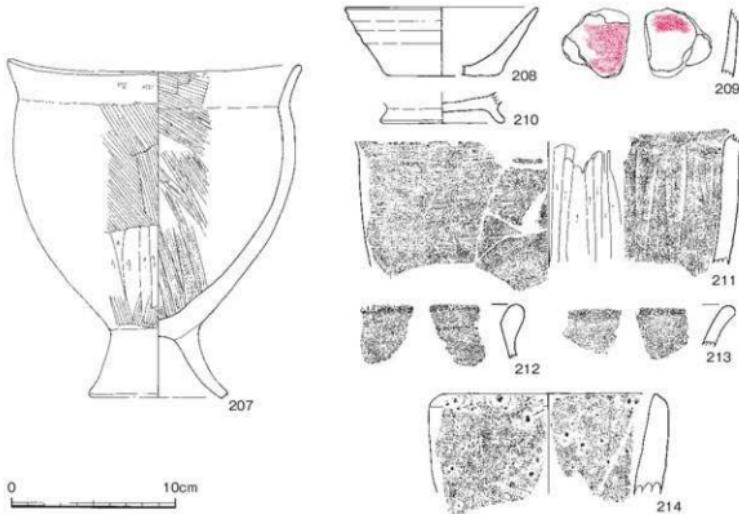
#### 古代（第38図 208～214）

208は口径12cm、器高4.5cmを測る壺である。ヘラ切りの底部から直線的に立ち上がり口縁部へ至るものである。209は赤色土器で壺と思われる胴部片である。外面・内面共に赤色顔料の塗布が認められる。

210は内黒土師器の碗と思われる。底部は径8.5cmの高台で、内面は黒色でヘラ磨きが認められる。

211～213は壺である。211は復元頸部径29cmを測る。口縁部は欠損するが、外反するものと思われる。調整は外面はハケ目、内面は胴部から頸部へかけてヘラケズリである。外面の一部にススの付着が認められる。212・213は口縁部が外反するもので、やや小型の壺である。212は内面にヘラケズリが認められ、胴部上位が薄くなっている。

214は口縁部径14cmを測る焼塩土器である。内面に布目压痕が認められる。胎土には3mm前後の小砾を多く含む。



第38図 弥生～古代出土遺物

第1表 繩文時代土器観察表(1)

排図番号	レコード番号	分類	文様・調査(外)	文様・調査(内)	色(外)	色(内)	胎土	焼成	備考	取上番号
15	2	1類	縄文・沈銀	ナデ	灰黄	灰黄	長石	硬質	856, 857, 858	
	3	2類	沈銀	ナデ	黒褐	黒褐	長・角・長	硬質	52, 799, 803ほか	
	4	3類	沈銀	ナデ	褐	褐	長・石・砂	硬質	82, 83, 197	
	5	3類	ナデ	ナデ	褐	褐	長・石・砂	硬質	89, 152, 160ほか	
	6	3類	ナデ	ナデ	褐	褐	長・石・砂	硬質	78, 192, 195	
	7	4類	沈銀	ナデ	明褐色	明褐色	長・角・長	硬質	743	
16	8	4類	沈銀	ナデ	明褐色	にふい・黃褐色	長・角・長	硬質	894	
	9	4類	沈銀	ナデ	明褐色	にふい・褐色	長・角・長	硬質	740	
	10	4類	沈銀	ナデ	褐	明褐色	長・角・長	硬質	1403, 1552	
	11	4類	沈銀	ナデ	明褐色	明褐色	長・角・長	硬質	1579, 1580, 1582	
	12	4類	ナデ	ナデ	にふい・褐	にふい・褐	長・角・長	硬質	1573, 1744	
	13	4類	沈銀	ナデ	明褐色	明褐色	長・角・長	硬質	1699, 1757	
	14	4類	沈銀	ナデ	明褐色	にふい・黃褐色	長・角・長	硬質	1742	
	15	4類	ナデ	ナデ	にふい・褐	褐	長・角・水	硬質	1617	
	16	5類	沈銀・既成文	ナデ	にふい・黃褐色	オリーブ褐色	長・角・水	硬質	859	
	17	5類	沈銀	ナデ	にふい・黃褐色	黒褐	長・角・水	硬質	786	
	18	6類	ナデ	ナデ	黃褐	にふい・黃褐色	長・角・水	硬質	1368, 1368, 1761	
	19	6類	条彫・ナデ	ナデ	條彫	にふい・黃褐色	長・角・水	硬質	116, 117, 118ほか	

第2表 繩文時代土器観察表(2)

排図番号	レコード番号	分類	文様・調査(外)	文様・調査(内)	色(外)	色(内)	胎土	焼成	備考	取上番号	
17	20	7-a-1類	条彫・ナデ	ナデ	黒褐	黒褐	長石	硬質	810		
	21	7-a-1類	条彫・ナデ	ナデ	黒褐	灰黄褐	長・角・長	硬質	900		
	22	7-a-1類	条彫・ナデ	ナデ	黒褐	灰黄褐	長・角・砂	硬質	外保付着	外・内保付着	
	23	7-a-1類	ナデ	ナデ	にふい・黃褐色	灰黄褐	長・砂	硬質	998		
	24	7-a-1類	ナデ	ナデ	黒褐	にふい・褐	長・角・砂	硬質	401		
	25	7-a-1類	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	赤褐	赤褐	長・角・砂	硬質	446		
18	26	7-a-1類	ナデ	ナデ	黒褐	黒褐	長・角・砂	硬質	737		
	27	7-a-1類	ナデ	ナデ	にふい・穀	にふい・穀	長・角・砂	硬質	1430		
	28	7-a-1類	ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	長・角・砂	硬質	1571		
	29	7-a-1類	ナデ	ナデ	にふい・黃褐色	にふい・黃褐色	長・角・砂	硬質	841		
	30	7-a-2類	安部・条彫・ナデ	ナデ	にふい・黃褐色	にふい・黃褐色	長・角・砂	硬質	1755, 1757		
	31	7-a-2類	安部・条彫	ナデ	灰黄褐	にふい・黃褐色	長・角・砂	硬質	外・内保付着	外保付着	
19	32	7-a-2類	安部・条彫	ナデ	条彫	条彫	長石	硬質	1818, 1887		
	33	7-a-2類	安部・条彫	ナデ	条彫	条彫	長石	硬質	1538, 1557		
	34	7-a-2類	安部・条彫	ナデ	条彫	条彫	長石	硬質	外保付着	1406, 1411, 1414ほか	
	35	7-a-2類	安部・条彫	ナデ	ナデ・ミガキ	陶灰	長・砂	硬質	外保付着	外保付着	
	36	7-a-2類	安部・条彫	ナデ	条彫	にふい・赤褐	長・角・砂	硬質	1019		
	37	7-a-2類	安部・条彫	ナデ	条彫	にふい・赤褐	長・角・砂	硬質	1142		
20	38	7-a-2類	安部・条彫	ナデ	条彫	陶灰	長・砂	硬質	外保付着	外保付着	
	39	7-a-2類	安部・条彫	ナデ	条彫	条彫	長石	硬質	541		
	40	7-a-3類	安部・ナデ	ナデ	にふい・黃褐色	にふい・黃褐色	長・角・砂	硬質	外・外保付着	916, 919, 920ほか	
	41	7-a-3類	安部・ナデ	ナデ	スクリ・ガサ	にふい・黃褐色	長・角・砂	硬質	1651		
	42	7-a-3類	安部・ナデ	ナデ	はく落	灰黄褐	長・砂	硬質	1355		
	43	7-a-3類	安部・ナデ	ナデ	はく落	灰黄褐	長・角・砂	硬質	1520		
21	44	7-a-3類	安部	ナデ	条彫・ナデ	浅黄	長・砂	硬質	1666, 1572		
	45	7-a-3類	安部	ナデ	ナデ・ミガキ	にふい・黃褐色	長・砂	硬質	外保付着	1022	
	46	7-a-3類	安部	ナデ	条彫	黒褐	長石	硬質	1123, 1124		
	47	7-a-3類	安部	ナデ	条彫	ナデ・オリーブ黒	長・砂	硬質	外保付着	1410	
	48	7-a-3類	安部	ナデ	条彫	陶灰	長・砂	硬質	外保付着	1771	
	49	7-a-4類	安部・ナデ	ナデ	灰黄褐	にふい・黃褐色	長・角・砂	硬質	外保付着	1361, 1362, 1400ほか	
22	50	7-a-4類	安部・ナデ	ナデ	条彫・ナデ	灰黄褐	にふい・黃褐色	長・角・砂	硬質	1502	
	51	7-a-4類	安部・ナデ	ナデ	条彫・ナデ	灰黄褐	にふい・黃褐色	長・角・砂	硬質	外保付着	1012
	52	7-a-4類	安部・ナデ	ナデ	ナデ	にふい・黃褐色	にふい・黃褐色	長・角・砂	硬質	1092	
	53	7-a-4類	安部・ナデ	ナデ	ケズリ	陶灰	長・砂	硬質	935		
	54	7-a-4類	安部・ナデ	ナデ	ケズリ・ナデ	陶灰	長・砂	硬質	467		
	55	7-a-4類	安部・ナデ	ナデ	ケズリ・ナデ	にふい・黃褐色	にふい・黃褐色	長・角・砂	硬質	1683	
23	56	7-a-4類	安部・ナデ	ナデ	条彫・ナデ	陶灰	長・砂	硬質	外保付着	1885	
	57	7-a-4類	安部・ミガキ	ナデ	条彫	灰灰	にふい・黄褐色	長・角・砂	硬質	1345	
	58	7-a-4類	安部・ミガキ	ナデ	条彫	陶灰	にふい・黄褐色	長・角・砂	硬質	1507	
	59	7-a-2類	安部	ナデ	ナデ	にふい・黄褐色	にふい・黄褐色	長・角・砂	硬質	896, 897	
	60	7-a-2類	安部	ナデ	ナデ	ナデ	にふい・黄褐色	長・角・砂	硬質	958	
	61	7-a-2類	ナデ	ナデ	ナデ	陶灰	長・角・砂	硬質	958		
24	62	7-a-5類	安部・灰褐	—	—	陶灰	にふい・黄褐色	長・角・砂	硬質	1342, 1484	
	63	7-b-1類	条彫・ミガキ	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	灰	にふい・黄褐色	長・角・砂	硬質	外・内保付着	1259
	64	7-b-1類	条彫・ナデ	ナデ	にふい・黄褐色	にふい・黄褐色	長・角・砂	硬質	外保付着	1623, 1567	
	65	7-b-1類	ケズリ・ミガキ	ケズリ・ミガキ	明灰色	明灰色	長・角・砂	硬質	外保付着	1623, 1746	
	66	7-b-1類	ナデ・陶灰	ナデ	灰黄	にふい・黄褐色	長・砂	硬質	外保付着	847, 848, 849	
	67	7-b-1類	—	ナデ	灰黄	陶灰	長・角・砂	硬質	1054		
25	68	7-b-1類	条彫	ケズリ・ミガキ	明灰色	明灰色	長・角・砂	硬質	外保付着	980, 1387, 1207	
	69	7-b-1類	条彫	ミガキ	にふい・黄褐色	にふい・黄褐色	長・角・砂	硬質	1533		
	70	7-b-1類	条彫	ミガキ	明灰色	明灰色	長・角・砂	硬質	外保付着	979, 1212	
	71	7-b-1類	条彫	ミガキ	明灰色	にふい・黄褐色	長・角・砂	硬質	405		

第3表 細文時代土器觀察表(3)

第4表 繩文時代土器観察表(4)

排因番号	1~175(計)	分類	文部・調査(外)	文部・調査(内)	色(外)	色(内)	断土	焼成	備考	取上番号
28	146	7 c - 1類	指揮さえ・ナデ	ナデ	褐	褐	長・角	硬質	各序帯あり	1435
	147	7 c - 1類	指揮さえ・ナデ	ナデ	褐	褐	長・角	硬質	各序帯あり	1248, 1301
	148	7 c - 1類	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	長・角	硬質	各序帯あり	479
	149	7 c - 1類	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	長・角	硬質	外保有	1027
	150	7 c - 1類	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	長・角	硬質	-	1396
	151	7 c - 1類	ミガキ	ミガキ	にふい黄褐	にふい黄褐	長・角	硬質	-	1458
	152	7 c - 1類	ナデ	ミガキ	明黄褐	にふい黄褐	長・角	硬質	-	1162
	153	7 c - 1類	指揮さえ・ミガキ	ミガキ	にふい黄褐	にふい黄褐	長・角	硬質	-	1001
	154	7 c - 1類	ナデ	ミガキ	風景觀	風景觀	長・角	硬質	-	1693
	155	7 c - 1類	ナデ	ミガキ	風景觀	風景觀	長・角	硬質	福井県・昭和47年	428, 440, 1657
29	156	7 c - 2類	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	長・角	硬質	-	1516
	157	7 c - 2類	ミガキ	ミガキ	にふい黄褐	にふい黄褐	長・砂	硬質	学札(焼成後)	1105, 1092, 1024
	158	7 c - 2類	指揮さえ・ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	長・角	硬質	-	1314
	159	7 c - 2類	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	長・角	硬質	-	1363
	160	7 c - 2類	ナデ	ナデ	褐	灰褐色	長石	硬質	-	315
	161	7 c - 2類	ナデ	ナデ	褐	黄褐	長・角	硬質	-	1014
	162	7 c - 2類	指揮さえ・ナデ	ナデ	浅黄褐	浅黄褐	長・角	硬質	近畿に本郷地あり	1496
	163	7 c - 2類	ナデ	ミガキ	にふい黄褐	黒	長・砂	硬質	近畿に本郷地あり	1615, 1635
	164	7 d類	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	長・角	硬質	-	1006
	165	7 d類	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	長・角	硬質	各序帯あり	1217
30	166	7 d類	ナデ	ナデ	明褐	褐	長・角	硬質	各序帯あり	1331
	167	7 d類	ナデ	ナデ	指揮さえ・ナデ	にふい黄褐	長石	硬質	-	1084
	168	7 e類	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	長・火	硬質	-	1682

第5表 弥生～中世遺物観察表

排因番号	1~175(計)	分類	文部・調査(外)	文部・調査(内)	色(外)	色(内)	断土	焼成	備考	取上番号
38	207	かの	ヘラケズリ	ナデ	黄褐	黄褐	長石	硬質	-	1821
	208	土師杯	ナデ	ナデ	浅黄褐	浅黄褐	長石	硬質	-	273
	209	赤色・器	ナデ	ナデ	浅黄褐	浅黄褐	長石	硬質	吉・丹波山陽古道	1801
	210	土師碗	ナデ	ミガキ	黑	黑	長石	硬質	-	353, 1764
	211	土筒かめ	ハケ目	ハラヨリ・ナデ	黄褐	黄褐	長石	硬質	-	1554, 1555, 1556ほか
	212	土筒かめ	ナデ	ナデ	黄褐	黄褐	長石	硬質	-	279
	213	土筒かめ	ナデ	ナデ	黄褐	黄褐	長石	硬質	-	Gトレー法
	214	埴造土器	指揮さえ・ナデ	布目压痕	黄褐	黄褐	砂粒	硬質	-	356
	215	土師碗	ナデ	ナデ	黄褐	黄褐	砂粒	硬質	-	-

第6表 石器観察表

排因番号	1~175(計)	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	区	部位	取上番号
30	1	ハンマーストーン	7.1	5.3	3.7	210	砂岩	71 G-6	13	1
	169	石頭	1.3	1.2	0.2	0.28	サヌカイト	Gトレ	4 a	372
	170	石頭	1.1	1.7	0.3	0.6	ob	C-1	4 b	1786
	171	石頭	1.2	1.6	0.3	0.36	サヌカイト	C-1	4 a	1703
	172	石頭	1.8	1.5	0.3	0.58	ob	D-1	4 a	1398
	173	石頭	1.8	2	0.3	0.86	サヌカイト	E-2	4 a	1602
	174	石頭	2	1.1	0.4	0.64	頁岩	Gトレ	4 a	566
	175	石頭	2	1.5	0.4	0.81	サヌカイト	Gトレ	4 a	616
	176	石頭	1.3	1.6	0.25	0.61	チャート	C-2	4 a	1457
	177	石頭	1.3	1.3	0.3	0.31	ob	D-6	4 b	865
31	178	石頭	1.7	1.4	0.4	0.68	タンパク石	D-5	4 b	886
	179	石頭	1.1	1.8	0.2	0.38	チャート	Jトレ	4 b	473
	180	石頭	3	1.7	0.3	0.33	サヌカイト	D-32	4	66
	181	石頭	1.8	1.3	0.2	0.41	サヌカイト	Gトレ	4 a	376
	182	石頭	1.5	1.4	0.3	0.63	サヌカイト	C-2	4 b	1289
	183	石頭	1.6	1.1	0.25	0.54	チャート	Gトレ	4 b	685
	184	石頭	20.1	15	0.4	1.25	砂岩	A施点	表様	-
	185	石頭	2.3	1.9	0.6	0.49	サヌカイト	B-2	4 a	1180
	186	石頭	2.2	2.2	0.5	1.65	サヌカイト	C-2	4 b	1284
	187	石頭	1.5	1.8	0.45	0.97	ob, 圆街	Fトレ	4 a	357
32	188	石頭	1.1	1.2	0.25	0.33	ob	F-31	4 a	410
	189	石頭	1.5	1.25	0.15	0.39	サヌカイト	C-2	4 b	1051
	190	ビニス	1.65	1.45	0.35	1.34	ob, 砂岩	D-6	4 b	863
	191	スクレイパー	4	3.8	1	17.22	チャート	B-1	4 a	1160
	192	スクレイパー	1.95	1.4	0.3	1.31	サヌカイト	C-1	4 a	1512
	193	スクレイパー	1.1	2.55	0.5	1.08	サヌカイト	C-2	4 b	1291
	194	UF	2.4	3.1	0.55	5.43	ob	F-3	4 b	1303
	195	スクレイパー	7	2.6	0.9	9.4	サヌカイト	E-2	4 a	1689
	196	打削石斧	4.8	3	0.9	7.64	砂岩	C-1	4 a	1428
	197	磨削石斧	11.5	5.7	2.7	195	安山岩	E-33	4	57
33	198	磨石	9.2	7.7	6	640	安山岩	C-6	4 b	873
	199	磨石	9.7	8.1	3.6	430	砂岩	C施点	表様	-
	200	磨石	5.5	4.6	2.6	100	砂岩	F-2	3 b F	1641
	201	磨石	5.6	4.1	2.1	70	安山岩	C-1	4 a	1440
	202	磨石	6.9	5.1	2.5	125	安山岩	B-2	4 b	1271
	203	磨石	7.1	4.7	3.2	150	安山岩	C-1	4 a	1432
	204	磨石	5.4	5	4	150	安山岩	C-1	4 a	1529
	205	磨石	7.1	6.2	4.4	230	安山岩	B-1	4 b	921
	206	石皿	32.3	20.2	5.8	5700	砂岩	B-2	3 b	1258

## 第5節まとめ

西原段Ⅰ遺跡は圃場整備等により、畠地であった部分はⅨ層～X層近くまで搅乱を受けている部分もあり、当初遺跡範囲としたA・B地点では、遺構・遺物はほとんど検出・出土しなかった。宅地部分であったC地点の試掘調査の結果、Ⅱ層の文明ボラも残存していることがわかり、Ⅳ層を中心とし縄文時代晩期の遺物包含層が確認され、遺跡範囲をC地点まで拡張し調査を行った。

調査の結果、旧石器時代～近世にかけての複合遺跡で、縄文時代晩期から弥生時代初頭への移行期を主とした遺跡であることが判明した。

### 旧石器時代について

旧石器時代の遺物が確認されたのは、平成18年度調査範囲のF-16区7トレンチ及び7トレンチ拡張部分のみである。F-16区は、調査区南東側から北西側にかけて入る谷の谷頭に当たる部分である。XIII層よりハンマーストーン1点、XVII層から剥片が1点出土している。

### 縄文時代について

#### 1 遺構

早期相当の遺構はVIII層上面で集石が3基検出された。集石はいずれも堀込みは確認できなかつた。石材はほとんどが安山岩であった。

前期から晩期相当の遺構はIVa層で集石が1基、IV層埋土の土坑が3基検出された。集石は34個の石を確認した。被熱により赤化した石も確認された。石材は安山岩である。

土坑1号・2号は削平されているため検出面がVII層であるが、埋土にIV層の御池火山灰を含むことから前期から中期相当と考えられる。土坑3号も削平を受けているが、IV層面で検出された。埋土は炭を含む黒色土である。周囲の土器の出土状況から晩期相当の土坑と考えられる。

#### 2 遺物

1類土器はキャリバー形の器形で、単節縄文を施文後、口縁部及び頸部から胴部にかけて太めの沈線文様を施してある。この特徴は志布志市野久尾遺跡に類例があると東氏より御教示をいただいた。中期中葉の春日式土器北手牧段階に並行すると考えられる。2類土器は砲弾形に近い器形で底部は平底である。口縁部から底部近くにかけて縦方向に浅い沈線を密に施すもので類例を確認できず位置付けについて苦慮するが、1類土器と共に出土したことから近い関係が考えられる。胎土についても大粒の金色雲母がわずかに含まれる点は、南九州には例が無く東九州を含めた他の地域との関係を探る必要があろう。類例を待ちたい。

3～6類土器は後期相当の土器と考えられる。3類は波状の口縁をもち口縁部付近にのみ凹線文が施され胴部以下は無文である。阿高式系土器と考えられる。4類は沈線文が施されることから指宿系土器と考えられる。5類は指宿系土器の底部であると考えられる。6類土器は沈線と撚糸文で施文される。

7類土器は本遺跡の主体となる土器である。縄文時代晩期から弥生時代への移行期の土器群と考えられる。7a類を深鉢・壺形土器、7b類を鉢形土器、7c類を浅鉢形土器、7d類を壺形土器及び高环とし、刻目突帯の有無、及び、刻目突帯の位置、組織痕の有無をもとに細分した。

40・63・72・79に付着した炭化物についての年代分析を行った。結果は下記のとおりである。

遺物番号	72	63	79	40
類	7 b - 2 b (鉢形土器) 2 (突帯が下がる) (組織痕なし)	7 b - 1 b (鉢形土器) 1 (突帯をもたない) (組織痕なし)	7 b - 2 b (鉢形土器) 2 (突帯が下がる) (組織痕あり)	7 a - 3 a (深鉢・甕形土器) 3 (突帯が接する)
<sup>14</sup> C 年代	2505±30yrBP	2500±30yrBP	2470±30yrBP	2400±30yrBP

刻目突帯の有無と刻目突帯の位置で時期差を見てみると、刻目突帯位置が口縁部端から下がるものと刻目突帯をもたないものの時期差は少なく、刻目突帯位置が口縁部端に接するものと口縁部端から下がるものとでは、口縁部端から下がるものの方が古い時期のものではないかと考えられる。しかしながら、試料数が4点と少ないため、今後の試料の増加を期待したい。

石器は石鎚21点、楔形石器1点、削器5点、石斧2点、磨敲石類8点、石皿1点が出土した。石器組成は当時の生業を反映しており、本遺跡は狩猟を中心であったとなるが、全体的に出土数が少なく、出土範囲も耕地整理等による搅乱によって限られていることから、一側面が見えたにすぎないと思われる。

### 弥生時代から中世について

弥生時代の遺物は中津野式の甕形土器1点のみである。中世の遺構は文明ボラの下から、落とし穴、烟跡、道路状遺構が検出された。

落とし穴は埋土の一番上がⅢ層の黒色土で、1471年の桜島起源の噴出物の文明ボラを含まないことから中世のものと考えられる。中世の落とし穴の例として、鹿児島県のチシャノ木遺跡で1基、宮崎県の梅粉山遺跡から15基検出されている。形状や逆茂木の状況など類似している。畑跡は未調査区に広がる可能性が考えられる。今後の調査で栽培作物等も含め性格をより解明できることを期待したい。道路状遺構は現在の道路とは並行になっている。調査区東側に谷頭があり地形に沿った道路であると考えられる。

古代の出土遺物は土師器の壺1点、赤色土器の壺と思われる胴部片1点、内黒土師器の碗1点、土師甕3点、焼塙土器1点が出土した。

### 〈引用・参考文献〉

- 唐津市教育委員会 1982 「菜畑遺跡」 唐津市文化財調査報告 第5集  
藤尾 憲一郎 2003 「弥生変革期の考古学」  
末吉町教育委員会編 1986 「上中段遺跡」 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター2006 「市ノ原遺跡」(第5地点) 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター2008 「チシャノ木遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(125)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター2002 「計志加里遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(38)  
宮崎県高原町教育委員会 2003 「梅粉山遺跡」 高原町文化財調査報告 第10集  
東 和幸 2002 「鹿児島県の組織痕土器」 「南日本縄文通信No12」 南日本縄文研究会

# 西原段 I 遺跡の出土土器付着炭化物の自然科学分析(放射性炭素年代測定)

## I 「株式会社 バレオ・ラボ」による報告 (一部抜粋)

### 1 はじめに

鹿児島県に位置する西原段 I 遺跡から検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

試料の調整は廣田、瀬谷、Lomtadze、Jorjoliani、測定は伊藤、丹生、小林が行い、報告文は伊藤、中村が作成した。

### 2 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-11045	道路名：西原段 I 道路 調査区：B - 1 区 試料No.：1 遺物No.：1 1 0 7	試料の種類：土器付着炭化物 部位：口縁部外部 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塗酸:1.2N、水酸化ナトリウム:0.1N、塩酸:1.2N) スルフィックス
PLD-11046	道路名：西原段 I 道路 調査区：B - 2 区 試料No.：2 遺物No.：1 2 5 9	試料の種類：土器付着炭化物 部位：口縁部外部 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塗酸:1.2N、水酸化ナトリウム:0.1N、塩酸:1.2N) スルフィックス

### 3 結果

放射性炭素年代測定法及び曆年較正の結果は表2のとおりである。

表2 放射性炭素年代測定法及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を曆年年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 曆年年代範囲	2 $\sigma$ 曆年年代範囲
PLD-11045 試料No.：1 遺物No.：1107	-25.29 $\pm$ 0.22	2507 $\pm$ 28	2505 $\pm$ 30	767BC (10.5%) 746BC 689BC (11.5%) 665BC 646BC (46.2%) 553BC	768BC (95.4%) 538BC
PLD-11046 試料No.：2 遺物No.：1259	-26.62 $\pm$ 0.20	2498 $\pm$ 28	2500 $\pm$ 30	763BC (11.5%) 738BC 689BC (3.6%) 681BC 672BC (4.1%) 663BC 648BC (49.0%) 548BC	776BC (95.4%) 520BC

### 4 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び曆年較正を行った。 $2\sigma$ 曆年年代範囲(95.4%の確率でこの範囲に曆年代が収まることを意味する。)に着目して結果を整理する。曆年代と考古学編年との対応について、縄文時代はキーリ・武藤1982と小林2008、弥生時代は春成・今村編2004、西本編2006、西本編2007を参照した。

西原段 I 遺跡の試料No.1 (PLD-11045) は786-538calBC (95.4%)、試料No.2 (PLD-11046) は776-520calBC (95.4%)である。いずれも紀元前8世紀前半から紀元前6世紀後半の範囲を示した。

## II 「株式会社 加速器分析研究所」による報告 (一部抜粋)

### 1 測定対象試料

測定対象試料は、IV層から出土した土器付着炭化物2点(No.1:IAAA-80768:遺物No.1316, No.2:IAAA-80769:遺物No.1136)である。測定試料は、共に土器の外面から採取した。

### 2 化学処理工程 (略)

### 3 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 4 算出方法 (一部略)

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polash 1977)。
- (2) <sup>14</sup>C年代(LibbyAge: yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。<sup>14</sup>C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cを測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- (4) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。
- (5) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度を基に描かれた較正曲線と照らし(以下略)

### 5 測定結果

IV層から出土した土器付着炭化物の<sup>14</sup>C年代は、No.1が $2400 \pm 30$ yrBP, No.2が $2470 \pm 30$ yrBPである。試料の炭素含有率は、57.99%(No.1)と55.3%(No.2)であり十分な値である。化学処理および測定内容にも問題なく、妥当な年代と考えられる。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					LibbyAge (yrBP)	pMC(‰)	
IAAA-80768	No.1	層位: IV層	炭化物	AaA	-21.01 $\pm$ 0.36	2,400 $\pm$ 30	74.14 $\pm$ 0.28
IAAA-80769	No.2	層位: IV層	炭化物	AaA	-19.58 $\pm$ 0.32	2,470 $\pm$ 30	73.54 $\pm$ 0.24

[#2350]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		历年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 年代範囲	2 $\sigma$ 年代範囲
	Age (yrBP)	pMC(‰)			
IAAA-80768 遺物No.1316	2,340 $\pm$ 30	74.75 $\pm$ 0.28	2,402 $\pm$ 30	511BC-405BC(68.2%)	732BC-691BC( 8.9%) 661BC-651BC( 1.5%) 545BC-397BC(85.1%)
IAAA-80769 遺物No.1136	2,380 $\pm$ 30	74.36 $\pm$ 0.24	2,468 $\pm$ 30	751BC-697BC(26.4%) 667BC-637BC(12.0%) 621BC-615BC( 2.0%) 594BC-519BC(27.8%)	761BC-682BC(29.5%) 671BC-484BC(58.0%) 465BC-416BC( 7.9%)

[参考値]

## 第VI章 野鹿倉遺跡

### 第1節 発掘調査の方法及び層位

平成18年度の野鹿倉遺跡の確認調査は、西原段Ⅰ遺跡の本調査と並行しながら、平成19年2月1日から平成19年2月16日まで実施した。調査前の現地の状況は、馬の背状の平坦地を持つ傾斜地で、杉及び比較的小さな雑木の茂る荒地であった。

地形及び用地買収の関係で重機が進入できないため、馬の背状の平坦地の雑木を伐採し、2m×5mの大きさのトレンチ2本（Aトレンチ、Bトレンチ）を設定し、表土から人力で掘り下げながら調査を行った。

調査の結果、A・B両トレンチとも、表土下約30cmにⅡ層の文明ボラが確認できた。Aトレンチからは、VII層及びVIII層から土器片数点、礫数点が確認でき、BトレンチからはⅢbから土師器1点、VII層から礫数点が確認できた。遺構は両トレンチとも検出されなかった。また、IX層以下は深さが2mを超えるため確認調査を行わなかった。

平成19年度の野鹿倉遺跡の確認及び本調査は、西原段Ⅰ遺跡の本調査と並行しながら、平成19年8月1日から平成19年10月26日まで実施した。

調査区域は、10m×10mのグリッドを設定して調査を行った。グリッドの設定は、工事用基準杭S T A253+20とS T A252+60の2点を結ぶ直線を基準軸とし、西側から東側に向かってA・B・C・・・南側から北側に向かって1・2・3・・・とし、A-1区、B-2区、C-3区のように呼称した。

確認調査は、杉の伐採が終わってはいるが、杉の根は残ったままであったため、重機を使って、杉の根を除去した後に18年度は未買収のため調査が行えなかった馬の背状の平坦地の南側の傾斜地を中心に確認トレンチを6本設定し、遺物包含層の有無や広がりを確認した。

確認調査の結果、傾斜地西側の4つのトレンチからは、遺構・遺物とともに確認されなかつたため、本調査の範囲を馬の背状の平坦地を中心に行うこととしたが、東側の1トレンチからは、X層、XVII層から旧石器時代の遺物が確認されたため、本調査の範囲を1トレンチ周辺の傾斜地まで拡張し調査を行った。2トレンチの横転層から礫が3点出土したが、上からの流れ込みと考えられる。

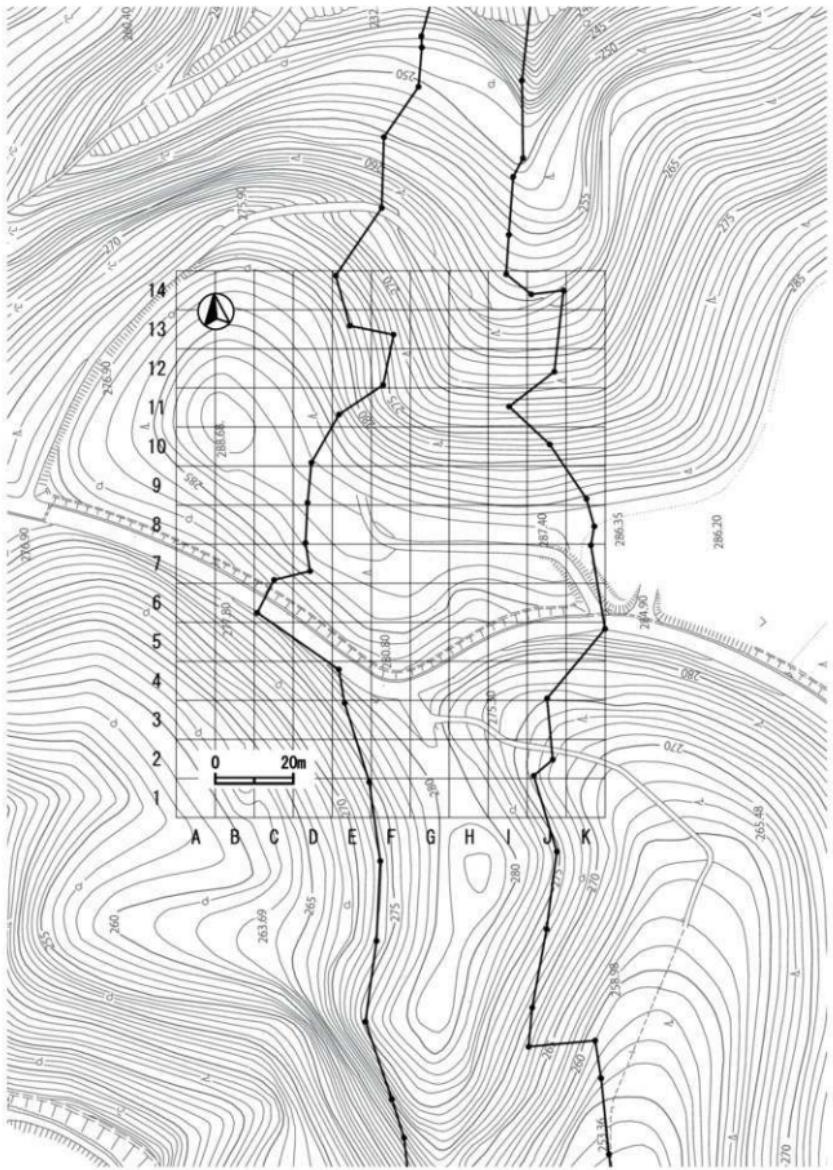
本調査は、馬の背状の平坦地（E～J-6～9区）部分及び、傾斜地東側（I・J-6・7区）部分について実施した。

馬の背状の平坦地（E～J-6～9区）部分は、表土からⅡ層までと杉の根を重機によって除去し、Ⅲ層からVIII層まで人力による掘り下げを行い調査を行った。Ⅲb層から土師器、IVa層から縄文時代後期から晩期の遺物、VII～VIII層から縄文時代早期の集石遺構、遺物が確認された。

その後、旧石器の確認トレンチを設定し、XVII層（シラス）上面まで調査を行った。X層、XVII層から遺物が確認された。

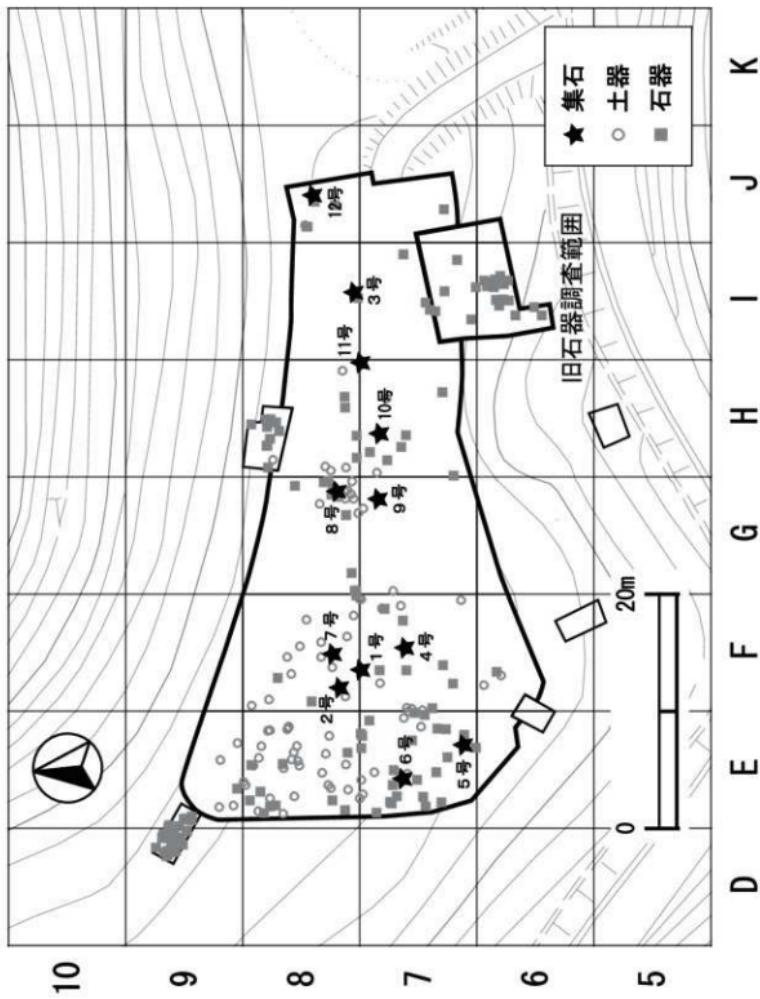
傾斜地東側（I・J-6・7区）部分は、旧石器の遺物が確認された1トレンチを、地形的に高い北東側に約8m×8m拡張して、XVII層（シラス）上面まで調査を行った。

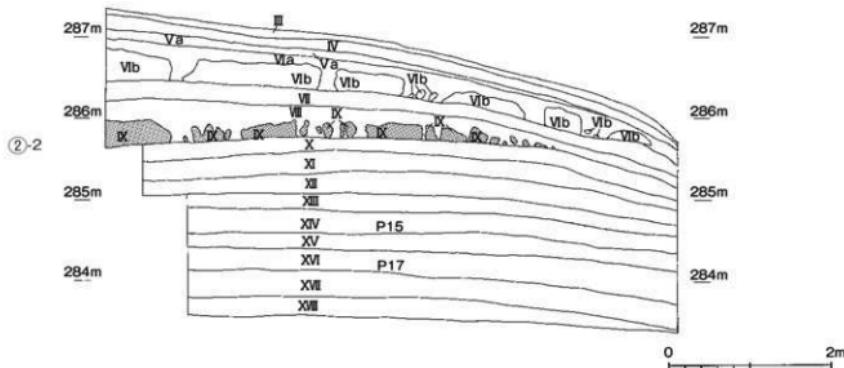
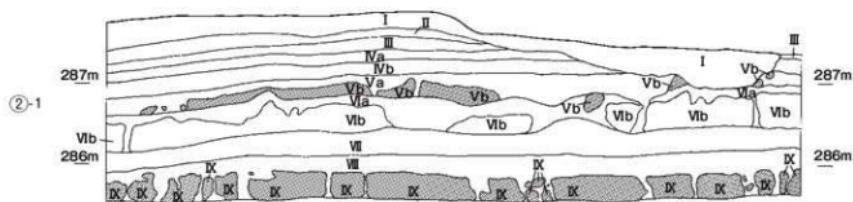
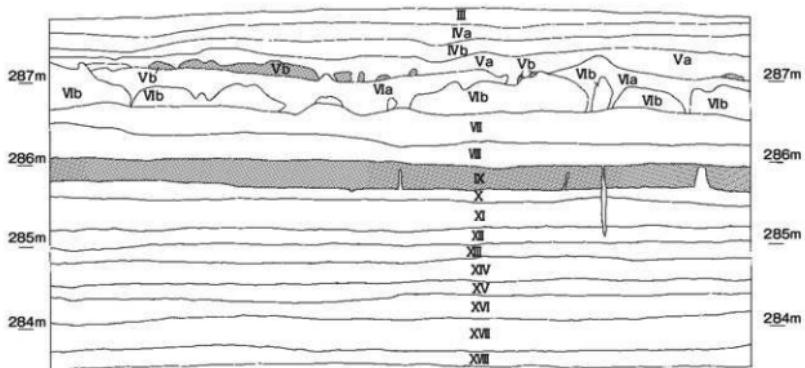
X層からマイクロブレイド、XVII層黒曜石の石核やフレークが確認された。遺構は、確認されなかつた。



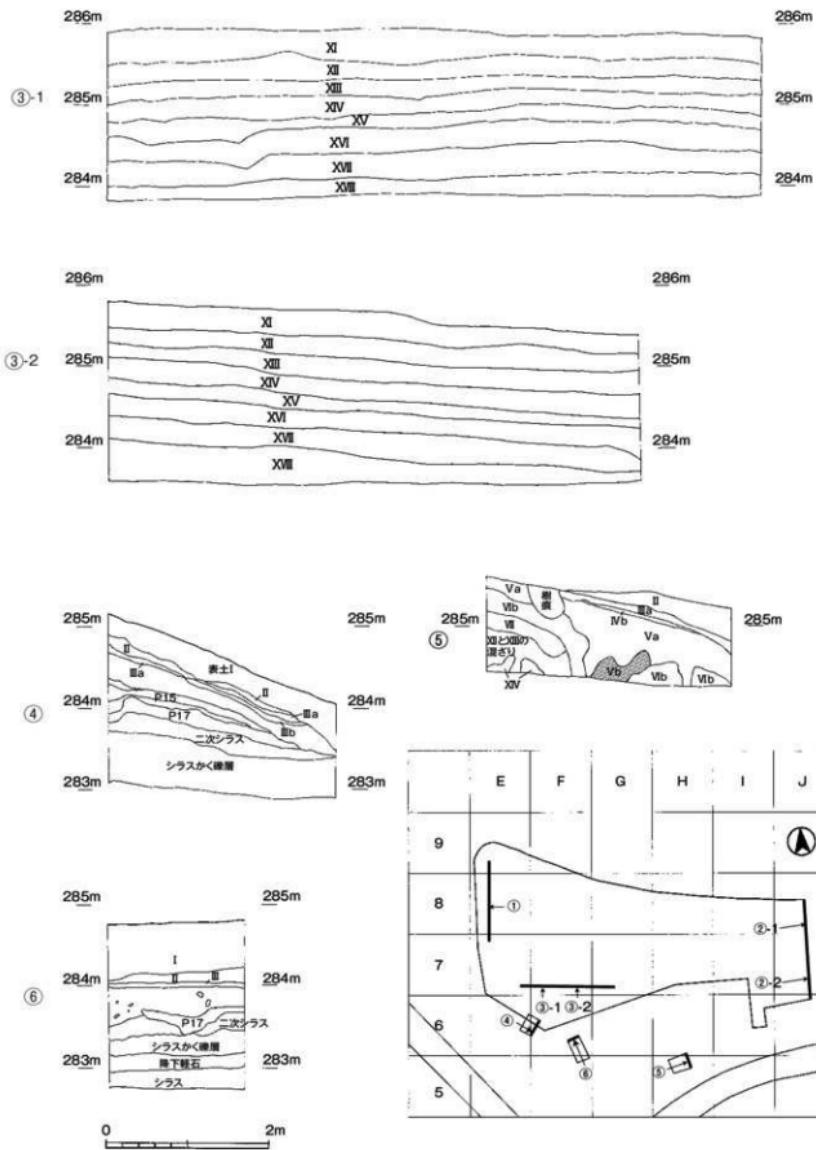
第1図 遺跡周辺地形及びグリッド図

第2図 遺物出土状況図





第3図 土層断面図



第4図 土層断面図

## 第2節 旧石器時代の調査成果

### 第1項 調査の概要

旧石器時代の遺物が確認されたのは、I-7・8区の1トレンチ及び、E-G-7・8区の下層確認トレンチ部分のみである。

1トレンチは、傾斜地であるため、包含層の有無を確かめるために設定したトレンチであったが、X層から細石刃文化器、XVII層からナイフ型石器文化器が確認されたため、調査範囲を拡張して調査を行った。遺物は、上部からの流れ込みの可能性が高いと考えられる。上部の平坦部の調査でも遺構は確認できなかった。

E-G-7・8区の下層確認トレンチは、馬の背状に延びる平坦部のほぼ中央部分に当たる部分である、X層から遺物が確認された。

### 第2項 遺物（第6図 1～4）

ナイフ型石器文化器の遺物は、1トレンチ内から合計26点が出土した。3点を図化した。

1は1トレンチのP17下層でXVII層から出土したものである。1トレンチは当初 $2 \times 3\text{m}$ で遺跡の東側斜面に設定した。地層の堆積は東側に傾斜していた。XVII層から遺物が出土したため $8 \times 8\text{m}$ に拡張し調査を行った。他にも数点の小石片が出土した。1は白地に黄色と黒色の面が中に入り、石材は玉髓と思われる。上面に凹凸のある主要剥離面がある。右面には黄色の風化面がみられ、この面も含め剥離調整は亀の甲羅状に施されている。石器としては石器をつくる前のコアの段階と思われる。2は1と同質の剥片で、同一層にあたる。3は1トレンチの東側のXVII層に検出した。石材は黒色の中に暗灰色の筋が互層になり、全体的に白色の不純物が混ざっている黒曜石である。

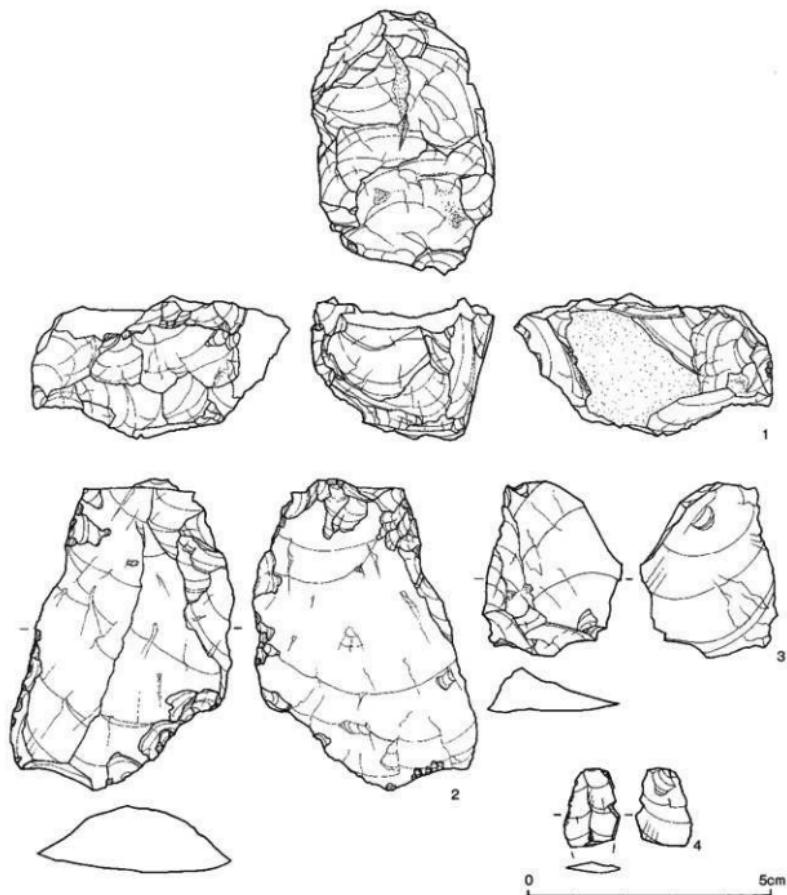


第5図 旧石器遺物出土状況図

背面は2面の剥離面があり、腹面は主要剥離面1面である。なお、上部と下部は折られた状態である。調整剥離は左側で片面の小さな二次調整剥離面がある。右側の剥離面は粗く調査時についた可能性が高い。機能としては削器が考えられる。

細石刃文化器の遺物は、1トレンチ内及びE～G-7・8区の下層確認トレンチから合計7点が出土した。1点のみを図化した。

4はX層から出土したものである。石材は透明感のある黒曜石で不純物は少ない。背面は2面、腹面は主要剥離面の1面で作られ、下部が折られている。機能としてはマイクロブレイドと思われる。



第6図 旧石器出土遺物

### 第3節 繩文時代の調査成果

#### 第1項 調査の概要

縄文時代の調査は、確認調査で早期に相当する遺物の出土した馬の背状の平坦部（E～J－6～9区）のIVa層～VIII層面で行った。

遺構は、VII層上面で縄文時代早期の集石12基が検出された。

遺物は、IV層から中期から晩期相当と考えられる土器が数点、VII～VIII層上面で縄文時代早期の土器や石器が出土している。遺物の出土状況もE～G－7・8区の調査区西側の平坦部に集中している。

#### 第2項 遺構（集石）

集石1号（第8図左上）はF－8区に位置し、中央部に小礫のまとまりが観られ西側に集石4号、南側に集石7号が位置する。集石の東側に3・5・7類土器が1点ずつ出土しているが集石との関係は定かではない。

集石2号（第8図右上）はH・I－7・8区の平坦面に位置し、10cm前後の大きさのそろった礫が中心部（約0.8m×0.9m）に留まる。集石の北側に9類土器が出土している。

集石3号（第8図左下）はG－7区の平坦面に位置し、5～10cm大の礫が散在する。北側に11号集石が隣接する。

集石4号（第8図右下）はF－8区に位置し、4～7cm大の小礫で構成され礫が疎らに散在する。

集石5号（第9図上）はE－7区南西側の急傾斜地に下り始める台地縁辺部に位置し、1.20m×1.30mの堀込みがあり、底面は平坦である。この堀込み内に礫のほとんどが留まっている。堀込み内の上位には約10cm程の礫が密に入り、最下部に乳児の頭部大（約20cm）程の大型の礫と上位から入り込んだ約10cm程の礫が密に入る。

集石6号（第9図左下）は調査区東端のI－8区、北側の急傾斜地に下り始める台地縁辺部に位置し、10～18cm大の礫が約0.5m×0.6mに集中する。7類土器が近くから出土している。

集石7号（第9図右下）はF－7区と8区の境に位置し、8cm大から20cm大の少數の礫で構成された小型の集石である。

集石8号（第10図上）はI－7区と8区の平坦面に位置し、集石の主体部は約0.5m四方である。集石を構成する礫の中に石皿の二次利用と觀られる56、57が検出された。

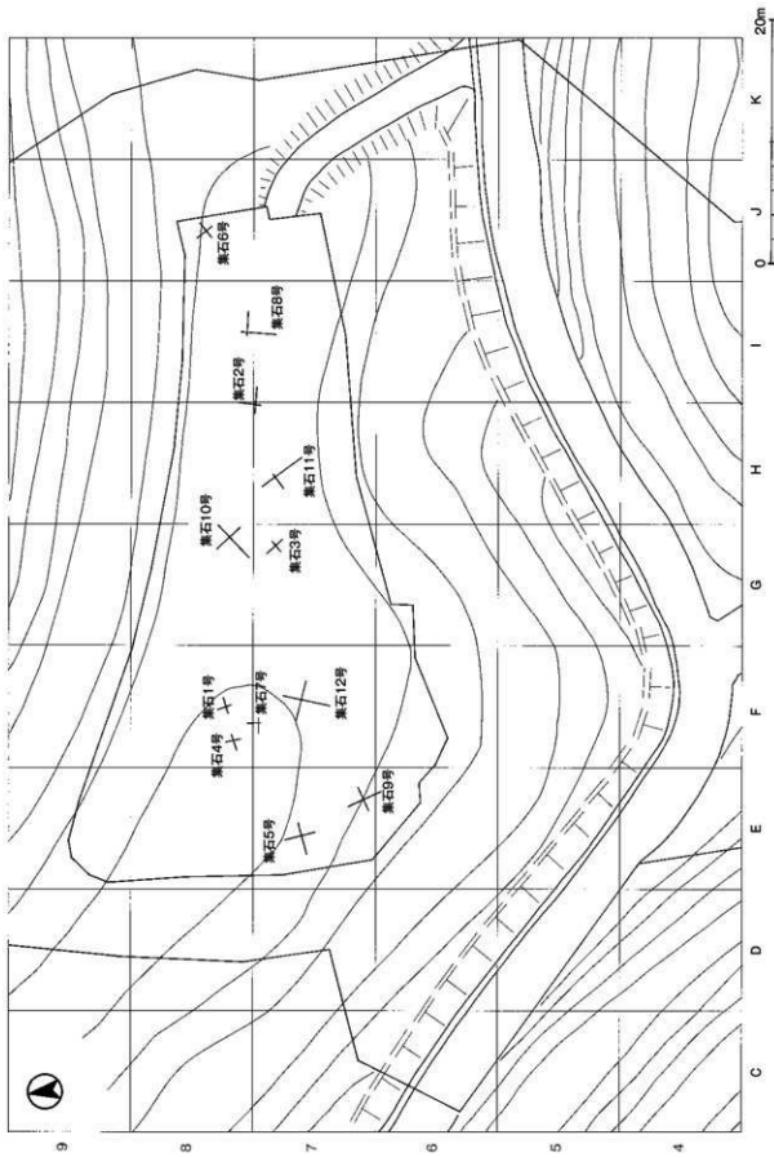
集石9号（第10図下）はE－7区の台地縁辺部に位置し、約25cm大の礫を中心として約1.8m四方に小礫が散在する。

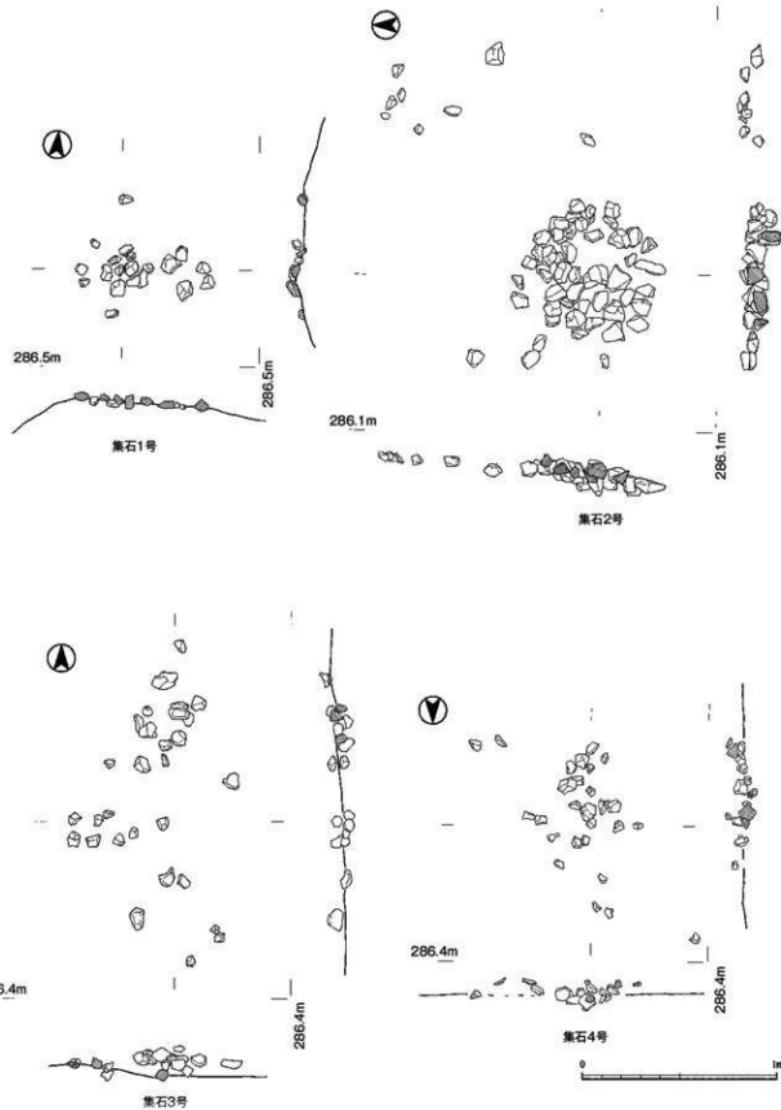
集石10号（第11図）はG－8区の平坦面に位置し、南側に3号、11号集石が検出されている。主体部をもたず小型の礫が疎らに散在している。集石の南側部分から9類土器28の土器片が多数出土した。

集石11号（第12図）はH－7区に位置し、平坦面に集石の主体部があり南側斜面に礫が散在する。3号、10号集石と近接する。

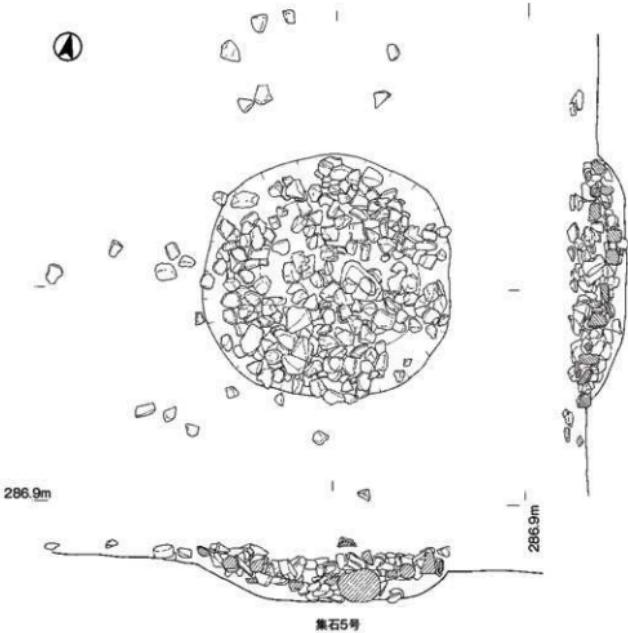
集石12号（第13図）はE－7区に位置し、約3m四方に礫が散在する。主体部は觀られない。

第7図 繩文時代早期集石配置図

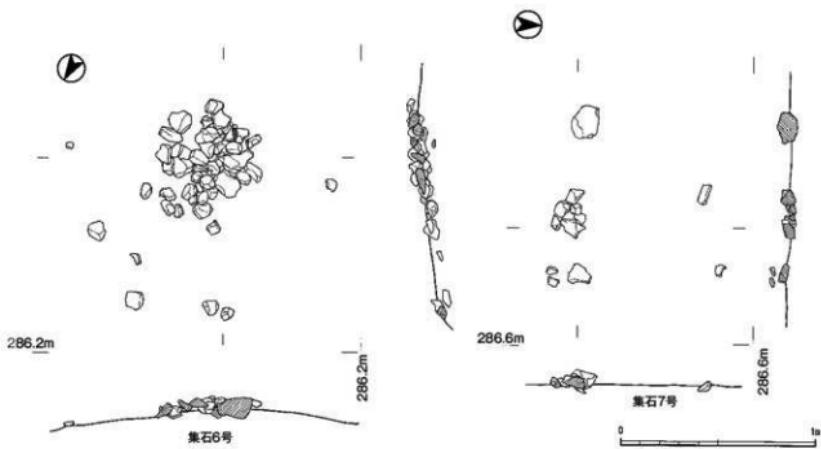




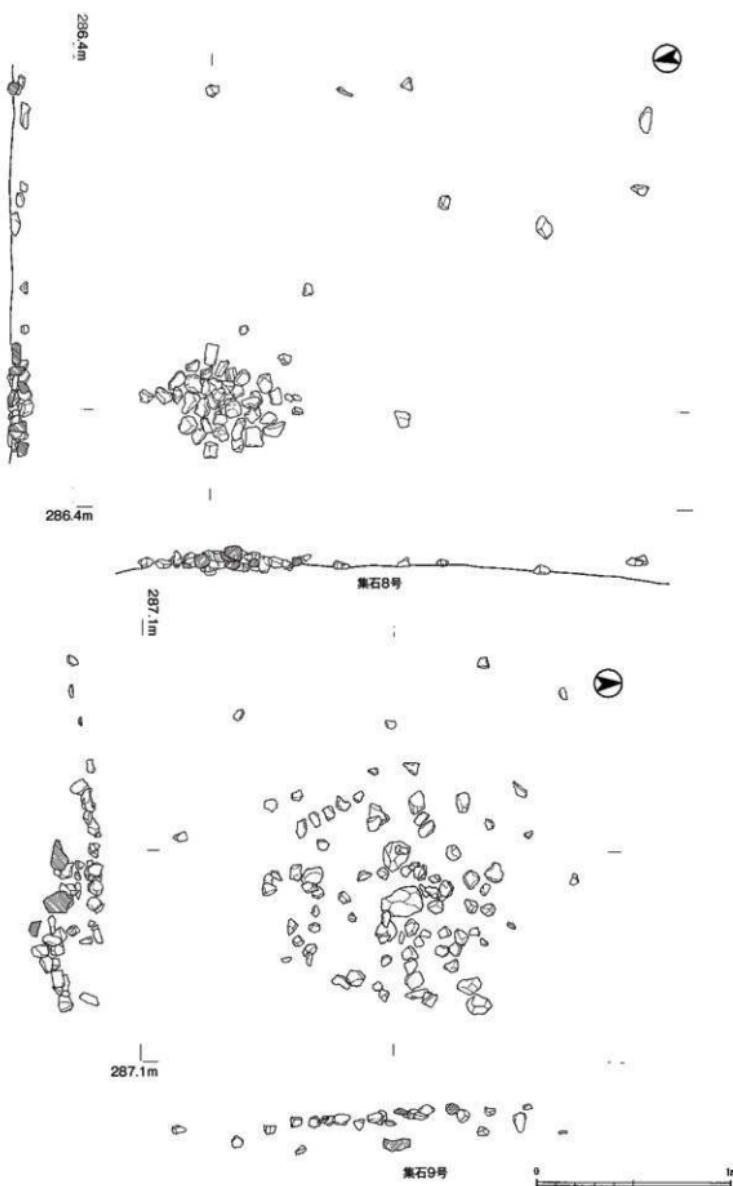
第8図 繩文時代早期集石(1)



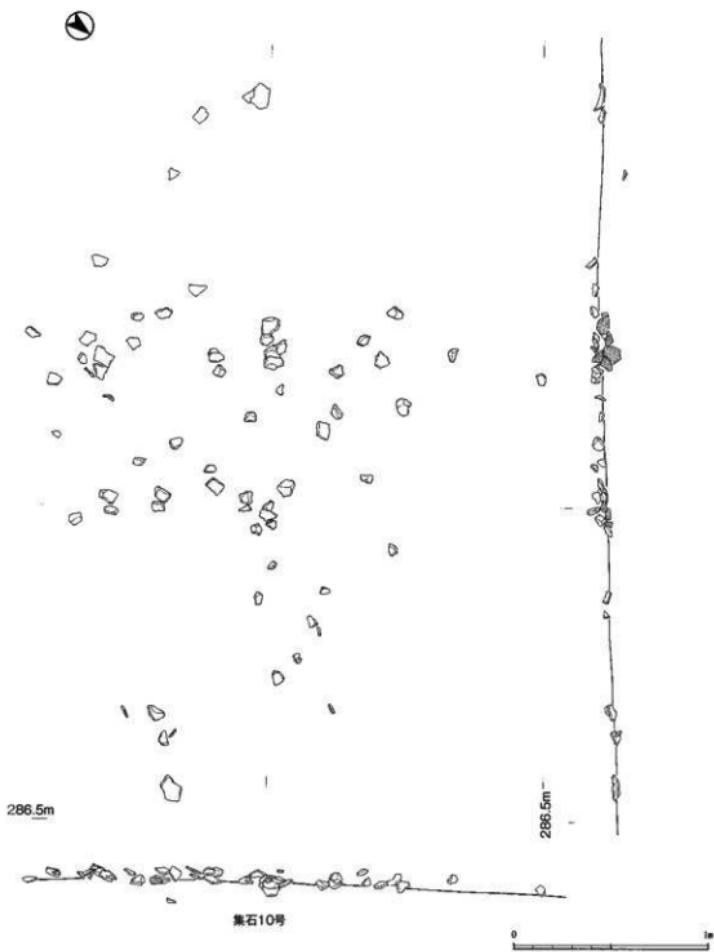
集石5号



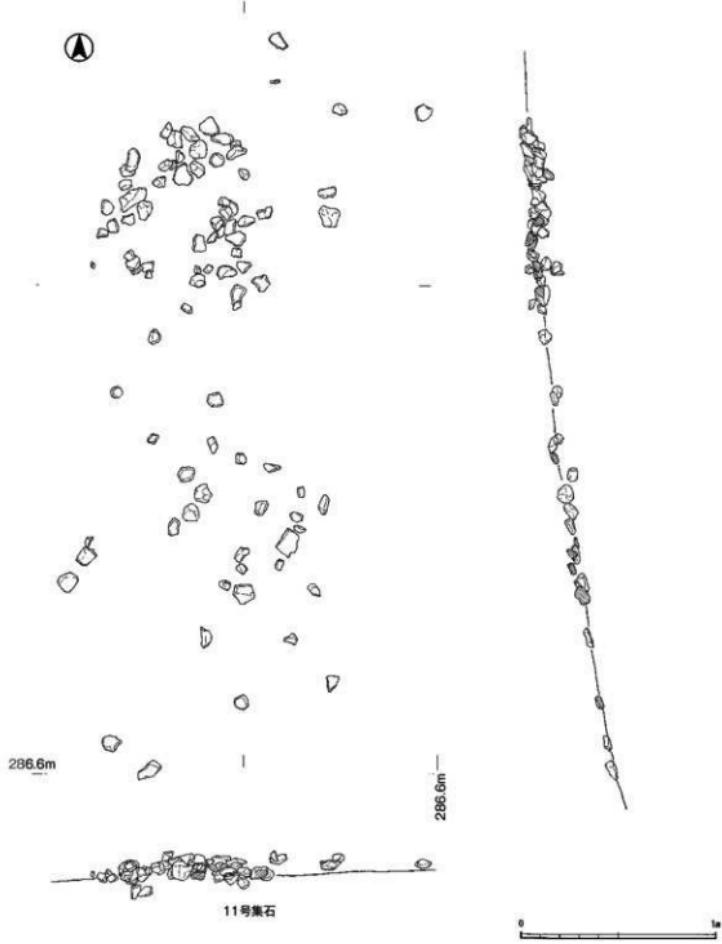
第9図 繩文時代早期集石(2)



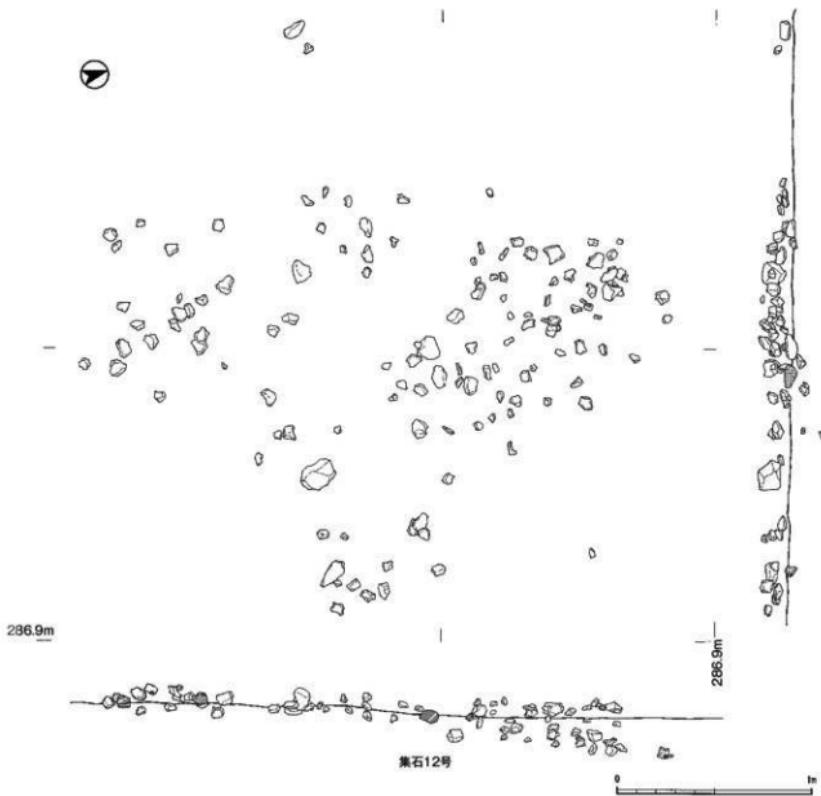
第10図 繩文時代早期集石(3)



第11図 繩文時代早期集石(4)



第12図 繩文時代早期集石(5)



第13図 繩文時代早期集石(6)

### 第3項 遺物

縄文時代の遺物は、VII～VIII層上面から早期相当の土器や石器、IV層から晩期相当と思われる土器が出土しているが、数は少ない。土器は、形態・文様などから以下の1～14類に分類した。

#### 1類土器（第14図 5）

口縁部はほぼ直線的に立ち上がる円筒形で、口唇部及び口縁部に刻みを施す。胴部には貝殻条痕文が横位に施される。内面にはケズリ痕が口縁部では横位、胴部には縦位に見られる。外側からの摺り切りによって穿った縦長の補修孔が3か所確認できる。

#### 2類土器（第14図 6）

口縁部がわずかに外反しながら直線的に立ち上がる器形で、口唇部に刻みを施す。口縁部には貝殻刺突文がめぐる。その下には、楔状の貼付文をもつ、貼付文の両側には貝殻刺突を施す。

#### 3類土器（第14図 7）

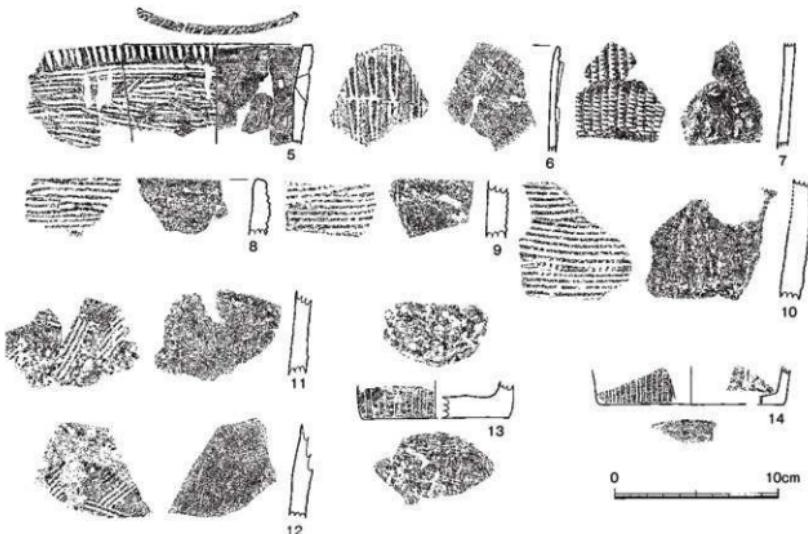
胴部は直線的に底部に至る筒型の器形を呈すると考えられる。胴部に貝殻押引文が施される。圓化しなかったが、同一個体と思われる小片が2点出土した。

#### 4類土器（第14図 8～10）

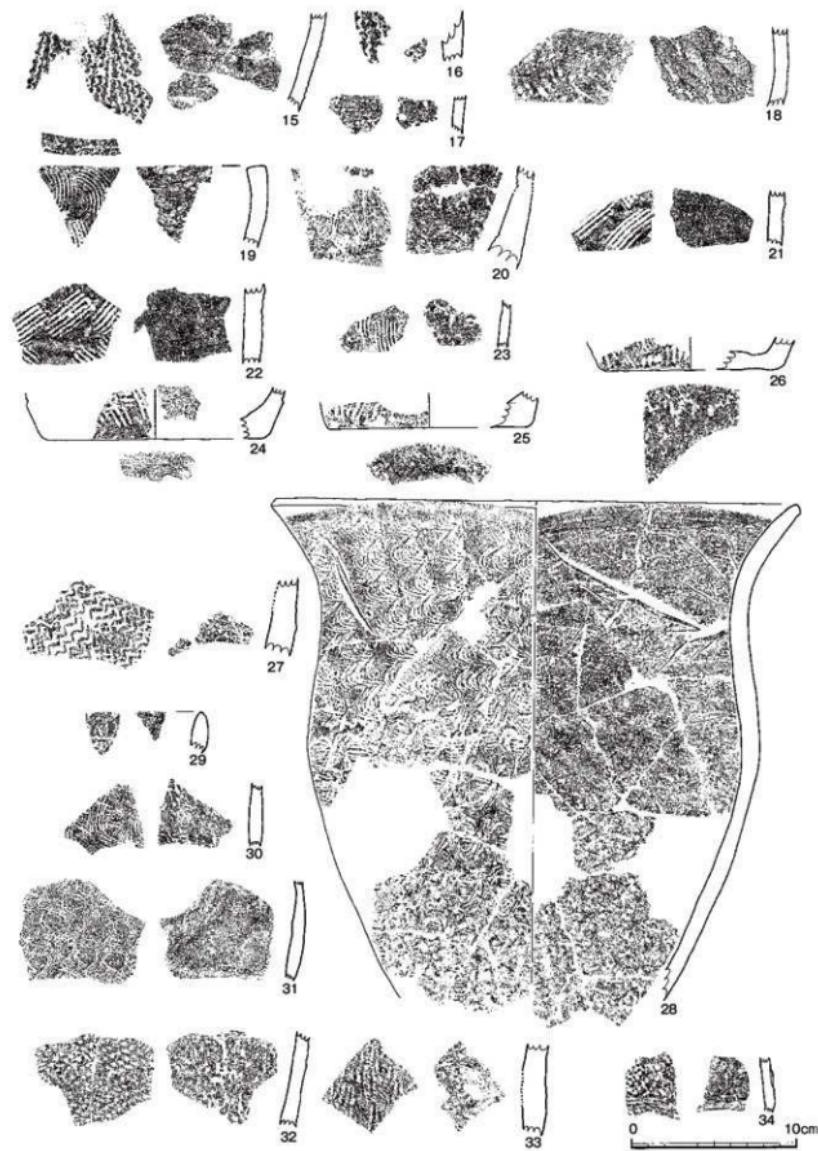
8はわずかに外傾して立ち上がり口縁部が若干内湾する。横方向の条痕を巡らしている。9・10は同様に横方向の条痕を巡らせた胴部片である。器壁は1～1.3cmと厚く、9は1単位の条痕の幅が約2cmで5～6条である。

#### 5類土器（第14図 11～14）

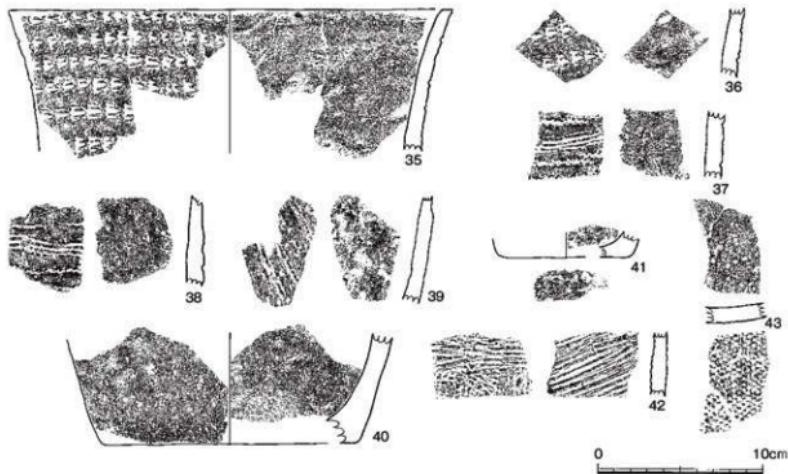
11・12は基本的に胴部に綾杉状の貝殻条痕文を施すものである。13・14は底部端に縦位の条痕を施す。底部からの立ち上がりは丸みを帯びてやや胴が張るようになると思われる。



第14図 1～5類土器



第15図 6~11類土器



第16図 12~14類土器

#### 6類土器（第15図 15~18）

15・16は貝殻外縁で連続して刺突が施されている。器面調整は、内面は丁寧なナデが施されている。17は破片が細片のため貝殻刺突線が直線しか見られないものである。器壁は4~6mmと薄手である。18はナデ消されているため施文の様子がわかりづらいが、貝殻による刺突が確認できたためこの類に分類した。胎土には、15と同じように金雲母や白い砂粒を含む。

#### 7類土器（第15図 19~26）

19~24は基本的に貝殻条痕による羽状文を施すものである。19は平坦な口唇部がわずかに肥厚し口縁部がわずかに内湾している。口縁部付近に貝殻条痕による流水文が施されている。

21~23は胴部片である貝殻による羽状文が施されている。20は2本1組の櫛状工具による羽状文が施されているが風化が激しい。24~26は底部片である。底端部に貝殻条痕が施されている。

#### 8類土器（第15図 27）

27は山形押型文を斜位に施すものである。内面は剥落が激しい。1点のみの出土である。

#### 9類土器（第15図 28~31）

28~31は撚糸文を施すものである。28は胴部全体にかけて縱位および横位の変形撚糸文を施す。変形撚糸文は連弧文状の形態である。形態は口縁部が大きく外反し胴部中央部は球形状を呈する。口唇部付近の施文はナデ消されている。口縁部内面には、連弧文状の変形撚糸文は施されていない。

#### 10類土器（第15図 32・33）

32・33はどちらも小片のためはつきりしないが繩文を施すものである。32は繩を回転させて施文した後に一部ナデ消している。胎土には白っぽい砂が多く含まれる。胎土は6類土器と似ている。33は胎土に金雲母を含む。

### 11類土器（第15図 34）

34は微隆起突帯をもち縄文を施すものである。内側は丁寧なナデ調整が施されている。

### 12類土器（第16図 35~41）

35は外反する口縁部である。貝殻腹縁による連続刺突文が口縁部から頸部にかけて6条施されている36は35と同一個体と思われる破片である。貝殻腹縁による連続刺突文が2条確認できる。37~39は胴部片である2~3条の幅の狭い貝殻条痕と貝殻外縁による刺突文が横位に施される。40・41は12類土器の底部である。平底で外開きに立ち上がる。

### 13類土器（第16図 42）

Iva層出土の土器である。42は内外面に貝殻条痕をもつものである。外面は横位に条痕を施し、内側は搔き上げで斜位に条痕が施されている。

### 14類土器（第16図 43）

IVb層出土の土器である。平織りの圧痕をもつ組織痕土器であると思われる。他に出土はなく1点のみの出土である。

## 1 石器

### 石鎌（第17図 44）

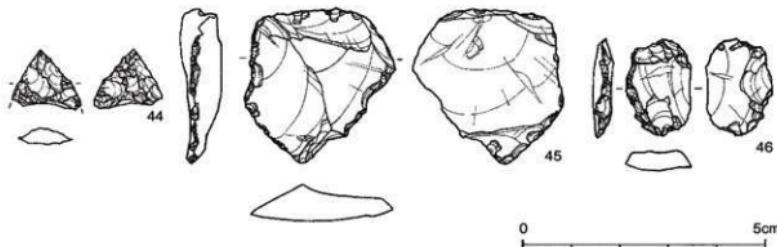
44はE-7区VII層に出土したものである。石材は飴色質の黒曜石で1~2点の不純物を含んでいる。この石器は厚みのある剥片を利用した凹基式の石鎌である。調整辺は交互剥離の二次調整剥離がみられ、脚部の両先端は欠損している。

### 削器（第17図 45）

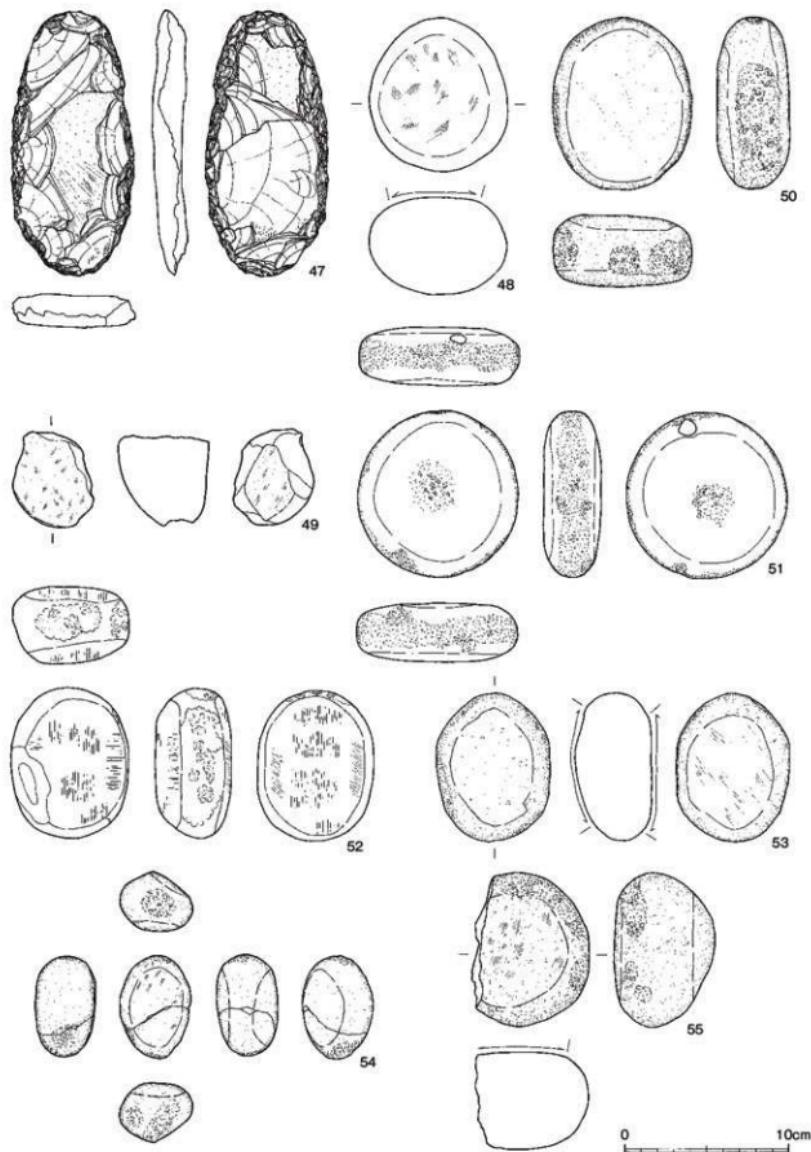
45はJ-8区VII層に出土したものである。石材は乳灰色にネズミ色の筋の互層がみられるチャートである。背面が2面で主要剥離面の腹面が1面の剥片を使い、左辺に片面剥離の二次調整剥離がみられ刃部を作り、右辺には粗い二次調整剥離がみられる。

### 楔形石器（第17図 46）

46はG-8区VII層に出土したものである。石材は乳灰色にネズミ色の筋の互層がみられるチャートである。石片は丸みのある主要剥離面のある剥片を使い、左辺に片面剥離の小さな剥離がみられ、上下に鋭利のある剥離をいれ刃部を作っている。



第17図 縄文時代石器(1)



第18図 繩文時代石器(2)

### 石斧（第18図 47）

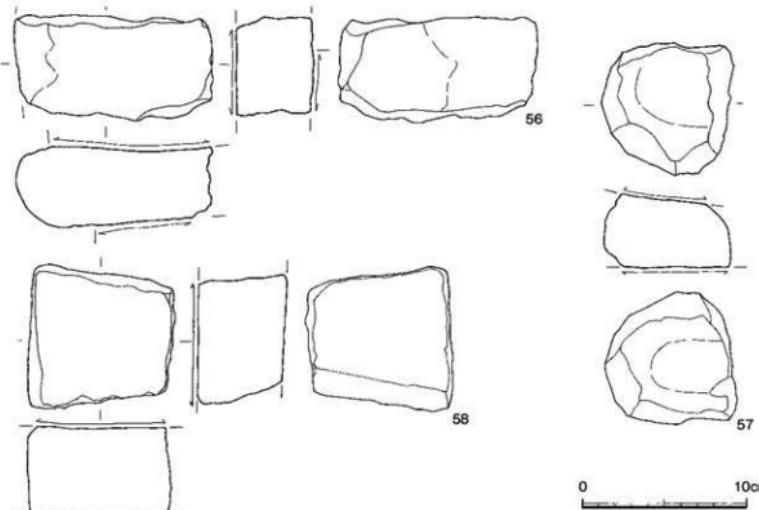
47は扁平打製石斧（土掘り具）と呼ばれる打製石器である。扁平な頁岩を素材として用い、大小の剥離により調整され、全長16cm、最大幅7.4cm、最大厚1.7cmを測る。片側の側線上部付近がわずかにくぼむ。刃部は、使用によるためか、刃縁の刃こぼれが観察できる。

### 磨石、敲石類（第18図 48~55）

48~49は半球状の礫を利用した磨石である。48は平坦な片面のみに49は両面に磨面が観察される。50~51は扁平な亜円礫を利用した敲石である。50~51は側面の全周にわたって敲打痕が観察される。51は両面の中央部にも敲打痕が観察される。52~55は磨面と敲打痕が観察される磨敲石である。52は石けん形の形状で長軸の上端部及び右側面に敲打痕が観察される。左側面は欠損のため敲打痕は不明である。表裏両面に使用による磨り面が観察される。53は楕円形の礫を利用したもので、長軸に対し2・4・10時方向に敲打痕が観察される。表裏両面に使用による擦痕が観察される。54は小型の礫を利用したものである。長軸の両端部に敲打痕が観察される。表裏両面に使用による磨り面が観察される。55は球状の礫を利用したもので、一部欠損しているが、側面全周に敲打痕が、平坦面に擦痕及び敲打痕が観察される。

### 石皿（第19図 56~58）

石皿は3点を図化した。いずれも破損品である。いずれも安山岩製である。56・57はⅦ層出土である。56は一部に丸縁の縁辺部を形成し、皿部は弓状に凹み部をもつ。平滑な磨面のため砥石としての利用も考えられる資料である。57は石皿の小破片で、両面に磨面が観察できる。58はⅣ層出土である。板状の礫を素材とした方形状に遺存した資料で、平面状の側縁を残したもので、上面に磨面が観察できる。

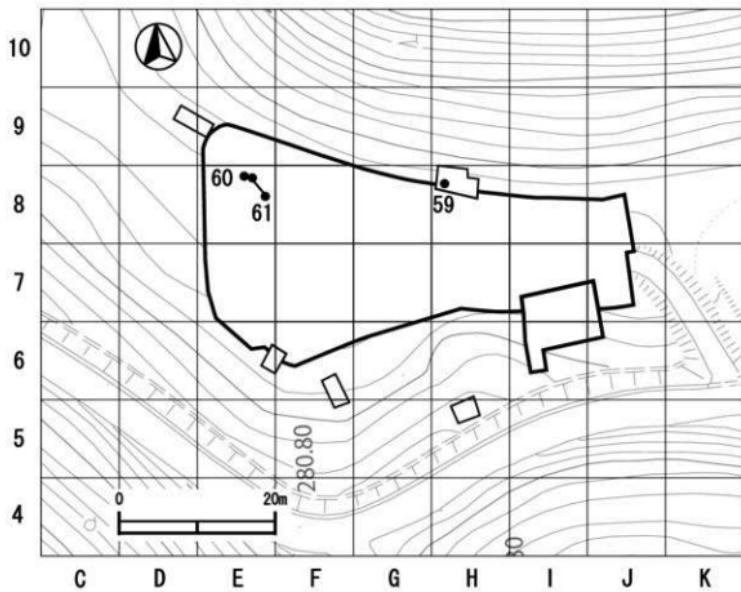


第19図 繩文時代石器(3)

## 第4節 古代の調査成果

### 第1項 調査の概要

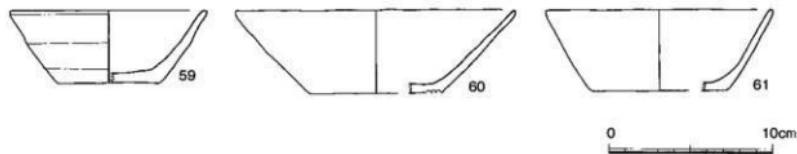
古代の遺物包含層は、Ⅱ層の文明ボラ層の下のⅢ層の黒色土層である。Ⅲ層は調査区内全域で確認できた。18年度の確認調査で、馬の背状の平坦地から傾斜地になる場所に設定したBトレーニングから、土師器の壊が1点出土し、古代の遺物が確認された。19年度の本調査では、遺構は検出されなかつたが、土師器の壊が出土した。



第20図 古代遺物出土状況図

### 第2項 遺物（第21図 59～61）

出土した遺物は、土師器の壊3点のみである。59～61はいずれもヘラ切りの底部から直線的に口縁部へ至るものである。59は口径12cm、器高4.6cm、60は口径17cm、器高4.2cm、61は口径14cm、器高5cmを測る。



第21図 古代出土遺物

第1表 繩文時代土器觀察表

排回番号	1-175封	分類	文様・調査(外)	文様・調査(内)	色(外)	色(内)	胎土	焼成	備考	取上番号	
14	5	1類	秦須文	ケズリ	にふい黄褐色	灰褐色	長・角・砂	硬質		196	
	6	2類	クサビ・貝形乳頭	ナデ	褐	棕	長・角・砂	硬質		105, 108	
	7	3類	貝形押引	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	長・角・砂	硬質		171	
	8	4類	貝紋添乳頭文	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	長・角・砂	硬質		151	
	9	4類	貝紋添乳頭文	ナデ	灰褐色	にふい黄褐色	長・角・砂	硬質		135	
	10	4類	貝紋添乳頭文	ナデ	褐	にふい黄褐色	長・角・砂	硬質		134	
	11	5類	貝紋添乳頭文	ナデ	褐	黑褐色	長・角・砂	硬質		173, 174	
	12	5類	貝紋添乳頭文	ナデ	にふい水褐色	黄褐色	長・角・砂	硬質		186	
	13	5類	貝紋添乳頭文	ナデ	にふい水褐色	黄褐色	長・角・砂	硬質		194	
	14	5類	貝紋添乳頭文	ナデ	にふい水褐色	黄褐色	長・角・砂	硬質		179	
	15	6類	貝紋利突文	ナデ	にふい黄褐色	灰褐色	長・角・砂	硬質		177, 178	
	16	6類	貝紋利突文	ナデ	灰褐色	灰褐色	長・角・砂	硬質		165	
	17	6類	貝紋利突文	ナデ	灰褐色	黑褐色	長・角・砂	硬質		121	
	18	6類	貝紋利突文	ナデ	にふい黄褐色	黑褐色	長・角・砂	硬質		114	
	19	7類	貝紋利羽文	ナデ	にふい黄褐色	浅黄色	長・角・砂	硬質		112	
	20	7類	秦須文	はく落	にふい黄褐色	灰褐色	長・角・砂	硬質		125	
	21	7類	秦須文	ナデ	にふい黄褐色	灰褐色	長・角・砂	硬質		108	
	22	7類	秦須文	ナデ	にふい黄褐色	灰褐色	長・角・砂	硬質		172	
	23	7類	秦須文	ナデ	黄褐色	にふい黄褐色	長・角・砂	硬質		132	
	24	7類	秦須文	ナデ	暗灰黄色	にふい黄褐色	長・角・砂	硬質		158	
	25	7類	秦須文	ナデ	暗灰黄色	灰褐色	長・角・砂	硬質		116	
	26	7類	秦須文	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	長・角・砂	硬質		211	
	27	8類	山形押明文	はく落	黑褐色	黑褐色	長・角・砂	硬質		133	
	28	9類	変形押模	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	長・角・砂	硬質		90, 189ほか	
	29	9類	変形押模	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	長・角・砂	硬質		93	
	30	9類	変形押模	ナデ	にふい黄褐色	暗黄色	長・角・砂	硬質		198	
	31	9類	変形押模	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	長・角・砂	硬質		199	
	32	10類	繩文・ナデ	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	長・角・砂	硬質		192, 193	
	33	10類	繩文・ナデ	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	長・角・砂	硬質		113	
	34	11類	堆疊起突型	ナデ	黄褐色	黄褐色	長・角・砂	硬質		187	
	35	12類	貝紋利突文	ナデ	赤褐色	赤褐色	長・角・砂	硬質		147, 148	
	36	12類	貝紋利突文	ナデ	赤褐色	赤褐色	長・角・砂	硬質		168	
	37	12類	貝紋利突文	ナデ	にふい鵝	灰褐色	長・角・砂	硬質		60	
	38	12類	貝紋添乳頭文	ナデ	灰褐色	灰褐色	長・角・砂	硬質		115	
	39	12類	貝紋添乳頭文	ナデ	灰褐色	灰褐色	長・角・砂	硬質		118	
	40	12類	貝紋添乳頭文	ナデ	灰褐色	黑褐色	長・角・砂	硬質		131	
	41	12類	ナデ	ナデ	灰褐色	黑褐色	長・角・砂	硬質		28	
	42	13類	貝紋添乳頭文	ナデ	灰褐色	灰褐色	長・角・砂	硬質		外傷付着	95
	43	14類	繩文	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	長・角・砂	硬質		44	
外傷付着											

第2表 古代遺物觀察表

排回番号	1-175封	分類	文様・調査(外)	文様・調査(内)	色(外)	色(内)	胎土	焼成	備考	取上番号
21	59	土器杯	ナデ	ナデ	黄褐色	棕	長・角	硬質		30
	60	土器杯	ナデ	ナデ	黄褐色	棕	長・角	硬質		61
	61	土器杯	ナデ	明赤褐色	にふい黄褐色	長・角	硬質			67, 62, 146

第3表 旧石器時代石器觀察表

排回番号	1-175封	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	区	部位	取上番号
6	1	石核	5.4	3.8	2.9	56.57	玉髓	E-7	7	140
	2	そつ翼	6.4	4.6	1.4	36.77	ob	1丁東	7	98
	3	フレーク	3.6	2.8	0.9	8.64	玉髓	E-7	7	223
	4	マイクロブレード	1.6	1.1	0.2	0.3	ob	東	10	48

第4表 繩文時代石器觀察表

排回番号	1-175封	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	区	部位	取上番号
17	44	石核	1.25	1.4	3.5	0.5	ob	E-7	7	140
	45	スクレイパー	3.15	3.1	0.75	6.64	チャート	I-8	7	206
	46	二次加工	2	1.3	0.4	1.37	チャート	G-8	7	210
	47	打撲石斧	16.15	7.4	2.1	310	真岩	E-7	7	137
	48	磨石	9.5	8.5	5.9	600	安山岩	E-7	7	150
	49	磨石	5.8	4.9	5.5	200	安山岩	G-9	-	栗石8号-1
	50	磨石・敲石	10.6	8.4	4.4	630	砂岩	I-8	7	208
	51	磨石・敲石	10.2	9.9	3.6	550	砂岩	H-8	7	200
	52	磨石・敲石	9.1	7.2	4.7	480	安山岩	E-8	8	117
	53	磨石・敲石	9.1	7	4.7	460	安山岩	F-7	7	175
18	54	磨石・敲石	6.3	4.4	3.7	120	砂岩	I-7	7	96
	55	磨石・敲石	9.5	7.1	6.2	570	安山岩	F-7	7	167
	56	石頭	6.5	12.2	5	700	安山岩	I-9	-	栗石3号-10
	57	石頭	8	8.1	4.6	440	安山岩	F-8	-	栗石3号-9
	58	石頭	8.9	9	5.4	875	安山岩	H-7	4a	54

## 第5節 まとめ

野鹿倉遺跡は確認トレンチ調査の結果、馬の背状の平坦部（E～J－6～9区）から縄文時代早期から晩期の遺構・遺物及び、古代の遺物が検出・出土した。傾斜地東側（I・J－6・7区）からは旧石器の遺物が出土した。

### 旧石器時代について

ナイフ形石器文化期の遺物は玉髓のコア1点、黒曜石製の削器2点が確認された。細石刃文化期の遺物は黒曜石製のマイクロブレイドが1点確認された。いずれもI・J-6・7区から出土している。

### 縄文時代について

#### 遺構

馬の背状の平坦部に縄文時代早期相当層のVIII層上面で集石12基が確認された。堀込みをもつものは集石6号のみで残り11基に堀込みは確認できなかった。集石8号周辺からは変形撲糸文土器が出土したが、その他集石と出土遺物の相関を関係づけられるものはなかった。

#### 遺物

出土数は少ないが、縄文時代早期相当の土器を中心に多様な型式の土器が確認され、1～14類土器に分類した。型式等は下表のとおりである。

1類	前平式土器	5類	石坂式土器	9類	変形撲糸文土器	13類	条痕文土器
2類	加栗山式土器	6類	下剥峯式土器	10類	回転施文土器	14類	組織痕土器
3類	吉田式土器	7類	桑ノ丸式土器	11類	平格式土器		
4類	中原式土器	8類	山形押型文土器	12類	塞ノ神式土器		

石器は石鎚・削器・楔形石器・打製石斧がそれぞれ1点、磨石、敲石類が7点、石皿が3点出土した。石皿のうち56と57は集石3号より出土した。

### 古代について

古代の遺構は確認されなかった。遺物もヘラ切りの土師器の壊3点が出土したのみである。

#### 〈引用・参考文献〉

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2006「市ノ原遺跡」(第5地点)鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター2008「閏山遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(125)  
鹿児島県吉田町教育委員会2002「官ノ上遺跡」吉田町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)  
鹿児島県教育委員会1977「桑ノ丸遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(7)  
鹿児島県教育委員会1980「石峰遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12)  
鹿児島県姶良郡野町教育委員会1994「木場A遺跡2」栗野町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)  
鹿児島県西之表市教育委員会1978「下剥峯遺跡」西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

# **建山遺跡写真図版**

図版1



建山遺跡空中写真（狩俣遺跡方向を望む）

図版2



調査風景



調査風景

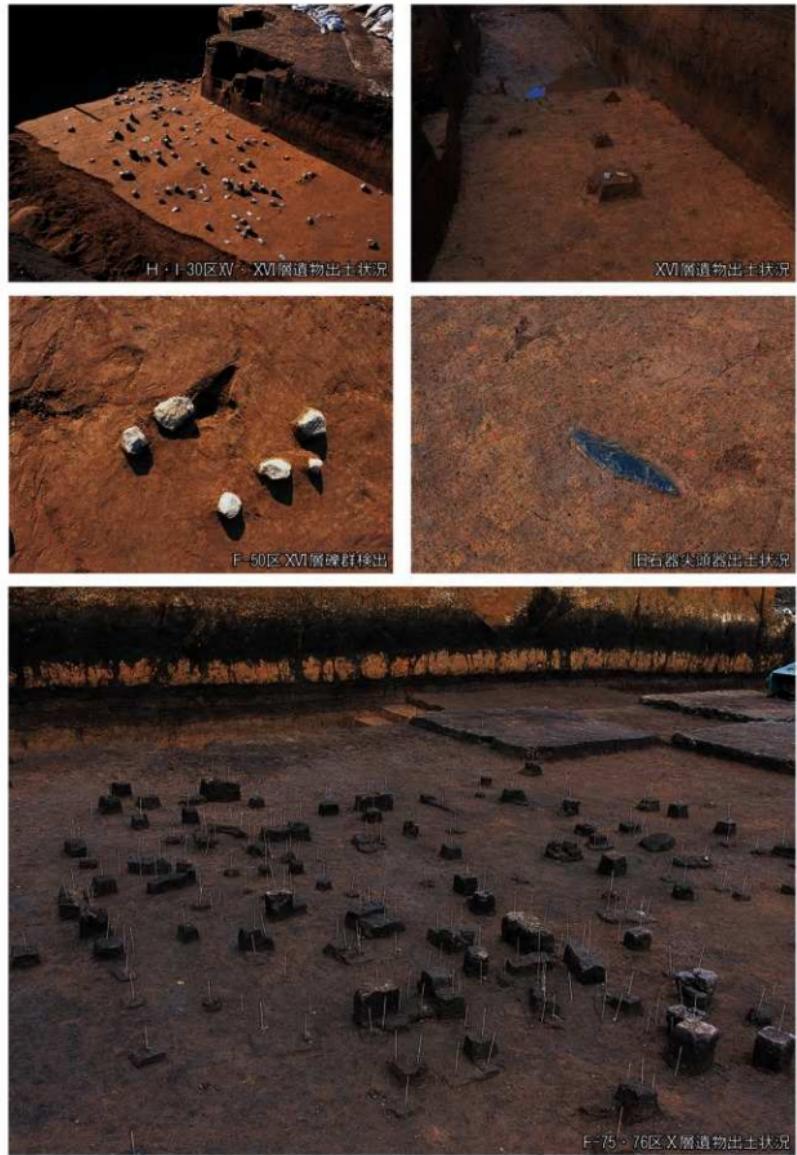


F-50・51区土層断面



G-36～38区東壁土層断面 (IX～XII層)

図版3



図版4



図版5



图版6



1号土坑完掘



2号土坑半裁



3号土坑半裁



4号土坑完掘



5号土坑半裁



6号土坑完掘



7号土坑完掘



8号土坑完掘

图版7



3号集石



7号集石



8号集石



11号集石



20号集石



25号-26号集石

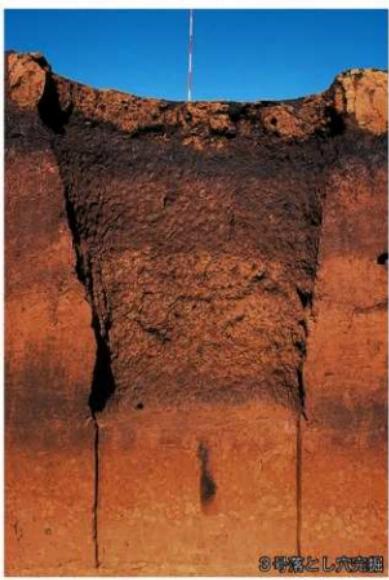


28号集石

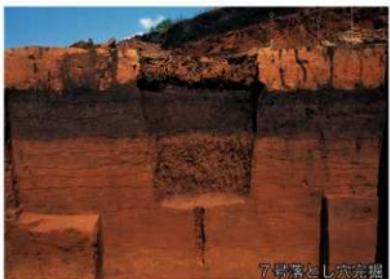


磨石集积

図版8



図版9

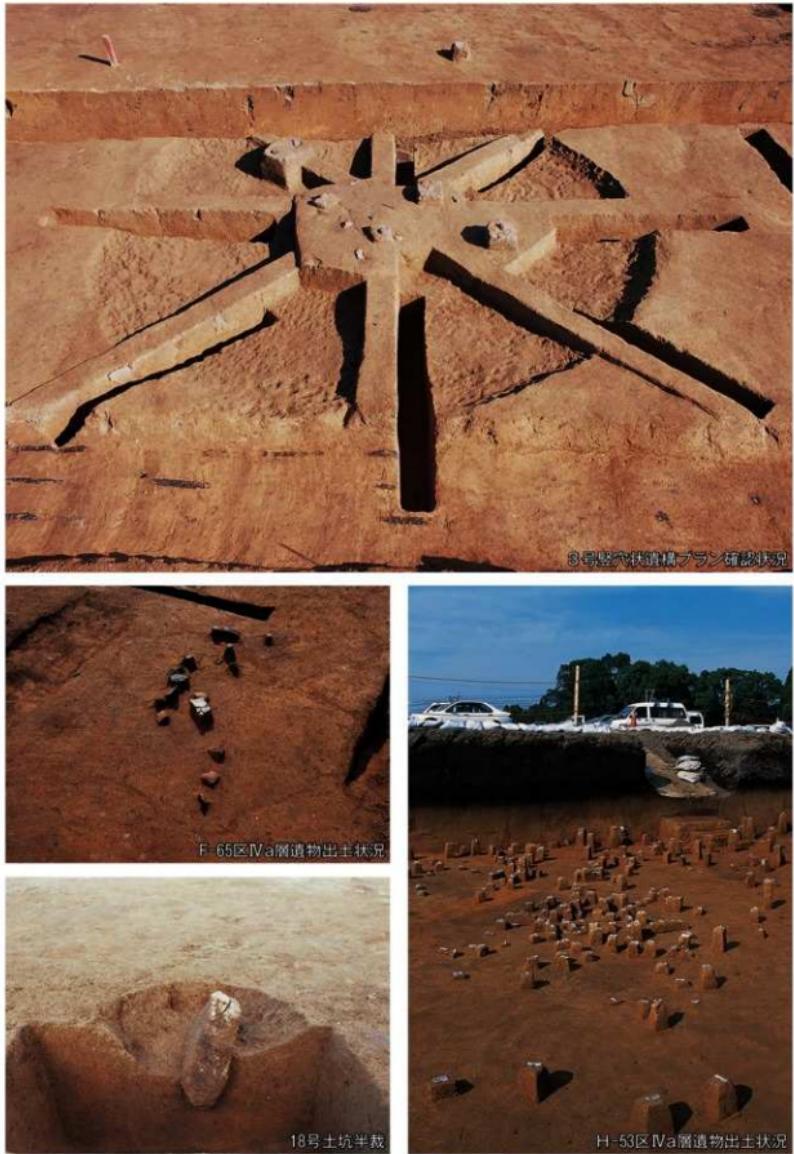


図版10





図版12





図版14



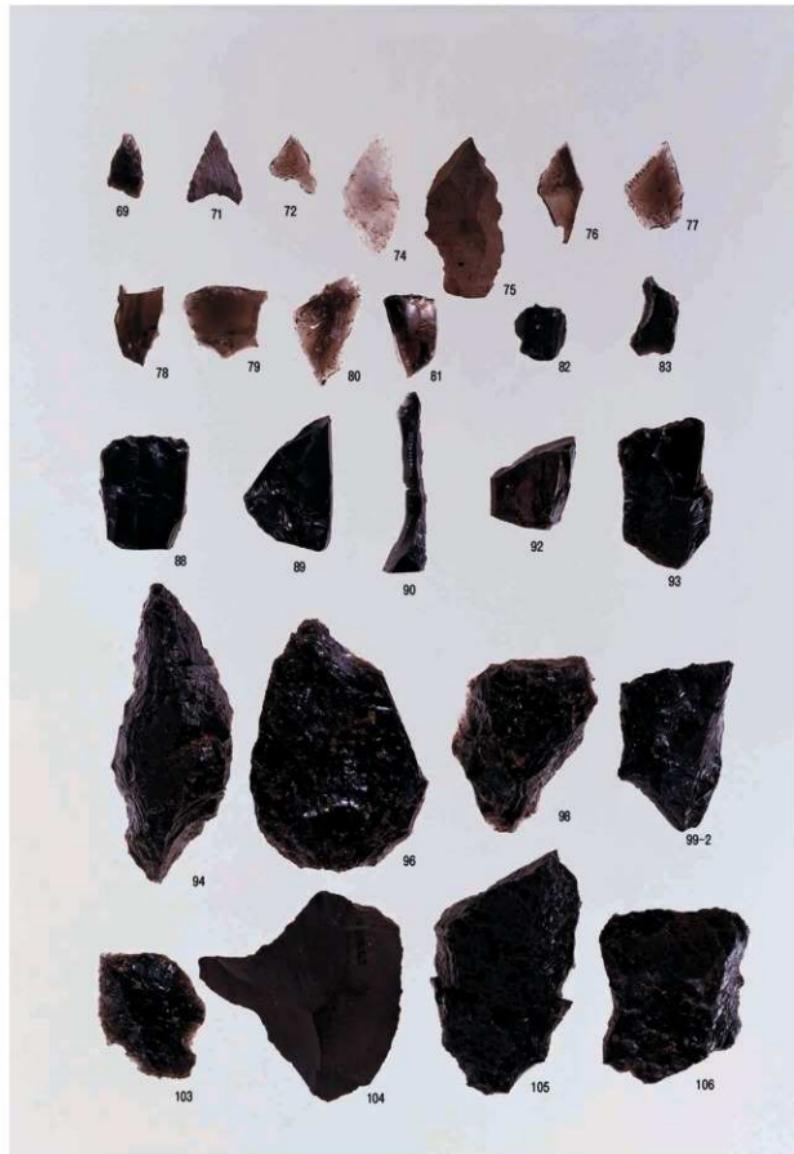


旧石器時代第Ⅰ・Ⅱ文化層出土石器

図版16



旧石器時代第Ⅲ文化層出土石器(1)



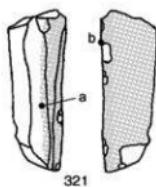
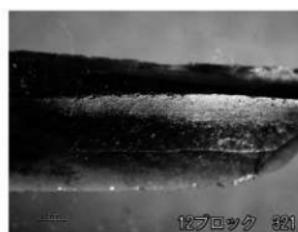
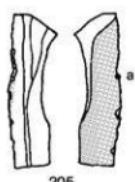
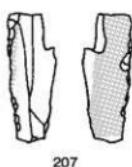
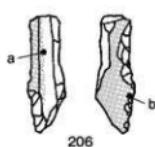
旧石器時代第Ⅲ文化層出土石器(2)

図版18



旧石器時代第Ⅲ文化層出土石器(3)

図版19



細石刃拡大図  
アミ部は線状痕

細石刃の使用痕

図版20



I · IIa · IIb · V類土器



72



73



74



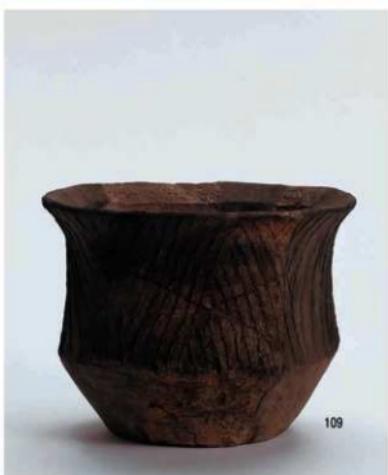
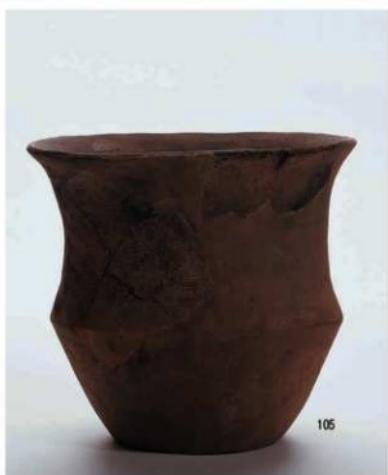
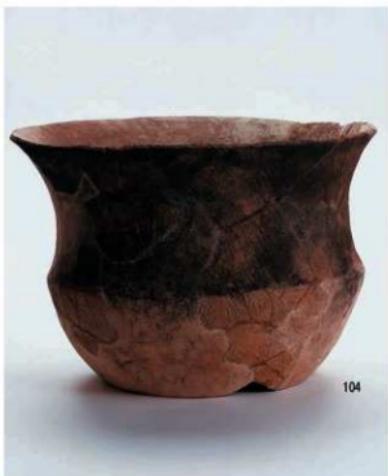
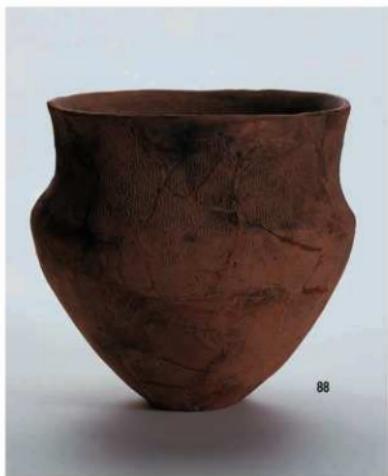
77



81

VIIa・VIIb・VIIc・VIIa類土器

図版22



VIIa・VIId・VIIe・X類土器



XII 手土器出土状況 (P-42区)

XIIa・XII・XIV類土器及び廻類土器出土状況

図版24



242



245



246



221



249



258

XVII・XVIII・XX・XXa・XXb類土器



359



373



374



137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

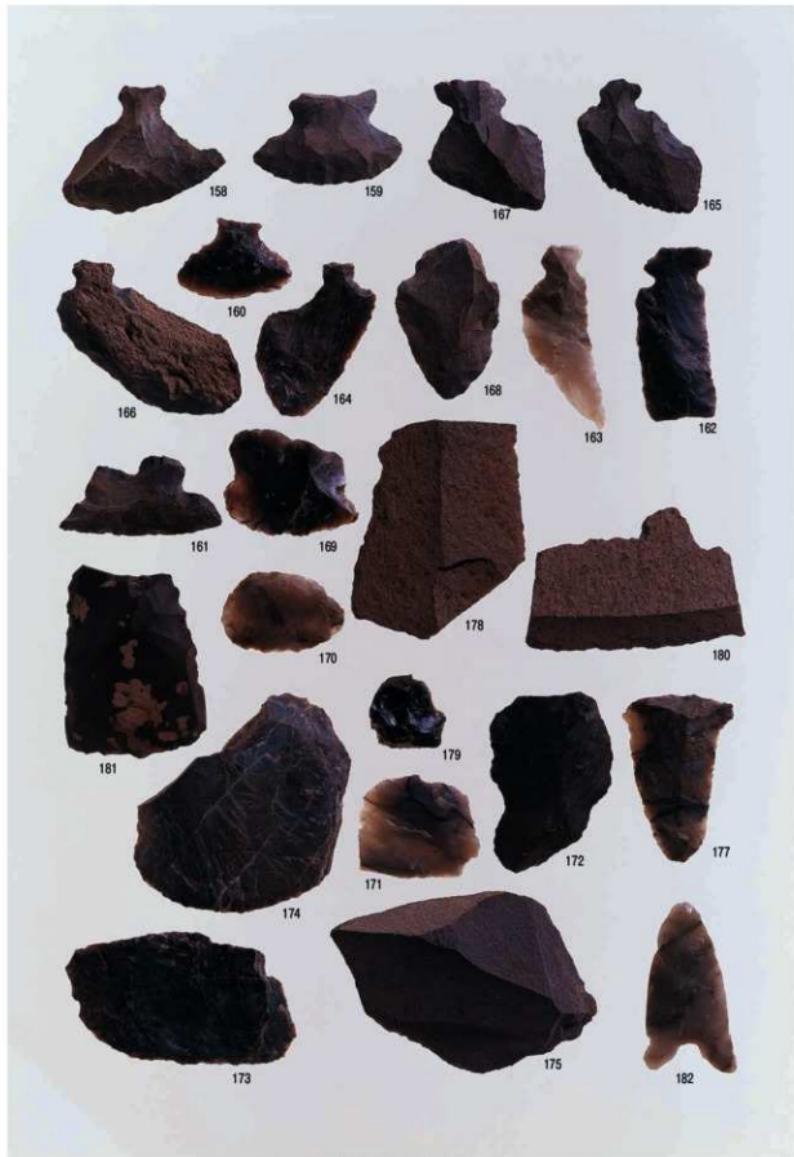
156

157

176

XXIIc・XXId類土器及び縄文時代早期出土石器(1)

図版26

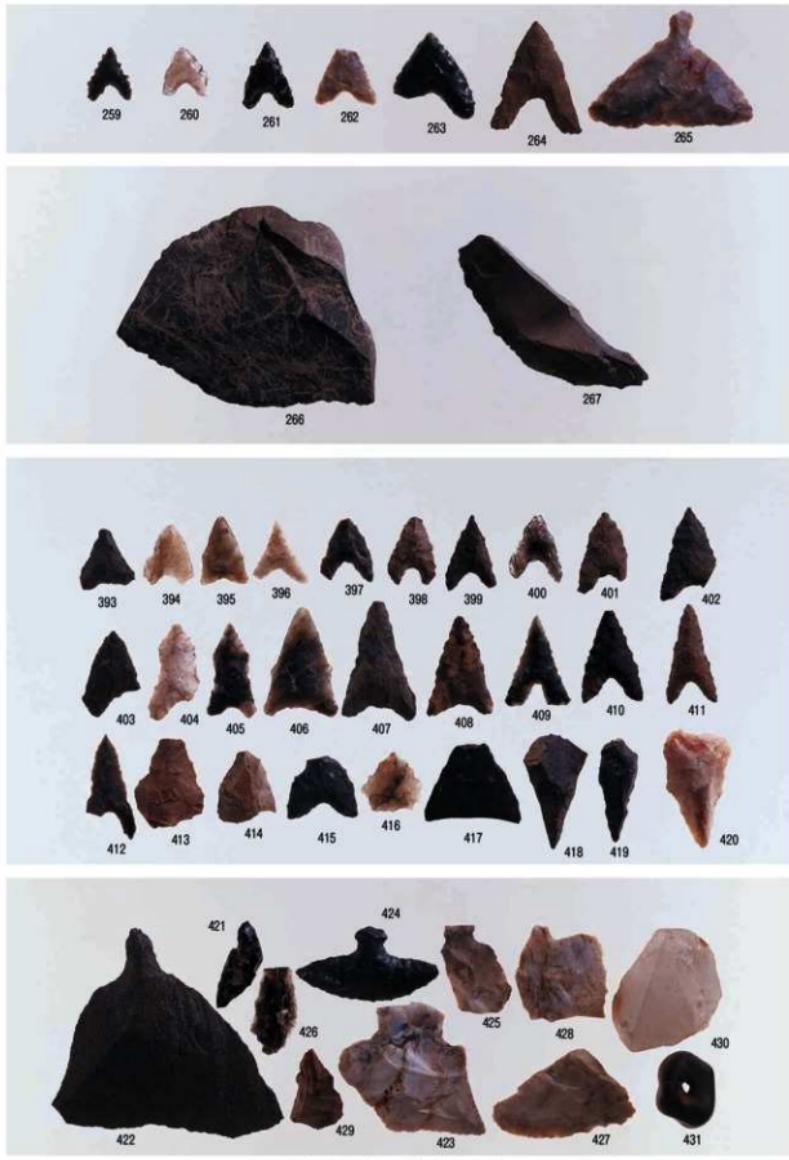


縄文時代早期出土石器(2)



縄文時代早期出土石器(3)

図版28

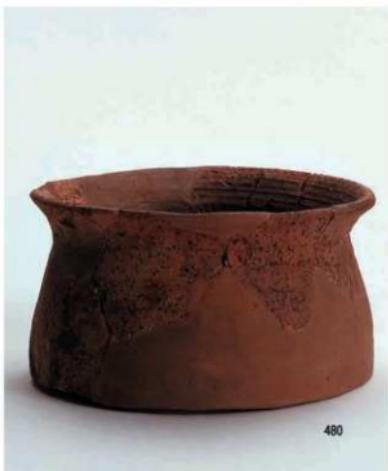


縄文時代前期～晩期出土石器(1)

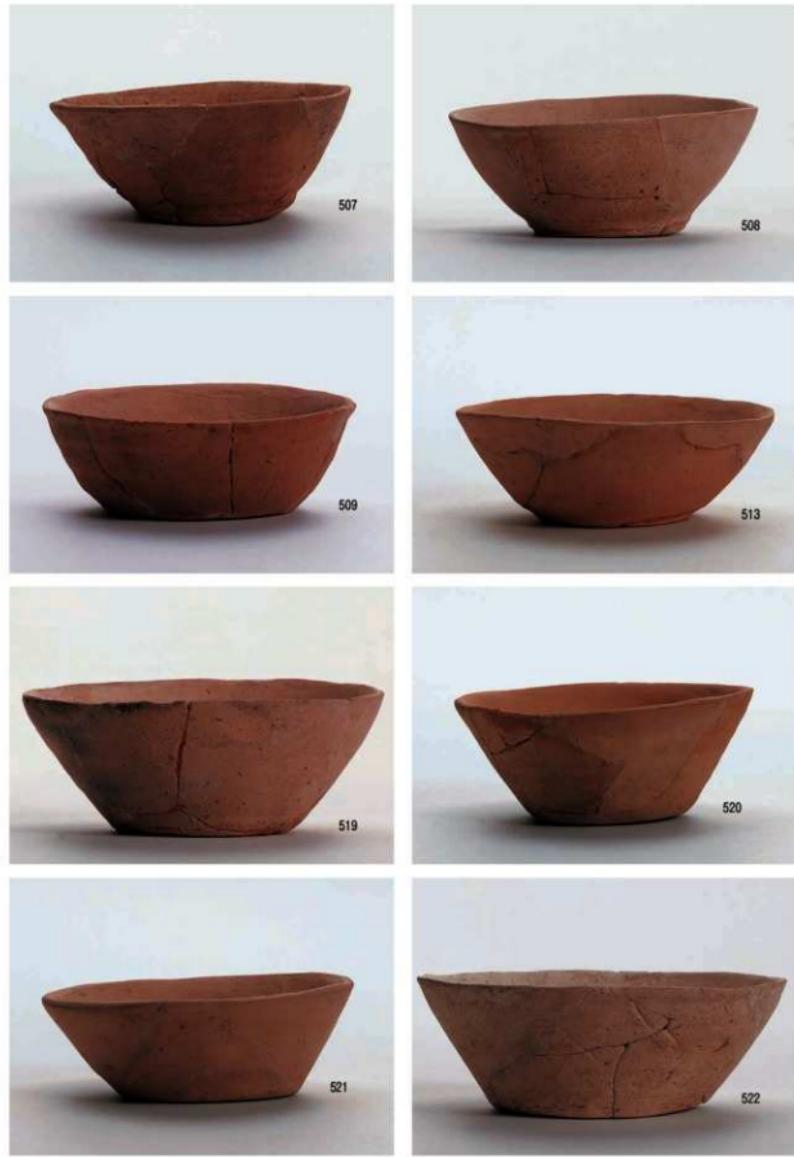


縄文時代前期～晩期出土石器(2)

図版30



土師甕



土師器坏

図版32



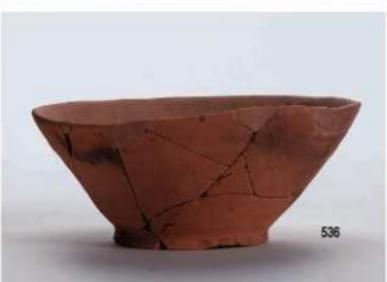
533



534



535



536



542



544

土師器壺（533～536、542）  
土師器壺（内黒）（544・545）



545

# **西原段 I 遺跡写真図版**

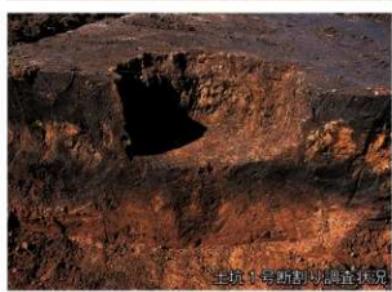
図版1



図版2



図版3



図版4



図版5



畠跡検出状況1



畠跡検出状況2



畠跡検出状況3



道路状遺構4号検出状況



弥生土器(207)出土状況1



道路状遺構4号



弥生土器(207)出土状況2



道路状遺構4号

図版6



A地点調査状況



C地点IV層遺物出土状況



Hトレンチ遺物出土状況



Gトレンチ遺物出土状況



組織痕土器（F101）出土状況



石皿（F206）出土状況



1~6 類土器

図版8



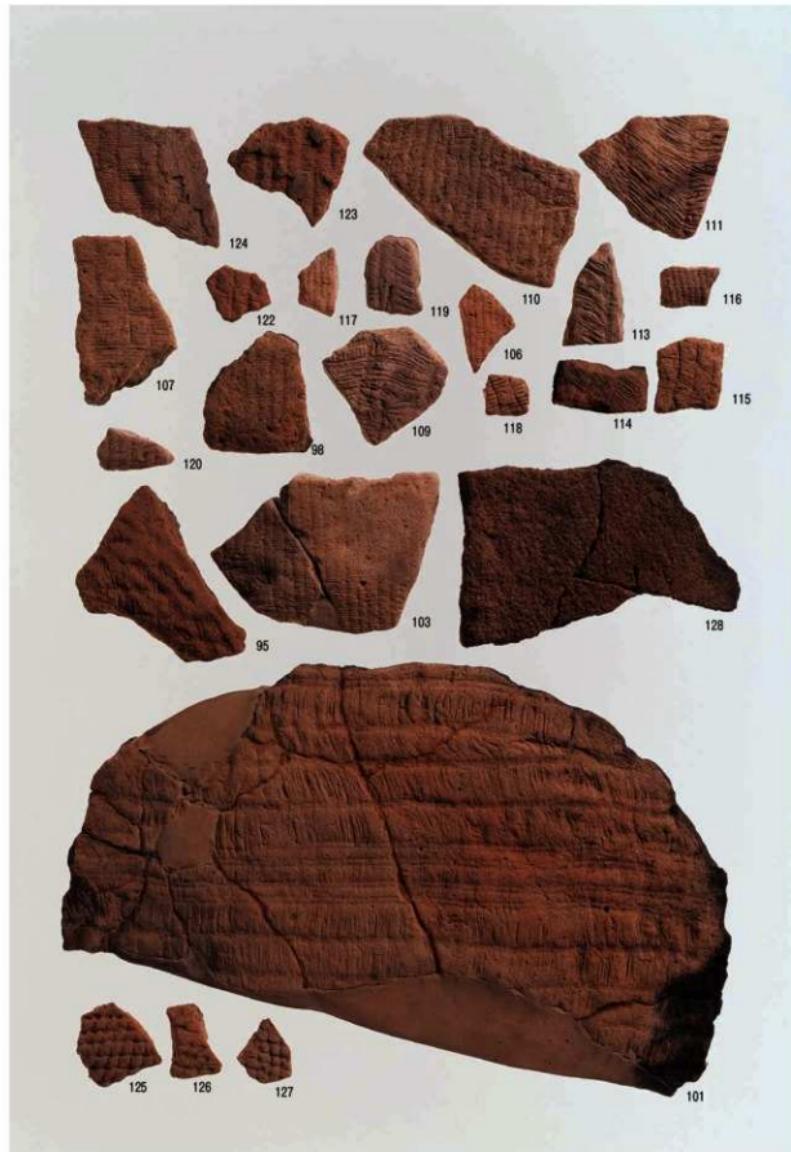
7 a類土器



7 b類土器

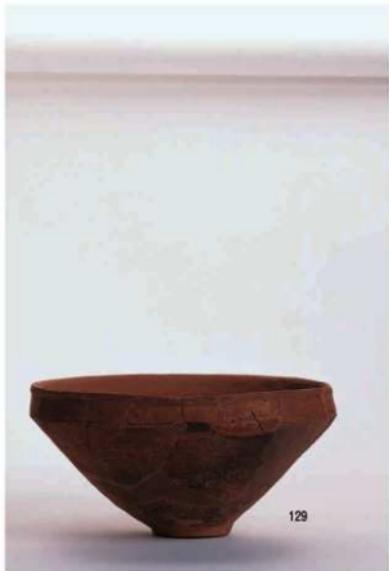


組織痕土器 1

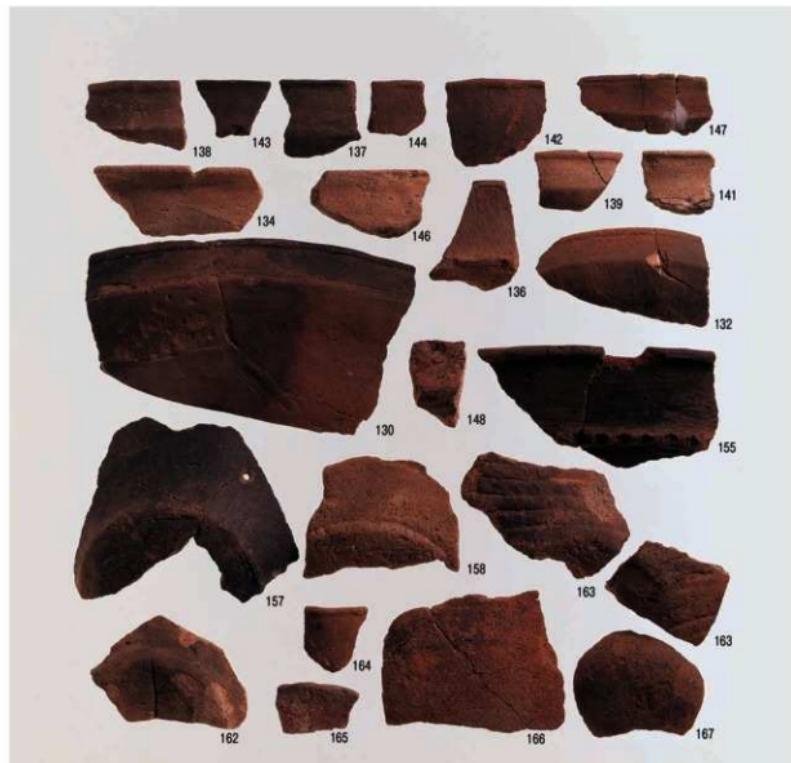


組織痕土器 2

図版12



復元土器

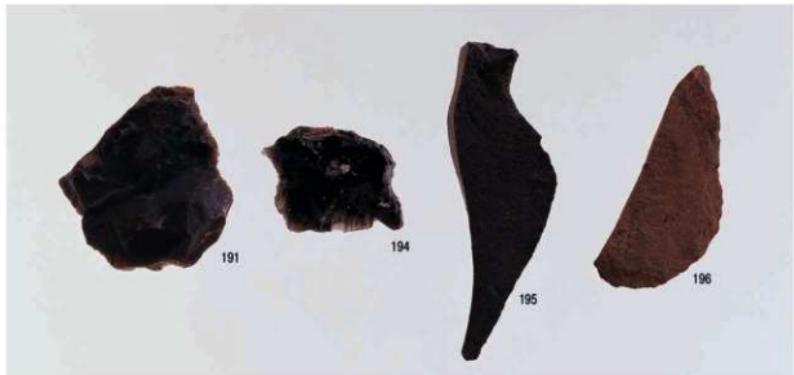


7c・7d・7e類土器



縄文時代石器

図版14



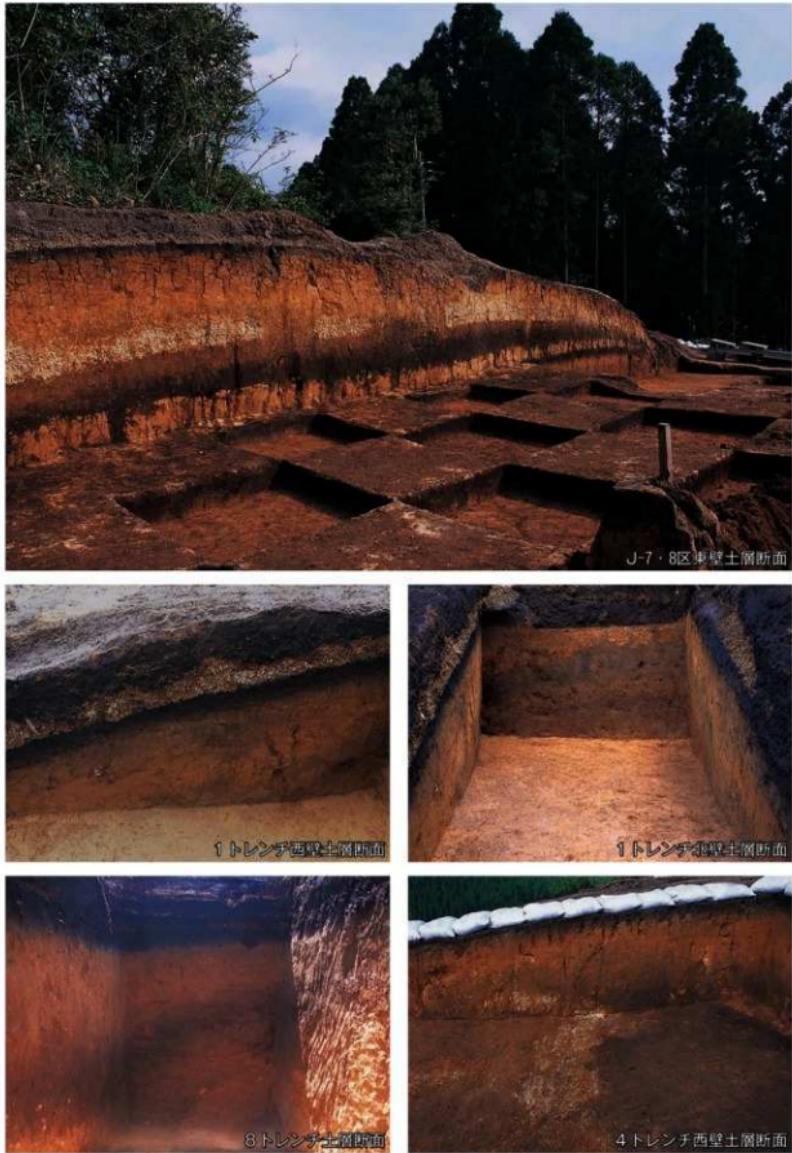
縄文時代石器 2

# **野鹿倉遺跡写真図版**

図版1



図版2



図版3



7 トレンチ東壁土層断面



7 トレンチ北壁土層断面



2 トレンチ東壁土層断面

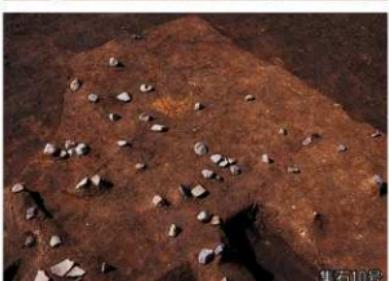


縄文時代早期集石棲出状況 1

図版4



図版5



図版6



J-6区旧石器調査状況



4. トレンチ遺物出土状況



12類土器出土状況



打製石斧出土状況

図版7

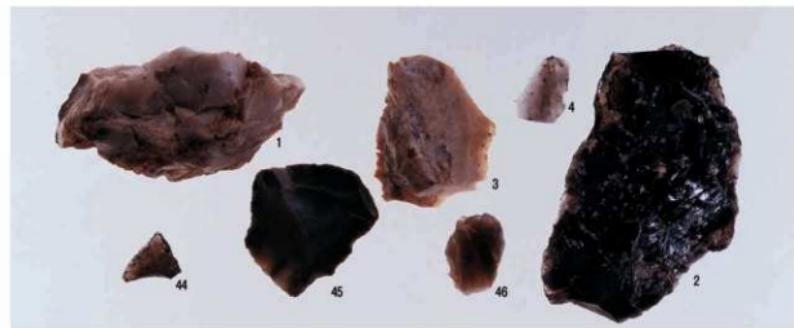


集石5号調査風景



旧石器調査風景

図版8



石器 1



1 ~ 7 類土器



8~14類土器

図版10



石器 2



土師器

## あとがき

建山遺跡・西原段Ⅰ遺跡・野鹿倉遺跡の発掘調査では、実に多くの方々の協力を得ました。

2年間の整理作業、報告書刊行は、失われつつある調査時の記憶を掘り起こしながらの作業が続きました。発掘調査や整理作業を通して、多くの貴重な情報を得ることができました。

「一つでも多くの情報を記録したい」と努力しましたが、情報を整理・統合し、十分に活用できたかは、時間的な制約と担当者の力量不足のため、恥ずかしながら疑問に思うところがあります。

今回の発掘調査報告書を発刊するにあたり、多くの汗を流し発掘調査に携わってくださった地元の作業員さん、報告書作成のために努力してくださった整理作業員さんに厚くお礼を申し上げ感謝の言葉といたします。

担当者一同

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（139）

東九州自動車道建設（末吉財部IC～大隅IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

## 建山遺跡 西原段Ⅰ遺跡 野鹿倉遺跡

発行日 平成21年3月

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原繩文の森2番1号  
TEL (0995) 48-5811

印刷所 (株)トライ社  
〒892-0834 鹿児島県鹿児島市南林寺町12-6  
TEL (099) 226-0815